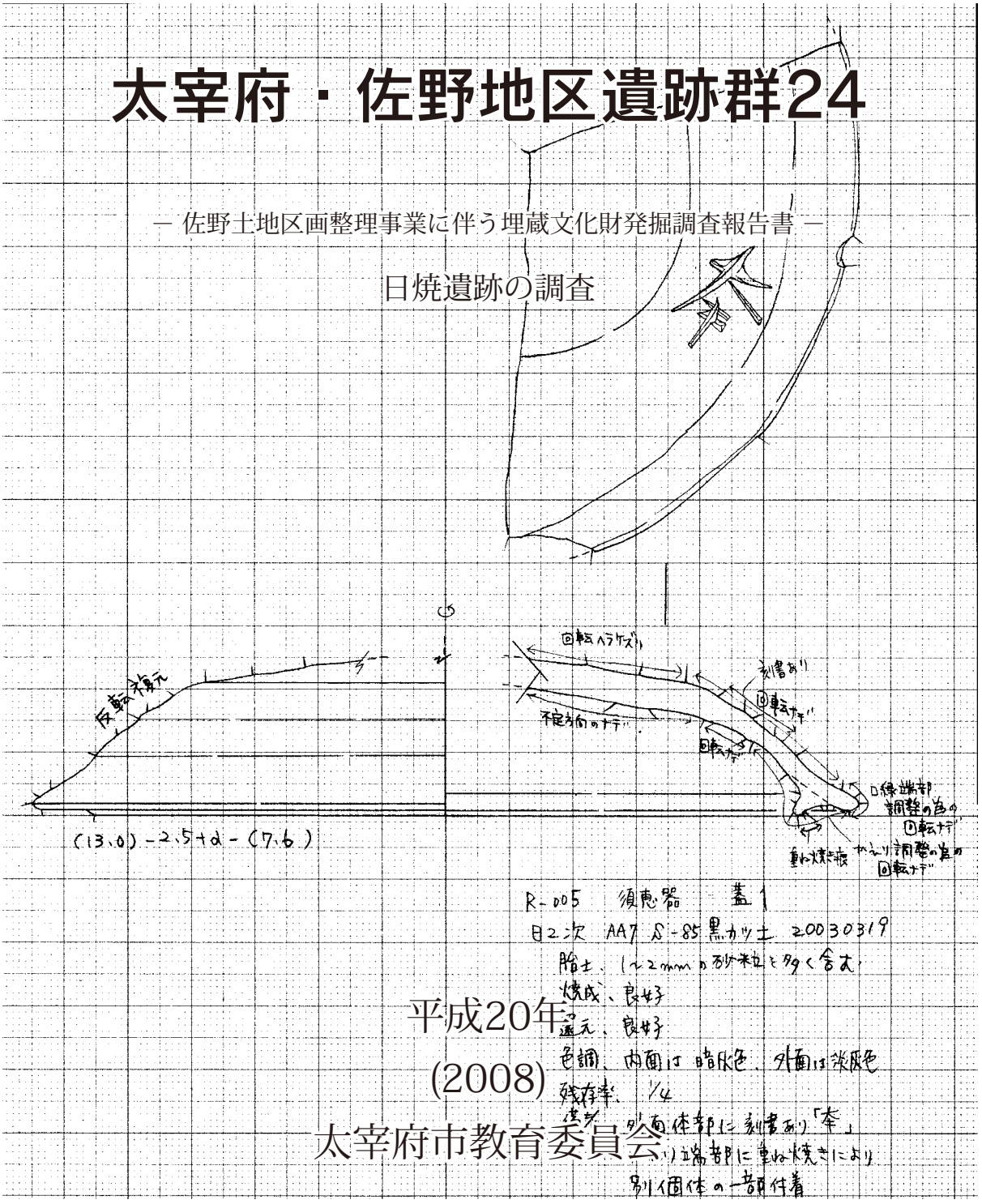
太宰府・佐野地区遺跡群24

－ 佐野土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －

日焼遺跡の調査



平成20年
(2008)
太宰府市教育委員会

日 2SX085 黒褐色土出土須恵器

太宰府市の文化財　第100集

太宰府・佐野地区遺跡群24

― 佐野土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

日焼遺跡の調査

平成20年
(2008)
太宰府市教育委員会

日焼遺跡　空中撮影写真合成

序

本報告書は、佐野土地区画整理事業に伴って平成6年度から平成17年度まで実施した日焼遺跡の埋蔵文化財調査報告書です。

調査地域(向佐野)は、太宰府市の西に所在し、国内でも希有な平安時代の『買地券』を出土した宮ノ本遺跡に隣接し、平安時代の鏡などを埋納した土葬墓をはじめ、多くの墓を検出するなど、古代の大宰府における高階層墓地の一角にあたることが分かりました。また奈良時代における鴻臚館と大宰府を結ぶ官道も併せて検出し、加えて官道に先行する道路も確認できたことは、大宰府の成り立ちを考える上で貴重な成果となりました。

本書が、学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、当該調査に対しご理解頂きました皆様をはじめ、関係諸機関の皆様方に心よりお礼を申し上げます。

平成20年3月
太宰府市教育委員会
教育長　關　敏治

例　言

1. 本書は、太宰府市向佐野にて実施した、佐野地区土地区画整理事業に伴って行った日焼遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。調査は、平成6年度から平成17年度までに実施した14現場であり、個々の調査情報に関する詳細については第Ⅰ章にて記載している。現地調査ならびに整理作業担当者は、第Ⅰ章にて記載している。
2. 遺構実測図ならびに遺構配置図は、全て国土調査法第Ⅱ座標系を基準とし、図中に記載される方位は、特記しない限り座標北(G.N)を指している。
3. 現地調査における遺構記録(実測図作成・写真撮影)は、調査担当者ならびに下記に記す者が行い、遺構配置図作成については、一部㈱写測エンジニアリングによる航空測量図化を実施し、空中写真撮影ならびに空中写真合成は(有)空中写真企画が行った。

   【実測作業従事者】

   森若知子、床平慎介、島純子、西野元勝、隈本拓矢、中島圭、靏田茜、小田裕樹(現奈良文化財研究所)
4. 遺構図関係の浄書は、調査担当者ならびに下記の者が行った。

   久味木理恵、森部順子、久家春美、福井円、木戸雅美
5. 遺物実測は、調査担当者ならびに久味木理恵、森部順子、久家春美、福井円、木戸雅美が行い、第2次調査出土遺物については㈱埋蔵文化財サポートシステムへの委託業務として実施した。遺物実測図浄書は、調査担当者ならびに久味木理恵、森部順子、久家春美、福井円、木戸雅美が行った。
6. 遺物写真撮影は、調査担当者ならびに(有)文化財写真工房への委託業務として実施している。
7. 本書に掲載される遺構番号等の標記は、下記要領で理解される。なお報告文の中で、前後の文脈から内容が明らかなものについては、遺跡略称・調査次数を省略するものもある。

   日　1　SK　028

   遺跡名　調査次数　遺構種別　遺構番号

   遺跡略称　日：日焼遺跡　前：前田遺跡　宮：宮ノ本遺跡　条：大宰府条坊跡

   遺構種別　SF：道路跡　SD：溝　SK：土坑　ST：墓　SX：その他の遺構(小穴など)
8. 報告にあたって実施した遺物分類などの整理作業は、各調査担当者が行った。本書で使用した遺物分類は、以下のものによっている。

   土器　『大宰府条坊跡Ⅱ』太宰府市の文化財第7集　太宰府市教育委員会　1983年

   　『宮ノ本遺跡Ⅱ　－窯跡篇－』太宰府市の文化財第10集　太宰府市教育委員会　1992年

   陶磁器　『大宰府条坊跡ⅩⅤ』太宰府市の文化財第49集　太宰府市教育委員会　2000年
9. 出土した金属・木製品などの応急処置は、下川可容子が担当した。
10. 自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ㈱が行い、本書の体裁を整えるため、編集過程において内容を損なわないよう一部編集している。
11. 遺構・遺物等の写真情報に関しては、本書末尾に「写真図版」として掲載したが、多くはカラー情報を欠失したモノクロ写真として掲載している。カラー情報を加味した写真の多くは、CD-ROMへ搭載し別添にて掲載している。CD-ROM閲覧の方法は、CD-ROM搭載の「はじめにお読みください。」をご参照いただきたい。
12. 本書の執筆は、文末に記載し、編集は中島恒次郎が担当した。
13. 埋蔵文化財の記録類(出土遺物・図面・写真など)は、太宰府市教育委員会にて管理し、太宰府市文化ふれあい館にて保管している。
14. 現地調査ならびに整理作業にあたって、下記の方々よりご指導・ご教示を賜った。

    狭川真一((財)元興寺文化財研究所)、木本雅康(長崎外国語大学)、小鹿野亮(筑紫野市教育委員会)

    石川ゆずは(富山県埋蔵文化財調査事務所)
15. 遺物実測作業において、下記の方々よりご協力賜った。

    本川美穂子(㈱埋蔵文化財サポートシステム)、桑野暢子(特活法人文化財保存活用支援センター)

目　次

Ⅰ.調査に至る経過 ……（中島恒次郎）　1
Ⅱ.調査組織 ……（中島恒次郎）　2
Ⅲ.環境 ……（中島恒次郎）　5
Ⅳ.調査報告
1.第1次調査 ……（中島恒次郎・久味木理恵）　8
2.第2次調査 ……（中島恒次郎・久味木理恵）　14
3.第4次調査 ……（髙橋　学）　77
4.第5次調査 ……（髙橋　学・柳　智子）　90
5.第6次調査 ……（柳　智子）150
6.第8次調査 ……（宮崎亮一）160
7.第9次調査 ……（中島恒次郎・久味木理恵）182
8.第10次調査 ……（宮崎亮一）185
9.第10-2次調査……（宮崎亮一）202
10.第11次調査 ……（中島恒次郎・久味木理恵）209
11.第12次調査 ……（山村信榮・柳　智子）213
12.第13次調査 ……（中島恒次郎・久味木理恵）230
13.第14次調査 ……（中島恒次郎・久味木理恵）244
14.第15次調査 ……（山村信榮）247
15.第16次調査 ……（山村信榮）251
Ⅴ.自然科学分析 ……（パリノ・サーヴェイ㈱）253
Ⅵ.成果と課題 ……（中島恒次郎）259

付表
遺構一覧

写真図版

Ⅰ.調査に至る経過

太宰府市西部に所在する大佐野・向佐野地区の土地区画整理事業に関する事業立案が昭和57年6月に起こり、その後昭和61年度に事業計画決定がなされた。その後昭和63年7月に至り96.1haの事業計画面積が公示され、再度事業面積の変更が行われたが、最終的には96.9haの事業施工面積が決定され、事業主体を太宰府市として施工されることになった。事業計画地内は、埋蔵文化財包蔵地として、文化財保護法による周知の遺跡が数多く存在しており、中でも日本で二例目、埋蔵文化財としては日本初であった買地券を出土した宮ノ本遺跡があるなど、その重要度ははかり知れないものがあった。埋蔵文化財取り扱いについての協議は、事業計画立案当初より行われ、事業着工前年にあたる昭和62年度より記録保存のための調査を開始することになった。調査費用については、当初計画では太宰府市単独費での実施とすることで合意していたが、建設省(現国土交通省)からの一部補助金充当の協議が整い、市単独費ならびに国庫補助金を併用する形で実施するはこびとなった。一方埋蔵文化財記録保存に対処する職員数に限りがあり、事業実施時において、佐野土地区画整理事業に関わる埋蔵文化財調査担当者は1名のみであったことから、嘱託職員の配置を行い、随時正規採用職員の増員によって対処することになっていった。しかし、当初計画から事業進行に遅れが見え始め、平成18年度を最終年度として完了することが議会において言明された。このことを受け、埋蔵文化財記録保存のための調査体制の見直しも同時になされ、平成12年度から一部発掘調査の外部委託を開始した。その成果は、既に調査報告書として公刊されている(太宰府市教委、2004・2005)。

今回報告する日焼遺跡は、大字向佐野に所在し、宮ノ本丘陵の東裾に位置しており、佐野地区遺跡群のほぼ中央部にある。既に報告が完了している第3・7次調査は、外部委託事業として実施したものである。それ以外の14地点について、報告することになる。なお各調査に関する期間・面積などについては、**表1**に記している。また各調査に至る経過に関しては、事業課である区画整理課との調整会議によって協議し、地権者との協議が整った箇所から調査を実施することで合意して着手している。当初計画では、工事事業年度の前年に埋蔵文化財調査を終了する予定であったが、事業の進行に伴って諸事情が複雑化し、必ずしも前年度終了という当初計画が実行できない場合も多かった。平成18年度に一定の終了を迎えられたのも、担当課である区画整理課との密な協議および連携の結果である。

引用文献

太宰府市教育委員会(2004)『太宰府・佐野地区遺跡群　18』太宰府市の文化財第74集
太宰府市教育委員会(2005)『太宰府・佐野地区遺跡群　20』太宰府市の文化財第80集

表1.調査経過

次数	対象面積	調査面積	担当者	年度	調査開始	調査終了	地　番	地目	座　標		緯　度	経　度
									X	Y		
1	254	250	中島恒次郎	6	1994.8.22	1994.10.12	太宰府市大字向佐野字日焼 335-3 外	宅地	56216.93	-46566.02	33° 30′ 33″	130° 29′ 47″
2	4,953	4,706	渡邊仁 中島恒次郎 宮崎亮一 高橋学 山村信榮	13・14	2002.01.07	2003.07.15	太宰府市大字向佐野 333-3、334-1、335-1、337-1	水田	56204.835	-46503.471	33° 30′ 31″	130° 29′ 49″
4	570	524	高橋学	14・15	2003.3.17	2003.8.7	太宰府市大字向佐野 311-1	畑地	56357	-46654	33° 30′ 37″	130° 29′ 43″
5	5,420	5,420	高橋学 柳智子	15	2003.7.14	2004.3.26	太宰府市大字向佐野 323、322、310-1	宅地	56315	-46630	33° 30′ 35″	130° 29′ 44″
6	289	280	柳智子	15	2003.8.21	2003.10.20	太宰府市大字向佐野 337-3	畑地	56145	-46475	33° 30′ 30″	130° 29′ 51″
8	565	395	宮崎亮一	15	2003.11.17	2004.01.19	太宰府市大字向佐野 320	宅地	56348	-46595	33° 30′ 37″	130° 29′ 45″
9	1,251	461	渡邊仁	15	2004.01.29	2004.03.15	太宰府市大字向佐野 327 番	宅地	56298	-46561	33° 30′ 36″	130° 29′ 46″
10	510	504	宮崎亮一 長直信	15・16	2004.02.16	2004.06.29	太宰府市大字向佐野 352 番地 1	畑地	56260	-46580	33° 30′ 35″	130° 29′ 46″
11	389	386	渡邊仁	15	2004.02.26	2004.03.30	太宰府市大字向佐野 326 番地 1	宅地	56325	-46588	33° 30′ 37″	130° 29′ 45″
12	1,020	346	長直信 柳智子	16・17	2005.01.15	2005.04.14	太宰府市大字向佐野 353 番地	宅地	56245	-45591	33° 30′ 35″	130° 29′ 45″
13	1,694	650	渡邊仁	16	2005.1.19	2005.3.3	太宰府市大字向佐野 332 番地、334 番地 2、335 番地 4	宅地	56240	-46535	33° 30′ 34″	130° 29′ 47″
14	1,030	240	渡邊仁	16	2005.02.07	2005.3.31	太宰府市大字向佐野 336 番地、337 番地 3	宅地	56170	-46485	33° 30′ 31″	130° 29′ 50″
15	1,030	480	山村信榮	17	2006.1.18	2006.02.15	太宰府市大字向佐野 336	宅地	56170	-46470	33° 30′ 31″	130° 29′ 50″
16	1,020	28	山村信榮	17	2006.2.2	2006.2.6	太宰府市大字向佐野 353 番地	宅地	56270	-46596	33° 30′ 36″	130° 29′ 46″

Ⅱ.調査組織

本報告にて記す調査は、複数年度にまたがるため、各年次における調査組織を以下に記す。なお整理作業は調査終了後に随時進めてきていたが、主として平成19年度に行ったため、当該年度のみを記している。

調査ならびに整理担当者は、**ゴチック体**にて表記している。

1次調査(平成6年度)

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	白木三男
	文化課長	花田勝彦
	文化財保護係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治　川谷　豊
	主　　事	今村江利子
調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一　城戸康利　山村信榮　**中島恒次郎**【調査・整理担当】
		重松麻里子
	技　　師	井上信正
	技師(嘱託)	田中克子(～6年7月31日)　下川可容子

2次調査(平成13年度)

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	神原　稔
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮　**中島恒次郎**【調査・整理担当】 井上信正　髙橋　学　宮崎亮一
	技師(嘱託)	下川可容子　森田レイ子　佐藤道文

2・4次調査(平成14年度)

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	神原　稔
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	技術主査	**山村信榮**【2次調査担当】 **中島恒次郎**【2次調査・整理担当】
	主任技師	井上信正　**髙橋　学**【2・4次調査担当】 **宮崎亮一**【2次調査担当】
	技師(嘱託)	下川可容子　森田レイ子　**柳　智子　渡邊　仁**【2次調査担当】

4～6・8～11次調査(平成15年度)

総括	教育長	關　敏治

庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信(～ 6月30日)
		久保山元信(7月1日～)
	保護活用係長	久保山元信(10月1日～)
	文化財調査係長	神原　稔(～ 9月30日)
	調査係長	永尾彰朗(10月1日～)
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮　**中島恒次郎**【9・11次整理担当】
	主任技師	井上信正　**髙橋　学**【4・5次調査・整理担当】
		宮崎亮一【8・10次調査・整理担当】
	技師(嘱託)	下川可容子　森田レイ子　**柳　智子**【5・6次調査・整理担当】
		渡邊　仁【9・11次調査担当】

10・12 ～ 14次調査(平成16年度)

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	松永栄人(4月1日～)
	文化財課長	木村和美
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	事務主査	藤井泰人(～ 6月30日)
		齋藤実貴男(7月1日～)
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮　**中島恒次郎**【13・14次整理担当】
	主任技師	井上信正　髙橋　学　**宮崎亮一**【10次調査・整理担当】
	技師(嘱託)	下川可容子　森田レイ子　**柳　智子**【12次調査・整理担当】
		渡邊　仁【13・14次調査担当】　**長　直信**【10・12次調査担当】　松浦　智

15・16次調査(平成17年度)

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	松永栄人
	文化財課長	木村和美(～ 6月30日)
		齋藤　廣之(7月1日～)
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	齋藤実貴男
	事務主査	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利　**山村信榮**【調査・整理担当】　中島恒次郎
	技術主査	井上信正
	主任技師	髙橋　学　宮崎亮一
	技師(嘱託)	下川可容子　柳　智子　長　直信　松浦　智

整理作業（平成19 ／ 2007年度）

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	松永栄人(～ 9月30日)
		松田幸夫(10月1日～)
	文化財課長	齋藤　廣之
	保護活用係長	久保山元信（～ 9月30日）
		菊武　良一（10月1日～）
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	吉原慎一　齋藤実貴男
調査	主任主査	城戸康利　**山村信榮　中島恒次郎**
	技術主査	井上信正
	主任技師	**髙橋　学　宮崎亮一**
	技師（嘱託）	**柳　智子**　下高大輔　大塚正樹　端野晋平
	調査補助員	**久味木理恵**

Ⅲ.環境

日焼遺跡が所在する太宰府市西部は、背振山系から東へ派生する牛頸低山地と呼称される低丘陵が延び、その低丘陵の一つの裾部にある。これら低丘陵は、早良型花崗岩を基盤とし、安定的な生活面を形成していたものと考えられ、縄文前期からの生活痕跡を残してきている。これら低山地を開析するように大佐野川があり、日焼遺跡が所在する地域の南東側を北東へ流れ御笠川へ流れ込む。日焼遺跡自体は、大佐野川からは離れた空間に位置し、大きな河川災害は回避できる安定した空間であったと考えられるが、本報告にもあるように、埋没した河川が確認されるなど、小災害は考慮しておく必要がある。

このような自然環境に所在する日焼遺跡は、行政的に佐野地区遺跡群に包括され、遺跡群内において、旧石器時代から人々の痕跡が確認できている。遺構として認識できるようになるのは、縄文時代の段階からで、遺跡群南西部に所在する脇道遺跡第6次調査地で確認された落とし穴や河川に関わると考えられる乾裂状構造をとる地表の確認があり、この時代の「面」についてはこれまで調査認識に入っていなかった。通常弥生時代前期以降の生活面を調査した後は、確認トレンチを入れ文化層が確認できないことをもって終了していた。しかし脇道遺跡において縄文時代の生活面として「乾裂状構造を有する地表面」に伴って落とし穴が確認され、それに合わせて曾畑式土器が出土したことから、この「地表面」を有する面の確認を行う必要性が生じてきた。今回報告する日焼遺跡においても、Ⅱ面目として同一構造の地表面を確認し、黒曜石・サヌカイト細片を出土するなど、広範囲に縄文時代の面が存在していることが明らかとなってきた。その後の動向としては、日焼遺跡の南東部に位置する前田遺跡で弥生時代前期～中期の小規模集落の確認がなされ、古墳時代前期に至って大規模化する。これに伴い、日焼遺跡の西に隣接する宮ノ本遺跡では古墳の造営が確認されるなど、佐野地区遺跡群内における一つの画期を迎えることになる。その後古墳時代後期では、集落の確認が佐野地区遺跡群南部に所在する尾崎・雛川・脇道遺跡において集落が確認されるなど、遺跡の分布が南部へと偏在している。日焼遺跡をはじめ、前田・宮ノ本遺跡を特徴づける出来事としては、やはり古代におけるものであり、奈良期の官道施工・火葬墓造営、さらに全国的にも希有な買地券出土を端緒として土葬墓造営が行われるようになる。官道施工地に隣接して火葬墓が日焼遺跡・長浦遺跡で確認される点は、喪送令規定にある「大路近傍」への墓造営禁止法令を破る事象として、地方における法令受容状況をみる上で示唆的な遺跡が所在している[1)]。その後平安時代前期末から平安時代中期における土葬墓は、高階層墓として位置づけるに値する埋納品を保有するもので、鏡・漆器をはじめ九州内における他の同時代墓の中では高階層かつ群在していることで特筆すべき墓地にあたる(中島、2007)。官道施工後には、日焼遺跡の東に隣接する久郎利遺跡から、共時性のある掘立柱建物群の検出や、墓地として著名な宮ノ本遺跡では須恵器焼成の窯が操業するなど、単に条坊外の空閑地ではなく、大宰府に関わる施設が展開していたことが分かる。同様な事象は、大佐野地区で確認されたカヤノ遺跡でも掘立柱建物群の存在から傍証できる。

官道施工・墓地形成が日焼遺跡周辺空間の盛期であったのに対し、その後は顕著な遺構の造営が希薄となる。しかし、日焼遺跡第2・3・14次調査で確認した平安後期埋没の溝や、前田遺跡第2次調査地で確認している官道東側側溝残影とでも言える溝からは、輸入陶磁器の出土を見る限り、全く人々の生活が途絶したという印象ではなく、近傍に輸入陶磁器使用階層の存在をうかがわせるものである。その後中世後期では、佐野地区遺跡群南西部、現大佐野地区で生活痕跡を確認することができ、脇道城造営集団へとつながる集落の形成が確認されることになる(太宰府市教委、2006)。近世に至っては、再び村落墓地形成空間へと回帰し、日焼遺跡第7次調査区では多数の甕棺墓が検出されている。これらの墓は現在の向佐野集落の人々へと継承され、造墓者の系譜を辿る上で重要な所見であった(太宰府市教委、2005)。

註

1)居住地における造墓を禁じているという解釈が一般的であるが、喪送令の解釈については、岡野氏によって、人々が往来する「大路」近傍への造墓を禁止したという解釈が示されている(岡野、1999)。また共時的存在として、宮ノ本遺跡では奈良期の火葬墓と須恵器焼成窯が近接して確認されている。

1:筑前国分寺跡 2:筑前国分尼寺跡 3:水城跡 4:山の内遺跡 5:国分瓦窯跡 6:杉塚廃寺跡
7:塔原廃寺跡 8:武蔵寺 9:辻遺跡 10:御笠団印出土地周辺遺跡 11:国分川添遺跡
12:陣ノ尾・妙見遺跡 13:国分松本遺跡 14:国分千足町遺跡 15:国分正尻遺跡 16:島本遺跡
17:神ノ前遺跡 18:篠振遺跡 19:原口遺跡 20:久郎利遺跡 21:長浦遺跡 **22:日焼遺跡**
23:前田遺跡 24:上川久保遺跡 25:雛川遺跡 26:フケ遺跡 27:尾崎遺跡 28:大佐野馬場遺跡
29:殿城戸遺跡 30:脇道遺跡 31:京ノ尾遺跡 32:カヤノ遺跡 33:長ヶ坪遺跡 34:宮ノ本遺跡
あ:脇道遺跡第6・7次調査地 い:雛川遺跡確認の南北溝延長線（雛川遺跡第2次調査）
う:国分松本遺跡第4次調査地確認の東西溝延長 え:運河状遺構（条坊跡第120次調査）

図1.報告遺跡周辺の環境

図2.報告遺跡周辺の調査実績

引用文献

岡野慶隆(1999)「『喪葬令』三位以上・別祖氏上墓の検討」『古代文化』第51巻第12号　(財)古代学協会

中島恒次郎(2007)「「都市」的な墓、「村落」的な墓(上・下)」『古文化談叢』第56・57集　九州古文化研究会

太宰府市教育委員会(2005)『太宰府・佐野地区遺跡群20』太宰府市の文化財第80集

太宰府市教育委員会(2006)『太宰府・佐野地区遺跡群21』太宰府市の文化財第85集

Ⅳ.調査報告

日焼遺跡　第1次調査

1.基本土層

現代の生活面形成のための造成土が0.2 ～ 0.8mのせられ、その下位に遺物包含層として茶灰色砂が堆積していた。遺構形成のための基盤層は、赤褐色系の土で構成されていた。

2.遺構（図3）

現在の居住地直下に遺構を検出したため、その多くは現代の撹乱であった。また検出できた遺構もその形状が大きく改変されているらしく、近世以降の遺物を包含している状況であり、明らかに埋蔵文化財として把握できるものは僅かであった。

1）溝

調査区北東部にて検出したもので、個別の遺構として取り扱ったが、同一の溝堆積層の差である可能性がある。調査所見として上位より下記のように捉えており、ここでは一括して記述する。

1SD012・13←1SD022・18←1SD023←1SD026

1SD012・013は、撹乱土を除去した後、確認したもので、最も広いところで幅1.0m、深さは約0.1mを測る。次いで下位より1SD022ならびに018が検出され、1SD022は調査区東部において南北に検出できており、その下位に1SD023がある。最も下位に検出した1SD023の堆積時期が江戸期と考えられることから、ここで記述した遺構はすべてそれより新しいものとなる。なお上位から室町期のものも出土しており、当該期の遺構が周囲に点在していることを物語っているものと考えられる。

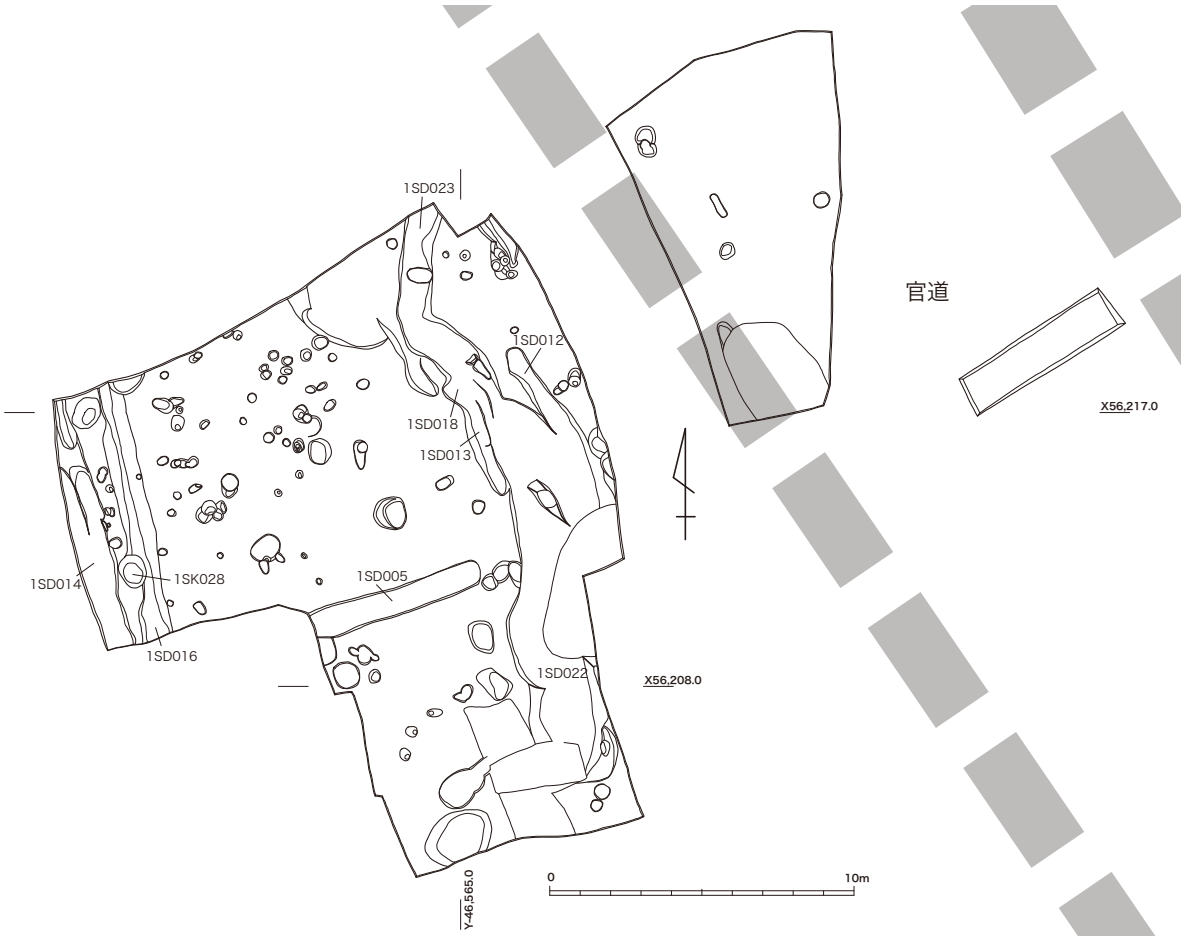


図3.日焼遺跡第1次調査　遺構配置図（S=1/250）

2）土坑

1SK028

調査区西部にて検出した遺構で、1SD016に切られている。短軸長0.86m、長軸長1.10m、深さ0.3mを測る。

3）その他の遺構

1SX026（Pit）

先述した1SD023の下位に検出したもので、短軸長0.51m、長軸長0.84m、深さ0.28mを測る。単独の小穴というよりは、溝1SD023底の凹凸である可能性もある。黒茶色土が堆積していた。

1SX027（Pit）

調査区北部にて検出した小穴群で、建物群など性格が付与できるものではなかったため、作為的に遺物を取り上げたものである。

1SX024（窪み）

調査区東端に検出した窪み状の遺構で、複数の小穴が結合したような形状を呈している。遺構全形が調査区外へ広がるため明らかにし難いものの、残存する長軸長は約1.80mを、深さは0.17mを測る。

（中島恒次郎）

3.遺物

1）溝

1SD012（図4）

染付磁器

皿（1）　蛇の目凹形高台からやや浅めの器高を有する皿で、見込みには「五弁花」のスタンプを有するものである。外面には唐草文を、内面には区画した中に花文などを描いている。底部凹形部分には砂の付着が観察できる。釉調は、やや青味がかった透明でガラス質、内外面に貫入を有する。復原口径14.0cm、器高4.4cm、高台径8.4cmを測る。

1SD022（図4）

瓦質土器

鉢（2）　口縁部の破片資料で、内面は回転ナデ、外面は縦方向のハケ痕跡が観察できる。外面下位は摩耗気味なため調整痕跡は不明。

摺鉢（4）　口縁部の破片資料で、内面は横方向のハケ調整の後、単位不明ながら摺り目が4条確認できる。外面には指頭圧痕が観察できる。

鍋（3）　口縁部の破片資料で、外面に煤状炭化物が付着していることから、鍋と判断した。内面には横方向のハケ目が、外面には右下がりのハケ目が観察できる。口縁端部に外方へ粘土の移動が確認され、内面から外面へ圧力を加えナデられたものと考えられる。

土師質土器

摺鉢（5・6）　いずれも口縁部の破片資料であるが、5には注ぎ口が残っている。5は器面摩耗気味なため、外面の指頭圧痕のみが観察できるのに対し、6は内面に横方向のハケ調整、外面には指頭圧痕が残存している。摺り目の単位は、6が明らかにでき6条/単位であることが分かる。

鍋（7）　形態的には瓦質土器鍋として先述した3とほぼ同じ形態を有し、内面も横方向のハケ、外面には指頭圧痕が残るなど、焼きの違いのみの印象を受ける。

石製品

砥石（8）　茶褐色気味の灰色を呈する泥岩を素材とした砥石で、4面を使用している。

1SD023（図4）

土師器

坏a（9）　全形を復原できない破片資料で、外方へ開く体部形態を有し、内面見込み部分が黒茶色に変色している。底部外面の処理は、摩耗のため不明。

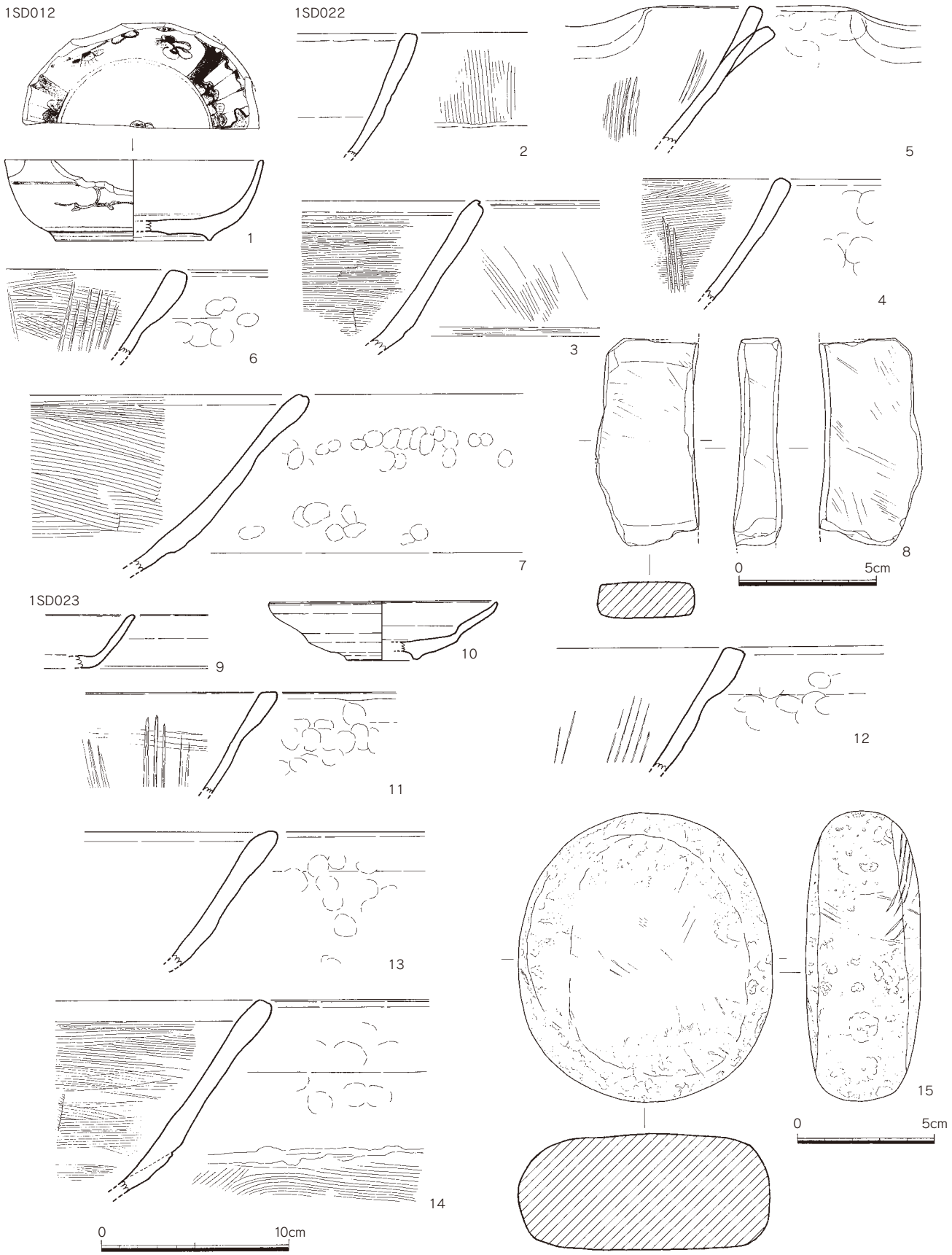


図4.溝出土遺物実測図（S=1/3、1/2）

陶器

皿（10）　胎土目を見込み部に有するもので、高台は回転ヘラ削りによる成形、口縁部外面から内面全面に施釉されている。

瓦質土器

摺鉢（11）　口縁部を肥厚させるもので、端部を平坦に仕上げている。内面には横方向のハケ調整、外面には指頭圧痕が顕著に残り、摺り目が体部内面下位に観察できる。残存状況が悪いため摺り目の単位は明らかにし難い。

土師質土器

摺鉢（12）　焼きが異なるが、形態ならびに調整は先述した11と同様で、内面に茶黒色の付着物が観察できる。体部内面下位に5条を一単位とする摺り目が残されている。

鍋（13・14）　両者とも外方へ大きく開く形状を有し、13は内面の器面摩耗が著しく判然としないが、外面には指頭圧痕が多く観察できる。14は内面に横方向のハケ目が観察でき、外面には多くの指頭圧痕とともに下位に粘土紐痕跡が残る。外面全面に煤状炭化物が付着しており、煮沸用具として使用されたことが分かる。

石製品

叩石（15）　砂岩を素材とするもので、全面に敲打痕跡が観察できるため叩き石と考えた。一部擦痕が確認され、別の用途にも使用されたと考えられる。

2）土坑

1SK028（図5）

陶器

摺鉢（1）　口縁部を一部欠損するが、全形が分かる資料である。平底の底部から外方へ直線的に開く体部形態を有し、口縁部は外方へ肥厚している。底部外面以外は、柔らかい光沢のある茶褐色を呈する釉薬が薄く施され、口縁部から体部外面に下方へ釉ダレが生じている。外面には多くの指頭圧痕が観察でき、体部内面には隙間なく、10条/単位とする摺り目が入れられている。底部外面には、目跡が観察できる。

3）その他の遺構

1SX026（Pit）（図5）

土師質土器

鉢（2）　口縁部のみの破片で、内面は器面摩耗のため調整は不明、外面には指頭圧痕が顕著に残る。

鍋（3）　やや内湾気味に開く口縁部の破片で、内面には横方向のハケが、外面には指頭圧痕をとどめるが、全体的には横ナデによって仕上げられている。

1SX027（Pit）（図5）

白磁

紅皿（4）　口径4.5cm、器高1.35cm、高台径1.5cmを測るもので、外面には縦筋の刻線によって二枚貝状に仕上げている。高台ならびに底部外面を除いて青みのある白色の濁った釉を施す。

1SX024（窪み）（図5）

土師器

坏a（5）　底部のみの破片資料で、底部切り離し処理は回転糸切り。推定底径は9.5cmを測る。

4）土層

明橙色土（図5）

石製品

石斧（12）　玄武岩を素材とし、全形の約1/3程度が残存しているものと考えられる。器面調整のための細かな敲打痕跡が残り、研磨痕が観察できることから磨製であったと考えられるが、刃部は剥離によって打製状になっている。

灰茶色砂（図5）

白磁

紅皿（13・14）　13は口径6.3cm、器高1.9cm、底径2.3cmを測り、外面に「蛸唐草」を陽刻型によって描く。ほぼ全面に光沢度が高い白濁釉薬をかけている。14は、口径4.6cm、器高1.35cm、高台径1.6cmを測り、口縁部外面から内面全面に光沢度の高い白濁釉をかけている。外面には縦筋の刻線を描いている。

茶灰色砂（図5）

白磁

紅皿（6・7）　両者とも外面に「蛸唐草」を陽刻型で描くもので、口縁部外面から内面全面に光沢のある白濁した釉をかけている。

青磁

椀（8）　口縁部外面に雷文をヘラで描き、下位には幅広の通称「ラマ式蓮弁」と呼称される文様が描かれていると判断される。上田氏分類C-Ⅱ類に該当するものと考えられる（上田、1982）。

陶器

菊皿（9）　底部のみの破片資料で全形を知ることができないが、見込み部分に抉りによる「菊」様の文様を描き、

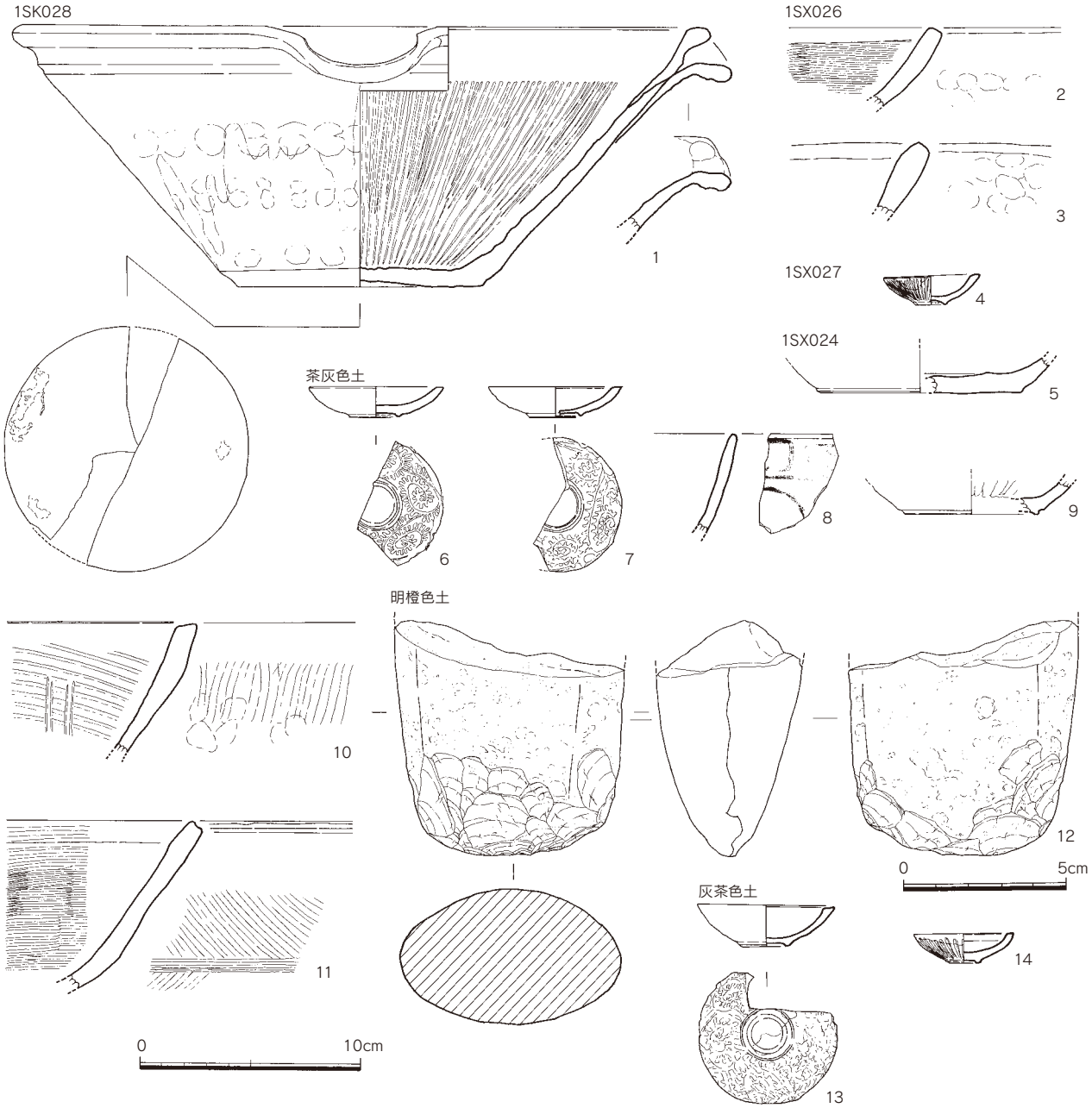


図5.土坑・その他の遺構および土層出土遺物実測図（S=1/3 石器：1/2）

かつ黄褐色味をおびたガラス質半透明の釉薬をかけている点、さらにはやや粉っぽい乳白色の素地特徴から瀬戸産の菊皿と考えられる。

土師質土器

擂鉢(10)　口縁端部は、平坦面を有するがやや内傾する形状を示し、肥厚する口縁部形状をとる。内面には粗いハケ調整の後、単位不明ながら擂り目が観察できる。外面には指頭圧の後、縦方向のハケによる器面調整がなされている。

鍋(11)　丸みを有する底部から、強く外方へ大きく開く口縁部形態を有し、内面は横方向のハケ調整、外面は体部上位が右下がりのハケ、体部下位は右下がりのハケによって調整されている。口縁端部には外方への粘土の移動が観察でき、内面側から外方へ回転ナデがなされたものと判断できる。　（久味木理恵）

4.小結

調査区南部に展開している前田遺跡で検出された、官道跡の北側延長箇所に該当していることから、当該調査区での検出の可能性が示唆された。結果として調査区設定限界ゆえ、確定的な見解を得ることができず、将来に委ねられることとなった。その後日焼遺跡13次調査によって道路跡が確認され、今次調査において北側拡張区は、道路面を調査していたことが明らかとなった。赤褐色の基盤層であり、路面として認識できなかったため、「無遺構」として処理したが、結果的に路面であったことは残念であった**(図3)**。

他の遺構としては、中世後期に位置する遺物を出土した遺構があり、少なからず周辺に当該期の遺跡が展開しているものと考えられる。　（中島恒次郎）

引用文献

上田秀夫(1982)「14 ～ 16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究　No.2』日本貿易陶磁研究会

表2.日焼遺跡　第1次調査　遺構一覧

S 番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	時　期	地区番号
1	1SK001	土坑	灰色土→黒色土		現代	A13
2	1SK002	土坑			不明	B13
3	1SK003	土坑			現代	B11
4	1SK004	土坑			不明	B11
5	1SD005	溝	橙色土→茶灰色土		現代	D13 ～ 14
6	1SX006	窪み			現代	C11
7	1SX007	小穴			不明	C13
8	1SX008	小穴			現代	C14
9	1SX009	小穴群			不明	F15
10		欠番				
11	1SX011	小穴群			江戸	G13
12	1SD012	溝			江戸	F12
13	1SD013	溝			現代	E12
14	1SD014	溝	灰黄茶色土→黒灰色砂質土		現代	E17
15		欠番				
16	1SD016	溝			現代	E17
17	1SX017	小穴群		S-14 → S-17	江戸	E17
18	1SD018	溝			室町	E13
19	1SX019	小穴群			現代	E16
20		欠番				
21	茶灰色砂	包含層			現代	F13
22	1SD022	溝	暗茶灰色砂		室町	12 ライン
23	1SD023	溝	灰黒色砂		江戸	13 ライン
24	1SX024	窪み			平安後期～鎌倉	E11
25		欠番				
26	1SX026	小穴	黒茶色土	S-26 → S-23	室町	G13
27	1SX027	小穴群			江戸	F14
28	1SK028	土坑			江戸以降	D16

土層順
　表土　　←明橙色土と同じ。
　茶灰色砂　←茶灰土と同じ。
　灰茶砂　　←灰茶土と同じ。

日焼遺跡　第2次調査

1.基本土層

区画整理事業計画の関係から、2次調査区を3分し実施した。ひとつは調査区の多くを占める調査区中央部、ひとつは調査区北東端に位置する区域、さらにいまひとつは、調査区南東隅の一角である。調査区が広域にわたるため、堆積環境が異なっており、下記に示すような上下関係で捉えている。

○調査区の多くを占める範囲（上位から下位へ）

表土←茶灰色砂質土←暗灰色砂←赤褐色土←灰色砂←第Ⅰ遺構面←灰色砂質土←明茶色土←第Ⅱ遺構面（乾裂状構造を有する面）

○調査区北東端部（上位から下位へ）

表土←灰色土←黄色砂質土←第Ⅰ遺構面

現地表から遺構面までは、調査区東部で約0.4m前後、調査区西部では現地形が田普請などにより盛土造成されている関係から、約1.0mほどを測る。

2.遺構（図6付図）

1）道路関係遺構

調査区全体において2条の道路が確認された。一つは曲折する道路であり、もうひとつは調査区北西から南東へ縦断するように検出された直線道路である。これまで周辺における調査成果からみて、前者は官道前道路、後者は官道として捉えられるものである。前者を2SF005、後者を2SF055として調査を進めた。各々の道路を構成する側溝群について解説し、その後道路遺構の状況を解説する。

2SD012（2SD017）

調査区北部にて検出したもので、曲折する道路の北側側溝にあたる。地形傾斜ならびに遺構の残存状況により、残存溝幅は1.0m ～ 3.0mを測る。断面形状は残存状況が良好な箇所では逆台形を呈し、溝東部は現地形の水田削平によって極端に幅が狭くなっているものの、溝底状況を観察すると同様の形状を有していたものと判断される。堆積土は図9に示したように、砂を混入する土によって構成され、概して上方細粒化傾向が観察できる。なお堆積層の観察から、9・10層とそれ以下では層相が異なっており、上位では粘土を主体としつつも5mmほどの亜角礫を多く含むなど短期の堆積を想定できる。これに対し下位では砂が混入する土によって構成されるなど、「流れ」を想定できる堆積層をみる。遺物取り上げ土層は、上位より黄茶灰色土←灰褐色土←炭化物層←灰色粘土層である。なお官道と直交すると考えられる2SD014と切りあい関係が観察でき、2SD012が先行している。残存する深さは、残りが良い箇所で0.65m程を測る。

2SD022

曲折する道路の南側側溝として考えられるもので、残存する溝幅は概して3.0mほどであるが、東部においては先述した2SD012同様に現水田削平によって欠失している。残念なことに本調査区では、後述する官道側溝との切りあい関係を確認することはできなかった。堆積土の状況は、**図9**に示したように、17・18層と下位の19 ～ 21層の二者に大別でき、下位の19 ～ 21層は粘土を主体とした堆積を示し、上位は5mm ～ 10mmの礫を多く含むなど短期の堆積が想定できる。なお19層には木片や樹木の葉などが混入しており、滞水ないしは流水環境下に置かれていたというよりは、開放空間であった可能性が高い。残存する溝の深さは、残りが良い箇所で約0.7mを測る。遺物取り上げ土層は、上位より灰色砂質土←明灰色土←暗灰色砂混じり土←黒色土←灰色粘土である。

2SF005

先述した二者の溝によって画される空間を道路と認定した。この面には**図7**に示したように小穴が多数確認され、その方向は様々であった。また上面には**図8**に示したように、明褐色土が薄層ながら観察できる。ただし舗装事業として捉えられるほど整えられた印象は受けない。道路側溝間任意中心の距離は約8.4224m（約24

大尺)、道路路面幅は5.5383m（約16大尺）を測る。後述する官道規模に比して、小尺・大尺の完数化がよくなく、除数値としての小尺・大尺単位値を含めて今後検討すべき課題であると考える。

2SD020

調査区北西部から南東部にかけて検出できた遺構で、先行する河川(2SD080)上位において欠失し、後述する木製杭などによる護岸構築物ならびに盛土による道路施工箇所以外は、直線的に残存している。その位置から官道東側側溝に該当し、自然地形状況から標高が高い調査区北西部が残りがよく、断面台形の溝形状をとどめている。堆積土の状況から複数の堆積時期が観察でき、**図8**に示したように大きく二時期に分けることができる。具体的には11層から14層までは、上方細粒化傾向が観察できるとともに砂質の堆積層であることから水流を考慮できるとともに、流速の遅速化が想定できる。最終的には10層において滞水状況となり、その後分級度が極めて悪い1層から9層へと移行することから、人為的に埋められた可能性が高い。遺物取り上げ土層は、上位より灰黒色砂質土←黒灰色土←灰色砂←灰黒色砂←暗灰色砂←黒色砂←黒茶色土・黄色粘土←黒色粘土←暗灰色土である。なお遺構の先後関係は、2SD020→2SX058・2SD060であった。溝幅は0.5m ～ 3.0mと残存状況によって異なっており、残存状況がよいところでは0.65mを測るが、調査区南東部へ浅くなり、欠失する。

2SD050

2SD020の南東部延長と考えられるもので、残存度は極めて悪く、灰黒色砂質土が堆積している。遺構規模は、長軸長11.3m、短軸長1.8m ～ 2.2m、残存する深さ0.25mを測る。

2SD040

調査区中央西端部から検出でき、完掘図では途切れているように描いているが、検出時は連続した溝として確認している。官道西側側溝にあたる。確認できた遺構規模は、長軸長29.1m、短軸長1.0 ～ 2.6m、残存する深

図7.2SF005路面状況実測図(S=1/200)

さ0.2 ～ 0.37mを測る。遺構内は、先述した2SD020下層同様に砂混じり土を基調とするもので、水流を想定できる堆積構造を有する。遺構の先後関係は、2SD040→2SD060（2SD096）であった。

2SF055（SF025）

先述した側溝にて画される部分の他に、盛土によって路面施工を行っている箇所(2SX025)によって道路施工が確認できている。まず前者は、通常確認される安定した基盤上に施工され、側溝によって道路範囲を明示する構造をとる、今次調査区南東に位置している前田遺跡にて検出された官道へつながるものと考えられる。後者は、先行する河川(2SD080)によって生じた湿地を改善する目的で施工されたものと考えられ、路盤工として石材を敷き詰め、その上に周辺基盤層である花崗岩風化土を盛土して道路を施工している。加えて木杭が先述した東西両側溝の南延長に平行して確認でき、堰板こそ確認できなかったが路盤工ならびに盛土路面を護岸する意図で施工されているものと考えられる。なお路盤工として使用された石材には、赤色塗彩がなされ、また石材の隙間からは耳環ならびに須恵器杯身・蓋類が多く出土していることから、施工にあたって近隣に所在した後期古墳が破壊され、石室石材が転用されたものと考えられる。堰板止めのための木杭は、西側杭列を2SX075で、東側杭列を2SX155で取り上げている。杭長は0.326m ～ 0.87mと不均一で、打ち込みの空間的位置にも規則性は観察できない。路盤盛土は、層厚0.05m ～ 0.1mほどを測り、白色系の土と黒色系の土を互層状態で施工しており、版築施工を意図したものと考えられるが、道路基盤となる下位土層が、古墳期の河川堆積層であり、軟弱地盤自体の固化が行われていないため、水城で確認したような硬化施工とはなっていない。

道路規模は、側溝残存箇所では、側溝間任意中心距離は14.1752m（40大尺）、路面幅11.7786m（約33大尺）を測る。計測値ならびに基準大尺を用いた除数値は、**表16**に示したが、先行する道路に比して、完数値化が観察でき、土地割り施工時に用いられる大尺使用が認められるとともに、令規定遵守施工の一端を見ることができる。なお路面については、側溝上端部崩壊の影響から35大尺～ 31大尺と一定しない。一方、盛土施工のために実施された堰板止め杭間の距離は、10.56m（29.91大尺)を測り、この点を踏まえると、路面幅は30大尺であった可能性がある。したがって、側溝任意中点間の距離が40大尺であることから、道路施工は50大尺ということになる。この点については、日焼遺跡における他調査区の事例ならびに先行報告事例を踏まえて後述する。

2)溝

2SD014

調査区北東部で検出した溝で、官道側溝にほぼ直交すると考えられる空間的位置にある。残存する溝幅は約

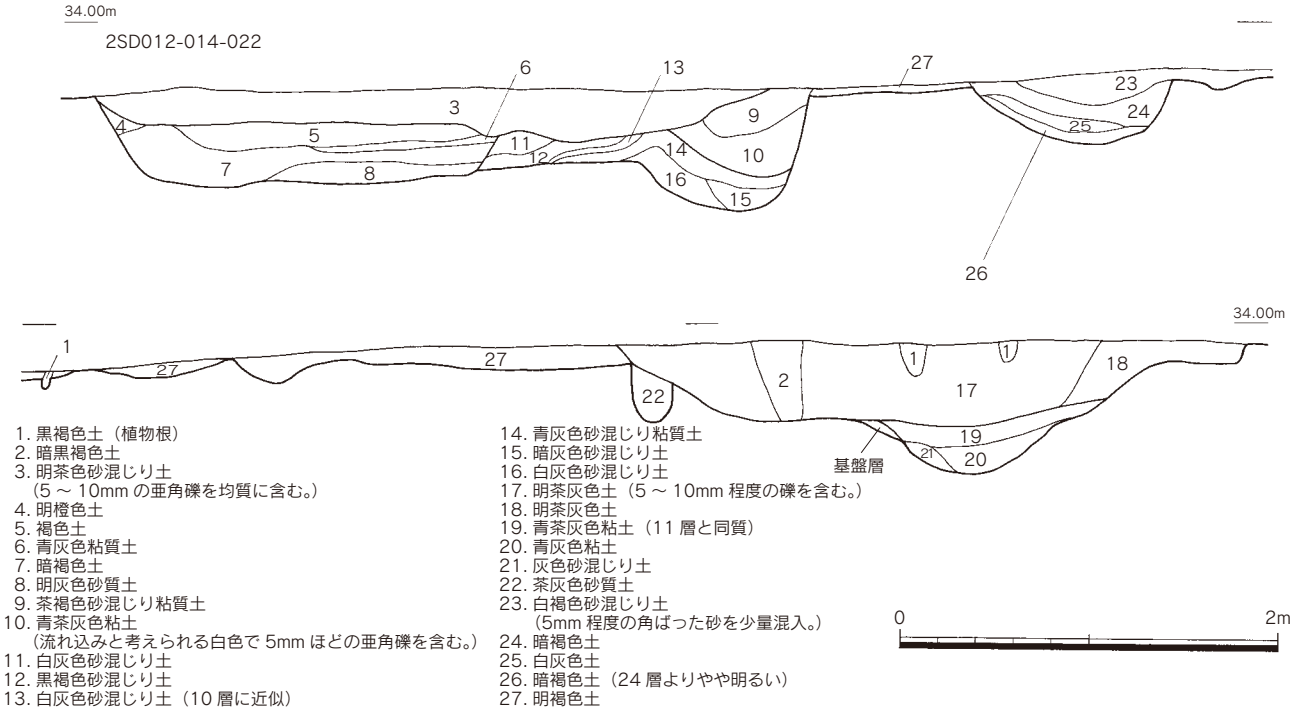
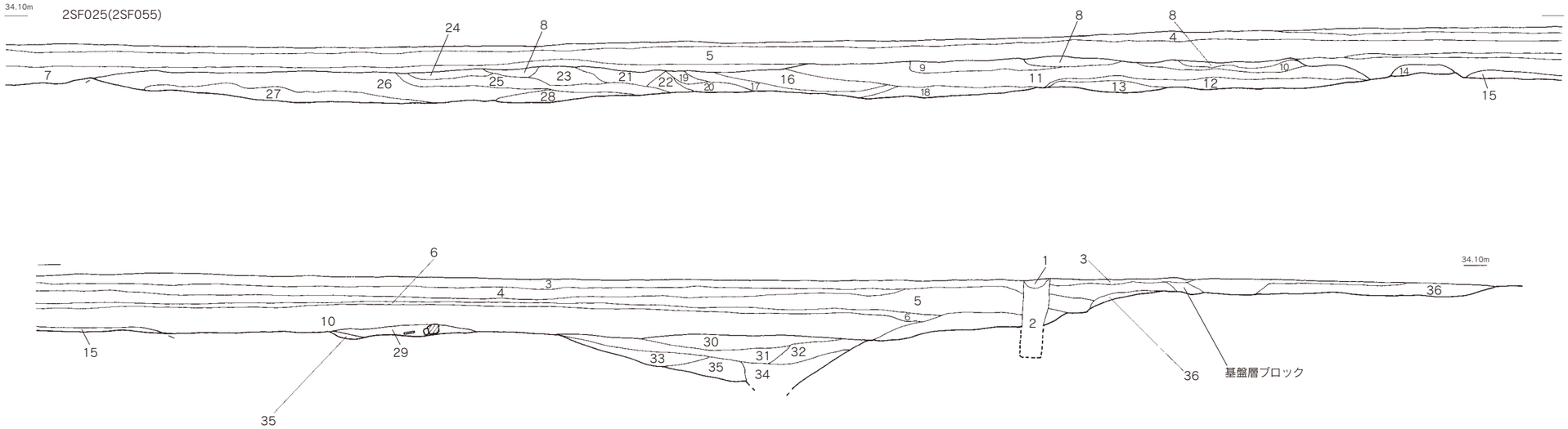


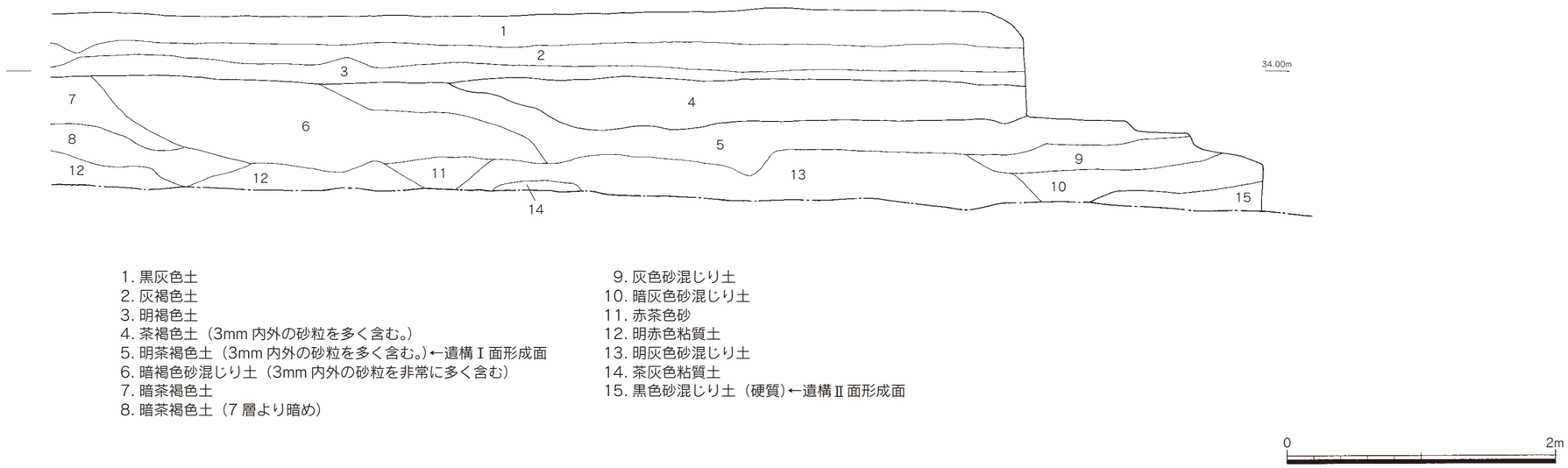
図8.2SF005関連遺構土層実測図(S=1/40)



1. 黒灰色土（攪乱）
2. 茶白色土（攪乱）
3. 黒灰色土
4. 褐色土（耕作土および床土）
5. 茶色土（耕作土および床土）
6. 明茶色土（耕作土および床土）
7. 暗灰色土（遺物包含層）
8. 茶灰色土
9. 灰白色土（茶・黒色土ブロック混入）
10. 明茶灰色土
10'. 灰色土
11. 白色ブロック土混入暗灰色土
12. 白色ブロック土混入黒色土
13. 茶白色ブロック土混入黒色土
14. 白色ブロック土混入灰色土
15. 白色ブロック土混入黒色土
16. 灰白色土（茶・黒色土ブロック混入）
17. 白色ブロック土混入黒色土
18. 白色ブロック土混入黒色土（やや白色度強い）
19. 暗灰白色土（茶・黒色土ブロック混入）
20. 灰白色ブロック土混入黒色土
21. 白色ブロック土混入暗灰色土（白色ブロック土多い）
22. 灰白色土（茶・黒色土ブロック混入）
23. 灰白色土（茶・黒色土ブロック混入）
24. 灰白色土（茶・黒色土ブロック混入）
25. 白色ブロック土混入黒色土
26. 灰白色土（茶・黒色土ブロック混入）
27. 白色ブロック土混入灰色土
28. 白色ブロック土混入黒色土（白色ブロック土多い）
29. 白色ブロック土混入灰色土
30. 灰色粘質土
31. 暗灰色粘質土（酸化鉄による茶色変色）
32. 黒色粘質土（酸化鉄によりブロック状に茶色変色）
33. 茶白色粘質土
34. 灰色粘土（30 層より細粒）
35. 灰色砂
36. 黄白色土（基盤層）

【白色系 - 黒色系土の積み上げによって版築施工されている。】

Ⅰ-Ⅱ面遺構土層関係図



1. 黒灰色土
2. 灰褐色土
3. 明褐色土
4. 茶褐色土（3mm 内外の砂粒を多く含む。）
5. 明茶褐色土（3mm 内外の砂粒を多く含む。）←遺構Ⅰ面形成面
6. 暗褐色砂混じり土（3mm 内外の砂粒を非常に多く含む）
7. 暗茶褐色土
8. 暗茶褐色土（7 層より暗め）
9. 灰色砂混じり土
10. 暗灰色砂混じり土
11. 赤茶色砂
12. 明赤色粘質土
13. 明灰色砂混じり土
14. 茶灰色粘質土
15. 黒色砂混じり土（硬質）←遺構Ⅱ面形成面

図9.2SF005関連遺構・Ⅰ-Ⅱ面遺構関連土層実測図(1)（S=1/40）

1.3m ～ 1.5m、深さ約0.4mを測る。遺構の先後関係は、先述したように2SD012→2SD014で、官道前道路の北側側溝を切っている。堆積土は、砂質土ならびに粘質土によって構成され、遺物取り上げ土層は上位より茶灰色砂質土←黄茶色砂質土←灰色砂質土である。

2SD060

調査区中央にて検出した溝で、調査区をほぼ東西に横断している。堆積土は砂混じり土を基調とし、水流が想定できる。遺構の切りあい関係から官道側溝を切っており、隣接する3・14次調査地（3SD043・14SD001）へと展開しているが、当該調査区の西に隣接している3次調査区内で欠失しており、隣接する宮ノ本丘陵への接続については明らかにし難い。溝の規模は、幅4.5m ～ 6.5m、深さ0.94mほどを測る。溝西側では上位に2SD096が覆っており、西側に隣接する3次調査区の所見を参考にすると、複数の溝（3SD001・3SD041・3SD43）が3次調査区内で合流し当該調査区では1条に見えてしまっているものと考えられる。

3）河川

2SD015

調査区南部を広域に覆う遺構で、その規模ならびに形状から自然環境において形成された河川と考えられる。したがって、堆積層も砂から粘土まで多様であり、河川堆積層といえる層相を呈している。遺構規模は、検出幅32.5m、深さ0.5mを測る。下位には2SD080があり、河川堆積層の差として遺構番号を付与しているが、すべて同一遺構として考えてよいものと判断される。関係する遺構は、**表19**にて記載している。

2SD080

調査区南部にて検出した遺構で、2SD015ならびに官道側溝の下位にて検出した河川である。堆積層は河川の特徴を示すように様々であり、調査時には異なる遺構として認識し遺物取り上げを行っている。具体的な堆積層の状況は、**表19**に示している。

4）土坑

2SK037

調査区北東部にて検出したもので、上位から淡茶灰色土←淡灰色土が堆積している。遺構の先後関係は、2SD022→2SK037であり、官道前道路の南側側溝を切っている。遺構規模は、長軸長0.9m、短軸長0.76m、残存する深さ0.5mを測る。

2SK117

調査区南部にて検出した土坑で、官道内に位置する。複数の土坑から構成され、同一堆積層であったことから一つにまとめている。堆積層は黒灰色土が堆積している。出土遺物からは中世期のものと考えられるものが出土しており、北部に所在している2SD060と同一時期の所産と考えられる。

2SK118

調査区南東部にて検出したもので、調査区外へ広がっているため全形は不明である。遺構規模は、残存長軸長1.3m、残存する深さは0.72mを測り、堆積層は上位より青灰色粘土←黒灰色土（木片を含む）←灰白色砂であった。先述した河川2SD015ならびに2SD080に先行するものと考えられる。

2SK135（写真6）

調査区南部にて検出した土坑で、2SD080内に施工されたシガラ状に木を組んだものである。土坑として調査を行っているが、2SD080遺構の流れ方向に対して直交しており、かつ堆積層の状況から砂と粘土の互層であることを考えると、河川に施工された堰き止めを意図したものと理解することもできる。遺構規模は、長軸長2.25m、短軸長1.88m、深さ0.67mを測る。

2SK206

調査区北東部にて検出したもので、長軸長3.2m、短軸長1.5m、残存する深さ0.52mを測る。遺構内堆積土は、茶色土であり上位に黒灰色土がのる。

5）その他の遺構

a.溝×窪み

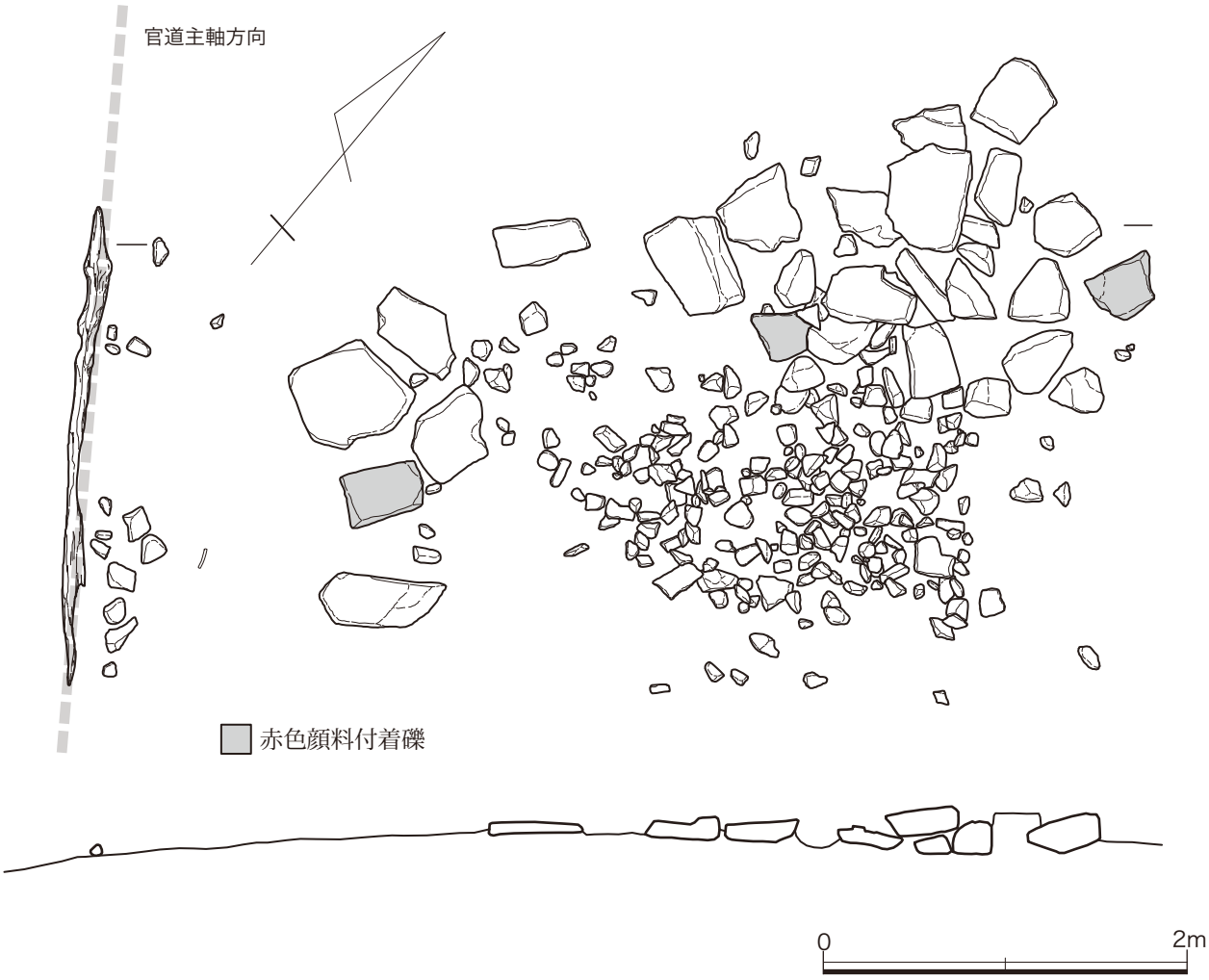


図10.2SF025内礫集中箇所実測図(S=1/40)

2SX001（2SX200・205）

調査区北東部にて検出したもので、湾曲するように調査区外へ展開している。調査区東辺には丘陵の段差ないしは、旧畦畔の痕跡と考えられる溝状のものが検出できており、そこへ流れ込むような形状を有している。堆積土の状況は、上位より灰色中粒～細粒砂←黒色粘質土←暗茶色粘土←暗灰色中粒砂が堆積していた。遺構性格ならびに全形については不明。

b.地表面に乾裂状構造を有する面

調査区北部にて検出したもので、これまで記述してきた遺構Ⅰ面とは異なり、遺構Ⅰ面から下位約0.6m～0.8mにて検出した。乾燥による地割状を呈しており、佐野遺跡群内においては脇道遺跡第6次調査にて落とし穴遺構を伴った縄文期の生活面として認識されており、当該調査区においても同様な形状で検出できたことになる。乾裂状の地割箇所に黒曜石・サヌカイト細片が出土しており、Ⅰ面目の遺構検出時に縄文期の土器が出土していることから、脇道遺跡にて確認した面と同一時期のものと考えられる。　（中島恒次郎）

3.遺物

1)道路関係

2SD012黄灰色土(図16)

須恵器

蓋3（1）　口縁端部はやや崩れた断面三角形を呈し、天井部外面は回転ヘラ削りされ、天井部内面は回転ナデ

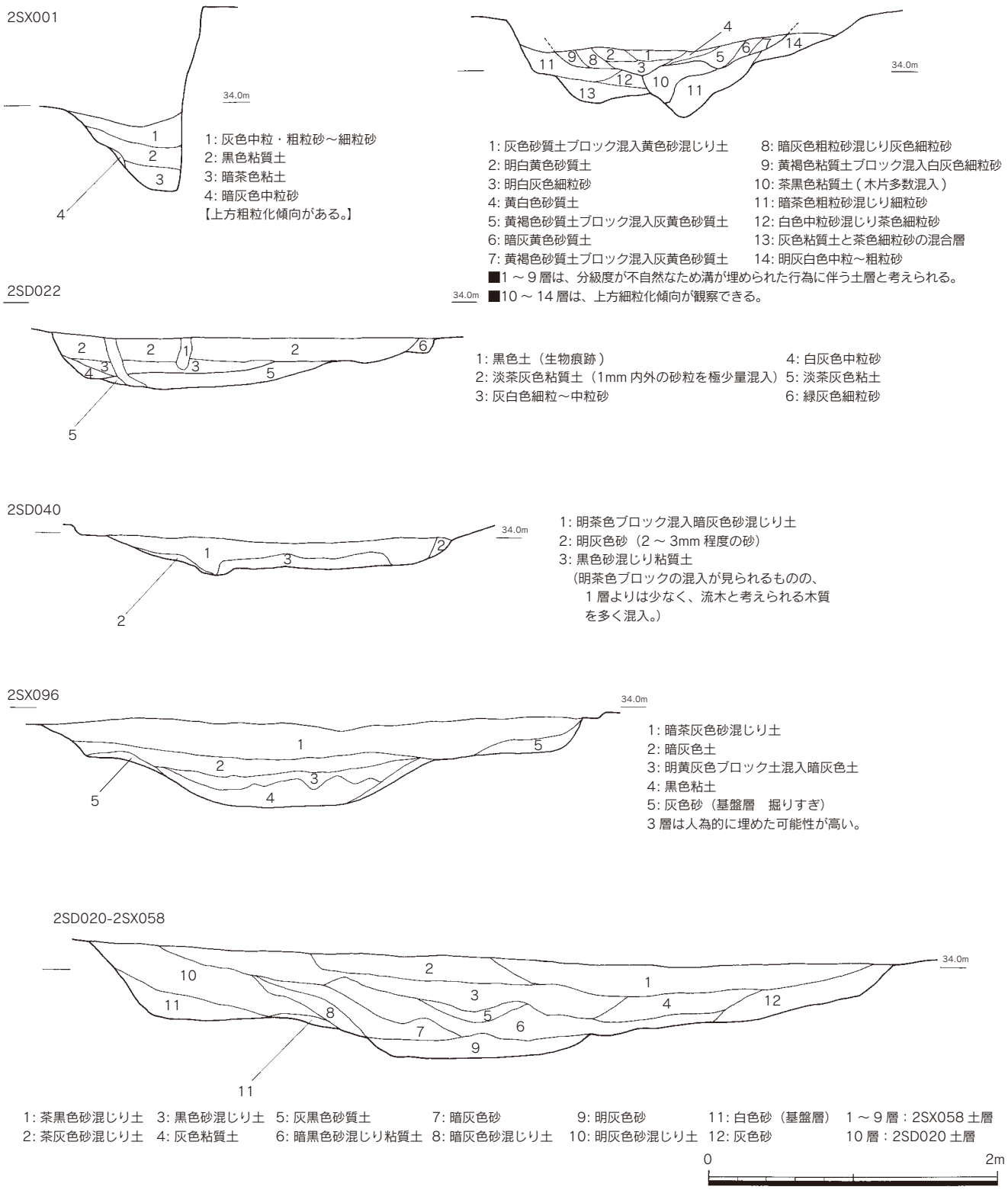


図11.2SF055（2SF025）関連遺構土層実測図（1）（S=1/40）

後不定方向ナデで調整される。

蓋ｃ３（2）　口縁端部はやや直立した断面三角形を呈し、天井部外面は回転ヘラ削りされる。つまみは扁平な擬宝珠形。天井部内面は回転ナデ後不定方向ナデで調整される。

小坏ｃ（3・4）　3は溶着物が大きく法量は不明確であるが、4の口径は10.2cmを測る。3は溶着資料で、同一個体の小坏ｃが重ねられている。高台は外方へ向き、底部と体部の境にはやや明瞭な屈曲も見られる。4の高台

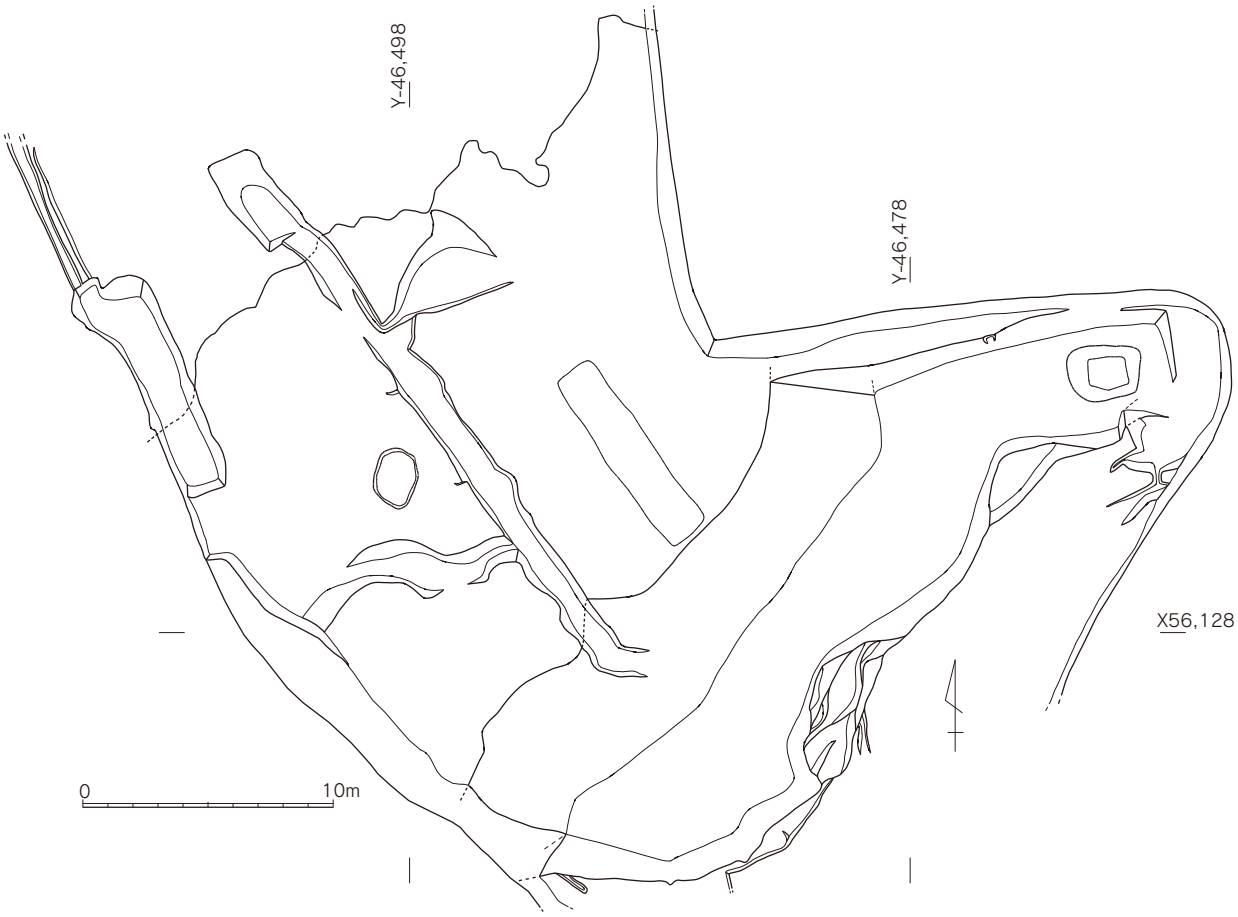


図12.2SD080遺構実測図（S=1/300）

も3と同様に外方に傾き、底部から体部外面にはやや丸みを伴なう形状が観察される。

坏ｃ（5）　高台は直立した台形を呈し、体部と底部の境にはわずかな屈曲がみられる。底部はヘラで切られ、その後粗いナデで調整される。底部内面には不定方向ナデがみられる。焼成、還元ともに良好。

坏×鉢（6）　口縁部の小破片で、体部にかけてやや内傾する。内外面とも回転ナデ調整がみられる。胎土には黒色粒が多い。

鉢ａ（7）　口縁部の小破片で、口縁端部は平坦で内側に傾き、体部にかけてやや内湾する形状を呈す。焼成、還元ともに良好。

土師器

壺ｃ（8）　口縁端部は外反し、大きく張り出した体部中位には把手が貼付けされる。高台はやや台形でわずかに外方に傾く。体部の外面上位は摩耗のため調整不明であるが、下位は回転ヘラ削りされる。底部外面はナデ調整とみられるが明瞭でない。全体的に摩耗気味。

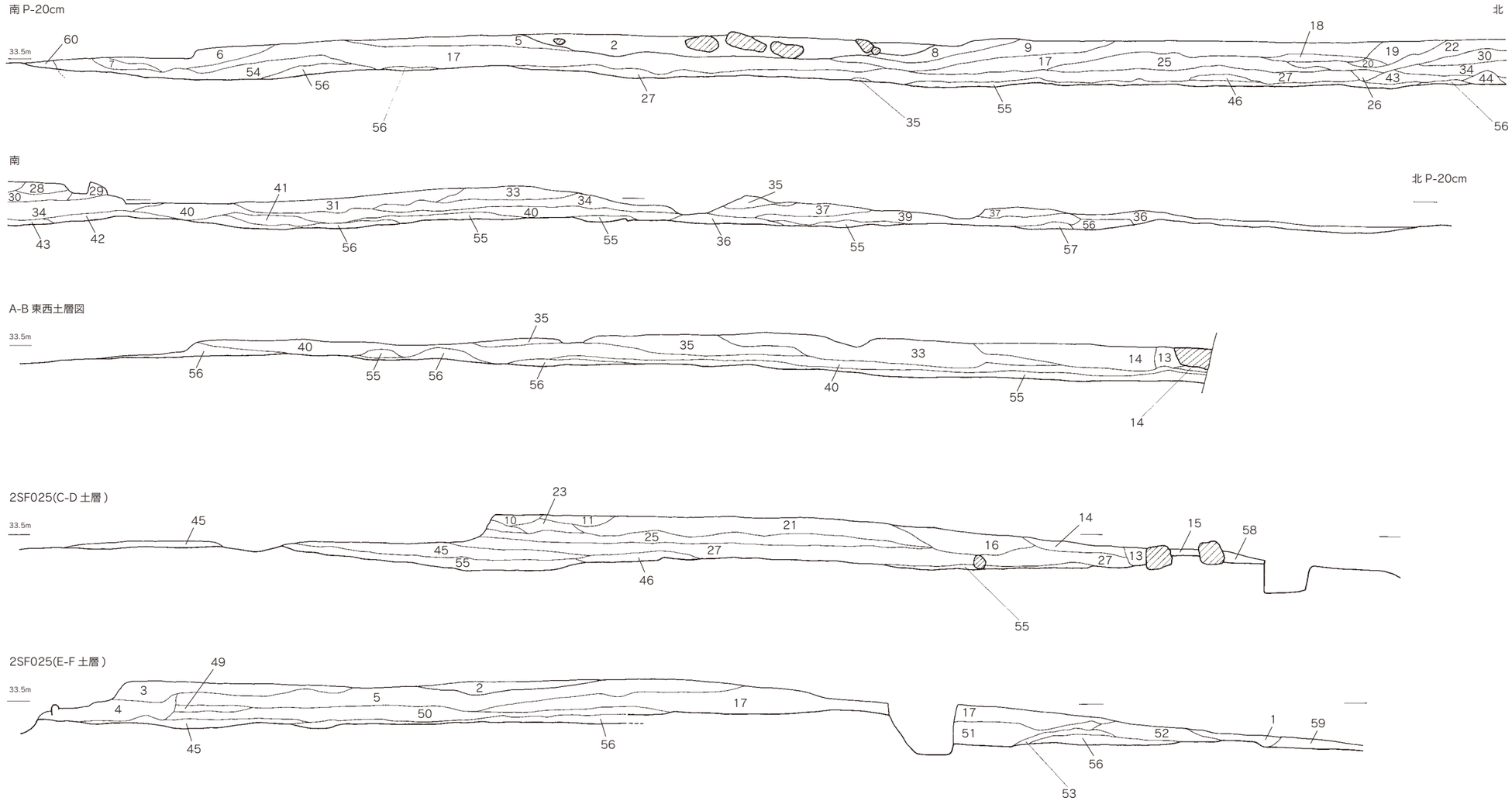
２ＳＤ012灰褐色土（図16）

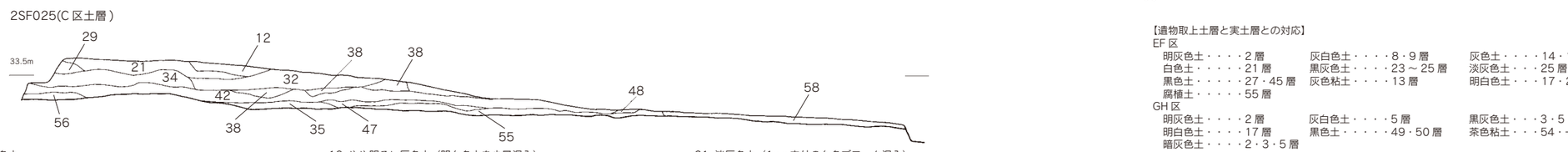
須恵器

蓋ｃ（9）　天井部のみの小破片で、つまみは扁平な擬宝珠形を呈す。調整は摩耗の為詳細は不明。歪みのため天井部が陥没している。

蓋3（10・11）　いずれも口縁部から体部にかけての破片で、口縁端部は断面三角形を有し、内外面には色調の変化がみられることから、どちらも重ね焼きの可能性が考えられる。10は気泡が多い上に歪みが著しく、小破片のため復原できないが、11は口径15.6cmを測り、焼成、還元ともに良好である。

坏ｃ（12）　口径15.6cmに復原される。高台はやや外に張り出し、やや高め。底部から体部外面にかけてやや





【遺物取上土層と実土層との対応】

EF 区

明灰色土・・・・2 層	灰白色土・・・・8・9 層	灰色土・・・・14・16 層
白色土・・・・・21 層	黒灰色土・・・・23 ～ 25 層	淡灰色土・・・25 層
黒色土・・・・・27・45 層	灰色粘土・・・・13 層	明白色土・・・17・27 層
腐植土・・・・・55 層		

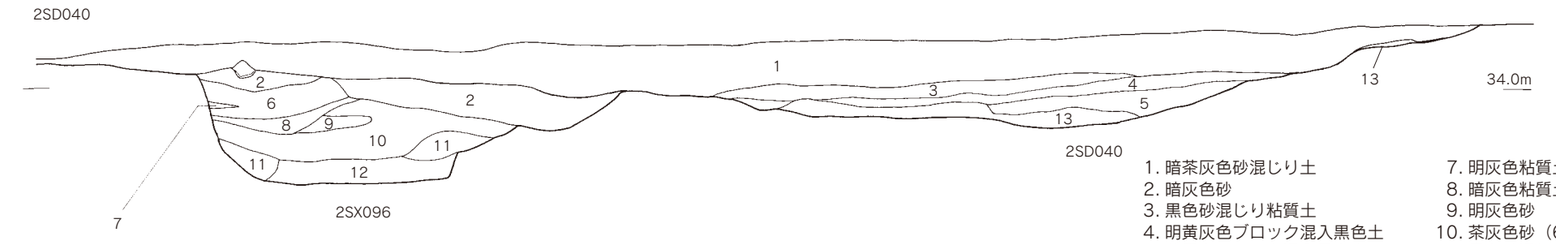
GH 区

明灰色土・・・・2 層	灰白色土・・・・5 層	黒灰色土・・・3・5・6 層
明白色土・・・・17 層	黒色土・・・・・49・50 層	茶色粘土・・・54・一部 50 層
暗灰色土・・・・2・3・5 層		

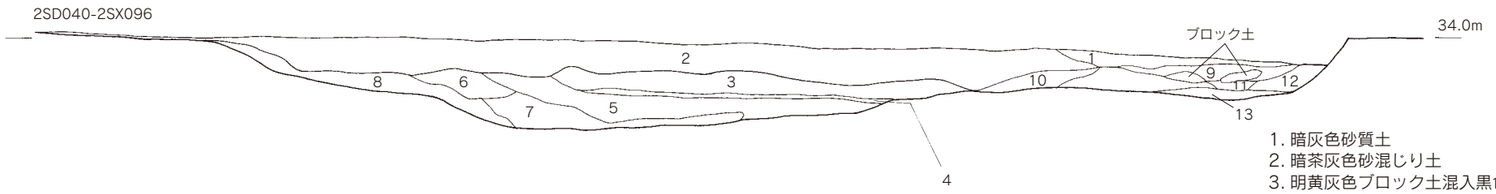
1. 淡い黒灰色土
2. 茶灰色粘質土（明白色粘土ブロックと花崗岩が混入。古墳の土の可能性あり。）
3. 淡灰色粘質土（明白色土・黄色土ブロック混入）
4. 黒灰色土（硬質。黄褐色土ブロック混入）
5. 黒灰色土（硬質。明白色土ブロック混入）
6. 灰色土（淡灰色土および明白色土ブロック混入）
7. 白色土（明白色土が少量混入）
8. 白色土 - 灰色土 - 明白色土の混合層
9. 黒灰色土（明白色土ブロックが細かく混入）
10. やや明るい灰色土（黄褐色土・明白色土ブロック混入）
11. 黒灰色土
12. 暗灰色土（3cm 程度の白色土ブロック、1cm 程度の黄色土ブロック混入）
13. 灰色粘土（礫の西側を保護）
14. 暗灰色土（2cm 内外の明白色土ブロック混入）
15. 淡灰色土（粗い印象を受ける）
16. やや明るい灰色土（明白色土を少量混入）
17. 白色土（灰色土と明白色土がブロック状に混入。20 層と同一層）
18. 黒灰色土（白色土ブロック混入）
19. 灰白色土（白色土ブロック混入）
20. 淡灰色土と明白色土の混合層
21. 白色土（硬質。淡灰色土が少量混入し、鉄分が小粒混入。16 層と同一層）
22. 暗灰色土（明白色土ブロック混入）
23. やや茶色味を帯びた黒灰色土（黄褐色土・白色土ブロックを混入）
24. 白色土（黄白色土ブロックが少量混入）
25. 暗灰色土（白色土を含む）
26. 黒茶色土（明黄色土を含む）
27. 黄褐色粘質土と灰色粘質土の混合層
28. 淡灰色土（花崗岩風化生成物）
29. 灰白色土（白色ブロック混入）
30. 淡灰色土と明白色土の混合層
31. 淡灰色土（1cm 内外の白色ブロック混入）
32. 白色土と淡灰色土の混合層（明白色土ブロックが細かく混入）
33. 淡灰白色土（明白色土 - 黄褐色土ブロック混入）
34. 黒灰色土（明白色土 - 黄褐色土ブロックが細かく混入）
35. 暗灰色土（明白色土ブロック混入）
36. 暗灰色土（整地上面の層）
37. 灰色土（白色土・明白色土ブロック混入）
38. 灰白色土（明白色土・黒灰色土混入）
39. 黒色土（白色土ブロック混入）
40. 黄褐色粘質土（白色土・黒灰色土ブロック混入）
41. 暗灰色粘質土（明白色土ブロック混入）
42. 黄褐色粘質土と灰色粘質土の混合層
43. 淡灰色粘質土（黄褐色土混じり）
44. 灰色粘質土
45. 灰色粘質土（白色土ブロック混入）
46. 灰褐色土（白色土混入）
47. 淡灰色を帯びた白色土
48. 淡茶色砂質土
49. 淡灰色土 - 明灰色土の混合層（明白色土を混入）
50. 暗茶色粘土（黄褐色土混入）
51. 灰色粘質土（黄褐色土 - 灰色砂混合）
52. 灰白色土
53. やや暗い灰色粘質土（暗灰色土・黄褐色土混合）
54. 暗茶色粘質土と暗灰色粘質土
55. 黒色腐植土（流木・葉を含む）
56. 淡灰色砂と淡茶色砂の混合層
57. 黒色粘質土（整地下位の層）
58. 暗灰色土
59. 黒褐色土（炭化物混入）

0　2m

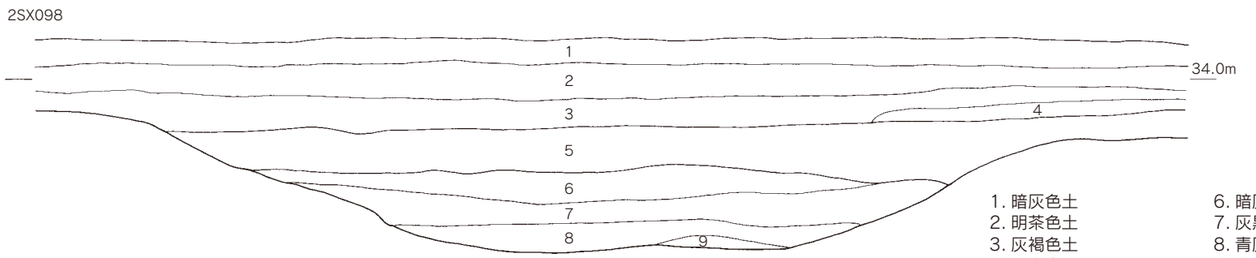
図13.2SF055（2SF025）関連遺構土層実測図（2）（S=1/40）



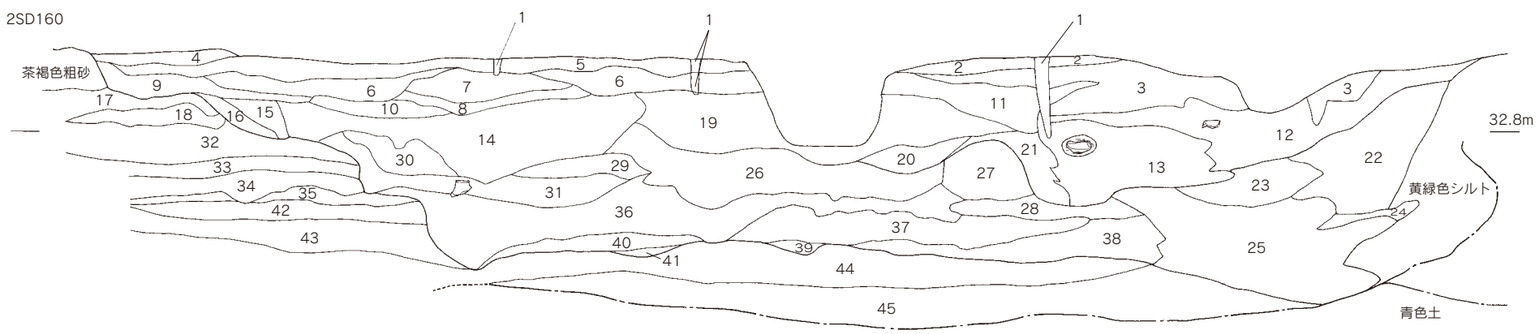
1. 暗茶灰色砂混じり土
2. 暗灰色砂
3. 黒色砂混じり粘質土
4. 明黄灰色ブロック混入黒色土
5. 黄灰色ブロック混入黒色土
6. 茶灰色粗粒砂
7. 明灰色粘質土
8. 暗灰色粘質土
9. 明灰色砂
10. 茶灰色砂（6 層と同質）
11. 黒色砂混じり粘質土（1mm 程度の砂粒混入）
12. 明灰色砂
13. 明黄灰色砂質土



1. 暗灰色砂質土
2. 暗茶灰色砂混じり土
3. 明黄灰色ブロック土混入黒色土
4. 黒褐色粘質土
5. 明灰色粗粒砂
6. 黒灰色粘質土
7. 黒色砂混じり粘質土
8. 明黄灰色砂質土（基盤層）
9. 明黄灰色ブロック土混入灰色砂質土
10. 明黄灰色ブロック土混入黒色土（2 層と同質）
11. 明茶灰色砂（5mm 程度の礫を混入）
12. 明灰色砂（4 層と同質）
13. 明灰色砂（基盤層）



1. 暗灰色土
2. 明茶色土
3. 灰褐色土
4. 灰色土
5. 茶灰色土（遺物包含層）
6. 暗灰色土
7. 灰黒色砂質土
8. 青灰黒色粘質土
9. 白灰色砂（基盤層）



1. 灰褐色砂質土
2. 灰色シルト
3. 茶色粗粒砂
4. 茶灰色シルト
5. 黒色シルト
6. 暗灰色土
7. 茶色粗粒砂
8. 明灰色中粒砂
9. 茶色粗粒砂 - 暗灰色中粒砂の互層
10. 暗灰色粘質土 - 暗灰色中粒砂の互層
11. 黒灰色土（炭化物を多く含む）
12. 黒色粘質土
13. 青灰色粗粒砂 - 暗灰色粘質土の互層
14. 茶灰色粗粒砂 - 灰色土の互層
15. 黒色粘質土
16. 暗青灰色シルト
17. 青灰色シルト
18. 灰色中粒砂
19. 白色粗粒砂
20. 白色シルト - 黒色シルトの互層
21. 黒色シルト
22. 灰黒色粘質土
23. 灰色中粒砂 - 暗灰色粘質土の互層
24. 黒色中粒砂
25. 灰白色粗粒砂 - 灰色シルトの互層
26. 暗白色粗粒砂
27. 青灰色シルト
28. 白色中粒砂
29. 黒色シルト
30. 黒色腐植土
31. 灰色シルトと灰色砂の互層
32. 青灰色シルト
33. 黒灰色シルト - 黄色砂の互層
34. 灰白色粗粒砂
35. 黒色粘質土
36. 灰白色粗粒砂 - 灰色シルトの互層
37. 黒色腐植土
38. 黒灰色土
39. 灰色シルト - 黒色シルトの互層
40. 黒色腐植土
41. 灰色シルト - 黒色シルトの互層
42. 暗灰色粘質土
43. 青灰色シルト - 暗灰色土の互層
44. 灰褐色粗粒砂
45. 淡灰色粗粒砂（5cm 内外の礫を多く混入）
46. 黒灰色粘質土
47. 茶褐色粗粒砂

0　2m

図14.2SF055（2SF025）関連遺構土層実測図(3)（S=1/40）

図15.下層遺構実測図(S=1/250)

丸みを帯びた形状を呈す。底部切り離しは不明瞭で、底部内面には不定方向ナデによる調整がみられる。胎土には黒色粒が多く含まれる。

土師器

甕(13)　口縁部の小破片。古墳時代の系譜を引く「在地伝統」型甕(以下「Ｉ類」)と考えられる(中島、2000)。摩耗が著しく、調整は不明。

２ＳＤ012灰色粘土(図16)

須恵器

坏蓋(14)　口縁部から体部の一部の小破片。口縁端部は丸味を帯びる。口径は11.4cmを測るが、焼成が不良で摩耗が著しく調整は不明。

蓋3（15）　口縁部の小破片で、口縁端部はやや丸みのある断面三角形を呈す。内外面とも
に回転ナデで調整され、色調の変化がみられることから重ね焼きをした可能性が考えられる。焼成、還元ともに良好。

坏身(16・17)　いずれも受部よりたちあがりの方が長く貼付される。16は小破片で焼成も不良のため、摩耗が著しく詳細は不明。17は復原口径9.4cmで底部切り離しはヘラ切り。底部と体部との境には回転ヘラ削りの

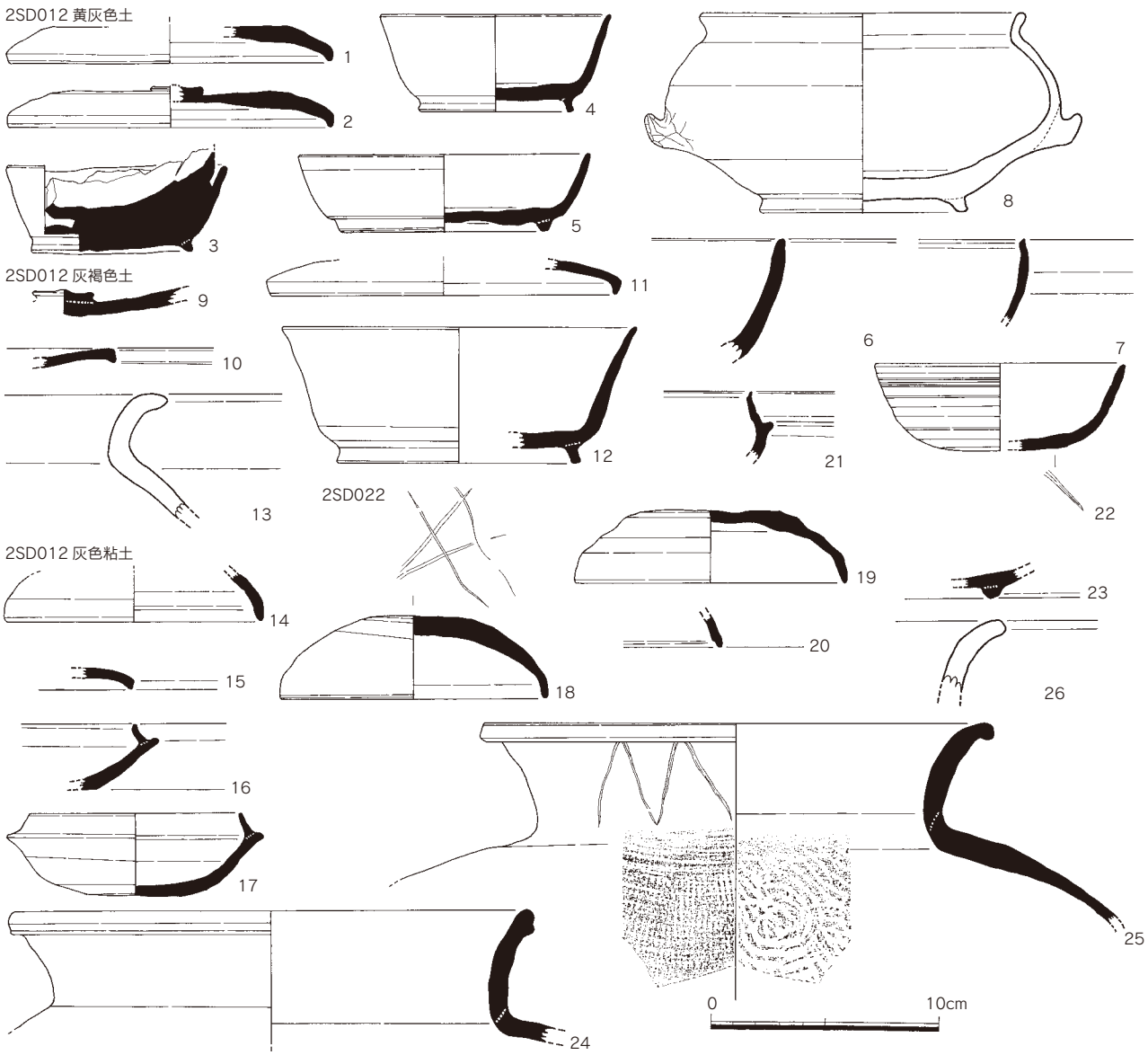


図16.2SD012出土遺物実測図(S=1/3)

調整と、底部内面には不定方向ナデの調整もみられる。

２ＳＤ022（図17）

須恵器

坏蓋(18 ～ 20)　18・19の口径はそれぞれ11.6cm・12.0cmを測り、20は口縁部のみの小破片のため復原できていない。18・19ともに天井部外面は回転ヘラ削りされ、その後ナデの調整がなされる。天井部内面は回転ナデ後に不定方向ナデもみられる。また、18の天井部外面から体部外面にかけてはヘラ記号も観察できる。20は口縁端部内面に沈線がみられ、焼成、還元ともに良好である。

坏身(21)かえりは短く、口縁部は長く立ち上がる。口縁端部の調整は摩耗のため不明であるが、口縁端部内面には沈線が観察できる。内面には色調の変化がみられるため、重ね焼きの可能性がある。

坏ａ(22)　口径は11.0cmに復原される。口縁部外面には3条の沈線がみられ、底部は回転ヘラ削りが施される。また、底部外面にはヘラ記号も観察できる。底部内面は回転ナデ後不定方向のナデで調整される。

坏ｃ×椀ｃ(23)　高台のみの小破片で、高台はやや内方に傾き、角で接地する五角形を呈す。全体的に摩耗していて、調整は不明。

甕(24・25)　24・25の口径はそれぞれ23.2cm、22.6cmを測る。いずれも口縁部内面は灰被りがみられ、口縁部外面が黒色に変色する。体部内面は当て具による調整、体部外面は平行叩きの調整が観察できる。25の口

縁部外面には波状のヘラ記号が描かれている。また、いずれも体部の残存は僅かで、外方に張り出す形状であると考えられる。

土師器

甕(26)　口縁部のみの小破片で、外反する形状を呈すが、摩耗のため詳細は不明瞭である。

２ＳＤ022灰色砂質土(図17)

蓋3（27 ～ 29）　いずれも口縁部から体部の一部の小破片で、口縁端部は丸味を帯びた断面三角形を呈す。27の体部内面は不定方向ナデがみられる。27の焼成がやや不良であるのを除けば、いずれも焼成、還元ともにほぼ良好である。

坏ｃ(30)　底部のみの破片で、高台は外方に傾き、接地面の狭い四角形を呈す。底部内面は不定方向ナデで調整される。底部切り離しは不明。焼成、還元ともに良好である。

甕ａ(31)　口径18.7cm、器高44.9cmで、口縁部外面は凹凸を有す形状で、頸部外面にはヘラ記号が2箇所みられる。また、体部内面には同心円状当具、体部外面には格子状叩きとカキ目の調整が観察できる。胎土は緻密で、焼成、還元ともに良好。

土師器

甕(32)　頸部は締まりが強く、最大径が体部になると考えられるため、中島分類によるとＩ類に該当する。体部内面はヘラ削りによって調整されるが、全体的に摩耗が著しくその他の調整は判然としない。

2SD022暗灰色砂質土(図17)

須恵器

蓋2（33）　口縁端部のみの小破片で、直立した形状を呈す。焼成、還元ともに良好。

蓋ｃ(34)　つまみのみの小破片で、扁平な擬宝珠状を呈す。焼成、還元ともにほぼ良好。

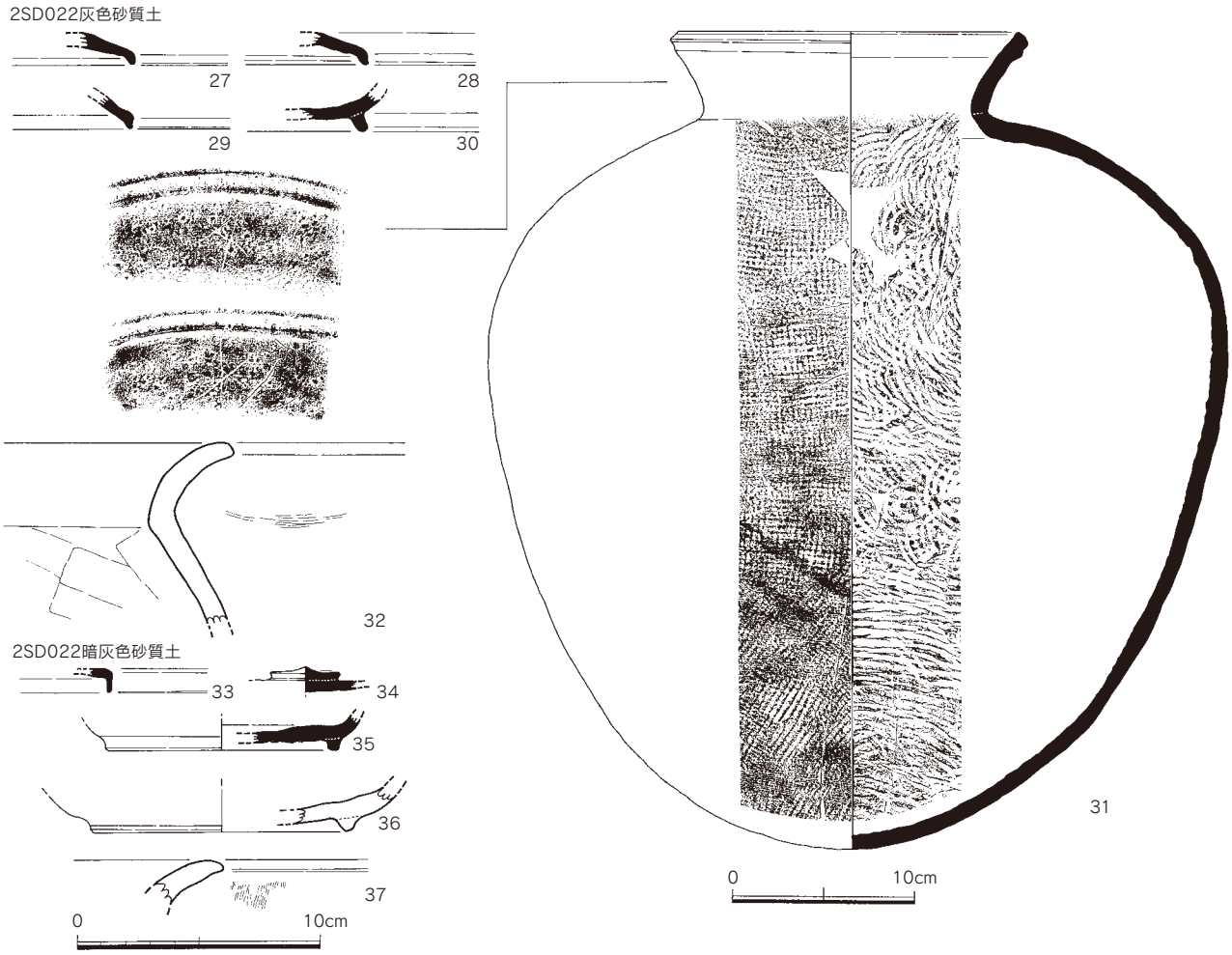


図17.2SD022出土遺物実測図(S=1/3、1/4)

坏ｃ（35）　やや内傾気味の四角形の高台が貼付けされ、底部はヘラ切り。底部内面には不定方向ナデによる調整がみられる。焼成、還元ともに良好。

土師器

坏ｃ×椀ｃ（36）　やや外方に傾く台形の高台を有し、底径は10.8cmを測る。焼成が不良で摩耗が著しく、調整は不明。4㎜以下の白色砂粒を多く含む。

甕×鍋（37）　口縁部のみの小破片で、器種特定は困難。外面下位には縦方向の刷毛目が観察できる。焼成はやや不良。

2SF025暗灰色砂（図18）

須恵器

蓋3（38 ～ 41）　38・39については小破片のため復原できていないが、40・41はそれぞれ15.4cm・15.8cmを測る。いずれも丸みを帯びた断面三角形の口縁端部を有し、38・41は直立するが、39・40はやや外方に傾いた形状を呈す。39のみ天井部が確認でき、天井部外面が回転ヘラ削りで調整されたことがわかる。また、41の体部内面には不定方向ナデの調整がみられる。

蓋ｃ（42）　つまみのみの破片で、扁平な擬宝珠状を呈す。内面には不定方向ナデによる調整も観察できる。焼成、還元ともに良好である。

坏身（43）　かえりより長い口縁部が貼付けされる。胎土には気泡がやや入り、かえりの下位には溶着した破片が付着する。

小坏ｃ（44）　底径7.8cmの底部の破片。底部外面は回転ヘラ切り後丁寧に回転ナデされ、底部内面は回転ナデ後不定方向にナデで調整される。高台は平坦部の内側のみが接地する台形を呈す。

坏ｃ（45・46）　45はやや外方に傾いた四角形高台が貼付され、体部外面下位は回転ヘラ削りされ、底部との境目には明瞭に屈曲がみられる。46は直立した低い扁平な四角の高台を有し、底部は回転ヘラ切り。体部と底部の境は丸みを帯びる。いずれも底部内面は回転ナデ後不定方向ナデで調整される。

坏（47・48）　どちらも口縁部の破片で、胎土は緻密。焼成、還元ともに良好。

2SF025暗灰色土（図18）

須恵器

蓋2（49）　口縁端部はやや長めに外方に向かって屈折する。天井部はヘラ切り後回転ナデによって仕上げられ、口径は14.4cmに復原される。

蓋3（50 ～ 54）　全て口縁部の小破片で、いずれも口縁端部は小さな断面三角形を呈し、51 ～ 53の端部内面には屈曲に伴う沈線が明瞭にみられる。焼成、還元も全て良好。50は内外面に色調の変化がみられることから、重ね焼きの可能性が考えられる。52の体部外面には回転ナデ後不定方向ナデの調整が観察される。

蓋ｃ（55・56）　いずれも扁平な擬宝珠形のつまみの小破片。55の内面には不定方向のナデがみられる。55は焼成、還元ともに良好であるが、56はどちらも不良で調整は殆ど不明。

坏ｃ（57 ～ 59）　57はやや外にはねて、58は直立し、59はやや内傾気味の四角い貼付け・高台を有す。57・58は底部外面をヘラ切り後回転ナデにより調整されるが、59は切り離し不明で、不定方向のナデにより底部外面を調整される。57･58の体部下位にはやや明瞭に屈曲が入るが、59は滑らかに上方へ立ち上がる形状を呈す。また、59の内面には漆と考えられる付着物が確認できる。

坏（60・61）　いずれも小破片。60は微細な白色砂粒を胎土に多く含む。底部と体部の境にはヘラ切り時のヘラ挿入痕がみられる。61は胎土に黒色粒子が多く含まれる。底部はヘラ切り。いずれも焼成、還元ともにほぼ良好。

皿ａ（62）　口径は14.8cmに復原される。底部は回転ヘラ切りされ、底部内面は回転ナデ後不定方向ナデで調整される。焼成、還元ともに良好。

皿（63）　底部から口縁部までの小破片。焼成がやや不良で、底部切り離しは不明。還元はやや良好である。

高坏（64）　坏部のみの残存で、口縁部から底部までの器高は低く、体部と底部の境は「く」の字に屈曲する。口

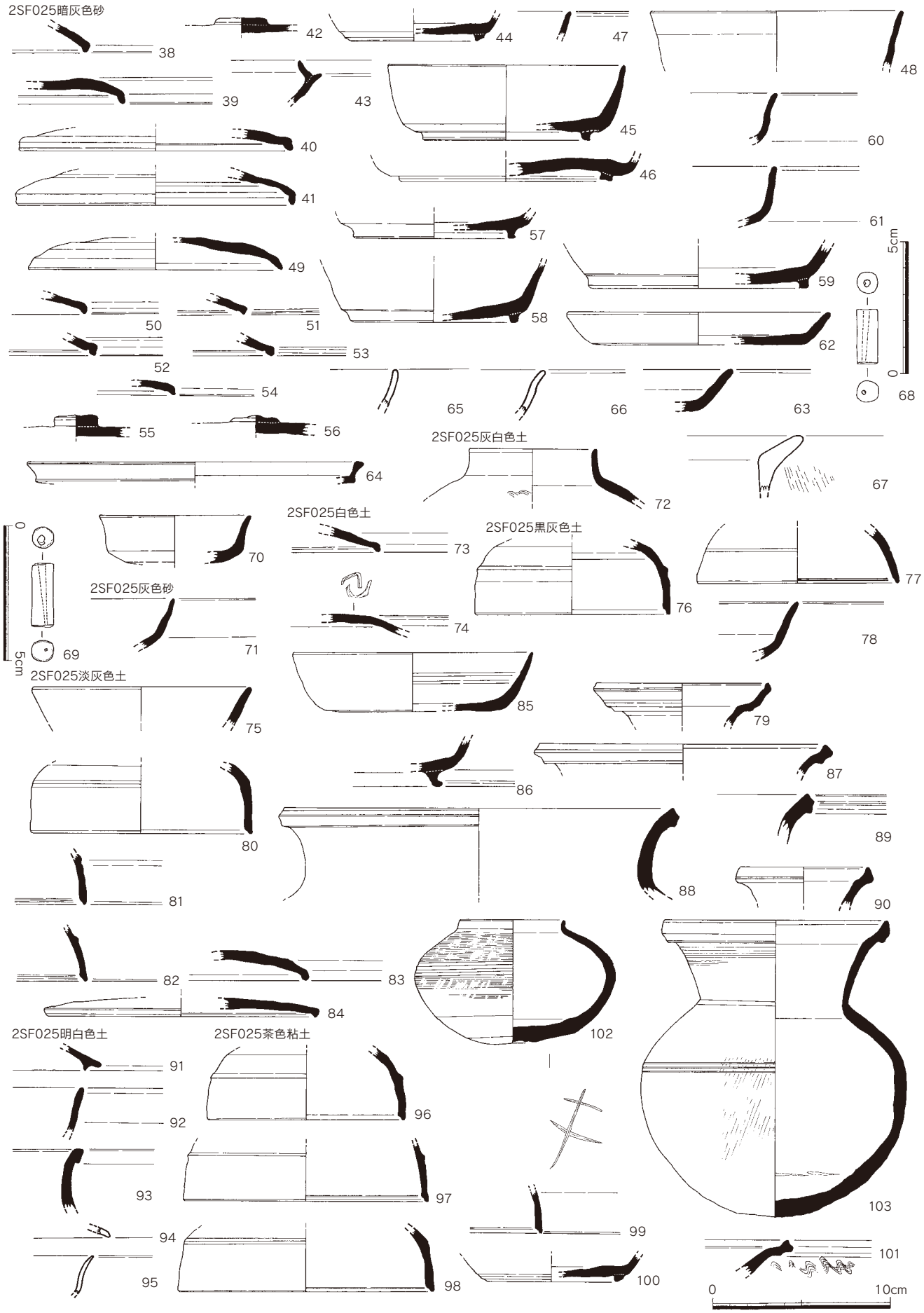


図18.2SF055（2SF025）出土遺物実測図(S=1/3、管玉：1/2)

縁端部は扁平。

土師器

坏×椀(65)　口縁部のみの小破片。焼成不良で摩耗が著しく、詳細は不明。

坏×皿(66)　口縁部のみの小破片。焼成不良で摩耗が著しく調整は不明である。

甕ａ(67)　口縁部は外反し、体部内面は削り、外面は縦方向の刷毛で調整される。胎土には微細な白色砂粒を多く含む。焼成が不良で摩耗気味。

石製品

管玉(68)　暗緑色を呈し、長さは2.05cm、幅0.8cmを測る。石材は不明だが、璧玉の可能性が考えられる。

2SF025明灰色土(図18・19)

石製品

管玉(69)　緑色から黄緑色を呈し、長さ2.4cm、幅0.8cm、穿孔最大径0.2cmを測る。石材は不明だが、68と同じく璧玉の可能性が考えられる。

金属製品

耳環(138)　表面腐食がやや進行したもので、表面金箔が芯部の金属腐食によって欠失している。直径0.7cmのほぼ円形を呈する棒状の金具を、直径2.7cm ～ 3.1cmの円形に曲げて成形している。重量は、12.4gを量る。

2SF025灰色土(図18)

須恵器

坏ａ(70)　底部は回転ヘラ切りで、体部内面は不定方向ナデで調整される。口径は8.6cmに復原される。胎土には小量の気泡も含まれる。

2SF025灰色砂(図18)

須恵器

坏(71)　口縁部から体部にかけての小破片。内外面とも回転ナデで調整される。胎土は緻密で、焼成、還元ともに良好。

2SF025灰白色土(図18)

須恵器

壺ａ×ｃ(72)　口縁部が直立した短頸壺である。肩部までの残存だが、肩部はややなで肩気味のものと考えられる。内外面とも回転ナデで調整されるが、肩部外面には波状紋がみられる。

2SF025白色土(図18)

須恵器

蓋3(73)　丸みをおびた断面三角形の口縁端部を有する。天井部外面は回転ヘラ削りされ、天井部内面には不定方向ナデも観察できる。胎土は緻密で、焼成、還元ともに良好である。

蓋(74)　天井部から体部の残存破片で、天井部外面はヘラ削りされ、一部にヘラ記号も確認できる。また、天井部内面は不定方向ナデで調整される。

2SF025淡灰色土(図18)

須恵器

坏×椀(75)　口縁部の小破片。内外面ともに回転ナデで調整される。胎土は緻密で、焼成、還元ともに良好。

2SF025黒灰色土(図18)

須恵器

坏蓋(76・77)　口径はそれぞれ11. 0cm、11.4cmを測る。いずれも口縁端部内面と、77のみは体部外面にも沈線が確認できる。76は天井部から体部境界の外面に突帯もみられ、天井部は回転ヘラ削りで調整される。いずれも焼成、還元ともにほぼ良好であるが、77の胎土は気泡が含まれ、やや粗い。

坏(78)　口縁部から体部にかけての小破片。内外面とも回転ナデで調整される。胎土は緻密で、焼成は良好、還元はやや不良である。

瓶(79)　口径は9.8cm。口縁端部の平坦面は外方を向き、頸部にかけて「く」の字に屈曲する形状を呈す。内外面とも回転ナデで調整される。

2SF025黒色土(図18)

須恵器

坏蓋(80 ～ 82)　80のみ口径12.5cmに復原される。80・81ともやや直立気味の口縁形態を有し、口縁端部内面には沈線も見られるが、82はやや外方へ開き、口縁端部内面に明瞭な沈線は観察できない。また、天井部について80は回転ヘラ削りがなされ、81も狭い範囲ながらヘラによる調整がみられる。いずれも胎土は緻密。焼成、還元ともに良好である。

蓋3(83･84)　84のみ口径が15.4cmに復原される。どちらも口縁端部は小さな丸みを帯びた断面三角形を呈し、天井部外面は、83が回転ヘラ削り、84は回転ヘラ切りがなされる。また、天井部内面はどちらも不定方向ナデで調整されている。

坏 a(85)　口径13.6cmを測る。底部は回転ヘラ切りされ、底部から体部の境は丸みを帯びて屈曲し、口縁部までまっすぐ立ち上がる。底部内面には不定方向ナデ、体部内面には2本の沈線もみられる。

坏 c(86)　底部から体部が残存。貼付高台はやや高く外傾気味だが、平坦面は接地する。体部と底部の境は丸みを生じる。胎土は緻密で焼成、還元ともに良好。

甕(87 ～ 89)　いずれも口縁部のみの小破片。87・88はそれぞれ16.8・22.0cmに復原される。口縁端部は、87が長方形で内面には凹面、外面下位は鋭い屈曲がみられ、88・89は端部に凹凸面を呈し、それが外方に向く形状を有す。

壺(90)口径は7.4cmに復原される。口縁端部は断面三角形を呈し、その下位には沈線がみられる。胎土には微細な黒色粒子を多く含む。焼成、還元ともに良好。

2SF025明白色土(図18)

須恵器

蓋1（91）　口縁部の小破片。かえりと口縁端部は同じ位に短く、かえりのみが接地する。焼成、還元ともに不良で、調整は不明。胎土は緻密である。

坏(92)　口縁部の小破片。内外面ともに回転ナデで調整される。胎土は緻密で、焼成、還元ともに良好。

甕(93)　口縁端部は平坦で、口縁部外面下位には鋭く屈曲が入る。胎土は緻密で焼成、還元ともにほぼ良好である。

土師器

蓋3（94）　口縁部のみの小破片。焼成が不良で摩耗が著しく、詳細は不明。

坏(95)　口縁部の小破片で、焼成、還元ともに良好。胎土は緻密。内外面とも回転ナデによって調整される。

2SF025茶色粘土(図18)

須恵器

坏蓋(96 ～ 99)　小破片の98を除いて、口径は11.2 ～ 14.4cmを測る。いずれの口縁端部内面には沈線がはいり、ほぼ直立した形状を呈す。天井部の残存する95と97の天井部外面には回転ヘラ削りの調整がみられる。いずれも胎土は緻密で、焼成、還元ともに良好ある。

坏c（100）　高台は平坦面の内側に接地面をもつ直立した台形を呈す。底部内面には回転ナデ後不定方向ナデが施される。底部外面は回転ナデで調整されており、切り離しは不明。

甕(101)　口縁部の小破片。口縁端部はやや凹面気味で外傾し、端部内面には凹面、端部外面の上位と下位には凸帯もみられる。また、頸部近くの外面には波状紋も確認できる。

小壺(102)　口径5.9cmを測る短頸壺で、体部中位が大きく外に張り出す形状を呈す。体部外面は上位から中位にかけてカキ目痕がみられ、中位には沈線が入り、下位のカキ目は一部回転ナデで調整される。底部は回転ヘラ削りで一部には「キ」の字状のヘラ記号が観察できる。色調の変化がみられることから、重ね焼きの可能性がある。

図19.2SD020出土遺物実測図(S=1/3)

壺(103)　口縁部は玉縁状で外面下位には凹帯がみられる。頸部外面の上位はカキ目で調整される。体部から底部外面は平行叩きされ、その後回転ナデによって調整される。体部外面中位には3条の沈線も観察できる。また、底部内面には粘土紐痕がみられる。

２ＳＤ020（図19）

須恵器

蓋ｃ３（104・105）　104は歪みが著しく口径は17.3 ～ 17.6cmで、105は16.8cmに復原される。つまみはどちらも扁平な擬宝珠形を貼付けられ、天井部外面は回転ヘラ削りで調整される。いずれも体部から天井部にかけての内面は不定方向ナデが施される。

坏ａ（106・107）　106は口径15.2 ～ 15.6cmを測る。どちらも底部はヘラ切りで、底部と体部の境は丸みを帯び、底部内面には不定方向にナデがみられる。106の底部外面にはヘラ記号の可能性がある線刻も観察できる。

小坏ｃ（108）　高台はやや外反し、平坦面は外側のみ接地する。底部と体部の境にはやや明瞭に角がつき、体部から口縁部まではまっすぐ立ち上がる形を呈す。口縁端部外面に別個体とみられる破片が付着し、重ね焼きしたと考えられる。高台には自然釉と考えられる付着物もみられる。

坏ｃ（109 ～ 113）　109 ～ 111.までは、口径は14.9 ～ 15.4cmを測る。112は高台の貼付け痕跡はあるものの高台が残存しない。110の高台は直立気味で接地面が広く、その他の高台はいずれも低く外方へ跳ね上げる形状を呈す。110・113の底部外面にはヘラ記号がみられる。また、底部から体部にかけての外面はいずれも丸みがみられる。底部切り離しは、109・110・113はヘラ切りで、その後109は櫛状の工具、110はナデによる調整される。111・112の底部は回転ヘラ切りで、112のみその後ナデによって調整される。

坏（114）　口縁部から体部にかけての破片。口径が14.0cmに復原される。体部下位は丸みを帯びる。焼成、還元ともにほぼ良好。

高坏×蓋3（115）　端部のみの小破片で細長い断面三角形を呈し、内外面ともに回転ナデで調整される。焼成、還元ともにほぼ良好。

土師器

坏×皿（116）　口縁部から底部の小破片。口縁部から体部までの内面は不定方向ナデで調整される。底部、体部外面の境には糸切り痕も観察でき、底部には下方に突出する形状もみられるため、高台を有する可能性もある。焼成はやや良好。

小皿ａ（117）　底径は7.4cmに復原される。底部は回転糸切りで、体部下位には粘土のしぼり痕も観察できる。

土製品

瓦玉（118）　直径が2.3 ～ 2.4cmを有すほぼ球状で、2㎜以下の白色砂を多く含む。色調は黒色だが、一部淡茶色もみられる。

２ＳＤ020灰黒色砂質土（図19）

須恵器

蓋3（119）　口縁端部は小さな断面三角形を呈す。口縁端部外面から内面にかけて、黒色化していることから、重ね焼きの可能性がある。焼成は不良で、還元はやや良好。胎土は緻密である。

坏（120）　口縁部から体部の小破片。胎土には1㎜以下の細かな白色砂粒をやや多く含む。調整不明な端部を除いて内外面とも回転ナデによる調整がみられる。

皿（121）　底部はヘラ切りで、他は内外ともに回転ナデ調整である。胎土には微細な黒色粒を多く含む。焼成、還元ともに良好。

土師器

坏ｃ（122）　高台のみの小破片。やや外傾した台形の形状を呈す。焼成が不良で、やや摩耗気味。胎土は緻密である。

２ＳＤ020灰色砂（図19）

須恵器

坏ｃ（123・124）　123は底部切り離しが不明瞭で、高台はやや外方に開き平坦面の接地面が広い。底部のみ破片で、底径は10.8cmに復原される。124については全体的に歪みが著しく、口径、底径の値は明瞭でない。高台はやや外向きと考えられるが歪みを伴なうため、これもまた明瞭でない。胎土には気泡が多く入り、破裂箇所も多くみられる。どちらも底部内面は不定方向にナデで調整される。

２ＳＤ020灰黒色砂（図19）

図20.2SX075出土木杭実測図(1)（S=1/4）

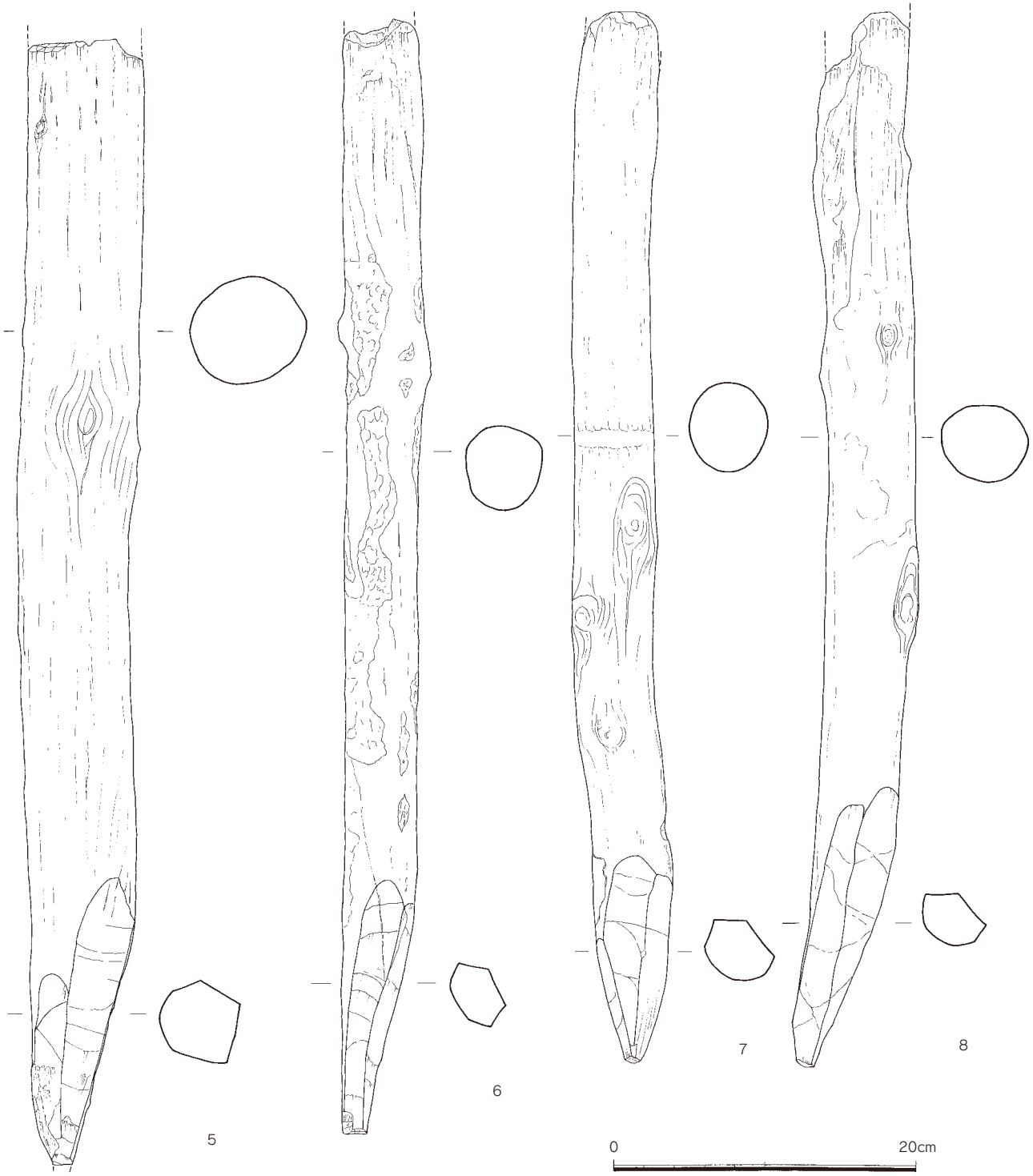


図21.2SX075出土木杭実測図(2)（S=1/4）

須恵器

小坏 c（125）　全体的に歪みが著しく、口径は不明瞭。高台はやや外方を向き、平坦面の外側が接地する台形を呈す。底部は回転ヘラ切りされ、底部内面には不定方向ナデの調整もみられる。胎土にはやや気泡も含まれ、大粒の白色砂粒が多く含み、やや粗い。

坏 c（126）　高台はやや丸みがあり、外方に跳ね上げる形状を呈す。体部下位は丸みを帯びる。底部はヘラで切り離し、その後ナデで調整されている。底部内面には不定方向ナデも観察できる。

２ＳＤ020暗灰色砂（図19）

須恵器

蓋3（127）　やや直立した断面三角形を呈す口縁端部。焼成、還元ともにあまり良好でなく、天井部外面は摩耗のため調整は不明。天井部内面には不定方向ナデの調整がみられる。

２ＳＤ020黒色砂（図19）

須恵器

坏×皿（128）　口縁部のみの小破片。内外面ともに回転ナデで調整される。焼成、還元ともに良好である。

土師器

蓋×高坏（脚部）（129）　口縁端部のみの小破片で、小さな断面三角形を呈す。焼成が不良で、摩耗が著しく、調整は不明瞭。

２ＳＤ020黒茶色土（図19）

須恵器

坏ｃ（130）　高台は貼付けられた痕跡があるものの高台そのものは欠損。底部は回転ヘラ切りされ、底部と体部の境は丸みを有す。焼成も還元も不良である。

坏（131・132）　どちらも口縁部から体部にかけての破片で、内外面ともに回転ナデ調整がされる。またどちらも焼成・還元ともに良好である。

２ＳＤ020黒色粘土（図19）

須恵器

蓋ｃ３（133）　扁平な擬宝珠のつまみが貼り付けられ、天井部外面は回転ヘラ削りされ、、一部には「×」印のヘラ記号も観察できる。口縁端部は小さな三角の形状を呈す。体部から天井部の内面にかけては、不定方向のナデもみられる

坏ａ（134）　口径13.4cm底径10.4cmを測る。底部は回転ヘラ切りで、体部は下位は丸みを有す。体部内面下位より上部が黒色に変化することから、重ね焼きされたと考えられる。

坏（135）　口縁部から体部までの破片で、口径が12.2cmに復原できる。内外面ともに回転ナデ調整で、焼成、還元ともにほぼ良好である。

２ＳＤ020暗灰色土（図19）

須恵器

坏ｃ（136）　底部はヘラ切りで、高台はやや外方を向き、平坦面の内側が接地四角い形状を呈する。底部と体部の境の形状にはやや屈曲がみられる。底部内面は不定方向ナデで調整される。色調の変化がみられることから、重ね焼きされたと推測できる。

土師器

坏（137）　口縁部の小破片。胎土に白雲母粒を多く含む。

2SX075（図20 ～ 25）

木製品

木杭

後述する2SX155とともに、2SF025を構成する護岸杭と考えられるもので、西側を2SX075、東側を2SX155として捉えている。50本の杭が確認され、全てを収集していた。その中で遺存状態がよいのもの26点について図化を行った。杭全長については、遺構検出面から上位にさほど堆積層が観察できていいないことから、杭上部が欠失している可能性が高い。したがって、埋没状況が深いものほど残存率が高いといえる。最も残存長を保持していたものは0.87mを測るもので、**図20**-1が該当する。いずれも自然木の先端を加工したもので、枝部分の払い落とし行為も行われている。先端加工において二者存在しており、前面を削り落とすものと、原木面を残し一部のみを削り落とすものがある。数量化した場合、後者が圧倒的に多い。

図21-7および**図22**-10は、杭上部において帯状に表面が浮き出ている箇所が観察でき、堰板が取り付けられ

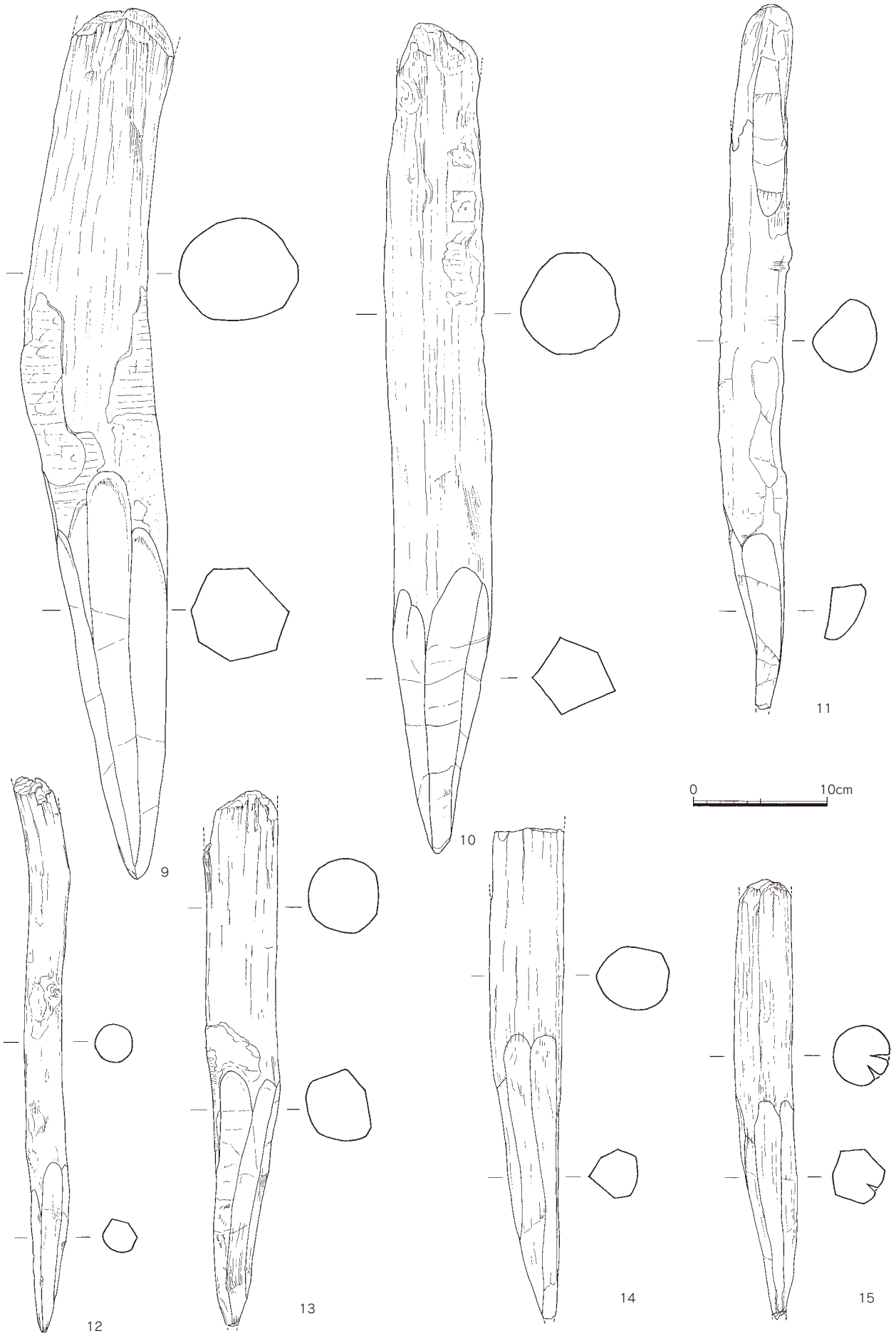


図22.2SX075出土木杭実測図(3)（S=1/4）

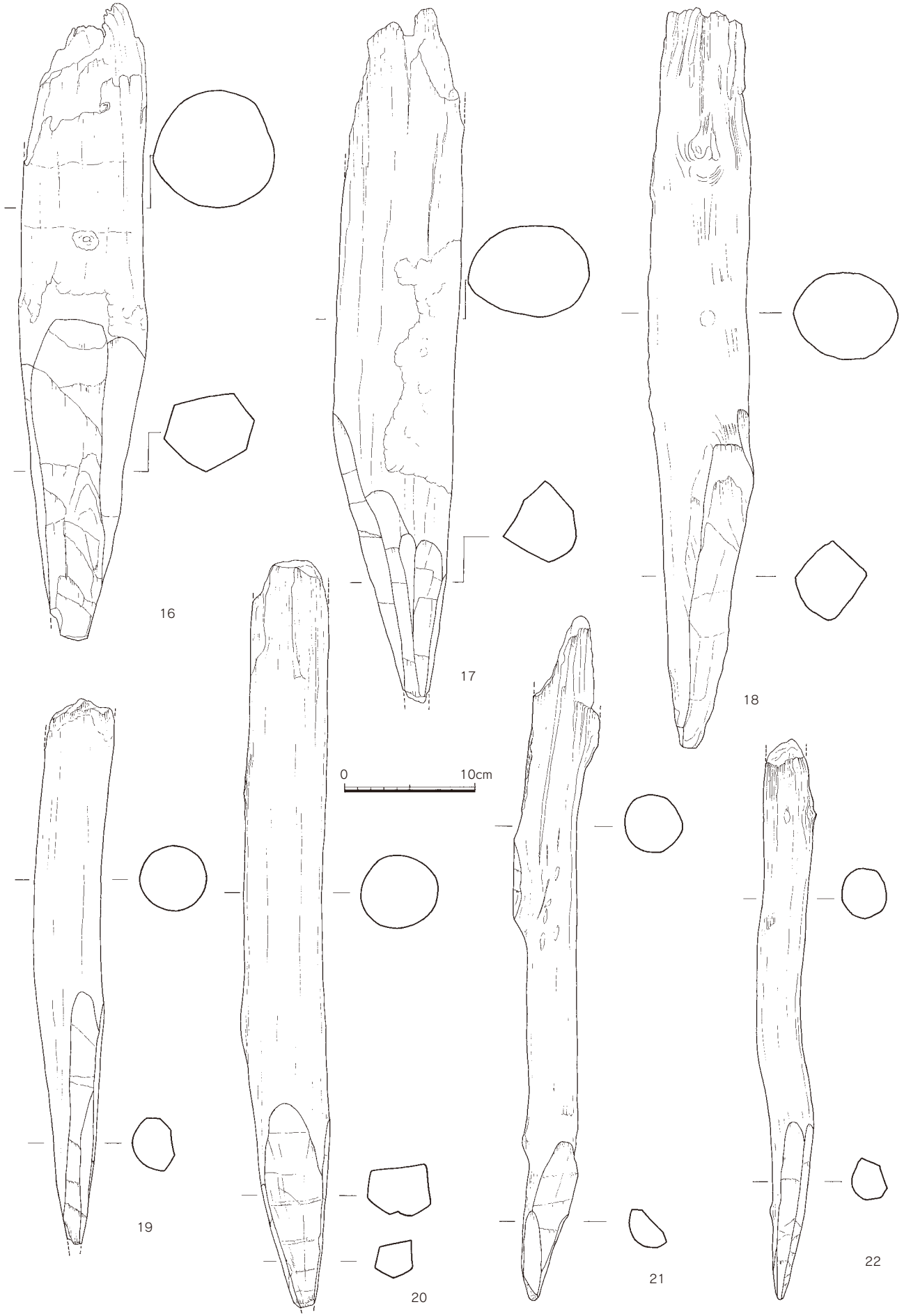


図23.2SX075出土木杭実測図(4)（S=1/4）

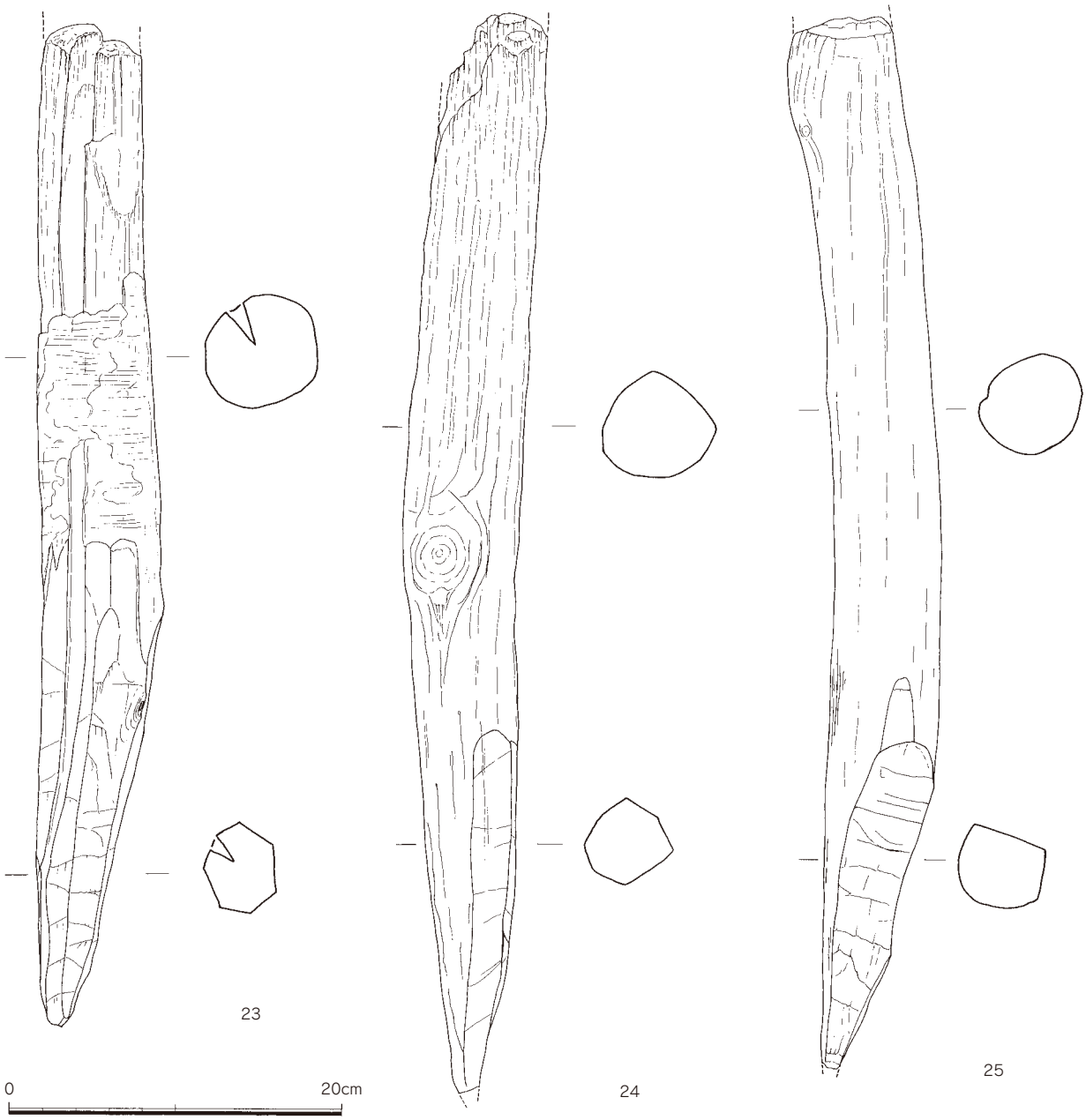


図24.2SX075出土木杭実測図(5)（S=1/4）

ていた箇所として想定できる。他のものについては観察できなかった。

2SX155（図25 ～ 27）

木製品

木杭

東側護岸として検出した杭列で、西側に比して18本を採集した。最も長いもので0.804mを測る(図25-28)。2SX075検出の木杭同様に、全周加工のものと一部加工の二者があるが、後者が卓越している。いずれも自然木を利用したもので、丁寧な加工痕が観察できるものはない。なお図化したものは2SX075同様に、残存状況が良好なもの13点を示し、2SX075出土杭の一部に観察できた、堰板留め痕跡と考えられる帯状の「縛り痕跡」は観察できていない。

2)溝出土遺物

2ＳＤ014（図28）

須恵器

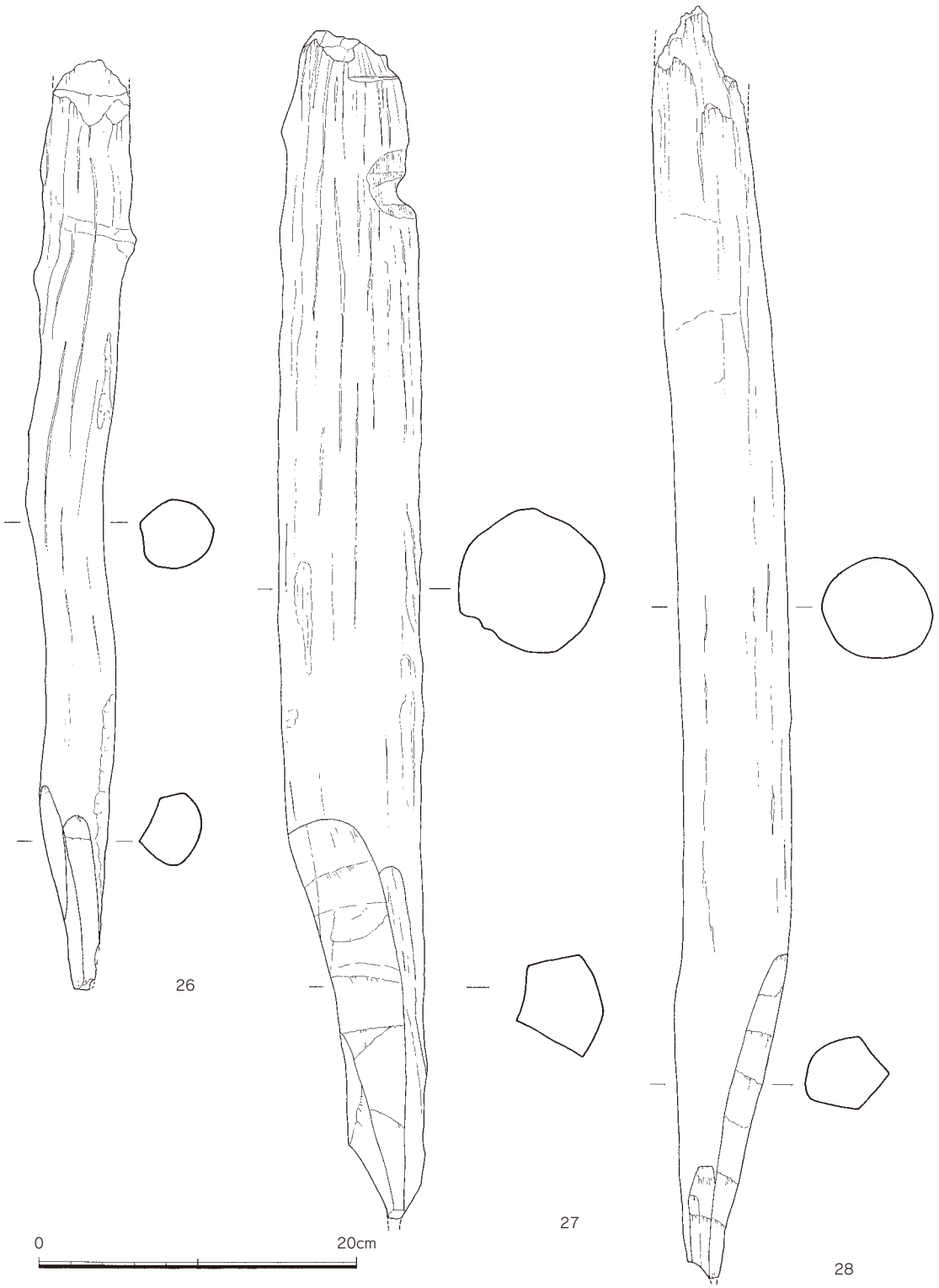


図25.2SX075・155出土木杭実測図(S=1/4)

蓋ｃ３（1）　扁平な擬宝珠のつまみと小さな断面三角形の口縁端部を有す。天井部外面は回転ヘラ削り、天井部内面は不定方向ナデで調整される。全体的に歪みが著しい。色調の変化がみられ、内面の一部には重ね焼き痕も観察できる。胎土には黒色粒が多く含まれる。

蓋3（2）　口縁部のみの小破片で、ごく小さな断面三角形の端部を有す。外面には工具痕もみられる。色調の変化が見られるので、重ね焼きした可能性がある。

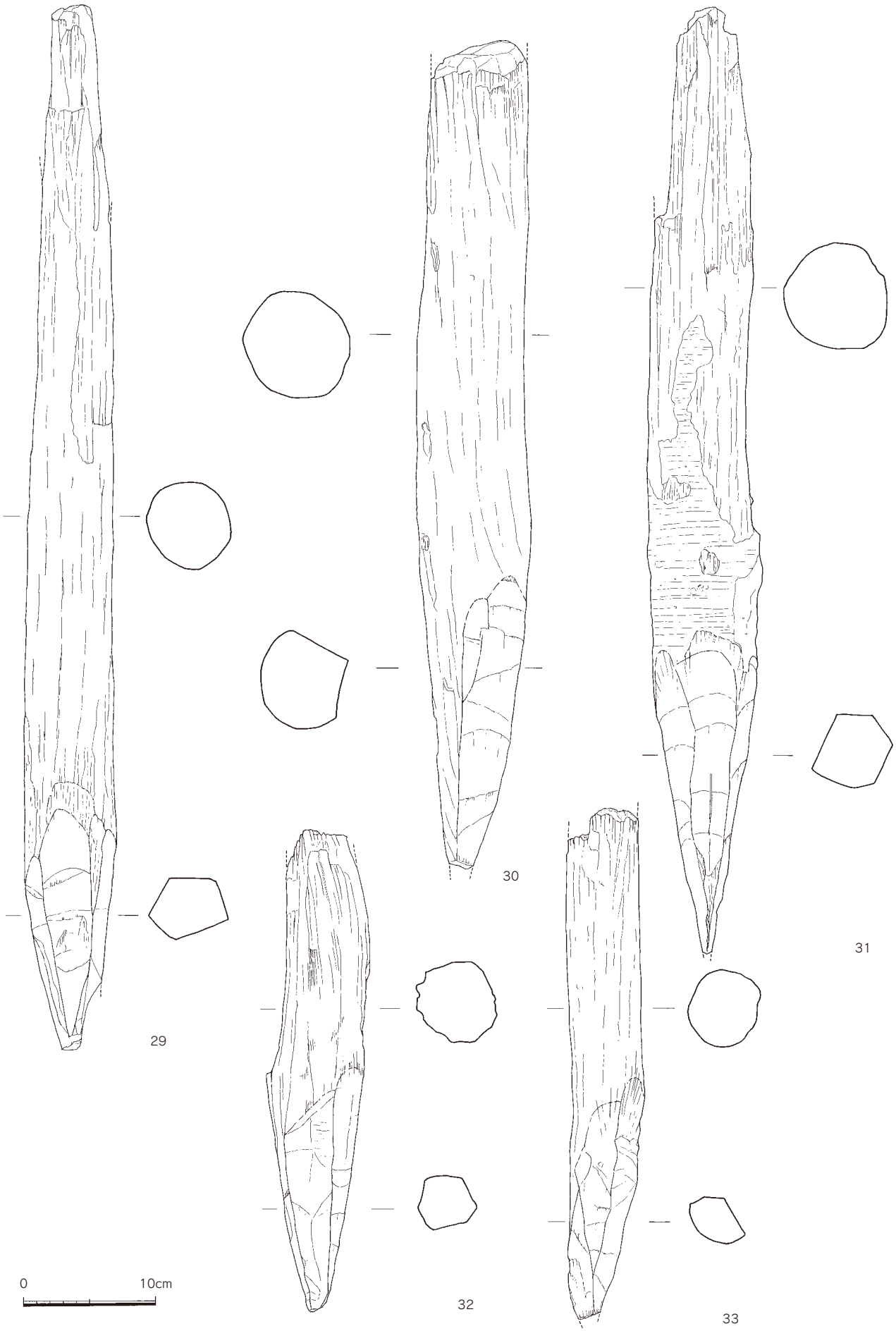


図26.2SX155出土木杭実測図(1)（S=1/4）

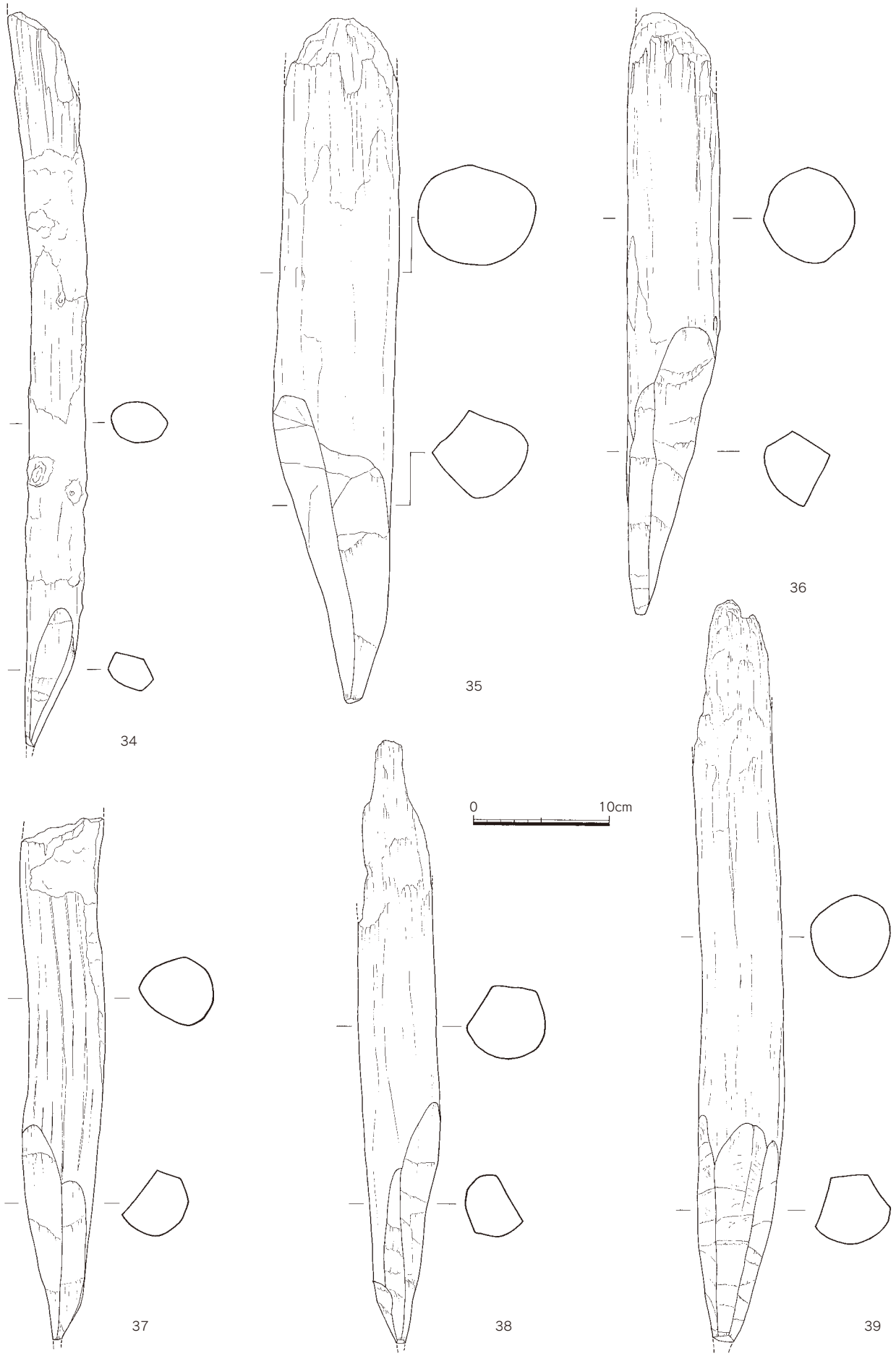


図27.2SX155出土木杭実測図(2)（S=1/4）

甕(3)　口径は17.8cmを測る。口縁端部の平坦面は外傾し、頸部にかけてやや外反する形状を呈す。焼成、還元ともに良好で、胎土も緻密である。

平瓶(4)　口縁部はやや外反し、口縁端部の厚みは薄い。口縁部から頸部の内面に暗黄灰色の自然釉がかかる。口径は7.8cm。焼成、還元ともに良好である。

石製品

叩石(5)　玄武岩製で、側面を中心に細かな叩き痕が多数観察できる。

２ＳＤ014灰色砂質土（図28）

須恵器

小壺(6)　高台は外方にやや跳ね上げる断面四角形で、底部は回転ヘラ削りされる。口縁部は小さく外反し、肩部が少々張り出すが体部はやや直線気味の形状を呈す。口径7.2cm、器高6.9cmを測る。

２ＳＤ017（図28）

須恵器

蓋3（7）　口径は14.1cmに復原され、口縁端部は断面三角形を呈す。内外面に色調の変化がみられるため重ね焼きされたと考えられる。焼成はほぼ良好だが、還元は不良。

坏ｃ(8)　高台はやや外に跳ね上げ、平坦面の内側に接地面を有す断面四角形を呈す。底部外面は回転ヘラ削り、体部下位から底部の内面は不定方向ナデで調整される。底部と体部の境界にはやや明瞭に屈曲が入る。

土師器

鉢(9)　口縁部は外方に大きく広がる形状を呈す。焼成不良で、調整の詳細は不明。

２ＳＤ060（図28）

白磁

器種不明(10)　微細な破片。素地に化粧土がみられないことから華南産と考えられる。内面、外面に乳白色に施釉され、貫入もみられる。

２ＳＤ060 灰色砂質土(図28)

土師器

丸底坏(11)　口縁部から体部の小破片。口縁端部の一部の調整が不明だが、他は内外面ともに回転ナデで調整される。焼成は良好。

２ＳＤ060 黒灰色土(図28)

瓦器

椀(12)　口縁部から体部の小破片。口縁部内外面に細かなミガキｃがみられるが、体部内外面の調整は不明。また口縁端部内面外面には黒色に変色する部分もみられる。

２ＳＤ060 黒色粘土(図28)

瓦器

椀ｃ(13)　高台はやや外方に向いた断面台形。口縁部内外面に若干ミガキｃがみられる
体部から底部にかけての調整はほとんど不明瞭である。口径は17.0cm復原される。

２ＳＤ095（図28）

須恵器

蓋3（14）　口径は13.8cmに復原される。口縁端部は断面三角形を呈し、天井部外面には回転ヘラ削り、天井部内面には不定方向ナデによる調整がみられる。

坏ａ(15・16)　15は口縁部が13.4cmに復原される。底部はヘラ切りされ、底部と体部の境目はやや丸みを帯びて屈曲し、口縁部までは直線状に外に開く形状を呈す。16の底部外面はヘラ切り後器面調整され、底部と体部の境は丸みを帯びる。底部内面には不定方向ナデもみられる。

小坏ｃ(17)　高台はやや外方を向く断面台形を呈す。底部は回転ヘラ切りされ、その後ナデで調整される。底部と体部外面の境には明瞭な屈曲がみられ、口縁部は外に大きく開く。また、底部外面には板状圧痕も観察で

きる。

坏ｃ（18 ～ 19）　18の高台はやや直立気味だが、平坦面は外方を向く断面四角形。底部はヘラ切りされ、底部内面は不定方向にナデで調整される。19の高台はやや外方に傾く断面四角形に貼付けされ、底部と体部外面の

図28.溝出土遺物実測図（S=1/3、1/4）

境にはやや明瞭に屈曲が入る。

坏(20)　底部は残存範囲が狭く、切り離しは不明。底部、体部の境目は成形時の粘土のはみ出しがややみられるものの、丸みを帯びた形状を呈す。

土師器

坏ｃ(21)　高台はやや外方に傾く断面四角形に貼付けされる。胎土には角閃石が含まれ、底部外面にはミガキａがみられる。

甕(22)　中島分類によれば、Ⅱ類に相当する。口縁部内面は細かな横方向の刷毛目、体部内面は削りによる調整がみられ、口縁部から体部外面にかけては縦方向の刷毛目がみられる。また、口縁部外面には粘土紐痕と、外面の一部に焼成によると考えられる色調の変化を観察できる(中島、2000)。

石製品

砥石(23)　灰緑色を呈す細粒砂岩製。三面にわたって図面軸上の縦方向、横方向に細かな擦り痕が多くみられる。

２ＳＤ095黒色粘土(図28)

須恵器

蓋(24)　口縁端部は内面に沈線はみられず、丸みのある形状呈す。天井部はヘラ切り。

甕(25)　口縁部は大きく外反し、肩部外面には横方向の平行叩き痕が観察できる。肩部内面に当て具痕もみられ、焼成は良好、還元は不良。

土師器

甕(26)　口縁部のみの小破片。摩耗した口縁端部を除けば、内外面ともにヨコナデによる調整がみられる。また、外面にはススの付着も観察できる。

２ＳＤ0145（図29・30）

弥生土器

甕(50)　口縁部のみの小破片。外側に「く」の字型に屈曲する形状で胎土には砂粒を多く含む。焼成は不良で、調整は不明。

壺(59)　口縁部のみの小破片。焼成不良で、摩耗のため焼成は不良である。

器台(60)　筒型の大型器台と考えられ、口縁部の1/4程度の残存。口径は17.4cmに復原される。内外面ともにヨコナデで調整され、外面の一部が暗灰色に変色する。

古式土師器

小高坏(36)　脚部のみの資料。焼成がやや不良で、外面は摩耗のため調整不明。内面上位は削り後不定方向ナデで調整され、指頭圧痕もみられる。内面中位は横方向の削り、下位はヨコナデの調整が観察できる。

高坏(27・28・37 ～ 46)　内面はどちらも横方向の刷毛目が観察できるが、外面は27が縦、28が横方向の刷毛で調整される。27は口縁部と体部の境に屈曲を有す。28は27と同様に大きく外反する口縁部である。27は内外面、28は内面に黒色に変色する部分が観察できる。37は脚部のみで1/2程度残存。下位には二箇所穿孔が観察でき、内面は縦方向のナデ、外面は縦方向のミガキで調整され、胎土には金雲母片を多く含む。38 ～ 46は坏部の破片資料である。39は内外面とも横方向の細かな刷毛調整後、縦方向のミガキがみられる。40の口縁端部内面には沈線がみられる。41の内面の一部に横刷毛がみられる他は内外面とも縦方向ミガキによる調整。42の内面には黒色化し、44・46は外面にススが付着する。43の外面は暗文状のミガキと内面は不定方向ナデがみられ、45は内面が縦方向のミガキ調整。46は内外面とも横方向に5 ～ 6条を一単位とする刷毛目調整。内面はその後縦方向のミガキが施される。37・38・40・44 ～ 46は砂粒をやや多く含む胎土である。

甕(47 ～ 49・51 ～ 54)　47 ～ 50は口縁部から頸部の小破片。47は外面に指頭圧痕、48は頸部外面に突帯が貼付けられる。49は胎土に砂粒が多い。51は全形が明らかなもので、底部内面と口縁部から体部外面にスス痕が観察でき、全体の3/4程度が残存する。底部は丸底で、内外面とも刷毛目がみられるが、外面に部分的に平行叩痕もみられる。52は底部のみで外面下位には刻み目がみられる。53は口縁部から体部の1/2程度の残存破

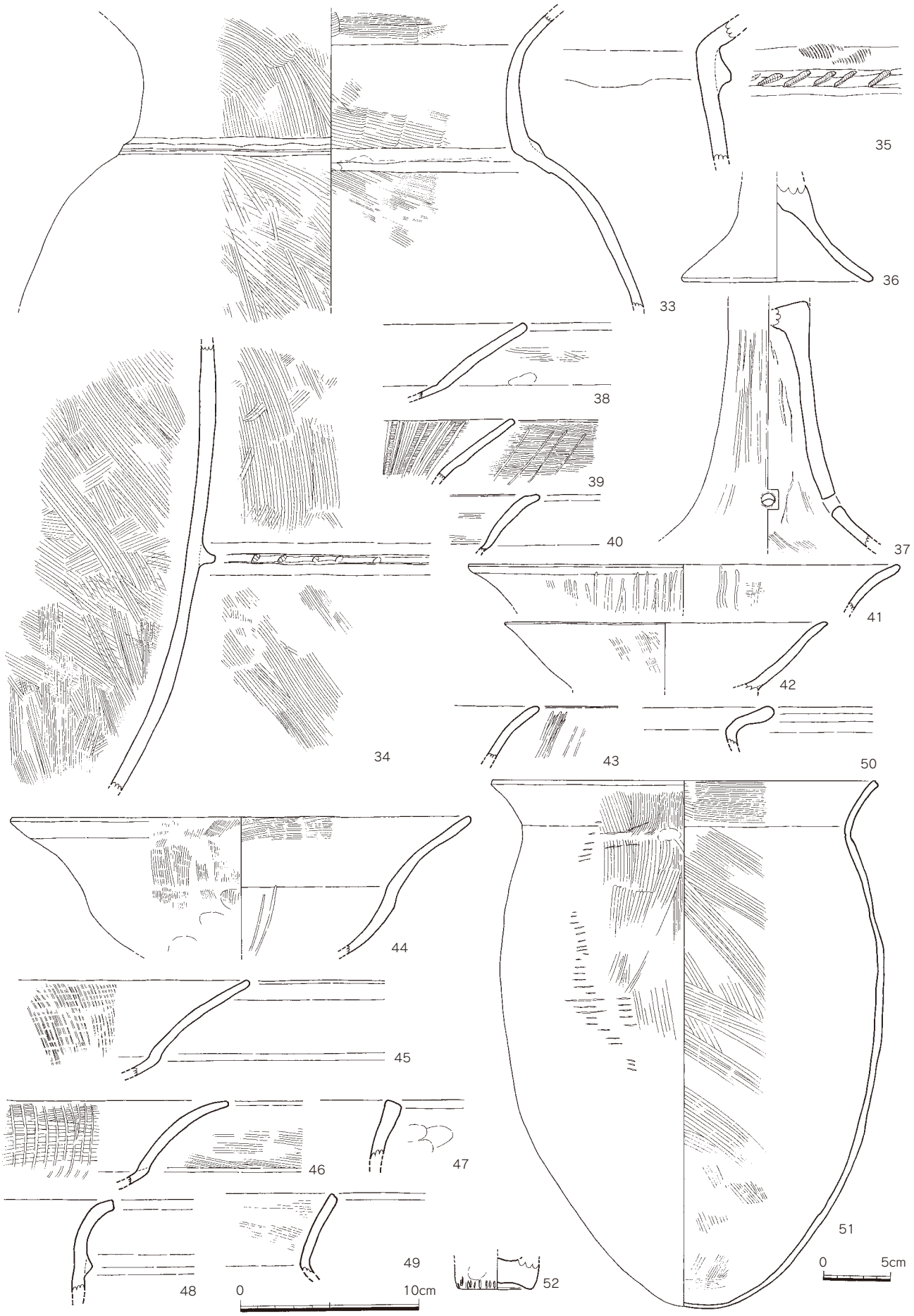


図29.2SD145出土遺物実測図(1)（S=1/3、1/4）

片。内面が4条と6条を一単位とする二種類の刷毛、外面が4条を一単位とする刷毛で調整される。54は体部のみの残存。外面に突帯が貼付けられ、内外面は6 ～ 7条が一単位の刷毛目と黒色化がみられる。

大形甕（34・35・55・56）　34は頸部、35は体部の小破片である。34は体部外面中位付近に刷毛で装飾された刻み目のある突帯が貼付けられる。外面上位が縦方向、その他内外面は不定方向に刷毛で調整される。35も頸部と口縁部外面の境に刷毛で装飾された刻み目を有す突帯が貼付けられ、口縁部付近に一部刷毛調整がみられるものの、内外面はヨコナデで調整される。頸部上位から口縁部にかけての内面には黒色化もみられる。いずれも胎土には微量ながら白雲母片が含まれる。55・56は体部の小破片で、いずれも突帯が貼り付けられ、その突帯には55が三角形状、56が斜め線状の刻み目が施される。55は内面が不定方向の刷毛目、外面が平行叩目、

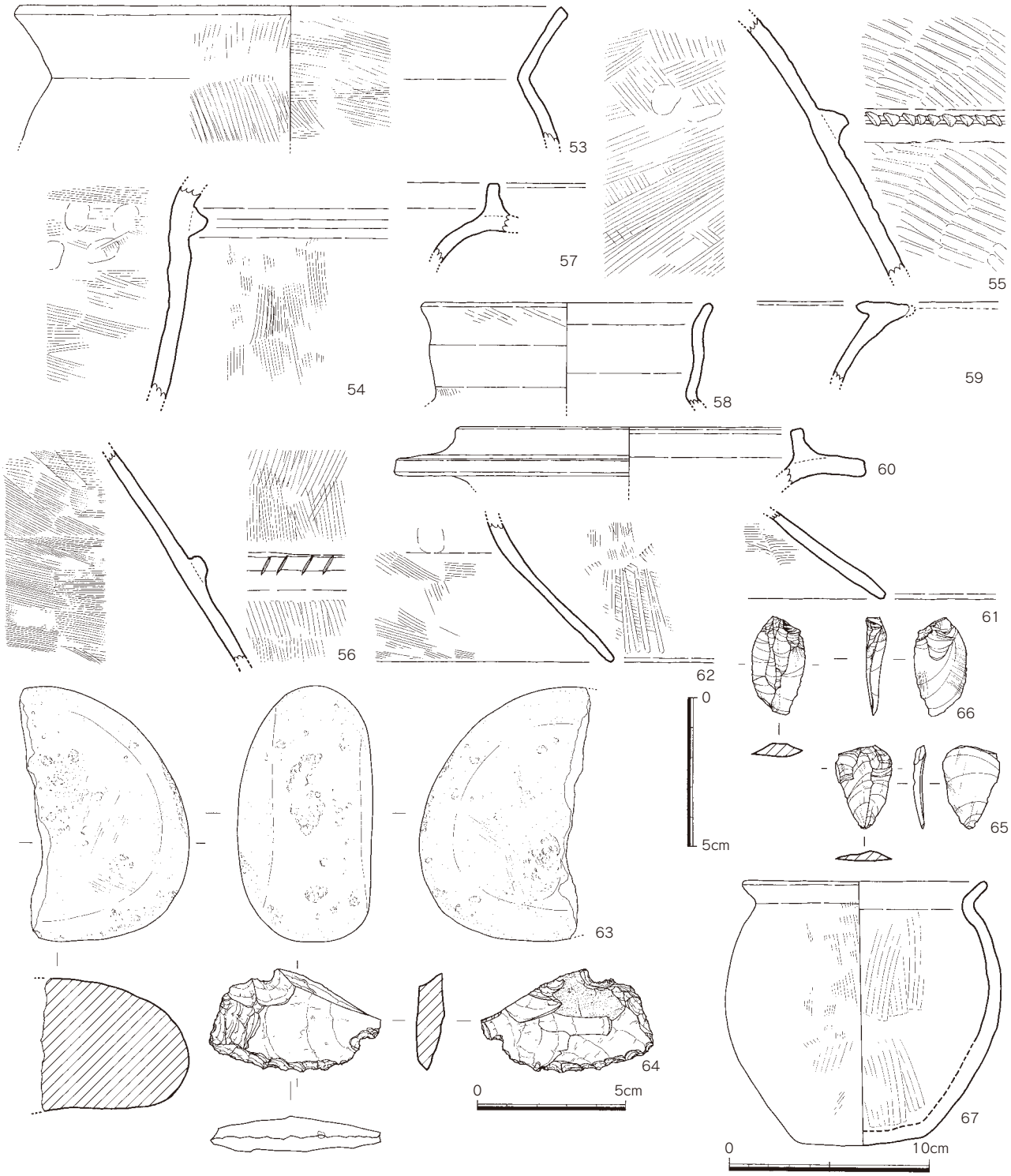


図30.2SD145出土遺物実測図（2）（S=1/2、1/3）

56の内面が横方向の刷毛目、外面に縦方向刷毛目が観察できる。

壺(30 ～ 33・58)　30・32は外面に縦方向、内面に横方向の刷毛で調整され、31は内外面ともにヨコナデで調整される。30 ～ 32はいずれも口縁部平坦面が外傾した形状を呈し、31・32の口縁部と体部外面の境には屈曲の線がみられる。33は頸部外面に貼付け突帯を有し、口縁部内面には横方向刷毛目、その他内外面に斜め方向の刷毛目が観察できる。58は焼成が良好で、胎土は緻密。口縁部外面に斜め方向、体部外面に縦方向の刷毛目が観察できる。

二重口縁壺(29・57)　29の口縁部は鋭く「く」の字状に屈曲し、屈曲部内面には屈曲の際に生じたと考えられる線が観察できる。また摩耗のためあまり明瞭ではないが、口縁部内面上位は横方向の刷毛、その他内外面は不定方向に刷毛で調整される。57は口縁部の小破片。内面下位には不定方向ナデ、口縁端部外面がヨコナデで調整される他は、摩耗のため調整が不明瞭である。

脚部(61・62)　61は内面を横方向の刷毛で調整されるが、外面は摩耗のため調整は不明。62は内外面ともに6条を一単位とする刷毛調整され、外面のみはその後縦方向のミガキで調整される。いずれも胎土は緻密。

石製品

敲石(63)　安山岩製で、側面と平面の一部に敲打痕がみられ、全面に擦り痕と推測される部分もみられるが、摩耗のため判然としない。重さは277ｇを測る。

石匙(64)　サヌカイト製。刃部は細かな剥離で仕上げられている。

石鏃(65)　黒曜石製。刃部は作り出されておらず、未完製品と考えられる。

剥片(66)　黒曜石製。人為的な剥離はみられない。長さ3.3cm幅1.7cm厚さ0.45cmを測る。

２ＳＤ0145灰色砂(図30)

古式土師器

小甕(67)　完形資料。内外面ともに縦方向の刷毛で調整されるが、外面の方が細かい。口縁部と外面の一部にはススが付着する。全体的に摩耗が著しい。

3)河川出土遺物

２ＳＤ015茶灰色砂質土(図31)

須恵器

小蓋ｃ３（1）　全体の1/5程度の破片資料。口縁端部は体部との境が明瞭でない断面三角形を呈す。やや扁平なボタン状のつまみを有し、天井部外面はヘラ切り後ナデで調整され、天井部内面には不定方向ナデがみられる。色調の変化から重ね焼きの可能性あり。

蓋ｃ３（2）　1/4程度の破片資料。口縁端部は丸みのある断面三角形を呈す。つまみには工具痕がみられる。天井部外面はヘラ切り後ナデ調整される。

蓋ｃ(3)　天井部のみの小破片。高めの擬宝珠状のつまみを有す。天井部内面には不定方向ナデがみられる。焼成はやや不良で還元は良好。

蓋3（4 ～ 7）　4・5は口縁部から体部の小破片。4・5とも口縁端部は細長く丸みのある断面三角形で、どちらも焼成、還元ともに良好である。5の胎土には微細な黒色粒が多く含まれる。6・7は口縁部から天井部までの破片資料で、どちらも口縁端部は丸みを帯びた小さな断面三角形を呈す。6は摩耗が著しく調整が不明瞭。7の天井部外面は回転ヘラ削り後、不定方向ナデで調整される。

壺蓋(8)　天井部外面は回転ヘラ削りされ、天井部内面は不定方向ナデで調整される。内面には火だすきが観察できる。

坏身(9)　受部は小さく、口縁端部の方が長い形状を呈し、底部外面は回転ヘラ切りされ、体部は回転ヘラ削りされる。底部内面は回転ナデ後不定方向ナデで調整される。

坏ａ(10)　底部は回転ヘラ切り後ナデで調整され、底部と体部の境はやや丸みを帯びる。底部内面は回転ナデ後不定方向ナデで調整される。

坏ｃ(11・12)　11はやや外に開いた、断面台形の低い高台を有す。全体の1/8程度の残存資料である。12は

底部から体部の小破片で、外にやや跳ねた高い高台を有す。摩耗のため、調整は不明瞭。

坏（13）　口縁部のみの小破片。口縁端部がやや薄い。胎土は大粒の白色砂粒を多く含む。

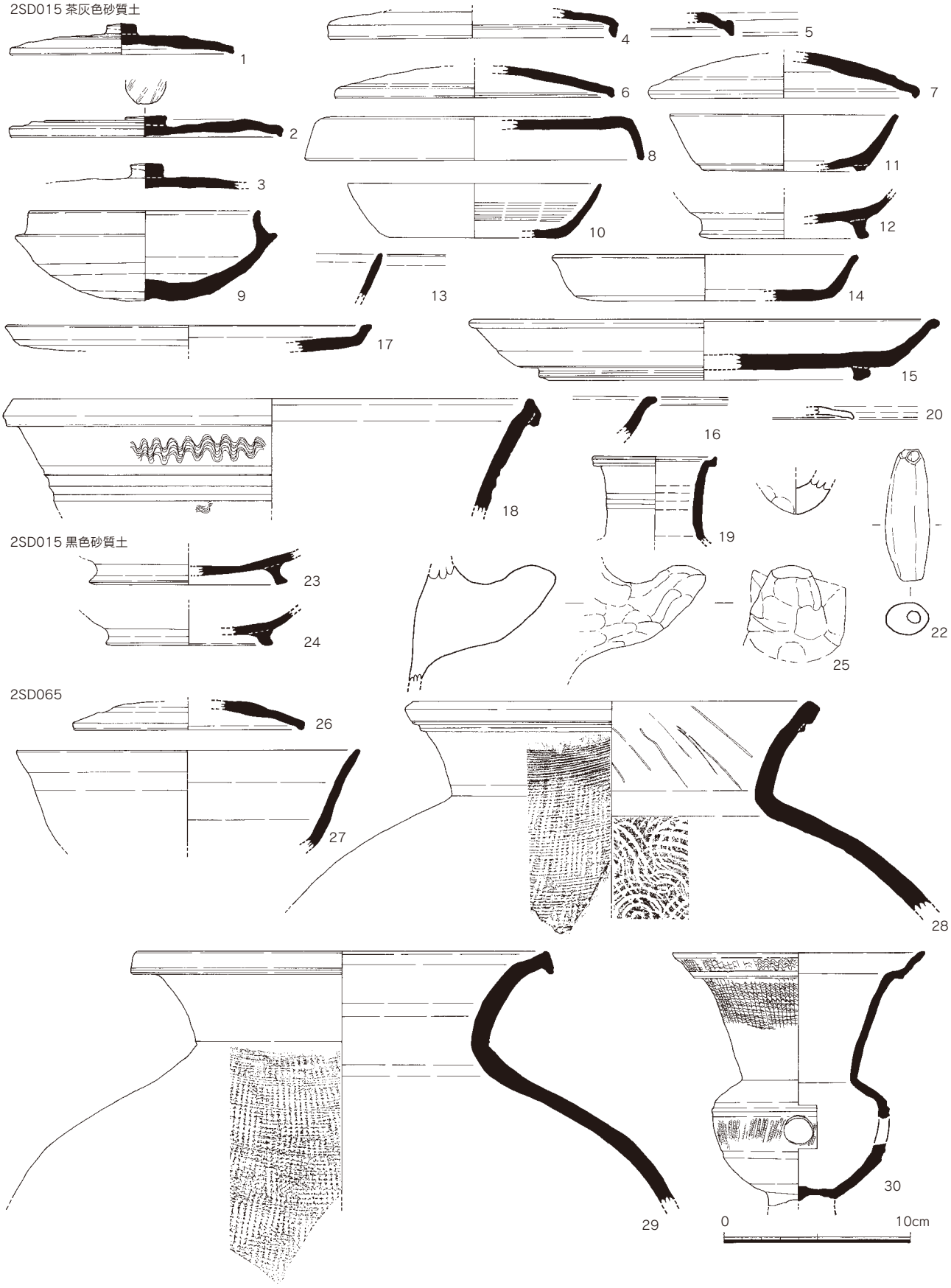


図31.河川出土遺物実測図（1）（S=1/3　土錘：1/2）

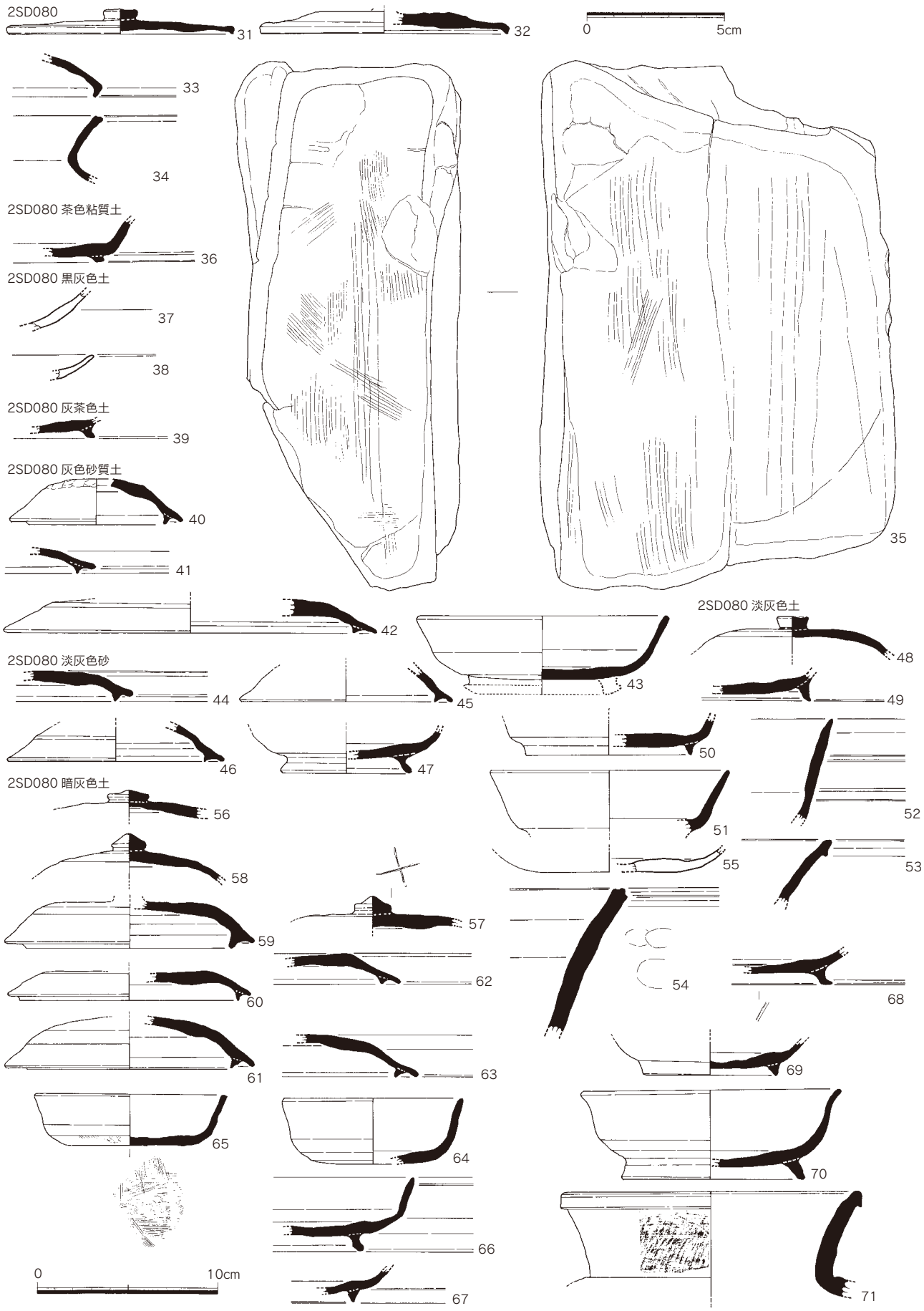


図32.河川出土遺物実測図(2)（S=1/3 砥石：1/2）

皿ａ（14）　全体の約1/5の残存で、底部外面は回転ヘラ削りされ、底部内面は回転ナデ後不定方向ナデで調整される。

大皿ｃ（15・16）　やや外に跳ねた断面四角形の高台を有し、底部外面は回転ヘラ削りされ、底部内面は回転ナデ後不定方向ナデで調整される。口縁端部は外方に屈曲する。16については、口縁部のみの小破片で15との接合箇所は確認できないものの、口縁部の形状が極めて近似しており、15と同一個体の可能性があるため、同一項目で解説を行なった。

高坏（17）　坏部のみの残存で、底部は回転ヘラ切り。底部内面には不定方向ナデもみられる。口径は19.6cmに復原される。

甕（18）　口縁端部は断面台形状を呈し、頸部外面には沈線と波状文がみられる。焼成、還元ともに良好。

長頸壺（19）　口縁部がわずかに残るもので、口縁端部は外方に「く」の字に折れ曲がり、頸部外面には4条の沈線もみられる。焼成、還元ともに良好。

土師器

蓋3（20）　口縁端部は丸みを帯び、やや下方に折れ曲がる。摩耗のため調整不明瞭。

製塩土器

焼塩壺（21）　底部のみの残存。胎土には砂粒を多く含む。内面はナデで調整され、外面は指頭圧される。焼成良好。

土製品

土錘（22）　長さ7.0cm、最大径2.3cmを測る。重さは27.2ｇ。胎土には砂粒が多く、外面には焼成による色調の変化がみられる。調整は不明。

２ＳＤ015黒色砂質土（図31）

須恵器

坏ｃ（23・24）　どちらも底部のみの残存で、高台は外方に傾く形状を呈す。また、いずれも底部は回転ヘラ切りで、23のみその後回転ナデで調整される。

土師器

甕×甑（25）　把手のみの残存。指頭圧痕で成形される。胎土には雲母を多く含む。

２ＳＤ065（図31）

須恵器

小蓋3（26）　1/4程度の残存破片。口縁端部は断面が丸い三角形を呈し、天井部外面は回転ヘラ切り後ナデで調整される。天井部内面は不定方向ナデがみられる。

坏×椀（27）　口縁部から体部の小破片。口径は18.4cmに復原される。程度は緻密で、焼成、還元ともに良好。

甕（28・29）　28は口縁端部下位に凹凸がつけられ、頸部内面にはヘラで斜線がつけられるが、ヘラ記号もしくは文様かどうかは判然としない。29は口縁端部がやや大きく外方に開く断面三角形を有す。いずれも体部外面は平行叩後カキ目調整され、体部内面は同心円状叩の後28は回転ナデ、29はナデ調整がみられる。

子持ち壺（30）　口縁部と頸部外面上位には細かな波状文と、体部外面中位には穿孔が一ヶ所と縦方向に櫛状文がみられる。また、体部外面上位には沈線も観察できる。体部はほぼ完形で口縁部から底部にかけて3/4程度残存。脚部はほぼ欠損している。台付瓶の可能性もある。

２ＳＤ080（図32）

須恵器

蓋ｃ3（31・32）　31は扁平な擬宝珠状のつまみを有すが、32につまみは残存せず、貼付け時の回転ナデ調整が残るのみである。いずれも天井部外面は回転ヘラ切りされ、31のみ回転ヘラ削り調整もみられる。いずれも口縁端部は小さな断面三角形を呈す。

蓋3（33）　口縁部から体部の小破片。口縁端部はやや細長い断面三角形で、体部内面には不定方向ナデが確認できる。胎土は緻密で焼成、還元ともに良好。

甕（34）　口縁部から頸部の小破片。口縁部と体部の境は外方に「く」の字に折れ曲がる。胎土には微細な白色砂粒を多く含み、焼成、還元ともに良好。

石製品

砥石（35）　緑味のある淡灰色を呈す細粒砂岩製。2面に不定方向のすり痕が確認できる。

２ＳＤ080茶色砂質土（図32）

須恵器

坏ｃ（36）　高台はやや外方に跳ねる断面四角形で、底部外面は回転ヘラ切り後回転ナデ調整される。底部と体部の境はやや丸みを帯びた形状を呈す。

２ＳＤ080黒灰色土（図32）

土師器

丸底坏（37）　体部のみの小破片で摩耗が著しい。

小皿ａ（38）　口縁部から底部の小破片。内面は回転ナデ調整が見られるが、外面は摩耗のため調整不明瞭。胎土は緻密で焼成不良である。

２ＳＤ080灰茶色土（図32）

須恵器

坏ｃ（39）　高台は外方に傾く断面台形状を呈す。焼成、還元ともに不良で、調整は摩耗のため不明瞭である。

２ＳＤ080灰色砂質土（図32）

須恵器

小蓋1（40）　かえりは口縁端部より僅かに下方に出る。天井部内外面は不定方向ナデで調整されるが、外面は打ち欠きされ天井部のほぼ中央部には穿孔もみられる。

蓋1（41）　口縁部から天井部まで約1/8残存。かえりの方が口縁端部よりわずかに下方に出る形状を呈す。天井部外面は回転ヘラ削りされる。

大蓋1（42）　口径20.6cmを測る。かえりと口縁端部は同一面で接地し、広い天井部の外面は回転ヘラ削りされる。1/6程度の残存資料である。

坏ｃ（43）　底部は回転ヘラ切りで、高台は残存しないが、貼付け時の回転ナデ調整がみられる。底部と体部の境は丸みを帯びる。口径は13.9cmに復原される。

２ＳＤ080淡灰色砂（図32）

須恵器

蓋1（44 ～ 46）　44は口縁端部よりかえりが僅かに下方に出る形状を呈すため、45.・46よりも古い時期と考えられる。また、天井部外面は回転ヘラ削りされる。45・46の口縁端部とかえりはどちらも同一面に接地し、46の胎土には黒色粒が多く含まれる。

坏ｃ（47）　底部は回転ヘラ切り後不定方向ナデで調整される。高台はやや高めの外方に傾く丸みの強い断面長方形を貼り付ける。底部と体部の境は丸みを帯びる。

２ＳＤ080淡灰色土（図32）

須恵器

蓋ｃ（48）　やや高めの擬宝珠状のつまみが貼り付けられ、天井部外面は回転ヘラ切り後回転ヘラ削りによって調整される。口縁端部は欠損。

坏ｃ（49 ～ 51）　49・50は底部の破片で、49はやや外向き、50はほぼ直立する断面三角形の高台を有す。49の底部は回転ヘラ切りされるが、50は摩耗のため調整不明。51は口縁部から体部の小破片だが、体部外面下位には高台貼り付けに伴なう回転ナデ調整が見られることから、高台を有していたと考えられる。

椀×鉢（52）　高台から体部の小破片。体部外面には4箇所沈線がみられる。焼成、還元ともに良好。

甕（53・54）　いずれも口縁部から頸部の小破片。53は断面台形、54は一条の突帯を有す口縁端部である。いずれも焼成、還元ともに良好で、54の胎土には黒色粒を多く含む。

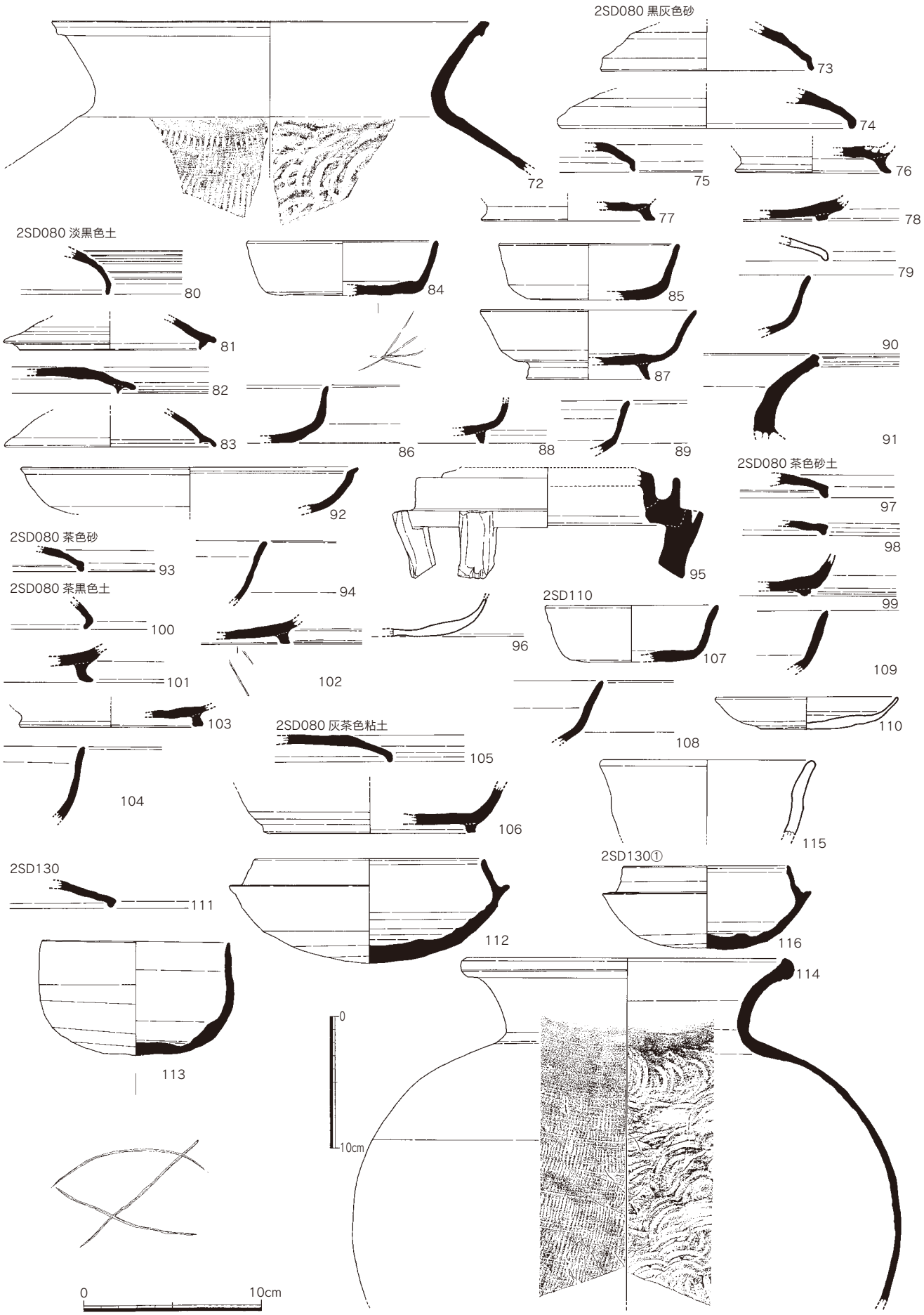


図33.河川出土遺物実測図(3)（S=1/3）

黒色土器A類

坏×鉢(55)　底部のみ1/4程度残存。底部内面に回転ナデと考えられる痕跡がみられるが、全体的に摩耗が著しく、調整は不明瞭である。

２ＳＤ080暗灰色土(図32・33)

須恵器

蓋ｃ(56 ～ 58)　56・57はいずれも乳頭状、58は扁平な擬宝珠状のつまみを有す。いずれも天井部外面は回転ヘラ削りされる。また、57の天井部外面には「×」印のヘラ記号も観察できる。

蓋ｃ１(59)　口縁端部はかえりが下方に張り出しており、つまみは残存しないものの、つまみ貼り付けの回転ナデが残ることから蓋ｃ１とした。天井部外面は回転ヘラ切りされ、回転ヘラ削り調整もみられる。

蓋1(60 ～ 63)　60 ～ 61はわずかにかえりの方が下方に張り出すが、62にはかえりと口縁端部は同一面に接地する。また60 ～ 62の天井部外面は回転ヘラ切りされ、61と62の天井部外面には回転ヘラ削り調整もみられる。62の天井部外面にはヘラ記号と考えられる痕跡も残るが明瞭ではない。

坏ａ(64・65)　64の底部は回転ヘラ切り痕が残る。65の底部外面は不定方向の刷毛で調整され、一部に回転ヘラ削り調整されている。いずれも底部と体部の境目はやや丸みを帯びる。

坏ｃ(66 ～ 70)　直立する高台の67を除いて他はいずれも外へ跳ね上げ、66は丸みが強い断面四角形で、67・69が断面三角形、68・70は断面四角形の高台を有す。摩耗の著しい67を除き、底部は回転ヘラ切りされると考えられるが、66に関しては明瞭でない。66・70の形状は金属製品を模倣しており、66に関しては重ね焼きの可能性が考えられる。また、68の底部外面にはヘラ記号観察できる。

甕(71・72)　いずれも口縁部から頸部の約1/6残存。71の口縁端部は肥厚せずに外方に屈曲する。口縁部から頸部外面は平行叩き後、回転ナデで調整される。72も外面は平行叩きがみられ、内面には同心円状の当て具痕がみられる。口縁端部は断面長方形に肥厚する。

２ＳＤ080黒灰色砂(図33)

須恵器

蓋3(73 ～ 75)　いずれも断面三角形の口縁端部だが丸味を帯びており、73・75に関してはやや細長い形状である。73・75のみ天井部と考えられる部位まで観察出来るが、調整は不明瞭。73・74の口径はそれぞれ12.0cm、16.8cmに復原される。

坏ｃ(76 ～ 78)　両者ともやや外方に跳ね上げる高台を有し、76・77は細長く丸みを帯びた断面台形で、78は低い断面長方形を呈す。77・78は回転ヘラ切りで、78はその後回転ナデで調整される。いずれも底部のみの残存資料。

土師器

蓋3(79)　口縁端部は丸みを帯びた断面三角形。焼成不良で摩耗のため調整不明瞭である。

２ＳＤ080淡黒色土(図33)

須恵器

坏蓋(80)　口縁端部内面には沈線は見られないが、口縁部から体部外面にかけて沈線が多く観察できる。胎土は緻密で焼成、還元ともに良好である。

蓋1(81 ～ 83)　80・81はかえりが下方に張り出すが、82はかえりが小さく口縁端部の方が下方に出る形状を呈す。81の天井部外面は回転ヘラ削りされる。83は焼成がやや不良であるが、その他は良好。還元はいずれも良好である。

坏ａ(84 ～ 86)　84・86は回転ヘラ切り後ナデで調整されるが、85は切り離し不明。いずれも底部と体部の境は丸みを帯びていて屈曲はみられない。また84の底部外面にはヘラ記号が観察できる。

坏c(87・88)　いずれも高台は断面台形で87の方は細くて長い。87は回転ヘラ切り後ナデで調整されるが、88は不明瞭。底部と体部の境目はどちらも丸みを帯びる。

坏(89・90)　いずれも口縁部から体部の小破片。89の体部下位はやや屈曲がみられ、内面には色調の変化が

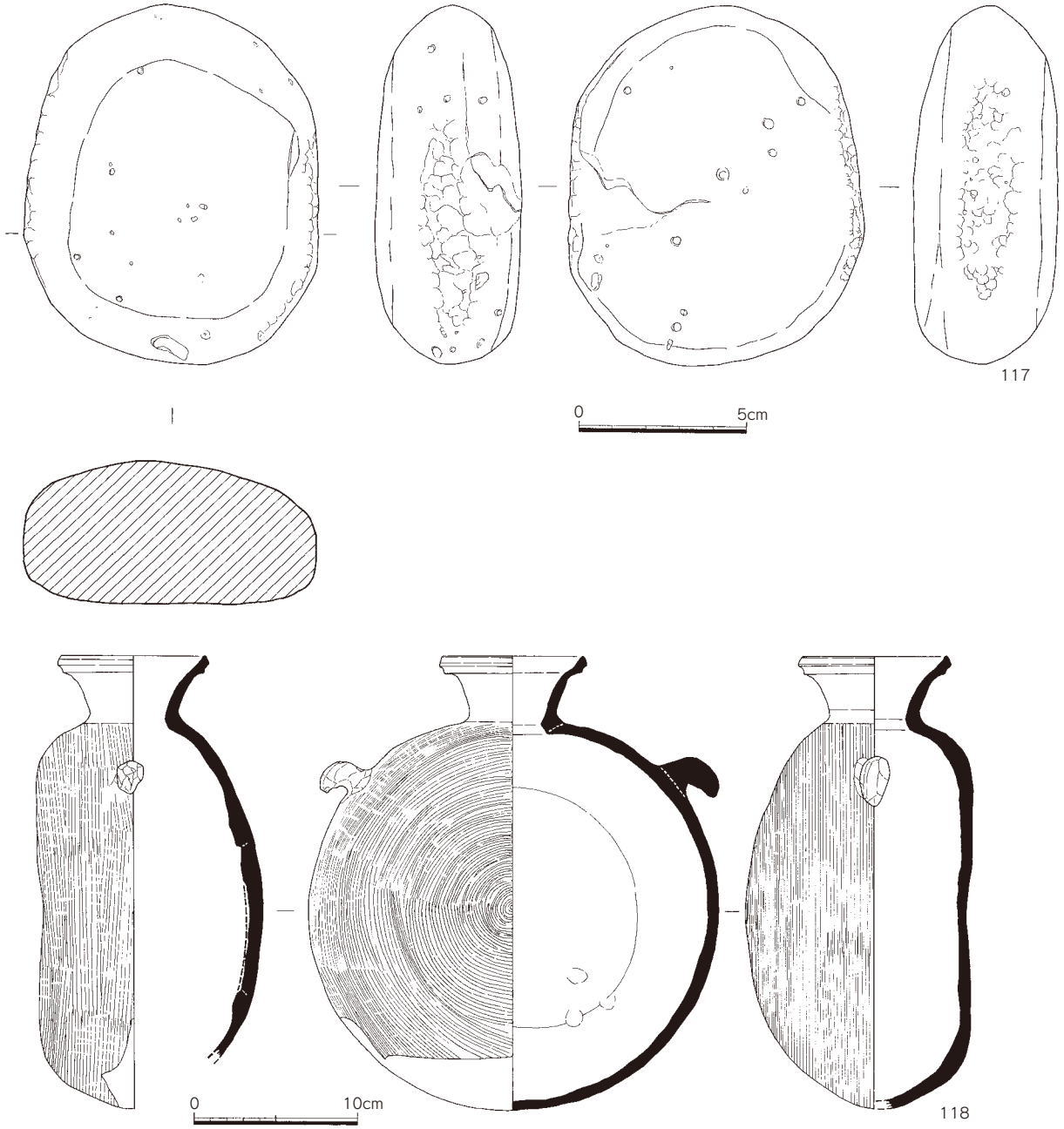


図34.河川出土遺物実測図(4)（S=1/4　叩石：1/2）

みられるため重ね焼きされたと考えられる。90の体部は丸味を帯びる他は摩耗のため詳細不明である。

甕(91)　口縁部から頸部の小破片。口縁端部は凹凸を有し、頸部内面には接合痕がみられる。胎土は緻密で、焼成、還元ともに良好。

盤(92)　口縁部から底部の小破片。口縁端部に内傾気味の平坦面を形成し、体部から底部にかけて丸みを有す。底部切り離しは不明だが、ナデの調整がみられる。焼成、還元ともに良好。

２ＳＤ080茶色砂(図33)

須恵器

蓋3（93）　天井部外面は回転ヘラ削りされ、天井部内面と体部外面は不定方向ナデで調整される。口縁端部は丸みのある小さな断面三角形を呈す。

坏(94)　口縁部から体部の小破片。体部外面下位には回転ヘラ削り調整がみられる。胎土は緻密で焼成、還元ともに良好。

獣脚硯(95)　獣脚は一脚残存し、脚部上部には円錐状の穿孔がみられ、脚部は手持ちヘラ削りされる。胎土は緻密で黒色粒を多く含む。焼成、還元ともに良好。

土師器

坏×皿(96)　底部の小破片。外面は回転ヘラ切りされ、板状圧痕も確認できる。焼成不良でその他の調整は不明瞭。

２ＳＤ080茶色砂2（図33）

須恵器

蓋3（97・98）　どちらもやや丸みのある断面三角形の口縁端部を有す。97は天井部外面に回転ヘラ削りがみられ、98は外面に色調の変化が観察できるので重ね焼きされたと考えられる。どちらも焼成、還元ともにほぼ良好。

坏ｃ(99)　高台は外方に向いた低めの断面台形で、底部は回転ヘラ切り。底部と体部の境にはやや明瞭に屈曲が入る。底部内面には不定方向ナデの調整もみられる。

２ＳＤ080茶黒色土(図33)

須恵器

蓋3（100）　口縁部の小破片。口縁端部は断面がやや細めの三角形を呈す。2SD080の33と同一個体の可能性が考えられる。

坏ｃ(101 ～ 103)　いずれも底部の小破片。高台は101・102がやや外向きで、103がほぼ直立した断面四角形を呈す。底部外面は102・103が回転ヘラ切りされ、102はその後回転ナデ調整される。101は摩耗のため詳細不明。また102の底部外面にはヘラ記号も観察できる。

坏(104)　口縁部から体部の小破片。体部内面下位には不定方向ナデの調整がみられる。胎土には白色砂粒や気泡がやや多く含まれる。

２ＳＤ080灰茶色粘土(図33)

須恵器

蓋3（105）　天井部外面は回転ヘラ切りされ、粗めの回転ヘラ削りされる。口縁端部は丸く崩れた断面三角形を呈す。外面に色調の変化を有すため、重ね焼きされたと考えられる。

坏ｃ(106)　約1/6の残存資料。高台はやや外向きの断面四角形を呈し、底部は回転ヘラ切り後回転ナデで調整される。底部と体部に屈曲はなく滑らかに立ち上がる。

２ＳＤ110（図33）

須恵器

小坏ａ(107)　口径は5.8cmを測る。焼成、還元ともに不良で、詳細は不明。

坏(108・109)　口縁部から体部の小破片。いずれも焼成、還元ともに不良で詳細不明。

土師器

小皿ａ1（110）　口径は10.4cmを測り、底部は回転ヘラ切り。底部内面には不定方向ナデもみられる。底部は完存し口縁部は一部残存する。

２ＳＤ130（図33・34）

須恵器

蓋3（111）　口縁端部は小さな断面三角形を呈す。天井部外面は回転ヘラ削りされる。焼成、還元ともに良好。

坏身(112)　全体の4/5程度残存。底部外面は回転ヘラ削りされ。受部は小さく口縁端部が長く立ち上がり、底部内面は不定方向ナデで調整される。口径は13.0cmを測る。

椀ａ(113)　底部は丸底で、外面は回転ヘラ削りされる。体部から底部内面にかけて黄茶色から暗茶黒色の付着物が観察できる。また、底部外面にはヘラ記号も確認できる。

甕ａ(114)　口径は25.1cmを測る。口縁端部は玉縁状で体部は大きく外に張り出す形状を呈す。体部外面は平行叩き、内面は同心円状の叩き後回転ナデで調整される。

土師器

椀×鉢(115)　口縁部分の小破片。焼成がやや不良で、内面が横ナデされる他は調整不明瞭。口径は12.2cmに復原される。

石製品

叩石(117)　灰褐色を呈す凝灰岩製。側面に叩痕が多くみられる。

２ＳＤ130①(図33)

須恵器

坏身(116)　受部先端には小さく凹面がみられる。底部外面は回転ヘラ削りされ、底部内面は不定方向に強く

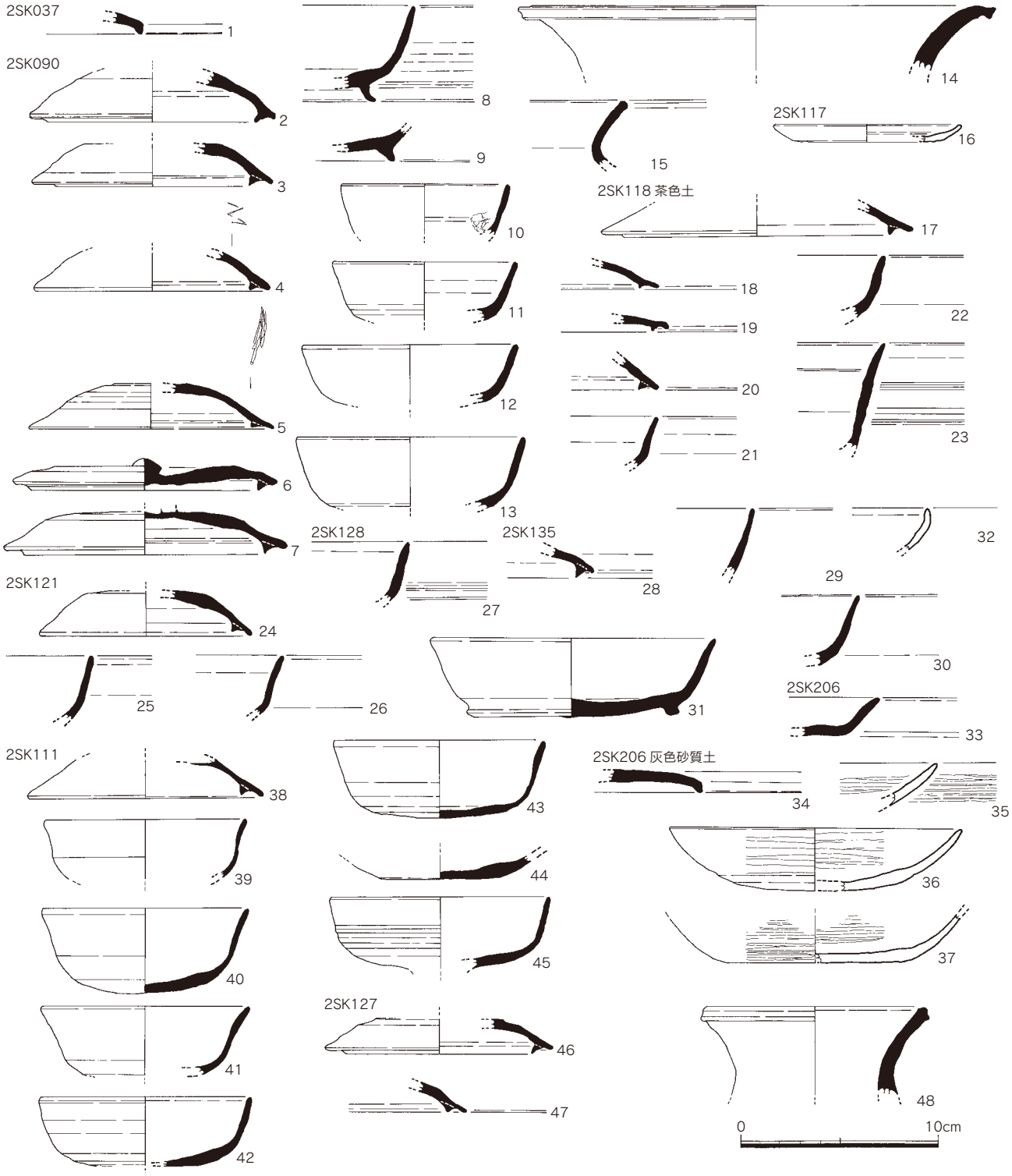


図35.土坑出土遺物実測図(S=1/3)

ナデで調整され、凸凹面を有す。焼成還元ともに良好。ほぼ完形資料。

２ＳＤ160②（図34）

須恵器

提瓶（118）　口縁部が2/3程度と体部が一部欠損する資料。体部外面全体には円状にカキ目が施され、肩部外面には形骸化した把手が左右対称に貼り付けられる。体部背面は平坦になる。また、口縁部内面と体部外面の一部に灰被りと、体部内面の前面にはサビ状の付着物も確認できる。

4）土坑出土遺物

２ＳＫ037（図35）

須恵器

蓋3（1）　口縁部の小破片。端部は丸味を帯びた断面三角形を有す。焼成、還元良好。

２ＳＫ090（図35）

須恵器

蓋1（2 ～ 5）　2・3はかえりが下方に張り出すが、4はかえりと口縁部が同じ接地面、5はかえりが若干退化し口縁部の方がやや下方にくる形状を呈す。天井部は4以外残存し、2と5の天井部外面は回転ヘラ切りされ、3はヘラ切り後未調整である。4の体部外面には「M」字状のヘラ記号が観察できる。また5の口縁部外面には工具による調整と、体部の一部に自然釉が確認できる。

蓋ｃ1（6・7）　6は天井部外面につまみ貼付け時の回転ナデが残るのみであるが、7はやや丸みを帯びた菱形のつまみを有す。どちらの口縁端部もかえりが下方に張り出し、天井部内面には不定方向ナデがみられる。また7の天井部は歪みが著しい。

坏ｃ（8・9）　高台はどちらも外方に傾き、8がやや崩れた四角形、9が丸みのある台形の形状を呈す。8の底部から体部はやや丸みを帯びて立ち上がる。どちらも底部切り離し不明。

小坏（10・11）　10は1/5、11は1/6程度の残存資料。10の口縁部には一部気泡のためか膨らみがみられ、体部内面下位には胎土の塊もみられる。底部まで残る11の体部外面下位は丸みを帯び、底部外面にはヘラの挿入箇所がみられる。

坏（12・13）　口径はそれぞれ11.0、11.6cmを測る。12の底部は摩耗のため切り離し不明であるが、体部外面下位はやや丸みを有す形状である。13の底部はヘラ切りされ、体部外面下位は12と同様にやや丸みを有す。また13の底部内面には不定方向ナデもみられる。

甕（14・15）　両者とも口縁部のみの小破片。14は口縁部が大きく外反して端部下位には稜が観察できる。15は口縁部と頸部の境で丸味を帯びて屈曲する。いずれも内外面とも回転ナデで調整される。

２ＳＫ117（図35）

土師器

小皿ａ1（16）　底部は回転ヘラ切りされ、口径は9.6cmに復原される。焼成はほぼ良好。

２ＳＫ118茶色土（図35）

須恵器

蓋1（17 ～ 20）　いずれも口縁部の小破片で17のみ口径15.8cmに復原される。17 ～ 19の口縁部は僅かにかえりの方が下方に出るが、20はかえりと口縁端部が同じ面に接地する。19以外は胎土に細かな白色砂粒を多く含む。焼成、還元ともに良好。

坏（21・22）　どちらも口縁部から体部の小破片。21には歪みがみられ、体部外面に粘土の絞り痕と考えられる箇所もみられる。焼成、還元は、21がやや不良、22は良好である。

椀（23）　口縁部の小破片。外面には沈線は数箇所みられ、内面は強めの回転ナデで調整される。胎土は緻密で、焼成、還元ともに良好である。

２ＳＫ121（図35）

須恵器

蓋1（24）　天井部外面はヘラ切り後未調整で、天井部内面には不定方向ナデがみられる。口縁端部はかえりより下方に出る形状を呈す。

坏（25・26）　いずれも口縁部から体部付近の小破片。26の体部下位にはやや明瞭に屈曲が入る。どちらもやや摩耗気味。

２SK128（図35）

須恵器

坏（27）　口縁部から体部の小破片。体部外面には数箇所沈線がみられる。胎土は緻密で、焼成、還元ともに良好。

２SK135（図35 ～ 37）

須恵器

蓋1（28）　口縁部のみの小破片。かえりの方が下方に出る形状である。やや摩耗気味。

坏（29・30）　29は口縁部から体部の小破片で、やや歪みを呈す。30の底部は回転ヘラ切りとみられるが、不明瞭である。

坏ｃ（31）　高台はやや外方に傾く断面四角形。体部と底部の境はやや屈曲がみられる。底部は回転ヘラ切りさ

図36.2SK135出土木杭実測図（1）（S=1/4）

図37.2SK135出土木杭実測図(2)（S=1/4）

れ、底部内面には不定方向ナデがみられる。完形資料。

土師器

皿ｂ（32）　口縁部の小破片。内湾する形状で、内面にヨコナデ調整がみられるが、他は摩耗が著しい。

木製品

木杭（1 ～ 10）　先述してきた2SX075ならびに2SX155出土の木杭とは大きさで異なり、残存長0.632m程度を最長とし、0.4m前後を計るものが主体を占めている。先端加工も全周加工のものは無く、片面加工のものに限っている。いずれも自然木を利用し、先端加工のみに手を加えている点は、先の官道護岸木杭の時と同じである。

２ＳＫ206（図35）

須恵器

皿ａ（33）　底部は回転ヘラ切りされ、底部内面には不定方向ナデがみられる。色調の変化が見られるため重ね焼きの可能性がある。

２ＳＫ206灰色砂質土（図35）

須恵器

蓋3（34）　口縁端部は丸みのある断面三角形で、天井部外面は回転ヘラ削りされる。焼成、還元ともに良好である。

土師器

坏ｄ（35 ～ 37）　36の回転ナデされる口縁端部を除けば、いずれも内外面ともミガキａで調整される。底部が残存する36・37についてはミガキａの前に回転ヘラ切りの痕跡が伺える。いずれも焼成は良好である。

２ＳＫ111（図35）

須恵器

蓋1（38）　やや口縁端部の方がかえりより下方に出る形状を呈す。天井部内面は不定方向ナデ調整される。口径12.0cmに復原される。

小坏ａ（39 ～ 43）　底部切り離しが確認できるのは40・42・43で、いずれも回転ヘラ切りされ、40はその後ナデで調整される。また体部と底部の境は、39・40は丸みを有すが、他はやや稜のある形状を呈す。

坏（44）　底部の約1/2残存。全体的に摩耗が著しく、詳細は不明。焼成不良。

高坏（45）　坏部のみの残存。底部は回転ナデで調整され、切り離し方法は不明。底部内面には不定方向ナデによる調整もみられる。胎土は緻密で、焼成、還元ともに良好。

２ＳＫ127（図35）

須恵器

蓋1（46・47）　46はかえりが下方に出るが、47はかえりと口縁端部が同じ面に接す。46のみ天井部が確認できるが、切り離し方法は不明。47の外面には回転ナデ後不定方向ナデの調整がみられる。

甕×壺（48）　口縁部から頸部の1/4程度の残存資料。口縁端部はやや凹凸面を呈し、外反する。口径11.6cmに復原される。

6）その他の遺構出土遺物

a.小穴

2SX041（図38）

石製品

石鏃（1）　サヌカイト製。打製による大小の剥離が全面にみられる。先端部は欠損。

2SX148（図38）

須恵器

坏ａ（2）　底部は回転ヘラ切り後ナデで調整される。底部と体部の境目にやや明瞭に屈曲がみられ、そこから口縁部まではほぼまっすぐ立ち上がる形状を呈す。焼成、還元良好。

b.小穴群

2SX002（図38）

石製品

石鏃（3）　サヌカイト製。刃部は特に細かな剥離で形成されている。重さ0.6ｇ。

2SX124（図38）

瓦質土器

擂鉢（4）　口縁端部の平坦面は外方に下がる。外面は多くの指頭圧痕、内面には横刷毛調整後に擂り目の形成

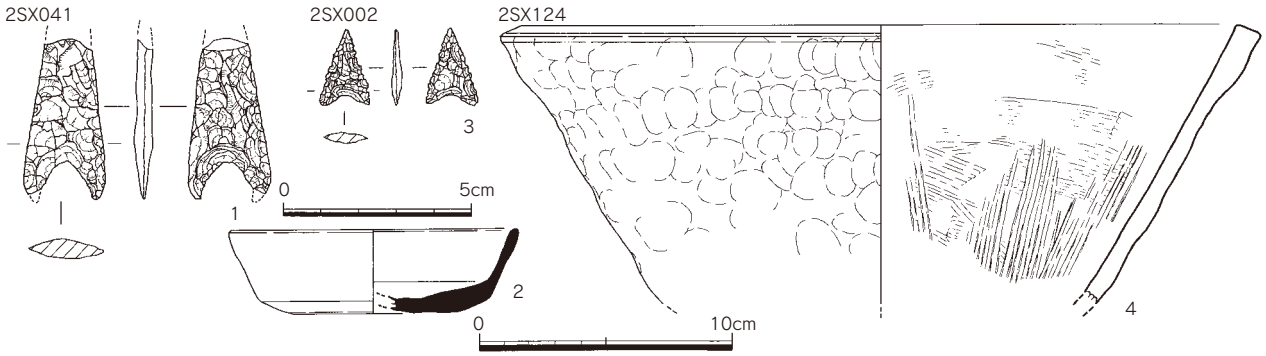


図38.その他の遺構出土遺物実測図（1）（S=1/3　石器：1/2）

がみられる。胎土には僅かであるが角閃石が含まれる。1/5程度残存。

c.竪穴状凹み

2SX085黒褐色土（図39）

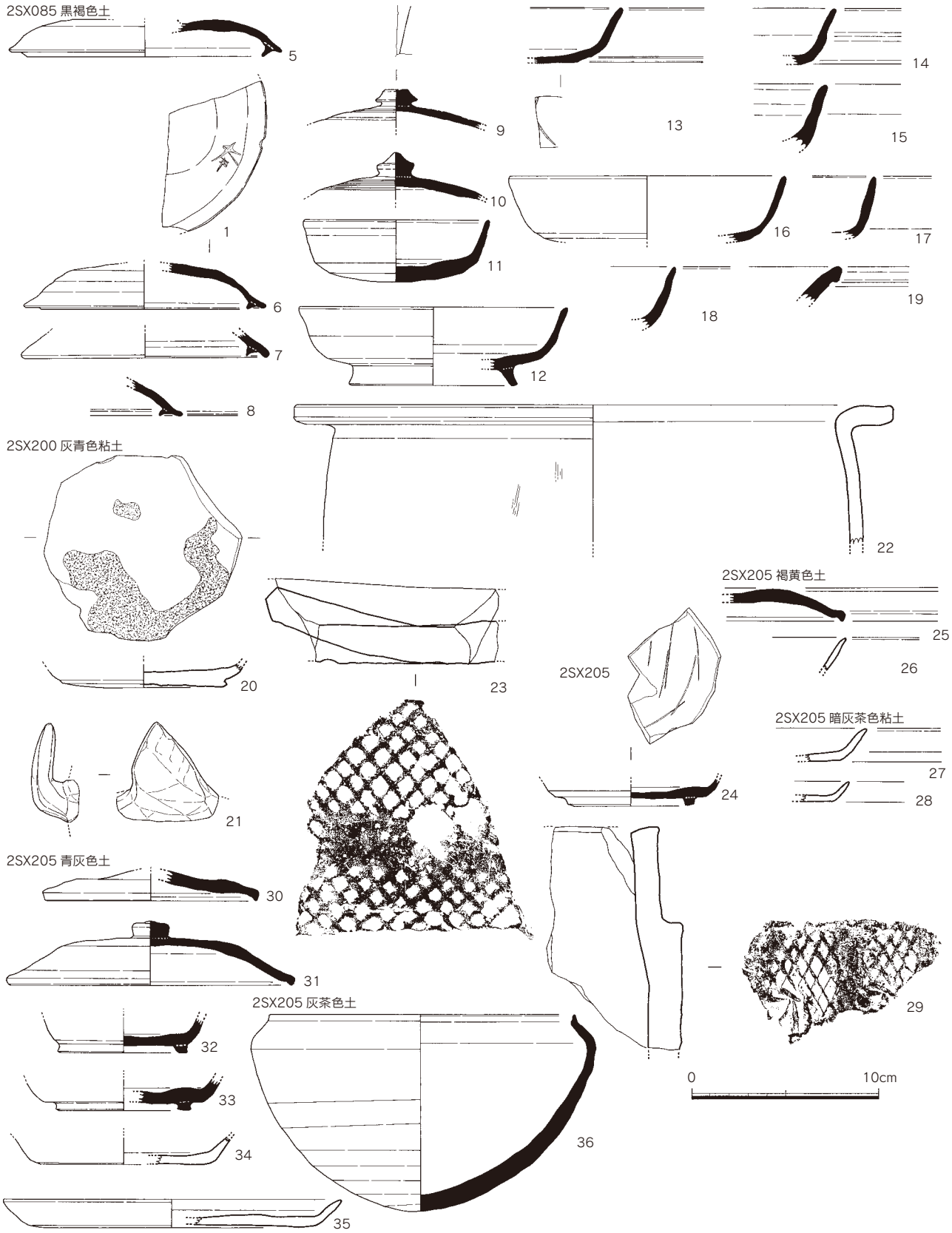


図39.その他の遺構出土遺物実測図（2）（S=1/3）

蓋ｃ１（5）　口縁端部はかえりが下方に出る形状である。つまみは残存しないが、つまみ貼り付け時の回転ナデがみられる。天井部外面は回転ヘラ削りされる。

蓋1（6 ～ 8）　口縁端部は6がややかえりが下方に張り出し8はかえりと口縁端部が同じ接地面、7は口縁端部の方がかえりより下方に出る形状である。6の天井部外面は回転ヘラ削りされ、体部外面の一部には刻書もみられる。また6に別個体の付着物がみられることから、重ね焼きされたと考えられる。

蓋ｃ（9･10）　9は円錐状、10は菱形状のつまみを有す。9の天井部外面はヘラ削りされ、ヘラ記号も観察できる。10の天井部はカキ目で調整される。どちらも胎土には砂粒を多く含む。9は1/3、10は1/5程度の残存資料。

小坏ａ１（11）　底部と体部の境は回転ヘラ削りされてやや稜がみられる。底部は回転ヘラ削りと考えられるが明瞭ではない。底部内面には不定方向ナデもみられる。焼成はやや不良だが、還元は良好。

坏c（12）　高台は高めの細い断面三角形を呈し、外方に傾く。体部下位はやや丸みを有す。底部切り離しは不明。焼成、還元ともに不良で、1/4程度の残存資料である。

小坏（13･14）　いずれも底部外面は回転ヘラ削りされ、切り離し不明。13の底部外面にはヘラ記号もみられる。底部と体部の境は13がやや明瞭に稜が入るが、14は丸みを帯びていて屈曲はみられない。

坏（15 ～ 18）　16に一部底部がみられる他はいずれも口縁部から体部の小破片。15の器形はやや厚い。16は口径14.8cmに復原できる。17の体部下位にはヘラ挿入痕がみられる。15が焼成、還元とも不良であるが、その他はどちらもほぼ良好である。

甕（19）　口縁部のみの小破片。口縁端部はやや丸味をもって外反し、口縁端部外面下位には凹みがみられる。焼成はやや良好、還元はやや不良の小破片。

d.溝×窪み

2SX200灰青色粘土（図39）

土師器

坏ａ（20）　底部のみの小破片。底部は回転糸切りされ、その後板状圧痕がつけられる。内面は回転ナデ後不定方向ナデ調整される。また内面にはススの付着もみられる。

把手（21）　全面をナデで調整される。胎土には白色砂粒がやや多く含まれ、焼成はやや良好である。

弥生土器

甕（22）　口縁端部は外方向に「く」の字に屈曲し、外面には縦方向の刷毛目が見られるが、全体的に摩耗は著しく、あまり明瞭ではない。

瓦

平瓦（23）　凸面は格子叩きされ、内面には布目痕もみられる。また、側面は2面を有し、削りで調整される。

2SX205（図39）

須恵器

坏ｃ（24）高台は僅かに外傾した断面台形状を呈す。底部は回転ヘラ切り後丁寧にナデで調整される。底部内面には不定方向ナデ調整もみられる。焼成、還元ともに良好。

2SX205褐黄色土（図39）

須恵器

蓋3（25）　口縁端部は丸みを帯びてやや崩れた断面三角形を呈し、天井部外面は回転ヘラ切り後、丁寧なナデで調整される。天井部内面には不定方向ナデもみられる。

土師器

小皿1（26）　口縁部のみの小破片。焼成は良好だが、摩耗のため詳細不明。

2SX205暗灰茶色粘土（図39）

土師器

皿ａ（27）　底部は回転ヘラ削りされる。焼成は良好。

小皿ａ（28）　底部は回転糸切り。底部内面には不定方向ナデ調整もみられる。

瓦

軒丸瓦（29）　凸面は斜格子叩され、一部に左下がりの「佐」の文字がみられるので、文字瓦902－Hに分類される。（九州歴史資料館、2002）

2SX205青灰色土（図39）

須恵器

小蓋ａ３（30）　口縁端部はやや丸みのある断面三角形を呈し、天井部外面は回転ヘラ切り後、不定方向ナデで調整される。口縁端部が変色することから重ね焼きされたと考えられる。

蓋ｃ３（31）　口縁端部は丸みのある崩れた断面三角形を呈す。つまみはやや高めの擬宝珠形。口縁端部外面から体部内面にかけて変色がみられるので、重ね焼きと考えられる。

小坏ｃ（32・33）　高台は32がやや外に傾く断面台形で、33は直立した断面四角形を呈す。32の底部と体部の境は丸みを帯びるが、33はやや屈曲がみられる。どちらも底部は回転ヘラ切り後ナデ調整、底部内面は不定方向ナデで調整される。いずれも焼成、還元良好。

土師器

坏ａ（34）　底部は回転糸切りされ、板状圧痕も残る。焼成良好。底部の約1/3残存。

皿ａ（35）　口径18.1cmを測り、底部は回転ヘラ削りされる。全体の1/4程度残存。

2SX205灰茶土（図39）

須恵器

鉢ａ３（36）　口縁端部は内傾気味の平坦面を形成し、体部上位で内湾する。体部から底部外面にかけて回転ヘラ削り、底部内面は不定方向ナデで調整される。

e.窪み

2SX004（図40）

土製品

瓦玉（37）　焼成不良で、摩耗が著しく調整は不明。胎土に白色砂粒を多く含む。

2SX028（図40）

縄文土器

深鉢（38）　曽畑式。胴部の小破片で、外面には縦横方向の線状の文様が施される。胎土には細い滑石破片が多く入る。

石製品

石匙（39）　サヌカイト製。刃部と考えられる部分は打製による大小の剥離がみられる。

2SX046（図40）

須恵器

蓋3（40）　口縁端部は丸みの強い断面三角形を呈す。焼成、還元ともに良好。

2SX053（図40）

石製品

磨製石斧（41）　蛇紋岩製。3面に研磨痕がみられる。重さ130.2ｇ。

2SX058（図40）

瓦器

椀ｃ（42）　底部のみの残存。高台はやや外に跳ね上げる断面四角形を呈す。回転ヘラ切りされ、内面はミガキｃで調整される。

土師器

小皿ａ１（43・44）　底部は43が回転ヘラ切り44が回転糸切りされる。44のみ底部内面には不定方向ナデがみられる。口径はそれぞれ8.2cm、8.6cmに復原される。

石製品

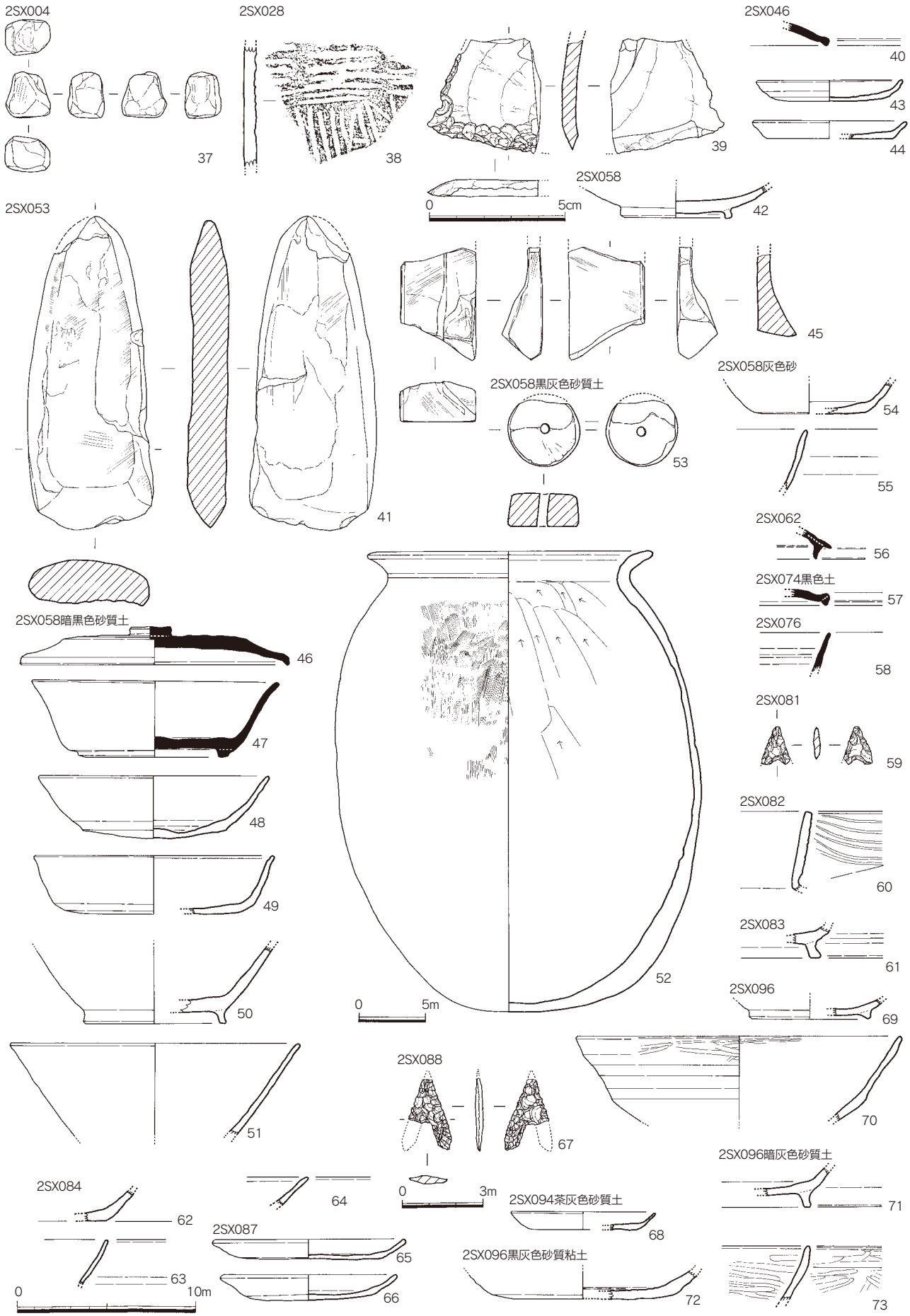


図40.その他の遺構出土遺物実測図(3)（S=1/3　52：1/4　石器・瓦玉：1/2）

砥石（45）　泥岩製。4面に擦り痕がみられ、その内一面は欠損後に使用された可能性がある。

2SX058暗黒色砂質土（図40）

須恵器

蓋ｃ３（46）　口縁部はやや外向きで丸みのある断面三角形を呈す。つまみは扁平な低い擬宝珠状で、天井部外面は回転ヘラ切りされる。胎土には白色砂粒を多く含む。

坏ｃ（47）　高台はほぼ直立した断面四角形で、底部は回転ヘラ切り。外面には色調の変化や底部外面に重ね焼き痕が伺える。焼成、還元良好。ほぼ完形資料。

土師器

坏ａ（48・49）　いずれも底部は回転ヘラ切りされ、49はその後不定方向ナデによって調整される。49の底部外面には板状圧痕と煤痕が観察できる。48は胎土に微細な雲母破片を多く含む。

坏ｃ（50）　高台はやや細く高めの断面長方形で、やや外方に傾く。底部外面はナデで調整され、切り離しは不明。接合箇所は見当たらないが、51と同一個体の可能性がある。

坏（51）　口径は16.2cmに復原される。口縁部から体部は真っ直ぐ外方に開く形状である。体部外面下位は回転ヘラ削りされる。50と同一個体の可能性あり。

甕ａ（52）　ほぼ完形資料。体部外面は不定方向の刷毛目がみられ、一部に炭化物の付着がみられる。体部内面は下方から上方向への削り調整がなされる。また、体部内面中位から底部内面はヘラ削り後ナデで調整される。焼成は良好で、胎土は粗い。

2SX058黒灰色砂質土（図40）

土製品

紡錘車（53）　直径4.0cm、厚さ1.9cmを測る。焼成がやや不良気味で、調整は不明。

2SX058灰色砂（図40）

土師器

坏ａ（54）　底部のみ1/4程度残存。切り離しは回転ヘラ切りである。

坏（55）　口縁部の小破片。焼成はやや不良で摩耗気味。

2SX062（図40）

須恵器

蓋1（56）　口縁部の小破片。かえりは大きく下方に出る。焼成、還元ともに良好。

2SX074黒色土（図40）

須恵器

蓋3（57）　口縁端部は小さく丸みを帯びた断面三角形を呈す。焼成、還元良好。

2SX076（図40）

須恵器

坏×皿（58）　口縁部のみの小破片。胎土は細かな砂粒を多く含む。焼成良好、還元不良。

2SX081（図40）

石製品

石鏃（59）　安山岩製。刃部はやや大まかな打製による剥離を呈す。0.4ｇ。

2SX082（図40）

古式土師器

二重口縁壺（60）　口縁部の小破片のため器種特定は難しいが、下位に屈曲が見られることから二重口縁壺としている。外面には横方向の線刻がみられる。

2SX083（図40）

土師器

坏ｃ（61）　高台の小破片。高台はやや高めで外方を向いた断面台形の形状を呈す。

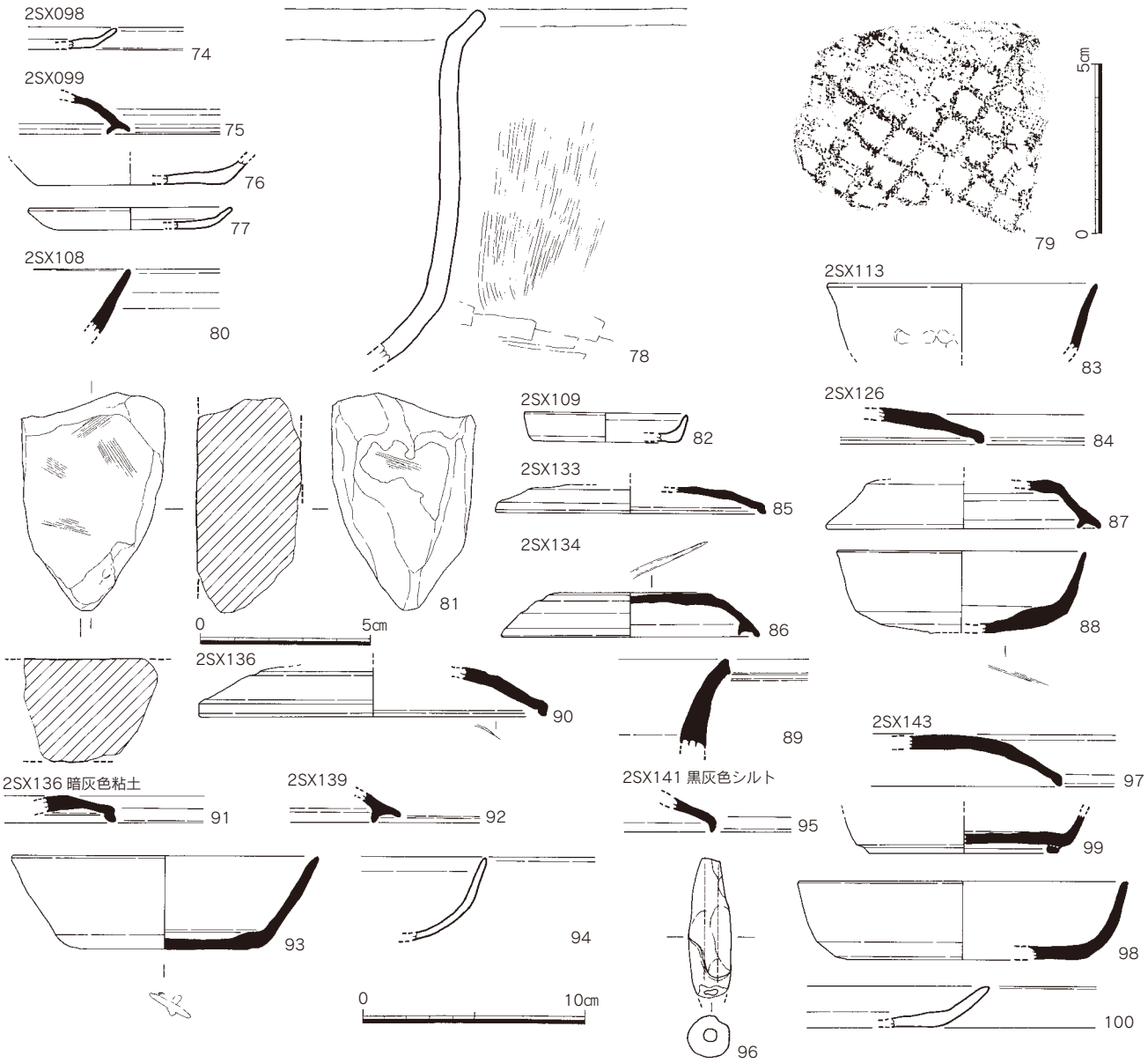


図41.その他の遺構出土遺物実測図(4)（S=1/3 石器・瓦：1/2）

2SX084（図40）

土師器

坏(62・63)　62は底部の約1/5、63は口縁部の小破片。62は回転ヘラ切りされ、板状圧痕もみられる。どちらも焼成はやや不良気味である。

白磁

皿(64)　口縁部の小破片。Ⅲ－1類に分類される。内外面ににぶい灰白色の釉がかかる。

2SX087（図40）

土師器

小皿a1（65・66）　口径9.9cm ～ 10.9cmを測り、底部外面の切離し処理は、いずれも回転ヘラ切りによって処理されている。65は、若干歪みが観察される。

2SX088（図40）

石製品

石鏃(67)　黒曜石製。打製で細かな剥離が全面にみられる。0.9ｇを量る。

2SX094茶灰色砂質土(図40)

土師器

小皿ａ（68）　底部は回転ヘラ切り。底部内面には煤が付着するため、灯明皿の可能性もある。

2SX096（図40）

瓦器

椀ｃ（69）　高台は外方に傾く断面三角形。摩耗が著しく、調整はやや不明瞭である。

椀（70）　口縁端部にはミガキａとみられる調整があるが判然としない。内面にはミガキｃの調整もみられる。口縁部内外面は黒色に変色する。焼成不良で摩耗が著しい。

2SX096暗灰色砂質土（図40）

土師器

椀（71）　底部のみの小破片。高台は高めの断面長方形。底部外面は回転ナデされ、切り離しは不明。焼成はやや不良で摩耗気味。

2SX096黒灰色砂質土（図40）

土師器

坏ａ（72）　底部の約1/5。回転ヘラ切りとみられるが判然としない。底部内面が強いナデによって段状になっている。

瓦器

椀（73）　口縁部のみの小破片。胎土に混入物は殆ど無く、精製品である。内外面ともミガキｃで調整される。

2SX098（図41）

土師器

小皿ａ１（74）　底部はヘラ切りと考えられるが、全体的に摩耗気味で判然としない。

2SX099（図41）

須恵器

蓋1（75）　かえりが下方に出る形状である。焼成、還元ともに良好。

土師器

坏ａ（76）　底部のみの小破片。切り離しは回転糸切り。やや摩耗気味。

小皿ａ１（77）　底部は回転ヘラ切りされるが、他は摩耗のため調整不明。1/7程度残存。

鍋（78）　外面全体は手持ちヘラ削りされ、体部外面はその後縦刷毛調整される。また、外面全体にススが付着し、内底が暗茶灰色に変色することから、煮炊きに使われたと考えられる。胎土には大粒の砂粒を多く含む。

瓦

平瓦（79）　小破片。凸面にほぼ正方形の格子叩の痕跡が残る。焼成、還元はやや不良。

2SX108（図41）

須恵器

坏（80）　口縁部のみの小破片。内外面ともに回転ナデ調整される。焼成、還元良好。

石製品

砥石（81）　細粒砂岩製。2面が残存し、どちらにも細かな擦痕がみられる。

2SX109（図41）

土師器

小皿ａ（82）　底部は回転糸切りされ、底部と体部の境目で「く」の字に屈曲する。

2SX113（図41）

須恵器

坏（83）　口径は12.2cmに復原される。体部外面下位には指頭圧痕がみられる。胎土は緻密で、焼成、還元良好。口縁部から体部の約1/5残存。

2SX126（図41）

須恵器

蓋3（84）　全体的に摩耗が著しく、口縁端部は丸味の強い三角形を呈す。胎土には白色砂粒を多く含む。焼成はやや不良気味で、還元は良好。

2SX133（図41）

須恵器

蓋3（85）　天井部は外面が回転ヘラ削りされ、内面は回転ナデ後不定方向にナデで調整される。口縁端部はやや外向きの丸みのある断面三角形を呈す。焼成、還元ともに良好。

2SX134（図41）

須恵器

蓋ａ1（86）　口縁部はかえりより端部が下方に出る形状で、端部外面には沈線もみられる。天井部外面は回転ヘラ切りされ、ヘラ記号も観察できる。全体の1/2程度残存。

蓋1（87）　口縁端部とかえりは同一面に接し、天井部は回転ヘラ切りされる。焼成、還元はいずれもやや不良気味。約1/5残存資料である。

坏ａ（88）　底部は回転ヘラ切りされ、一部にヘラ記号も観察できる。底部と体部の境はやや明瞭に屈曲がみられる。焼成、還元ともに良好。1/4程度残存。

甕（89）　口縁部のみの小破片。口縁端部下位には僅かに凹凸がみられる。胎土には白色砂粒を多く含み、黒色粒もやや多く含まれる。焼成、還元ともに良好。

2SX136（図41）

須恵器

蓋3（90）　口縁端部はやや直立した丸味のある断面三角形である。天井部は外面が摩耗のため調整不明であるが、内面は回転ナデされる。体部内面の一部にヘラ記号が観察できる。

2SX136暗灰色粘土（図41）

須恵器

蓋3（91）　口縁端部はやや外を向いた丸味のある断面三角形。天井部は外面が回転ヘラ切りされ、内面は回転ナデ後不定方向ナデで調整される。焼成、還元ともに良好。

2SX139（図41）

須恵器

蓋1（92）　口縁部のみの小破片。かえりが下方に出る形状を呈す。焼成還元ともに不良。

2SX140（図41・42）

須恵器

坏ａ（93）　底部は回転ヘラ切りされ、体部下位は丸みを帯びて口縁部まで立ち上がる。口縁部の内外面には黒色化がみられ、底部外面には墨書もみられる。

土師器

椀（94）　口縁部はヨコナデ調整。体部外面は指押え調整され、その後上位はヨコナデ、中位から下位は不定方向ナデで調整される。内外面とも黒色化がみられる。

木製品

鍬（図42-1）　残存状況は悪く、鍬柄装着

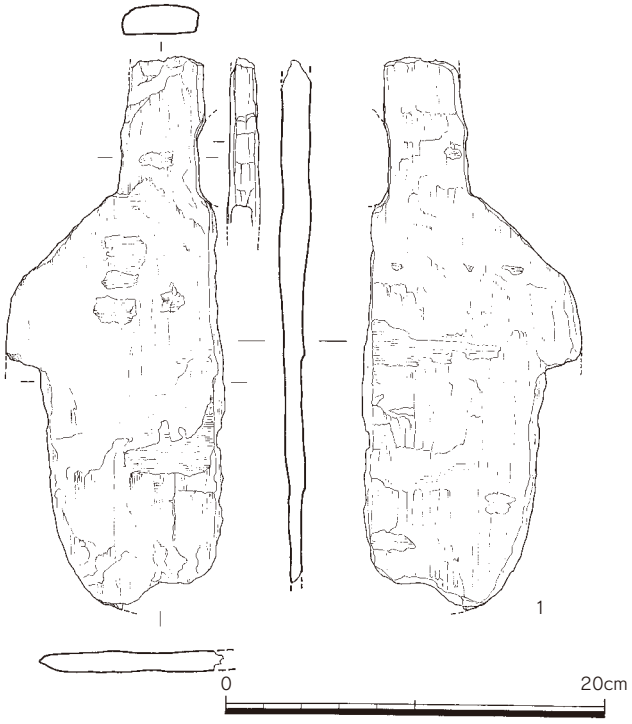


図42.2SX140出土木製品実測図（S=1/4）

部分から下約3/4程度を欠失したものである。鍬柄装着箇所ならびに鍬先金具を装着したと考えられる箇所は、腐植によって多くが欠失し、金属製刃先の存否や、柄装着状態を知る上での情報が欠落している。

2SX141黒灰色シルト（図41）

須恵器

蓋3（95）　口縁端部は外面のみ丸味を有す断面三角形。色調の変化が明瞭なことから重ね焼きの可能性がある。焼成、還元ともに良好。

土製品

土錘（96）　長さ9.3cm、最大径1.9cmを測る。焼成は不良。重さは18.2ｇを量る。

2SX143（図41）

須恵器

蓋3（97）　口縁端部はやや外方にむく断面三角形。天井部は外面が回転ヘラ切り後ナデで調整され、内面回転ナデ後不定方向ナデで調整される。焼成、還元ともに良好。

坏ａ（98）　切り離しは不明で、底部と体部の境はやや丸味を呈す。1/6程度残存。

坏ｃ（99）　高台はやや内側に向く断面四角形。底部は回転ヘラ切り後ナデで調整され、底部内面は回転ナデ後不定方向ナデで調整される。胎土は緻密で、微細な白色砂粒が多い。

土師器

皿ａ（100）　底部から口縁部の小破片。底部外面は回転ヘラ削りされる。焼成は不良気味。

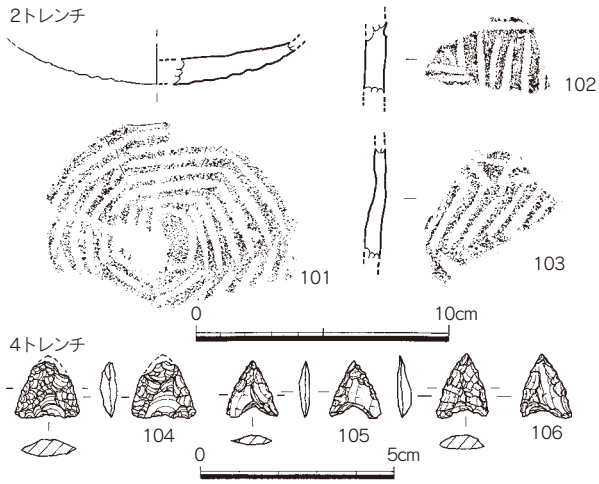


図43.トレンチ出土遺物実測図（S=1/3　石器：1/2）

f.トレンチ

2トレンチ（図43）

縄文土器

深鉢（101・102）曽畑式と考えられる。99は底部のみの小破片で、外面はナデで調整後太い沈線文が描かれ、内面は削り後ナデで調整される。100は体部の小破片で、外面のみ太い沈線文が観察できる。いずれも胎土に滑石を多く含み、焼成良好である。

4トレンチ（図43）

縄文土器

深鉢（103）　曽畑式。外面はナデ調整後、太い沈線文がみられ、内面は削り後ナデで調整される。胎土には滑石を多く含む。焼成良好。

石製品

石鏃（104 ～ 106）　104は黒曜石製、105・106はサヌカイト製である。いずれも打製による細かな剥離で成形される。

7.土層

a.表土（図44）

染付磁器

椀（107）　口縁部の小破片。明藍色の呉須で、内面は二条の圏線と外面には雷文などの文様が描かれる。

暗灰色砂（図44）

須恵質土器

捏鉢（108）　口縁部の小破片。内外面とも回転ナデ調整される。端部には黒色化も観察できる。

瓦質土器

捏鉢×擂鉢（109）　口縁部のみの小破片のため、器種特定は難しい。端部以外の内外面は斜方向の細かな刷毛で調整される。端部外面下位には指頭圧痕や黒色化も観察できる。

瓦

軒丸瓦（110）　瓦当部のみの残存資料。蓮華文がみられるが、未分類。焼成不良。

金属製品

耳環（134）　表面腐食がやや進行したもので、表面金箔が芯部の金属腐食によって欠失している。直径0.7cmのほぼ円形を呈する棒状の金具を、直径2.75cm ～ 2.9cmの円形に曲げて成形している。重量は、14.6gを量る。

b.赤褐色土（図44）

土師器

小皿ａ１（111・112）　111は底部から口縁部の小破片。底部は回転糸切りされ、板状圧痕も観察できる。また内底は不定方向ナデで調整される。112の口径は8.2cmに復原される。焼成不良で、全体的に摩耗が著しく詳細は不明。

須恵質土器

捏鉢（113）　口縁部のみの小破片。焼成良好。

白磁

高坏（114）　底部から脚部の残存資料。高台上位まで施釉される。光沢のある釉調で細かな貫入も観察できる。露胎部分は回転ナデで調整される。華南系。

縄文土器

甕（115）　口縁部の小破片。端部は断面楕円形に貼り付けられ、体部にかけて「く」の字に屈曲する。内面は横ナデ、外面はミガキ調整される。胎土は緻密で、焼成良好である。

深鉢（116 ～ 119）　116 ～ 118は轟式、119は曽畑式。116 ～ 118はいずれも口縁部の小破片で、外面は隆起線文、内面には条痕、端部には刻目が観察できるが、118の端部から内面にかけては摩耗気味。119は体部の小破片で、外面は沈線文、内面は削り後ナデで調整される。119のみ胎土に滑石を多く含む。

石製品

片刃石斧（120）　泥岩製で、側面に打製と考えられる3箇所の剥離がみられる。

蛤刃石斧（121 ～ 123）　いずれも蛇紋岩製。121は使用痕が明瞭に残るが、122・123は摩耗が著しく詳細不明である。重さは順に0.9ｇ、0.4ｇ、0.6ｇ。

c.黄灰色砂（図44）

須恵器

蓋ｃ３（124）　口縁端部は小さな断面三角形、つまみは低い扁平な擬宝珠形を呈す。天井部外面は回転ヘラ切り後ナデで調整され、体部外面には重ね焼き時の別個体の土器片が付着する。また天井部から体部外面の一部にはヘラ記号も観察できる。

蓋3（125 ～ 128）　いずれも丸味のある断面三角形の口縁端部を有し、125 ～ 127の天井部外面は回転ヘラ切りされ、125のみその後ナデで調整される。126は色調が変化することから重ね焼きの可能性がある。いずれも焼成、還元ともにほぼ良好である。

鉢（129）　体部から口縁部まで直線状に立ち上がる形状を呈す。内外面とも回転ナデ調整される。焼成、還元ともに良好。

石製品

石包丁（130）　凝灰岩製。刃部付近に穿孔の痕跡がみられる。裏表に細かな線状の使用痕が多く観察できる。

d.灰色砂質土（図44）

縄文土器

深鉢（131）　体部の小破片。内面はナデ調整、外面はナデ調整後縦横に沈線文が施される。胎土に滑石を多く含む曽畑式である。

石製品

剥片（132）　サヌカイト製。弧状部分に細かな剥離が数箇所見られるが、刃部形成によるものなのかは判然と

図44.土層出土遺物実測図(S=1/3 石器：1/2)

しない。

e.地表面に乾裂状構造を有する面（図44）

石製品

用途不明（133）　サヌカイト製で、先端部僅かに欠損する。長さ2.6cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmを測る。

（久味木理恵）

4.小結

今次調査によって検出された遺構の時期を踏まえた、調査区内空間分布を整理し、後論へつなげる。

Ⅰ期：縄文期

Ⅱ面遺構として調査したもので、調査区北半部で確認したにとどまる。佐野遺跡群内に所在する脇道遺跡第6次調査にて検出した「乾裂」状構造を有する地表面を、Ⅰ面遺構下、1.0mから検出した。Ⅰ面にて検出した遺構内からも本文にて記述してきたように縄文時代前期に属する曾畑式土器が破片ながら出土していた。Ⅱ面遺構として調査した「乾裂」状構造を有する地表面からは、顕著な遺物は出土していなかったが、黒曜石・サヌカイト細片が僅かながら出土するなど、脇道遺跡第6次調査にて検出した同種の地表面と同一時期である可能性を示唆している。併せて、調査区南部へ移行するにつれて、「乾裂」状構造を有する地表面は欠失し、「河川」中心へと近づいているものと考えられる。したがって、落とし穴遺構については、今次調査の北西側へと展開している可能性を有しているが、丘陵が立ち上がることを考慮すると、集落などを想定できたのかもしれない。

Ⅱ期：弥生期～飛鳥期

2SD080（2SD105・110・120・125・130・145・150・151・160、2SX085）

人工的な構造物ではなく、埋没河川として検出した。宮ノ本丘陵南部から北東方向へ蛇行しつつ流れていたものと考えられ、多くの木質を包含し、かつ土器も出土していることから、沿岸における集落の存在を想定できる。これまで報告してきた佐野地区遺跡群内の状況から考えると、宮ノ本遺跡、京ノ尾遺跡・カヤノ遺跡からの流れ込みが想定できることになる。

Ⅲ期：飛鳥期～奈良期

2SD012・2SD022-2SF005

2SD020・2SD040-2SF055（2SF025）　2SD014

今次調査の主要な遺構が帰属する時期にあたり、官道前道路および官道が帰属することになる。加えて官道に直交する溝も確認され、奈良期における土地利用を考える上で、多くの材料を提供してくれた。まず官道前道路については、調査区北西隅から南東へかけて湾曲するように検出でき、そのまま南東側、前田遺跡第2次調査北部へと伸びていることが分かっている。その規模は、本文にて記述してきたように、側溝間距離8.4224m（約24大尺）、道路路面幅5.5383m（約16大尺）を測り、後述する官道が完数値で表記されるのとは対照的である。その埋没時期は、大宰府政庁Ⅱ期造営時期に接触するⅢ-1期であり（中島、2005）、官道施工時期にも接触している。この道路の北側延長は、原口遺跡第2次調査で検出された道路遺構に接続するものと考えられ、「蛇行」する道路として施工されたことが分かっている。

次に官道であるが、その規模は、側溝間任意中心距離は14.1752m（40大尺）、路面幅10.56m（約30大尺）を測り、側溝東西肩間の距離を算出すると、約50大尺の道路規模であることが分かった。これは、大宰府中央大路、いわば朱雀大路の路面規模幅35.8m（100大尺）の約半分ということになる（太宰府市教委、1998）。この官道側溝の埋没時期は、前田遺跡第2次調査にて遺構の切り合いから導き出されており、Ⅲ-2期には埋没していたものと考えられている（太宰府市、1992）。今次調査の所見からも埋没時期はⅢ-2期にあたる遺物が出土している。施工時期については、下層出土遺物からⅢ-1期のどこかと考えられる。先の官道前道路との先後関係は、今次調査区内にて確認できておらず、明らかにし難い。

なお今次調査で確認した官道の路盤工において、6世紀末の遺物を多く包含する層とともに古墳石室石材の転用がなされていた点は特筆すべきである。この現象面に対する解釈は、最終章にて考察を加える。

Ⅳ期：平安・鎌倉期

2SX001・003・200・2SD060

官道廃絶後から当該期までの生活痕跡は確認されていない。具体的には平安前期から中期にかけての時期にあたる。この時期は、西に隣接する宮ノ本丘陵において、造墓活動が最も盛んに行われていた時期にあたり、今次調査区周辺はいわば墓地としての土地利用がなされていた。当該期は、貴族層の死穢観念が最も強い時期とも重なり、墓地近傍への接触を避けた結果とも解せる。その後平安後期に至って、官道中心軸にほぼ直交するように、溝が直線的に造られている。今次調査南東に位置している前田遺跡第2次調査地では、官道東側溝が平安後期まで継続的に使用されていたことが分かっており、古代官道によって形成された地割がそのまま継続して残っていたものと考えられる。加えて、前田遺跡第2次調査地での輸入陶磁器の出土量も豊富であり、近傍における「高階層」集団の存在を想定することも可能である。この点については、前田遺跡第2次調査の報告を待って考察を加える必要がある。

以上4時期を主たる遺構形成期とした。佐野土地区画整理事業の完了によって、宮ノ本丘陵をはじめとして多くの自然地形が欠失した。多くの成果を得ることができた反面、成果を整理する前に調査を先行させてきたことの「つけ」が、報告書を作成するたびに残されていく。今次調査成果からも同様であり、下層遺構の存在を、区画整理事業に関わる調査も終盤に至って気づいたことは、多くの遺跡を人知れず破壊してきたのではないかと残念に思う点の一つである。

（中島恒次郎）

引用文献

中島恒次郎（2000）「大宰府における土師器甕の変遷」『大分・大友土器研究会記念論集』大分・大友土器研究会
中島恒次郎（2005）「聖武朝の土器」『古代の土器研究』古代の土器研究会
太宰府市教育委員会（1998）『大宰府条坊跡　Ⅹ』太宰府市の文化財第37集
九州歴史資料館（2002）『大宰府政庁跡』

日焼遺跡　第4次調査

1.基本層位

調査対象地は太宰府市南西部の丘陵中腹に位置し、標高38mの緩傾斜地に所在する。調査区の中央部は現代の重機による攪乱により大規模に破壊されており、その攪乱部から北側を中心に遺構が展開している。攪乱の南側は北側に比較すると遺構の密度は低い。調査区の東側には、現況の地表面を観察した段階で、幅2.5mmのＵ字型の窪地が連続していた。

調査区の表土を0.2mほど掘り下げると、遺構面直上に茶色土が広がって堆積していた。これを取り上げ時の土色として採用して、以降すべて遺構検出時の遺物は、この土層に帰属させた。茶色土を取り去ると、花崗岩の風化土の地盤が露出する。遺構はこの地盤に切り込んでいる。

2.遺構

1）柵列

4SA045（図46）　調査区北部で検出された南北2間、東西5間の柵列で、主軸の振れはN55° 5'Eと大きく東へ振れている。柱間は南北方向で南から1.9m、2.1ｍで、東西方向は西から0.8m、1.25m、1.5m、1.3mで、柱掘

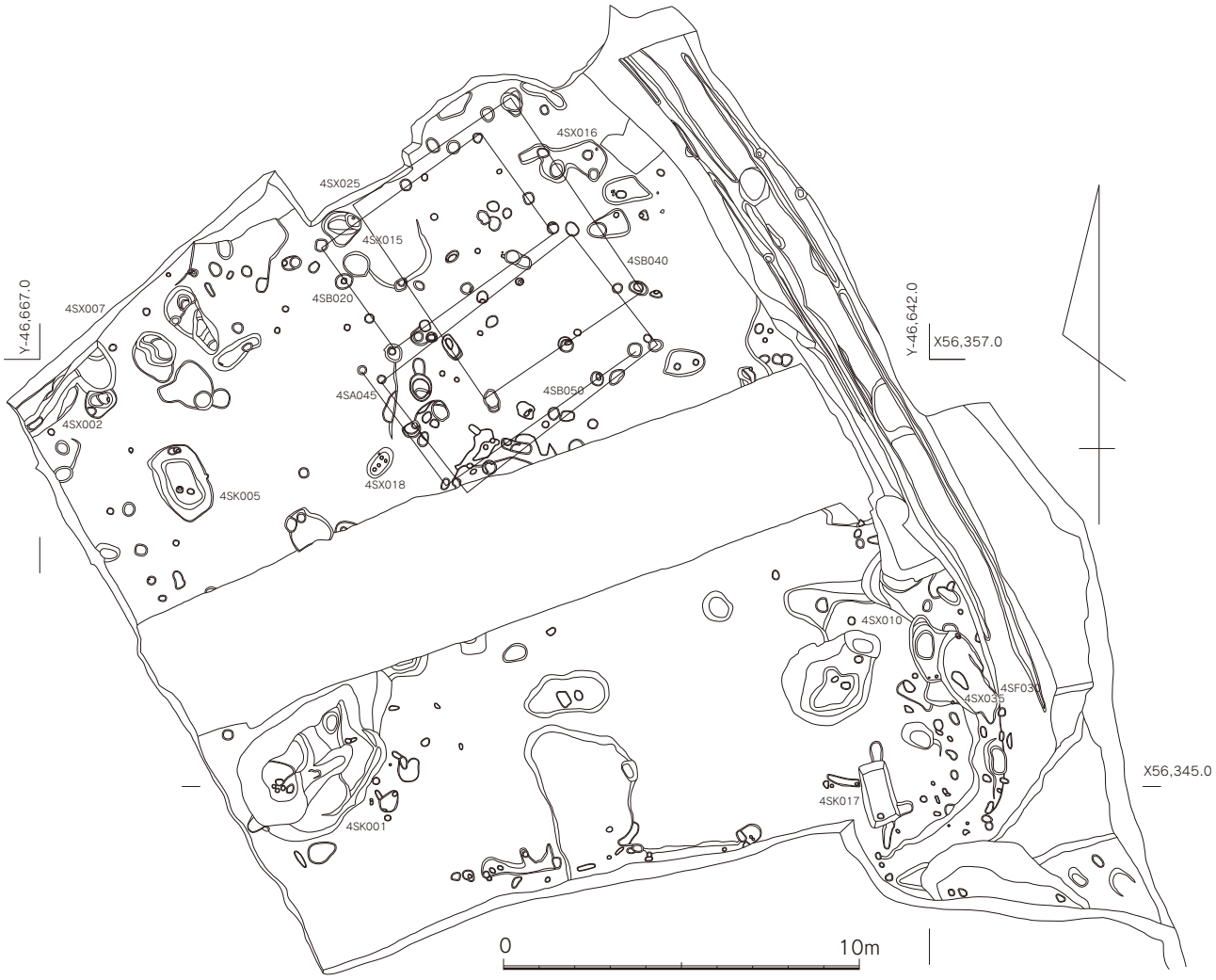


図45.日焼遺跡第4次調査　遺構配置図（S=1/200）

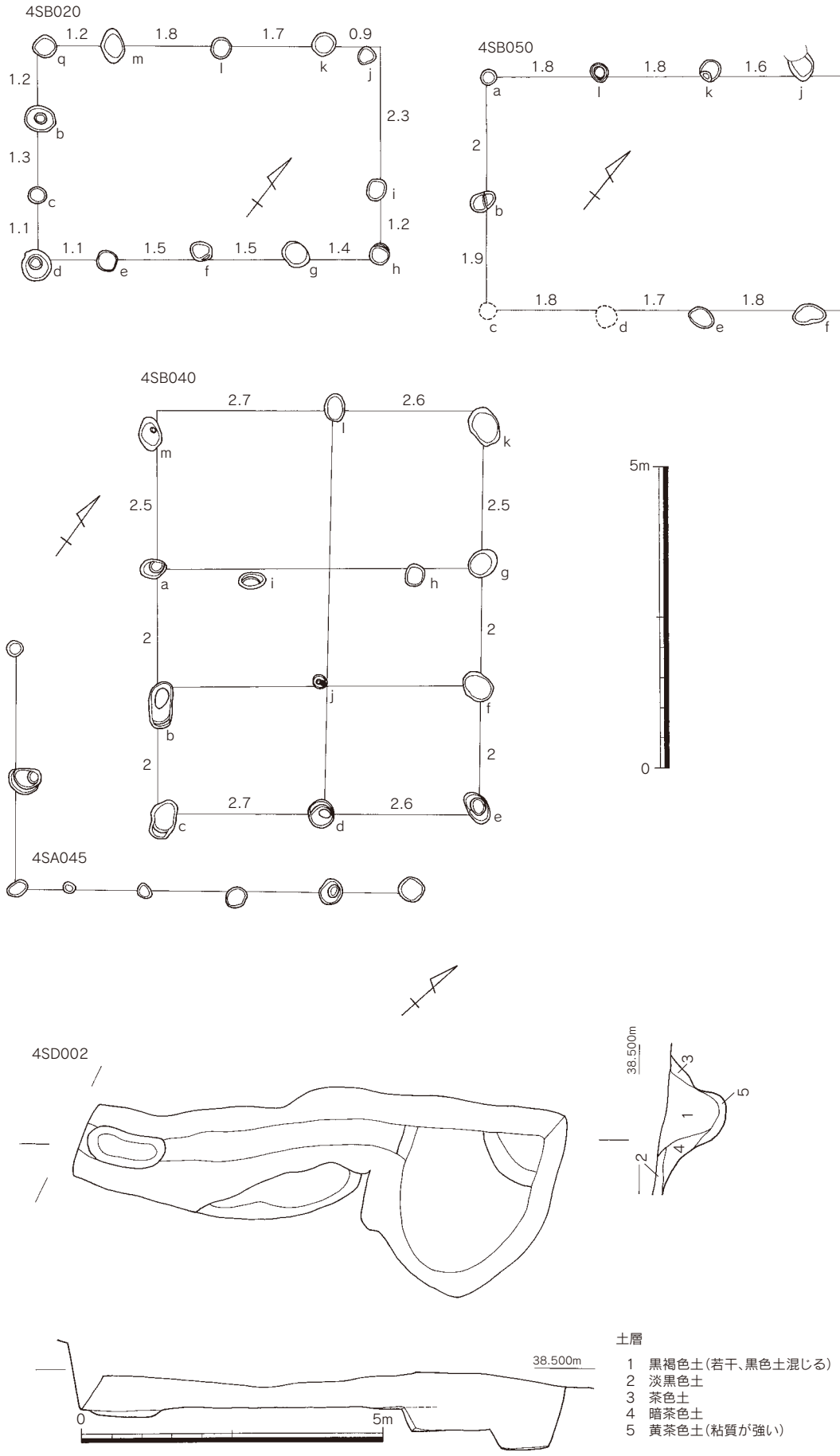


図46.建物遺構実測図（S=1/100）

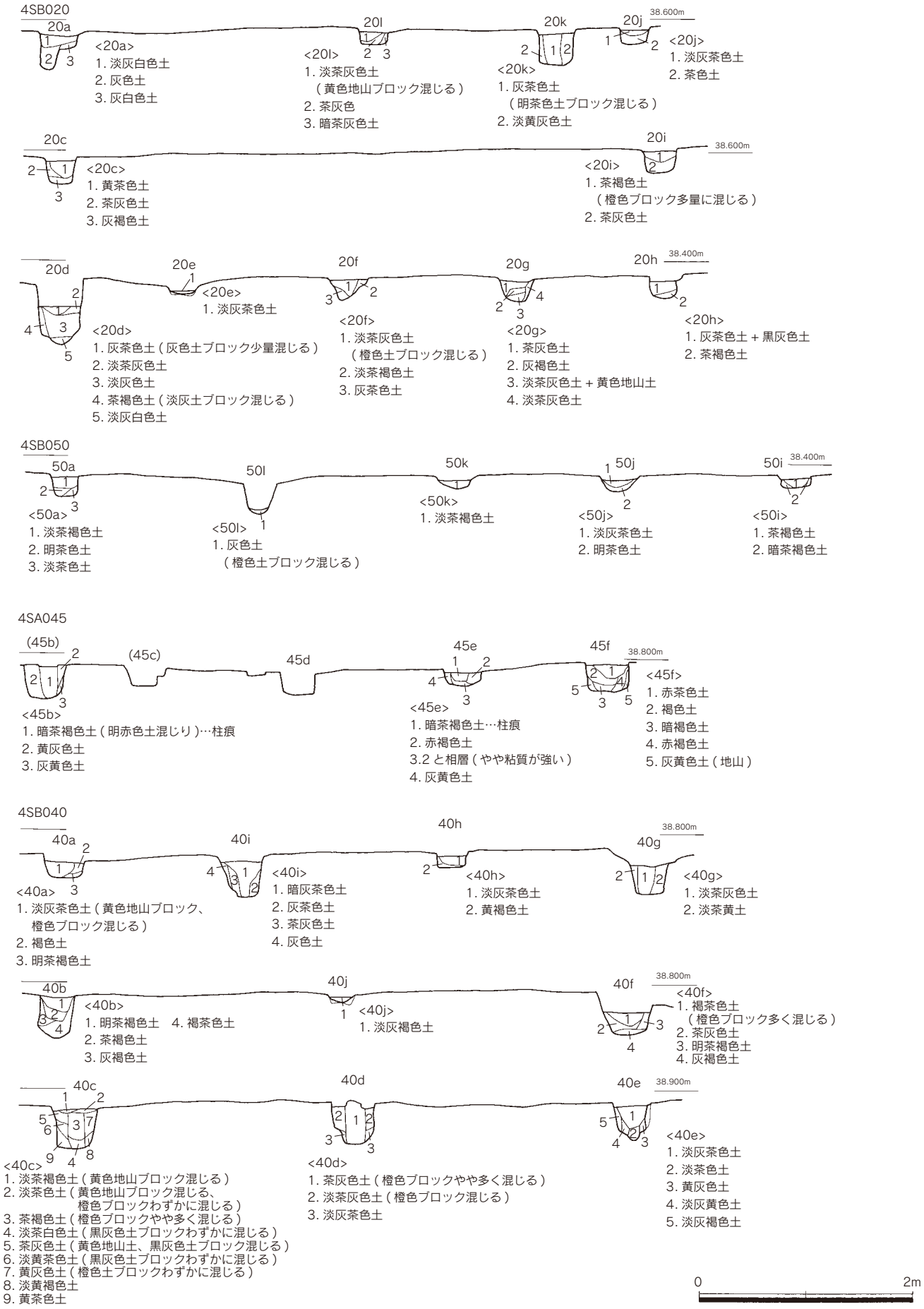


図47.建物遺構土層実測図（S=1/50）

り方は円形ないし、不整円形で長さ0.18 ～ 0.5m、深さ0.13 ～ 0.28mを測る。

2）掘立柱建物

4SB020（図46・47）　調査区北部で検出された東西4間、南北3間の掘立柱建物、主軸の振れは桁行方向でN54° 27′ Eと大きく東へ振れている。柱間は南西隅から南東隅まで西から、1.2m、1.5m、1.5m、1.4m、南東隅から北東隅まで南から、1.2m、1.2m、1.1m、北東隅から北西隅に東から、0.9m、1.7m、1.8m、1.2mを測る。掘り方は直径0.3 ～ 0.5m、深さ0.12 ～ 0.49mを測る。北東隅に関しては、柱筋が通っておらず、積極的に掘立柱建物の構造物として、考えるのは危険かもしれないが、ほかの主軸が安定しているので、一応掘立柱建物と考えておく。桁行長5.7m、梁行長3.4mを測り、占有面積19.38㎡。

4SB040（図46・47）　調査区北部で検出された東西2間、南北3間の掘立柱建物、主軸の振れは桁行方向でN30° 14′ Wと大きく西へ振れている。柱間は東西方向から西から2.7m、2.6mで、南北方向は、南から2m、2m、2.5mで、柱掘り方は円形ないし、隅丸方形で長さ0.4 ～ 0.8m、深さ0.32 ～ 0.37m。掘り方mは削平されており、深さが0.07mしか残存していなかった。北西隅の掘り方が検出されていないが、調査区外に存在する可能性がある。掘り方h、i、kは比較的ほかの掘り方より小さく浅いが(深さの平均は0.19m)が、これは束柱的な使われ方をしたためと考えられる。梁行長5.45m、桁行長6.5mを測り、占有面積は35.46㎡。

4SB050（図46・47）　調査区北部で検出された南北2間、東西5間の掘立柱建物で、主軸の振れは桁行方向でN51° 58′ Eと大きく東へ振れている。柱間は南北方向で南から1.8m、2.3mで、東西方向は西から1.8m、1.8m、1.6m、1.6m、1.7mで、柱掘り方は円形ないし、不整円形で長さ0.2 ～ 0.5m、深さ0.08 ～ 0.17mを測る。この掘立柱建物は現場では4SB020に伴う柵列と認識しており、報告書整理段階で掘立柱建物として成立することを確認した。掘方の切り合い関係から、4SB020に後出するものである。梁行長3.9m、桁行長6.8mを測り、占有面積は26.52㎡。

3）溝

4SD002（図46）　調査区北東部で検出された溝。長さ2.1m、幅0.5 ～ 0.7m、深さ0.3m。埋土は、黒褐色土(若干、黒色土が混じる)。土層からは掘り返しの可能性もある。遺構の切り合い関係から、4SX007に切られている。出土遺物から室町時代後半以降に埋没したものと考えられる。

4）道路

4SF030（図48）　調査区東部で検出された道路状遺構。調査区東側端の地形変化点で、調査区が設定された平坦面と、その東側の2mほど下がった平坦面の狭間に位置している。

現況表面からは堆積土が幅2.7m、深さ0.85mほど全域にわたって堆積していた。これを除去すると、全長24.2m、幅2mの範囲に茶色土が薄く堆積しており、それに切り込む形で、溝a（長さ19.25m、幅0.2 ～ 0.5m、深さ0.02 ～ 0.13m、溝b（長さ21.25m、幅0.1 ～ 0.4m、深さ0.02 ～ 0.12m)、溝c（長さ12.3m、幅0.15 ～ 0.3m、深さ0.03 ～ 0.1m)が検出できた。溝は、西からc、a、bと展開する。a、b、 c それぞれの埋土は灰渇色粘土で、固く締まっている。とくにaの土層は赤色土(酸化鉄)と灰色粘土が薄く重なり合って互層を形成している。基本的にaとbが対になっているが、北から南に向かって中央部あたりまで、aの0.2mほど西側にcが位置するがそれより以南では確認ができない。aとbの溝任意中点間の距離は約1mである。

地形から判断するに、北側の小路から連続していた、いわゆる山道ととらえることができ、これらの溝は何か重い荷物を荷車などの二輪のものに乗せて何度も往復した痕跡だと考えらえられる。

5）土坑

4SK001（図49）　調査区西部で検出された大型の不整円形土坑。東西長4.44m、南北長4.97m、深さ1.42m。北側は近現代の大規模な東西方向への掘削により消滅している。取り上げ時の土色は上層から渇色土、赤褐色土、暗黒色土、灰茶色粘土と4層に分けて遺物を取り上げた。出土状況図で図化している瓦質土器壺は、2層目の暗黒色土から出土している。

この瓦質土器壺が出土物内での下限年代を示していることから、この土坑が埋没したのは中世後期以降である。ただし、弥生時代、奈良時代の出土遺物があることから、周辺にその時代の遺構が存在している可能性を

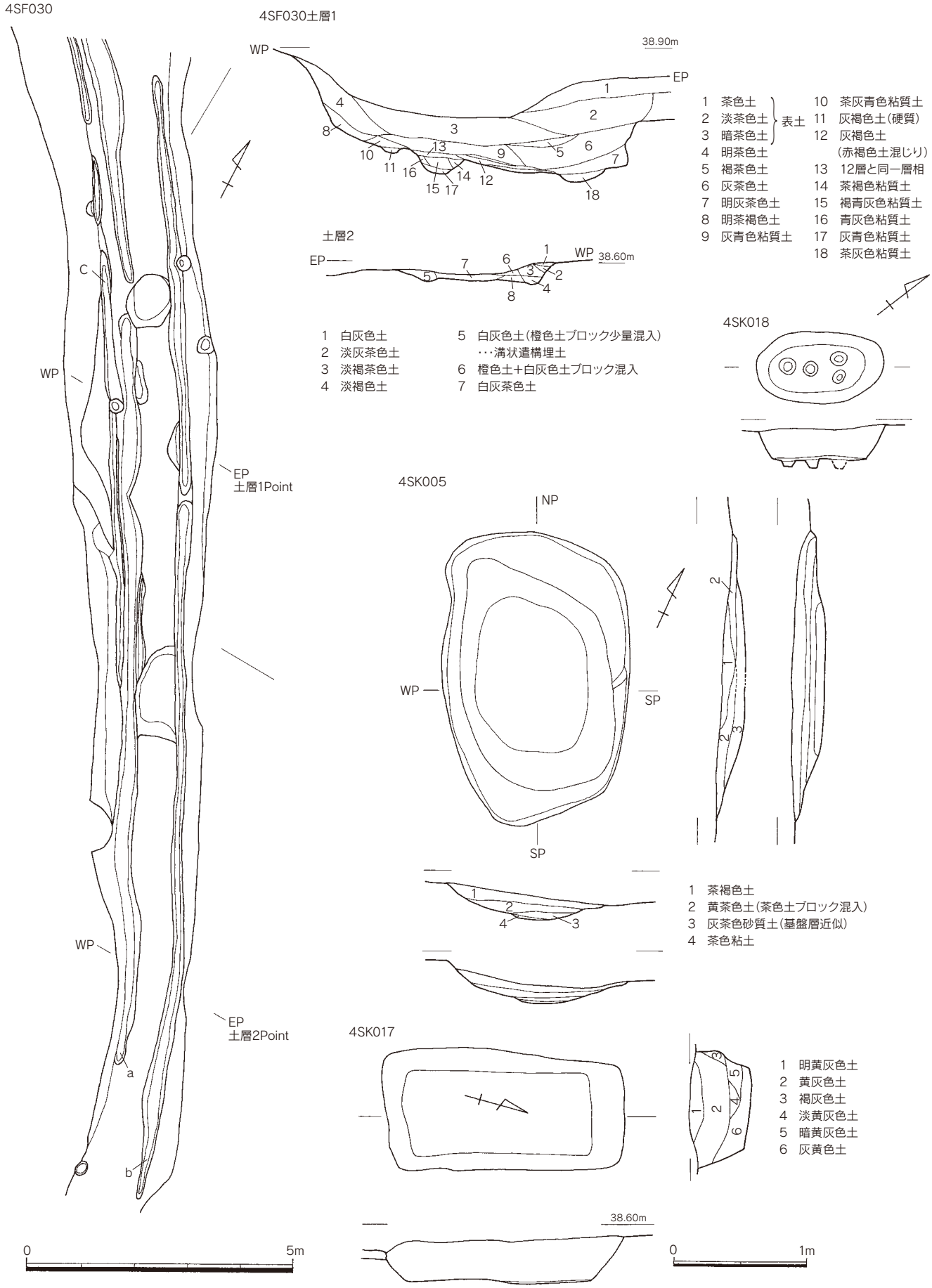


図48.道路・土坑遺構実測図(S=1/40・1/100)

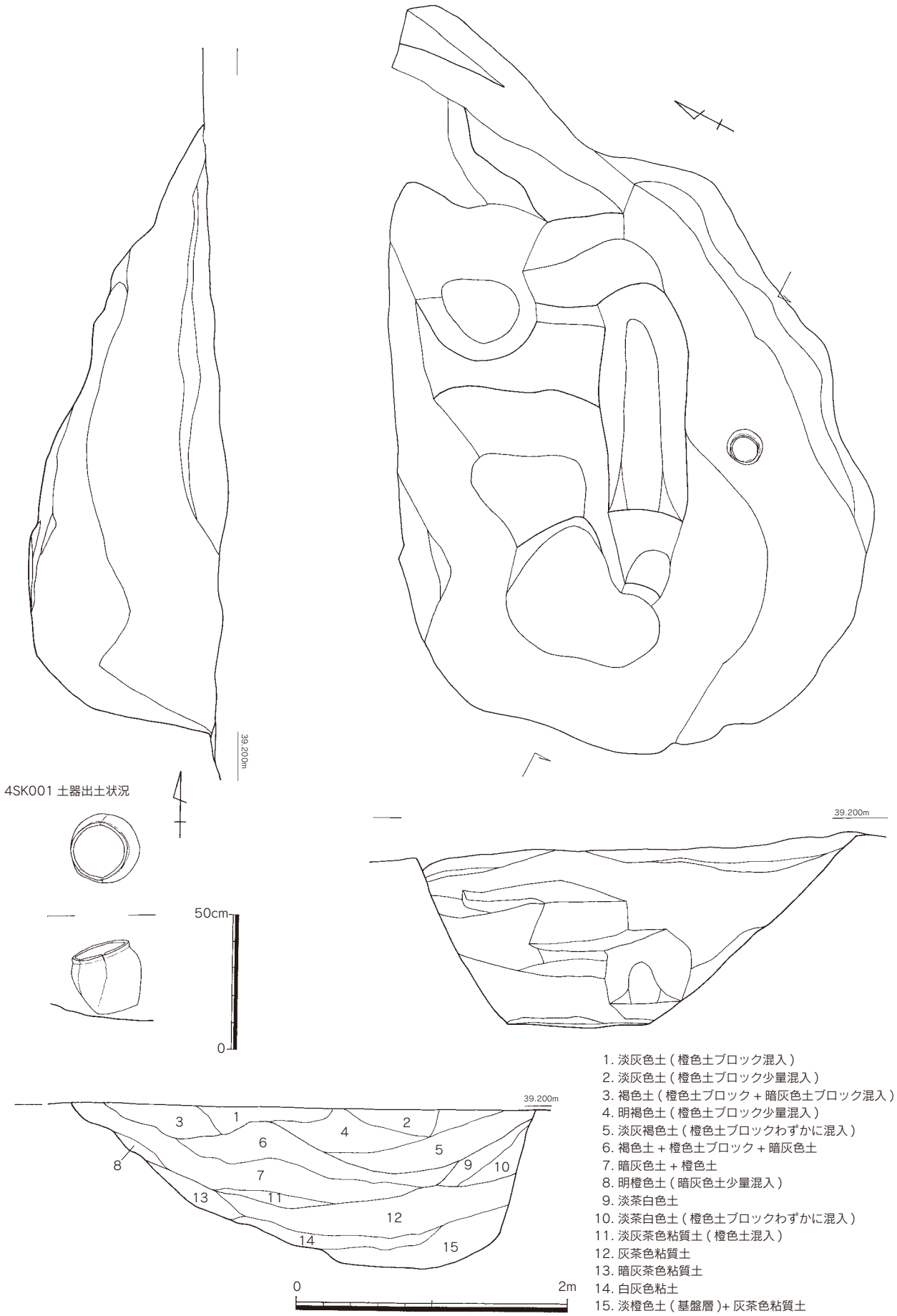


図49.4SK001遺構実測図(S=1/20・1/40)

指摘できる。

4SK005（図48）　調査区西側で検出された隅丸方形の土坑。長軸長2.2m、短軸長1.4m、深さ0.25mを測る。埋土は、土層図の通り4層に分かれる。2層目に茶色土がブロック状に混じりっていた点や、3層目が地山に近い組成から考えても、掘削から時期をおかない間に埋め戻されたと考えられる。また、遺構の深さが浅いのは、削平された可能性がある。

6）その他の遺構

4SX002（図45）　調査区北西隅で検出された不整形のたまり状遺構。調査区外に展開する。埋土は黒色土。出土遺物の年代から中世後期以降の埋没と考える。

4SX007（図45）　調査区北西隅で検出された不整形のたまり状遺構。調査区外に展開する。埋土は茶色土。出土遺物が弥生時代の突帯文付き壺だが、遺構の切り合い関係をみると、4SX002を切っているため、中世後期以降の埋没だと想定される。

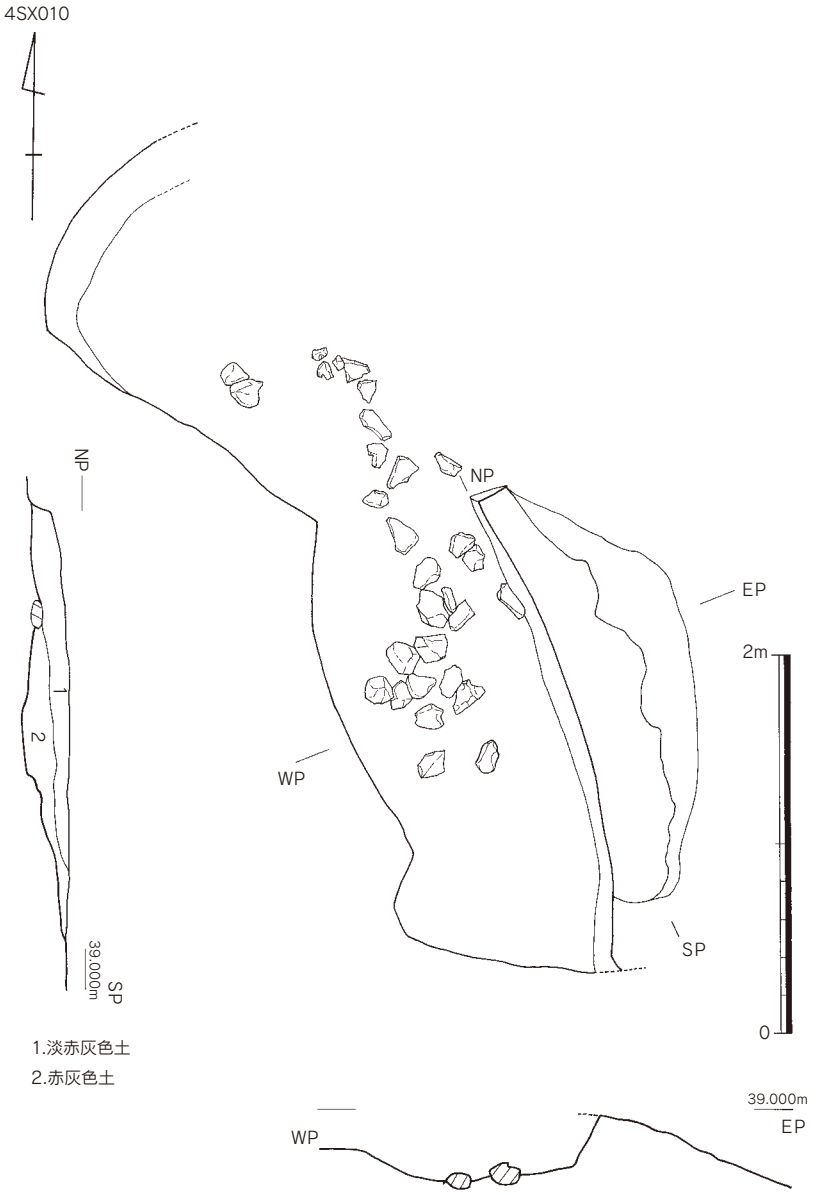


図50.4SX010遺構実測図（S=1/40）

4SX010（図50）　調査区南東部で検出された長方形のたまり状遺構。検出段階では、長軸長5.0m、短軸長1.7m、深さ0.3mを測る。検出状態から0.3mほど掘り下げると、底面に0.1 ～ 0.2mの礫群を長軸長2.5m、短軸長1.0mの不整長方形の範囲で検出した。埋土は、赤灰色土→淡灰色土。遺物からの埋没年代は不明。

4SX015（図51）　調査区北部で検出された埋甕遺構。掘方は不整方形で、長軸長0.73m、短軸長0.68m、深さ0.38mを測る。断割した土層を観察すると、掘方を直線的に掘り下げた後に、平坦にした底面に瓦質土器の甕を据え付けて使用していたと考えられる。甕を据えたあとに、土を入れて固定している。瓦質土器の内底面には灰色粘質土が4 ～ 5cm溜まっているが、この土には強い粘質があったため、甕使用時の水漏れ防止用に貼っていた可能性が指摘できる。この埋甕は、位置的には4SB020に伴う遺構と考えられる。遺物からの埋没年代は江戸時代以降。

4SX016（図45）　調査区北部で検出されたたまり状遺構。4SB040を切っている。出土遺物から江戸時代後期以降に埋没したことがわかる。

4SX017（図45）　調査区南部で検出された不明遺構。長軸長1.8m、短軸長0.9m、深さ0.34mを測る。埋土は2層に大別できる。土層図を参照してもらうと、１～５層までは表土の組成に近いような暗茶色土に、黄色の花崗岩の風化土が混じっているが、6層は比較的に単一で灰黄色土（花崗岩の風化土を含む）であることがわかる。元々の埋土は6層だったが、その上に１～５層が流れてこんで埋まったと考える。この遺構の掘方（長方形としっかりした掘方）や、遺構の長軸が南北方向に従っていることからも、土坑墓の可能性を指摘したい。

調査終了後、整理を進めていく段階で、この遺構に周辺のたまり状遺構が伴う可能性について考慮すべきことに気づいた。実際、この4SX017を取り囲むように、幅1m、深さ0.3～0.5mほどのたまり状遺構が連続しており、その一部は4SX010、4SX035として報告している。調査区の南東部突端に位置する立地を考慮すれば、4SX017を墓壙として丘陵が低く傾斜している東側に周溝を巡らす可能性も考えられるのではないか。ただし、遺物が全く出ていないことと、掘削をうけており本来の掘方が判別しにくいという点からも、可能性の指摘にとどめておきたい。

4SX018（図45）調査区北部中央で検出。長軸長0.96m、短軸長0.5m、深さ0.28mを測る。底面には直径0.1m、深さ0.04～0.05m程度の小穴が長軸方向に2つ、短軸方向に2つ、合計4つ並んでいる。検出段階で削平されているが、動物狩猟用の落とし穴だった可能性が考えられる。

4SX025（図51）　調査区北部で検出されたたまり状遺構と掘立柱建物の掘方。当初、検出段階では、中央に熱を受けたため黒色になったと想定される黒色粘土があり、それを囲むように長さ0.15m程度の礫が点在していたため、石組み炉と考えていた。断割をして土層を確認すると、掘方の東よりに直径0.4m、深さ0.45mの円形の掘方が検出されたことから、表面観察での見逃しが判明した。位置的に4SB020の掘立柱建物を構成するものだと思われる。元々、土坑があった場所に、4SB040の掘立柱建物がたてられ、その後廃絶したあとに、石組み炉として利用されたと考えられる。

4SX035（図51）調査区南東部で検出された楕円状たまり遺構。長軸長2.45m、短軸長1.25m、深さ0.3m。4SX010と同じく底面にそって0.05～0.2m程度の礫が点在する。

3.遺物

1）掘立柱建物

4SB020f（図52）

弥生土器

壺（1）　体部破片。現存長2.9cm。内面刷毛目調整。屈曲部に粘土接合痕跡あり。

4SB020g（図52）

国産陶器

椀（2）　口縁部破片。現存長2.3cm。薄緑色の釉を漬け掛けた後、内面に白色の平行線（幅1.5～2mm）を巡らす。

2）道路

4SF030黄灰色土（図52）

肥前系磁器

椀（3・4）　3は口縁部破片。残存長1.8cm。内面口縁部付近に2条の呉須での平行線を施す。4は底部から体部にかけての破片。現存器高1.2cm、復原底径9.0cm。漬け掛け施釉の後、高台の畳付体部の立ち上がりが急なため筒形椀と想定可能である。

3）土坑

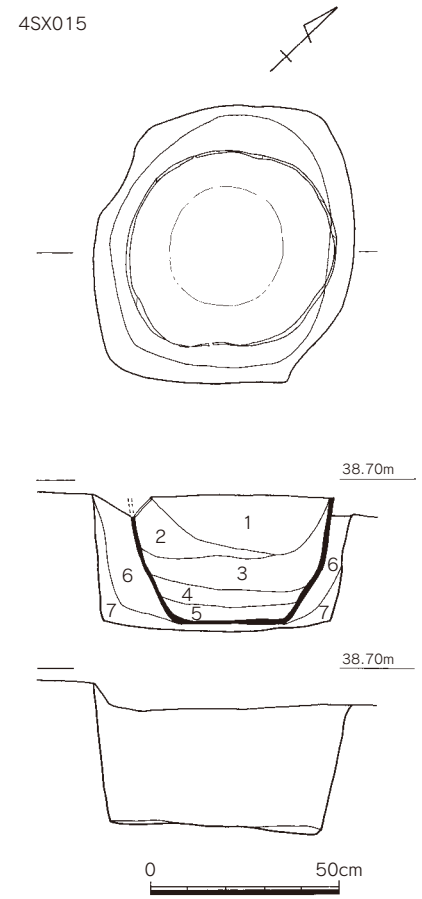
4SK001褐色土（図52）

土師器

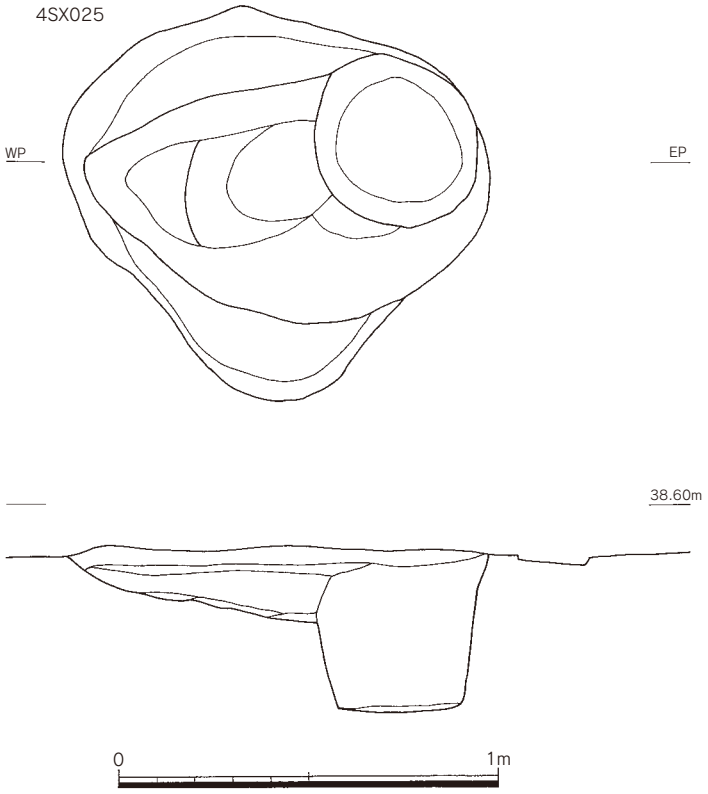
高坏（5）　体部破片。残存長7.2cm。表面が摩耗して調整は不明。内面は指頭圧痕が残る。

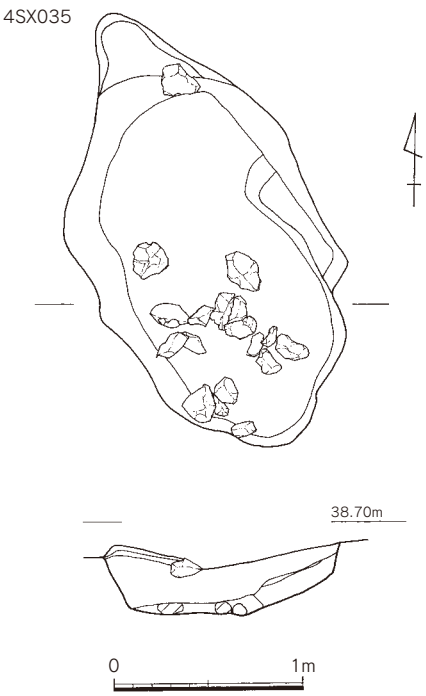
土製品

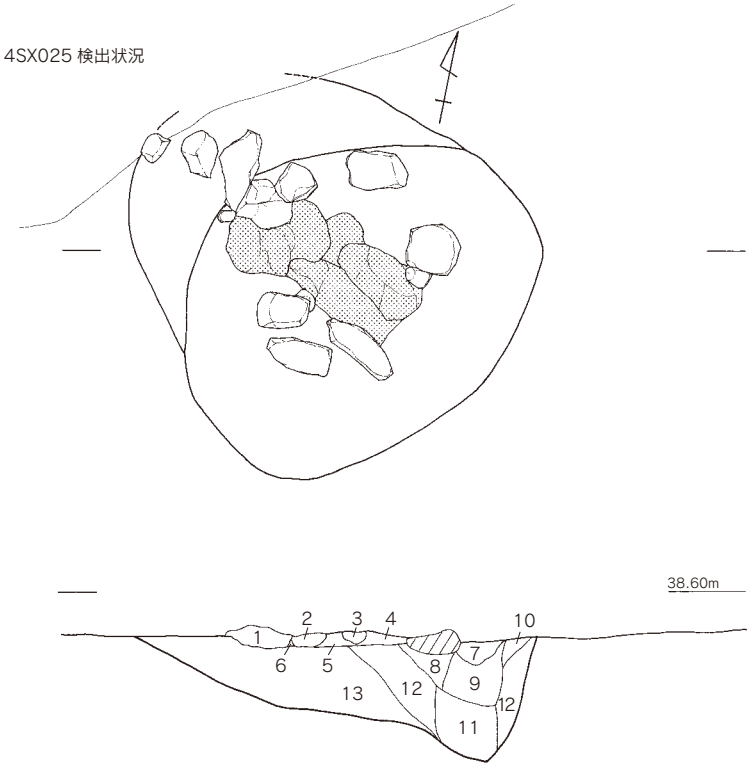
小椀（6）　手づくねで成形した土器。現存長2.7cm。内外面に指頭圧痕が残る。



1. 茶褐色粘質土
2. 灰茶色土
3. 淡茶灰色土
4. 暗灰色土
5. 灰色粘質土
6. 灰褐色粘質土
7. 暗赤褐色土







1. 黒灰色土（灰茶色土混入）
2. 暗黒灰色土
3.2 層と同一層相
4. 赤茶色粘質土
5. 赤灰茶色粘質土（灰褐色土を若干混入）
6. 暗茶色土
7. 淡黄色土
8. 黄赤色土
9. 赤灰色土
10. 灰褐色土
11. 赤灰茶色土（赤褐色土をブロック状に含む）
12. 暗灰青色粘質土
13. 茶褐色土

図51.その他の遺構実測図(S=1/20・1/40)

4SK001暗黒色土（図52）

須恵器

坏c（7）　底部破片。現存長2.0cm。高台断面は四角形を呈す。

瓦質土器

壺（8）　ほぼ完形で出土した甕。口径21.9cm、器高23.4cm、底径15.8cm。内面の調整が粗いため粘土接合痕跡がよく観察できる。粘土紐を5段積み重ねて形成している。内面の調整は横方向の刷毛目。外面は縦方向の刷毛目調整の後に、肩部は横方向の刷毛目で仕上げている。外面の底部と体部の境目には、底部と体部を接合した後の指頭圧痕がみえる。底部には摩耗しており不明瞭だが、刷毛目調整が観察できる。焼成はやや不良。色調は外面が、淡白褐色で部分的に灰黒色。内面は暗灰黒色。

瓦

平瓦（9）　破片。焼成はやや良好。色調は灰白色を呈す。格子叩きで、測端面は上部がヘラ削り調整で下部が未調整のため、分割界線がみてとれる。

4SK001灰茶色粘土（図52）

弥生土器

壺（10）　体部屈曲部の破片。突帯が巡る。表面は剥離がひどく調整が不明。突帯部を中心として、淡赤褐色が認められるため、元々は丹塗りだった可能性も考えられる。復原すると、瓢形になるタイプ。特徴から須玖Ⅱ式に位置づけられ、弥生時代中期中葉以降と考えられる。

4SK005（図52）

瓦

平瓦（11）　破片。焼成は良好。縄目叩きを施し、端部はヘラ切り調整。淡黒灰色全体に二次焼成を受けている。

4）その他の遺構

4SX002黒色土（図52）

瓦質土器

擂鉢（12）　底部から体部の破片。外面は縦方向の刷毛目調整。内面は横方向の刷毛目調整の後、4条を一単位にして擂目が刻まれている。

4SX007（図52）

弥生土器

壺（13）　体部の突帯の破片。上面側を平坦に仕上げている。部分的に淡赤渇色変しているのは、丹塗りの痕跡か。4SK001灰茶色粘土出土の壺（10）と同じく、須玖Ⅱ式。

4SX015灰渇色粘土（図52）

瓦質土器

甕（14）　口縁部を欠損する大甕。現存器高38.1cm、底径32.0cm。現存している体部に、3カ所の粘土接合痕跡が認められる。内外面をやや粗い刷毛目調整で仕上げている。

4SX015茶渇色粘質土（図52）

瓦質土器

甕（15）　口縁部破片。焼成は不良。口縁端部は平滑で、直線的な端部を呈す。体部からは大きく外反している。内外面に横方向の刷毛目調整を施す。外面の淡白灰色の色調や、調整手法の近似性、また14の大甕内の埋土から出土したことから考えて、14の口縁部に当たるものと思われる。

4SX016（図52）

国産陶器

椀（15）　口縁部破片。残存長3.8cm。内外面を白濁釉で刷毛塗りを施す。

4SX021（図52）

肥前系磁器

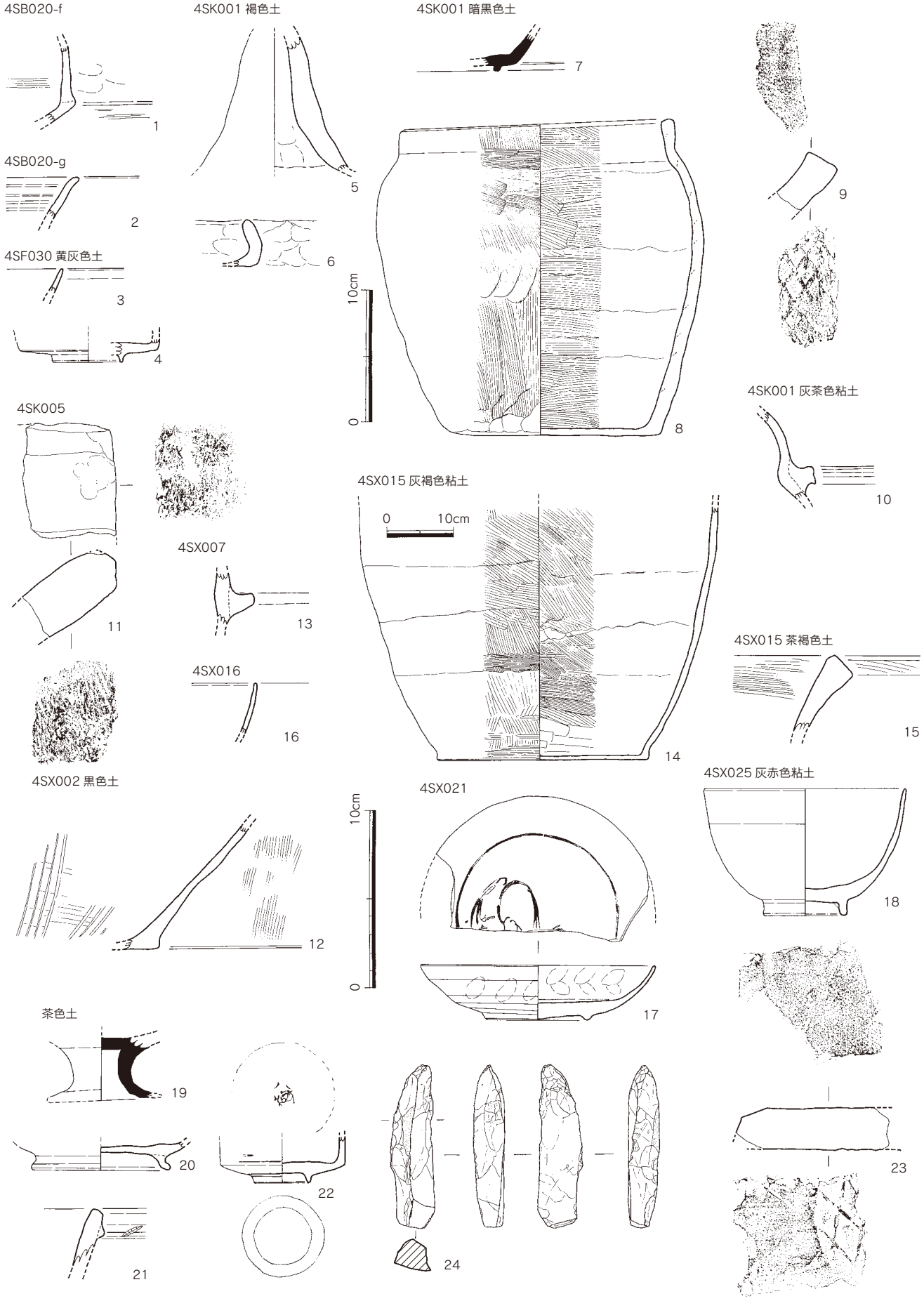


図52.出土遺物実測図(S=1/3、8は1/4、14は1/8)

皿（17）　復原口径13.2cm、器高3.1cm、底径5.8cm。全面施釉した後、畳付だけ釉を削りとっている。体部成形時の指頭圧痕が内外面で連続して観察できる。内面見込部に呉須により、おそらく樹木類を描いている。二次焼成を受けており、全体的に色調は暗黄灰色を呈す。

4SX025灰赤色土（図52）

国産陶器

椀（18）　復原口径11.4cm、器高7.1cm、底径4.7cm。全面施釉で釉調は淡灰白色を呈す。釉は畳付部のみ、削り取っている。

5）土層

茶色土（図52）

須恵器

高坏（19）　残存長3.4cm。脚部長が短いタイプ。

土師器

坏c（20）　残存長1.6cm、復原底径7.8cm。焼成はやや不良。高台はハの字形に外に広がるタイプ。底部外面に板状圧痕あり。

瓦質土器

鉢（21）　口縁部破片。焼成が不良で、還元状態になっている。色調は赤褐色。口縁部から1cmほど下がったところに突帯を巡らせ、その突帯に右肩上がりの刻み目を施す。

肥前系磁器

椀（22）　筒形椀。残存器高2.5cm、底径3.2cm。内定面中央に呉須の筆書きにより、昆虫文が崩れたような図案を描く。外面には呉須による1条線が2条巡っている。

瓦

平瓦（23）　焼成は良好。色調は灰褐色を呈す。格子目叩き。端部はヘラ削り調整。

石製品

剥片（24）　長軸長9.2cm、短軸長1.8cm、厚さ1.8cm。安山岩製。石核から縦長に剥離させた剥片を、先端部を鋭利にする目的で、両側からリタッチをして三稜尖頭器として、仕上げる途中に廃棄された未製品と考えられる。後期旧石器。

4.小結

調査区の歴史的な土地利用の変遷を以下、箇条書きでまとめておく。

- 後期旧石器の石器（未製品）が出土していることから、おそらく当該期には、獲物を捕るための小規模のキャンプサイトがあったと想定できる。
- 4SX018はその形態から縄文時代後期に隆盛した狩猟用の落とし穴の可能性が高い。ただし、現在残っている遺構の深さが0.3mほどしかないことから、当時の標高からはかなりの削平を受けている可能性がある。
- 弥生時代中期中葉の土器が散見されるが、具体的な遺構は検出されていない。
- 古墳時代後期の土師器、須恵器などが少量認められる。周辺に古墳などが存在する可能性を指摘できる。
- 奈良時代～平安時代にかけても遺物が散見される。
- 時期は特定できないが、丘陵の段下に円形に溝を巡らす墳墓が存在していた可能性がある。上記の古墳～奈良時代の遺物の点在や、周辺の遺跡（長浦遺跡第2次調査奈良時代の周溝を伴う墳墓）も参考になろう。
- 中世後期には、溝（4SD002）や竪穴式土坑（4SK001）が作られるなど、調査区周辺の丘陵の利用が促進していったことがわかった。長浦遺跡第2次調査包含層出土の中世後期に比定できる土器群からもそれは裏付けられる。
- 近世後期から末にかけては、掘立柱建物の立て替えや調査区の東側を道路（4SF030）が通るなど、積極的な利用が目立つ。この道路は現況で北側の小路との連続性が確認できるため、近年まで使用されていたことがわかる（写真図版7下段参照のこと）。太宰府市史民俗編の向佐野の聞き取り調査で、この道路がいわゆる林道と

して使われていたことが判明している[1)]。立地より墓所をつなぐ道だった可能性を考えている。　（髙橋　学）

註

1）「第1章ムラのしくみ第2編社会伝承」『太宰府市史　民俗資料編』1993より、P299に記載されている向佐野区要図を参照した。

表3.日焼遺跡　第4次調査　遺構一覧

S 番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	前後関係	時期	地区番号
1	4SK001	土坑			中世後期～	C9 ～ D10
2	4SK002	土坑	黒色土	2 → 7	近世～	G12
3	4SD003	溝状	茶色土			H10
4	4SK004	土坑	黄色土	8 → 4 → 3		H10
5	4SK005	土坑			近世～	F10
6	4SX006	たまり状				E4
7	4SK007	土坑			奈良～	G11
8	4SK008	土坑				H10
9	4SX009	たまり状		9 → 4		H10
10	4SX010	墓または石積み	赤褐土			E3
11	4SK011	土坑				F9
12	4SK012	土坑群				I6 ～
13	4SK013	土坑	暗黒土			G11
14	4SK014	土坑	茶褐土			G11
15	4SX015	埋甕				H9
16	4SK016	土坑				I7
17	4SK017	土坑			江戸末～明治	D4
18	4SX018	落とし穴？				G9
19	4SX019	Pit				H9
20	4SB020	掘立柱建物		20 → 40	18c ～	H9 ～
21	4SX021	Pit	茶色土		17c ～	J7
22	4SX022	Pit	茶色土			F12
25	4SX025	石組み遺構		25 → 20		I9
30	4SD030	溝または道				I3 ～
35	4SK035	土坑		35 → 10		D3
40	4SB040	掘立柱建物		20 → 40		H6 ～ 8
45	4SA045	柵列				G8 ～ H6
50	4SB050	掘立柱建物		50 → 20		H6 ～ G9

日焼遺跡　第5次調査

1.基本土層

調査区は南西丘陵を含む5,420㎡に及び、調査の進行順や立地条件などから1 ～ 4区に分けて調査をおこなっている。北東にひらけた南西丘陵地は3区、丘陵裾から丘陵前面の平坦地を1・2・4区として調査を進めた。2区では東に日焼遺跡第8次調査が隣接している。

1･2･4区は調査区が隣接している。調査区は1区がもっとも南に位置し、4区、2区の順で北につながっている。2・4区は近世以降の宅地開発により大きく削平を受けており、遺構検出面の標高33.2m前後を測る。1区は2・4区に比べ、遺構の遺存状況がよく遺構検出面の標高34.1m前後である。遺構検出面では約1mの高低差がある。

1区の基本層位は表土を60cm程度さげると、茶色土層が広がる。これを遺構検出時の出土遺物の取り上げ土層とした。茶色土を除去すると遺構面が検出される。2区の基本層位は重機による遺構検出時の出土遺物を灰色土、後の遺構検出では茶色土の任意土層を設定した。茶色土では近現代の陶磁器類が出土している。

4区の基本層位は遺構検出で表土の任意土層を設定し、検出を行った。

宮ノ本丘陵上の南西丘陵を調査した3区では、樹木伐採の後の調査前の情報を旧地形データとして航測測量をおこなった。丘陵地には裾の向佐野地域から登り付く東西、南北の切り通し状の路が残存していた。この路は丘陵の南側が近世以降、向佐野村の墓地として使用されており、路として使用されていた。調査を行った丘陵地形は北と東とにひらけており、斜面は南北の切り通し状の路によって分断されている。

重機による表土剥ぎに伴う出土遺物は灰色土で取上をおこなった。灰色土からは近現代の陶磁器が出土している。東斜面では茶色土・暗茶色土、北斜面では茶色土の任意土層を設定し、遺構検出をおこなった。丘陵の標高差は2区に隣接する東斜面裾で34.0mで、近世の路付近では50.0mを測る。

北斜面では茶色土層から奈良時代後期と弥生時代中後期の遺物のみが出土している。この北斜面は周辺の開発により斜面の半分近くが崩落した状況がみられた。北斜面からは東斜面でみられた近現代の遺物がまったく出土しておらず、検出遺構は弥生時代中期の小穴が散見された。現代の開発以前の旧地形が残存していたのは北斜面であったと推定される。

東斜面では、清掃時の任意土層である茶色土で16世紀までの遺物が出土し、遺構検出時の暗茶色土層では17世紀後半以降の遺物が出土している。東斜面上では灰色土・茶色土・暗灰色土中から黒曜石の石鏃や剥片が複数出土している。東斜面の標高39.0 ～ 45.0mには9世紀中頃～ 10世紀後半にかけての墳墓が12基検出され、中腹では古代の墳墓に切り合う近世墓を検出した。標高39.0mの丘陵中腹は、近世に墓地として使用するために掘削して平場を形成しており、ここで検出した古代墳墓のほとんどが削平されている。近世において墓地として使用されたこの中腹の段はのちに防空壕が掘られ、薬莢を採集している。東斜面・北斜面を含めて、未検出の墳墓の確認と石鏃の出土から想定される遺物包含層の範囲確認のため、6カ所にトレンチを設定した。しかし、13基以上の墳墓や包含層は確認できなかった。13基の墳墓は丘陵に沿い横並びに群を成して検出されている。等高線に沿って横並びに配された墳墓群を標高の高い順から44.0 ～ 45.0mの上段・42.0 ～ 43.0mの中段・39.0mの下段（丘陵中腹部分）の3群に分かれて分布している。このうち、2基（5ST317、360）からは瑞花双鳥八稜鏡と海獣葡萄鏡が出土した。区画整理事業が調査原因であることから、旧地形と墳墓の風景を外観できる機会は調査期間中に限られた。太宰府市区画整理課との協議の結果、地域住民への啓発活動として平成16（2004）年3月13日に、現地説明会を実施した。　（髙橋学・柳智子）

2.遺構

1）1区検出遺構

a.掘立柱建物

5SB030（図54）　調査区南部で検出された掘立柱建物。南北2間東西3間の東西棟で、梁行2.0m、桁行4.9mを測る。梁行の柱間は北からそれぞれ1m。北側の桁行の柱間はそれぞれ1.6mを測る。南側の桁行の掘方の1つは、攪乱によって破壊されている。各掘方は円形、隅丸方形、方形と多様である。掘方の深さはおおむね0.15m

図53.日焼遺跡第5次調査　1区遺構配置図(S=1/200)

程度であることから、後生に削平されていると考えられる。5SD015の埋没後に建てられている。出土遺物から近世段階に埋没したと考えられる。

b.溝

5SD005（図53）

調査区南部で検出された東西方向に伸びる溝。検出長5.2m、幅0.7m、深さ0.15m。埋土は灰茶色粘質土。出土遺物から中世以降に埋没したと考えられる。

5SD010（図54）

調査区東側で南北方向に伸びる溝。検出長8.7m、幅0.7m、深さ0.25m。埋土は灰色土。出土遺物から近世段階に埋没したと考えられる。

5SD015（図55・58）

調査区中央部を南北方向に伸びる溝。検出長35.4m、幅3.5～7m、深さ0.3～0.4m。埋土は南側では固く締まった灰茶色粘質土が0.15～0.2mほど堆積している。中央部から北部に至るとさきほどの灰茶色粘質土とおなじく明灰褐色粘質土層が堆積しており、固く締まっている。そらの締まった埋土の下層には、細かく平行堆積した土層が確認できる。それらの堆積土を掘り下げると、溝の底は、平坦な面が広がっている。溝底のやや西寄りに、検出長35.4m、幅0.6m、深さ0.13～0.2mを測る溝が南北方向へ伸びている。この溝の埋土は、灰色砂で非常に固く締まっている。この灰色砂の溝の方位は、G.N21－48′5″Wと大きく西に振れている。また、北部では同じく溝底に、5SX040とした小穴群があるが、これについては後述する。出土遺物から埋没時期は8世紀後半と考えられる。

5SD017（図54）

調査区中央部東寄りに位置する逆コの字型の溝。地形が西から東に傾斜しているため、西側は掘方の深さが深くなっている。検出長13.4m、幅0.6～1.8m、深さ0.15～0.43m。埋土は土層観察図の通り、大きく2層に分かれており、茶色土に黄茶色土が切り込んでいる。出土遺物から近世後期～末に埋没したと考えられる。

5SD020（図54）

調査区中部東寄りで検出された南北方向の溝。検出長17.7m、幅1.3m、深さは0.15cm。埋土は灰茶色土。5SD017と切り合い関係にあり、5SD017より古い。5SD017にきられた南側は北側と違って、灰褐色土を除去した後に、U字型の溝が検出されていることからも本来は別遺構の可能性も考えられる。埋土は、埋没した順番から黒灰色→灰色土→茶色土→灰茶色土となる。出土遺物から中世段階に埋没したあと、さらに近世段階でも堆積が進んだことがわかる。

5SD045（図54）

調査区南部から中央部で検出された南北方向の溝。やや蛇行しながら東に振った方向にのびる。検出長21m、幅0.6m、深さ0.26m。埋土は堆積した順番に、淡灰色砂質土→灰茶褐色土。出土遺物は安山岩の剥片のみ。5SD015と5SD055との切り合い関係より、奈良時代後期に5SD015が施工される前段階で埋没したと考えられる。

5SD050（図57）

調査区中央東寄りで検出された南北方向の溝。検出長3.8m、幅0.75m、深さ0.18m。埋土は堆積順で、燈色粗砂→灰白色砂→茶灰色砂→燈色土（白色砂粒須恵器甕片含）→茶灰色土（白色砂粒須恵器甕片含）。溝に対し平行に断ち割ってみたが、ほぼ水平堆積であることがわかった。上層の二層は厚さが2～10cmであるが、南北2.8mの範囲に須恵器の甕片が多量に検出され、なおかつそれぞれが重なっていないことや、同一器種であることから、意図的に須恵器の甕片を散布したものと考えている。この須恵器破片を含む層が硬化面となりかたく締まっている。出土遺物から8世紀後半の埋没と考えられる。

5SD055（図56）

調査区南部で検出された南北方向の溝。方位はやや西へ振れる。検出3.3m、幅0.5m、深さ0.2m。埋土は茶褐色土。出土遺物から奈良時代後期に埋没したと考えられる。

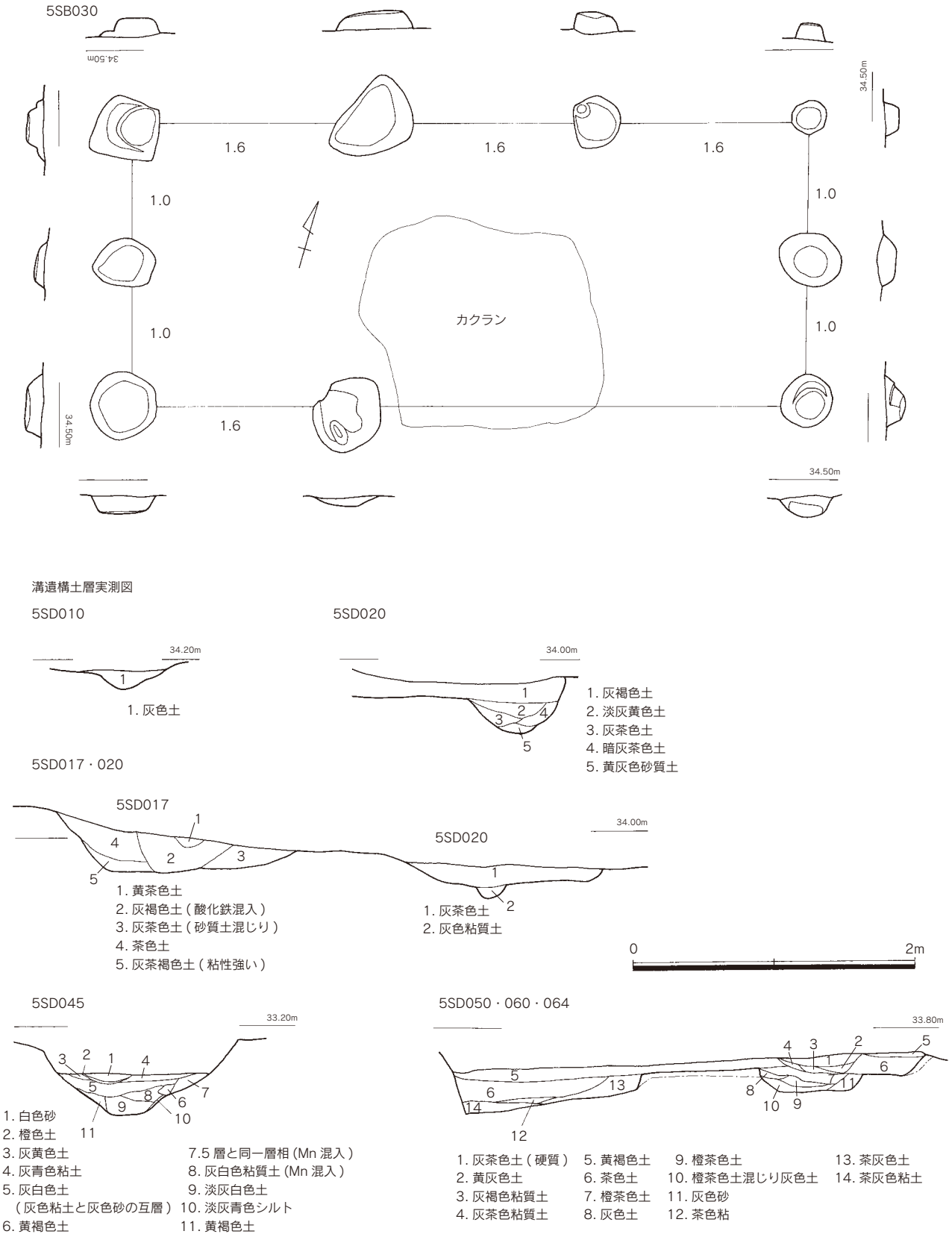


図54.1区遺構実測図(S=1/40)

図55.1区5SD015遺構実測図（S=1/200）

5SD056（図56）

調査区南部で検出された南北方向の溝。方位はやや西へ振れる。検出5.7m、幅0.45m、深さ0.07m。埋土は茶褐色土。出土遺物から奈良時代後期に埋没したと考えられる。

c.土坑

5SK008（図53）

調査区南部で検出された土坑。南北長2m、東西長1.6m、深さ1.2m。土色は渇灰色粘土。掘方は遺構面から0.3～0.6m下げた段階で、隅丸方形のプランが確認でき、それから0.3m程度掘り下げて段がつき、底面にいたる。そのプランから井戸の可能性も考えられるが、積極的な証左に乏しいので、ここでは土坑としておく。出土遺物から近世以降の埋没の可能性が高いと考えられる。

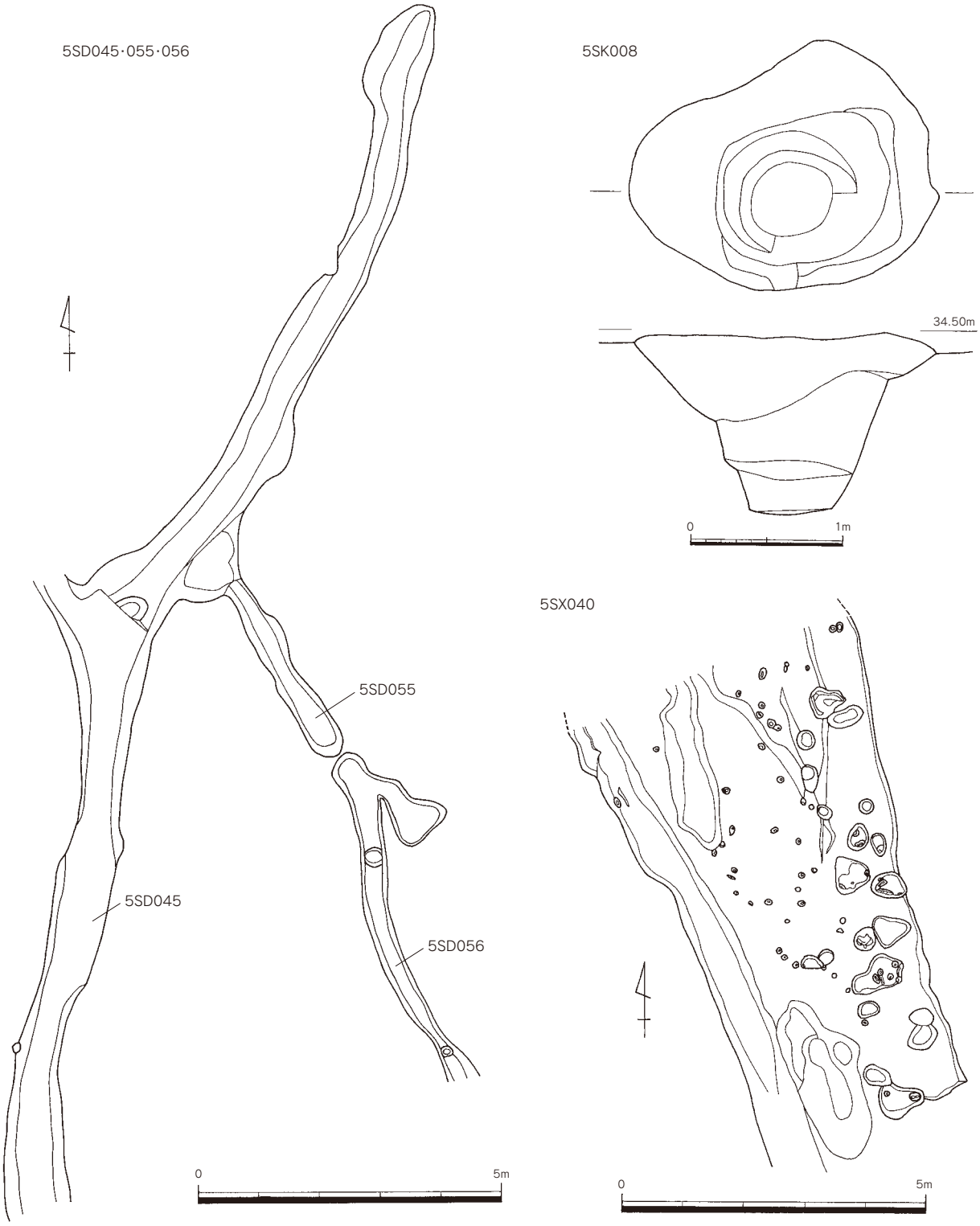


図56.1区溝および土坑遺構実測図（S=1/40・1/100）

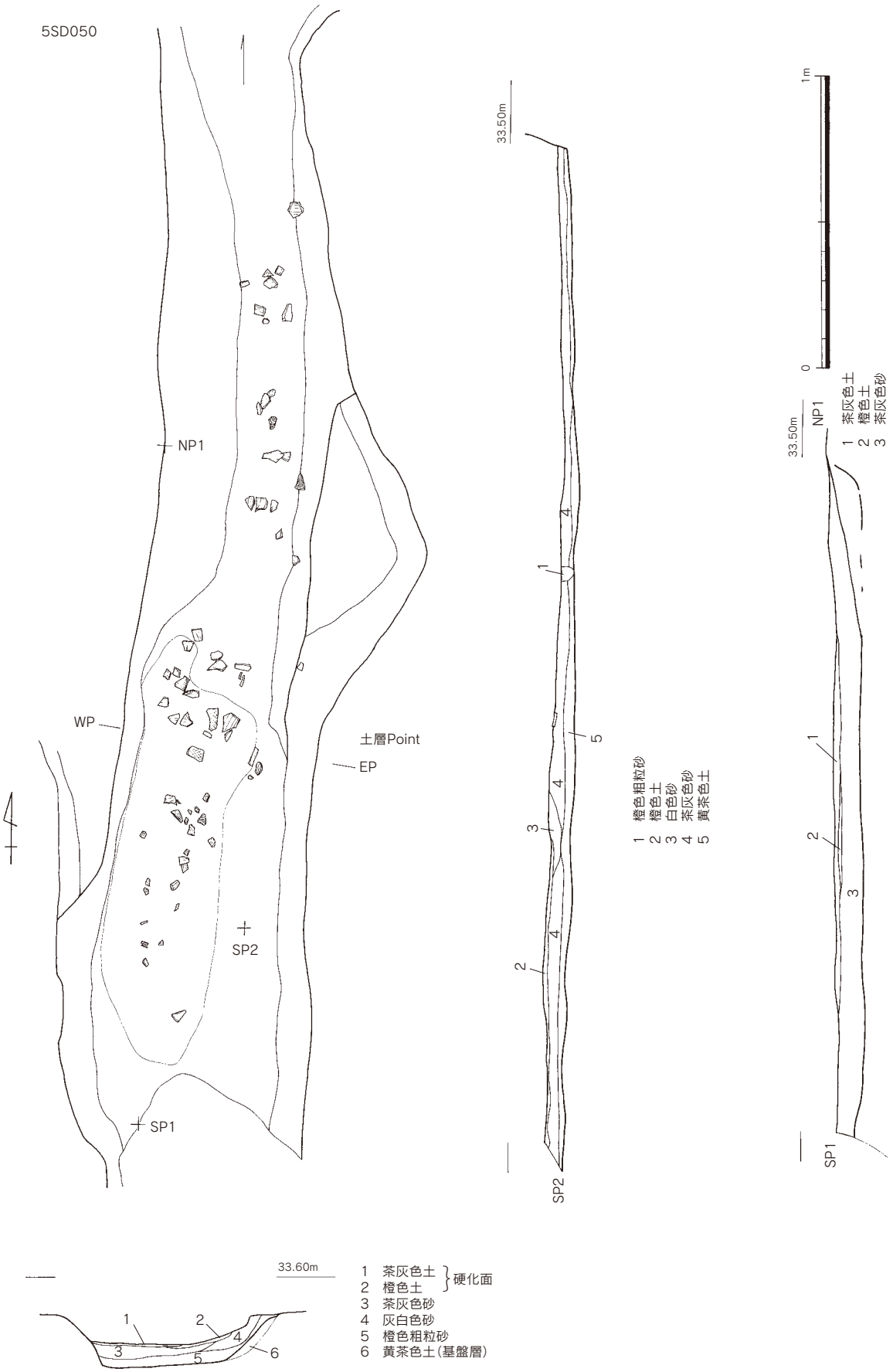


図57.1区5SD050遺構実測図（S=1/20）

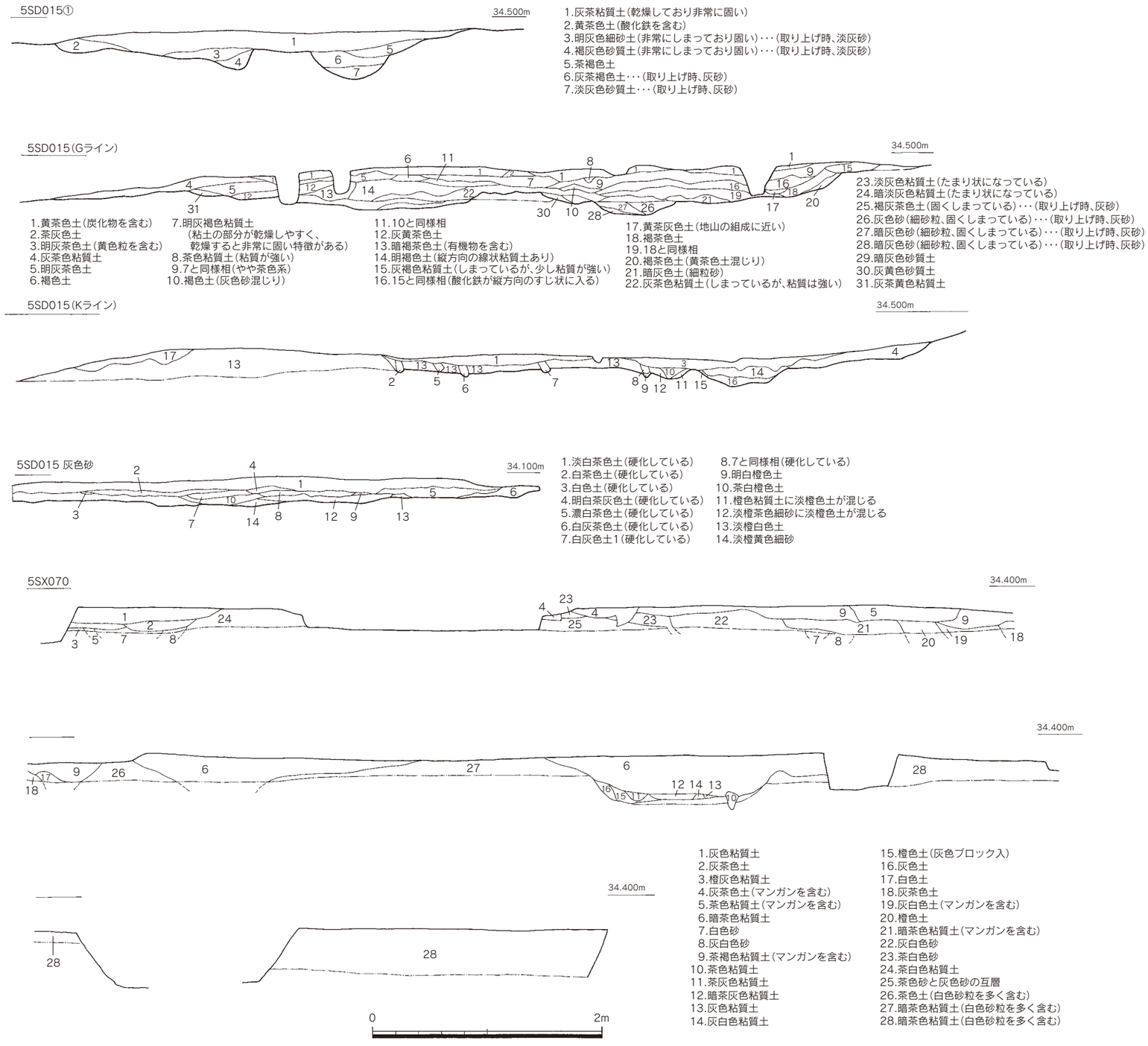


図58.1区溝およびその他の遺構実測図（S=1/40）

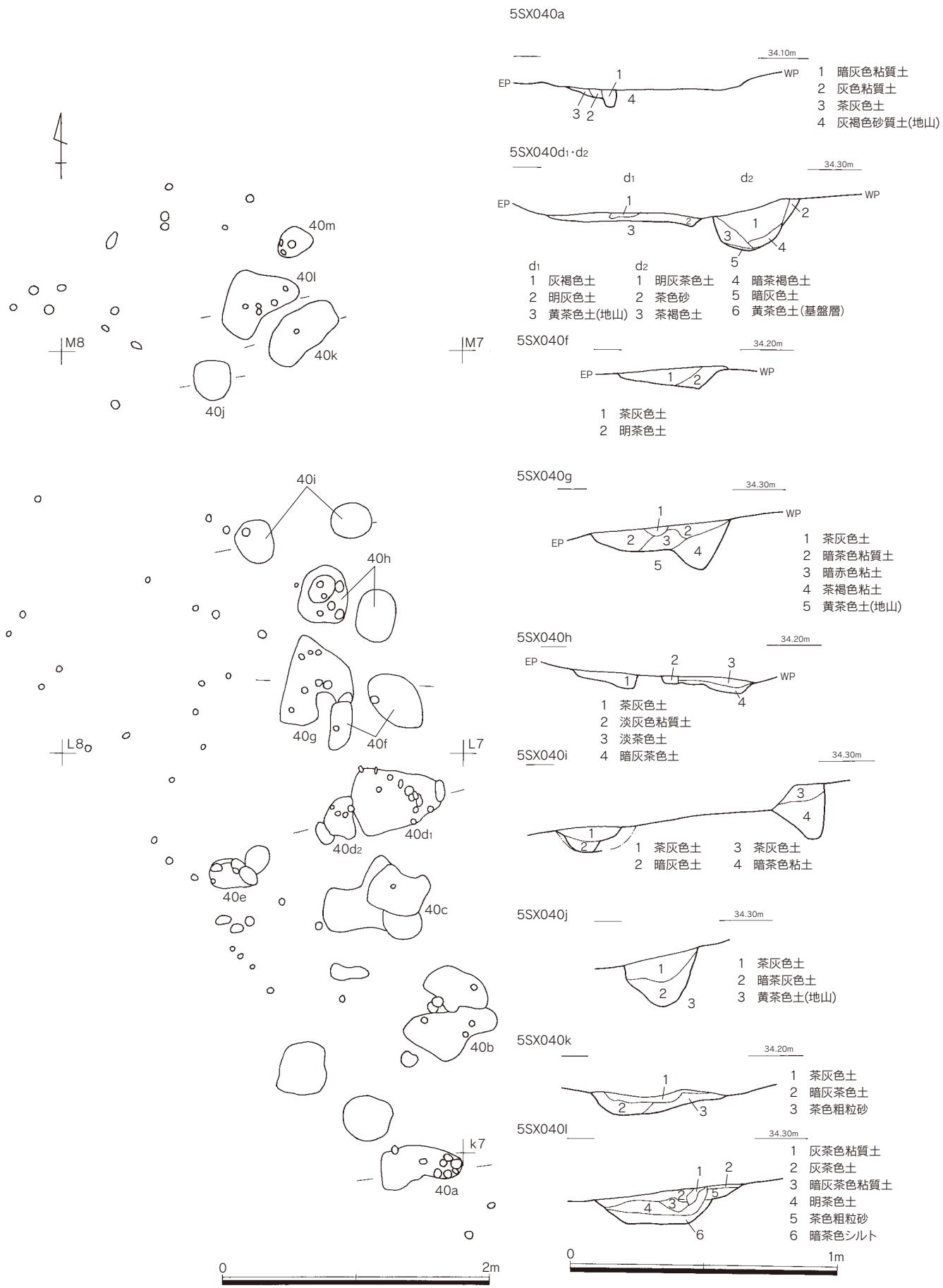


図59.1区5SX040遺構実測図(S=1/20・1/40)

5SK041（図53）

調査区北部で検出された方形土坑。東西長1m、南北長1m、深さ0.58m。I区とII区との調査区の間に位置していたため、II区の調査により全形が明らかになった。埋土は茶灰色粘質土。

d.その他の遺構

5SX011（図53）

調査区南部で検出された小穴群。埋土は灰茶色粘質土。出土遺物から近世後期に埋没したと考えられる。

5SX028（図53）

調査区中央部東寄りで検出されたたまり状遺構。5SD020、5SD027に切られる。埋土は灰色土。出土遺物から奈良時代後期以降に埋没した可能性がある。

5SX032（図53）

調査区北部で検出されたたまり状遺構で東西2m、南北2.5mの範囲に広がる。埋土は黒灰色土。切り合い関係では5SD015を切る。出土遺物から奈良時代後期以降に埋没したことが考えられる。

5SX035（図53）

調査区北部東寄りで検出されたたまり状遺構。南北長4.5m、東西長2.5m、深さ0.25m。埋土は茶色土。茶色土を掘り下げると南北方向の溝が検出された。この溝をたまりに伴うものとしてとりあつかったため、ここでは不明遺構として報告する。溝は、検出長6.8m、幅0.9m、深さ0.15m（茶色土除去面から）で5SD010と同じような方向に振れている。埋土は灰茶色土。出土遺物から江戸時代後半～末に埋没したと考えられる。

5SX040（図53）

調査区北部で検出された不明遺構。5SD015の埋土を掘り下げていくと、底面に近くに南北長8.2m、東西長1.5mの範囲に茶渇色土が薄く堆積しておりそれを除去すると、小穴と小土坑が並んだように検出された。分布の傾向として西側に小穴が密集しており、5cm、深さ15cmほどのピットのそれぞれ2つを１セットになって地山に穿たれているように考えられる。東側は不整方形のピットが連続して検出されているが、これはいわゆる波板上圧痕の1種かと考えられる。小ピットの埋土はおおまかに黒色粘質土、灰色粘質土、灰茶色土、淡茶色土、茶色粘質土などの5種類に大別が可能性である。東側のピット群の掘方は一定ではないが、5cm以下の浅い掘方と0.4m程度の深い掘方に分けられる。これらはいずれも5SD015に伴う通行痕跡と考えている。

5SX047（図53）　調査区北部東寄りで検出されたたまり状遺構。埋土は茶色土。調査区外に東側に向かってたまっている落ち込みか。出土遺物から江戸時代末以降に埋没している。

5SX049（図53）　調査区中央部西寄りで検出された小穴。埋甕遺構の可能性が考えられる。

5SX052（図53）　調査区北部西寄りで検出されたたまり状遺構。近世後期～末の遺物が出土している。

5SX070（図53）　調査区南部から中央部にかけての堆積土層。5SD015の東側にあたり道路の路面の可能性があるためトレンチを入れて確認をした。その結果、地山ではなく堆積土であることは明らかになったが、埋土内に遺物もなく堆積状況に人為性も感じられなかったため自然埋没した土層と考えたい。　（髙橋学）

2）2区検出遺構

a.道路関連遺構（側溝）

5SD132（図60）

軸をN21°27′Wにとる南北溝である。検出された位置関係から南に隣接する日焼遺跡第5次調査1区において検出された南北溝5SD001の続きと推定される。このことから、この溝は古代官道の西側溝にあたると考えられる。しかし2区で検出された時点で近世以降の開発により削平を受けていた。長さ9.54m、幅0.71～2.16m、深さ0.25mを測る。溝の埋土は暗茶褐色土の単層である。溝は北に近接する日焼遺跡第8次調査で検出された南北溝8SD001に接続している。

b.土坑

5SK109（図60）

土坑形状は楕円形である。長さ0.8m、幅1.26m、深さ0.17mを測る。埋土は暗灰粘質土、暗灰粗砂、灰色粘質土、

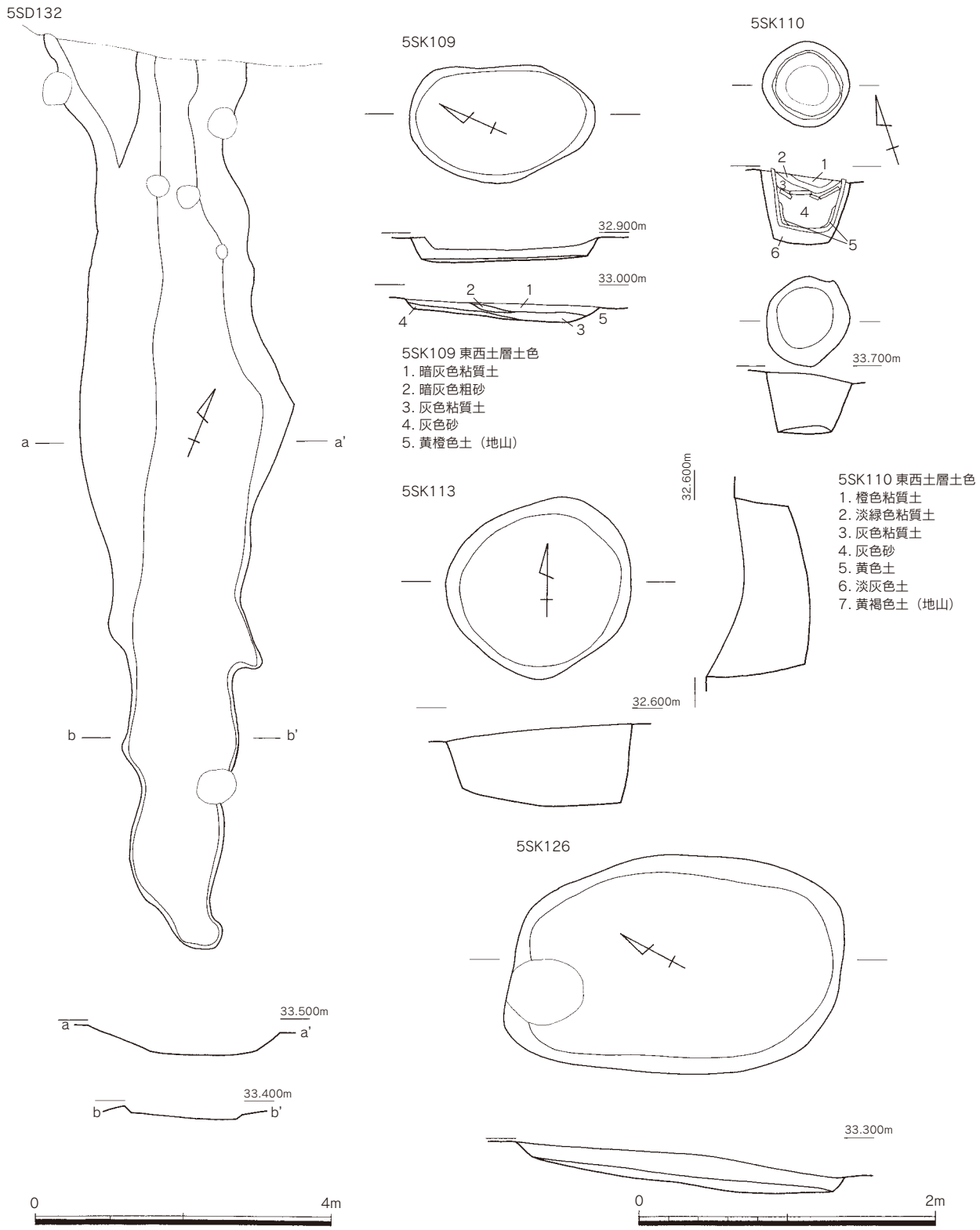


図60.2区溝および土坑遺構実測図(S=1/40・1/80)

灰色砂の順に堆積している。

5SK110（図60）

瓦質土器甕の埋没土坑である。長さ0.4m、幅0.39m、深さ0.4mを測る。甕底から木片や銅製の簪などが出土した。

5SK113（図60）

土坑形状は円形である。長さ1.20m、幅1.24m、深さ0.60mを測る。埋土は暗灰土、橙色粘質土、灰色土、灰色粘質土の順に堆積している。近世後期の遺物が大量に出土した。

5SK126（図60）

土坑形状は楕円である。長さ1.46m、幅2.22m、深さ0.22mを測る。埋土は黄褐色土ブロックの入る白灰色粘質土の単層である。

3）3区検出遺構

a.土坑

5SK301（図61）

主軸をN23°4′Wにとり、東斜面の等高線に並行する中段の標高42.2m付近に5ST303と5ST308に挟まれた位置関係にある。土坑形状は長方形で、長さ1.25m、幅1.4m、深さ0.83mを測る。埋土はレンズ状の自然堆積を呈す。両側に古代の墳墓がある位置関係と土坑形状から墳墓の可能性も考えられるが、鉄釘や供献遺物はなく、木棺の痕跡もないことから土坑と判断した。

5SK305（図61）

東斜面の標高42.6m付近に位置する。土坑形状は南北にやや延びた楕円形状を呈す。土坑の規模は長さ1.28m、幅1.38m、深さ0.4mを測る。

5SK313（図61）

5ST303に切り込む土坑である。5ST303茶色土で一部掘り下げているため、土坑形状は長方形プランが想定される。幅1.26m、深さ20cmを測る。土坑の西側から土師器坏aが4点重なるようにして出土している。

5SK315（図61）

東斜面の標高42.0m付近に位置する。土坑形状は南北に延びた長方形を呈す。主軸をN0°45′Eにとり、土坑の規模は長さ2.1m、幅0.8m、深さ0.4mを測る。

5SK318（図61）

主軸をN0°3′Eにとり、東斜面上段の標高44.0mに並行し、5ST317の北に位置する。墓坑形状は長方形である。埋土は自然堆積である。規模は長さ1.75m、幅0.62m、深さ0.21 ～ 0.41mを測る。鉄釘、供献遺物はなく、土坑と判断した。

5SK325（図62）

主軸をN19°14′Wにとり、東斜面上段の標高44.0mに並行し、5ST330の東に隣接する位置関係にある。土坑形状は長方形で、長さ2.93m、幅1.1m、深さ0.63mを測る。埋土は自然堆積である。古代墳墓5ST330に隣接する位置関係から、墳墓の可能性も考えられるが、供献遺物や鉄釘などがまったく出土しておらず、土坑と判断した。

5SK334（図62）

東斜面の標高45.0m付近に位置する。土坑形状は南北に延びる長方形を呈す。土坑の規模は長さ2.1m、幅1.0m、深さ0.48mを測る。

5SK336（図62）

東斜面下段の標高39.0m付近に位置し、北に近世墓5ST351がある。土坑形状は南北に延びる長方形を呈す。土坑の規模は長さ1.3m、幅0.73m、深さ0.18mを測る。埋土は橙色土、茶灰色土の順に自然堆積している。

5SK339（図62）

5ST345に切り込まれた土坑である。土坑は南北に長い楕円形をしており、中央西寄りにピット状に掘り込まれた形状を呈す。土坑の規模は長さ1.43m、幅0.94m、深さ0.44mを測る。ピット状に掘り込まれた部分は炭が混じった茶色土で埋没しており、その上層で炭だけの層が検出された。調査当初、火葬墓を想定していたが、目視で炭層に火葬骨が混じる状況が確認できず、蔵骨器の痕跡もないことから、土坑と判断した。

5SK343（図63）

東斜面の等高線に並行する中段の標高42.0m付近に位置する。古代墳墓5ST303の南に土坑5SK344に隣接する位置関係にある。土坑の形状は三角形を呈す。土坑の規模は長さ1.9m、幅0.6 ～ 1.1mを測る。

5SK344（図63）

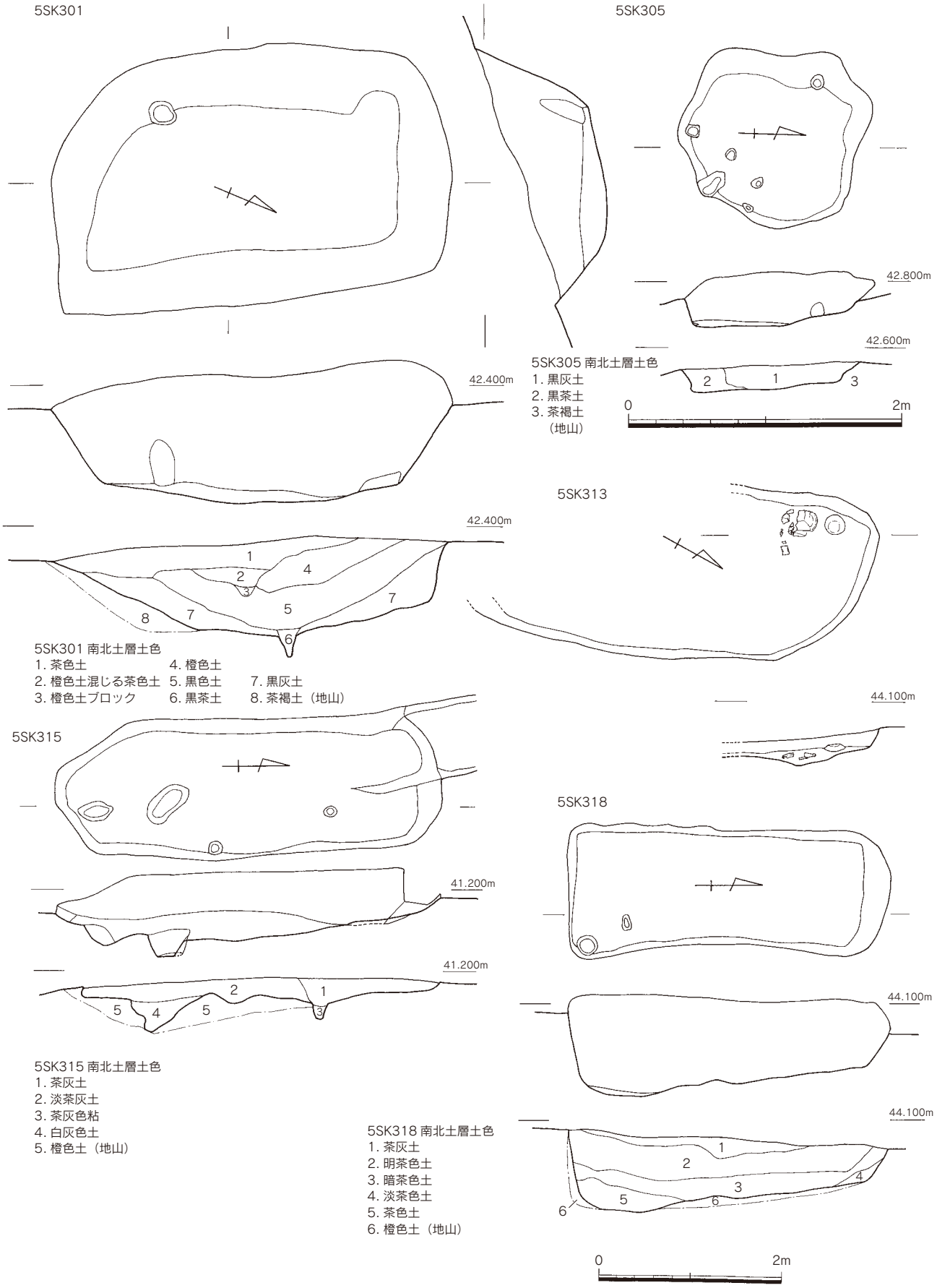


図61.3区土坑遺構実測図(1)（S=1/40・1/60）

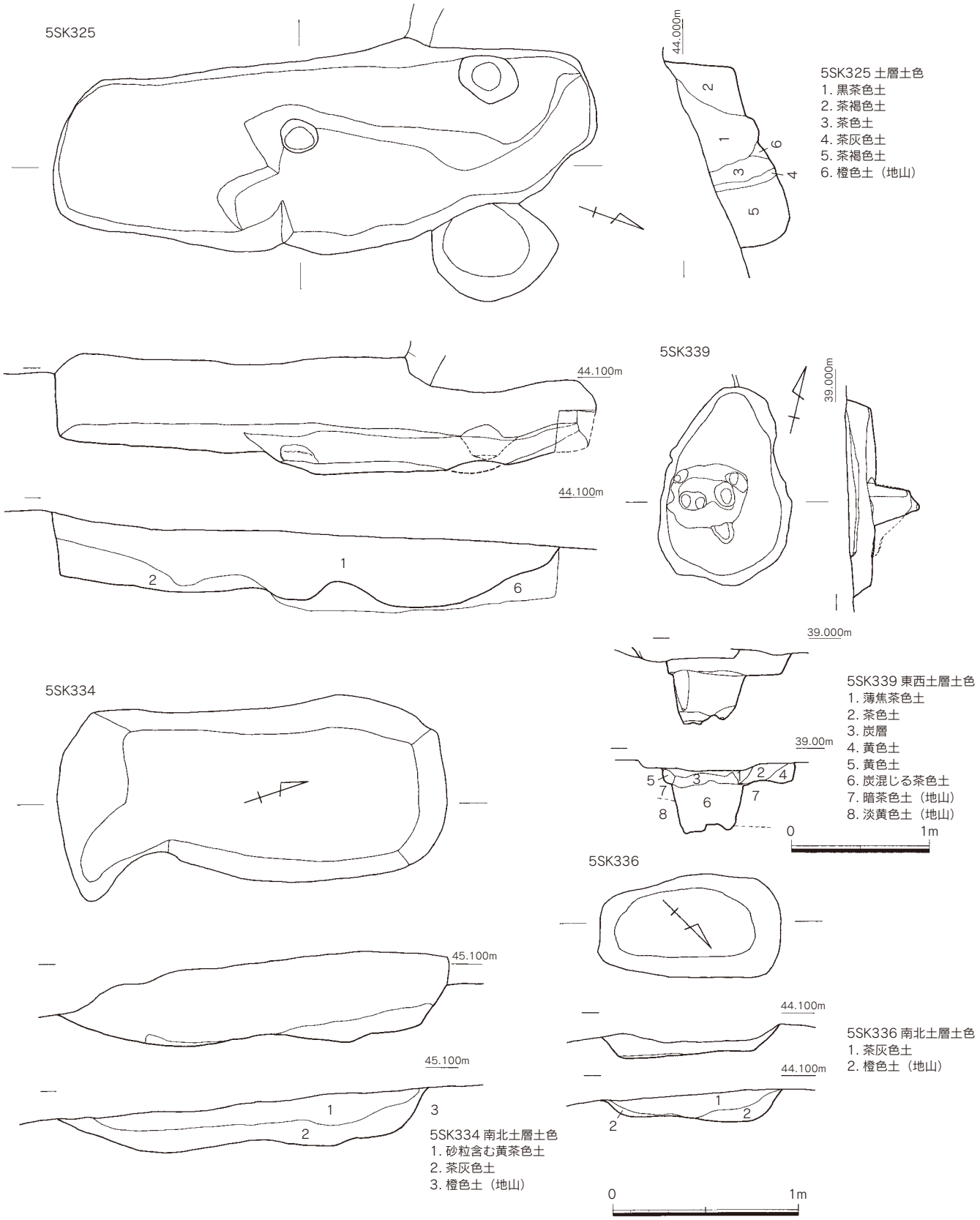


図62.3区土坑遺構実測図(2)（S=1/40・1/30）

東斜面の標高42.4m付近に位置する。土坑5SK343が西に隣接する位置関係にある。土坑の形状は長方形である。土坑の規模は長さ1.64m、幅1.08m、深さ0.28mを測る。埋土は自然堆積である。

b.墓(古代)

5ST303（図64）

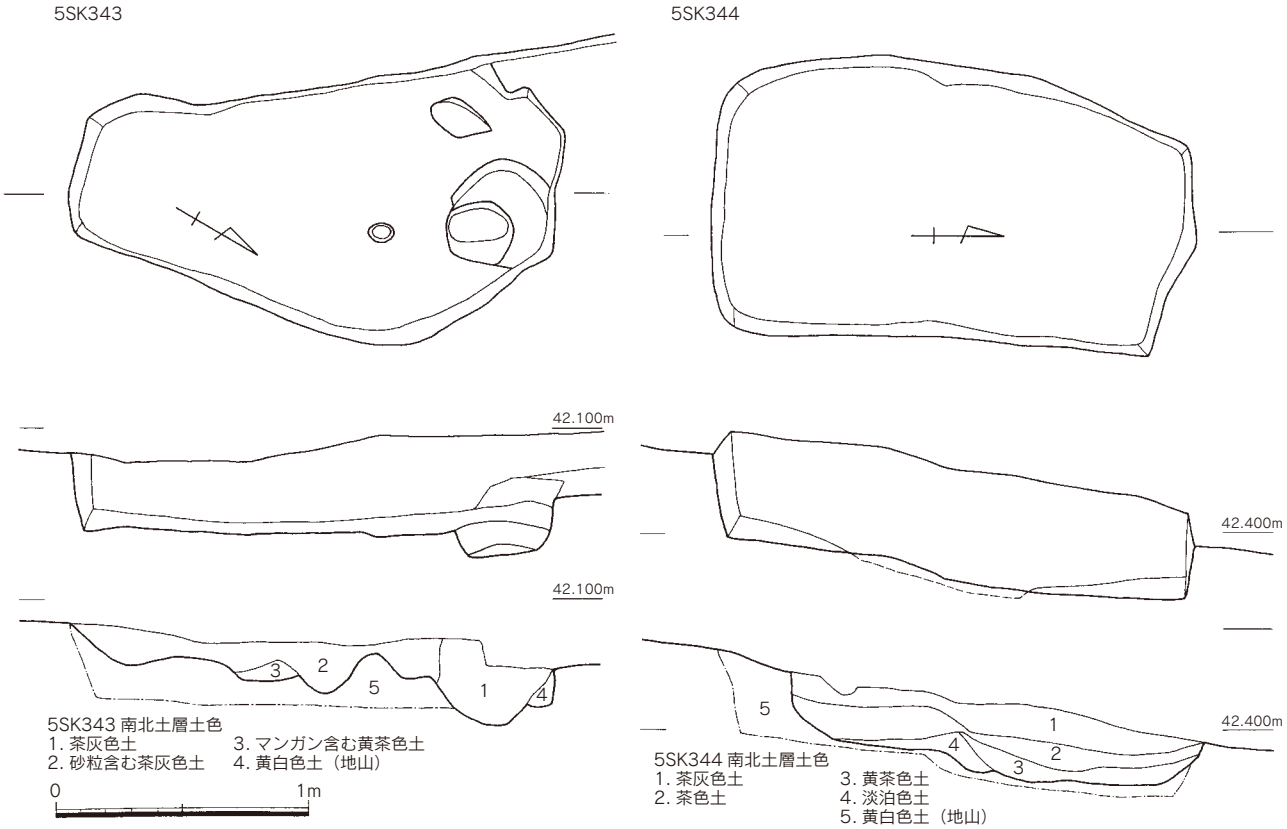


図63.3区土坑遺構実測図(3)（S=1/30）

主軸をN28°6′33″Wにとり、東斜面の等高線に並行する中段の標高42.0m付近に5ST308、5ST316と横並びに群を成している。墓坑形状は長方形で、長さ2.34m、幅1.12～1.27m、深さ0.27～0.81mの規模である。墓坑は丘陵に沿って削平を受けている。埋土は自然堆積だが、鉄釘が37点出土しており、木棺墓と考えられる。残存していた鉄釘から使用された鉄釘の長さは平均6.8cm、木質の交差部分の観察から棺材の厚みは3.25cmであったと推定される。木棺の規模は鉄釘の出土位置から長さ約1.88m、幅約0.62mと想定される。供献遺物は土師器甕と越州窯系青磁合子蓋である。合子蓋は床面に近い出土位置や蓋材の鉄釘の下から出土していることから棺内に納められていたと考えられる。頭位は遺物の出土状況から北と想定される。

5ST308（図65）

主軸をN6°55′24″Wにとり、東斜面中段42.4mに並行し、5ST303と5ST316に挟まれる位置関係にある。墓坑形状は長方形で、長さ2.8m、南小口付近が幅0.83m、北小口付近が1.09m、深さ0.57mの規模である。鉄釘が20点出土し、木棺墓と考えられる。木質が残存する鉄釘から、長さは平均で7.72cmを測り、棺材の厚みは2.5cmであったと推定される。鉄釘は北東と南東部分に集中しており、出土位置が散在的であるため、木棺の規模は不明である。遺物には土師器坏a・皿a・椀c、越州窯系青磁椀Ⅰ-2bァの計12点が出土しているが、原位置を保っている状況のものはなく、棺外に供献されていたと考えられる。他に金属製品として、墓坑中央付近から刀子が出土し、金メッキの銅鈴も確認され、その出土位置から棺内にあったものと想定される。頭位は遺物の出土状況から北と考えられる。

5ST316（図66）

主軸をN27°49′40″Wにとり、東斜面中段の標高42.8mに並行し、5ST308の北西に位置する。墓坑形状は長方形で西側にテラス上の掘り込みをもつ。墓坑の規模は長さ2.53m、幅1.0m、深さ0.3～0.41mを測る。土層観察では木棺部分が崩落した様子が観察でき、鉄釘が15点出土し、木棺墓と考えられる。鉄釘に残存していた木質の観察により、棺材の厚みは2.18cmであったと推定される。木棺の規模は残存していた鉄釘の位置から長さ約1.79m、幅約0.45mと想定される。供献遺物はなく、頭位は不明である。

5ST317（図67）

主軸をN0°33′20″Eにとり、東斜面の等高線に並行し、標高約44.2mの上段に位置する。上段では約1.5m

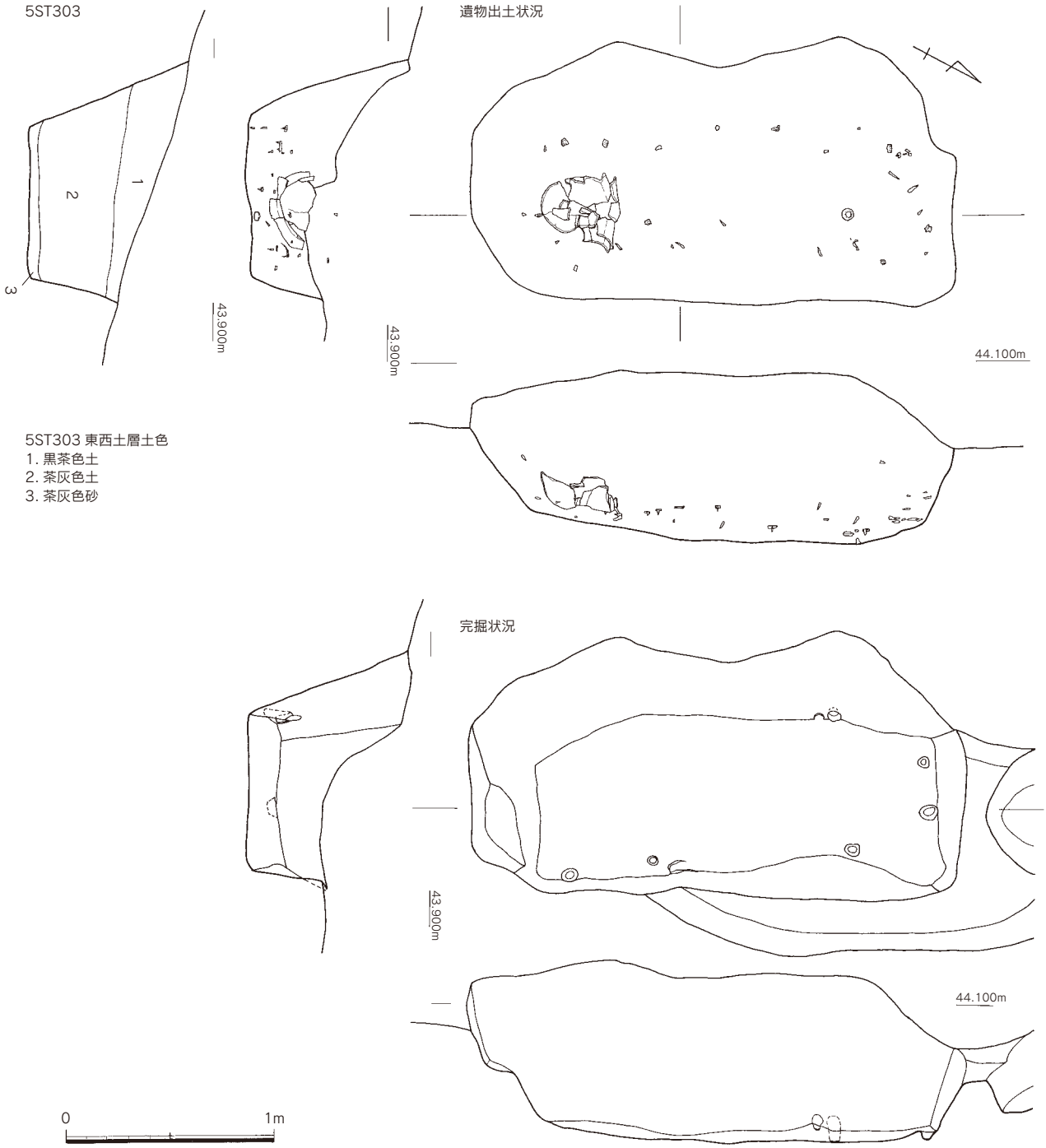


図64.3区5ST303遺構実測図（S=1/30）

間隔で均等に墳墓が並び、南北に5ST330、5ST318に挟まれた位置関係にある。墓坑の規模は長さ2.26m、幅0.98m、深さ0.95mを測る。墓坑内からは鉄釘が45本出土し、木棺墓と考えられる。鉄釘は北小口付近に集中しており、本数は本報告の木棺墓のなかでもっとも多い。鉄釘に残存した木質観察から、棺材の厚みは2.8cm前後であったと推定される。木棺の規模は墓坑底部で長方形状の淡灰色粘土として検出されており、鉄釘の出土位置と合わせると、長さ1.63m、幅0.5mと考えられる。供献遺物には土師器坏a、緑釉陶器皿ｃ、瑞花双鳥八稜鏡がある。これらの遺物は出土位置のレベルが平均的で、蓋材の鉄釘が上部で出土していることから棺内にあったものと推定される。墓坑中央に緑釉陶器皿ｃが伏せた状態で出土し、北西側から八稜鏡が出土している。八稜鏡周辺には長さ0.27m、幅0.20mの長方形状の炭化物が検出され、周辺に灰色粘質土が確認できた。鏡は鏡背を上に炭化物内に斜めに沈み込んだような状況で出土した。このような出土状況から鏡は方形の容器状のものに収納されていた可能性が高い。頭部は遺物の出土状況から北と想定される。

5ST320（図68）

主軸をN33°35′19″Wにとり、東斜面の標高43.0mの中段に位置する。中段に位置する墳墓5ST303・

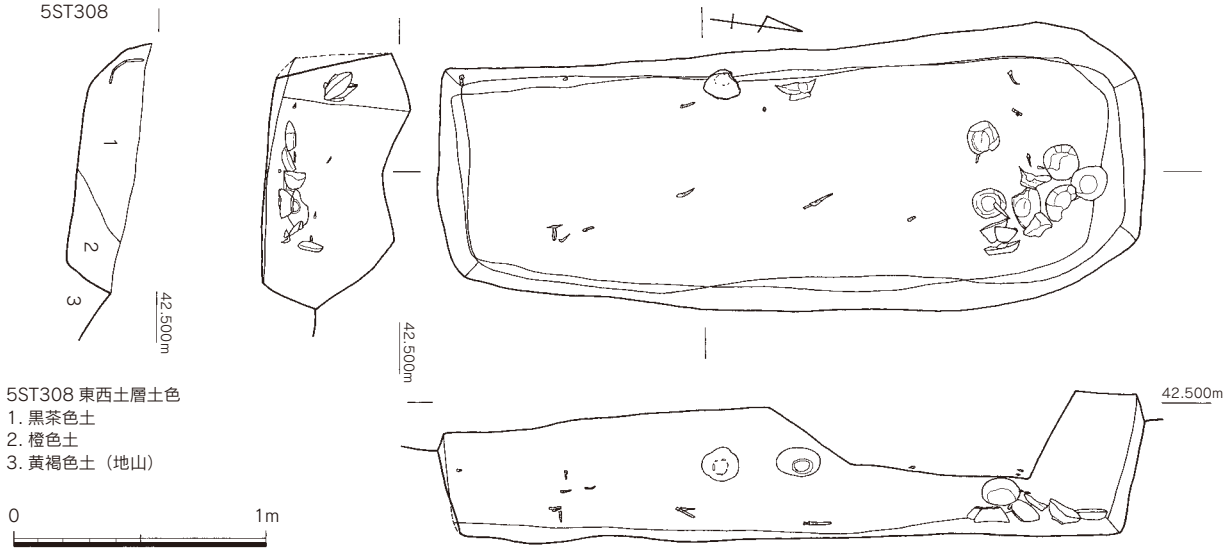


図65.3区5ST308遺構実測図（S=1/30）

308・316の群とは21mほど離れている。墓坑形状は長方形である。墓坑の規模は長さ2.73m、幅0.74m、深さは0.58mを測る。鉄釘の出土はない。供献遺物は土師器坏aのみである。頭部位置は不明である。

5ST330（図69）

主軸はN14°46′25″Wにとり、東斜面上段の標高43.4mに位置し、5ST317の南に位置する。墓坑形状は長方形で、規模は長さ2.61m、幅0.89m、深さ0.45～0.64mを測る。墓坑内からは鉄釘が26本出土し、木棺墓と考えられる。鉄釘は北小口付近に集中して出土している。鉄釘に残存していた木質の観察から棺材の厚みは3.2cm前後と想定される。木棺の規模は鉄釘の出土位置から長さ1.8m、幅0.5mほどと考えられる。供献遺物には土師器坏a・壺・鉢、黒色土器A類椀ｃが出土した。これらの遺物は墓坑の南に集中している。鉄釘の出土状況から遺物は棺外の南側にまとめて供献されていたことが分かった。頭部は南と想定される。

5ST331（図70）

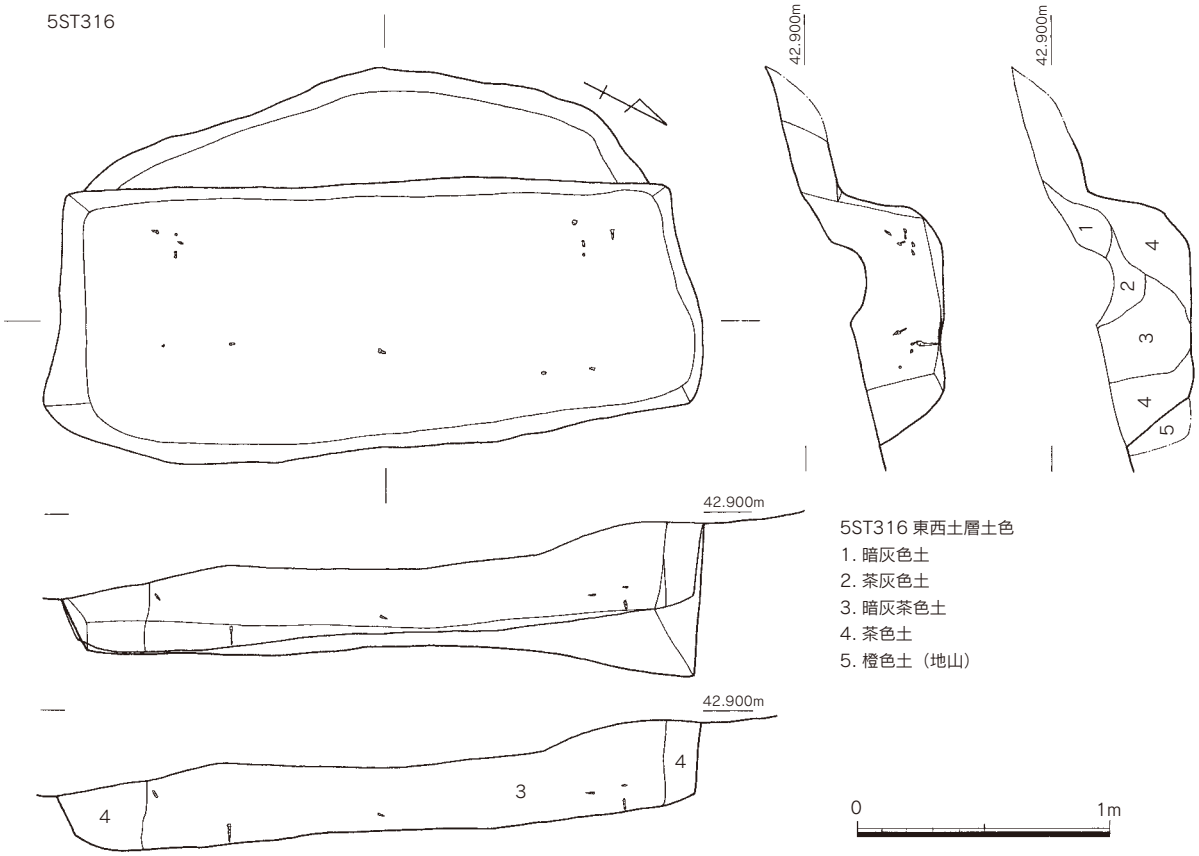


図66.3区5ST316遺構実測図（S=1/30）

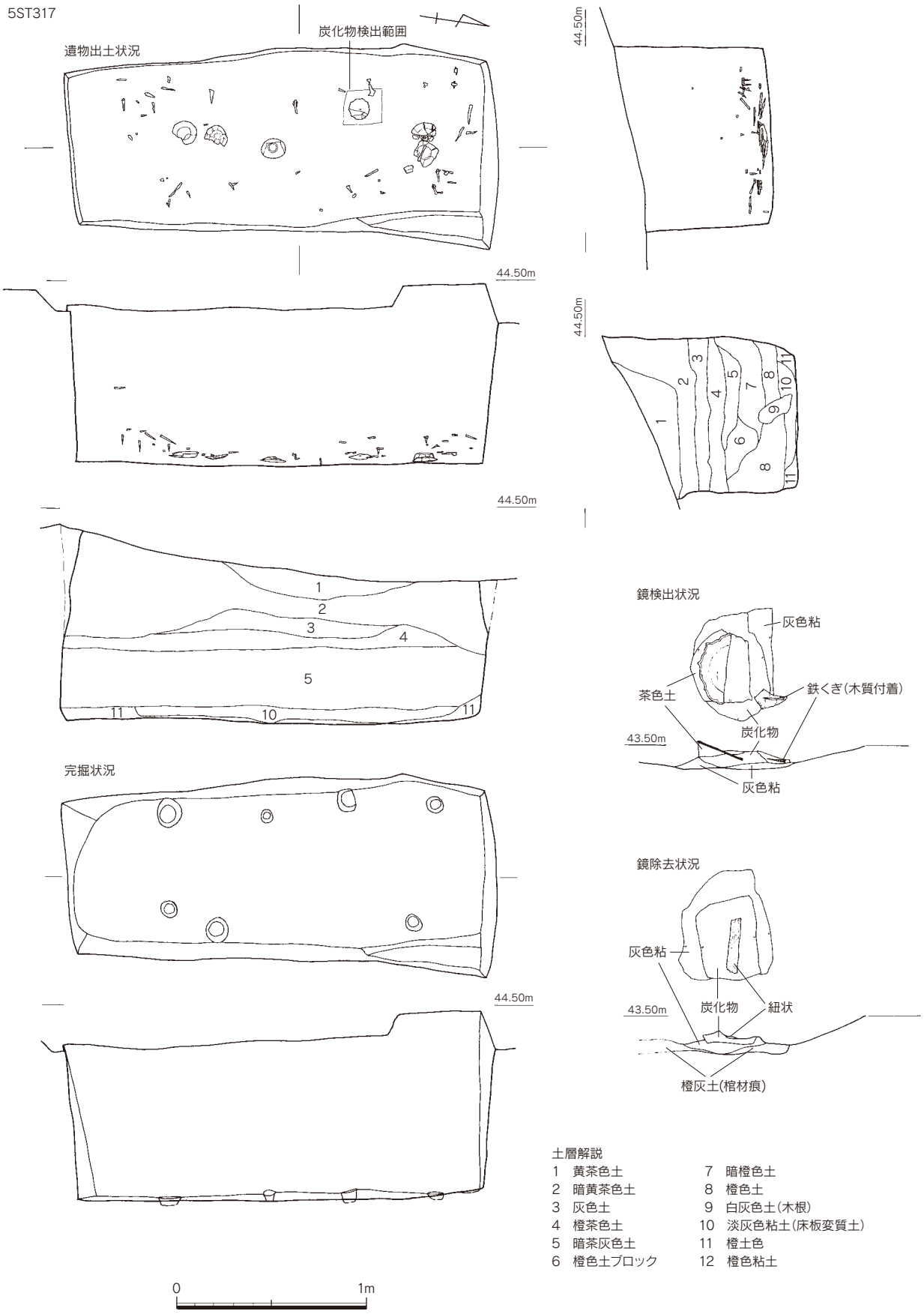


図67.3区5ST317遺構実測図(S=1/30)

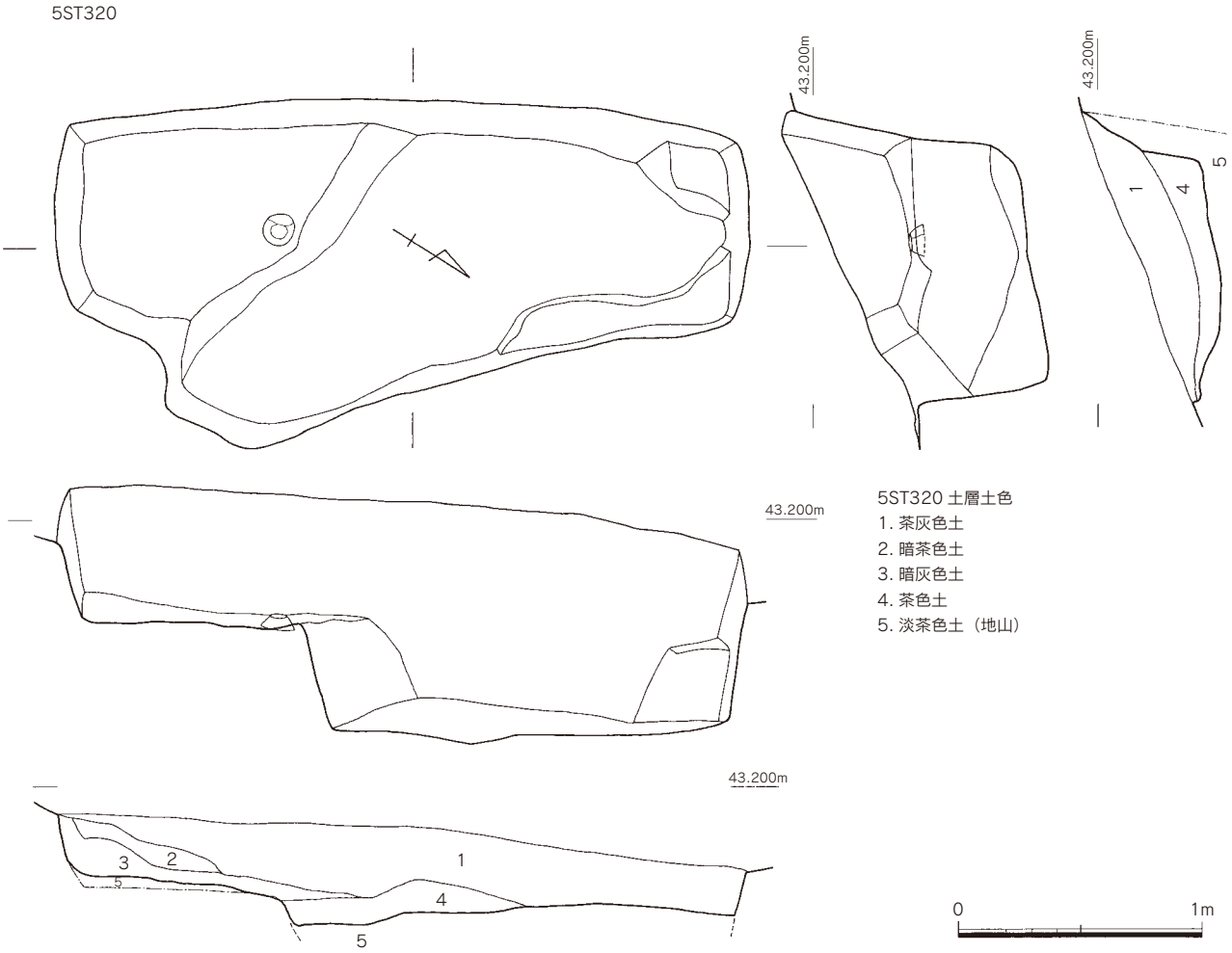


図68.3区5ST320遺構実測図(S=1/30)

主軸はN30°16′13″Wにとり、東斜面の標高44.6mの上段に位置する。5ST331の南に位置する。墓坑形状は長方形で、規模は長さ2.58m、北小口の幅が0.87m、南小口の幅が0.96m、深さ1.18mを測る。墓坑内からの鉄釘の出土はない。供献遺物は土師器坏aのみである。頭部は南と想定される。鉄釘や複数の供献遺物は出土していないが、墓坑は同じ上段に位置し、八稜鏡が出土している5ST317と同等の規模を有している。

5ST333（図71・72）

主軸はN27°49′40″Wをとる。東斜面の中腹標39.0mに位置する。下段に展開する古代の墳墓群は5ST335・340・345・360があり、5ST333はもっとも北に位置する。墓の主軸が南北を軸とする他の墳墓とまったく異なり、東西を軸とし、5ST335に交差する位置関係にある。墓坑形状は不定形で、内部から鉄釘は出土していない。墓坑の規模は長さ1.78m、幅0.9～1.1m、深さ0.14～0.23mを測る。上段・中段の墳墓に比べ、造成時の削平を受けている。供献遺物には須恵器坏a、土師器坏a・皿a・椀ｃ、黒色土器B類椀ｃがある。須恵器と黒色土器は墓坑東寄りに合口の状況で出土している。頭部は遺物が集中している東と想定される。

5ST335（図71）

主軸はN0°40′55″Wをとり、東斜面の中腹の下段、標高39.0mに位置する。5ST333に切り込む位置関係である。墓坑形状は隅丸の長方形をしている。墓坑の規模は長さ2.23m、幅0.59～0.75m、深さ0.29～0.56mを測る。墓坑内からは31本の鉄釘が出土し、木棺墓である。棺材の厚みは鉄釘に残存している木質から1.9cm前後と推定される。検出された灰色土の木棺痕跡から木棺の規模は長さ2.0m、幅0.6mと考えられる。墓坑底部は南側に長さ0.51m、幅0.38m、厚さ0.10mの扁平な花崗岩が据えてあった。完掘時のレベル差は墓坑の南北で0.27mもの高低差がある。南側だけが掘り下がっている状況になっているため、花崗岩を棺台として利用していたと考えられる。供献遺物は墓坑の北側に集中しており、土師器坏aが11点出土している。遺物は折り重なるようにして出土しており、棺外に供献されていたと推定される。他の出土遺物には墓坑の南側で出土し

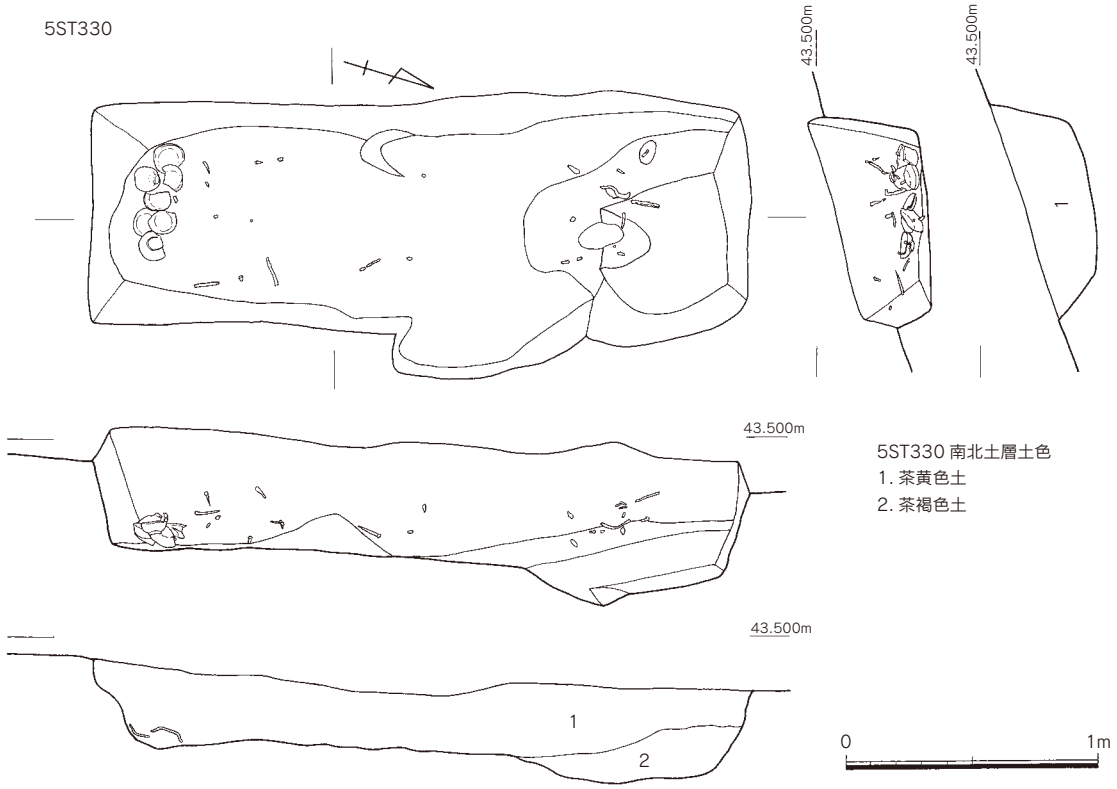


図69.3区5ST330遺構実測図（S=1/30）

た台形状の砥石がある。木棺痕跡よりも上面で出土しており、棺外に供献されていたと考えられる。頭部の位置は大量の土師器の出土から南と想定される。

5ST340（図73）

主軸はN10°59′16″Wをとり、東斜面の中腹の下段の標高39.0mに位置する。北に5ST335、東の5ST345に挟まれた位置関係にある。墓坑の形状は東に張り出したT字状である。ただし、鉄釘の出土状況と形状から東側はテラス状掘りこみと考えられる。墓坑自体の規模は長さ2.03m、幅0.7mを測る。近世の段造成によって削平を受けており、深さは6cmを測る。墓坑底部のみがかろうじて残存している状況である。供献遺物は出土していない。墓坑からは鉄釘が11本出土し、木棺墓であることが判明した。木棺の規模は鉄釘の位置から、長さ1.73m、幅0.46cmと推定される。棺材の厚みは鉄釘に残存していた木質観察から1.96cm前後と考えられる。頭部位置は不明である。

5ST345（図74）

主軸はN29°21′15″Wをとり、東斜面中腹の下段、標高39.0mに位置する。西に5ST340があり、炭化物が埋没していた5SK339に切り込んだ位置関係にある。墓坑の形状は長方形を呈し、規模は長さ2.32m、幅0.81mを測る。深さは0.05mを測り、削平により墓坑底部のみが残存している状況である。出土遺物はなく、頭部位置は不明である。

5ST360（図75）

東斜面中腹の下段の標高39.0mに位置する。北に5ST340・345があり、近世墓5ST355に切られている位置関係にある。墓坑の大半は近世墓によって削平を受けており、全体形状は不明だが、長方形と想定される。墓坑の規模は幅0.75m、深さ0.71mを測る。墓坑からは鉄釘が6本出土している。木棺痕跡も確認でき、幅0.50mの規模であったことが判明した。棺材の厚みは鉄釘に残存した木質観察から1.76cm前後であったと推定される。墓坑内はこぶし大くらいの自然石が二つ出土し、その位置から木棺上部に置かれたものではないかと想定される。供献遺物は出土していない。なお、5ST360に切り込む近世墓5ST355からは破片のバラバラな出土状況で鉄釘と海獣葡萄鏡が出土している。近世墓との位置関係から鉄釘と海獣葡萄鏡は本来5ST360の遺物であったと考えられる。

c.墓（近世）

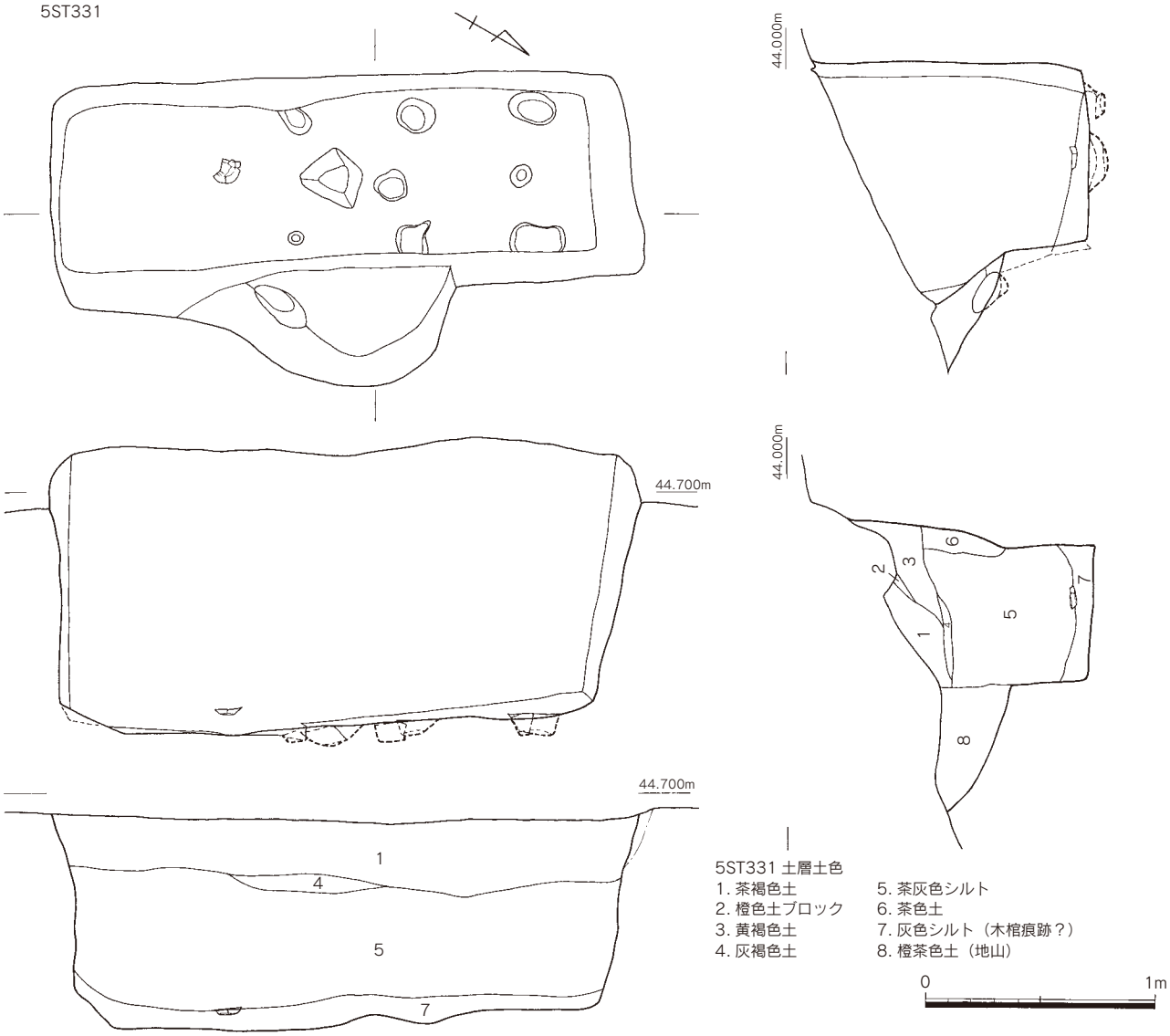


図70.3区5ST331遺構実測図(S=1/30)

5ST347（図76）

主軸はN29° 32′ Wをとり、東斜面中腹の下段の標高39.0mに位置する。西に5ST355が隣接する位置関係にある。墓坑の形状は長方形で、規模は長さ1.3m、幅0.76m、深さ0.62mを測る。6トレンチに切られる状況で検出した。木棺の痕跡や出土遺物は認められないが、他の近世墓との位置関係や土坑形状から墓坑と判断した。

5ST350（図77）

主軸はN17° 37′ Wをとり、東斜面中腹の下段の標高39.0mに位置する。南に5ST355が隣接する位置関係にある。墓坑の形状は長方形で、規模は長さ1.29m、幅1.03m、深さ0.97mを測る。墓坑からは蓋板と木棺の痕跡が確認された。土層観察では埋土が下に沈み込む状況が確認できた。木棺は横板の痕跡よりも下のレベルから蓋板が出土し、埋没する過程で蓋が脱落したと考えられる。木棺の規模は長さ0.85m、幅0.45m、深さ約0.37mと推定される。底板上面で南東側に人骨の頭蓋骨と四肢骨の一部が出土している。木棺の西側では六道銭が出土した。

5ST351（図78）

主軸はN3° 52′ Wをとり、東斜面中腹の下段の標高39.0mに位置する。東に5ST350が隣接する位置関係にある。墓坑の形状は長方形で、規模は長さ1.2m、幅0.73m、深さ0.5mを測る。土層観察から埋土がやや下に沈み込む状況が確認できた。墓坑からは木棺の痕跡や出土遺物は認められなかったが、位置関係や土坑の形状

5ST335

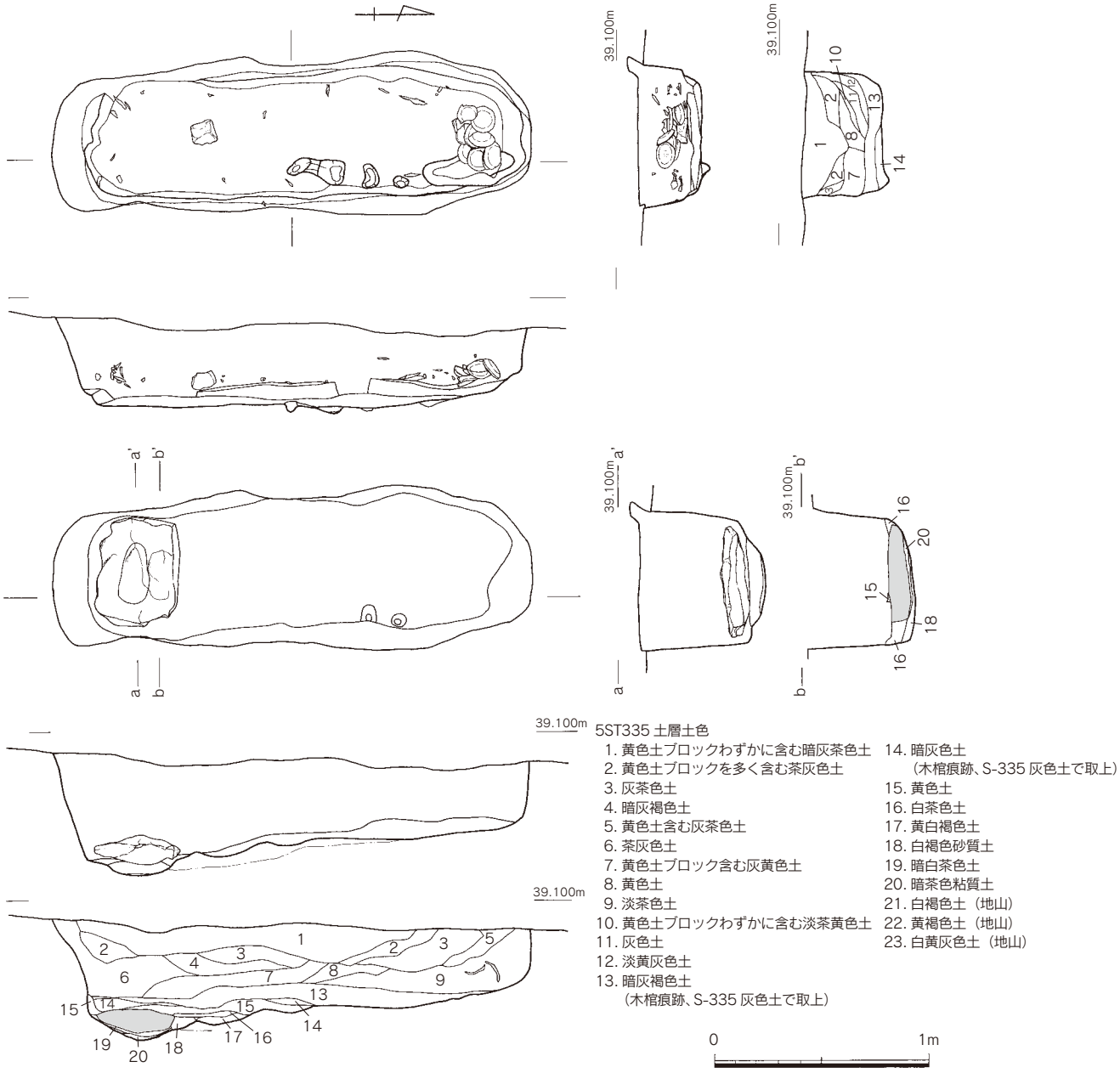


図71.3区5ST335遺構実測図（S=1/60）

などから墓坑と判断した。

5ST355（図79）

主軸はN12°34′Wをとり、東斜面中腹の下段の標高39.0mに位置する。南に隣接する古代墳墓5ST360に切り込む位置関係にある。墓坑の形状は西にテラスをもつ長方形をなす。墓坑の規模は長さ1.64m、幅1.7m、深さ1.2mを測る。墓坑埋土中からは鉄釘と海獣葡萄鏡の破片がバラバラな地点から出土している。これらの遺物は出土状況と隣接する5ST360の位置関係から、古代墳墓5ST360に供献されていた遺物・木棺の一部と考えられる。墓坑からは木棺が出土している。木棺は蓋板が崩落しているものの横板の残存状態がよく、長さ0.88m、幅0.38mの規模である。木棺内からは人骨の頭蓋骨と四肢骨の一部が出土した。頭蓋骨は木棺の北側で確認され、底板の上からは「寛政通宝」の六道銭も出土している。

4）4区検出遺構

a.溝

5SD217

調査区中央を北東から北西に屈曲する溝である。長さ15m、幅0.3～1.4m、深さ0.6mを測る。南に並行し

て東西に延びる5SD201と並行しており、近世以降の道路側溝の可能性がある。

b.道路関連遺構（側溝）

5SD205（図81）

軸をN21°10′Wにとる南北溝である。検出された位置関係から南に隣接する日焼遺跡第5次調査1区において検出された南北溝5SD001の続きと推定される。このことから、この溝は古代官道の東側溝にあたると考えられる。溝の規模は長さ17m、幅約2.5m、深さ0.20mを測る。5SD205上面には5SF240、5SD243・244・257が同じ方位で展開している。これらの溝は5SD240では硬化した部分が見られ、5SD205埋没後も通行が行われていたと考えられる。さらに5SD205下面は5SF230が並行して検出され、砂と粗砂の互層堆積が見られ、硬化した状況が確認された。

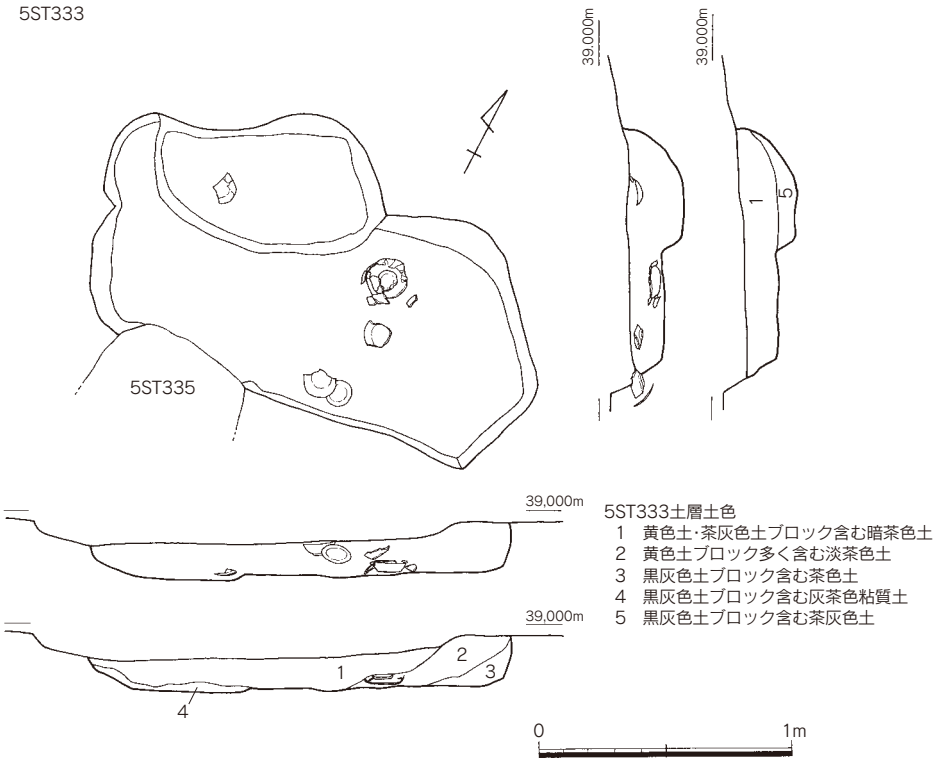


図72.3区5ST333遺構実測図（S=1/30）

5SD215（図81）

5SD205西側に並行する南北溝である。5SD215埋没後に5SD205が掘り込まれた土層関係にある。溝の規模は長さ6.5m、幅0.35m、深さ0.17mを測る。上面に南北溝5SD243と244が展開する。埋土は茶色粘質土、暗茶色粘質土の順に堆積している。硬化した面は確認されなかった。

5SD220（図83）

軸をN22°37′Wにとる南北溝である。検出された位置関係から南に隣接する日焼遺跡第5次調査1区において検出された南北溝5SD001の続きと推定される。このことから、この溝は古代官道の西側溝にあたると考えられる。溝の規模は長さ11.46m、幅2.62m、深さ0.34mを測る。5SD220は近世以降の削平が著しく、1区との調査区の南壁の土層観察で幅と溝底の通行痕跡5SF210が観察できた。溝の埋土は黒茶色粘質土、黒茶土、茶色粘質土、灰茶色粘質土、黄茶色粘質土の順で堆積している。溝埋土除去後、帯状に硬化した面5SF210が溝の西端で確認された。

5SD225（図82）

帯状の通行痕5SF230を切り込み、西に展開する5SD235に切り込む位置関係にある南北溝である。長さ3.7m、幅1.0m、深さ0.37mを測る。溝の埋土は茶灰色土、茶褐色土、

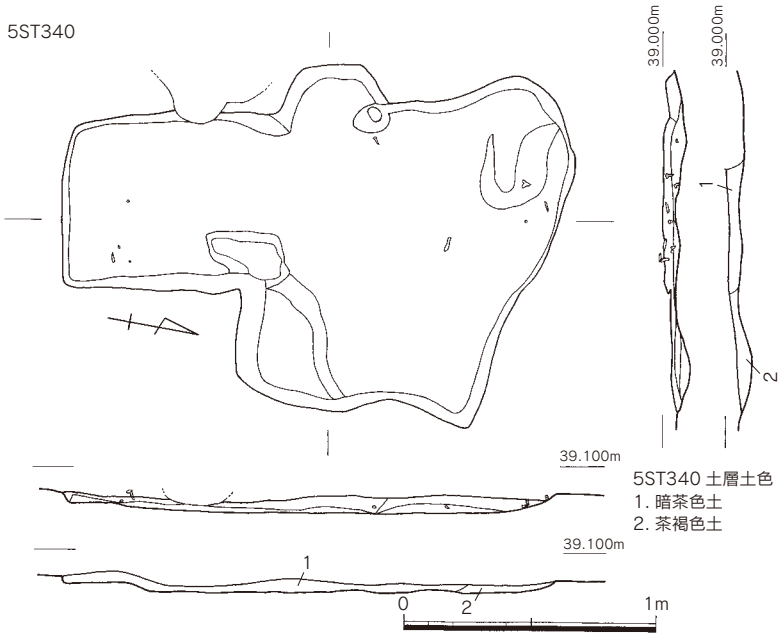


図73.3区5ST340遺構実測図（S=1/30）

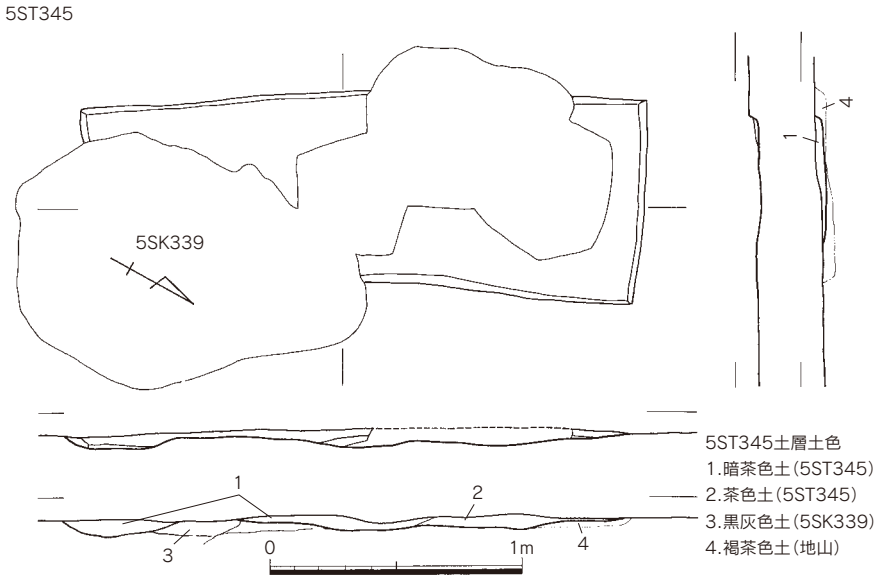


図74.3区5ST345遺構実測図(S=1/30)

灰色土、茶色土、暗灰色土、淡黄色シルトの順に堆積する。

5SD235（図82）

帯状の通行痕5SF230に切り込み、西に展開する5SD225・242に切られる並行する位置関係にある南北溝である。長さ4.2m、幅1.2m、深さ0.15mを測る。溝の埋土は淡茶褐色土、淡茶褐色砂の順に堆積する。

5SD242（図82）

軸をN21°10′Wにとる南北溝である。5SD235に切り込む位置関係にある。長さ3.4m、幅0.4mを測る。溝埋土は淡灰色粘質土の単層である。

5SD243（図81）

軸をN21°10′Wにとる南北溝である。5SD250の西側に並行し、5SD244に切り込む位置関係にある。溝の規模は長さ約7.9m、幅0.5m、深さ0.10mを測る。溝の埋土は淡灰色粘質土、茶灰色粘質土の順に堆積している。

5SD244（図81）

5SD250の西側に並行し、5SD215上に展開する。5SD243に切られる位置関係にある南北溝である。溝の規模は長さ8.5m、幅0.3m、深さ0.07mを測る。溝の埋土は茶灰色土の単層である。

c.道路（通行痕跡）

日焼遺跡第5次調査4区では官道東側溝5SD205・215部分で硬化した部分を検出した。硬化した部分は側溝5SD205上面と下面で検出している。上面では淡茶灰色砂と茶灰色粘質土が堆積した5SF240が確認された。5SD205下面では橙白色粗砂と白色砂、淡茶色砂が帯状に堆積した5SF230・連続ピット状遺構5SF270を検出

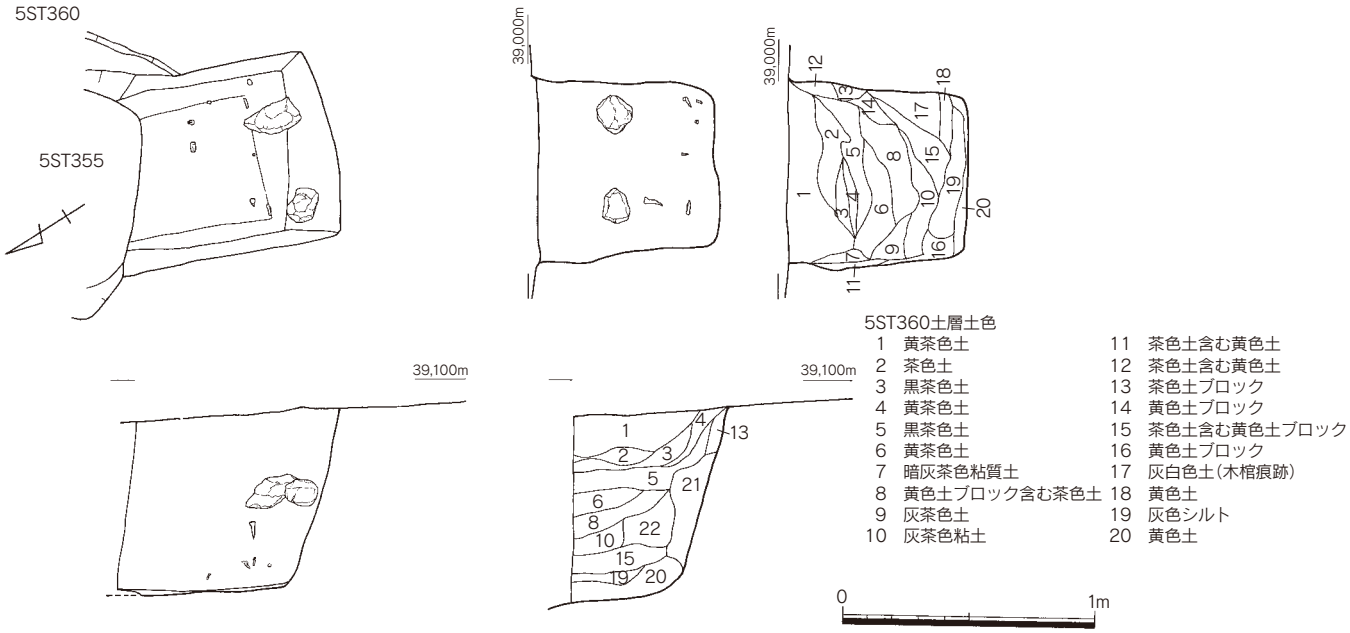


図75.3区5ST360遺構実測図(S=1/30)

した。5SD215下層では帯状に硬化した5SF250を検出している。このような帯状硬化面や連続ピット状遺構の検出から、官道東側溝は一時期通路として利用されていたと考えられる。通路として利用された後、溝が埋没した後も一部通行痕跡が確認されている。このような調査所見から官道東側溝下層で検出した硬化部分は道路の通行痕跡として報告をおこなう。

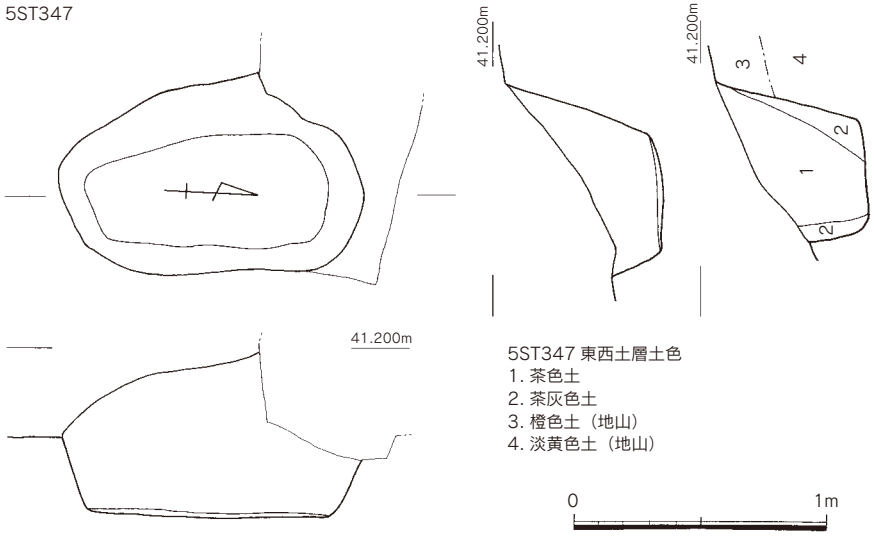


図76.3区5ST347遺構実測図(S=1/30)

なお、官道西側溝も側溝脇と想定される部分に帯状の硬化部分が検出されており、5SF210として報告する。

5SF210（図83）

官道西側溝5SD220の西側に、帯状に展開する遺構である。北からa～cに分けて、検出状況と土層の観察を行っている。土層観察では砂と粗砂の薄い互層堆積がみられ、硬化している状況が確認できた。

5SF230（図81・82）

官道東側溝底に帯状に展開する遺構である。5SD205・225・235の下に位置する。長さ約29m、幅0.40～0.83m、深さ0.20mを測る。砂と粗砂が薄く重なった状況で堆積している。溝状に堆積し、全体が硬化した状況が確認された。

5SF250（図81）

5SD215下に帯状に堆積した通行痕である。褐灰色砂が硬化した状況がみられた。

5SF270（図82）

官道東側溝5SD205下の溝状硬化面5SF230下層から検出された連続ピット状遺構である。9つのピット

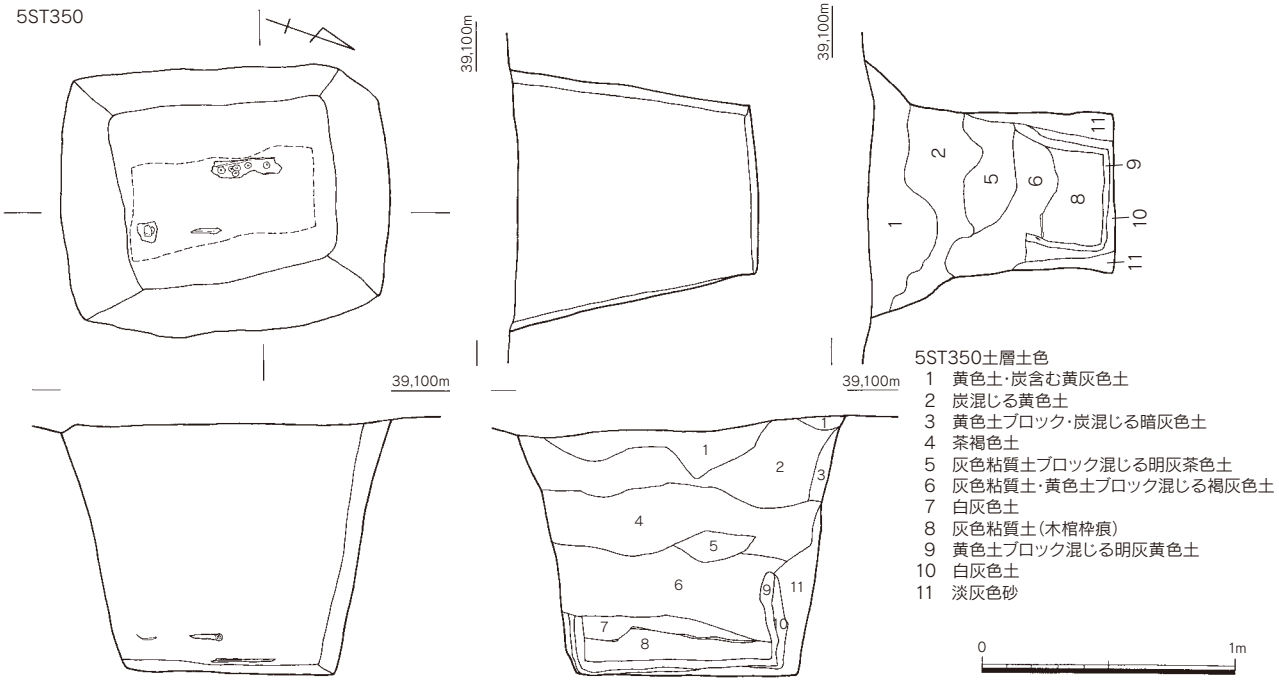


図77.3区5ST350遺構実測図(S=1/30)

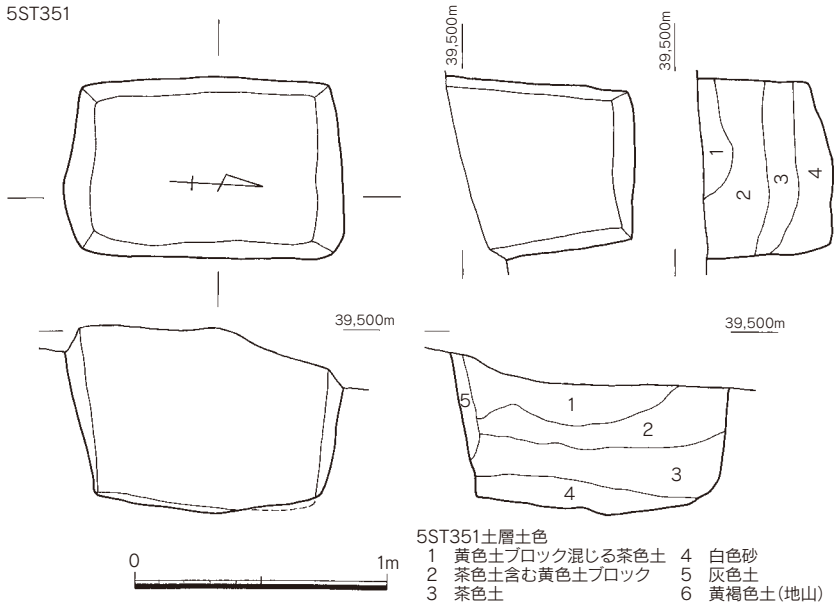


図78.3区5ST351遺構実測図（S=1/30）

（5SF270a ～ e）を検出し、形状は円形もしくは東西に延びた楕円形状を呈す。埋土は灰褐色粗砂や黄白色砂などの砂が硬化した状況で埋没している。深さは0.05 ～ 0.20mほどで、270a ～ eまでの群で北から南にかけてピットが浅くなる傾向がみられる。

d.土坑

5SK204（図84）

やや南北に長い楕円形状を呈す。土坑底部から甕底が出土している。土坑の規模は長さ0.86m、幅0.69m、深さ0.32mを測る。

5SK226（図84）

長さ0.78m、幅0.75m、深さ0.35mを測る円形の土坑である。瓦質土器の甕が底部を破砕された状況で埋納された状況で出土している。（柳智子）

3.出土遺物

1）1区出土遺物

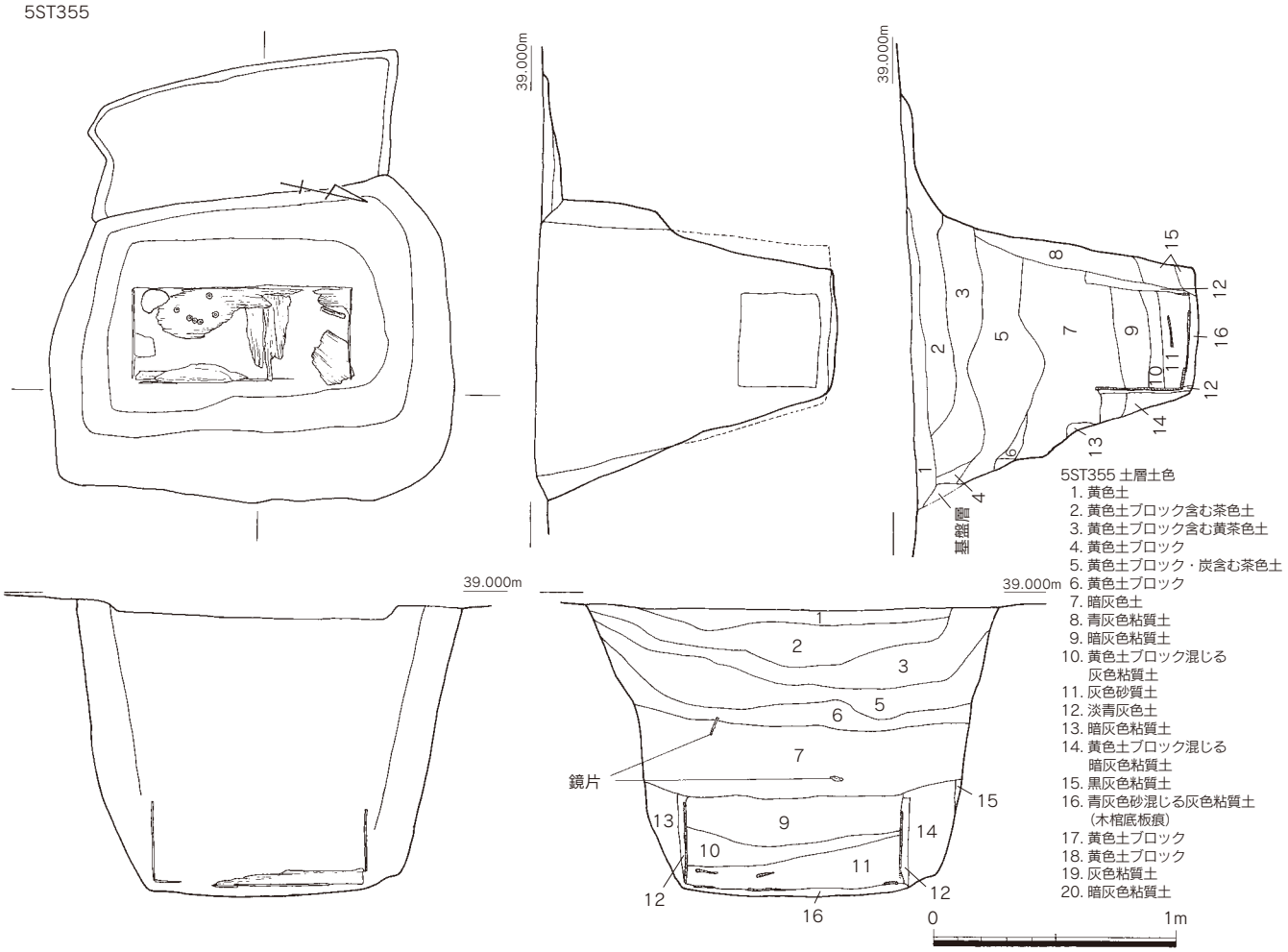


図79.3区5ST355遺構実測図（S=1/30）

図80.3区トレンチ位置図（S=1/300）

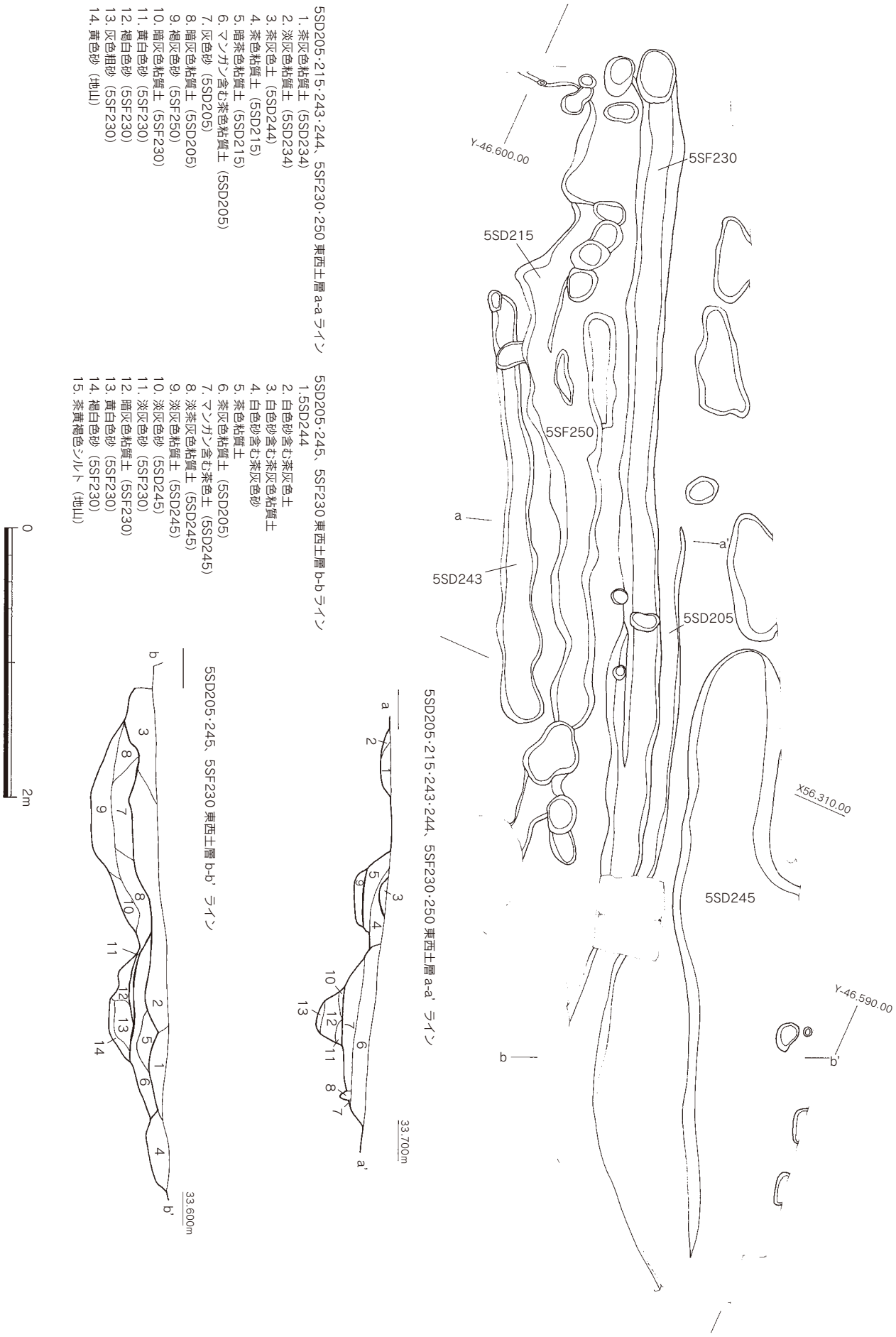


図81.4区道路関連遺構実測図（1）（S=1/40）

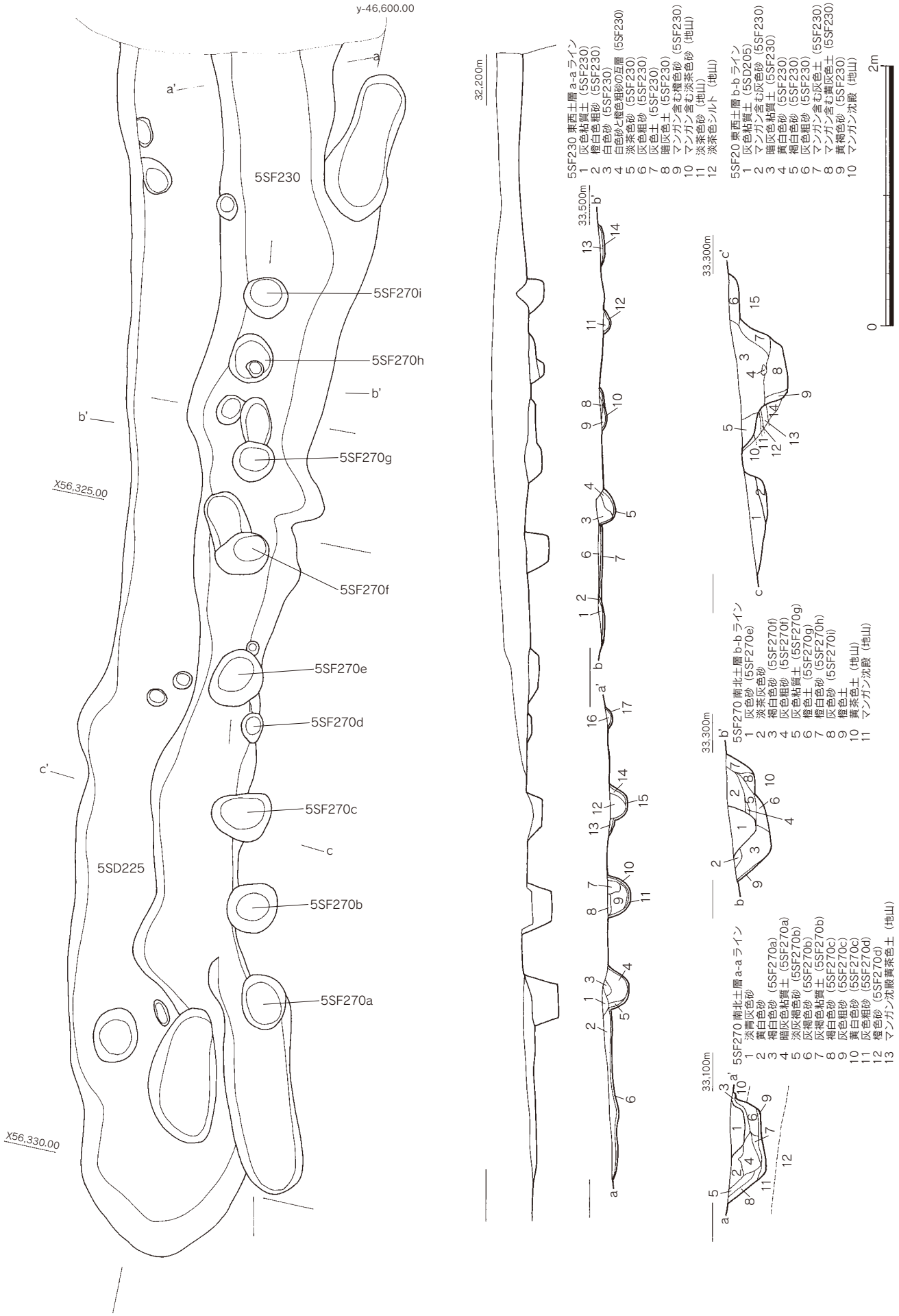


図82.4区道路関連遺構実測図（2）（S=1/40）

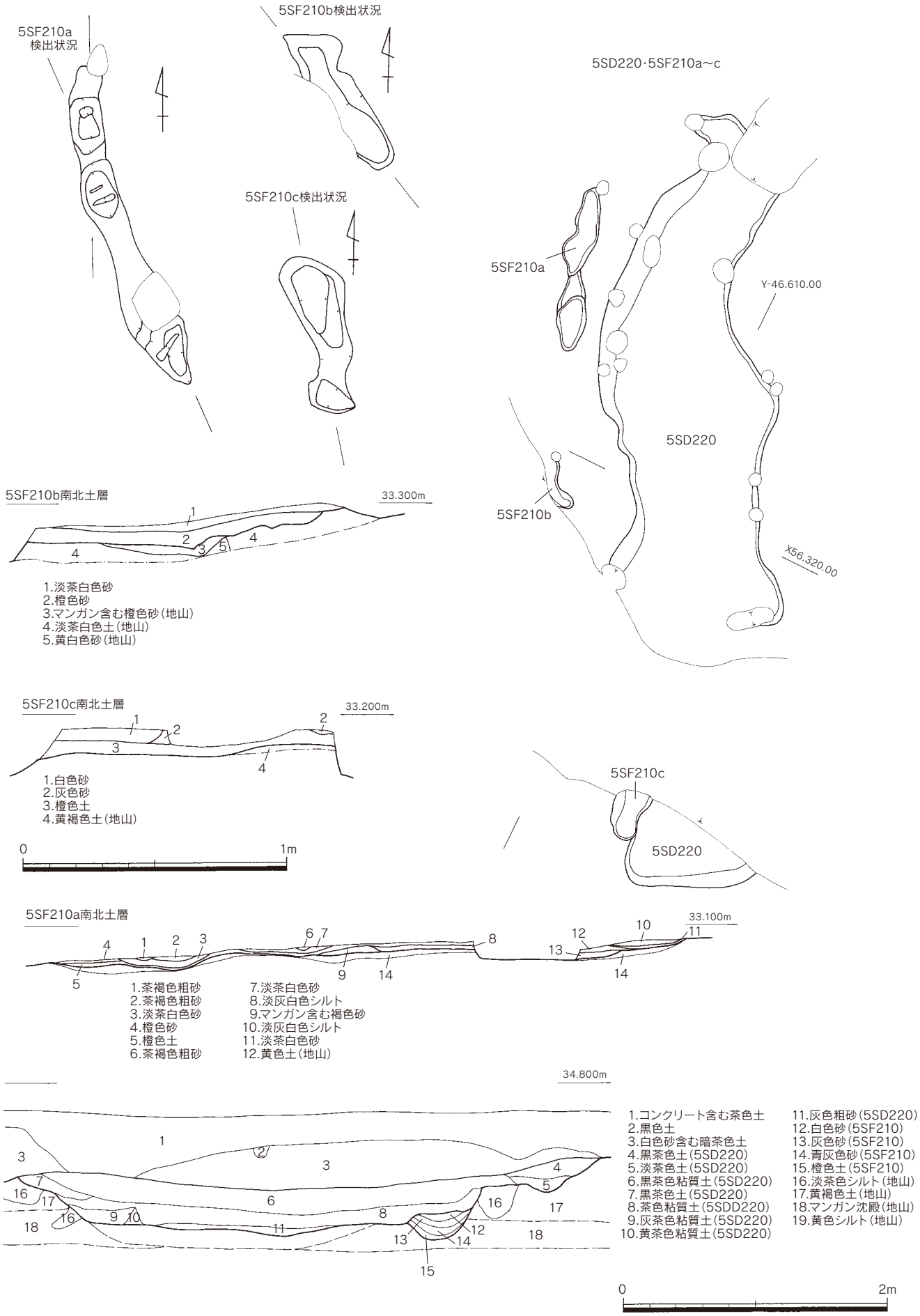


図83.4区道路関連遺構実測図（3）（S=1/20・1/40）

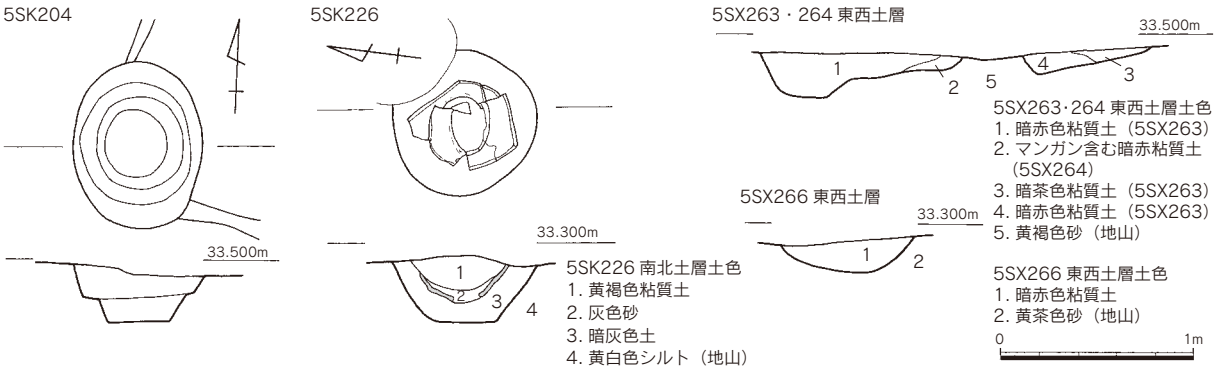


図84.4区土坑遺構実測図(S=1/40)

a.掘立柱建物

5SB030（図85）

須恵質土器

鉢(1)　現存長3.1cm。口縁部の破片。口縁部を厚く肥厚させる。東播系こね鉢。

国産陶器

壺(2)　現存長2.9cm。底部の破片。

油さし(3)　現存長14.5cm､底径9.3m。口縁部を欠く。底部ヘラ切りのち､ナデ調整。肩部に三条の凹線が入る。全体に淡緑灰色の釉を施し、暗渇灰色が肩部に部分的にかかる。

土製品

メンコ(4)　長軸長1.85cm、短軸長1.65cm、厚さ0.9cm。焼成良好。狐面か。

b.溝

5SD005（図85）

土師器

坏(5)　現存器高長3.6cm、復原底径8.5cm。焼成はやや不良。底部ヘラ切り。内外面とも摩耗しており、調整は不明瞭。

土師質土器

擂鉢(6)　復原口径20cm、器高8.1cm、復原底径11cm。焼成はやや良好。外には、指頭圧痕の後、斜め方向の刷毛目調整のあと、ナデ消している。内定面に同心円状に条線を巡らす。体部内面に四条を１つの単位として底部から口縁部に向かって放射状に擂目を施す。

5SD010（図85）

土師質土器

鉢(7、8)　7、8ともに口縁部の破片。口縁部は直線的におさめる。

擂鉢(9)　現存長4.9cm。底部から底部の破片。

底部から体部の破片。外面調整は指頭圧痕をナデ消している。内面には擂目を施す。

瓦質土器

釜(10、11)　10は現存長4.3cm。体部破片。鍔が巡らせ、その上部に把手痕跡が認められる。内面は横方向の刷毛目調整。11は口縁部破片。体部から屈曲させて直立する口縁部。内面調整は指頭圧痕をナデ消している。外面は肩部にスタンプ文の痕跡が認められる。

青磁

椀(12)　破片。龍泉窯系青磁碗Ⅰ類に該当すると考えられる。

5SD010灰色砂(図85)

肥前系磁器

椀(13)　現存器高長3.1cm、残存底径長7cm。内外面に呉須により絵付けをする。内面の図案は、船に旗を立てている図。高台外面には○×を繰り返し巡らせている。

皿（14）　復原口径9.7cm、器高2.2cm、底径3.4cm。内面に呉須で下絵付けをする。

国産磁器

蓋（15）　口径9.4cm、器高1.6cm、底径2.7cm。皿状の器形の中央につまみを持つ、いわゆる落とし蓋。内面の口縁部まで施釉される。外面は露胎。

5SD015灰茶色粘土（図85）

土師器

椀（16）　現存長3cm。口縁部破片。内面にミガキaを施す。外面の調整は不明。出土した段階では器壁に暗茶色の付帯物があった。漆紙の可能性あり。

椀c（17）　現存長2cm。底部破片。内面にミガキa調整。

甕（18）　現存長4cm。口縁部破片。内面は摩耗により不明だが、内面の稜が明瞭なことから削り調整が施されていた可能性が高い。器形は大きく「く」の字に外反する。

須恵器

蓋c3（19･20）　19は、口径12.7cm、器高2.2cm。つまみは平坦。天井部はヘラ切り後、回転ヘラ削りを施す。20は復原口径14.8cm、器高1cm。つまみの有無は破片のため不明。天井部はヘラ切り後、回転ヘラ削りを施す。

坏a（21）21は復原口径12.6cmを測る。焼成は良好。還元はやや良好。

坏c（22・23）　22・23は底部破片。高台断面形は台形を呈す。焼成は良好。還元はやや良好。

甕（24）　口縁部破片。口縁端部を丸める。

土製品

トリベ（25）　残存長4.8cm。口縁部から体部途中まで残存している。外面に指頭圧痕の痕跡がわずかに確認できる。内面下部には黒灰色を呈す鉱滓の残存物が直径2cmの範囲に認められる。付着物から口縁部に向かっては強い熱を受けたことにより、表面が気泡状に変化している。断面を観察すると元々、胎土の色調は基本的に淡茶渇色だが、熱を受けているため、外側の一部分を除いて、大部分が淡灰渇色を呈す。特に強い熱を受けている内側は淡青灰白色に変化している。

土錘（26）　長軸長5cm、短軸長2.4cm、厚さ0.7cm。中央部に1cm程度の孔を穿った円盤状の製品。焼成は不良。色調は明茶渇色。

金属製品

釘（27）　長軸長3.5cm、横軸長0.9cm、厚さ0.9cm。上端部を折り曲げて頭にした鉄釘。

石製品

碁石（28）　長軸長1.7cm、短軸長1.5cm、厚さ0.5cm。色調は淡灰白色。石材は石英。

石器（29 ～ 34）　29~31は黒曜石製の石鏃。32は黒曜石の剥片。33・34は安山岩製の剥片。

5SD015灰色砂（図85）

石製品

石器（35）　安山岩製の剥片。

5SD015褐灰色砂（図86）

石製品

砥石（1）　長軸長7.4cm、短軸長6.9cm、厚さ5.2cm。4面を砥石として使用している。石材は砂岩。

5SD017茶色粘土（図86）

青磁

皿（2）　小破片。同安窯系青磁皿。

5SD017茶色土（図86）

瓦質土器

擂鉢（3）底部破片。4条を一単位とした擂目を底部から放射状に施す。焼成はやや不良。

国産磁器

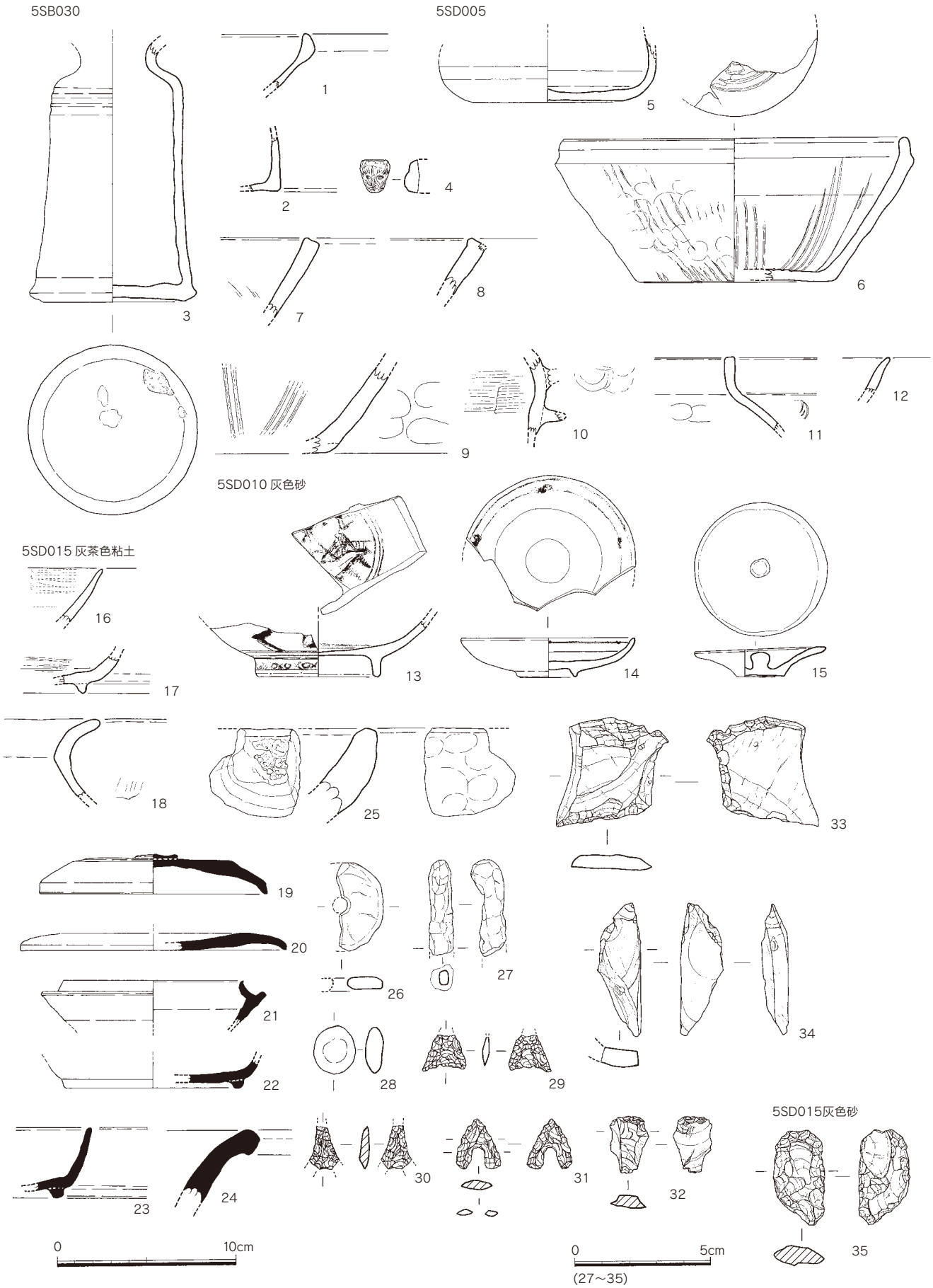


図 85.1 区出土遺物実測図（1）（S=1/2・1/3）

白磁

椀(4)　口縁部破片。外面を片羽彫りする。

白磁

椀(5)　底部破片。

5SD017茶灰粘土(図86)

金属製品

鉱滓(6)　長軸長6cm、短軸長5.1cm、厚さ3cm。色調は裏表ともに、黄土色～茶渇色の鉄錆色。部分的に黒渇色の金属質が露出している箇所あり。石英が融解して張り付いている箇所が一部ある。重さ109.6g。

5SD020白色土(図86)

瓦質土器

羽釜(7)　残存長5.2cm。外面体部に突帯を巡らす。突帯の上端部には溝を巡らせ、それより上部は梅鉢文が崩れたような押型が全面に施される。突帯の下部には吹きこぼれと思われる黒褐色に変化した箇所がある。内面は指頭圧痕がナデ消されている。

白磁

椀(8)　底部高台の破片。

金属製品

釘(9)　長軸長3cm、短軸長2.5cm、厚さ2.1cm。わずかに釘の部位が付着した鉱滓片。

5SD050茶灰色土(図86)

須恵器

甕(10～13)　10～12は口縁部破片。甕bタイプ。いずれも口縁部を折り曲げて肥厚させる。13は頸部破片。

石製品

剥片(14)　安山岩の剥片。

5SD050橙色土(図86)

須恵器

甕(15)　口縁部破片。

石製品

剥片(16)　黒曜石剥片。

5SD056(図86)

須恵器

甕(17)　大甕b。外面調整は叩き目痕をナデ消しで、内面は同心円文の当て具痕跡あり。

c.土坑

5SK008(図87)

国産磁器(白磁)

皿(1)　残存高1.2cm、復原底径3.8cm。

石製品

石臼(2)　縦長25.3cm、横長12.0cm、厚さ7.7cm。元は円形で、破損のため4割ほど残存した破片。上部には幅3.5cmほどの範囲をなだらかに加工した後、その稜より、中心に向かってすり鉢の窪み状に(一番深いところで深さ1.7ｃｍ)彫り込みがなされている。中心点をすこし外して、直径1.7cmほどの穴が上部から下部まで貫通している。下部に幅5mm、深さ1.5mmのV字型をした擂目が6条を1単位にして彫り込まれている。下部の擂目は使用痕跡により摩滅が進んでいる。碾き臼と考えられる。

砥石(3)　長軸長15.1cm、短軸長5.6ｦ5.5cmを測る直方体。長軸に平行する4面はすべて摩滅しており、砥石として使われたことがわかる。長軸に直行する2面には摩滅は確認できなかったが敲打痕が認められた。

5SK041(図87)

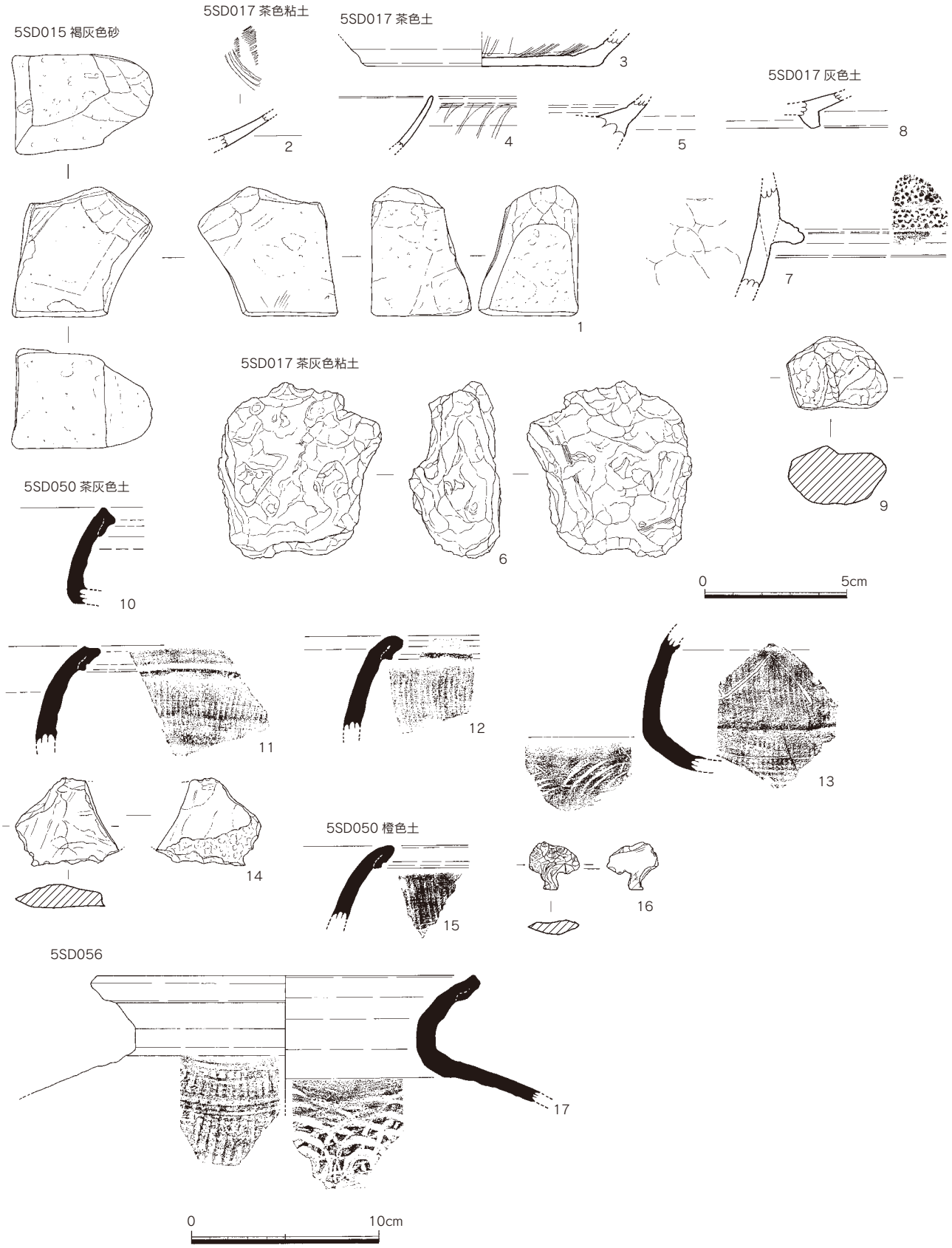


図86.1区出土遺物実測図(2)（S=1/2・1/3）

石製品

擦り石(4)　長軸長11.1cm、短軸長6.6cm、厚さ4.5cm。石材は多孔質の安山岩。両面及び側面も摩滅しているため擦り石として使用していたと推定される。側面の短軸側には敲打痕が認められる。

d.その他の遺構

5SX011（図88）

土師器

坏b（1）　復原口径10.1cm、器高2.2cm、復原底径4.8cm。底部回転糸切り。

石製品

石臼(2)　石材は安山岩。長さ15.3cm、幅8cm、厚さ2.9cm。色調は赤褐色を呈す。口縁部から中央に向かって内面は平滑に加工をしてあるが、稜がついて立ち上がる途中から欠損している。おそらく中央部に向かって厚さを増しているものと想定できる。外面は粗カンナ削りで仕上げている。受け口部か。

5SX028（図88）

須恵器

坏(3)　器高2.6cm。底部回転ヘラ切り。

土製品

土壁(4)　縦5.4cm、横4cm、厚さ2.5cm。色調は淡橙茶褐色、部分的に茶褐色～暗褐色を呈す。表面に藁と見られる繊維の痕跡が明瞭に残ることから壁材として使われた可能性がある。

5SX032（図88）

須恵器

蓋(5)　現存長1.1cm。口縁部破片。焼成はやや不良。

坏c（6 ～ 7）　6は復原口径11.6cm、器高4.6cm、残存底径7.4cm。底部は回転ヘラ切り。焼成は良好。高台は台形でやや外側に踏ん張っている。7は残存高2.8cm、復原底径8.7cm。

土師器

坏c（8）　残存高1.2cm、復原口径9.9cm。焼成は不良。色調は淡黄土色。

土製品

トリベ(9)　残存高5.3cm。外面に指頭圧痕が明瞭に残る。手づくね成形。内面に黒褐色を呈す鉱滓が付着している。断面を観察すると、胎土が比熱より色調が変化している。胎土はやや粗く、5mm以下の白色粒、1mm以下の黒色粒子を含む。焼成はやや不良。

5SX035灰茶色土(図88)

石製品

砥石(10)　縦6.7cm、横5.4cm、厚さ2.5cm。石材は砂岩。実測図に向かって左側面以外は摩耗していることから、砥石として利用されている。また右側面は継続的な利用によって、摩耗が進行している。

5SX049（図88）

瓦質土器

甕(11)　残存高18.7cm、復原底径22.3cm。内面は指頭圧痕の後、粗い回転ナデ調整を施す。外面は刷毛目調整。表面が気泡によってはじけており剥離している。内定面は不整方向の刷毛目調整。底部と体部を接合時の工具によるナデ調整が認められる。内面底部近くには砂状の付着物が帯状に巡っている。

5SX052（図88）

土師質土器

七輪(12)　体部の一部が欠損しているため、接合できないが同一固体だと考えられる。復原口径21cm、残存高18.9cm、復原底径21cm。焼成は良好。色調は淡黄灰色。内部に炭を乗せるセンを受ける三角形の突帯が巡る。その下には灰を受ける底板がある。センと底板の間の体部には、灰を掻き出すための開口部がある。口縁部は内側に折り曲げられており、補強のために肥厚させている。高台部も大きく三脚状に広げている。体部調整は

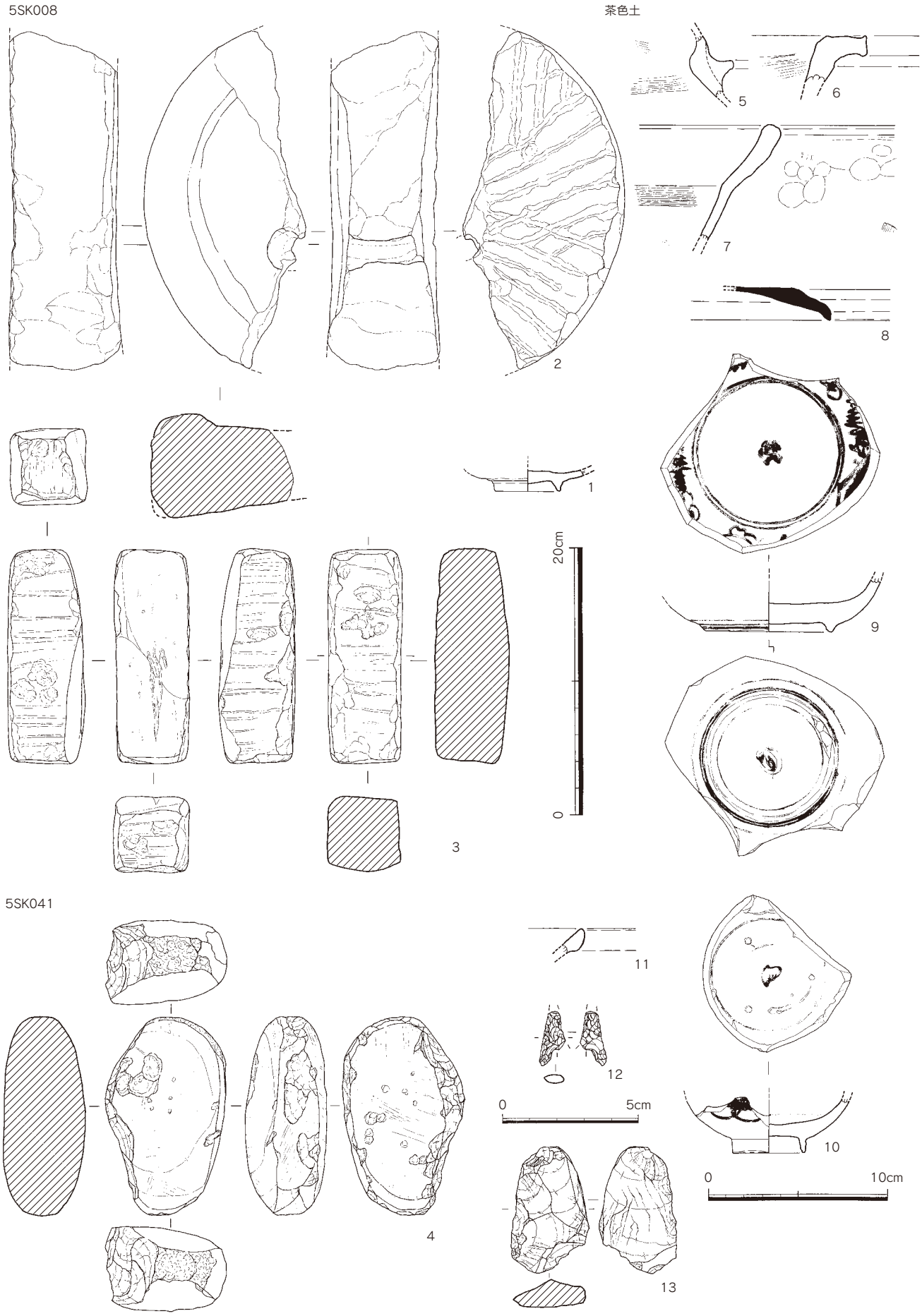


図87.1区出土遺物実測図(3)（S=1/2・1/3・1/4）

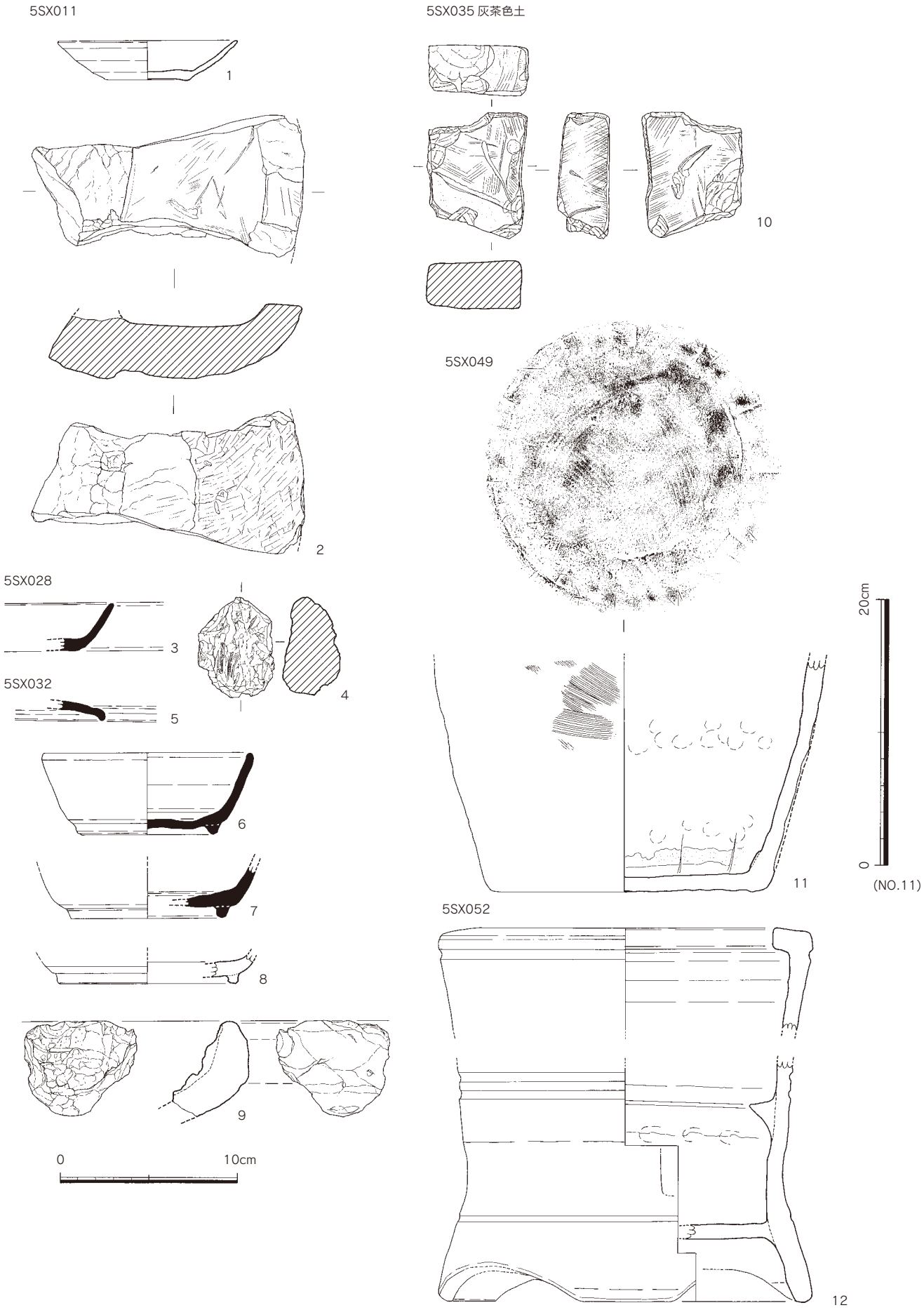


図88.1区出土遺物実測図(4)（S=1/2・1/3・1/4）

基本的に回転ナデで仕上げている。体部には4条の沈線が巡る。

e.土層

茶色土（図87）

土師質土器

釜（5）　現存長3.5cm。体部の破片。突帯を貼り付けている。

鉢（6）　残存長2.5cm。口縁部破片。内面は刷毛目調整。口縁部は水平方向へのばす。

鍋（7）　残存長6.3cm。緩やかに内湾して立ち上がる口縁。内面体部稜線までは刷毛目調整で、口縁端部までは横方向ナデ調整。外面は指頭圧痕と刷毛目調整後、横方向ナデ調整。

須恵器

蓋（8）　残存高1.8cm。天井部は回転ヘラ削り後、粗いナデ調整。口縁端部は三角形を呈すが、成形が雑で太く仕上がっている。

肥前系磁器

椀（9、10）　9は残存高2.8cm。復原底径6.8cm。10は残存高3.0cm、復原底径4.1cm。9・10ともに内外面に呉須で下絵付けをしている。10は内面見込み部に三点のトチン目跡が残る。

白磁

椀（11）　口縁部の破片。Ⅳ類。

石製品

石鏃（12）　縦2.05cm、横0.8cm、厚さ0.35cm。安山岩製。先端と茎部の1辺が欠損している。

剥片（13）　縦7.1cm、横3.9cm、厚さ1.5cm。安山岩製。　（髙橋学）

2）2区出土遺物

a.土坑出土遺物

5SK109（図89）

瓦質土器

火鉢（1）　口縁のみの小片である。微量の灰白砂粒を含みのやや精良な胎土で、焼成は良好。口縁部には2条の貼り付け突帯が付き、突帯との間に菊花文が押印される。内面はヨコ方向の刷毛目で、外面には刷毛目後タテ方向のナデが見られる。火鉢（Ⅱ-A）と考えられる（山村1990）。

5SK110灰色砂（図89）

金属製品

簪（1）　青銅製の三つ又の簪である。髪挿し部分には足が開いた状態になっているが、ほぼ完存している。全長は13.85cm、厚さ2mmを測る。

5SK113灰色粘質土（図89）

土師器

小皿a（1）　口径5.8cm、器高1.0cm、底径4.3cmを測る。底部糸切りで、口縁端部に煤が付着しており、灯明皿として使用されている。胎土は暗橙色で、白色砂粒を少量含み、細かな雲母が大量に混入されている。

国産陶器

盤（2）　口縁部のみの小片である。素地は淡灰色で、微量の砂粒を含み精良で硬質。釉調は細かな貫入の入る緑灰色の透明釉で、口縁端部周辺に暗茶褐色の鉄釉がかかる。

肥前系染付

広東椀（3）　体部から底部にかけての小片である。高台径5.7cmに復原できる。白色の精良な素地で、貫入の入るやや青みがかった透明釉がかかる。

5SK126（図89）

国産陶器

竹徳利（1）　底部が欠損した破片で、口径4.2cm、肩部径13.6cmを測る。暗灰色の素地は白色砂粒や黒色粒子

を多く含みやや粗く、硬質。透明度が低く光沢度の高い飴釉が施される。

b.溝

5SD132（図89）

須恵器

蓋 c（1）　天井部のみの小片である。扁平なつまみがつく天井部の切り離しは摩耗により不明だが、内面にナデが確認できる。胎土は淡白褐色の砂粒を多く含みやや精良で硬質である。

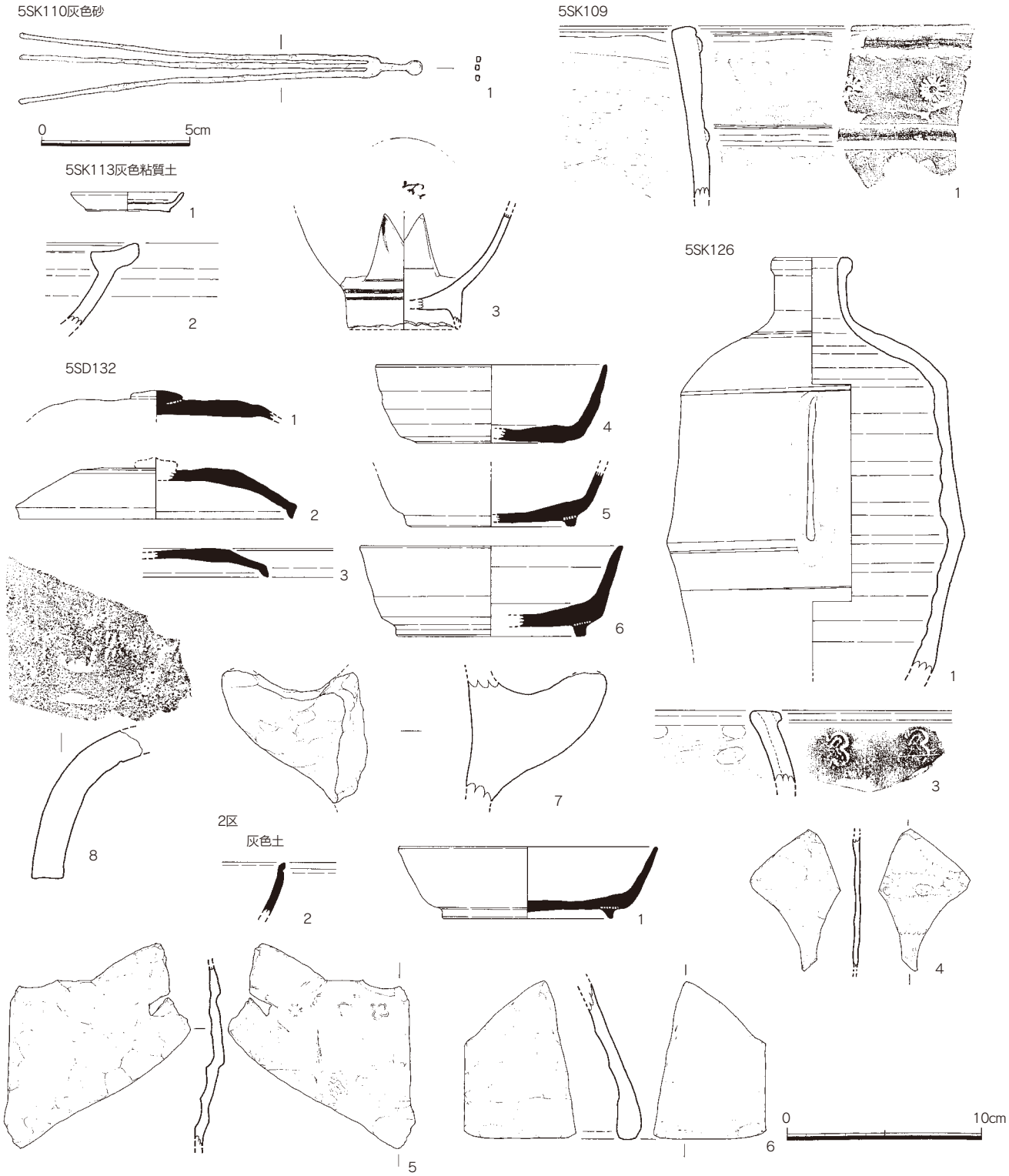


図89.2区出土遺物実測図(S=1/2・1/3)

蓋ｃ３（2）　つまみが欠損した1/5程度の破片である。口径14.4cmに復原できる。天井部にはヘラ削り後につまみ接合のためのナデが確認できる。口縁端部は断面三角形状を呈す。

蓋3（3）　口縁から天井部の1/8以下の小片で、口径は13.0cm前後と想定される。天井部はヘラ削りが見られる。白色砂をやや多く含む、やや精良で硬質な胎土である。色調は淡茶灰色で焼成はやや不良である。

坏a（4）　1/2弱の破片である。口縁にやや歪みがあるが、口径11.9cm、器高4.0cm、底径9.5cmに復原される。底部はヘラ切り後ナデ調整が施され、内底部のナデが確認できる。胎土は青灰色で黒色粒子を大量に含み精良で硬質である。焼成・還元ともに良好である。

坏ｃ３（5・6）　5は体部から底部にかけての破片である。底径8.7cmに復原できる。底部切り離しはヘラ切り後ナデ調整で、内底ナデが施される。胎土は暗青灰色で白色砂粒をわずかに含みやや精良で硬質。6は1/4程度の破片で、口径13.5cm、器高4.7cm、底径9.8cmに復原される。底部切り離しはヘラ切り後不定方向のナデで、内底ナデが認められる。胎土は青灰色で、黒色粒子をやや多く含みやや精良である。焼成還元ともに良好で硬質。

土師器

甑（7）　取手部分のみの破片である。調整は摩耗が著しくやや不鮮明だが、内面にはタテ方向のナデが見られる。胎土は大粒の白色砂粒と雲母を大量に含み粗い。色調は黄茶色で取手部分に煤の付着が確認できた。

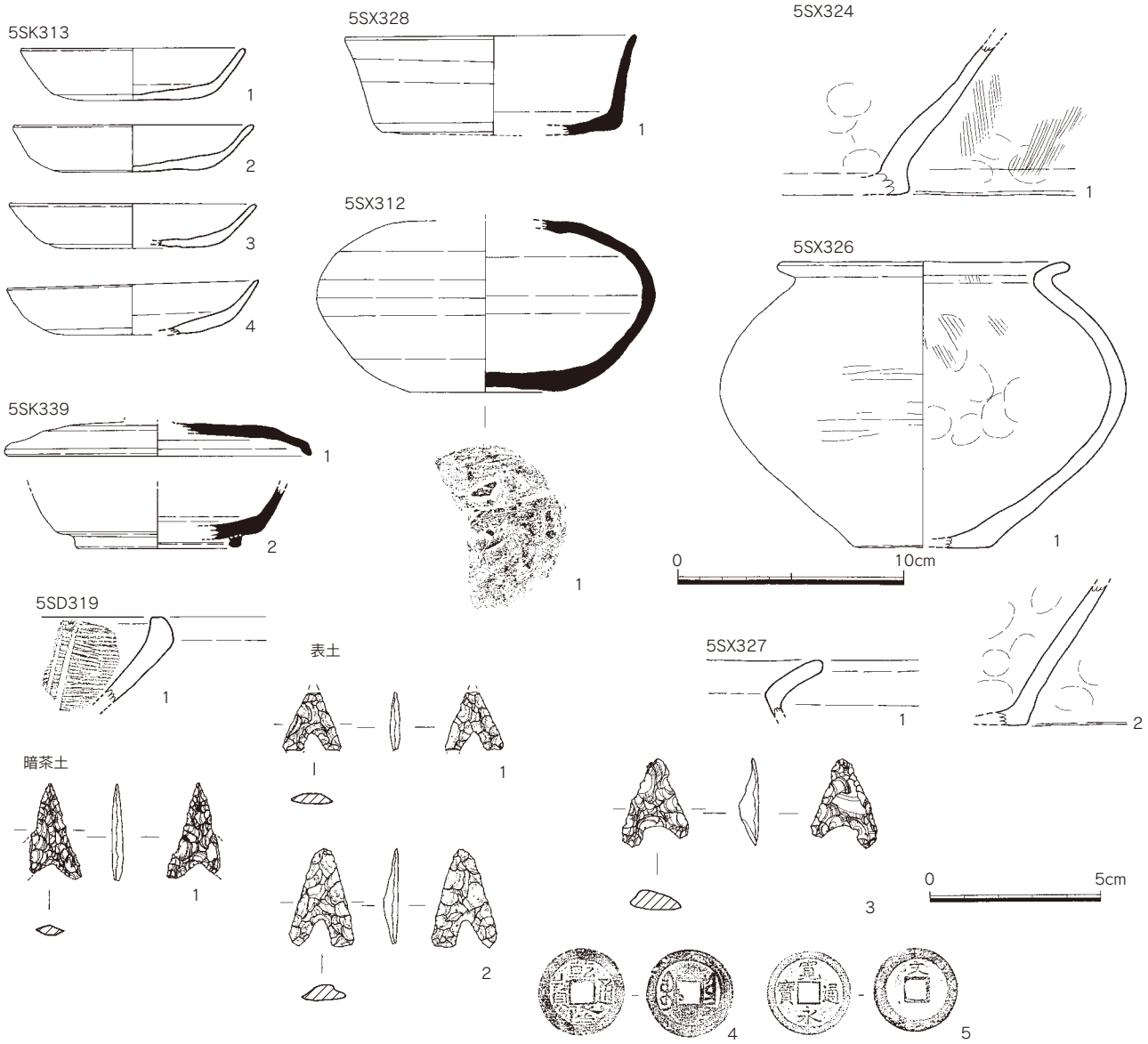


図90.3区出土遺物実測図（S=1/2・1/3）

瓦

丸瓦(8)　凸面に縄目叩き、凸面には布の継ぎ合わせ痕と粘土の継ぎ目痕がみられる。土師質な焼成で、胎土には大粒の白色砂粒を多く含みやや粗い。

c.土層

灰色土(図89)

須恵器

坏ｃ３（1）　全体の1/2程度の破片である。口径13.3cm、器高3.7cm、底径8.8cmを測る。底部切り離しはヘラ切り後不定方向のナデが施され、内底ナデも確認できる。胎土は白色砂粒を多く含みやや粗い。焼成・還元ともに良好で硬質。

椀(2)　口縁～体部にかけての小片である。体部から口縁にかけて内湾し、口縁端部は小さな玉縁状の形状を呈す。胎土は暗灰青色で、微量の砂粒を含みやや精良。焼成・還元ともに良好で、硬質。

土師質土器

火鉢(3)　口縁のみの小片である。淡灰白色の砂粒を多く含みやや粗い胎土で、焼成は良好。口縁部には外面に1条の貼り付け突帯が付き､突帯の下に花文が押印される。内面はヨコ方向の刷毛目と指頭圧痕で調整される。火鉢(AⅢ類)と考えられる(山村1990)。

土製品

博多人形(4～6)　4～6ともに寛政年間以降の博多人形の破片である。型作りで製作され、内面に指押えの痕跡が見られる。4は甲冑の袖部分、5は着色顔料が一部残存しており、鎧胴部分は黒と緑色、鎧袖部分は暗赤色が確認できた。6は袴の裾部分と考えられ、端部はナデで仕上げられている。

3）3区出土遺物

a.土坑

5SK313（図90）

土師器

坏a（1～4）　1～4は底部ヘラ切りで、淡白黄褐色の精良な胎土である。1は口径10.0cmに復原できる。2は口径10.6cmに復原でき、一部に黒班が認められる。3は口径11.0cmに復原でき、色調は淡白黄褐色である。4は口径11.2cmを測る。底部ヘラ切り後板状圧痕が確認できた。

5SK339（図90）

須恵器

蓋ｃ３（1）　口径13.6cmを測る。天井部は回転ヘラケズリで、つまみ接合のナデが残る。胎土は白色で、大粒の白色砂粒と黒色粒を含み、やや粗で硬質。

坏ｃ３（2）　底部から体部にかけての小片である。底径7.4cmに復原される。胎土は青灰色を呈し、大粒の白色砂粒と黒色粒を含むがやや密で硬質。

b.墓(古代)

5ST303（図91）

土師器

甕(1)　口径28.7cm、器高24.0cmを測り、ほぼ完形。最大径が口縁部にあり、内面ヘラケズリで外面はハケによる調整がある。頸部内面の稜が明瞭で、奈良時代以降の｢新規形式｣甕(Ⅱ-3類)と考えられる(中島、2001)。

越州窯系青磁

合子身(2)　口径4.1cm、受部径5.1cm、器高2.2cmを測る完形品である。口縁部は釉拭き取りで、底部には焼成時の目跡が残る。黄灰色の精良な素地で、細かな貫入の黄褐色釉がかかる。

金属製品

鉄釘(3～38)　墓内から出土した鉄釘は全部で37点を数える。その全てで木質が確認できた。完存していたのは5・7・10・34の4点である。全長は10で6.0cm、7で7.3cmを計る。全長は平均6.8cmである。頭部から木目

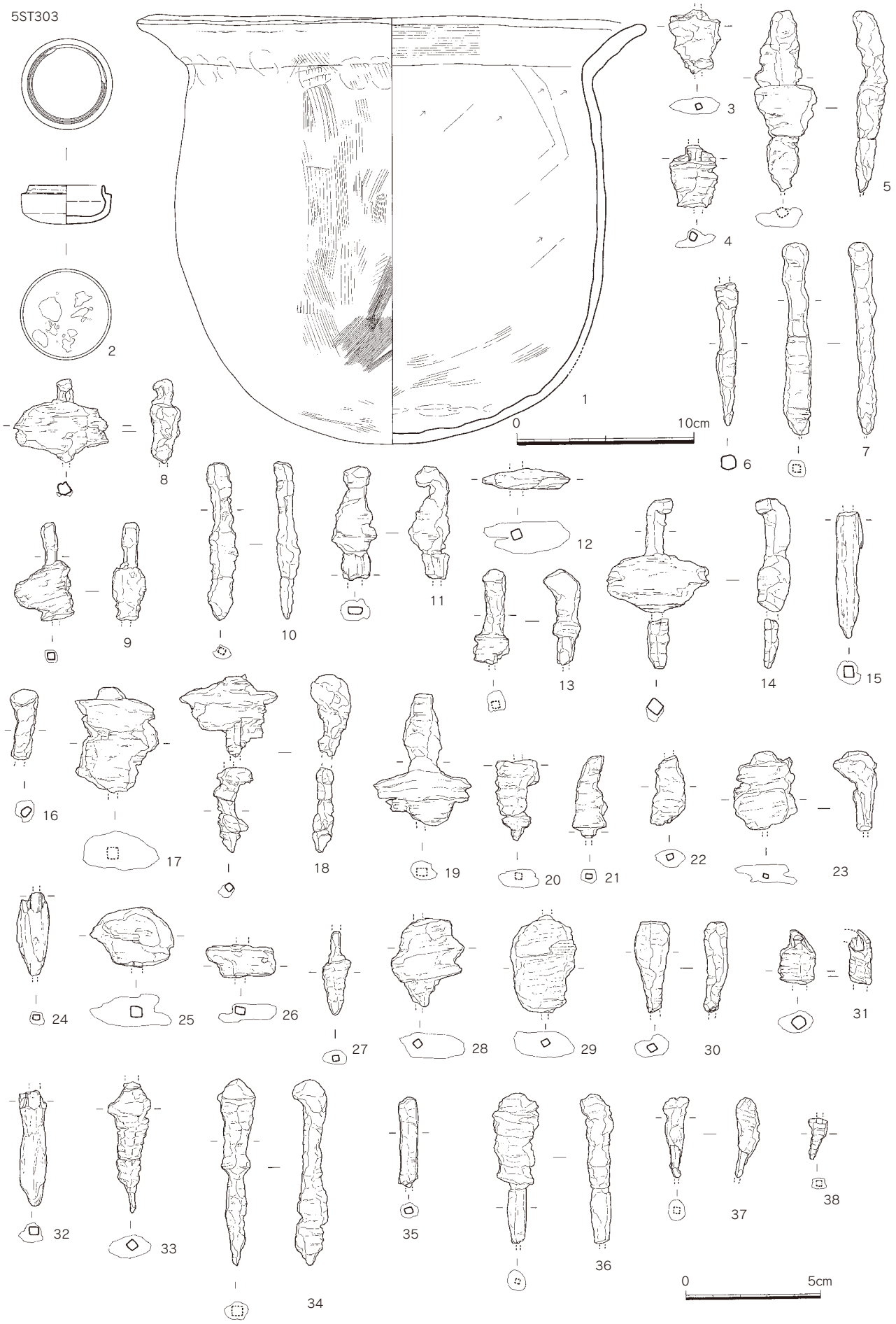


図91.3区墓出土遺物実測図（1）（S=1/2・1/3）

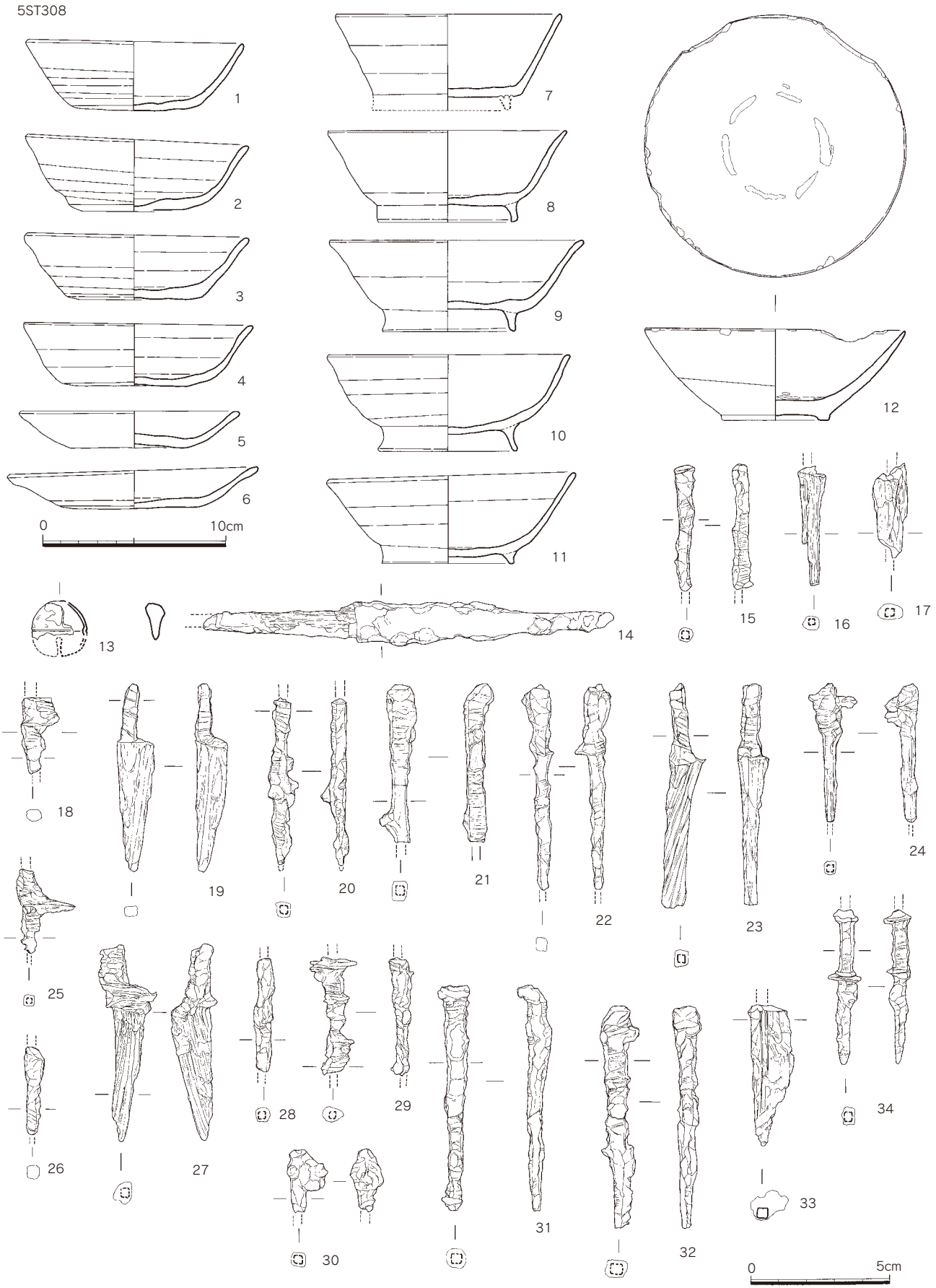


図92.3区墓出土遺物実測図(2)（S=1/2・1/3）

交差部分までの長さは平均3.25cmを計り、木棺の木材の幅が推定される。

5ST308（図92）

土師器

坏a（1 ～ 4）　1 ～ 4はほぼ完形である。胎土がきめ細かい。器面全体に細かなひび割れが確認でき、風化が著しい。1は口径11.7cmを測る。底部切り離しは風化により不明だが、内底ナデが確認できる。2は口径11.9cmを測る。底部ヘラ切りで全形のゆがみが大きい。3は口径12.1cmを測り、底部ヘラ切り。4は口径12.4cmを測る。内底部と底部に黒班が見られる。

皿（5・6）　5は口径12.0cmに復原できる。底部ヘラ切りで上げ底状に板状圧痕が確認できる。6は口径13.5cmを測る。砂粒を多く含み、やや粗い胎土で橙褐色を呈す。底部ヘラ切りで、全形がやや歪む。

中椀ｃ１（7 ～ 9）　7 ～ 9は底部ヘラ切りの貼り付け高台である。胎土は精良。7は口径12.2cmに復原できる。体部から口縁部にかけて直線的な形状で、高台はやや外踏ん張りである。8は口径13.0cmに復原できる。体部から口縁部にかけてやや外反する特徴を有す。高台はやや高めで、接地部分が内面に屈曲する。9は口径13.7cmに復原される。体部から口縁部にかけて外反する。直線的な高い高台である。

中椀ｃ２（10･11）　10は口径13.1cmを測る完形である。体部はやや内湾し、口縁端部が外反する。高台は高く、外踏ん張り形状である。11は口径13.5cmを測り、完形である。胎土に細かな砂粒を多く含む。

越州窯系青磁

椀（12）　口径14.2cmを測る。明褐灰色の精良な胎土で、黄緑色の釉がかかる。内面見込みと高台畳付部分に目跡が残る。ほぼ完形だが、口縁端部を内面側から細かく打ち欠いた痕跡が残る。椀Ⅰ-2aｱ類。

金属製品

鈴（13）　青銅製品の鈴で、胴部のみの破片である。やや下ぶくれな形状で、胴部に一条の沈線が入る。直径2.0cmを計る。外面に一部、金メッキが残る。

刀子（14）　鉄製の刀子で、柄部分を欠損するが刃部は完存している。15.0cmを計る。柄部分には木質が残存する。

鉄釘（15 ～ 34）　19点の鉄釘が出土し、そのすべてで木質が確認できた。完存しているものは5点を数える。19・23・27・31・32で、19は全長6.8cm、31・32は全長3.2cmを計る。平均全長7.72cmである。頭部から

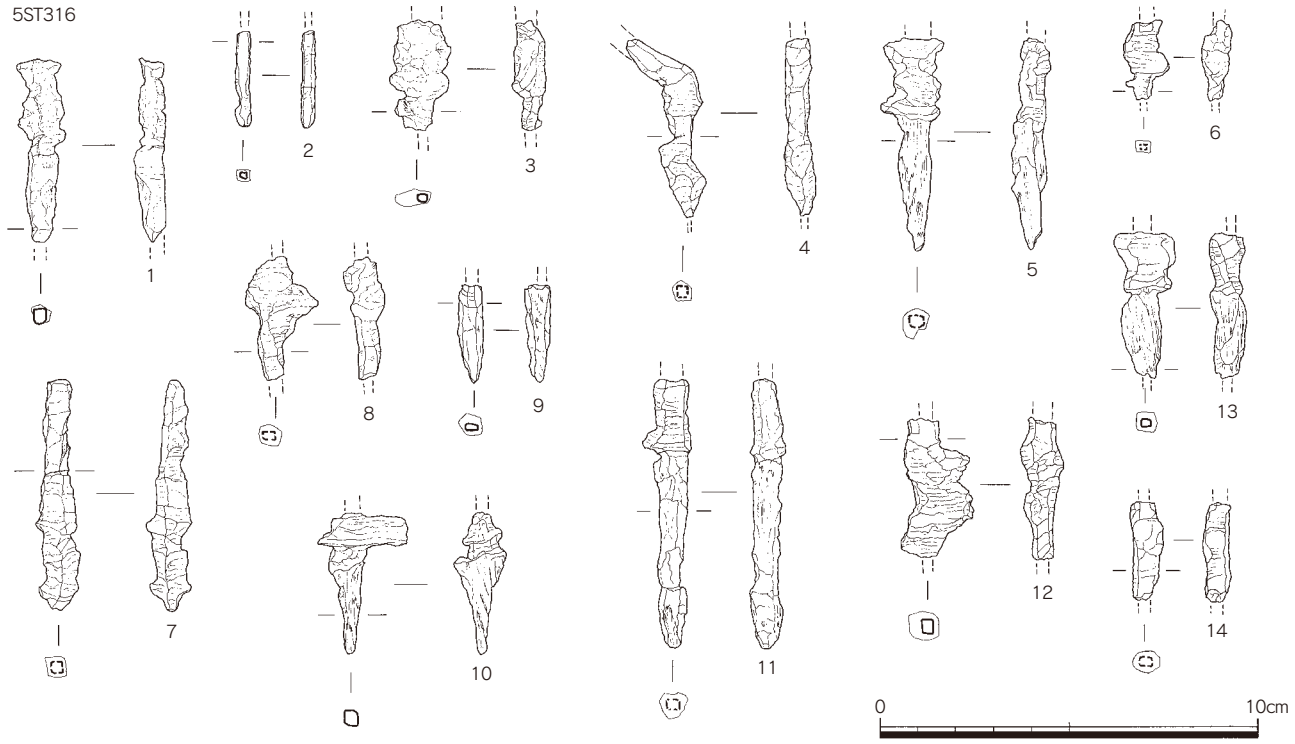


図93.3区墓出土遺物実測図（3）（S=1/2）

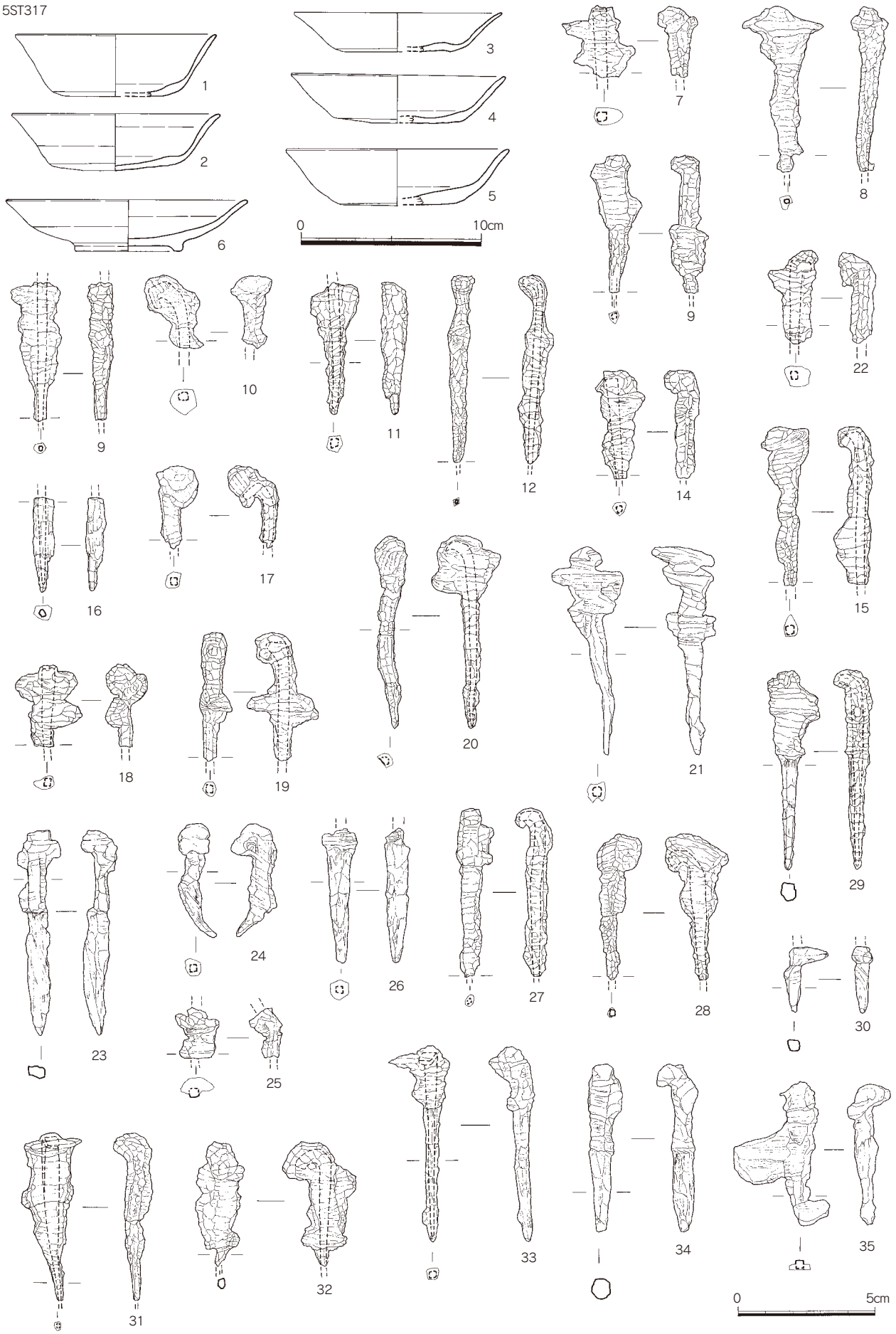


図94.3区墓出土遺物実測図(4)（S=1/2・1/3）

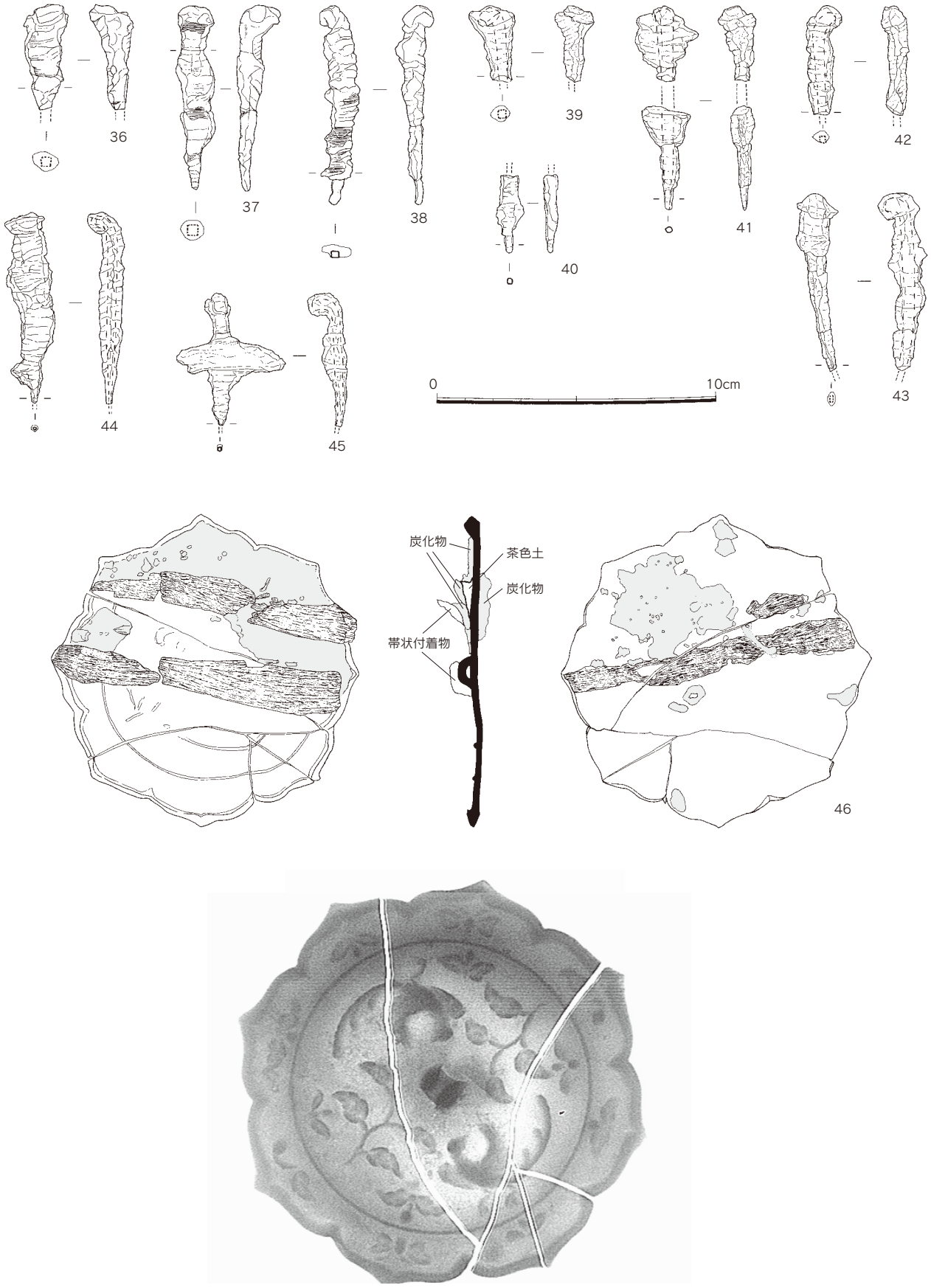


図95.3区墓出土遺物実測図(5)（S=1/2）

木目交差部分までの長さは2.0 ～ 3.1cmまでで平均2.5cmを計る。

5ST316（図93）

金属製品

鉄釘（1 ～ 14）　墓内からは15点の鉄釘のみが出土。完存するものはなかった。4は頭部がややL字に屈曲する。頭部から木目交差部分までの長さは1.95 ～ 2.5cmまでを測り、平均2.18cmである。棺材の幅が想定される。

5ST317（図94・95）

土師器

坏a（1 ～ 5）　1は口径11.2cmに復原される。底部ヘラ切りで内底見込みに強めのナデがある。やや精良な胎土である。2は口径11.6cmに復原される。底部ヘラ切りで、内底見込みに不定方向のナデが残る。体部から口縁にむけてやや外反する。白色砂粒を多く含むやや精良な胎土である。3は口径11.7cm、器高2.2cmに復原される。摩耗により調整不明。体部から口縁にかけて外反する。4は口径12.0cmを測る。摩耗により調整不明。底部～体部の一部に黒班が見られる。5は口径12.4cmに復原される。白色の砂粒を多く含みやや密な胎土である。

緑釉陶器

皿ｃ（6）　内面半分あたりに段を有す段皿である。内面見込み部分に一次焼成時の重ね焼き痕が残る。ケズリ出し高台で、畳付部分の釉は拭き取られる。胎土は白色砂粒を少量含み、硬質で精良である。胎土の色調は淡灰白色で、内外面に黄灰色がホタル状に点在する。釉調は薄く、光沢のある淡黄緑色である。京都産。

金属製品

鉄釘（7 ～ 45）　木棺墓8基のうち、出土量がもっとも多い45点が出土。そのうち完存していたのは20・21・23・24・29・33 ～ 35・37・38・44の計11点である。平均全長6.67cmを測る。もっとも全長が長いのは21の7.7cmである。もっとも全長が短いのが24の4.2cmで、先端がやや屈曲した特徴がある。頭部から木目交差部分までの長さは平均2.8cmを測る。

瑞花双鳥八稜鏡（46）　直径11.5cm、厚さ0.6cmを測る青銅製の和鏡である。外縁は八弁菱花文の形態を呈す。踏み返しの痕跡がみられず、鏡背文様は鮮明である。文様構成は素界圏によって内区と外区とに分かれる。内区中央の紐に綬は確認されなかった。内区には対になる草花文と鳳凰文をあしらい、外区には蝶文・瑞雲文・草花文などが表現される。鏡は棺内の底近くで背面を上にした状況で出土した。鏡の周囲には正方形状の炭化物が確認できた。鏡は炭化物内に斜めに落ち込んだ状況で出土している。鏡中央部分には背面・鏡面にわたって帯状の付着物が巻き付いた状況が確認できた。この帯状の付着物は出土時の目視および電子顕微鏡の調査で、布や組紐のような繊維ではないことが判明した。観察される繊維は織り縒りの痕跡がなく一定方向に揃った状況を呈す有機質なものであり、毛皮などの可能性が考えられる。

5ST320（図96）

土師器

坏a（1）　口径12.5cmを測り、ほぼ完形である。白色砂粒を多く含み、やや精良な胎土である。底部ヘラ切り後板状圧痕が残る。体部はやや内湾し、口縁部がやや外反する。

5ST330（図96）

土師器

坏a（1 ～ 3）　1 ～ 3は底部ヘラ切りで、内外面ともに風化による細かなひび割れが入る特徴がある。1は口径11.6cmを測る。黄白灰色の精良な胎土である。2は口径12.3cmを測る。体部から口縁にかけてやや外反する。白褐色の精良な胎土で、底部に黒班が残る。3は口径12.4cmを測る。明黄褐色で金雲母を若干含む精良な胎土である。内面見込み部分と底部に黒班が見られる。

鉢（6）　口径12.5cm、器高6.6cm、底径8.3cmを測り、完形品である。底部は平坦で、口縁がくの字に屈曲し、若干煤が付着する。内面には黒班がみられ、外面体部には使用により付着したコゲが帯状にこびりついている。胎土は明灰褐色で、白色砂粒のほかに大量の雲母を含みやや精良である。

壺（7）　器高10.3＋αcm、底部7.7cmを測る。口縁端部の一部を欠損しているが、ほぼ完形である。頸部から

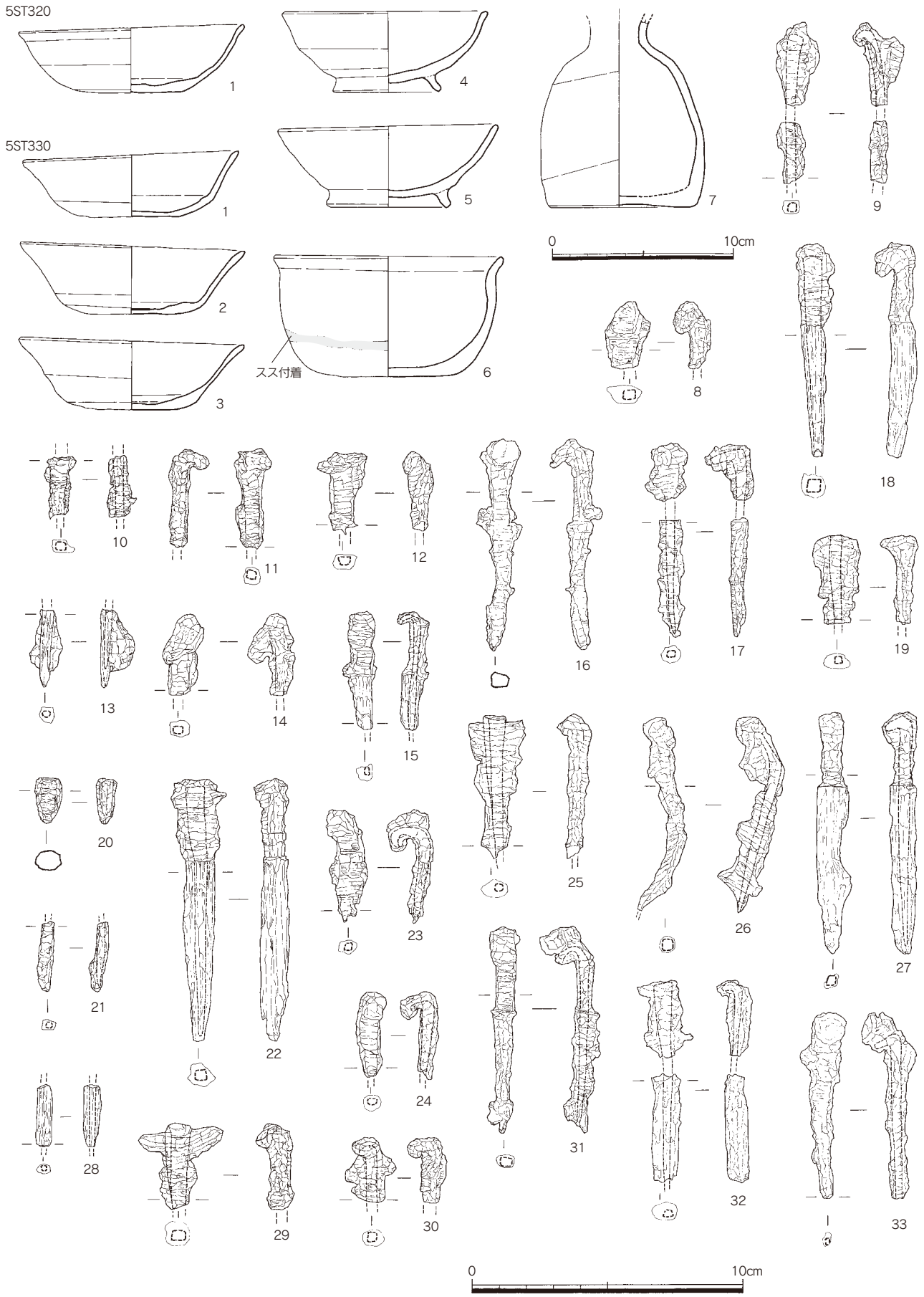


図96.3区墓出土遺物実測図(6)（S=1/2・1/3）

口縁にかけて外反し、体部上面はなで肩な形状で、体部中央に最大径がある。底部はやや上げ底状で調整は摩耗により不明である。胎土は明黄褐色で、白色砂粒のほかに雲母を大量に含み精良である。

黒色土器

椀ｃ（4・5）　4は口径11.2cmを測り、ほぼ完形である。底部ヘラ切りで、外踏ん張りの八の字高台が貼り付く。胎土は白色砂粒と雲母を若干含み精良である。5は口径11.9cmを測る。底部ヘラ切り後板状圧痕が残り、やや低めの外踏ん張りの貼り付け高台である。胎土は精良である。

金属製品

鉄釘（8 ～ 33）　26点の鉄釘が出土。そのうち、完存していたのは16・18・22・26・27・31・33の7点である。22は全長が9.7cmともっとも長い。もっとも全長が短いのは33の6.85cmである。平均全長は7.9cmと他の木棺墓のなかでも長い鉄釘を使用している。頭部から木目交差部分までの長さは平均3.15cmとなる。すべての鉄釘に木質が残存している。26は全長7.1cm、頭部から木目交差部分までは3.2cmを測る。全体がややくの字に折れ曲がった形状を呈し、屈曲部分で木目交差が確認できる。

5ST331（図97）

土師器

坏a（1・2）　1は口径11.2cmを測る。器面全体にわたって細かなひび割れが見られる。2は口径11.3cmをはかる。底部ヘラ切りで板状圧痕が確認できる。

5ST333（図97）

須恵器

坏a（1）　口径14.6cm、器高4.6cm、底径8.0cmを測り、完存する。底部ヘラ切り後ナデ調整が施され、口縁端部がナデによりやや玉縁状を呈す。胎土は灰色で白色砂粒をやや多く含み精良で硬質である。内面器壁に茶色付着物が残る。須恵器は黒色土器椀ｃと合口の状態で出土している。

土師器

坏a（2 ～ 4）　2は口径11.6cmに復原される。口縁部の歪みが大きく、器高2.5 ～ 3.0cmで傾いている。底部ヘラ切り後板状圧痕、内底にナデ調整がある。胎土は淡白黄橙色で白色砂粒と茶色粒を若干含みやや精良。3は口径12.2cmを測る。器高が2.5 ～ 3.2cmと口縁が歪み、かなり傾いている。摩耗により調整が不明瞭だが、底部ヘラ切りと推定される。胎土は淡白黄橙色で白色砂粒と茶色粒を若干含みやや精良。4は口径12.2cmに復原される。底部ヘラ切り後板状圧痕である。胎土は淡黄灰色で白色砂粒をやや多く含み、やや粗。

皿a（5）　5は口径11.4cmを測り、ほぼ完存する。底部ヘラ切り後板状圧痕が残る。体部から口縁にかけて大きく外反する。胎土は淡白橙色で白色砂粒と茶色粒を含み精良。

椀ｃ（6・7）6は口径12.4cmを測る。底部ヘラ切り後板状圧痕が残る。貼り付け高台はやや外踏ん張りで、口縁端部が外反する。内外面の調整は摩耗のため不明瞭。胎土は淡白橙色で白色砂粒をやや多く含むが精良である。7は底部のみの小片である。底部ヘラ切りで、高台は接地部分がやや内湾気味である。胎土は茶灰色で大粒の白色砂粒を含みやや精良。

黒色土器

椀ｃ（8）　口径15.8cmを測る。底部ヘラ切りで、貼り付け高台は高く外踏ん張りの形状を呈す。体部は内湾し、口縁端部はやや外反する。内外面の調整は摩耗により不明瞭だが、内面に若干ミガキｃが認められる。胎土は細かな白色砂粒を含み精良。内面器壁に茶色付着物が残る。黒色土器は須恵器坏aと合口の状態で出土し、蓋として使用されていた。茶色付着物は内容物の可能性があるが、詳細な分析はしていない。

5ST335（図97・98）

土師器

坏a（1 ～ 11）　1 ～ 11はほぼ完形品である。口径は10.8 ～ 11.4cm、器高は2.0 ～ 2.4cm、底径7.1 ～ 7.9cmを測る。底部ヘラ切り後板状圧痕である。色調は淡黄白色。胎土は2・3・11は白色砂粒を多く含み、7 ～ 10は雲母を若干含み精良である。

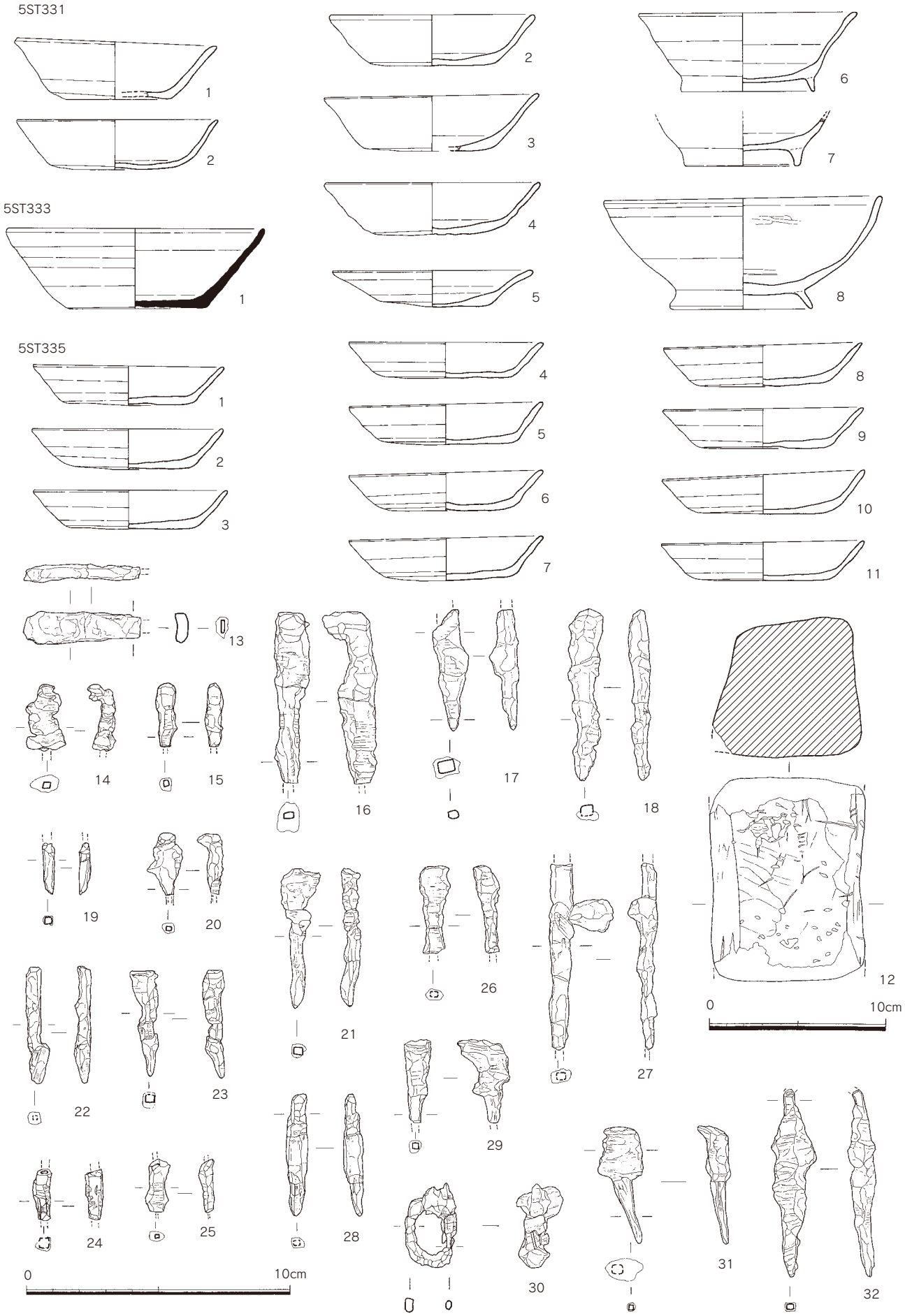


図97.3区墓出土遺物実測図(7)（S=1/2・1/3）

石製品

砥石（12）　台形状を呈し、石材は淡灰褐色の砂岩である。両端が欠損しているが、残存する4面で使用痕が確認できた。

金属製品

刀子（13）　柄部分の一部と考えられる小片である。厚みは0.2cmで、木質の付着が確認できる。

鉄釘（14 ～ 42）　31点の鉄釘が出土。そのすべてに木質が残存していた。そのうち完存しているのは18・21・28・30 ～ 32・37・40 ～ 42の計10点である。全長は4.2 ～ 8.2cmと幅があり、平均全長5.67cmを測る。もっとも全長が長いのは釘の形状がU字に屈曲し、錆により全体がO型に癒着した30である。42は全長が4.2cmともっとも短く、木目が釘に対して垂直方向に確認できるが、交差部分を確認することができなかった。頭部から木目交差部分までの長さは1.5 ～ 2.35cmまでで、平均1.9cmを測る。

5ST340（図98）

金属製品

鉄釘（1 ～ 12）　12点の鉄釘が出土。完存しているのは3・7の計2点である。3は全長5.3cmを測る。木質の残存が確認できなかった。全体の1/3の部分でくの字に屈曲する。7は全長3.8cm、頭部から木目交差部分までの長さ2.2cmを測る。

5ST355（図98）

金属製品

鉄釘（1 ～ 3）　3点の鉄釘のみが出土。木質が残存していたが、完存しているものはない。

5ST360

金属製品

鉄釘（1 ～ 6）　6点の鉄釘が出土。すべてで木質が残存していた。完存していたのは1・4 ～ 6の4点である。全長は3.3 ～ 7.4cmで平均5.5cmを測る。頭部から木目交差部分までの長さは1.2 ～ 2.4cmで、平均1.76cmを測る。1は全長7.4cm、頭部から木目交差部分まで2.4cmを測る。4は全長3.3cmを測る。木目交差部分は確認できなかった。試料数の少なさも影響しているが、木棺墓のなかでも鉄釘の全長がもっとも短く、想定される棺材の厚みが薄いことが分かった。

c.墓（近世）

5ST350（図98）

金属製品

銅銭（1 ～ 6）　1 ～ 5は古寛永通宝で、6は新寛永通宝である。

5ST335（図97）

金属製品

鉄釘（1 ～ 3）　1 ～ 3はすべてで木質が残存していたが、破片である。

銅銭（4 ～ 9）　4・5・7 ～ 9は古寛永通宝である。6は木棺材が付着しているため、文字は不明である。

海獣葡萄鏡（10）　全体の3/4ほど残存する破片である。紐座・紐は残存していない。鏡背の文様表出はよくなく不鮮明であり、踏返鏡と考えられる。直径11.4cm、縁厚0.6cm、厚さ0.15cmを測る。白銅製である。鏡背文様は界圏によって内外区に分かれている。界圏には鋸歯文帯と想定される。縁部は段をもつ三角形を呈し、上段は連珠文帯で下段は鋸歯文帯を施す。内区・外区ともに葡萄唐草文様と左廻りの鳥や獣を配す。同様の文様を持つ類例としては宮崎県神門神社伝世の海獣葡萄鏡がある。

d.その他の遺構（小穴）

5SX324（図90）

弥生土器

甕（1）　底部から体部下半の一部のみ。内面に指頭圧痕、外面にタテ方向のハケ目、指頭圧痕が残る。胎土は黄橙色で、白色砂と炭化物粒子を多く含み粗い。

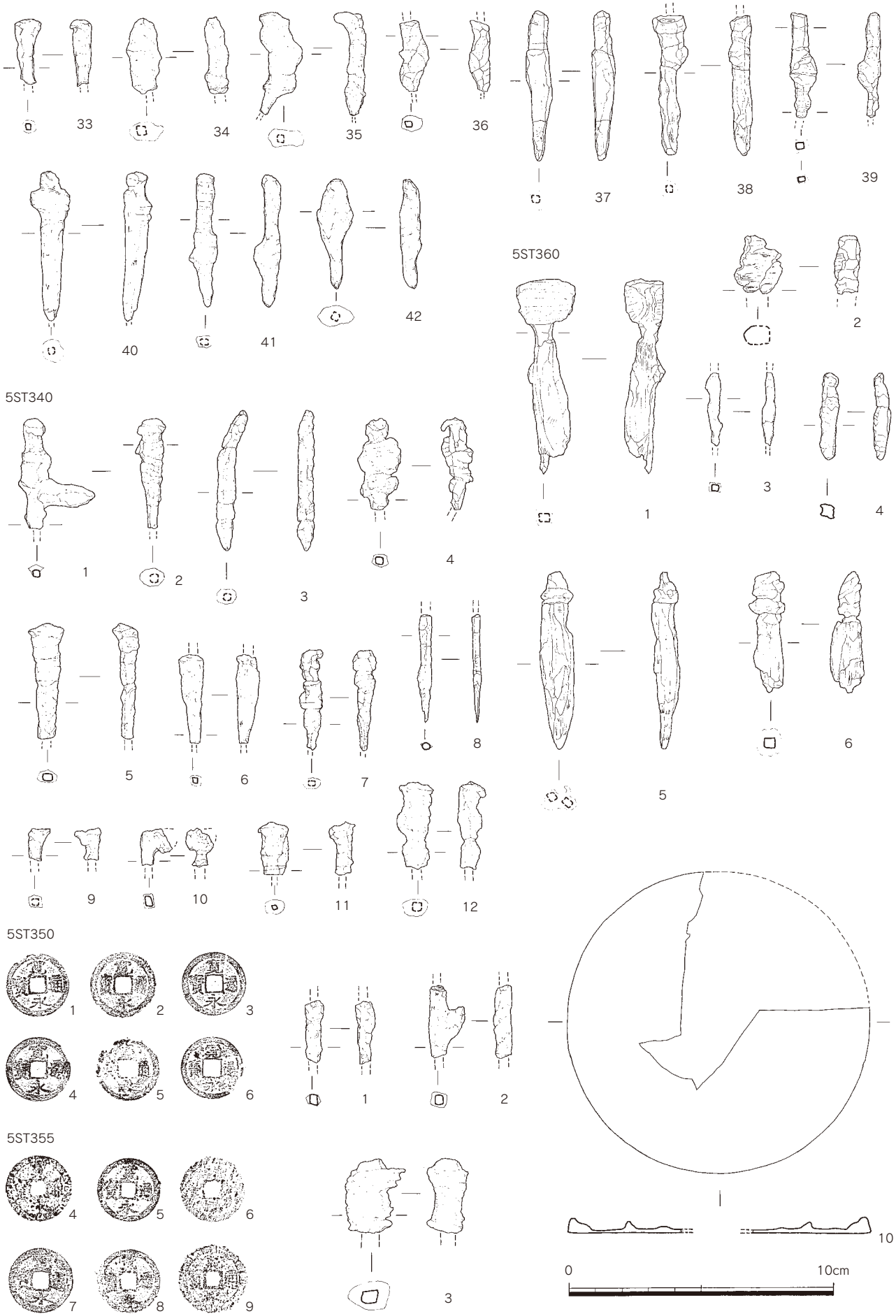


図98.3区墓出土遺物実測図(8)（S=1/2）

5SX326（図90）

弥生土器

壺2b（1）　口径13.0cm、器高12.7cm、底部径6.0cmに復原できる。外面にミガキｃが施されるが摩耗により単位は不明。内面はハケ痕がわずかに確認でき、中ほどに指頭圧痕が見られる。胎土は茶色土で細かな白色砂粒を含み、きめ細かく精良である。口縁端部から外面にかけて丹塗りが施される。

5SX327（図90）

弥生土器

甕（1・2）　1は口縁のみ残存する。白色砂粒を多く含み粗い黄橙色の胎土である。2は底部から体部下半の一部のみ。調整は摩耗により不鮮明だが、内外面ともに指頭圧痕が認められる。胎土は白色砂粒と茶色粒を多く含みやや粗い。

e.その他の遺構（たまり状）

5SX312（図90）

須恵器

平瓶（1）　白色の砂粒をやや多く含む精良な胎土で、硬質な焼成である。体部のみで全体の約1/2ほどの残存である。底部ヘラ切り後未調整でヘラ記号が確認できた。頸部との接合部分では風船作りの接合の痕跡が見られる。

5SX328（図90）

須恵器

坏a（1）　口径12.4cmを測る。底部ヘラ切りで、内面見込みには不定方向の丁寧なナデが確認できる。口縁はやや外反気味である。胎土は青灰色で、白色砂粒と黒色粒を少量含み精良、硬質な焼成である。

5SX319（図90）

瓦質土器

すり鉢（1）　口縁部のみの小片である。砂粒の少ない精良な胎土で、焼成は良好。内面にヨコ方向のハケ目があり、すり目が確認できる。口縁端部が玉縁形状のすり鉢（Ⅱ-A）と考えられる（山村1990）。

f.土層

暗茶色土（図90）

石製品

石鏃（1）　腰岳産黒曜石製。厚み0.3cmを測る。

表土（図90）

石製品

石鏃（1 ～ 3）　腰岳産黒曜石製。

金属製品

銅銭（4・5）　4は青銅製。乾隆通宝で背文字にパスパ文字が入る。5は青銅製。寛永通宝で背文字に「文」の文字が入る。

4）4区

a.溝

5SD217（図100）

瓦質土器

すり鉢（1）　口縁端部のみの小片である。片口に成形され、内外面は指頭圧痕で調整されている。胎土は淡暗灰色で、白色砂粒と雲母をわずかに含みやや精良。

国産陶器

壺（2）　ほぼ完形で、口径8.2cm、器高15.4cm、高台径8.2cmを測る。ケズリ出し高台で、内外面ともに回転ナデが見られる。外面には鉄釉が刷毛塗りされ、胴部に波状のクシガキが施される。焼成不良のため、釉調は白濁した茶色を呈す。

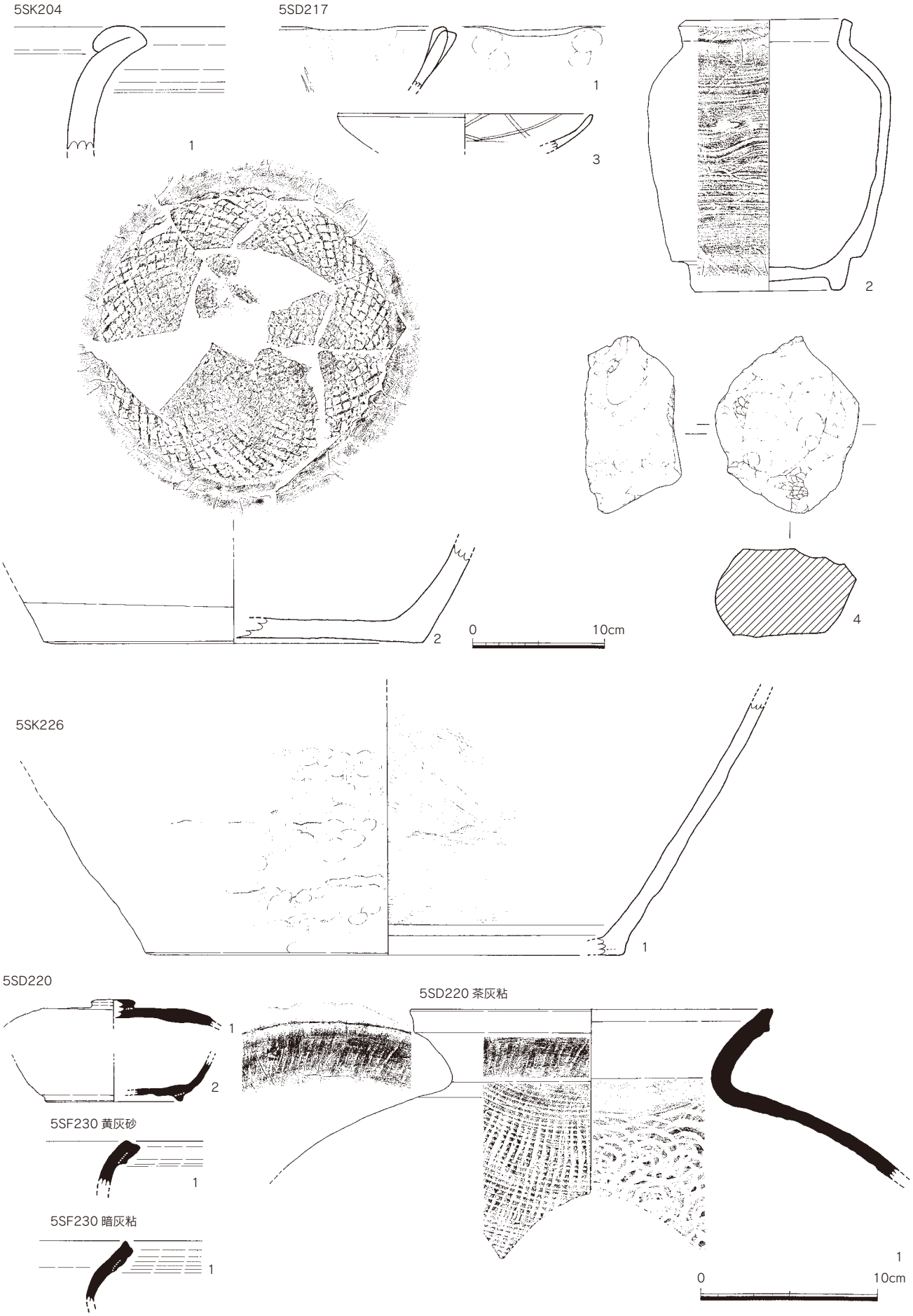


図99.4区出土遺物実測図（1）（S=1/3、1/4）

肥前系染付

皿(3)　口縁部のみの破片で、口径14.4cmに復原される。内面に襷文が施される。素地は乳白色で微細な白色砂粒を大量に含み、精良。釉調は白灰色の透明釉で細かな貫入がはいる。くらわんか手。

石器

石核(4)　黒色の安山岩である。タテ9.95cm、ヨコ8.1cm、厚さ4.8cmを測る。原石の表皮面が残存しており、石器作成のための剥離面は二カ所のみ確認できた。

b.道路関連遺構(側溝)

5SD220（図100）

須恵器

蓋ｃ(1)　天井部のみの破片である。天井部は回転ヘラケズリ調整で2.4cmほどの平坦なつまみが付く。胎土は淡乳灰白色で、微細な砂粒と黒色粒子を含み精良。焼成はやや不良で、軟質。

坏ｃ４（2）　底部のみの破片で、底径7.8cmに復原できる。低い貼り付け高台で、やや外反する形状を呈す。調整は摩耗のため不明である。胎土は淡灰黄色で白色砂粒をわずかに含み精良。

5SD220茶灰色粘質土(図100)

須恵器

甕(1)　口縁から肩部にかけての破片である。口径20.4cmに復原される。口縁端部は外反し、外面に擬格子状の叩き目で内面は同心円文の当て具痕が見られる。胎土は淡灰色で、微細な砂粒と黒色粒子を含み精良である。焼成・還元ともに良好で硬質。

c.道路関係遺構(通行痕跡)

5SF230黄灰色砂(図100)

須恵器

甕(1)　口縁端部のみの小片である。端部は折り曲げて成形され、くの字に外反する形状を呈す。胎土は灰白色で微量の白色砂粒を含み精良。焼成還元ともに良好で硬質な焼き上がりである。

5SF230暗灰粘質土(図100)

須恵器

甕(1)　口縁端部のみの小片である。端部は折り曲げて成形され、内湾する形状をもつ。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は灰色で、極微量の白色砂粒を含み精良。焼成還元ともに良好で硬質。

5SF243（図99）

須恵器

甕(1)　口縁から頸部にかけての破片である。口縁端部は大きく外反する。内外面ともに回転ナデ調整で、外面には沈線状の凹線を境に二段の波状文が施される。胎土は淡灰色で、大粒の白色砂粒を若干含み精良。

5SF244（図99）

須恵器

甕(1)　口縁端部のみの小片である。内外面ともに回転ナデ調整で、口縁端部は折り曲げられ玉縁状に成形される。胎土は淡灰白色で、砂粒をほとんど含まず精良。焼成還元ともに良好で、硬質。

5SF250（図99）

石器

三稜尖頭器(1)　片面が欠損している破片である。安山岩製。

5SF270ｄ(図99)

須恵器

蓋3（1）　口縁端部のみの小片である。外面に回転ナデ調整が見られるが、内面は灰かぶりのため不明。断面四角形の端部形状を呈す。

d.土坑

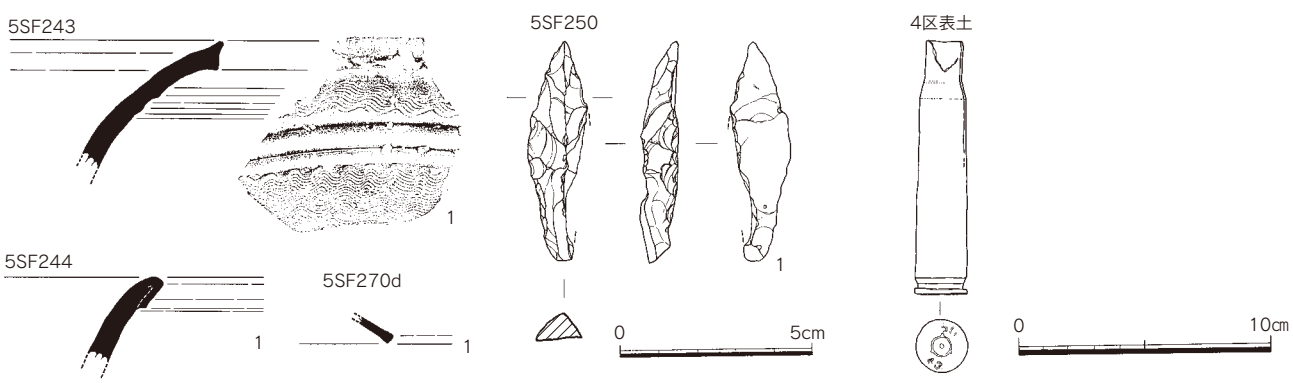


図100.4区出土遺物実測図(2)（S=1/2,1/3）

5SK204（図100）

国産陶器

半胴甕(1・2)　1・2は同一個体である。素地は赤褐色と茶灰色の層が筋状に入り、大粒の白色砂粒を含み、硬く焼締まる。釉調は貫入の入る褐色を呈す。1は口縁部のみの小片である。口縁端部は内面に折り曲げて成形され、上部に目跡が残る。内外面ともに回転ナデ調整。2は底部のみの破片で、底径28.6cmを測る。外面は回転ヘラケズリで､底部は丁寧なナデ調整が施される。内底部には格子目叩きが放射状に巡らされている。高取系。

5SK226（図100）

瓦質土器

甕(1)　体部下半から底部の一部のみの破片で、底径36.2cmに復原される。底部は破砕されて使用されている。全体的に粘土帯巻き上げの凹みが見られ、内面はヨコ方向の刷毛目調整で、外面は粘土帯巻き上げに伴う指頭圧痕とタテ方向の刷毛目調整が施される。胎土は茶灰色で、白色砂粒を若干含みきめ細かく精良。焼成はやや軟質。

e.土層

表土(図100)

金属製品

薬莢(1)　重機関銃の真鍮製の薬莢である。表面は多少緑青錆が発生し､泥を噛み込んで腐食がはじまっている。長さ10.0cm、基部径2.05cm、上部外計14.0mmを測る。薬莢の上部の内口径が12.7mm（0.50インチ)のいわゆる50口径のもので、外底部に｢SO｣、｢43｣の文字が陰刻されている。形状などからアメリカブローニング社製M2型重機関銃の薬莢と考えられる。口の一部が断裂状態で欠損している。そのせいで口には歪みが見られる。

第二次大戦中には昭和19年6月以降北部九州を襲ったアメリカ軍の戦闘機、超長距離大型爆撃機であるB-29など多くの機種に採用された汎用性の高い機関銃であり、筑紫地区を含む福岡周辺においても機銃掃射による悲話が残されている。同じような背景で出土しているものと考えられる。日焼遺跡第5次調査3区でも近世墓の下段から防空壕の跡が見つかっている。吉松から向佐野の丘陵部には太平洋戦争末期に本土防衛と称して、外地から撤退してきた日本軍が一時期駐屯しており、これらがアメリカ軍の標的とされた可能性が考えられる。

（柳智子）

4.小結

1区での主要な遺構は奈良時代後期に埋没した南北方向の溝群である。この溝群は西と東に分けられる。西群の時期的な変遷は切り合い関係により、5SD055・5SD056→5SD045→5SD015となり、東側は須恵器甕破片を伴い真北方向からあまり振れがない5SD050となる。西側は8世紀後半を中心とする時期に集中するが、東

側は中世から近世まで溝が施工されるなど、土地利用の仕方に違いがみられる。5SD055・5SD056、5SD045が埋没した後に、5SX070が堆積し、その後に5SD015が掘られたと思われる。

5SD015については、灰色砂とした溝が埋没した後に、その溝内を人が歩いていた可能性が、5SX040などの痕跡から推定できる。とくに最終埋没後はかなり踏み固められたことが遺構検出および掘削作業の困難さからうかがい知れる。また5SD015はその位置から官道の西側溝にあたる可能性がある。

調査区中央から東にかけて展開する遺構群は、出土遺物の年代から判断すると近世段階で埋没している。これは土地造成に伴い土を埋めた、いわゆる整地だと考えられる。5SX010 ～ SX017 ～ 5SX035に連なるラインはちょうど、地形の変化点にあたり、西側の丘陵裾から東へ延びていた平坦面の東端になる。ここより、区画整理終了までに使用されていた道路のレベルまで落ち込んでいたと思われる。レベル差は約60cmほどである。近世後半期にこの土地の高低差をなくすために埋め立てて、土地利用面積を増やしたと理解できる。これにより、道路が東へずれて現在まで村道として使用されていた道路と同じ位置になったのではないだろうか。

日焼遺跡第5次調査の丘陵（3区）において、古代墳墓群が造営された箇所と出土遺物などから、墓の造営時期と変遷を考察する。墳墓は北東にひらけた丘陵の等高線に沿うように、横並びに形成されている。形成されている墳墓は横並びに3 ～ 4つほどの単位で検出された状況から群を構成していると推定される。この群が構成されている部分を、標高の高い順から上段、中段、下段と造営箇所を区分し、報告・検討してみる。

墓の種別として鉄釘の有無で木棺墓と土坑墓とを区別しているが、木や竹などの有機質な釘の場合には釘が検出されないことが想定される。このため、同一墳墓として取り扱い、検討を行う。

上段に墳墓が造営されたのはⅦ～Ⅷ期（9世紀後半～ 10世紀初頭頃）である。確認された墳墓は3基で、5ST317では他地域からの搬入品である緑釉陶器や瑞花双鳥八稜鏡が出土している。八稜鏡は古代大宰府における公葬地であった宮ノ本丘陵での調査では2例目となる（太宰府市教委、1995）。

中段には4基の墳墓が検出された。造営時期はⅥ～ Ⅸ期（9世紀前半～ 10世紀後半頃）である。

下段には5基の墳墓が検出されている。造営時期はⅧ～ Ⅸ期（9世紀末～ 10世紀後半頃）である。下段では5ST333と5ST345は造営方位が他の墳墓とまったく異なり、軸が東西方向になる。12基検出された墳墓がほぼ南北を軸に造営されており、上・中段では墳墓同士の切り合い関係は見られない。調査では墳墓を明示する墓碑などの存在は確認できなかった。「餓鬼草紙」や「木簷寺文書」に見られるような土饅頭や樹木など墳墓を明示する造作があったものと推定される。しかし、下段の墳墓群では従来の造営方位に直行し、他の墳墓との切り合い関係がある点が注目される。下段の墳墓のなかで5ST360は遺構の大半が近世墓5ST355により削平を受けているが、海獣葡萄鏡が供献されていたと推定される。鏡のみの時期推定となるが、少なくとも9世紀以降と想定され、10世紀よりも古い時期の可能性が残る。

以上の傾向から上・中段は9世紀代、下段は10世紀に入ってから墳墓の造営が開始されたと考えられる。造営時期や造営方位の差が段によって生じている理由としては、造営した集団差や土地の占有、供献遺物から見た優位性の問題などが推定される。しかし、同時期に造営されている上・中段との間の供献遺物を比較して見ても、特筆する優位性は見受けられない。下段は時期差があるため、優位性を想定するのは難しいと考えられる。しかし、同時期に段違いで墳墓を形成している可能性があり、造営する土地の占有にともなう集団差が想定される。日焼遺跡第5次調査で検出された墳墓群は9世紀中頃以降に丘陵の段に群を成して、墓を造営し始めた。10世紀に入り、丘陵の下段に墳墓を造営し、10世紀後半に造営を終了していると考えられる。

今回報告した墳墓群からは大量の鉄釘が出土している。墓から出土した鉄釘については長さが時期によって変化するという検討がなされている（太宰府市教委、1998）。総計で200点を超える鉄釘を墳墓の時期と合わせて、検証を行ってみた。上・中段の墳墓から出土した鉄釘の平均の長さは6.7 ～ 5.67cmを測り、木質の付着から推定される棺材の厚みは3cm前後という結果となった。対して、下段の鉄釘の平均の長さは4.55 ～ 5.67cmを測り、棺材の厚みは2cm以下という結果となった。時期が下るにつれて、鉄釘の長さが短くなることについてはすでに論考されているが、今回の結果からこの変化には棺材の厚みが関係している可能性が考えられる。

（髙橋学・柳智子）

引用文献
太宰府市教育委員会(1995)『太宰府・佐野地区遺跡群　Ⅴ』太宰府市の文化財第27集
太宰府市教育委員会(1998)『太宰府・佐野地区遺跡群　Ⅷ』太宰府市の文化財第39集
山村信榮(1990)「太宰府出土の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会
中島恒次郎(2001)「大宰府における土師器甕の変遷」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会

表4.日焼遺跡　第5次調査　検出墓一覧

遺構番号	墳墓造営箇所	時期	墓種別	頭部推定位置	出土鉄釘量	鉄釘（全長）	棺材厚さ	供献遺物
5ST317	上段	Ⅷ期	木棺墓	北	45	6.67	2.8	緑；皿ｃ（京都産）、土；坏ａ（ヘラ）、瑞花双鳥八稜鏡
5ST330	上段	Ⅶ期	木棺墓	南	26	7.9	3.2	土；坏ａ（ヘラ）・壺・鉢、黒Ａ；椀ｃ（ヘラ）
5ST331	上段		土坑墓					
5ST303	中段	ⅥＡ期	木棺墓	南	37	6.8	3.25	越；合子身、土；甕Ⅱ-3類
5ST308	中段	Ⅶ期	木棺墓	北	20	7.72	2.5	越；椀Ⅰ-2ｂ$_{ア}$、土；坏ａ（ヘラ）・椀ｃ（ヘラ）、銅鈴、刀子
5ST316	中段		木棺墓		15	-	2.18	
5ST320	中段南端	Ⅶ期	土坑墓					土；坏ａ（ヘラ）
5ST333	下段	Ⅷ期	土坑墓	東				須；坏ａ,土；坏ａ（ヘラ）・椀ｃ（ヘラ）、黒Ｂ；椀ｃ
5ST335	下段	Ⅸ期	木棺墓	北	31	5.67	1.9	土；坏ａ（ヘラ）
5ST340	下段		木棺墓		11	4.55	1.96	
5ST345	下段		土坑墓					
5ST360	下段		木棺墓		6	5.5	1.76	(海獣葡萄鏡)

※鉄釘（全長）と棺材厚さはあくまで平均値である。

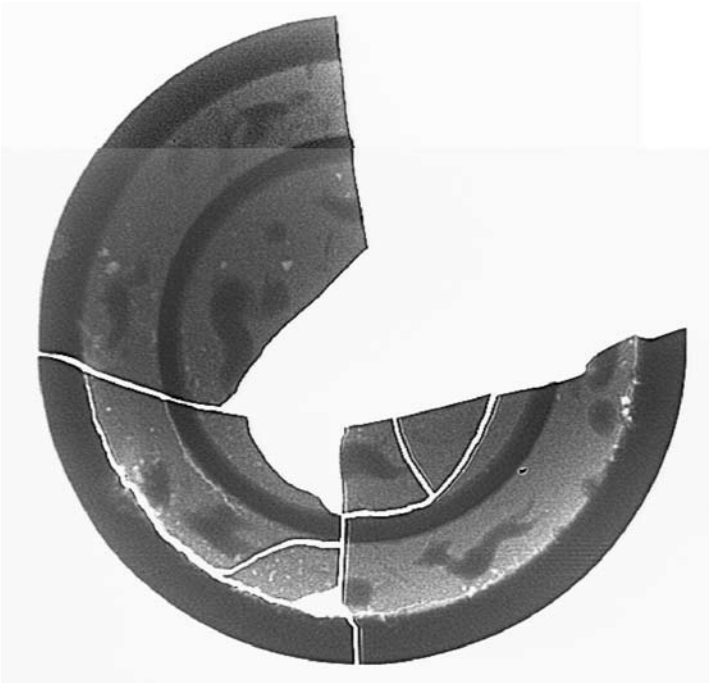


図98掲載の海獣葡萄鏡Ｘ線写真

日焼遺跡　第6次調査

1.基本土層

調査区は背振山地から北東に派生する丘陵裾部に位置し、日焼2・3次調査区の東に隣接する。遺構面は灰色土(現代の耕作土)層下の茶灰色砂質土遺物包含層(～ 14ｃまでの遺物包含層)、黄橙色土をベースにした北と西から流れ込みのあった河川堆積が確認された。河川堆積層(6SX001)はトレンチ調査による土層観察により、東西の流れ込みが古いことが分かった。この河川堆積は奈良時代の溝形成以前の自然堆積である。橙灰色粘質土をベースにした奈良中頃までの自然流路が形成された河川堆積(1面目)、青灰色シルトをベースにした奈良中頃～の遺物を含む流路と官道が造営された河川堆積(2面目)とに分けられる。

2.遺構

1) Ⅰ面(橙灰色粘質土上面)

a.溝

6SD007（図105）

北から東へと屈曲する溝で幅約0.6 ～ 1m、深さ約0.1 ～ 0.15mを測る。河川堆積層6SX001上面に形成されていることから、溝の肩が崩れやすい状況であり土層観察から暗青灰色シルトの流れ込みが確認できた。溝からは蹄脚硯の一部が出土している。

6SD008（図105）

北西から南東に流れる溝で、長さ約3m、幅1 ～ 1.3m、深さ0.28mを測る。河川堆積層6SX001上に形成され、地山は暗青灰色シルトと黒色腐食土である。土層観察では灰色・褐色粗砂が堆積した状況が確認された。

6SD009（図105）

西から8ライン付近で南に屈曲する溝で、長さ約9.3m、幅1 ～ 1.4m、深さ0.1 ～ 0.3mを測る。河川堆積層6SX001上に形成され、埋土は灰色粗砂が堆積する。

b.その他の遺構(たまり状遺構)

6SX006（図105）

AI5付近で南北に広がるたまり状遺構である。埋土は黒灰色土で、幅1.4 ～ 3.2m、深さ0.1 ～ 0.5mに堆積している。

2) Ⅱ面(青灰色シルト上面)

a.道路遺構

6SF002（図104）

日焼2次検出のSF055（奈良時代の官道部分)につながり、路面整地の東肩部分にあたる。整地には大きく分けて4段階の工程が想定できた。

1.青灰色シルトをベース面に官道東西端部分に杭を打ち込む。(打ち込まれているのは西から流れ込む溝6SX010の上)

2.杭を目安に整地(橙灰色粘質土・橙白色粘質土・黒灰土)を行う。

3.その上に路肩補強の石を並べる。

4.石列の上にさらに整地(黒橙色土)を行う。

路肩の工程は以上のように想定でき、日焼2・3次から日焼6次にまで続いて検出された谷部を流れる河川跡(SD080)の上は地盤の不安定な場所であったと想定できる。路面を構築するため、特に氾濫の影響を受けやすい路肩部分には杭や石を使い、整地作業を行ったと考えられる。

b.溝

6SD010（図104）

道路遺構6SF002の下層に位置する。幅1.18 ～ 2.6m、長さ5.3m、深さ0.18 ～ 0.24mを測る。埋没は土層観

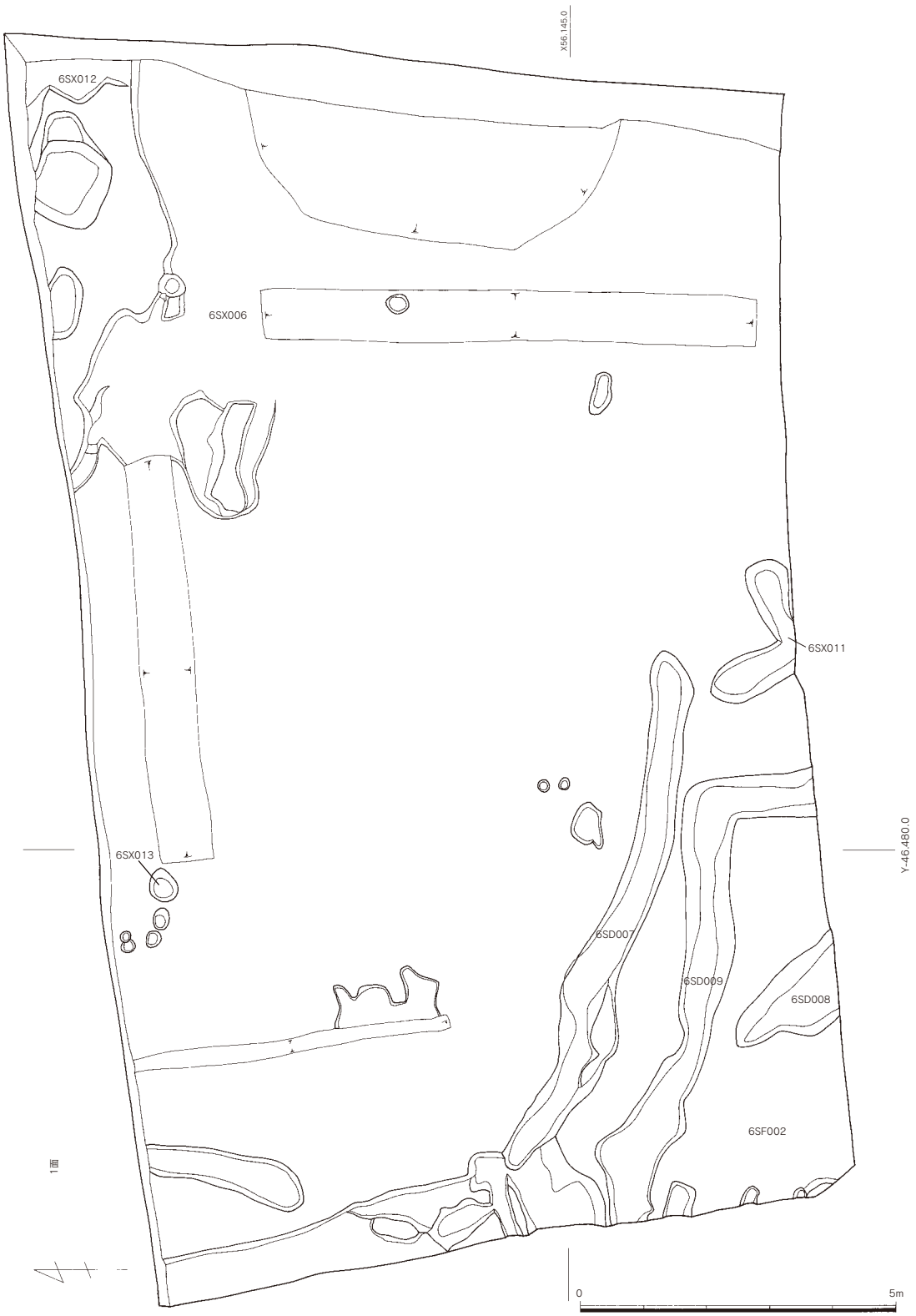


図101.日焼遺跡第6次調査　遺構配置図(S=1/100)

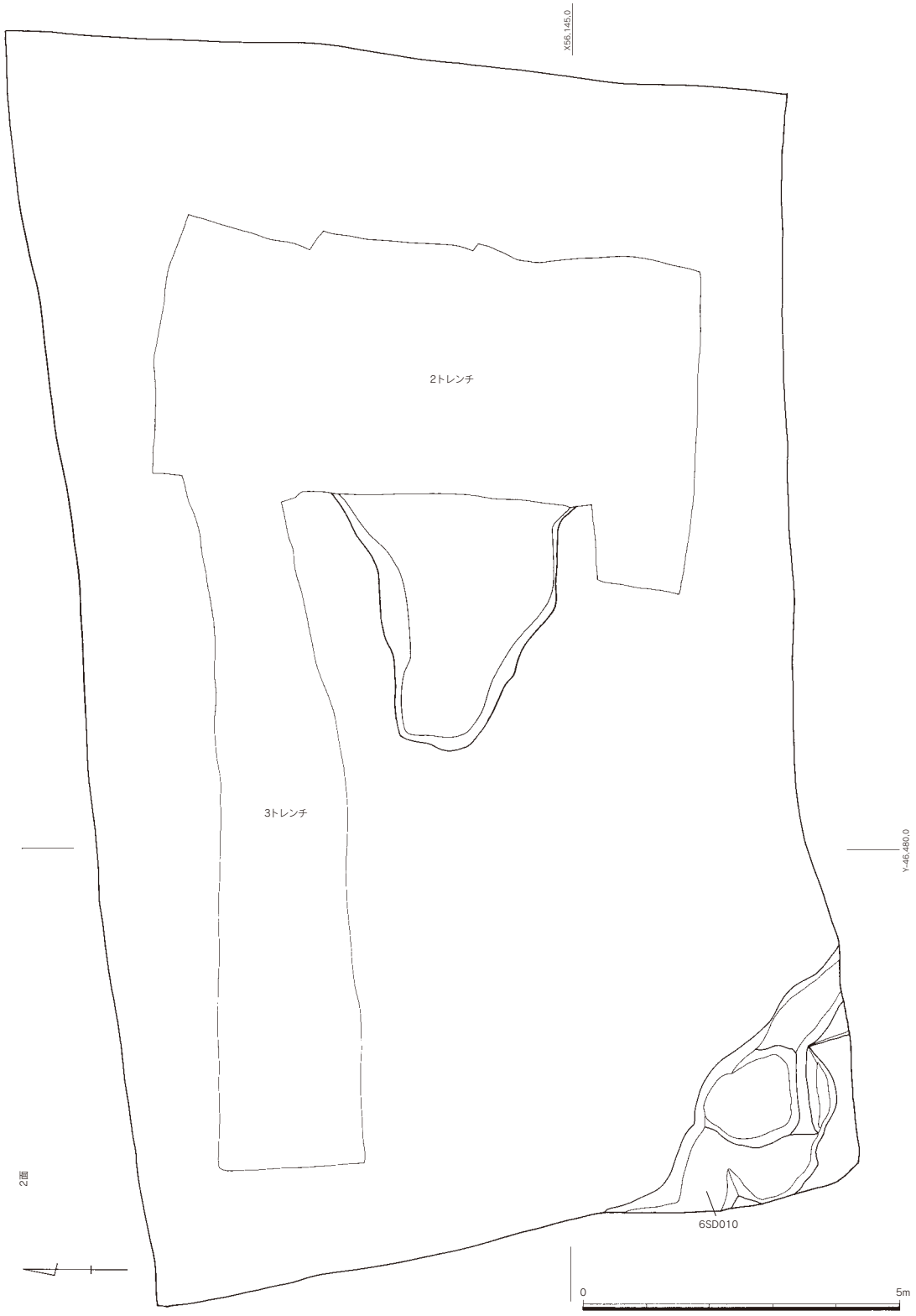


図102.青灰色シルト上面遺構およびトレンチ位置図（S=1/100）

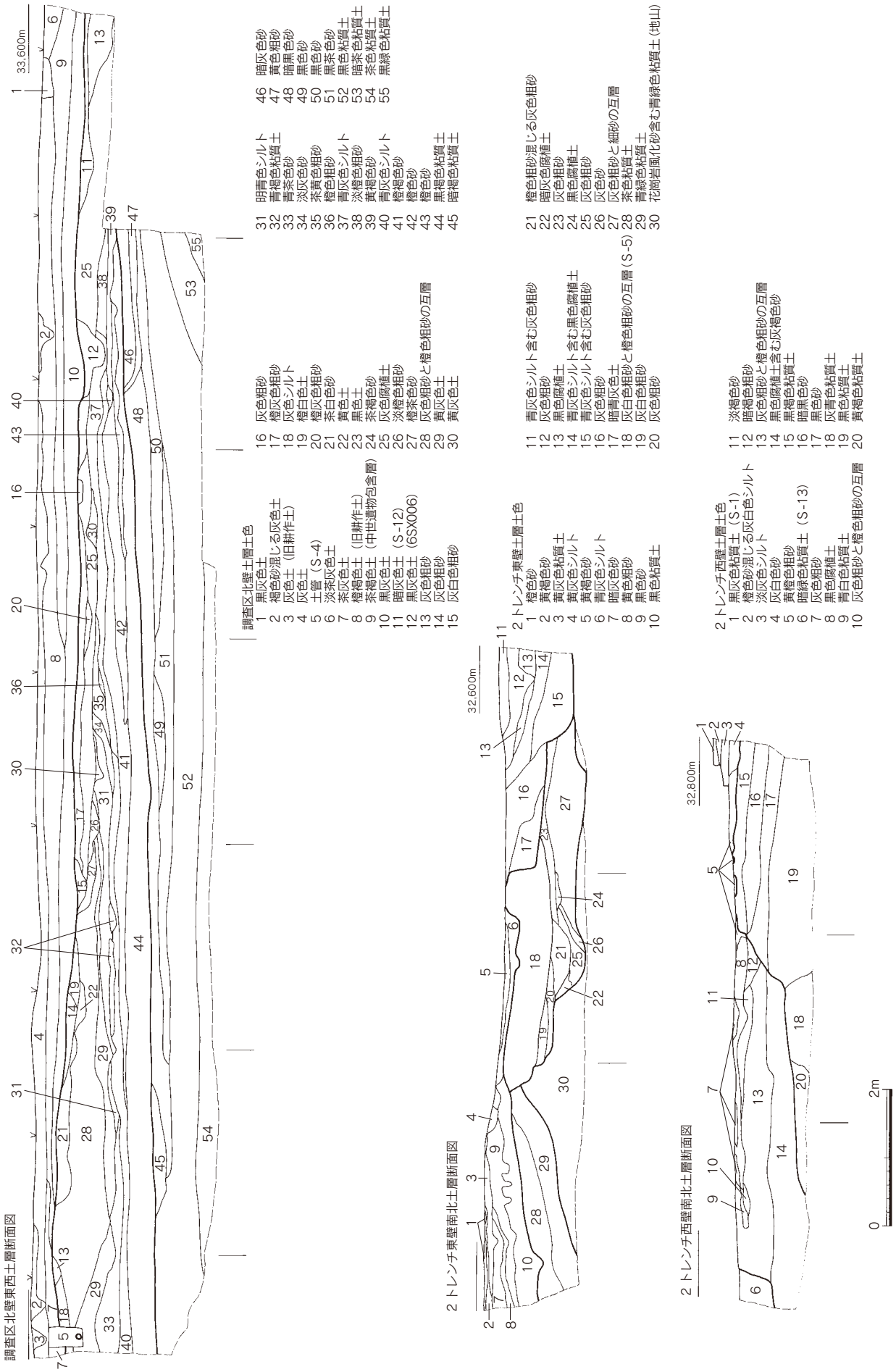


図103.調査区北壁土層・2トレンチ南北土層図(S=1/80)

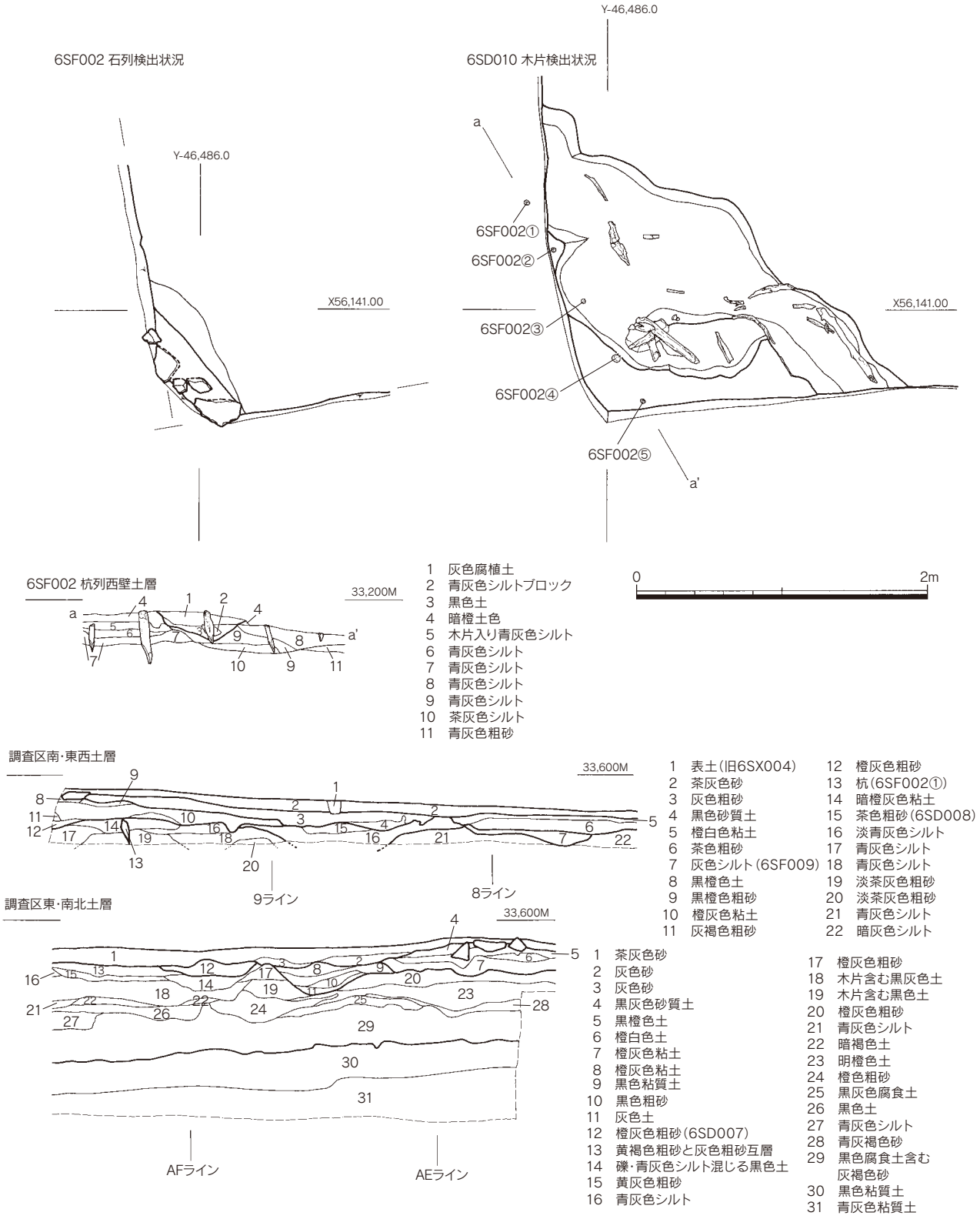


図104.6SD010・6SF002遺構実測図（S=1/40）

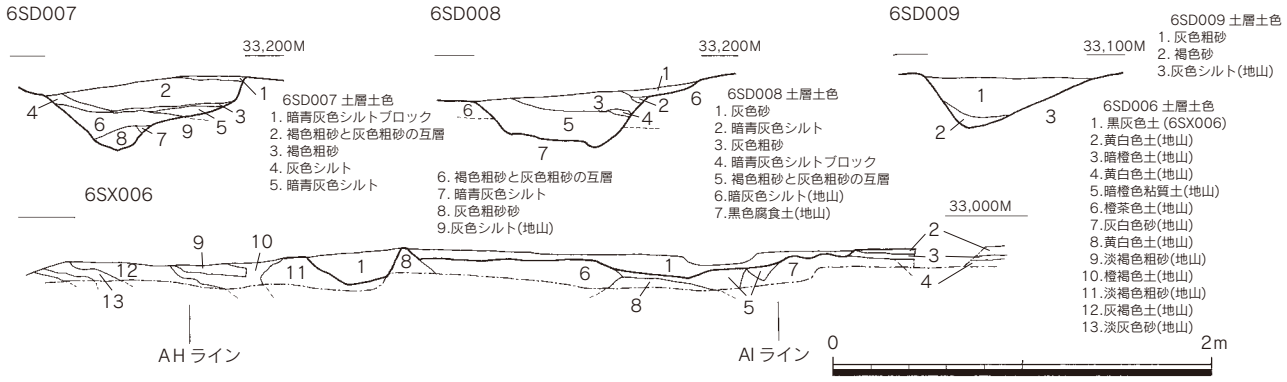


図105.6SD007・008・009・6SX006土層実測図(S=1/40)

察では木片を含む暗青灰色シルトと黒色腐食土に灰色粗砂、燈灰色粗砂が入り込んだような状況が確認できた。灰色粗砂と青灰色シルトをベースにしているため、肩の部分はシルト層が混じり、幅も一定ではなく、流路の可能性も考えられる。

3.出土遺物

1)溝

6SD007（図106）

須恵器

坏(1)　口縁端部のみの小片である。やや外反気味の口縁で、胎土は精良で硬質である。色調は内外面ともに暗灰色で焼成還元ともに良好である。

鉢ｂ(2)　口縁のみの破片である。回転ナデ調整で、外面に浅い二条の沈線が巡る。胎土は青灰色で、白色砂粒・黒色粒子をやや多く含み、精良で硬質である。

蹄脚硯(3)　蹄脚部分のみの破片である。全体的に歪みが著しく、自然釉の付着が見られる。底部に須恵質の付着物があり、重ね焼きの可能性がある。底部は19.4cm前後になると推定される。脚部は完存すると14脚になると考えられる。胎土には白色砂粒と黒色粒子をやや多く含み、精良で硬質である。色調は内外面が黒灰色で、断面は青灰色を呈す。

6SD008（図106）

須恵器

蓋1（1）　口縁から天井部にかけての小片である。天井部は回転ヘラ切り後未調整で、内面に不定方向のナデが施される。胎土は白色砂粒をやや多く含み、精良でやや硬質である。

弥生土器

鉢(2)　底部から体部下半のみの破片である。底径6.5cmに復原できる。内面は縦方向の指ナデ調整で、外面は指ナデによる横方向の調整が施される。胎土は淡黄褐色で、やや大粒の白色砂粒を多量に含み、粗い。

6SD010（図106）

須恵器

小蓋a1（1）　天井部から口縁にかけての破片で、1/8程度残存する。口径11.5cmに復原される。天井部は回転ヘラ切り後未調整である。胎土は微量の砂粒を含み精良、硬質である。色調は明茶褐色で焼成不良。

小坏a1（2）　体部から底部にかけての小片である。器高2.8cmに復原される。底部は回転ヘラ切りで、内外面とものヨコナデが確認できる。胎土は砂粒を多く含みやや粗い。

小高坏a（3）　脚部3/4程度残存する破片である。脚部径7.2cmに復原できる。胎土はきめ細かく硬質である。外面には白色の自然釉が付着し、色調は内外断面ともに暗青灰色である。

2)道路

6SF002（図107）

木製品

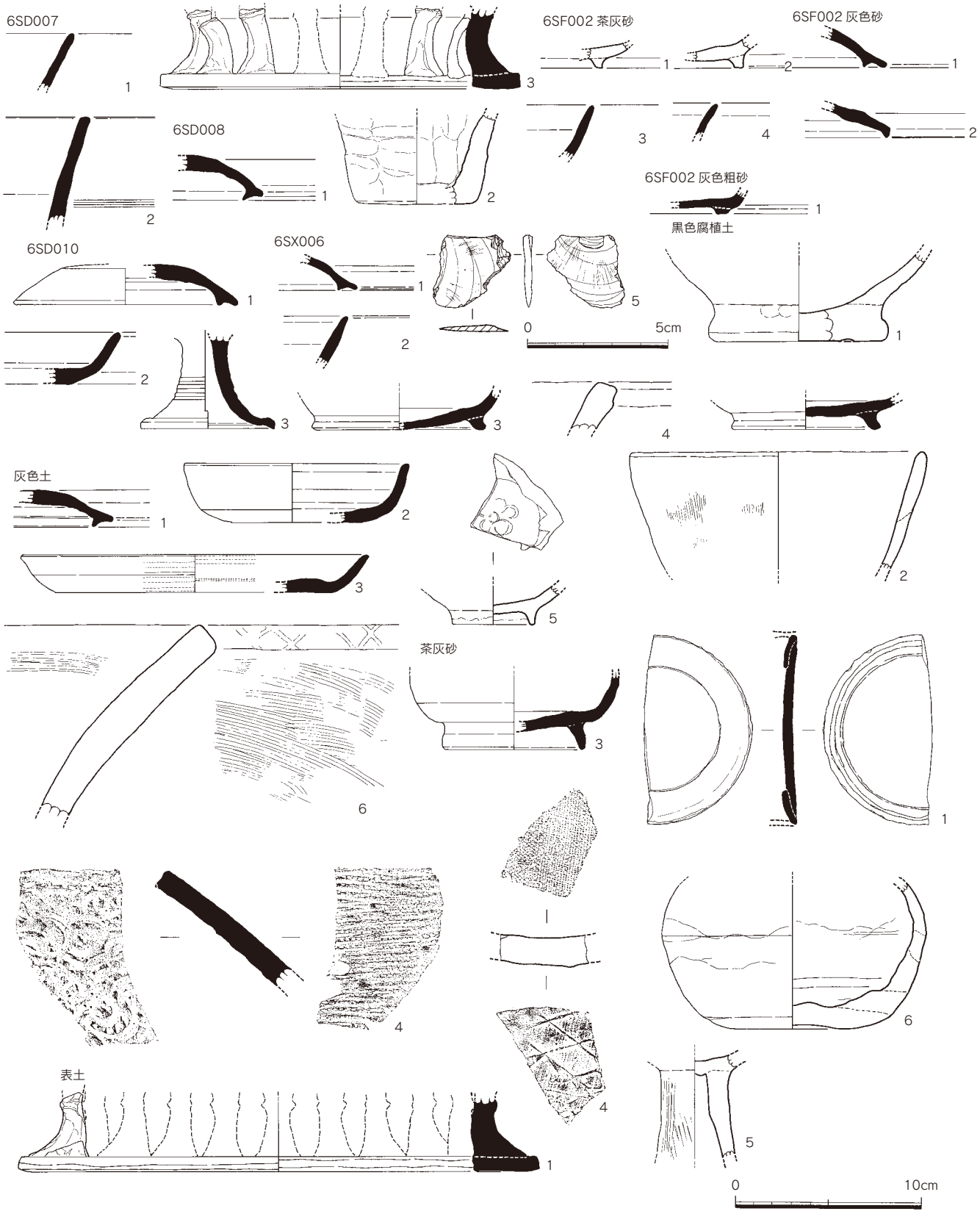


図106.出土遺物実測図(S=1/3、1/4)

杭(1 ～ 3)　1は長さ40.1cm、径6.8cmを測る。先端部分は3面が削られ、打ち込み部分が残存している。2は長さ42.4cm、径6.3cmを測る。両端部分は欠損しており、先端部分は3面が加工されている。3は長さ40.9cm、径7.7 ～ 8.4cmを測る。先端部分は残存しており、4面が加工される。打ち込み部分は腐食が著しいが、加工部分の残存状況は良い。

6SF002茶灰色砂質土（図107）

土師器

坏ｃ３（1）　底部のみの小片である。やや外反気味の貼り付け高台で、調整は摩耗により不明瞭。胎土には白色砂粒・茶色粒子を含みやや粗く、軟質。色調は内外面ともに淡白黄色で焼成不良。

坏ｃ３×４（2）　底部のみの破片である。貼り付け高台で、調整は摩耗気味だが内底部のナデが確認できる。胎土には白色砂粒をやや多く含み、粗く軟質。色調は淡白黄色で、焼成はやや不良。

須恵器

坏（3）　口縁端部のみの小片である。胎土には微細な砂粒と黒色粒子を含み精良で硬質。色調は青灰色で焼成良好。

高坏（4）　口縁端部のみの小片である。胎土は白色砂粒を含み、精良で硬質。色調は芯が灰茶色で、内外面は暗灰色に焼成。

6SF002灰色砂質土（図107）

須恵器

蓋1（1）　口縁部のみの小片である。天井部はやや丸みを帯びた形状で、回転ヘラケズリはみられない。胎土は淡青灰色で、やや大粒の白色砂粒を多く含みやや粗で硬質。

蓋3（2）　口縁部のみの小片である。口縁端部はやや嘴状を呈し、天井部には回転ヘラケズリが施される。色調は青灰色で、口縁部に重ね焼きにより暗灰色である。胎土は精良で硬質。

6SF002灰色粗砂（図107）

須恵器

坏ｃ３（1）　高台底部のみの破片である。断面逆台形の平坦な貼り付け高台で、内底部に不定方向のナデが確認できる。胎土はきめ細かく、硬質。色調は内外面ともに明青灰色で、焼成還元ともに良好。

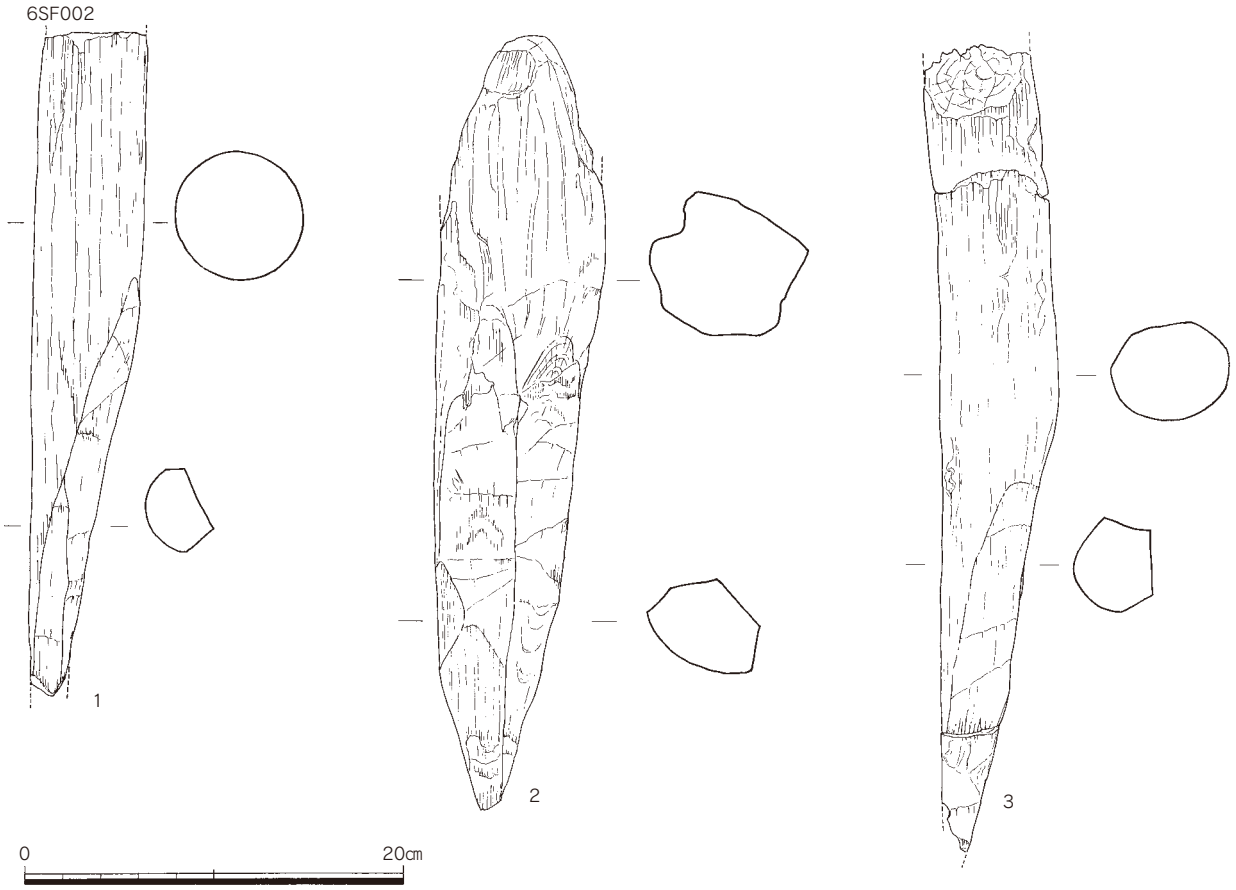


図107.6SF002出土遺物実測図（S=1/4）

3）その他の遺構（たまり状遺構）

6SX006（図106）

須恵器

蓋1（1）　口縁から天井部にかけての小片である。口径は12.5cmと推定される。天井部は回転ヘラ切り後未調整である。胎土はきめ細かく、硬質。色調は内外断面ともに青灰色で焼成還元ともに良好である。

坏（2）　口縁端部のみの小片である。ややくの字状の口縁部で、胎土はきめ細かく硬質。

坏ｃ4（3）　底部1/6程度残存する破片である。底径9.4cmに復原できる。底部ヘラ切り後ナデ調整で、外反する貼り付け高台である。内底部は粗い不定方向のナデが確認できる。胎土にはやや大粒の白色砂粒を含み、硬質。色調は内外面が暗青灰色で、断面は暗赤紫色を呈す。

弥生土器

甕（4）　口縁端部のみの小片である。摩耗により調整不明。胎土は灰茶色で白色砂粒を多く含み、粗い。

石製品

フレーク（5）　タテ2.6cm、ヨコ2.75cm、厚さ0.2cmを測る黒曜石製である。

4）土層

黒色フショク土（図106）

弥生土器

甕（1）　底部1/3残存の破片であり、底径9.6cmに復原される。底部接合に伴う指頭圧痕が確認できる。胎土は淡褐灰色で砂粒を若干含みやや精良である。

青灰色シルト（図106）

須恵器

坏ｃ1（1）　底部のみの破片である。底径8.1cmを測る。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整で、内底部には不定方向のナデが見られる。貼り付け高台は大きく外反する長靴形状を呈す。胎土は灰色で砂粒を少量含み、精良で硬質である。

弥生土器

壺（2）　口縁部1/8のみの破片である。口径16.0cmに復原できる。器壁の摩耗が著しく、外面にタテ方向のハケ目と丹塗がわずかに確認できる。胎土は淡灰褐色で、白色砂粒と雲母を多く含み、やや粗い。

茶灰色砂質土（図106）

須恵器

横瓶（1）　横瓶の閉塞部分1/2のみの小片である。径は10.1cm、厚さ0.5cmを測る。閉塞部分の接合部分がドーナツ状に残り、外面には二条の沈線が巡る。胎土は暗灰色で微量の白色砂粒を含み精良で硬質である。

椀ｃ（3）　底径1/2残存の破片である。底径7.4cmに復原できる。やや外踏ん張りで高く、貼り付け高台である。胎土は白色砂粒と黒色粒子を多く含み、やや粗く硬質。色調は内外面ともに明灰色を呈す。東海系。

瓦

平瓦（4）　凸部に大きめの格子目が確認できる小片である。胎土は白色砂粒を多量に含み、粗い。内外面ともに明灰青色で、焼成良好。

弥生土器

高坏（5）　坏部と脚部の接合部分のみの小片である。脚部外面にはタテ方向のハケ目が残り、内面は指頭圧痕が確認できる。胎土は淡灰褐白色で砂粒を多く含みやや粗い。

壺（6）　底部から体部にかけての破片である。底径10.cmを測る。底部ヘラ切りで、体部には粘土帯積み上げ痕跡が残る。胎土は微量の砂粒を含みやや精良である。色調は淡灰褐灰色で、外面に黒班が見られる。

灰色土（図106）

須恵器

小蓋a1（1）　天井部から口縁部にかけての小片である。器高2.0cmに復原される。摩耗により調整不明。胎土

は砂粒を多く含みやや精良で軟質。色調が明黄灰色で焼成還元ともに不良である。

坏a（2）　全体の1/4残存の破片である。口径12.0cm、器高3.2cm、底径7.0cmに復原できる。底部は回転ヘラ切り後未調整である。胎土は暗青灰色で、白色砂粒を多く含み粗く硬質。

皿a（3）　底径1/4程度残存の破片である。口径18.5cm、器高2.1cm、底径15.0cmを測る。底部ヘラ切りで、内外面にミガキaが施される。胎土は白色砂粒を多量に含み、粗い。色調は青灰色で焼成還元ともに良好である。

甕（4）　体部のみの小片である。外面は横櫛文、内面は同心円文の叩きがある。肩部と推定される上部に切り込みがあり、開窓部があったと推定される。胎土には微量な砂粒を含み精良で硬質である。色調は黒灰色で焼成還元ともに良好である。

龍泉窯系青磁

椀（5）　底部1/4程度残存の破片である。底径4.4cmに復原される。素地は淡灰白色で精良で、釉調は貫入の入った淡緑青色の半透明釉が厚く施される。内底部には削り出しの草花文が見られ、畳付部分は露胎である。

弥生土器

甕棺（6）　口縁端部のみの小片である。大きく外反する口縁は端部に格子状の文様が残る。内外面ともにヨコ方向のハケ目が施される。胎土にはやや大粒の白色砂粒を多く含み、やや粗い。色調は断面が黒灰色で、内外面ともに淡灰褐白色を呈す。神在式。

表土（図106）

須恵器

蹄脚硯（1）　蹄脚の一部のみの小片である。底部径は残存量と歪みにより定かではないが、28.0cm前後と推定される。完存した場合、脚の数は24本になると考えられる。脚部は手づくねにより成形され、底部に貼り付けられている。胎土には白色砂粒と黒色粒子をやや多く含み、精良で硬質。色調は内外面ともに灰色を呈し、焼成還元ともに良好である。

3.小結

今回の調査成果は奈良時代の官道造営方法の一端が確認できたことである。安定地盤での整地ではなく、絶えず水の流入の起こる谷部での整地では、杭や石を使い、路肩を補強するなどの措置が行われていたことがわかった。

（柳智子）

表5.日焼遺跡　第6次調査　遺構一覧

S番号	遺構番号	遺構性格	先後関係	時期	地区番号
1	6SD001	河川堆積	黄橙色土上面（2面目）		
2	6SF002	官道東肩部分		8ｃ中～	AE9.10
3	6SX003	石列（2の構築要素）			AE9.10
4	6SX004	ドカン跡		近現代	9ライン
5	6SD005	河川堆積	青灰シルト上面（3面目） 5→13	弥生～	
6	6SX006	たまり状			AI4
7	6SD007	溝		8ｃ前～	AE7～10
8	6SD008	溝		8ｃ～	AD8
9	6SD009	溝		8ｃ中～	AE7～10
10	6SD010	流路		8ｃ～	AE9.10
11	6SD011	溝状			AE5～7
12	6SD012	溝状		近現代	AI3
13	6SD013	旧河川堆積		弥生～	AG6.7

日焼遺跡　第8次調査

1.基本層位

調査区北西部は、現地表面から僅か5cmほどで遺構面に達し、東にいくにしたがって深くなり、深さ2.2mで遺構面に達する。真砂土が厚いところで0.7mほどあり、その下に黒灰色土や明灰色土など宅地に伴う整地土が遺構面直上まで堆積している。調査地の地表面は標高約33mである。また、調査前は幅2.5m程の里道が現場内を横切り、借家が建っていたため、撹乱が多くみられる。

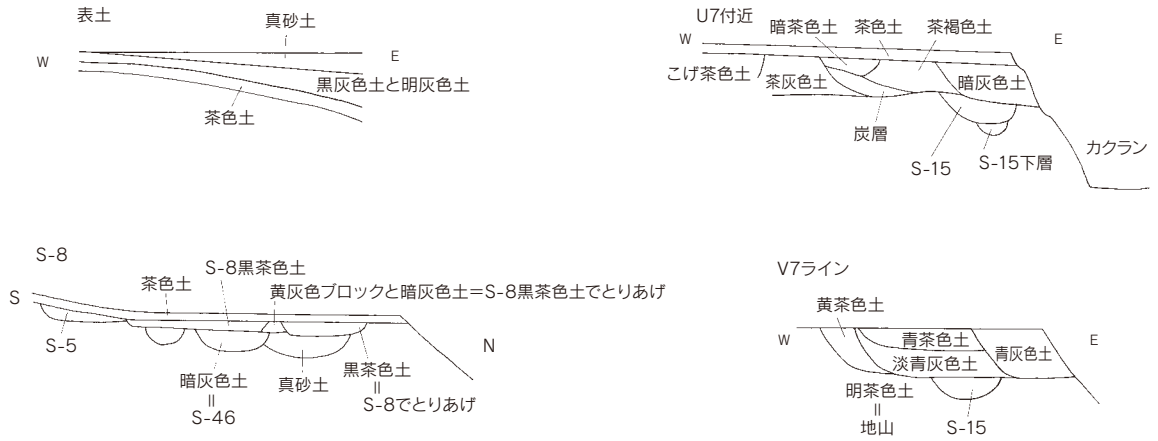


図108.土層模式図

2.遺構

1)道路

8SF060

この調査区には前田遺跡などで確認されている官道の推定ラインに位置することから、SD001とSD015の溝に挟まれた幅約8.3m部分を官道と推測される。

2)溝

8SD001（図109）

日焼遺跡5次調査ではS-132として調査されている溝の延長に位置する。今回の調査地での検出長約3.7m、幅1.3～2.2m、深さ0.2m前後を測る。方位はN25°26′W。断面形状は緩いU字形をしている。埋土は非常に粘質が強い茶色粘土である。これは地盤が粘土であることによるものである。西岸に甕の破片が集中して検出さ

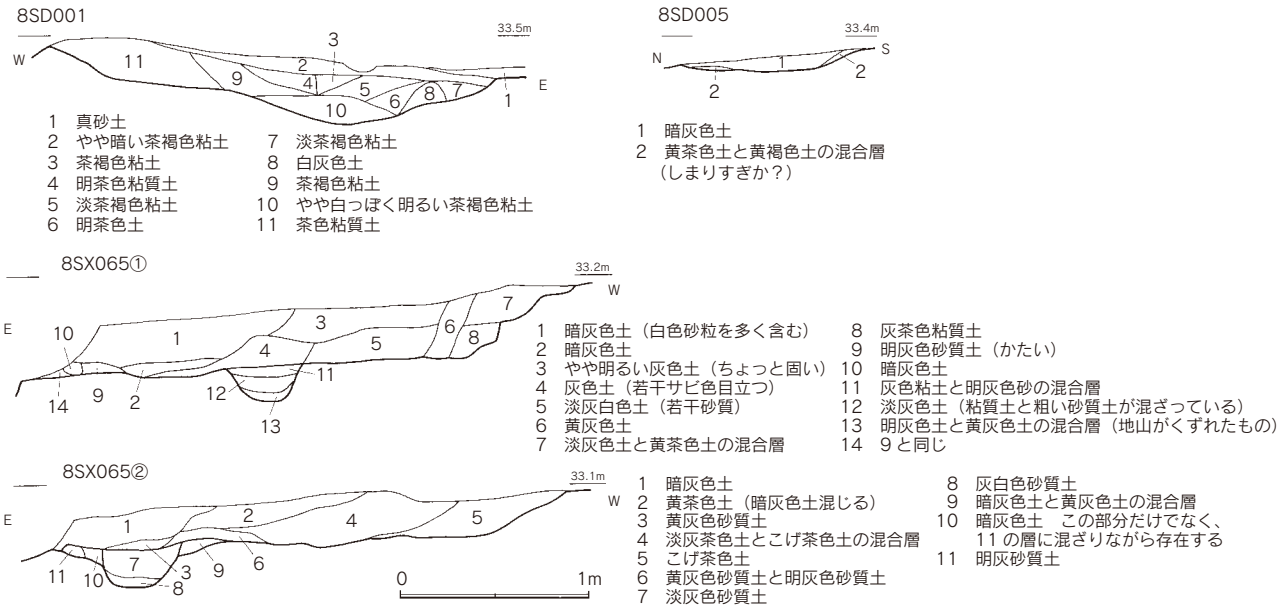


図109.溝土層実測図(S=1/40)

れた以外は、遺物は全体的に散在している状態であった。官道の西側側溝と推測される。

8SD005（図109）

SD001を切っている溝で、検出長約13.2m、幅1.2m、最深0.18mを測る。方位はおよそE7°N。東側は遺構面の傾斜が下がっているため、うっすらと消滅し、幅および切り合いは不明瞭である。埋土は茶色粘土で、遺物はさほど多くはないが、全体的に散在して出土する。奈良時代の須恵器の破片が多く見られるが、白磁や瓦質土器を僅かに含んでいるため、最終埋没時期は中世まで下るものと考えられる。この溝の西側延長に日焼遺跡第5次調査の撹乱の溝が存在するが、SD005は埋土の状況からも近現代に下るほど新しくはない。

8SD015（図109）

日焼遺跡第5次調査ではS-230として調査されている溝の延長に位置する。SX065（暗灰色土や青灰色土）を除去した一段下がった面で確認された。検出長10.1m、幅0.35 ～ 1.2m、深さ0.2m前後で最深0.3mを測る。若干蛇行しているが、方位はおよそN28°Wである。埋土は締まった砂質土で硬化していて、地山との境界部分は鉄分沈着のような茶色に変色している。また、この砂質土の掘り込みは暗灰色土が混じる黄灰色土層に切り込んでいる。

蛇行する溝の南側の底面や周囲には、さらに周囲が赤く錆色をしたピットや土坑が検出された。埋土はやや硬く灰白色で周囲の地山と土質はさほど変わらない。一部細かい質の埋土もみられた。底面の土坑はSD050と同様歩行痕跡の可能性も考えられる。

8SD023

SX010と切りあっているが、その境界は不明瞭であったが、SX010の上にのっている溝とみられる。長さ10.8m、幅0.55m、深さ0.1m前後を測る。S-24やS-31などの溝が並んで検出されている。

8SD050

検出長6.6m、幅1.15m、深さは0.03 ～ 0.1mを測る。方位はN26°42′W。暗灰色土の埋土を除去すると、底面に長さ0.45m前後、幅0.6 ～ 0.9m、深さ0.05 ～ 0.1mのピットが心々距離約0.7m間隔で5つ並んでいる。そのピットが切り込んでいる底面は固い灰色土で、それを取り除くと台形状の深さ0.2m前後の平坦な溝になる。牛が道を歩く際にできるピット状の痕跡に類似している。

3）井戸

8SE035（図110）

径は南北0.9m、東西1.0m、深さ0.85mのやや楕円形をした石組み井戸。石組み内の埋土は淡く青みがかった砂質土で、井戸を埋める際に入れられたものと推測される。底部には落下した花崗岩が見られ、それらに混じって草木や木片が出土したが、腐植が著しく、加工した様子は伺えない。掘り方は東西3.3m、南北2.5mを測り、西側以外は掘り方ぎりぎりに石が積まれている。西側は掘り方が広く見えるが、SE055の埋土と区別しきれていないのかもしれない。石組みは下部にやや大きな石が用いられているほかは0.3m前後の花崗岩川原石を使用している。SE035はSE055を破壊し造られた井戸と考えられる。よって、SE055の石材を利用したものと推測される。

8SE055（図110）

SE035によって切られている石組み井戸で、その破壊を逃れた下部が遺存している。石組みの径0.65m、深さ0.55mの円形をなしている。掘り方は東西2.0m、南北1.9m以上を測る。西側に長さ0.7m程の大きな石が用いられているほかは、SE035と石材の大きさや積み方は全く同じである。よって、この井戸の石材がSE035に使用されたと推測される。

4）土坑

8SK040（図110）

南北に長い土坑で、南北4.9m、東西2.2m、底面はやや凹凸があり、最深で0.5mで南西に向かって浅くなる。埋土の中位に炭混じりの層が北側に下がるように堆積している。北東側は遺構検出段階で明瞭に確認されていたが、西側は若干下げてから明瞭に確認できたため、官道ができる以前に掘り込まれていたと推測される。

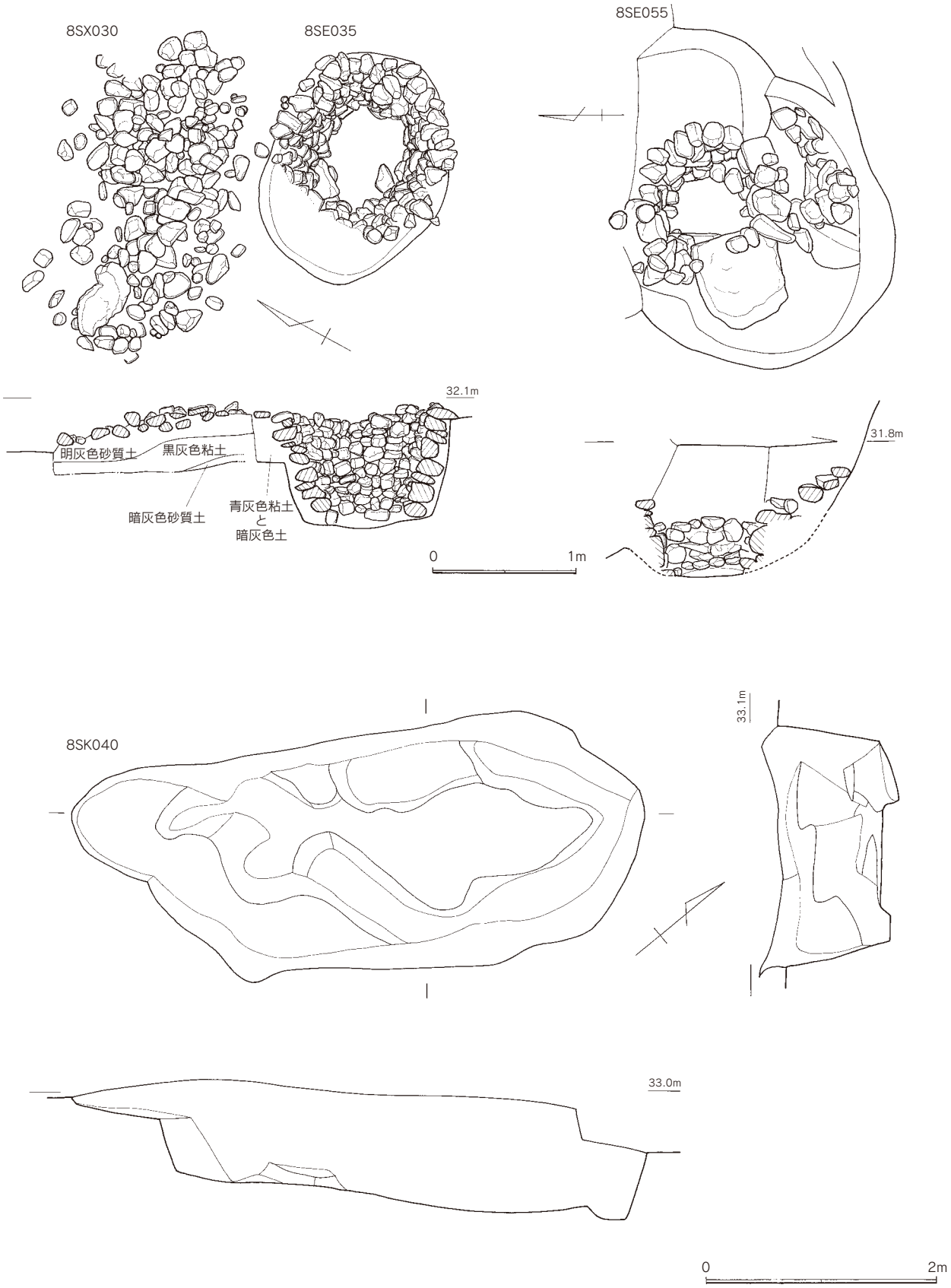


図110.8SE035・055、SK040、SX030遺構実測図(S=1/40・1/50)

5）埋甕

8SX020（図111）

径0.45mの掘り方に、残存部径0.33mの甕が底部付近のみ遺存している。深さは0.1mほどしか残っていない。埋土の底付近から釘、銭、簪、煙管、輪状銅製品が出土した。釘と輪状銅製品については調査中に位置を確認できないまま掘り出してしまったが、他と同様に甕底に近い位置で出土している。甕の破片が簪の上に載っていたため、埋められた当初は甕の内部には土砂は流入していなかったと考えられる。埋土中に木片が少量出土したが、取上げられるような遺存状況ではなかった。

8SX025（図111）

径0.52mの掘り方に、残存部の径0.4mの甕が、下部を打ち砕いた状態で埋められている。深さは0.18mほどしか残っていない。埋土の底面には雨水等で滲み込んだことによる暗灰色粘質土が薄く堆積し、その上には黄茶色土や明灰色土が堆積している。この状況から甕は置かれたあと時間をあけずに埋められたため、土質の差が応じ、雨水が滲みこんだものと推測される。当時の地表面も現遺構面とさほど変わらなかった可能性もある。

6）その他の遺構

8SX010（図112）

調査区の東側で確認され、SD015の東側を基点に北東に広がり、調査区外へ続いている。検出した範囲での最大幅は8.3m、深さは1m以上である。堆積土にはSX045・SE030・035など水場遺構が掘り込まれている。トレンチを設定したところ、大きく2層分かれ、上層は黒灰色土などのやや粘質で、下層は砂と黒色土がきれいに互層となっている。西端は急に立ち上がっており、官道の東側側溝と推定されるSD015とは約4.5mの間隔が開いている。遺物は須恵器が殆どだが、中世以降の遺物が東側で少量出土している。この遺物はSX045の近辺

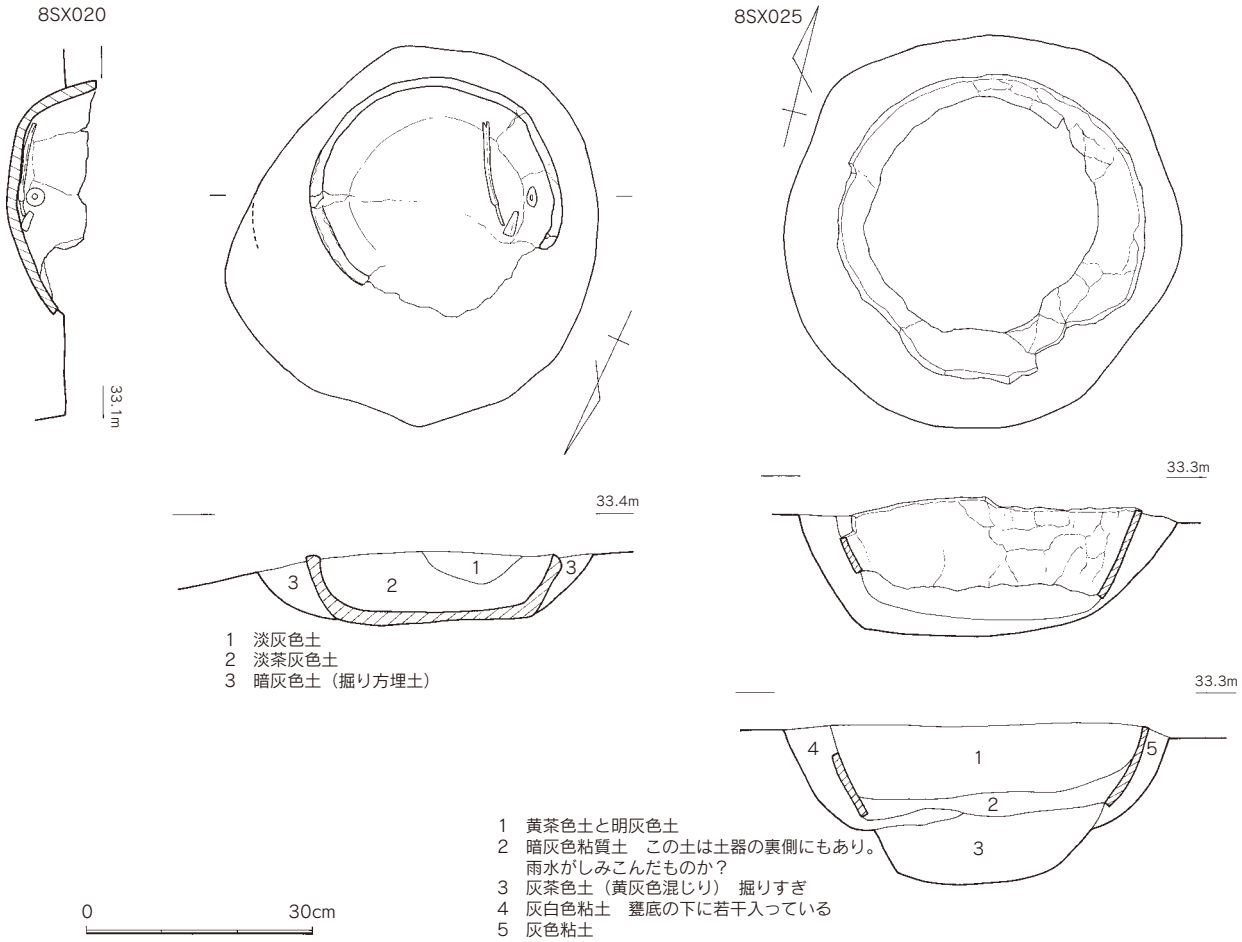


図111.8SX020・025遺構実測図（S=1/10）

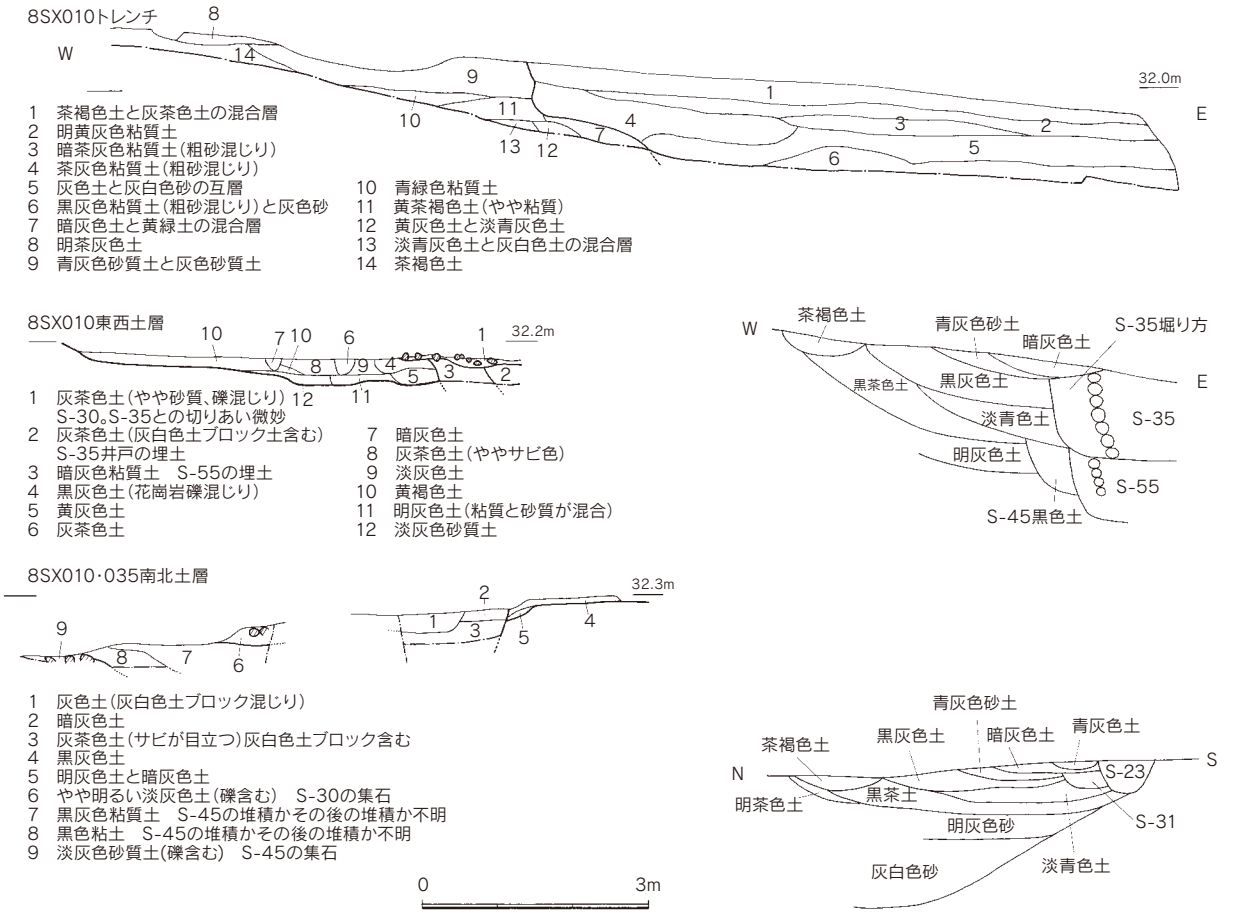


図112.8SX010土層実測図(S=1/100)および模式図

にあり、混入の可能性も考慮する必要がある。他の須恵器などの遺物から、官道があった当時はこの遺構は存在していた可能性が考えられる。SD015付近で見られる青灰色土は、SD015が切り込んでいるため、それ以前に堆積した流路への流れ込みかもしれない。

8SX030（図110）

石組み井戸(SE035)の北隣に1.5×2mの範囲で広がる集石で、石材は井戸と同じである。深さは0.2 ～ 0.3mで2・3個重なる感じである。石材は明灰色砂質土に混じった状態である。これはSE035・SE055で記載したように、SE035もしくはSE055を破壊した際に掘り出された石材と推測され、SE035の検出面と同レベルで見つかっていることからするとSE035を破壊した跡と考えるべきであろう。

8SX045（図113）

調査区の東端、SX010に掘り込んでいる。掘り方は瓢箪形をしていて、規模は6.4m×4.7mを測り、それを3つに分けるように木杭を打ち込んでいる。それぞれ図113の模式図のように黒色土・灰色土・暗灰色土で分けて調査を進めた。黒色土には真竹や竹の根、広葉樹の葉が含まれ、どれも最近の埋没かと思わせるような青味を帯びていた。埋土を除去すると隅丸方形を呈している。灰色土はやや砂質で、埋土除去後は半円形をしている。暗灰色土は埋土を除去すると不定円形を成している。これらの埋土を除去すると花崗岩礫群と灰色砂質土が見える。灰色砂質土は木杭から土坑内に向かって下がっていくため、礫群も同様に土坑内に向かって傾斜する。そのため礫群の上部は遺構検出時にすぐに露出した。これらの礫群は北側と中央部分に東西方向にみられるだけで、北側以外では殆ど石は検出していない。3つの埋土内からも礫はほとんど見つかっていない。

木杭は確認できただけで53本あり、自然木をそのまま使用したもので樹皮が残っていた。大きさは径0.03 ～ 0.05m程だが、その多くは先端が尖った加工が施され、折れることなく1m近く打ち込まれていた。木杭の外側には木材や竹か葦のようなものがみられ、杭に伴っていたものとみられる。北側の杭列の外側にはホゾ穴や角材に加工した建築材を杭列に沿って置いており、土留めとして再利用したものと見られる。

この遺構がどのような機能を持っていたのか明確に言い切れないが、湧水が多く、周囲には井戸が集中して

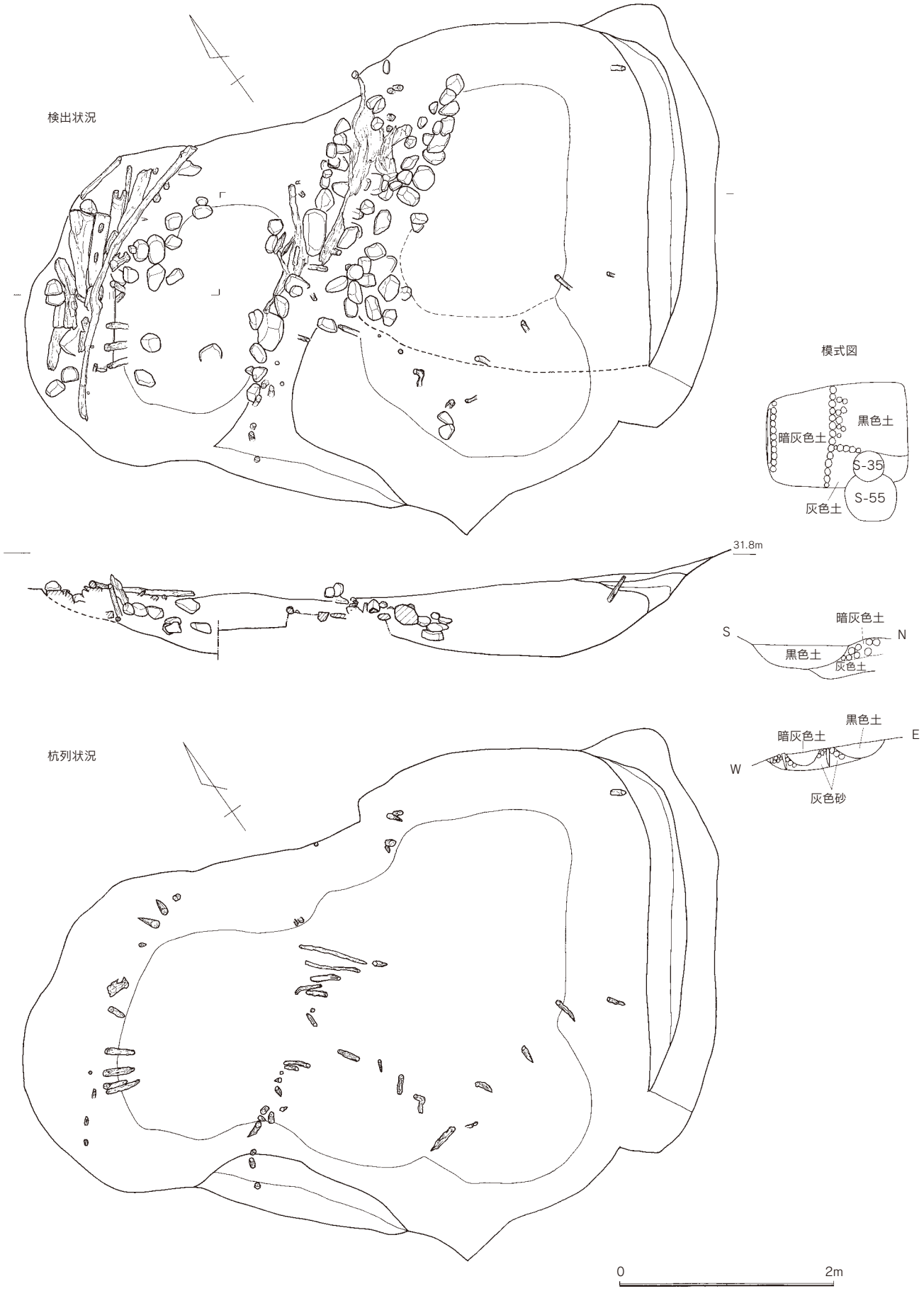


図113.8SX045遺構実測図(S=1/50)

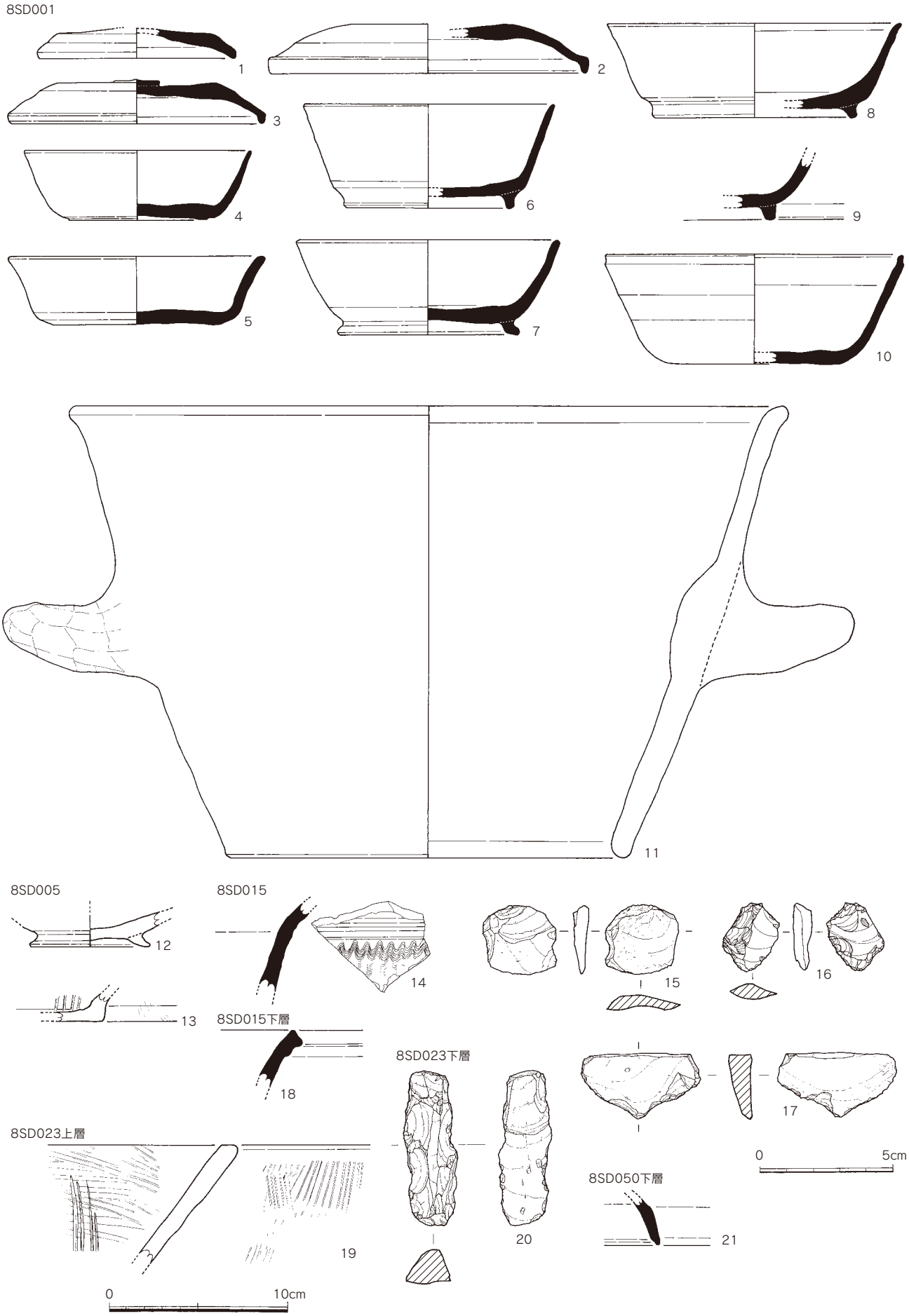


図114.溝出土遺物実測図(S=1/2、1/3)

いることから何らかの水場の遺構であると考えられる。木杭が単純に土留めとも言い難く、杭列は仕切りと考えれば、3ブロックともそれぞれ異なる用途を持っていた可能性も考えられる。地山は青灰色土で湧水によって噴砂状になっている。

8SX065（図109）

東側に下がる落差0.3 ～ 0.4mほどの段で、東側が里道によって削平されているため、現状では溝とは限定できない状況である。埋土は茶色系と灰色系の大きく2層に分かれていて、西側からの堆積状況が窺える。官道に関連した遺構と考えられる。

ピット群

SD005の北側で確認されたピット群。茶色粘土に掘り込まれたピットは、深さが0.5 ～ 0.7mと深い。埋土は地盤の粘土と同様に非常に固く締まっており、中には柱痕も確認できるものもあったが、調査区端のため建物と認めるまでには至っていないが、建築物の柱穴である可能性は十分考えられる。一方SD005の南側で確認されるピットは深さが浅くなるため、深いピット群はSD005と何らかの関係があるのかもしれない。時期については奈良時代の遺物を含んでいるが、土師質土器のようなものもあり、SD005と同様、時期は下る可能性がある。

3.出土遺物

1）溝

8SD001（図114）

須恵器

蓋3（1・2）　1は復原口径11.0cmと小型の蓋で、口縁端部は僅かにつまみ整形した状態。外面上半部は回転ヘラ切り後未調整。内面は回転ナデのあとナデか。2は潰れたツマミが付き、復原口径14.2cm、器高2.5cm。外面中位が回転ヘラケズリで、その前後は回転ナデ。

蓋c3（3）　復原口径17.8cm。頂部が凹んでいるため、ツマミが貼付されていた推測される。外面上部はナデで、他は回転ナデ。内面上部は回転ナデの後ナデ調整。還元不良で淡茶灰色を呈する。

坏a（4・5）　4は復原口径12.7cm、器高3.95cm、復原底径7.8cm。底部外面はヘラ切り後ナデで中央付近に砂粒が付着する。内面底部回転ナデ後粗いナデ調整。5は復原口径14.5cm、器高
3.85cm、復原底径15.4cm。還元やや不良で淡茶褐色を呈する。外面底部回転ヘラケズリ。

坏a（6 ～ 9）　復原口径14.1 ～ 16.6cm。器高5.3 ～ 5.8cm、復原高台径9.6 ～ 11.6cm。内面底部ナデ、外面底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。その他は回転ナデ。焼成は良好で淡灰色や暗灰色を呈する。6は底部回転ヘラ切り後未調整。7は高台が外側に開いている。8は体部が僅かに外反気味に立ち上がる。9は体部下半が丸味のある器形である。

鉢（10）　復原口径16.8cm、器高6.2cm、復原底径9.8cm。口縁部を僅かに内湾させる。胎土は0.1cm以下の砂粒を多く含み、淡灰白色を呈する。

土師器

甑（11）　復原口径40.4cm、器高25.4cm、復原底径22.8cm。色調は茶褐色を呈する。把手はナデ痕跡を残すが、その他内外面とも磨滅し調整不明。

8SD005（図114）

土師器

椀c（12）　復原高台径6.8cm。潰れた外開きの高台を貼付する。胎土は粗く淡橙褐色を呈する。

瓦質土器

擂鉢（13）　外面はタテハケの後ナデ調整。外面底部ナデ。胎土は0.01cm以下の白色砂粒を含み、淡灰色や灰色を呈する。

8SD015（図114）

須恵器

甕（14）　甕の頸部で、外面に波状文を施す。胎土は0.15cm以下の砂粒を多く含み、色調は青灰色を呈する。

石製品

剥片（15 ～ 17）　15は大きさ2.6×2.8×0.5cm、安山岩製。16は大きさ2.6×2.1×0.55cm、黒曜石製。17は大きさ2.45×4.5×0.9cm、安山岩製。

8SD015下層（図114）

須恵器

甕（18）　口縁端部で若干肥厚させる。器面は回転ナデだが、磨滅が著しい。

8SD023上層（図114）

瓦質土器

擂鉢（19）　口縁端部は平坦に仕上げる。斜めや横方向のハケ目の後擂目を施す。外面はタテハケや指頭圧痕を施す。胎土は0.4cm以下の白色砂粒を含み、色調は暗灰色を呈する。

8SD023下層（図114）

石製品

剥片（20）　縦5.8cm、横2.0cm、厚さ1.3cm。安山岩製。

8SD050下層（図114）

須恵器

坏蓋（21）　端部内面に僅かに段を有する。内外面回転ナデ。焼成良好で淡灰色や灰色を呈する。

2）井戸

8SE035掘り方（図115）

土師質土器

鍋（1）　口縁端部内面を斜めに整形する。内面には細かいハケ目を施し、その他は回転ナデ。外面下半には煤が付着する。胎土は0.2cm以下の砂粒を多く含み、淡茶色を呈する。

国産陶器

擂鉢（2）　底部外面には糸切り痕が残る。外面回転ナデ、内面には櫛目を施す。復原底径12.0cm。胎土は白色砂粒を少量含み、色調は赤茶褐色を呈する。

8SE055（図115）

土師質土器

鍋（3）　口縁端部内面を斜めに整形する。内面には細かいハケ目を施し、その他は回転ナデ。外面には指頭圧痕も残り、煤が厚く付着している。胎土は0.3cm以下の砂粒や金雲母を多く含み、淡茶色を呈する。焼成やや不良。

8SE055枠内（図115）

国産磁器

皿（4）　復原口径13.4cm、器高3.5cm、復原高台径4.2cm。緑灰色釉を施すが、外面下半と底部は露胎で、内面底部は輪状に釉を拭き取っている。高台内面端部に砂粒が付着する。

椀（5）　復原高台径4.7cm。高台畳付以外の全面に緑灰色釉を施す。高台内面端部に砂粒が付着する。

3）土坑

8SK040（図115）

須恵器

甕（6）　肥厚した口縁部で、外面には細かいヨコハケを施す。胎土は0.1cm以下の白色砂粒を多く含み、赤茶褐色を呈する。

石製品

剥片（7）　大きさは5.7×6.8×0.85cmで、安山岩製。

4）埋甕

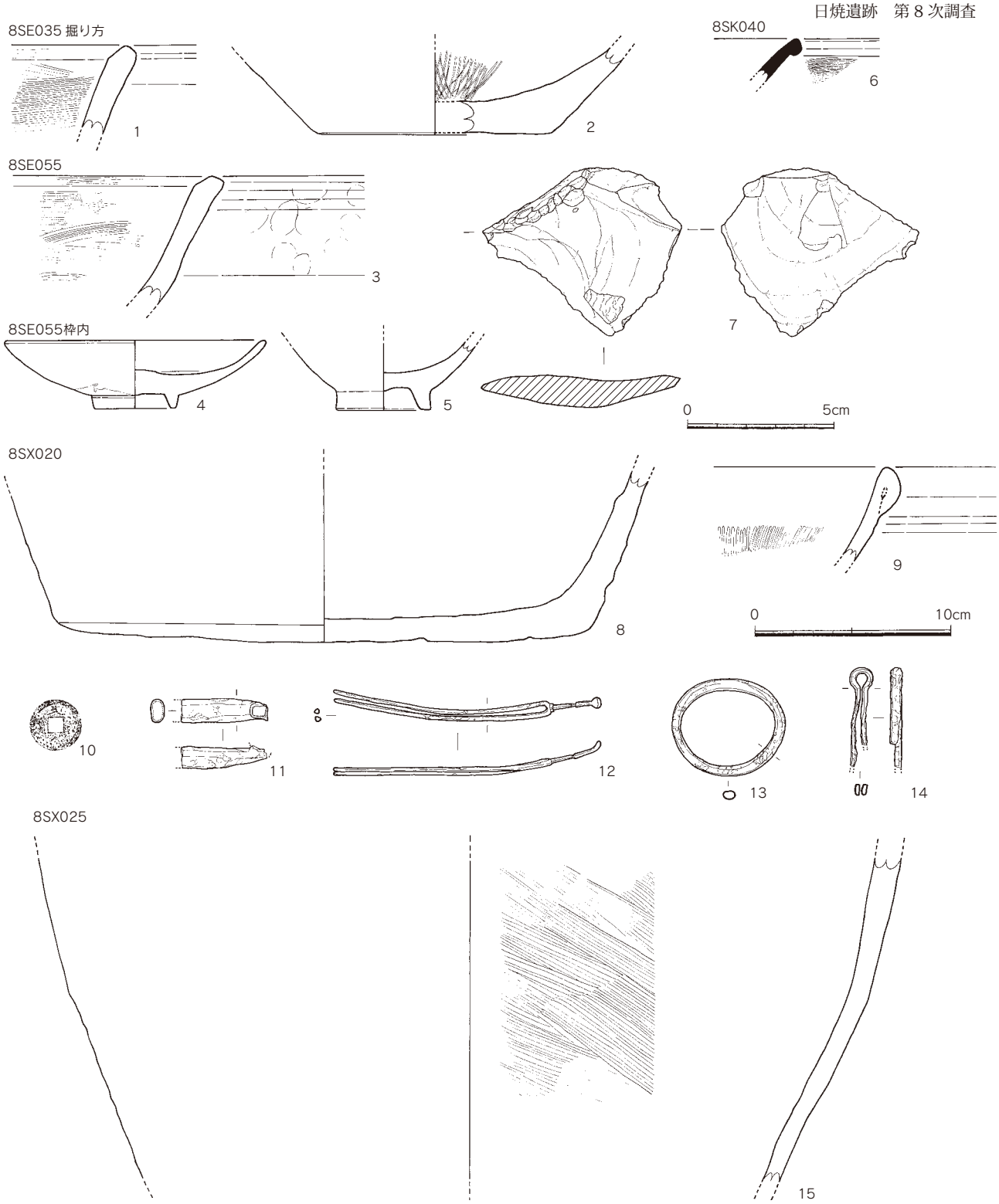


図115.8SE035・055、SK040、SX020・025出土遺物実測図(S=石器:1/2、1/3)

8SX020（図115）

瓦質土器

甕(8)　底部のみ残存。内外面とも磨滅が著しいが、内面には僅かに回転ナデの痕跡が確認できる。胎土は s 0.3cm以下の砂粒を多く含み、焼成はやや不良で淡灰黄色を呈する。内面にカルシウムのようなものが付着しているため、便甕として利用されていた可能性も考えられる。

国産陶器

擂鉢(9)　口縁部は丸く折り曲げる。内面に擂り目を施し、内外面とも暗茶色釉を施す。胎土は黒灰色で僅かに砂粒を含む。

金属製品

銭貨(10)　寛永通宝。劣化が目立つ。

煙管雁首(11)　現存長4.35cm、幅1.3×1.1cm。火皿部分が一部欠損する。

簪(12)　2本足のもので、先端には耳掻きが付いている。長さ13.7cmの完形でやや湾曲している。

環状金具(13)　径5.0×5.7cm、厚さ0.45cm。

留め具(14)　片方先端部が欠損する。現存長5.1cm、幅1.2cm、厚さ0.25cm。

5)その他の遺構

8SX025（図115）

瓦質土器

鉢(15)　胴部付近で、口縁部と底部は欠損している。外面は磨滅し調整不明、内面はハケ調整で下部ほどハケ目は粗い。

8SX027（図116）

国産陶器

椀(1)　内外面とも灰色釉を施し、細かい貫入が入る。高台畳付は釉を拭き取る。胎土は黒色粒を含み、灰色や茶灰色を呈する。高台径4.6cm。

肥前系磁器

皿(2)　復原口径13.8cm。口縁部は波形で、全面に僅かに青味がかった透明釉を施し、内面に文様を施す。

8SX045暗灰色土(図116)

瓦質土器

湯釜(3～5)　3は鍔の下半は火を受けて、器面が煤と混ざって変化し、タテハケはぼんやり見える。4は復原口径14.1cm。肩部に巴文と菊花文のスタンプを施す。頸部と肩部の境界には浅い沈線が巡る。内面に指頭圧痕が残る以外回転ナデ。胎土は細砂粒を少量含み、熱によって淡橙色に変色している。5は頸部内面がヨコハケの後回転ナデを施す。体部内面は雑なナデ。体部外面には花文のスタンプが施され、カキ目の後に煤が付着している。

火鉢(6)　2条の突帯が巡り、その間に花文のスタンプを施す。胎土は0.1cm未満の白色砂粒を少量含み、黒灰色を呈する。内面に指頭圧痕が残る。

染付

皿(7)　碁笥底で底径3.7cm。内面に呉須で文様を描く。中央に魚形文を施す。小野分類の染付皿C群Ⅳである。

白磁

椀(8･9)　8は復原高台径5.4cm。釉は乳白色で高台畳付以外全面に施す。内面には目跡が残る。李朝陶器。9は口縁部が僅かに外反する。復原口径12.4cm、器高2.9cm、復原高台径7.1cm。胎土は精製され、白色を呈する。高台畳付は露胎。

石製品

剥片(10)　自然面が残り、部分的に二次加工が施されている。安山岩製。残存長7.0cm、幅4.4cm、厚さ1.9cm。

砥石(11)　欠損しているが使用面は2面である。砂岩製。

石臼(12･13)　12は裏面に僅かに条痕が確認できる。砂岩製。13は現存最大幅30.4cm、厚さ6.5cm。一部黒変している。

8SX045黒色土(図117)

瓦質土器

甕(14)　復原底径30.6cm。内外面ともハケの後にナデ調整し、僅かにハケ目が確認できる。胎土は0.3cm以下の砂粒を含み、淡灰白色を呈する。

擂鉢(15)　外面ナデ、内面には僅かに擂り目が残る。0.2cm以下の砂粒を多く含む。

湯釜(16)　肩部にはスタンプが施され、その下は粗いナデ調整。色調は黒灰色を呈する。

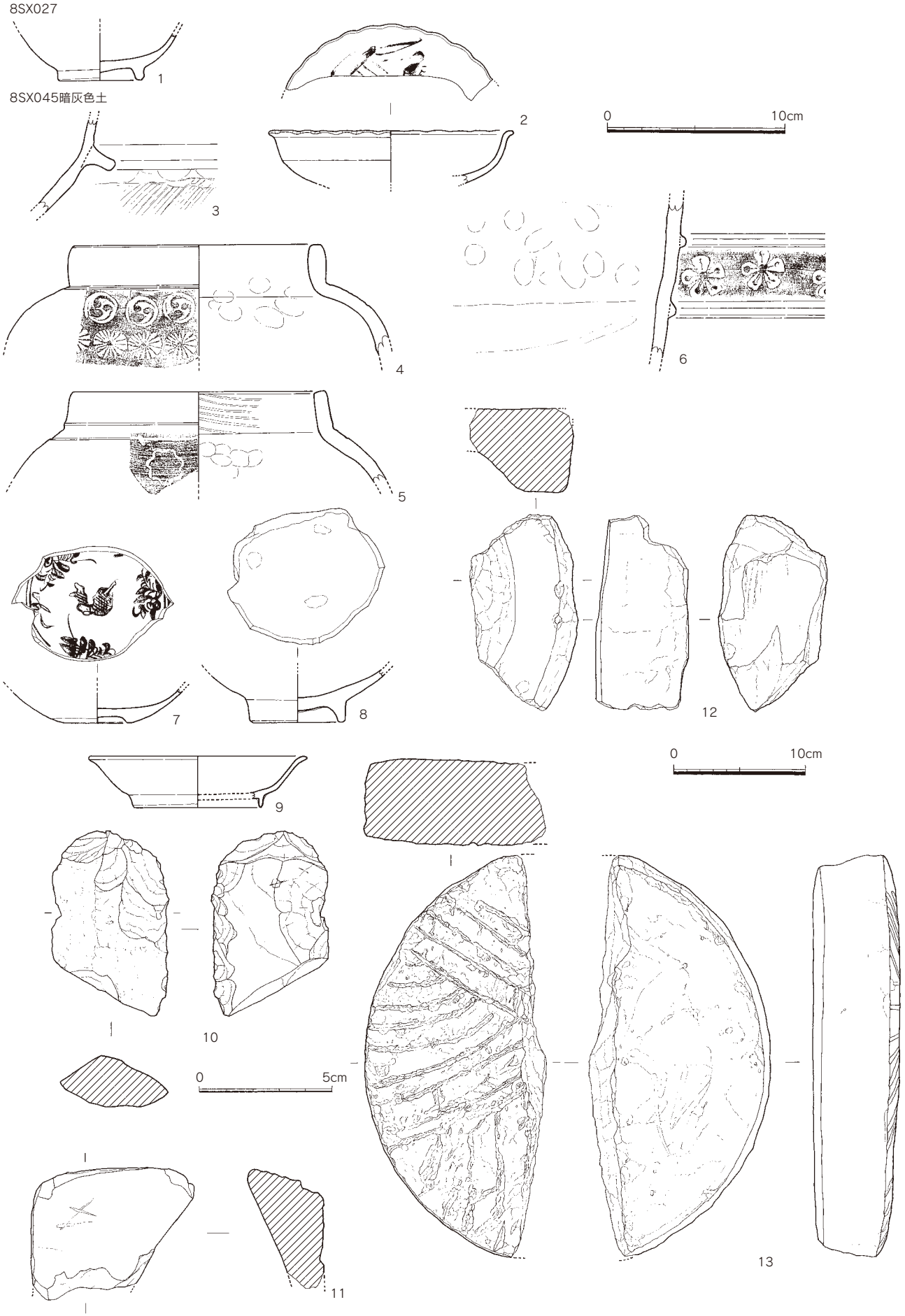


図116.8SX045出土遺物実測図(1)（S=石器:1/2、1/3、石臼:1/4）

鍋（17）　長さ7cm程の耳が付いている。耳の上には斜めに円孔が2個穿たれている。内面ヨコハケ、外面タテハケ。胎土は0.2cm以下の砂粒を含み淡白灰色を呈する。

国産陶器

茶入（18）　内外面回転ナデの後、上半部に乳白色と淡乳白色と暗褐茶色釉を施し、下半は自然釉が見られる。復原底径5.0cm。

壺（19）　復原口径18.6cm。胎土は灰色で0.1cm以下の砂粒を少量含む。全面に暗赤紫褐色釉を施す。

肥前系陶器

椀（20）　胎土は淡灰色で、内外面に淡緑灰色釉を施す。高台径5.3cm。唐津系。

石製品

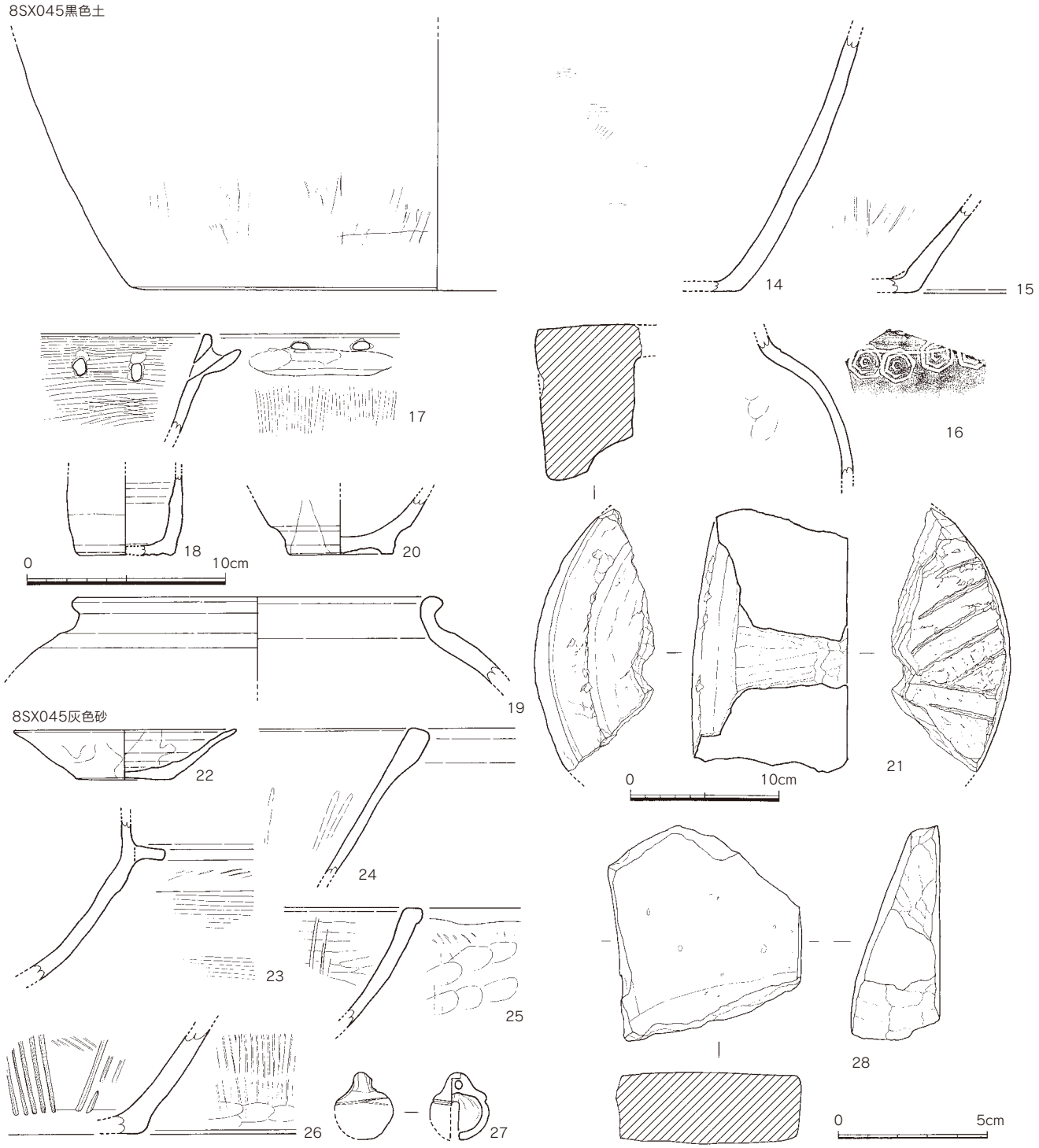


図117.8SX045出土遺物実測図（2）（S=石器:1/2、1/3）

石臼（21）　幅0.3cm程の条痕を彫りこむ。中央には穴が開けられている。砂岩製。

8SX045灰色砂（図117）

土師器

坏b（22）　復原口径11.7cm、器高2.5cm、復原底径5.0cm。内外面に油煙痕が付いている。底部切り離しは回転糸切り。内外面は回転ナデ。

瓦質土器

湯釜（23）　体部下半には煤が厚く付着している。胎土は淡灰白色で、細砂粒を僅かに含む。

鉢（24）　口縁部を肥厚させ、内外面は剥離しているが、内面に擂り目のような痕跡がぼんやり確認できるが、擂鉢とは断定できない。

土師質土器

擂鉢（25・26）　25は内面が強いナデのあと縦方向の擂り目が僅かに確認できる。外面はナデで黒灰色を呈する。26は外面ハケ、内面はナデの後擂り目を施す。胎土は0.1cm以下の砂粒を含み、淡褐色を呈する。

土製品

土鈴（27）　大きさはヨコ3.0cm、高さ3.4cmで、淡灰白色や黒灰色を呈する。焼成良好。

石製品

砥石（28）　一部欠損するが、3面で使用が認められる。砂岩製。

8SX045灰色土（図118）

瓦質土器

擂鉢（29）　内面はヨコハケの後擂り目を施す。外面ナデ調整。胎土は灰黒色や淡灰褐色で0.1cm以下の砂粒を少量含む。

土師質土器

鉢（30）　口縁部は折り曲げて肥厚させる。内面はヨコハケとナデ、外面はハケ。口縁端部外面には煤が付着する。胎土は淡褐色で砂粒を少量含む。

鍋（31・32）　31は内面ナデ、外面は鍔下がタテハケ、それ以外は回転ナデ。胎土は淡橙褐色で角閃石を少量含む。32は口縁端部内面を斜めに面取りする。端部外面に煤が付着する。外面はハケの後ナデ、内面はヨコハケを施す。胎土は淡褐灰色で0.1cm以下の砂粒を多く含む。

肥前系陶器

椀（33）　胎土は暗灰色～淡茶灰色で0.1cm以下の砂粒を僅かに含む。釉は淡緑灰色で外面下半以外に薄く施釉する。復原口径9.5cm。唐津。

国産陶器

茶入（34）　復原口径4.5cm。胎土は淡灰色で、やや緑色を帯びた淡灰白色釉を全面に施す。

雑釉陶器

椀（35）　内外面に淡灰色釉を薄く施し、底部両面に目跡を残す。胎土は淡灰色で0.1cm以下の砂粒を多く含む。凸型の底部で復原底径3.9cm。朝鮮系。

8SX030（図118）

土師質土器

鉢（36・37）　36は内面回転ナデ、外面ハケで指頭圧痕が残る。胎土は茶灰色～暗茶灰色で、白色砂や雲母を多く含む。37は口縁部が若干肥厚する。内外面回転ナデで、外面には指頭圧痕があり、煤が付着する。胎土は黄茶色で、白色粒や雲母などを多く含む。

火鉢（38）　短頸で肩部に低い突帯があり、その下にスタンプ文を巡らす。体部内面にはヨコハケと指頭圧痕が残る。胎土は0.15cm以下の砂粒を含み、茶灰色を呈する。

鍋（39）　内面はヨコハケ、外面は回転ナデのあとナデで煤が付着する。口縁端部内面は斜めに整形されている。胎土は0.15cm以下の白色砂粒を含み、内面灰茶色、外面暗茶色を呈する。

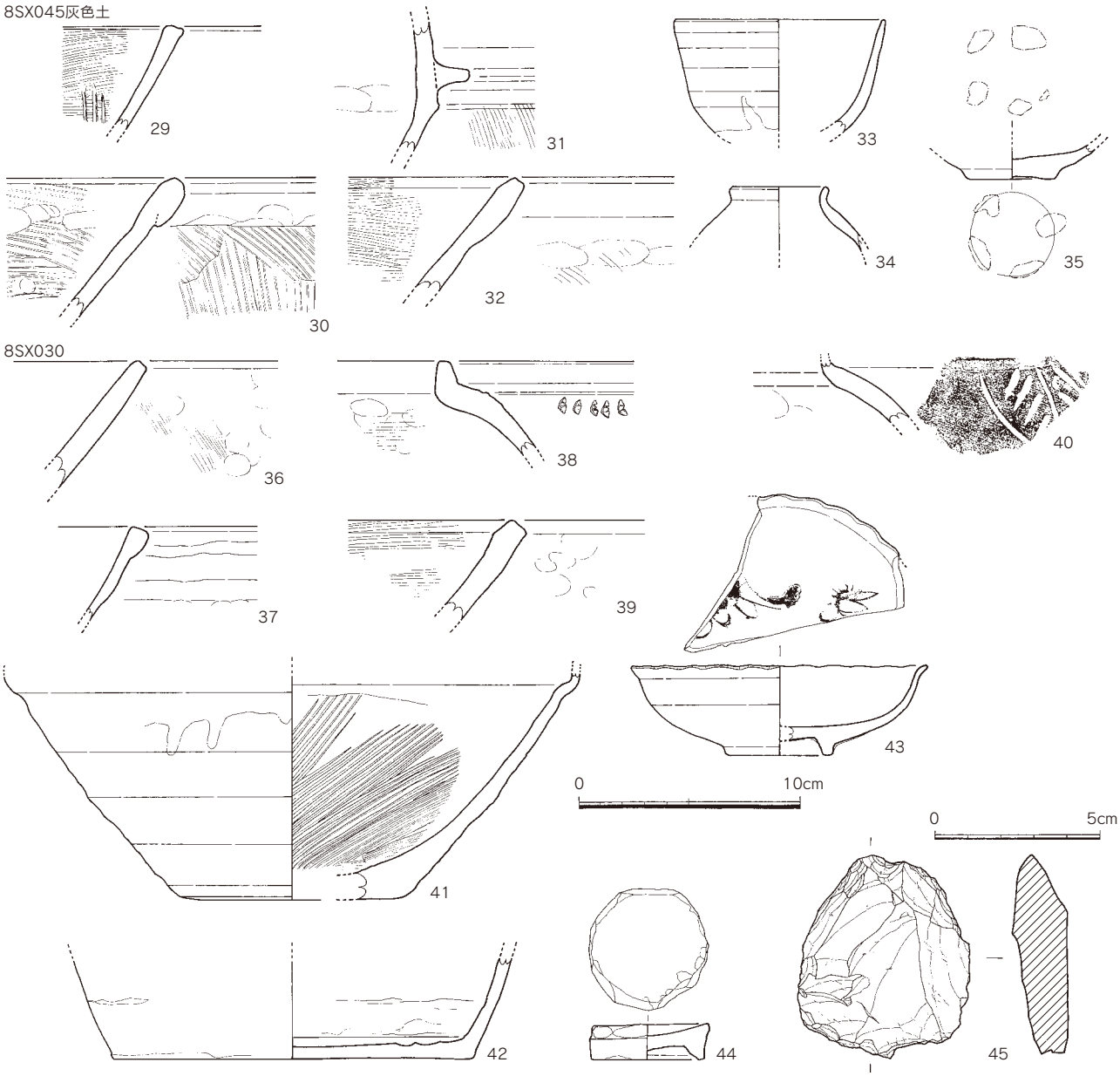


図118.8SX045・SX030出土遺物実測図(S=石器:1/2、1/3)

瓦質土器

火鉢(40)　肩部付近で、回転ナデのあと浅い沈線を巡らし、草葉のような文様が刻んでいる。内面はナデ。胎土は白色粒や黒色粒を含み、暗灰色や淡灰色を呈する。

国産陶器

擂鉢(41)　口縁端部を欠損する。復原底部径10.2cm。口縁部付近だけ暗茶色釉を施し、それ以外は内面が回転ナデのあと擂り目を、外面は回転ナデを施す。底部は回転糸切りである。胎土は白色砂粒や黒色粒を含み、茶褐色を呈する。

瓶(42)　内面は回転ナデのあと粗いナデ、外面は回転ナデ、外面底部はナデである。胎土は暗紫茶色で、砂粒を含むが焼き締まっている。復原底径16.4cm。

肥前系磁器

皿(43)　復原口径13.4cm、器高4.1cm、復原高台径4.8cm。青みのある透明釉を全面に施し、高台畳付は釉を拭き取っている。口縁端部は波形で、内面に青色釉で文様を施す。

白磁

椀(44)　Ⅱ類。高台を残して、体部を意図的に打ち掻いている。

石製品

石核(45)　大きさは6.1×5.2×1.7cm。安山岩製。

8SX010青灰色土(図119)

中国陶器

盤(1)　外面の一部に暗緑色釉が施されており、上半部は施釉されていると考えられる。内外面回転ナデ。胎土はやや粗く、0.15cm程の砂粒を少量含み、淡灰褐色を呈する。

8SX010暗灰色土(図119)

土師質土器

鉢(2)　内面はナデ、外面は僅かにハケ目が確認できる。胎土はやや粗く、焼成不良で茶灰色～暗褐色を呈する。

擂鉢(3)　内面はヨコナデのあと擂り目を施す。外面ヨコナデ。胎土は0.2cm以下の砂粒を多く含む。

朝鮮雑釉陶器

椀(4)　高台は削り出しで、内外面の底部には目跡が残る。復原高台径4.4cm。胎土は0.1cm以下の白色粒や黒色粒を含み、内外面に淡灰色釉を施す。

8SX010茶褐色土(図119)

須恵器

坏蓋(5)　復原口径16.6cm、器高3.6cm。外面頂部は回転ヘラ切り後簡単なナデ調整。

蓋c3（6）　口径14.8cm、器高2.15cm。外面上半部は回転ヘラ切り、内面上半部は丁寧なナデ調整。

坏c（7 ～ 10）　色調は青灰色で、体部内外面は回転ナデ。7は復原口径13.0cm、器高4.5cm、復原高台径9.4cm。内面底部は丁寧なナデ、外面底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。8は復原口径15.8cm、器高5.45cm、復原高台径10.2cm。内面底部は不定方向の丁寧なナデ。9は復原高台径8.6cm。内面底部ナデ、外面底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。10は内面が使用により滑らかになっている。

壺b(11)　高台径10.2cm。体部下半は回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデ。焼成・還元良好で青灰色を呈する。

8SX010青灰色砂土(図119)

土師器

壺(12)　復原口径14.4cm、器高12.4cm。胎土は淡黄橙色で白色粒や茶色粒を含む。焼成は不良で、調整は不明瞭だが、内面に粘土積み上げ痕が確認できる。

瓦質土器

湯釜(15)　復原口径13.6cm。肩部に花文のスタンプを巡らす。耳部には格子目の刻み目が施されている。外面は主に回転ナデで、鍔部の下は粗いヘラミガキで僅かに煤が付着している。内面には指頭圧痕が残る。胎土は僅かに砂粒を含み、内面は淡青灰色、外面は灰色や暗灰色を呈する。

国産陶器

皿(13)　体部中位で内側に僅かに屈曲し、低い高台を削り出している。内面と外面上半部に灰白色釉を薄く施す。復原高台径5.0cm。

肥前系陶器

皿(14)　外面上半部と内面に淡緑色釉を施し、内面底部は釉を輪状に拭き取り、目跡が残す。高台にも砂粒状の目跡が残る。復原口径12.8cm、器高3.6cm、復原高台径4.65cm。唐津産。

8SX010黒色粘土(図119)

瓦質土器

擂鉢(16)　内面はハケの後擂り目を施す。外面はハケの後粗いナデ。胎土はやや粗く淡灰色～暗灰色を呈する。

8SX010黒灰色土(図120)

須恵器

坏蓋(17)　復原口径15.2cm。外面頂部は切り離し後ナデ調整。その他回転ナデ。口縁端部内面に僅かに段を有する。色調は淡灰褐色を呈する。

蓋c3（18 ～ 21）　口径13.0 ～ 14.2cm。器高2.1 ～ 2.5cm。潰れた擬宝珠形のツマミを貼付する。18は回転

ヘラケズリの後回転ナデ。21は外面上半部が回転ヘラケズリの後粗いナデ。

坏a（22 ～ 25）　内面底部は回転ナデのあとナデ。焼成良好。23は還元不良で暗赤褐色を呈する。25は外面回転ヘラケズリ。

小坏c（26）　復原口径9.2cm、器高3.85cm、復原高台径6.8cm。色調は青灰色や暗灰色で砂粒を少量含む。

坏c（27 ～ 38）　復原口径11.6 ～ 15.6cm、器高3.6 ～ 4.6cm、高台径8.2 ～ 10.6cm。全体的に低い高台を貼付する。内面底部は回転ナデの後ナデ調整。外面底部は回転ヘラ切りの後ナデ。

甕（39）　復原口径50.0cm。胎土は暗灰色で、0.2cm以下の砂粒を多く含む。

土師器

鍋（40）　胎土は淡褐白色で、0.2cm以下の砂粒や角閃石を含み、外面には煤が付着する。

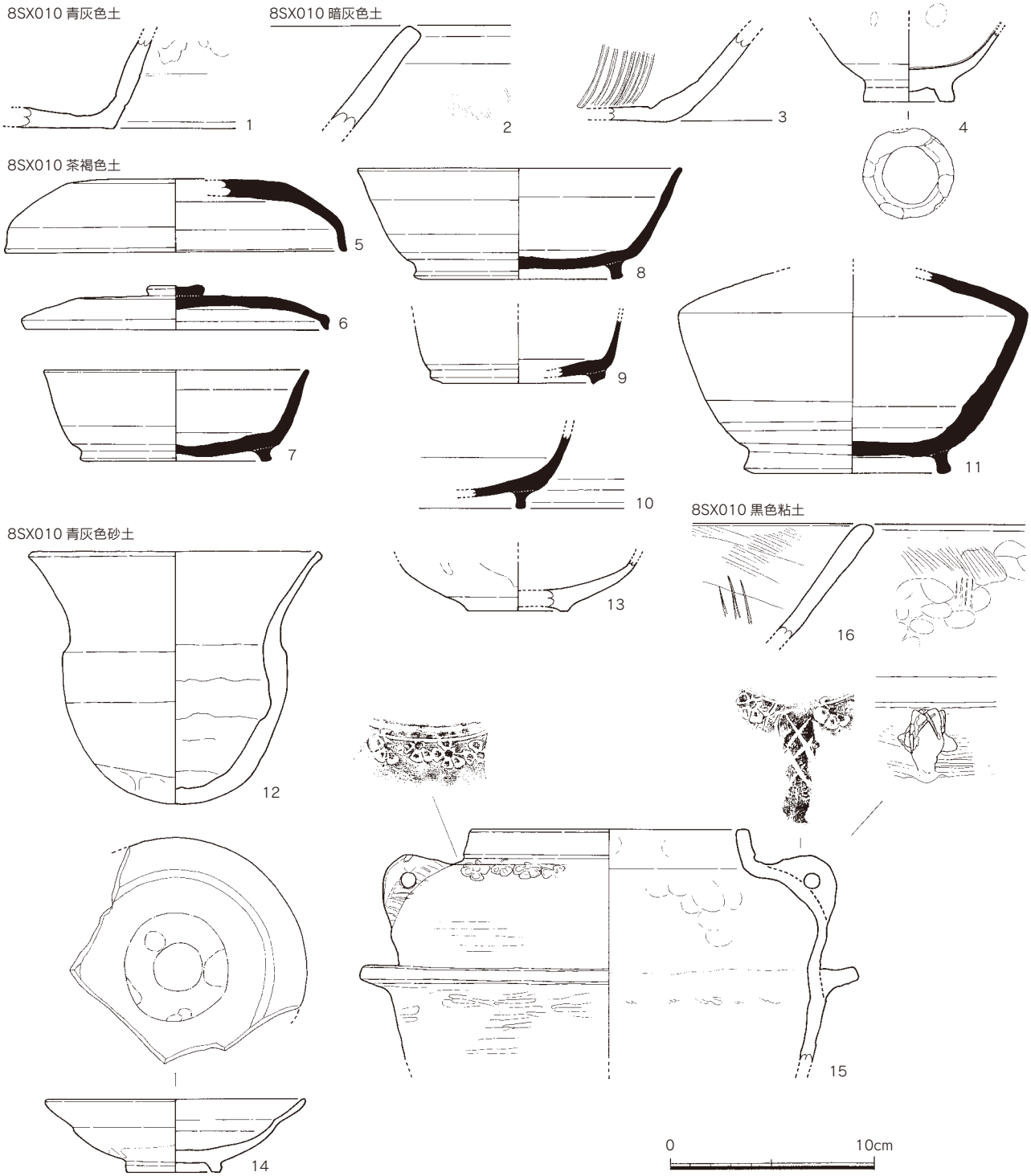


図119.8SX010出土遺物実測図（1）（S=1/3）

瓦質土器

火鉢(41)　外面にはミガキのような痕跡が残る。内面回転ナデ。口縁端部は僅かに凸凹に作られている。胎土は淡灰白色で、外面は黒灰色を呈する。

擂鉢(42)　口縁部は内側に屈曲し片口を有する。内面はヨコハケのあと擂目を施す。胎土は灰黒色を呈する。

染付

椀(43)　復原高台径6.0cm。内外面に淡緑灰色釉を施し、内面に暗紺色釉、外面に淡青色釉で文様を描く。高台畳付は露胎。

肥前系磁器

皿(44)　碁笥底で高台畳付には砂粒が付着する。釉は青味を帯びた灰白色で、内面には呉須などで文様を施す。

8SX010淡青色土(図121)

須恵器

蓋3（45）　外面上半部は回転ヘラケズリ、内面上半部ナデ、その他は回転ナデ。色調は灰色を呈する。

坏c（46 ～ 49）　口径13.3 ～ 14.6cm、器高4.15 ～ 5.55cm。内面底部不定方向のナデ。色調は青灰色や灰色を呈する。外面底部は46･49が回転ナデ。47･48が回転ヘラ切りの後粗いナデ。

石製品

砥石(50)　欠損するが使用面は5面である。砂岩製。

8SX010黒茶色土(図121)

須恵器

蓋c3（51）　口縁端部はやや長く折り曲げている。外面上半部は回転ヘラ切り後未調整。口径15.6cm、器高2.3cm。

坏c（52 ～ 56）　内面底部は回転ナデの後不定方向のナデ。52は復原口径14.0cm、器高4.15cm。還元やや不良で淡灰白色を呈する。53は復原口径16.2cm、器高6.0cm。還元不良で淡橙褐色を呈する。

皿a（57）　復原口径16.6cm、器高3.3cm、復原底径14.2cm。外面底部回転ヘラ切り、内面底部回転ナデの後不定方向のナデ。還元やや不良で淡褐灰色や茶褐灰色を呈する。

甕(58・59)　58は復原口径12.8cm。内外面回転ナデ。還元不良で橙茶褐色を呈する。59は頸部内外面が回転ナデ、内面同心円当て具痕、外面叩き目が残る。還元不良で淡灰橙褐色を呈する。

瓦器

椀(60)　復原口径15.2cm。内面にはミガキbのコテ当て痕が残る。外面上半部にはミガキcが、下半にはミガキの下に指頭圧痕が僅かに確認できる。胎土は精製され、色調は黒灰色～淡灰白色を呈し光沢がある。

国産陶器

壺(61)　胎土は橙茶色で、外面から内面端部にかけては淡灰緑色から暗茶色の光沢のある釉を施し、内面下半は光沢のない茶色釉を施す。

8SX010明灰色土(図121)

須恵器

蓋c3（62･63）　62は復原口径9.8cm、器高1.4cm。外面上半部回転ヘラケズリ、内面上半部は不定方向のナデ。色調は青灰色を呈する。63は口径17.1cm、器高2.85cm。外面上半部回転ヘラ切り後粗いナデ、内面上半部は不定方向のナデ。色調は青灰色と暗灰色を呈する。

坏c（64 ～ 66）　内面底部不定方向のナデ。64は復原口径11.7cm、器高4.15cm、復原高台径8.7cm。外面底部ナデ調整。65は復原高台径11.5cm。66は復原高台径11.2cm。底部内側に高台を貼付する。

土師器

蓋c3（67）　口径17.8cm。ツマミが欠落し、接合のための同心円の条痕がみえる。内外面とも磨滅が著しい。

8SX010トレンチ(図121)

須恵器

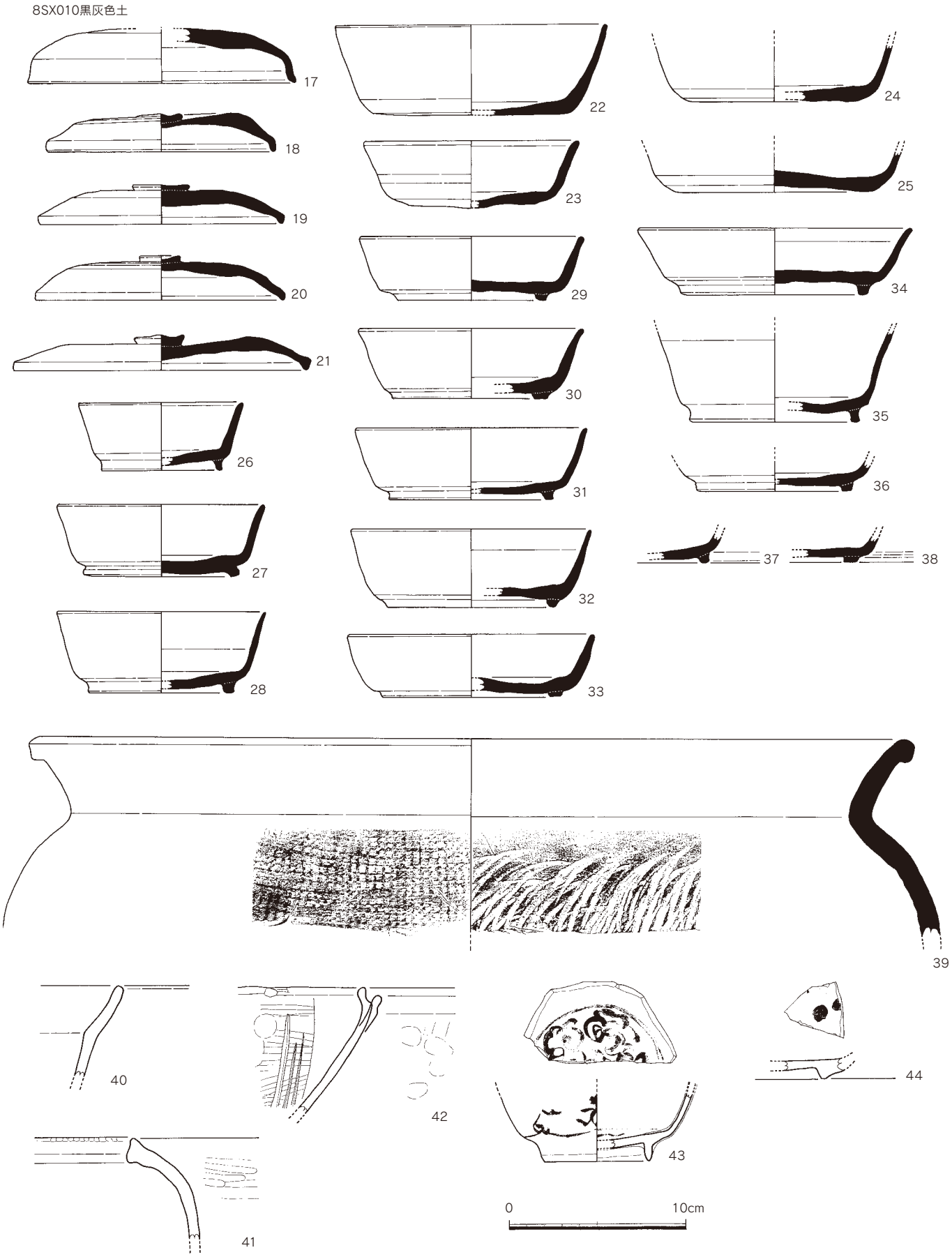


図120.8SX010出土遺物実測図(2)（S=1/3）

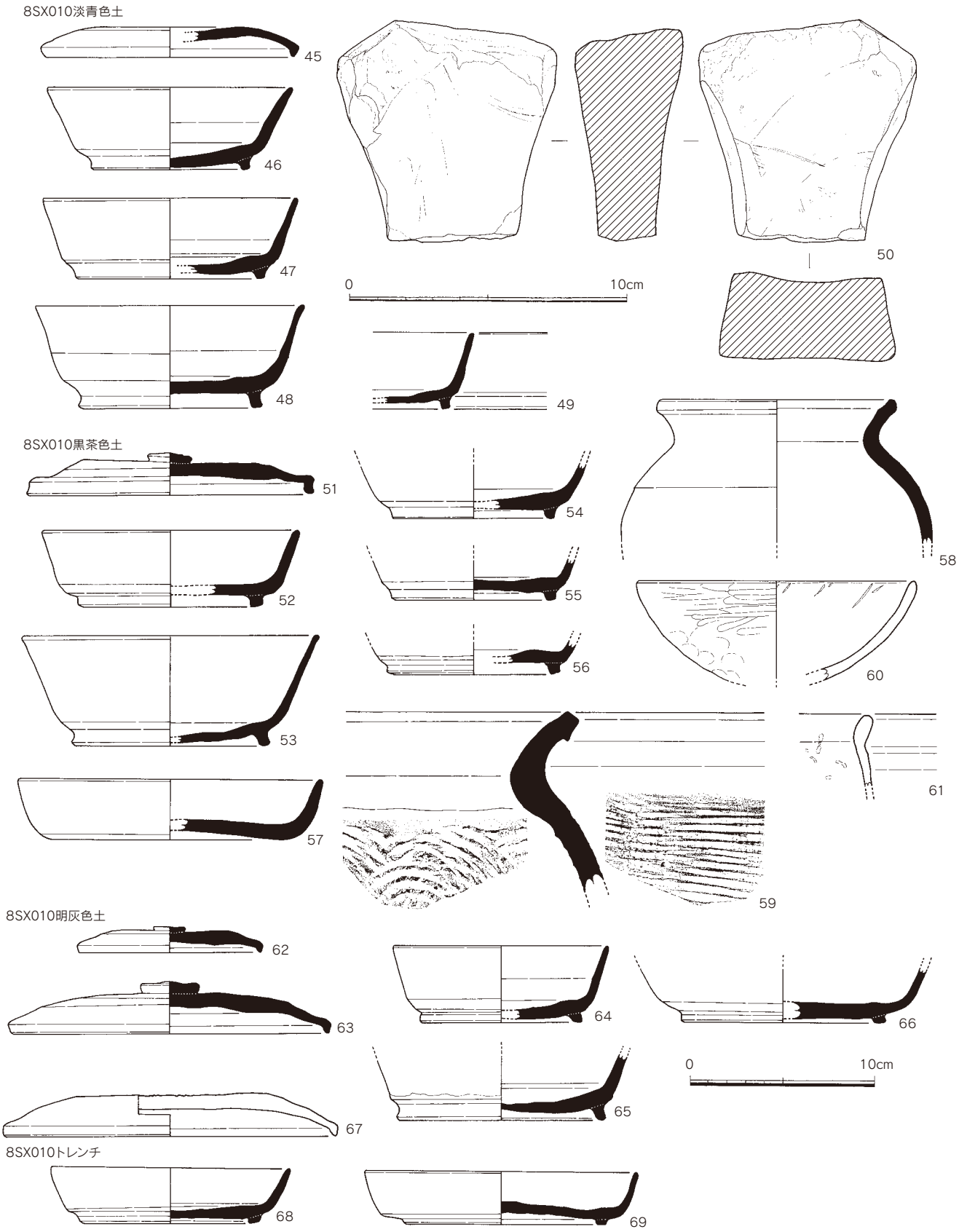


図121.8SX010出土遺物実測図(3)（S=石器:1/2、1/3）

坏c（68･69）　低い高台を貼付する。内面は丁寧なナデを施す。68は口径13.0cm、器高3.1cm、高台径9.8cm。69は口径14.8cm、器高2.85cm、高台径9.9cm。

8SX065（青灰色土）（図122）

須恵器

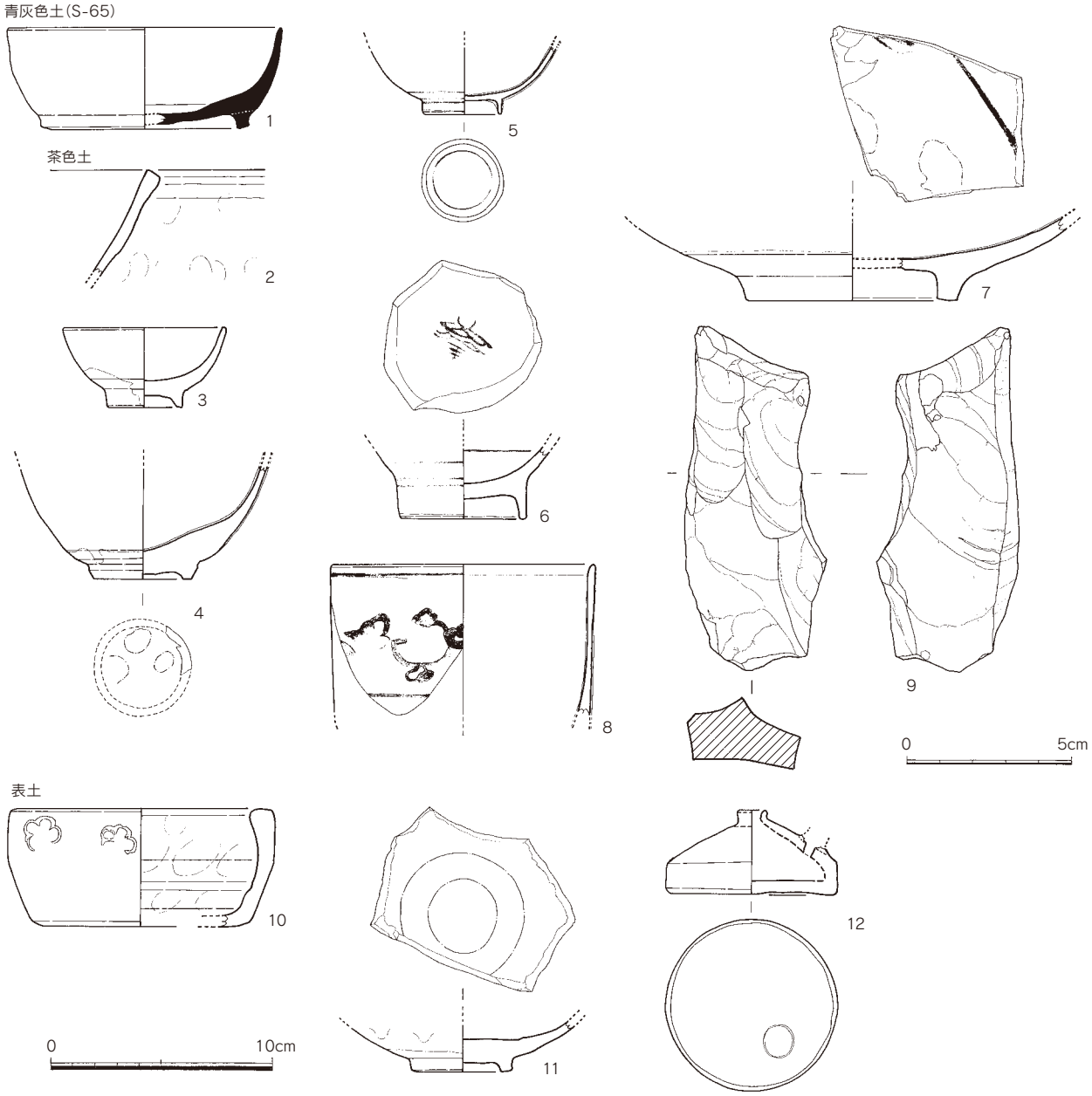


図122.土層出土遺物実測図(S=石器:1/2、1/3)

坏c（1）　復原口径12.4cm、器高4.6cm、復原高台径9.4cm。内面底部が不定方向のナデ、外面底部はヘラ切り未調整、それ以外は回転ナデ。焼成・還元は良好で淡青灰色を呈する。

6)土層

茶色土(図122)

土師質土器

鍋×鉢(2)　口縁部が若干肥厚する。外面はナデ調整で、煤が付着している。胎土は淡灰褐色で0.2cm以下の砂粒を少量含む。

国産陶器

小椀(3)　復原口径7.4cm、器高3.6cm、高台径3.4cm。胎土は淡茶白色で、内面と外面上半部に黄茶褐色釉を施す。外面下半はヘラケズリで、高台は削り出しである。

椀(4)　復原高台径4.4cm。胎土は灰色で、内面と体部外面に暗緑色釉を施す。高台付近は削り出しで砂目が残る。

肥前系磁器

椀(5・6)　5は復原高台径3.6cm。高台畳付は露胎。体部と高台の境界付近に青色釉で圏線を施す。6は高台径5.8cm。高台畳付のみ露胎。

皿(7)　復原高台径9.6cm。内面に淡褐白色釉と外面上半部に淡灰白色釉を施す。外面下半は回転ヘラケズリで、高台は削り出しである。内面には目跡が残る。胎土は橙茶色を呈する。

鉢(8)　復原口径12.0cm。外面は呉須で文様を描き、内外面とも淡青白色釉を施し、口縁端部の釉を拭き取る。

石製品

剥片(9)　大きさは縦10.4cm、横4.25×1.9cm。安山岩製。

表土(図122)

瓦質土器

鉢(10)　復原口径11.8cm、器高5.3cm、復原底径9.8cm。体部はやや内湾気味に立ち上がり、上半部に花文のスタンプを巡らす。内面回転ナデと指頭圧痕で、外面下半は手持ちヘラケズリの後粗いナデ調整。胎土は淡灰白色で、微細な雲母粒を含む。

国産陶器

皿(11)　内面は淡緑褐色釉を施し、中央付近を輪状に釉を掻き取る。外面は上半部が淡灰白色釉を施し、高台は削り出しで、高台径4.6cm。胎土は淡灰茶白色を呈する。

水滴(12)　復原口径1.4cm、器高3.8cm、底径7.8cm。注ぎ口は欠損する。底部外面は回転ヘラ切りで、円形の切り込みがある。底部と内面以外は淡緑褐色釉を施す。

4.小結

隣接する日焼遺跡第5次調査に続いて官道(SF060)が確認された。現状では西側側溝(SD001)より西に地山を削平した平坦面があるものの、新しい遺構しか確認できないため、奈良時代には丘陵を殆ど削ることなく、丘陵裾部を沿うように道が走っていた可能性が考えられる。

東側側溝ラインに位置するSD015とSX065との関係を整理すると、

- 遺物がそれぞれ少量であるため、時期差を言及することは難しいが、SD015については官道埋没時よりやや古い７世紀代とみられる遺物が出土している。
- 埋没状況はSD015が砂質土の硬化土で、SX065が茶色系と灰色系の大きく2層に分かれ、西側からの自然堆積がみられるなど、2遺構で全く状況が異なっていること。
- この調査区内において、2遺構はほぼ重なっていること。
- SX065の東側は削平され、北側は2遺構とも殆ど同じ位置で途切れている。

以上のことから、この東側側溝ラインの埋没時期が最低3回(SD015→SX065茶色土系→SX065灰色土系)あったことが推測される。この埋没状況は南側の第10次調査のSD001（官道西側溝)付近と類似している。しかし、埋没過程は異なるものの、重なり合った状況を示すため、この2遺構については全く無関係な関係とは言い切れない。SX065の東側は近年の里道によって削平されているため、溝なのか明確に言い切れないが、SX065灰色土系については官道東側溝の最終埋没土と考えるのが適当であろう。SD015の性格については検討を要する。上述の官道関連遺構に平行するSD050がどのような関係にあったのか不明瞭だが、東側溝と同様にSD050で底面にピットが連続して確認されていることから、同じ意味を持っていた可能性も考えられる。これらの痕跡は牛などが歩いた痕跡に類似することも指摘され1)、今後の道路遺構を考える上で貴重な所見である。また、官道の東側に4mほどで急に落ち込む流路(SX010)があり、出土遺物から官道の溝の遺物と同時期と考えられ、官道使用時には、道路脇に湿地のような流路が存在した可能性も考えられ、丘陵と湿地に挟まれた状態で官道が通り抜けるという当時の景観が想像できる。

また、官道関係の遺構を除くと、中世から近世の遺構が多くみられる。特に中世後半～近世初頭の遺構や遺物が多くみられることから、付近一帯の池尻や野田集落がこの頃から形成され始めた可能性が考えられる。

（宮崎亮一）

註

1)東和幸(2003)「波板状凸凹面牛馬歩行痕説再論」『研究紀要　縄文の森から 創刊号』 鹿児島県埋蔵文化財センター

日焼遺跡　第9次調査

図123.日焼遺跡第9次調査　遺構配置図(S=1/200)

1.基本土層

遺構の残存状況は、極めて悪く。多くは上位に建築されていた現代の建物基礎や施設に関わるものであった。上位より0.5m ～ 0.7m程の整地土としてのマサ土があり、その下位に0.4mほどの黒灰色土、さらに下位に遺物包含層としての黄灰色土が0.4mほど堆積していた。

2.遺構

1）柵

9SA005（図124）

調査区北西部にて検出したもので、調査区東方へ展開する掘立柱建物の可能性も残す。各柱間は、1.76m・1.93mと一定せず、柵の可能性が高いと判断し報告した。

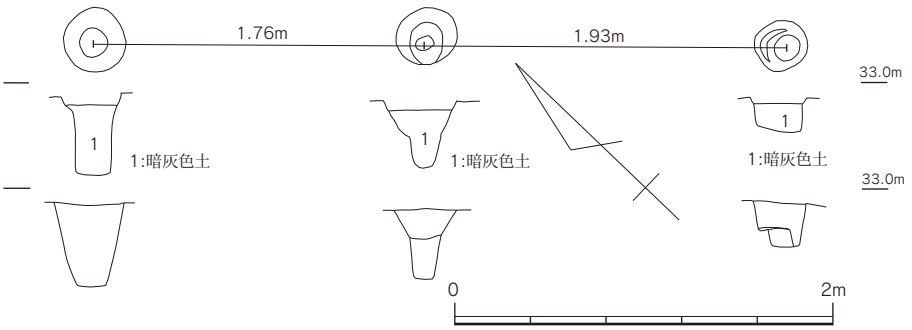


図124.9SA005遺構実測図（S=1/40）

2）溝

9SD010（図123）

調査区北西部にて検出した溝で、北東から南西へ調査区を斜向している。溝幅約0.4m、残存する深さ0.08mと残存状況は極めて悪い。黒色土が堆積し、出土遺物からは現代の堆積と考えられる。

9SD015（図123）

調査区東部に検出した遺構で、遺構状況としては土坑状を呈しているが、周辺状況から遺構残存状況が悪いものと判断され、ここでは溝遺構として考えた。長軸長3.0m、幅0.73m、残存する深さ0.11mを測る。遺構堆積土は灰色土で、出土遺物からは古代のものと考えられるが、堆積土質から考えると現代のものとした方が蓋然性は高いと考えられる。

3）その他の遺構

9SX004（図123）

調査区北西部に検出した小穴状の遺構で、直径0.3m内外、残存する深さ0.28mを測る。灰色土が堆積し、現代の遺物を出土しているが、中世期の中国産陶器と考えられるものが出土している。

9SX011（図123）

調査区西部にて検出した小穴群で、直径0.3m内外、残存する深さ0.2m前後を測る。堆積土はいずれも灰色土で現代のものと考えられる。（中島恒次郎）

3.遺物

1）溝

9SD010（図125）

陶器

擂鉢(1)　全体に黒茶色の釉で薄く施釉され、外面口縁部付近には釉だれがみられる。内面には7条を一単位とする擂目と、口縁端部には注ぎ口と考えられる凹み部分を確認できる。素地は黒茶色で緻密。小破片のため口径は復原していない。

9SD015（図125）

須恵器

高坏(2)　破片上部に坏部との接合のための回転ナデがみられることから、坏部接合付近の脚部破片と考えら

れる。内外面ともに淡青灰色で、断面中心は淡灰褐色を呈す。胎土は緻密で焼成、還元も良好。

2)その他の遺構

9SX004（図125）

中国陶器

水注(3)　注ぎ口部分のみの破片で、施釉されない。胎土は緻密。穴部分は砂粒の動きから、外から内の方向へ成形したと考えられる。特定の器形に限定できないものの、素地特徴からB群に該当する。

9SX011（図125）

土製品

土鈴(4)　高さ3.1cm幅2.5cmで、上部には縦6㎜幅4㎜の穴がみられ、一方から穿孔されたと考えられる。鳴り物もあったと考えられるが、消失している。

3)土層

表土(図125)

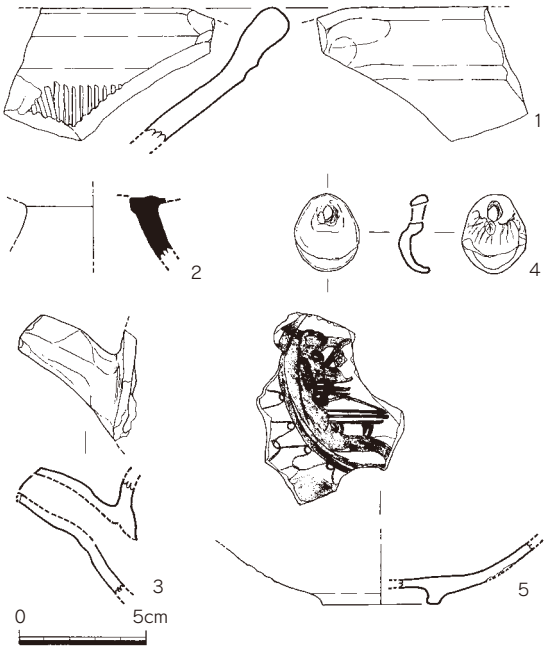


図125.出土遺物実測図(S=1/3)

染付磁器

皿(5)　内面には暗青色の呉須の文様が描かれ、全面には釉剥ぎされている畳付けを除き、青味色のある透明釉が施され、内外面ともに細かな貫入がみられる。素地は白色できめ細かい。また、高台内面には複数の細かな砂粒の付着が確認できる。

（久味木理恵）

4.小結

多くが現代の建築物に関わる痕跡で、遺構として認識できたものは僅かであった。しかし、遺物・遺構状況からみて、当該調査区の西にある日焼丘陵が当該地まで延びていた可能性を示唆しており、この点から西側に隣接する日焼遺跡第5次調査にて検出された官道は、丘陵開削を行って施工されたことが分かる。

（中島恒次郎）

表6.日焼遺跡　第9次調査　遺構一覧

S番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	時　期	地区番号
1	9SD001	溝	黒色土		現代	F11 他
2	9SD002	溝			現代	F10 他
3	9SX003	窪み	灰色土		室町	E11
4	9SX004	窪み	灰色土		現代	K17
5	9SA005	柵列	灰色土		不明	L17
6	9SX006	小穴	黒色土		現代	F16
7	9SD007	溝	明灰色砂質土		現代	K16
8	9SK008	土坑			不明	K18
9	9SX009	窪み	黒色土		現代	K18
10	9SD010	溝	黒色土		現代	I19
11	9SX011	小穴群	灰色土		現代	J18
12	9SD012	溝	黒色土		現代	H17
13	9SX013	小穴	黒色土		現代	G19
14	9SX014	小穴	灰色土		不明	I17
15	9SD015	溝	灰色土		古代	I8
16	9SX016	小穴	灰色土		近世以降	I17
17	9SX017	小穴群	黒色土		室町期以降	F9
18	9SX018	窪み	黒色土		現代	L7
19	9SX019	小穴群	黒色土		現代	H10
20	9SD020	溝			不明	H11
21	9SD021	溝	黒色土		現代	H11
22	9SD022	溝	黒色土		現代	I10
23	9SX023	窪み			不明	G10

土層順　　表土　現代　　白色土　現代

日焼遺跡　第10次調査

1.基本土層

耕作土と床土を除去すると0.4m程で遺構面に達する。遺構面を覆うように0.01m前後の薄い砂質土が全体的に広がっている。東側は道が通っており、調査地北側で約1.4mの落差があり、大きく削平されていることがわかる。西側は高さ1.7mほど石垣が積まれ、住宅が建っている。調査地の地山にトレンチを設定し、1 ～ 1.5mほど掘り下げたところ、砂層、シルト層、粘質土層の互層が西側から緩やかに傾斜しながら堆積することが確認された。

2.遺構

1）道路関連遺構

a.道路遺構

10SF040（図131）

S-4を挟んでS-40・45の番号を付して調査したが、同一遺構のためSF040として報告する。盛土は、厚さ0.4 ～ 0.5m程確認でき、その最下層と考えられる灰褐色粘土は薄い部分もあるが、0.1cm程の厚みで全体に広がっている。その上面には橙色系の土質の盛土がなされている。盛土中には炭や粘土ブロックが混じっているが、遺物の包含量は少ない。

これらの土質や盛土のために地盤の堆積層を削り込み、基礎成形を行っていることからなどから、自然堆積ではなく人工的な整地と推測され、官道の推定ラインに位置することからこの人工的な整地は道路の基盤である盛土と考えられる。ちなみに路面ついては未確認である。

b.波板状痕跡

10SX050（図132）

ピット列でS-039・041・042・043・044の番号を付して調査したが、同じ性格の遺構と考え、SX050として報告する。大きさは0.2m×0.5m ～ 0.7m×1mの長楕円形を呈している。深さは0.05 ～ 0.15m程を測る。等間隔ではないが、0.2 ～ 0.4mの間隔で若干蛇行しながらも列状に並んでいる。SD001との距離は約0.5 ～ 3mである。埋土はピットの上半部が暗茶褐色土で、下半が暗灰色土であった。ピットによっては砂礫や粘質が多い部分もある。SF040の盛土の下層全面に広がる灰褐色粘土の直下から確認されているため、盛土の直前に掘り込まれたと推測される。

2）溝

10SD001（図129・131）

検出長37.5m、最大幅6.4m、深さ約0.3 ～ 0.4mを測る。方位はおよそN33° 1′ W。南側に向かって先細りになって、消滅している。耕作土と床土の下に茶灰色の粗い砂層があり、その下に黒褐色土が0.2mほど厚く堆積している。黒褐色土を除去するとやや砂質の淡灰色土があり、そこに径0.04 ～ 0.1m前後のピットが多数見られる。深さは0.05 ～ 0.12mほどで、これが人為的なものなのか甌穴なのか判断は難しいが、規則性はなく広範囲に広がる状況から植物痕の可能性も考えられる。この茶灰色砂・黒褐色土・淡灰色土の3つの土層の境は明瞭である。北側では茶灰色砂を除去した段階でも黒褐色土に甌穴状に砂が入り込んでいた。黒褐色土を除去すると灰色砂で北側では粘土が堆積している。最下層は白っぽいとても固い埋土で、僅かに遺物が混じる。これは土質と遺物からSD001とは別遺構とみられ、SD020・035として報告する。

西岸はなだらかで、明瞭な屈曲なく立ち上がっていき、東岸は黒褐色土を除去した段階では西岸と同様であるが、淡灰色土以下は、一部埋土で見るような砂層が黄色土の下に潜り込んでいるようにも見えるため、非常に埋土との境界がわかりづらい。黄色土の岸が明瞭に確認できたところでも、それに覆っている埋土が黄色土に淡灰色土が若干混じったような一見地山とも思えるもので、平面的に判別することが非常に難しい。よって東岸と思っているところでも地山ではない可能性も考えられる。東岸の立ち上がりは微妙だが埋土の堆積状況

図126.日焼遺跡第10次調査　遺構配置図（10SD001除去後）（S=1/200）

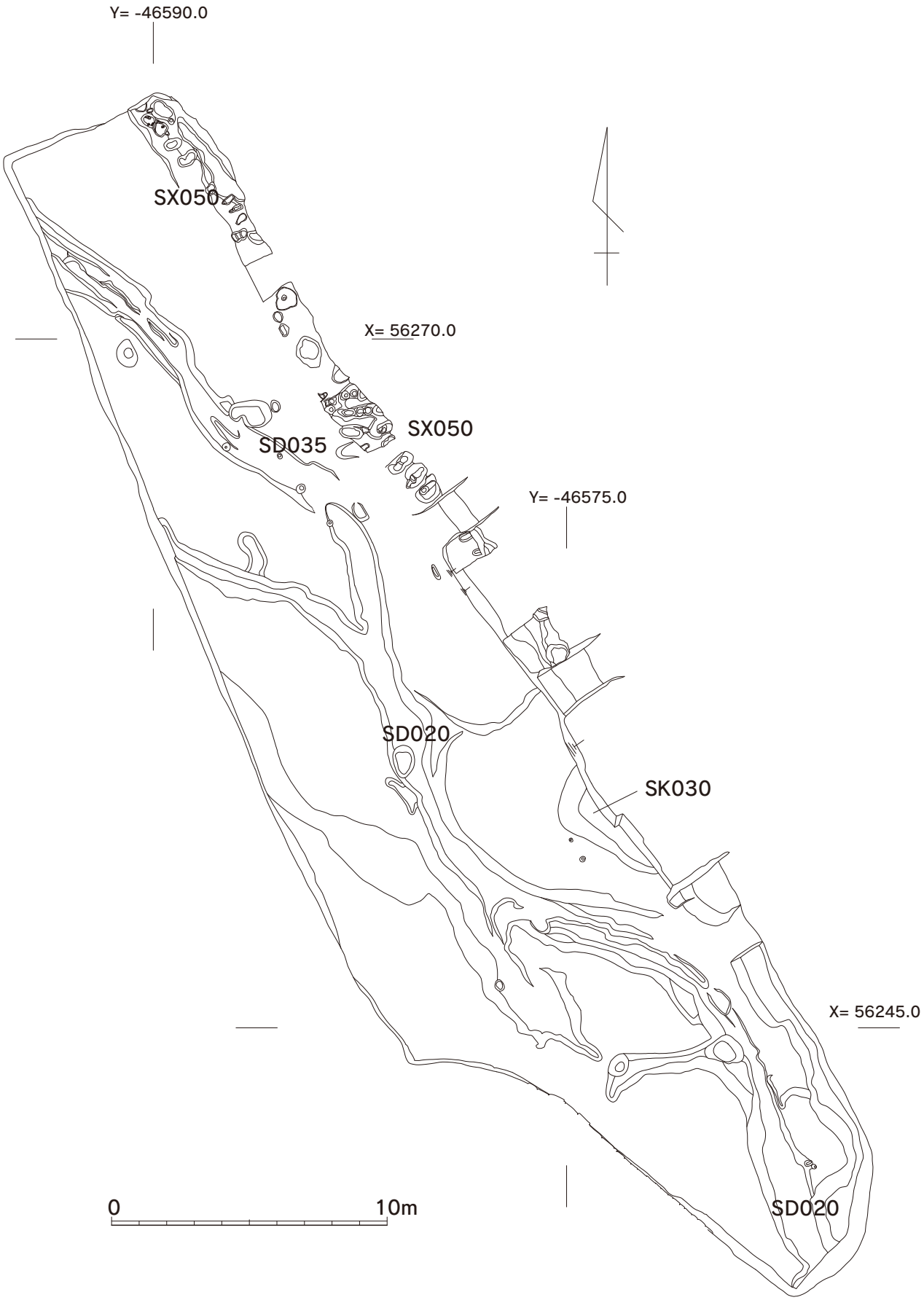


図127.日焼遺跡第10次調査　遺構配置図（完掘後）（S=1/200）

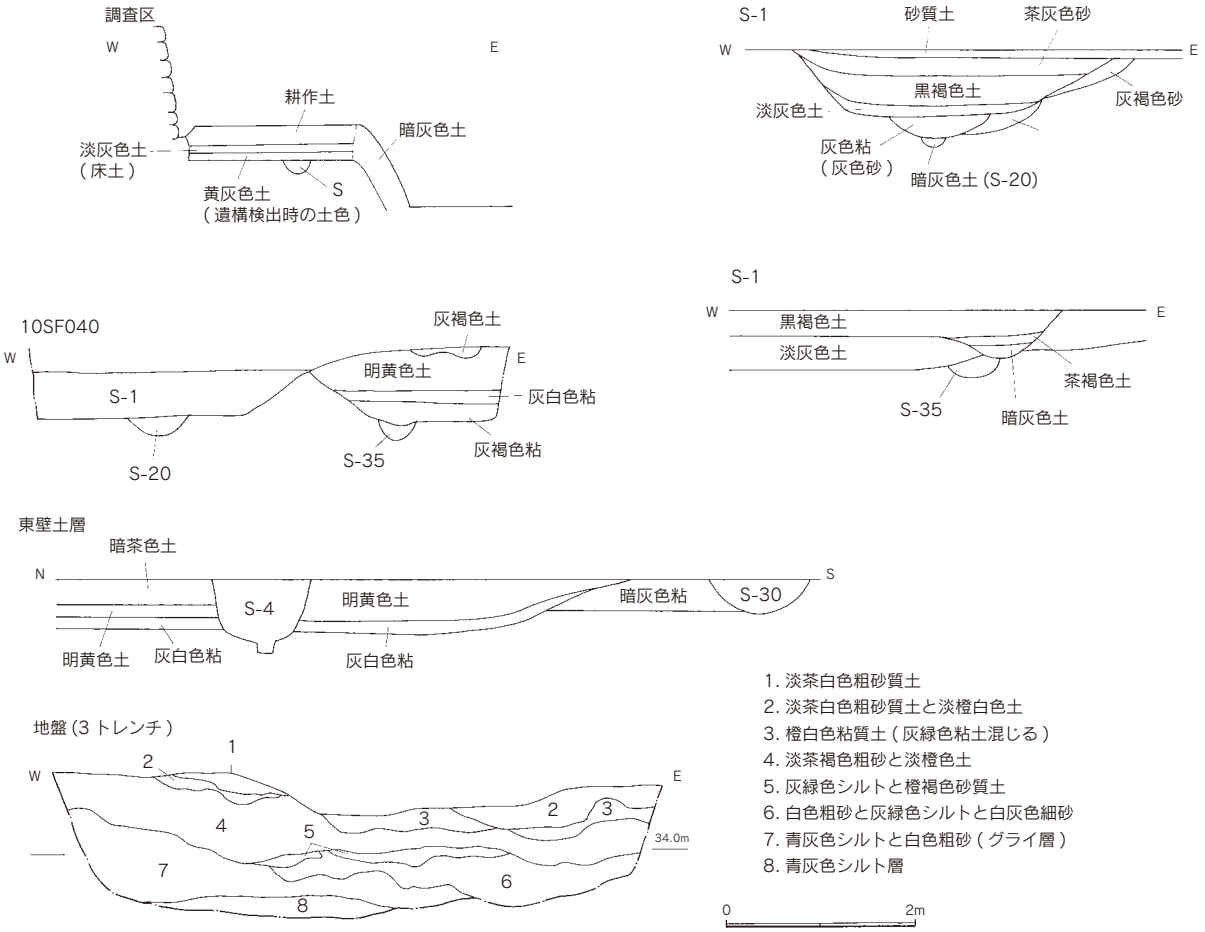


図128. 10SD001・SF040模式図および地盤実測図（S=1/80）

は分層が明瞭にできる。H7付近の淡灰色土を除去した底面には、粗い砂が甌穴状にめり込んでいる。また、淡灰色土の除去途中に北側に流れる明瞭な砂粒の動きを確認した。北側に進むにつれて若干レベルが下がっていることもあり、埋土は薄くなっている。

10SD005（図129）

SD001を横切るように切っている溝で、検出長9.7m、幅1.2 ～ 1.8m、深さ0.1 ～ 0.25mを測る。方位はE19°22′N。断面形状は緩やかなU字形をしていて、埋土は大きく暗灰色土と淡灰色砂質土に分けられるが、全体として砂と土の互層になっていて流水があったことがわかる。

また、調査区西側が高いこと、溝底レベルが東側に向かって下がっているため、山側からの流水であったことがわかる。

10SD010

SD001の東側に並ぶ溝で、SD019と平行する。部分的に途切れているが、全長8.4m、幅0.45m前後、深さ0.02 ～ 0.08mを測る。方位はN35°42′W。埋土は検出時点では耕作土のような灰色土が部分的に混入している状態であるが、それ以外は黄灰色土で、その砂質が地山より目立っている。

10SD019

SD010と平行する溝。全長3.05m、幅0.27 ～ 0.5m、深さ0.03 ～ 0.07mを測る。SD010との距離は1.3mである。

10SD020（図130）

調査区を蛇行する溝で、当初SD001の最下層として掘り下げていたが、南側に行くほどSD001と異なる法線を描き始めたことや遺物が少量ながらやや古い傾向がみられたため、調査途中で別遺構と判断した。直線で検出長36.1m、幅0.7 ～ 2.3m、深さ0.2 ～ 0.8mを測る。

埋土はSD001と切りあっていない調査区南側では、周囲の地山とは明瞭に区別ができるほどで、黄灰色土や

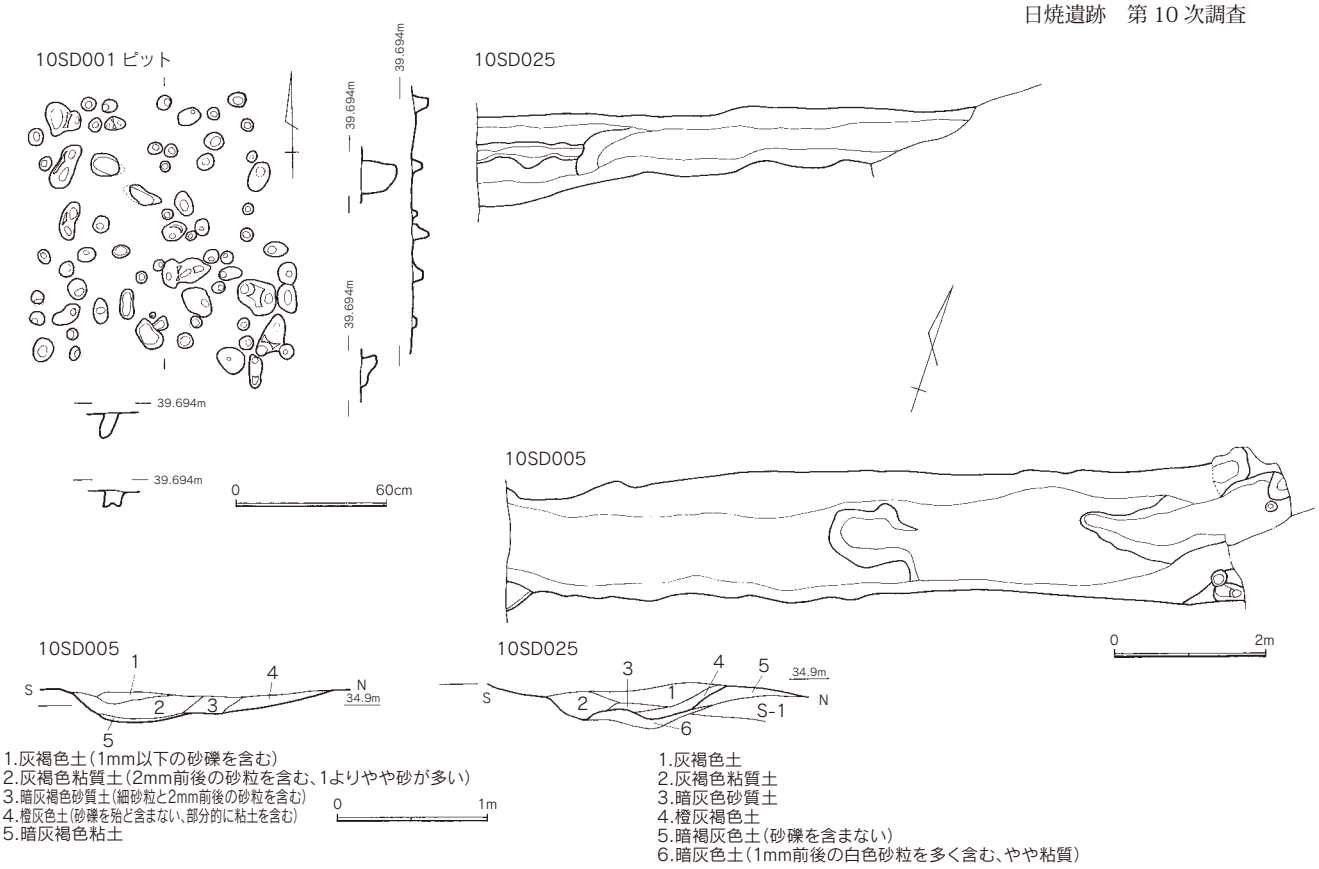


図129.溝遺構実測図（S=1/30、1/50、1/100）

茶褐色土の濁ったものである。これらの埋土を除去すると淡灰色土が厚く堆積し、灰色砂層になる。砂層と淡灰色土との境は比較的明瞭であるが、黄灰色土や茶褐色土と淡灰色土との境は明瞭とは言い難い状況である。灰色砂を除去していくとSD020の底面中央付近に灰色砂とほぼ同質だが、やや硬い帯状のプランが確認できる。その帯状部分の周囲にも砂が入った不定形なピットや溝が確認できる。この帯状の埋土はSD001の最下層で確認した所では非常に硬かったが、南側では部分的な硬化面はあるものの北側ほどでもない。F4付近では炭や焼土が北側から流れ込んだ状況が確認できた。

10SD023

調査区の東端を走る溝で、全長15.9m、幅0.3 ～ 0.4m、深さ0.1m前後を測る。N29° 54′ W。埋土は灰褐色土である。SD001と平行する溝であるが、調査区の敷地の長辺と平行する溝と言った方が適当かもしれない。官道や現在ある道路と同じく、いつの時代かの道路側溝や境界を意味している可能性も考えられる。

10SD025（図129）

SD001を横切るように切っている溝で、SD005に平行している。検出長6.6m、幅0.7 ～ 1.2m、深さ0.13 ～ 0.23mを測る。方位はE22° 5′ N。断面形状はSD005と同じく緩やかなU字形をしている。埋土は暗灰色土だが、SD005ほど砂質は目立たない。

10SD035（図130）

若干蛇行した南北方向の溝で、直線で検出長21m、幅0.95 ～ 1.8m、深さ0.2m前後である。南端部でSD020と接合するが、埋土はSD020の上にのっている。底面は平坦ではなく、若干溝状になり、部分的に窪んでいるところもある。埋土はSD020と同様で、灰色系の砂質土で硬くしまっている。特に溝の中央部は帯状に硬化している。

3）土坑

10SK015

大きさは1.8m以上×4.75m以上、深さ0.75m。埋土は暗灰色砂質土で一部炭が混じっている。底面は凸凹している。

10SK030

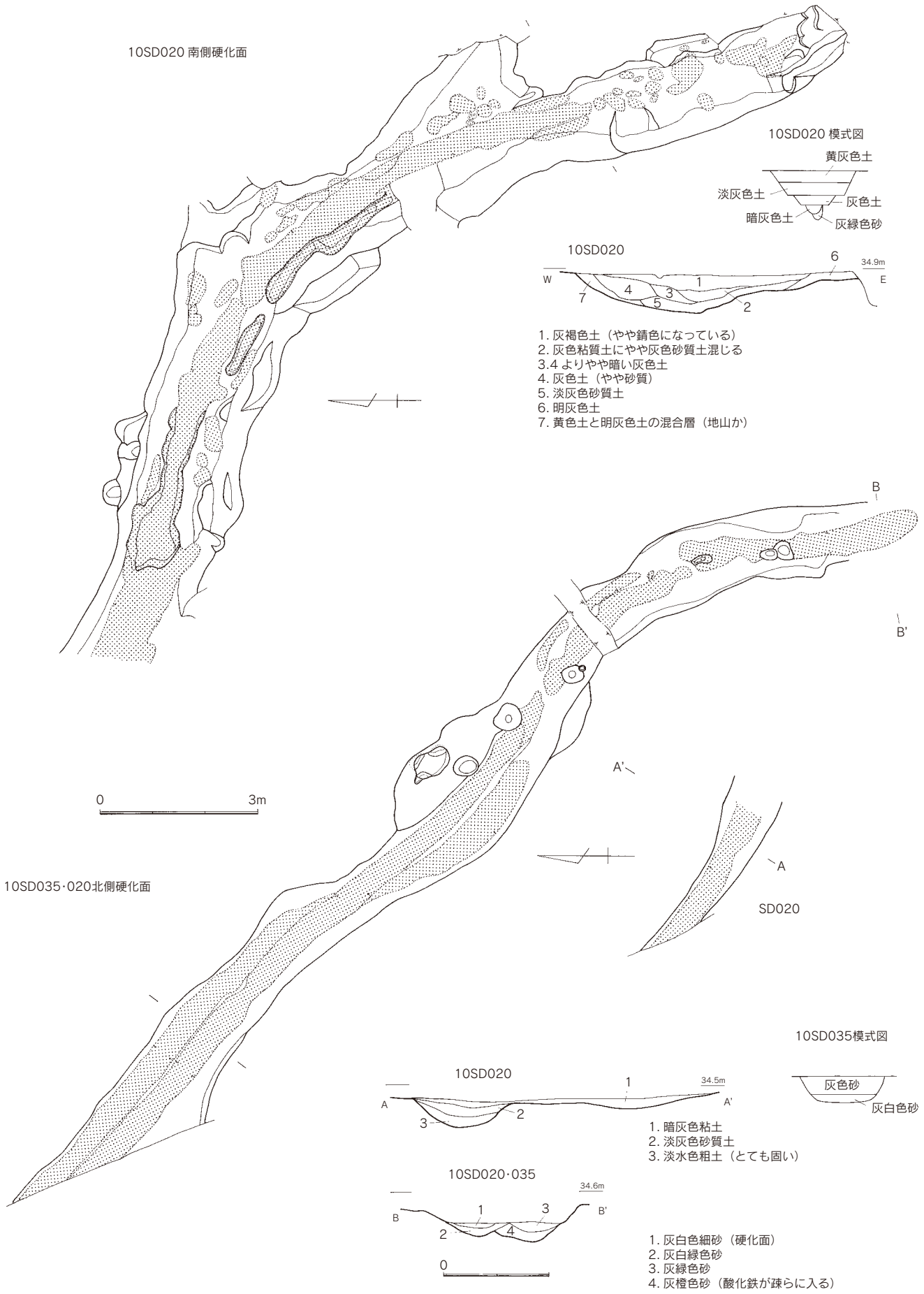
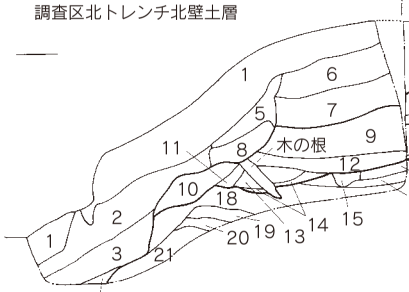


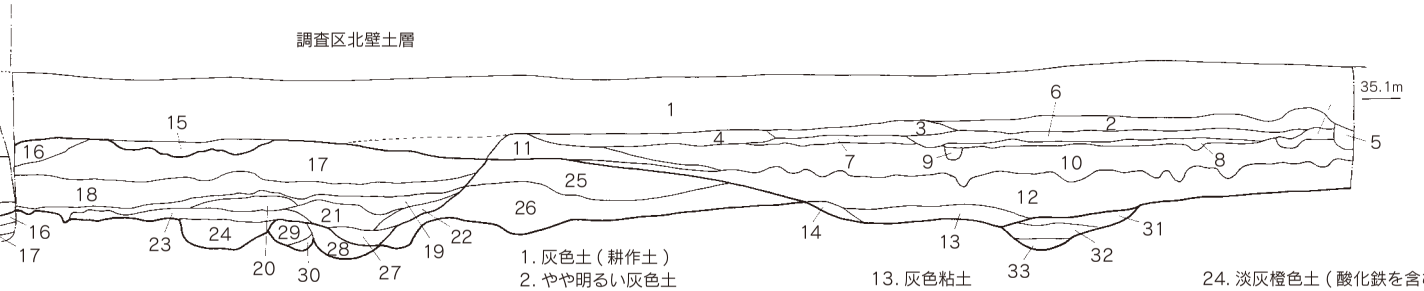
図130.10SD020・035硬化面遺構実測図(S=1/50・1/100)

調査区北トレンチ北壁土層



1. 黒褐色土 (表土)
2. 黒褐色土と
淡灰色土の混合層
3. 灰茶色土
4. 暗橙色土
5. 暗灰茶色土
6. 黒灰色土
7. 橙灰色土
8. 黄白色土 (白色砂礫を含む。
9 層に似るが締りなし)
9. 灰黄色粘質土 (24 層)
10. 明灰黄色粘質土 (9 層よりも礫が少なく
粘土ブロックを含んだ締まった層)
11. 淡黄白色土
12. 灰褐色粘土

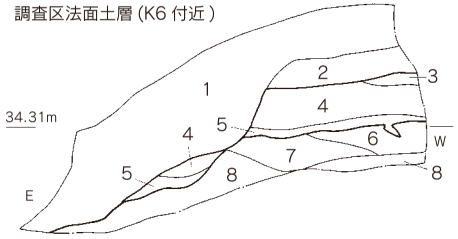
調査区北壁土層



13. 灰褐色土 (砂礫を多量に含む。
上層に土器片アリ)
14. 淡茶灰色土
15. 灰色粘質土と明橙色土の混合層 (地山)
16.15 層と同じだがやや灰色粘質土が多い (地山)
17. 明橙色土 (地山)
18. 明橙色シルト (地山)
19. 灰褐色砂 (13 層より砂粒が大きい)(地山)
20. 明灰色土 (地山)
21. 淡青黄色シルト (地山)

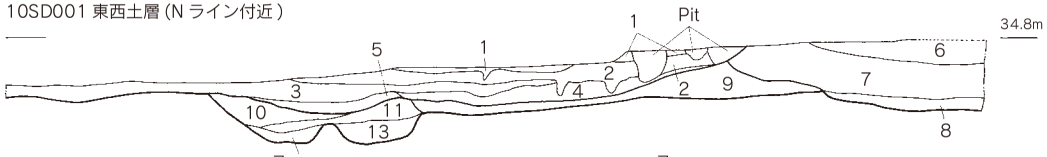
1. 灰色土 (耕作土)
2. やや明るい灰色土
3. 灰褐色土 (やや砂粒が大きいが
砂礫まではない)
4. 灰褐色土 (3 より砂粒が目立たない)
5. 黄白色砂
6. 灰白色砂質土 (下ほど茶色のサビが多い)
7. 淡灰白色細砂
8. 淡黄白色細砂 (上ほど茶色のサビが多い)
9. 灰白色土混じりの黒褐色土
10. 黒褐色土
11. 黄灰色土と黒褐色土の混合層
12. 明灰色粘質土 (黄色土混じり)
13. 灰色粘土
14. 淡灰色砂質土と黄灰色土の混合層
15. 淡黒色土 (締まりなし)
16. 黄色土
17. 橙灰色土 (黄白色ブロックを含み、
固くしまる)
18. 明橙黄色土 (礫が少ない締まった層)
19. 灰褐色粘土
20. 暗灰色土 (締りがなく礫を含まない)
21. 灰青色粘土
22. 暗灰黄色土 (やや粘質)
23. 灰橙色土 (酸化鉄を含む礫が少ない)
24. 淡灰橙色土 (酸化鉄を含む)
25. 黄白色土 (ややシルト質、砂粒を多く含む)
26. 黄褐色土 (砂粒を多く含む)
27. 灰緑色土 (やや砂質で礫を含まない)
28. 濃灰色砂 (S-35)
29. 淡灰白色砂 (S-35)
30. 灰青色砂 (S-35)
31. 暗灰色粘土
32. 淡灰色砂質土
33. 淡水色粗土 (とっても固い)

調査区法面土層 (K6 付近)



1. 黒褐色土 (表土)
2. 暗茶褐色土 (S-5 の埋土)
3. 灰黄色粘質土
4. 明橙黄色土
5. 灰褐色粘土
6. 灰橙色砂質土 (地山)
7. 橙色シルト (地山)
8. 淡茶色砂 (地山)

10SD001 東西土層 (N ライン付近)



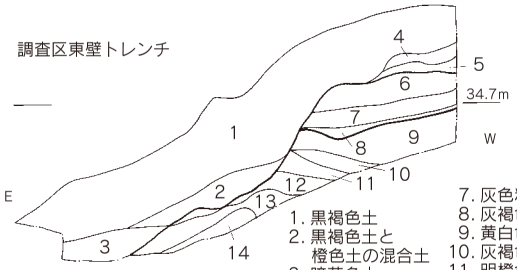
1. 黒褐色土
2. 淡灰色土 (土器多量に含む)
3. 淡灰褐色土 (土器多量に含む)
4. 暗灰色土 (土器・炭少量含む)
5. 灰褐色粘質土
1～5 は S-1
6. 明橙色粘土
7. 橙灰色土 (礫多く含む)
8. 灰褐色粘土
9. 黄褐色粘質土
10. 暗灰色砂質土 (粘土ブロック多め)
6～8 は S-40
11. 暗灰色砂質土 (粘土ブロック少なめ)
12. 灰色砂質土
13. 灰白色砂質土
10～13 は S-35

取り上げ土層との対応
S-1　黒褐色土…1
淡灰色土…2・3
暗灰色土…4

S-35 灰色砂…10・11
灰色土…12
灰白色土…13

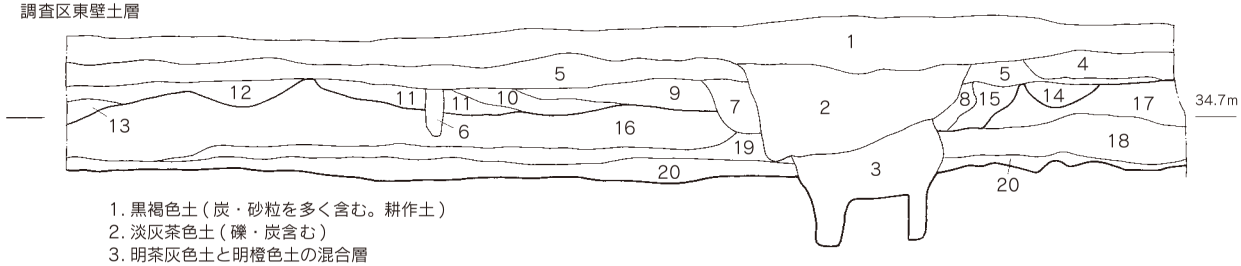
S-40 暗茶色土…5・6
灰白色粘土…7

調査区東壁トレンチ



1. 黒褐色土
2. 黒褐色土と
橙色土の混合土
3. 暗茶色土
4. 黒白色土
5. 灰茶色土
6. 明橙黄色土
7. 灰色粘質土
8. 灰褐色粘土
9. 黄白色土 (地山)
10. 灰褐色砂 (地山)
11. 明橙色シルト (地山)
12. 灰褐色砂 (地山)
13. 淡青黄色シルト (地山)
14. 暗灰茶色砂 (地山)

調査区東壁土層



1. 黒褐色土 (炭・砂粒を多く含む。耕作土)
2. 淡灰茶色土 (礫・炭含む)
3. 明茶灰色土と明橙色土の混合層
4. 黒白色土 (砂礫を多く含む)
5. 灰白色土 (砂礫と炭の小片を多く含む)
6. 暗茶色土 (礫を含むが 11・20 層より少ない) ピットか
7. 灰黄色土 (5mm 程の礫を多く含む　しまりのない)
8. 黄灰色土 (黄色土と灰色土の混合土)
9. 明褐色土 (砂粒を多く含む　炭・黒褐色土ブロック少量)
10. 褐色土 (炭、黒褐色土多く含む)
11. 暗褐色土 (炭微量　砂粒・黒褐色土ブロック大を多く含む)
12. 暗灰黄色土 (砂粒を多く含む)
13. 明橙色土 (砂粒・炭多く含む　黒褐色土ブロック少)
14. 暗灰褐色土 (21 層に比べ灰色味が強い　ピットか)
15. 黄色土 (白色礫 5mm と炭を多く含む)
16. 橙灰色土 (砂粒・炭・黒褐色土ブロック多く含む)
17. 橙灰色土 (角礫 25mm～5.0mm を多く含む　炭片を多量に含む)
18. 明橙黄色土 (橙色粘土ブロック
10cm 大を含む　固くしまった層)
19. 明黄褐色土
20. 灰褐色粘土 (砂粒を全く含まない層)

0　2m

図131.10SD001、020、035、SF040、調査区土層実測図(S=1/50)

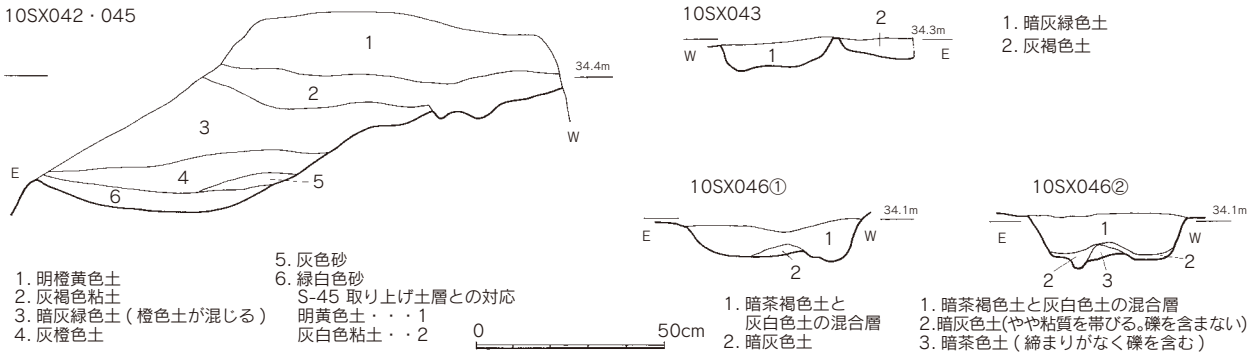


図132.波板状圧痕土層実測図(S=1/20)

調査区東端で検出された土坑で、南北5.2m以上、東西1.6m以上、深さ0.68mを測る。遺物が少なく、埋土は自然堆積状況を示している。

3.出土遺物

1)道路関連遺構

10SF040暗茶色土(図138)

須恵器

坏蓋(2)　復原口径12.6cm、器高3.4cm。外面頂部は雑なナデ調整、下半は回転ナデでヘラ記号を施す。内面回転ナデとナデ。還元・焼成良好で、色調は淡茶灰色～灰色を呈する。

坏c（3）　内面底部ナデ、その他は回転ナデ。色調は淡灰色や灰色を呈する。

10SF040（045)明黄色土(図138)

須恵器

坏蓋(4)　内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリでヘラ記号が施される。還元・焼成良好で、色調は淡灰色や灰色を呈する。

石製品

石鏃(5)　長さ2.0cm、幅1.5cm、厚さ0.45cm。姫島産。

10SX050（図138）

須恵器

坏蓋(1)　外面頂部は回転ヘラ切りの後とても雑なナデで、下半も雑な回転ナデ。ヘラ記号も施す。焼成・還元良好で淡灰色や淡茶灰色を呈する。S-41より出土。

2)溝

10SD001茶灰色砂(図133)

須恵器

蓋3（1）　口縁端部を丸く曲げる。外面上半部は回転ヘラ切りの後ナデ。

坏c（2・3）　若干外開き気味の高台を貼付する。内面底部は回転ナデのあとナデ。復原高台径9.8cmと10.6cm。

壺b（4）　外面下半は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ。

鉢(5)　丸みのある底部で、回転ヘラ切りのあとナデで、板状圧痕を残す。復原底径11.2cm。

10SD001黒褐色土(図133・134)

須恵器

蓋c3（6・7）　2点ともツマミは欠損するが、接合のための回転ナデ痕跡が頂部に残る。焼成・還元良好。6は口縁端部を三角形に仕上げ、外面上半部はヘラ切りのあと簡単なナデを施す。復原口径13.6cm。7は外面上半部が回転ヘラケズリ、復原口径14.4cm。

蓋c（8・9）　8はボタン状のツマミ。9は擬宝珠を貼付する。

蓋3（10 ～ 13）　10は外面上半部がヘラ切りのあとナデを施す。復原口径13.6cm。11は外面上半部が回転ヘ

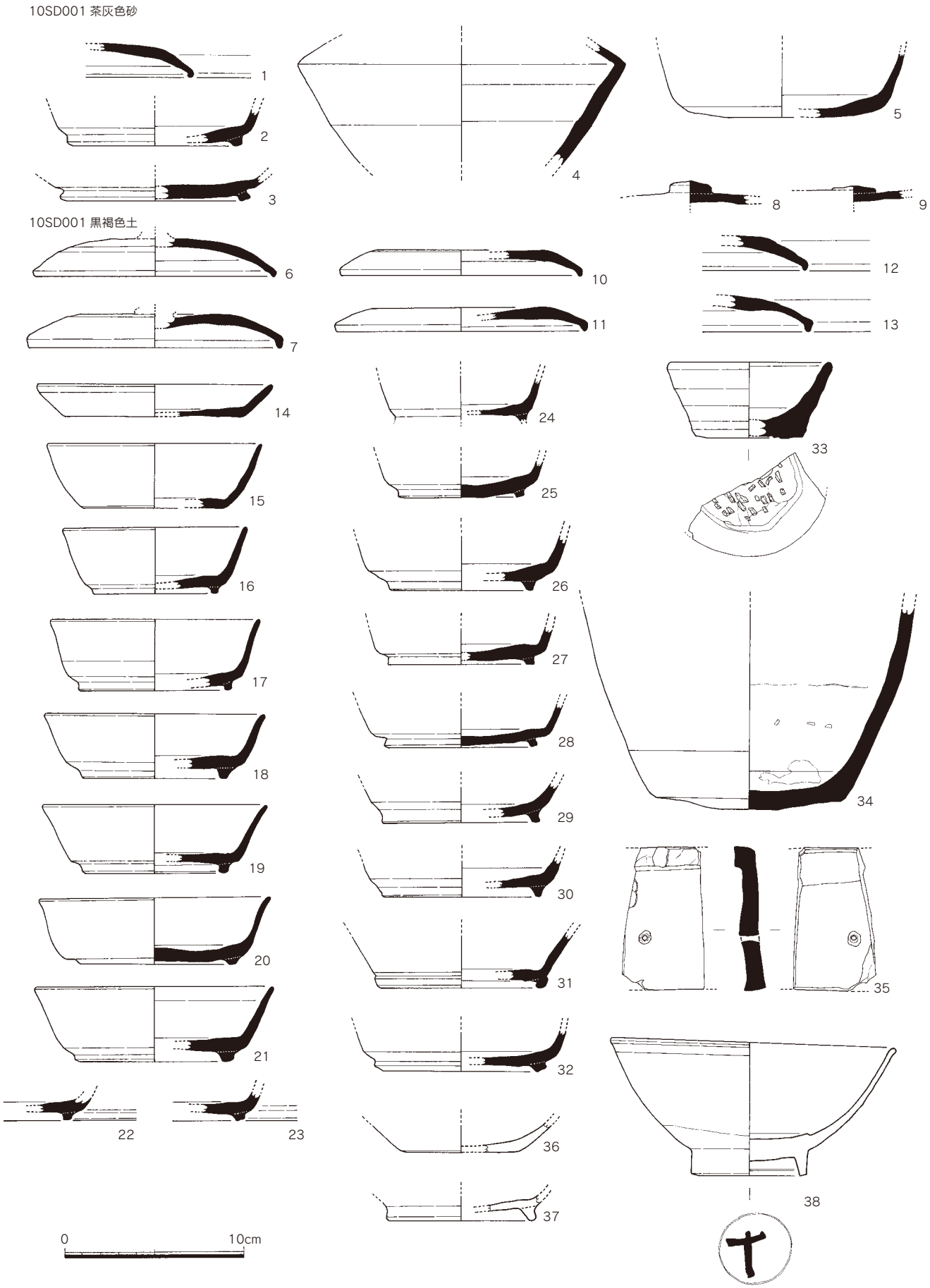


図133.10SD001出土遺物実測図(1)（S=1/3）

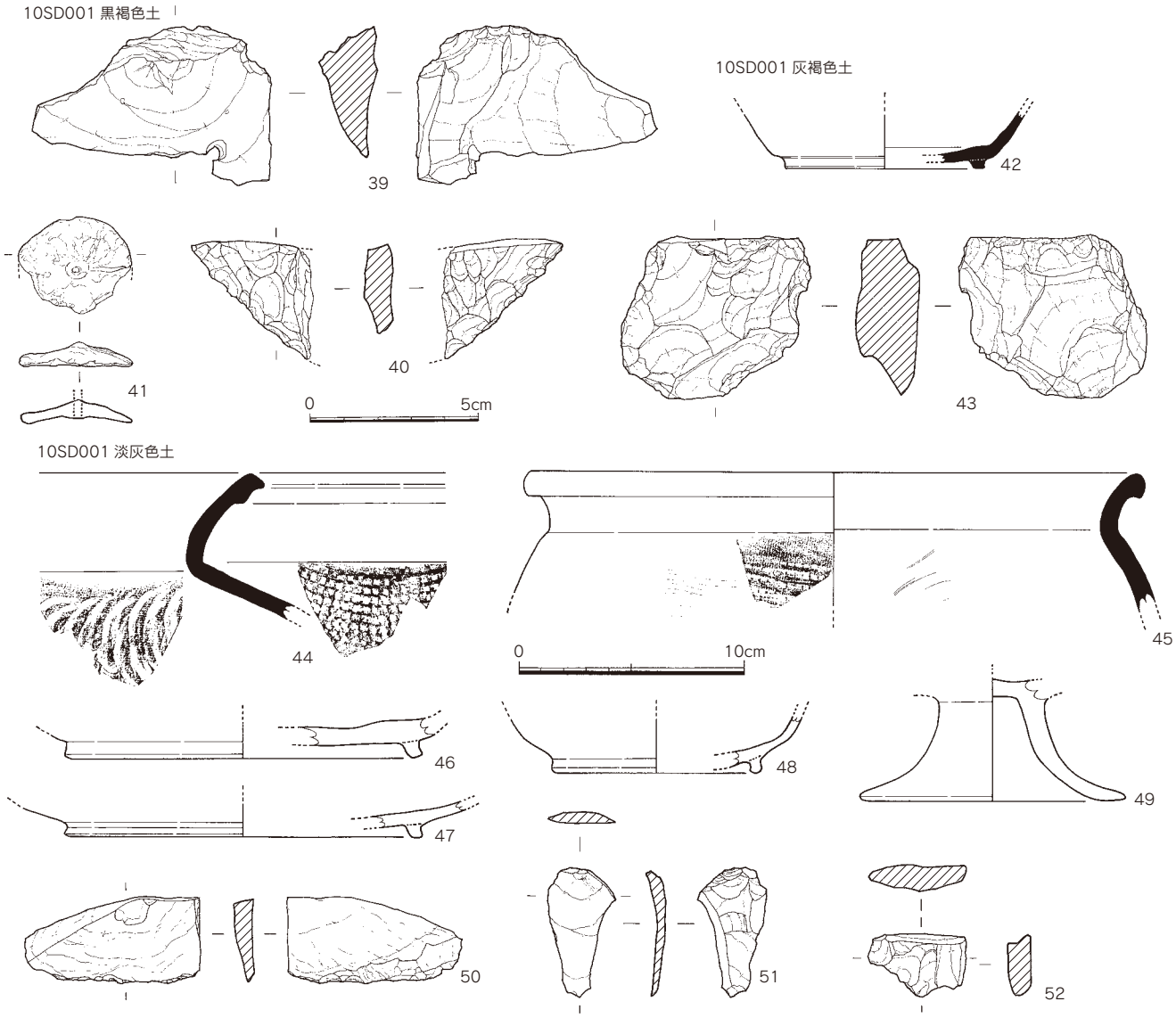


図134.10SD001出土遺物実測図(2)（S=石器:1/2、1/3）

ラケズリ、復原口径14.2cm。12・13は外面上半部がヘラ切りのあとヘラケズリを施す。

皿a（14）　外面底部は回転ヘラ切り後ナデ。復原口径13.2cm、器高1.8cm、復原底径10.1cm。焼成・還元良好で暗灰青色を呈する。

坏a(15)　復原口径12.0cm、器高3.6cm、復原底径8.2cm。外面底部は回転ヘラ切りの後雑なナデ。内面底部ナデ、その他は回転ナデ。

坏c（16 ～ 32）　16は他よりやや小振りで復原口径10.3cm、器高3.7cm、復原高台径7.0cm。ほかは復原口径11.7 ～ 13.3cm。高台径は8.1 ～ 9.6cm。内面底部は回転ナデのあとナデ調整。色調はおよそ淡青灰色を呈する。

小鉢(33)　復原口径9.2cm、器高4.2cm、底径6.0cm。内外面は回転ナデのあと一部にナデ調整を施す。外面底部はナデで、全体に工具のようなもので突いた痕跡を残す。

鉢(34)　内面底部に淡褐白色の付着物がみられる。外面下半は回転ヘラケズリ、外面底部は回転ナデのあとナデで工具痕も残る。

用途不明品(35)　0.03cmほどの円孔が1 ヶ所開けられている。側面は欠損するが立ち上がる形状をし、反対側は立ち上がりもなく、平坦にナデ調整される。色調は青灰色である。

土師器

坏a（36）　復原底径6.8cm。摩滅し調整不明。色調は淡褐黄色を呈する。

坏c（37）　復原高台径8.4cm。焼成は良好で、色調は明茶褐色を呈する。

10SD001 淡灰色土

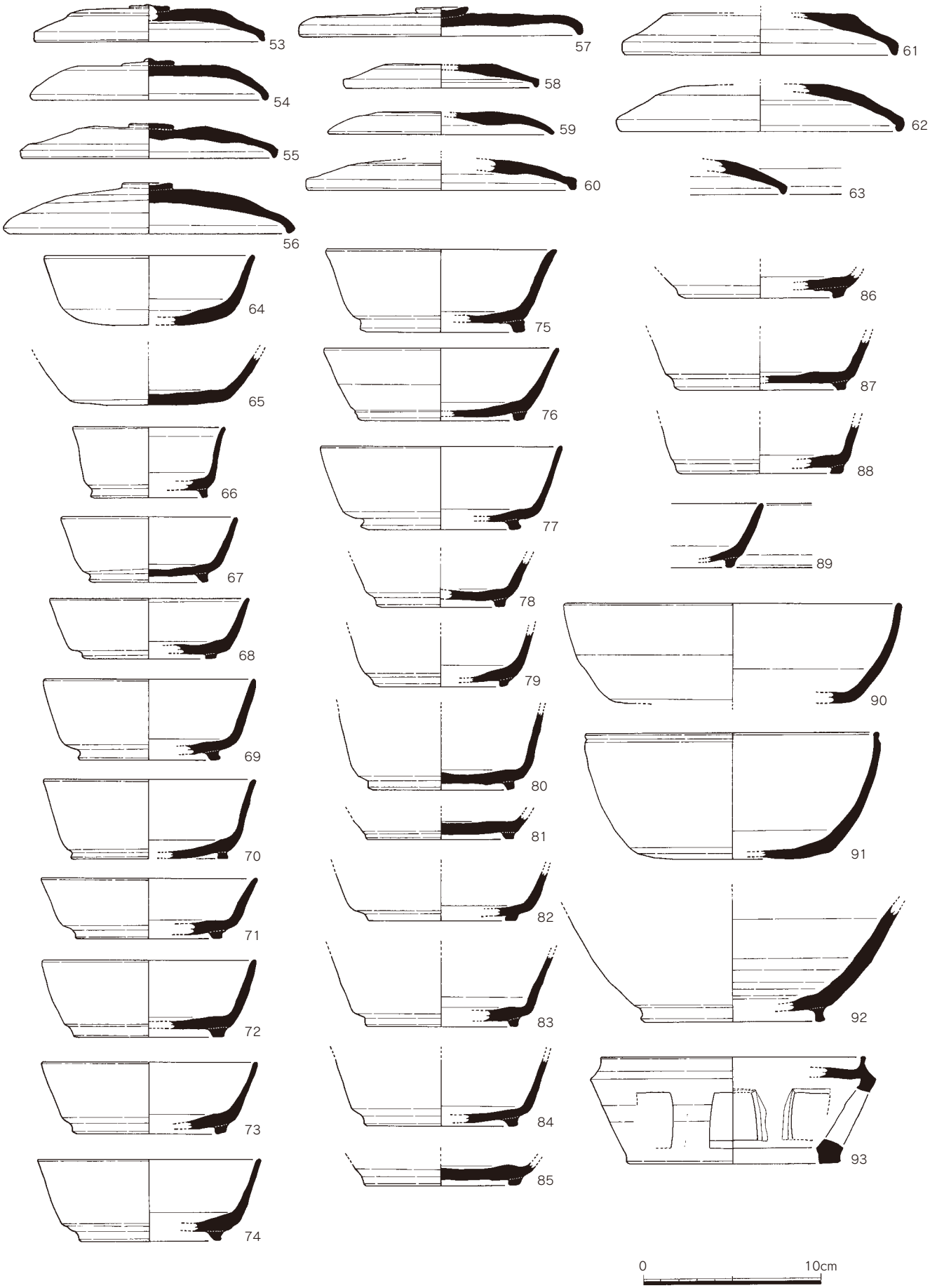


図135.10SD010出土遺物実測図(3)（S=1/3）

白磁

椀（38）　外面底部に「十」の墨書がある。V-3a類。

石製品

剥片（39）　大きさは5.7×7.1cm、厚さ1.2cm。安山岩製。

スクレイパー（40）　半分欠損する。全面細かく調整を行っている。安山岩製。

金属製品

紡錘車（41）　下端の円盤部分で、大きさは4.4×5.0cm。中央には棒部分が僅かに確認できる。

10SD001灰褐色土（図134）

須恵器

坏c（42）　体部はやや直線的に外開きである。内面回転ナデのあとナデ。復原高台径8.8cm。

石製品

石核（43）　大きさは4.8cm×5.6cm、厚さ1.8cm。安山岩製。

10SD001淡灰色土（図134・135）

須恵器

蓋c3（53 ～ 57）　潰れたツマミを貼付し、口縁端部は断面三角形に近い形状を示す。復原口径13.0 ～ 16.0cm。外面上半部は、53は回転ヘラ切りの後ナデ、54・55・57は回転ヘラケズリ、56は回転ヘラケズリの後粗い回転ナデ。

蓋3（58 ～ 63）　58はやや小さく復原口径11.0cm。その他は12.8 ～ 16.2cm。59は歪んでいて口縁端部が丸い部分と折り曲げた部分がある。外面上半部はヘラ切りのあと粗いヘラケズリで一部ヘラ切り未調整である。その他の外面上半部は、58は回転ヘラケズリの後回転ナデ、60・63は回転ヘラケズリ、61は回転ヘラケズリの後回転ナデ、62は回転ヘラ切りの後ナデ。

坏a（64・65）　64は復原口径11.8cm、器高3.9cm。内面には漆が薄く付着する。底部は雑なナデ。65は外面底部に板状圧痕が残る。

坏c（66 ～ 89）　66はやや小さく復原口径8.6cm、器高4.0cm、復原高台径6.6cm。その他は復原口径10.0 ～ 13.6cm。復原高台径6.7 ～ 9.8cm。内面底部は回転ナデのあとナデ。外面底部は回転ヘラ切りで、一部はその後ナデ調整。75は内面に薄く付着物がある。焼成・還元は殆ど良好で、青灰色や暗灰色を呈する。

鉢（90・91）　90は復原口径19.0cm。内外面とも回転ナデ、外面底部はヘラ切り後ナデか。色調は暗青灰色を呈する。91は復原口径16.6cm、器高7.1cm、復原底径11.7cm。口縁部外面には沈線が巡る。外面底部は回転ヘラケズリ、内面底部不定方向のナデ、他は回転ナデ。色調は暗茶褐色を呈する。

壺（92）　内面回転ナデ、外面はヘラケズリのあと回転ナデ。細い高台で復原高台径10.4cm。暗青灰色を呈する。

円面硯（93）　部分的な破片でわかりづらい所もあるが、方形の透かし孔があり、透かし間には線刻が入っている。透かしの数は10個と推測される。底部は塞がってなく大きく開いていたとみられる。直径14.9cm、器高6.0cm、復原高台径12.0cm。

甕（44・45）　44は体部外面に格子叩き、内面には同心円の当て具が残る。45は体部外面叩き、内面にはぼんやり同心円の当て具が残る。復原口径27.4cm。暗茶褐色や黒灰色を呈する。

土師器

皿c（46）　復原高台径15.8cm。焼成不良、摩滅し調整不明。色調は淡褐黄色を呈する。

大皿c（47）　復原高台径15.8cm。焼成不良、摩滅し調整不明。色調は淡橙褐色を呈する。

椀c（48）　復原高台径9.3cm。体部は丸みがあり、色調は灰白色を呈する。内面には朱がかかっている。

高坏（49）　復原底径11.8cm。摩滅し調整不明。色調は淡褐黄色を呈する。

石製品

剥片（50 ～ 52）　50は2.6cm×5.1cm×0.5cm、安山岩製。51は3.8cm×2.1cm×0.35cm、安山岩製。52は1.9cm×2.85cm×0.7cm、安山岩製。

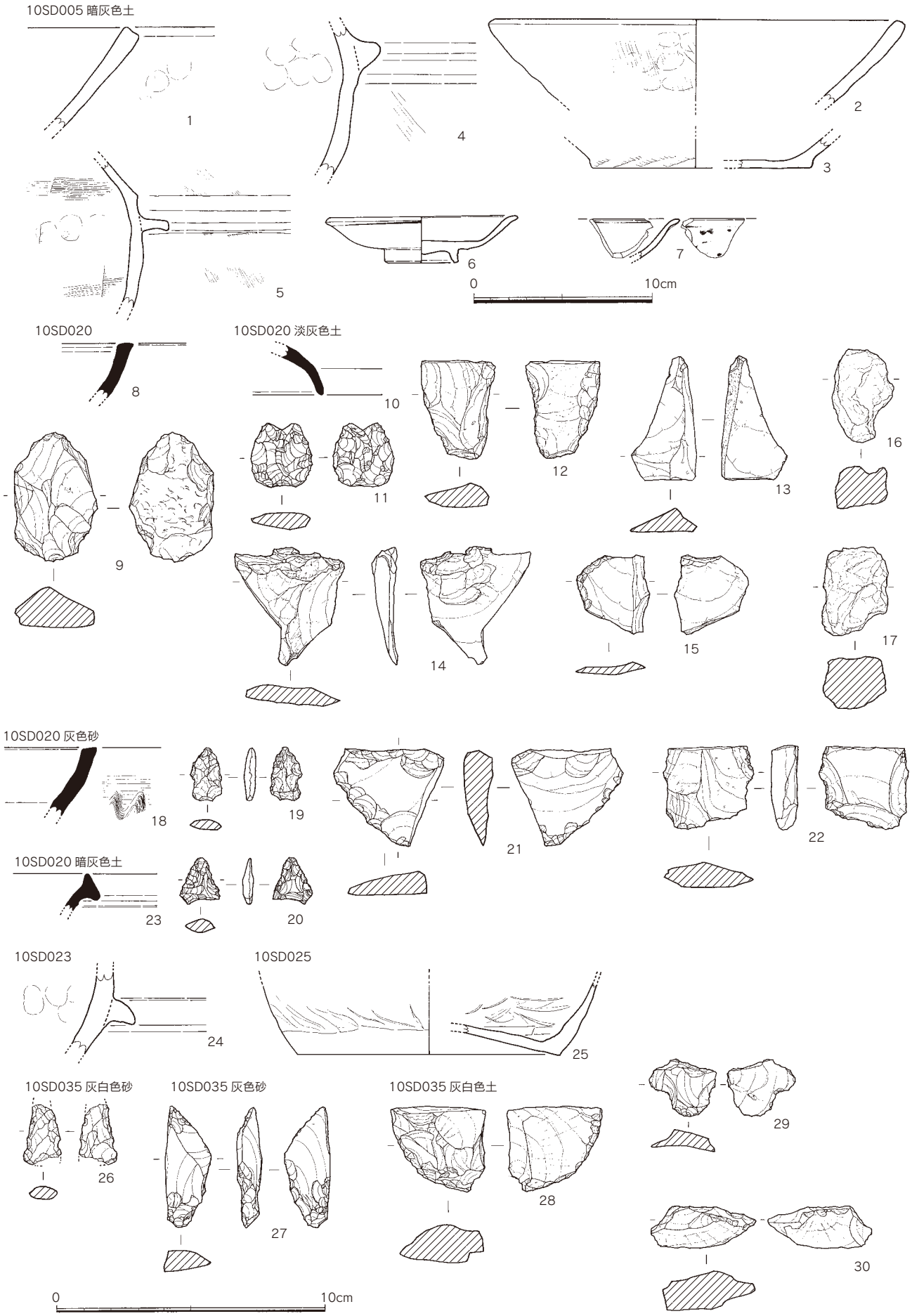


図136.溝出土遺物実測図(S=石器:1/2、1/3)

10SD005暗灰色土（図136）

土師質土器

鉢（1 ～ 3）　1は摩滅が目立ち、外面にハケ目と指頭圧痕を僅かに残す。胎土は淡黄橙色で0.15cm以下の白色砂粒を含む。2は復原口径23.4cm。内面回転ナデ、外面タテハケと指頭圧痕を残す。3は2の底部とみられる。復原底径12.3cm。外面下半にハケ工具の当たり痕が残る。胎土は淡橙色で0.1cm以下の白色砂粒を含む。

鍋（4）　外面回転ナデで、突帯の下はハケ目が僅かに残る。内面は摩滅が目立ち指頭圧痕が僅かに残る。胎土は茶灰色で0.2cm以下の白色砂粒や角閃石を含む。

瓦質土器

湯釜（5）　内面は細かいヨコハケと指頭圧痕を残す。外面も斜め方向の細かいハケを施す。胎土は暗茶色で、0.6cm以下の白色砂粒を含む。

肥前系磁器

皿（6・7）　6は口径10.8cm、器高2.6cm、高台径4.1cm。やや青味がかった釉を薄く施し、外面下半と内面底部は露胎。底部と口縁部に呉須で圏線を施す。7はやや青味がかった釉を薄く施し、内外面に文様を施す。

10SD020（図136）

須恵器

鉢（8）　口縁端部を平坦に仕上げる。全体的に摩滅するが、内面は僅かに回転ナデが確認できる。焼成・還元は良好で、色調は青灰色を呈する。

石製品

剥片（9）　大きさは縦4.9cm、横3.15cm、厚さ1.5cm。片面に自然面が残る。全体的に風化が目立つ。安山岩製。

10SD020淡灰色土（図136）

須恵器

坏蓋（10）　現存範囲は内外面とも回転ナデ。端部は丸くしている。色調は暗灰色を呈する。

石製品

スクレイパー（11・12）　11は縦2.4cm、横2.3cm、厚さ0.6cmで小さいが細かく加工している。黒曜石製。12はサイドスクレイパーで、全体的に風化が著しい。縦3.7cm、横2.8cm、厚さ0.9cm。安山岩製。

剥片（13 ～ 15）　13は縦4.7cm、横2.4cm、厚さ0.9cm。安山岩製。14は縦5.0cm、横4.2cm、厚さ0.5cm。安山岩製。15は縦3.0cm、横2.7cm、厚さ0.3cm。安山岩製。

土製品

焼土塊（16・17）　胎土は淡黄橙色や橙色で、0.5cm以下の白色砂粒や茶色粒を多く含む。

10SD020灰色砂（図136）

須恵器

甕（18）　口縁部が外反しながら僅かに内湾する。端部は平坦に仕上げる。外面はヨコハケのあと波状文を施す。焼成・還元は良好で、青灰色を呈する。

石製品

石鏃（19・20）　19は縦2.0cm、横1.2cm、厚さ0.4cm。安山岩製。20は縦1.75cm、横1.5cm、厚さ0.4cm。黒曜石製。

削器（21）　端部を細かく敲打し、刃部を作り出している。縦3.6cm、横4.2cm、厚さ0.7cm。安山岩製。

石核（22）　縦3.1cm、横3.35cm、厚さ0.9cm。安山岩製。

10SD020暗灰色土（図136）

須恵器

甕（23）　肥厚した口縁部で、外面には低い突帯が巡る。内外面とも回転ナデ。色調は青灰色や暗灰色を呈する。

10SD023（図136）

土師質土器

釜（24）　下向きの突帯の下半にはハケのようなものがあって、二次焼成で煤けている。内面には指頭圧痕が残

る。胎土は灰茶色で、0.2cm以下の白色砂粒や角閃石を含む。

10SD025（図136）

国産陶器

瓶(25)　上底風の底部で、外面は工具痕が残り、緑味の灰色釉を施し、底部設置部分に釉溜まりがある。内面は横方向のナデで一部釉垂れがある。胎土は茶褐色を呈する。復原底径14.7cm。

10SD035灰白色砂(図136)

石製品

石鏃(26)　両端を欠損し、現存長2.35cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm。安山岩製。

10SD035灰色砂(図136)

石製品

ナイフ形石器(27)　縦4.55cm、幅1.7cm、厚さ0.75cm。基部は刃潰し調整を行う。黒曜石製で、表面は風化が目立つ。

10SD035灰白色土(図136)

石製品

削器(28)　両面から調整し、刃部を作り出している。縦3.2cm、横3.6cm、厚さ1.4cm。安山岩製。

剥片(29・30)　29は大きさ2.0×2.4cm、厚さ0.5cm、黒曜石とみられ表面は風化が目立つ。30は1.6×3.9cm、厚さ1.3cm、安山岩製。

3)土坑

10SK015（図137）

瓦質土器

火鉢(1)　2条の突帯に挟まれて花文のスタンプを施す。胎土は淡黄茶灰色や暗灰色で、0.25cm以下の白色砂粒を多く含む。

擂鉢(2･3)　2は外面にはタテハケが僅かに残り、指頭圧痕が残る。内面には擂り目を施す。胎土は暗茶灰色で、0.15cmの白色砂粒を含む。3は口縁部が若干肥厚し、内面には細かいヨコハケのあと擂り目を施し、外面は摩

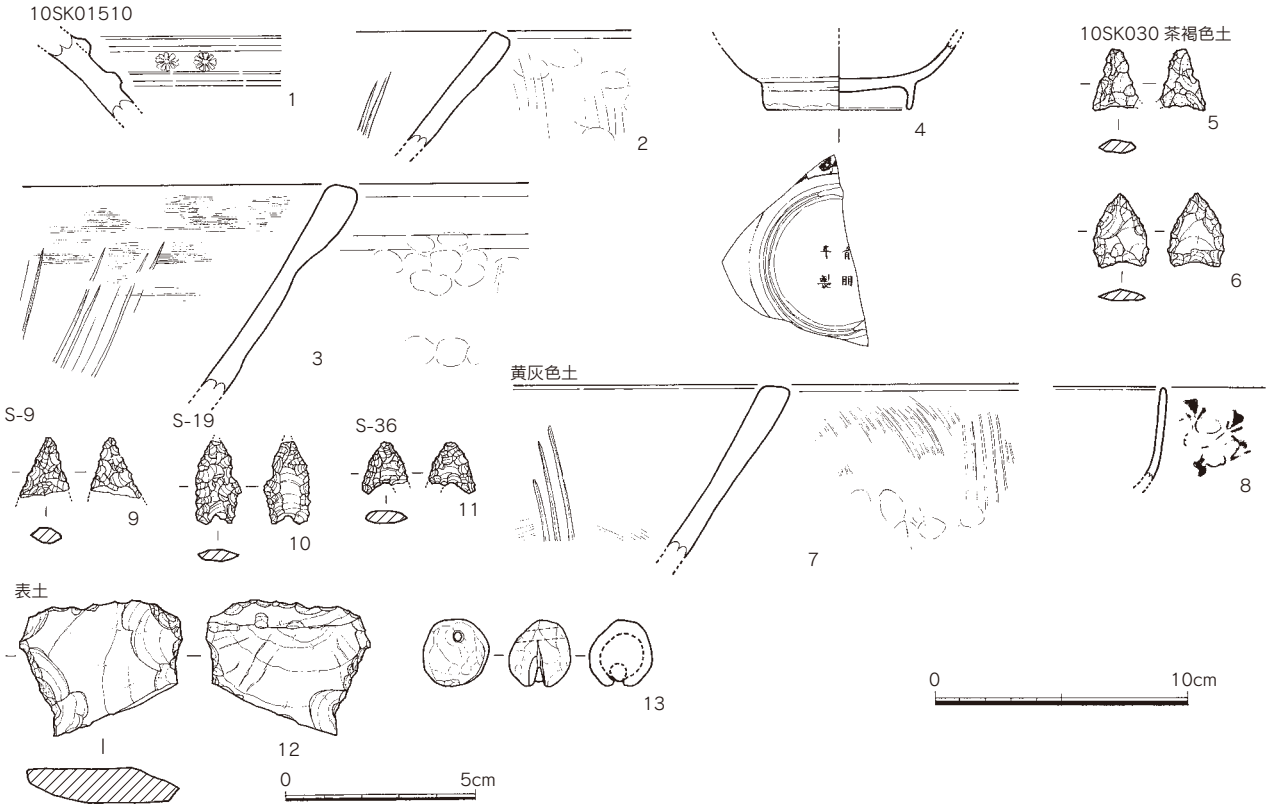


図137.土坑・その他の遺構出土遺物実測図(1)（S=石器:1/2、1/3）

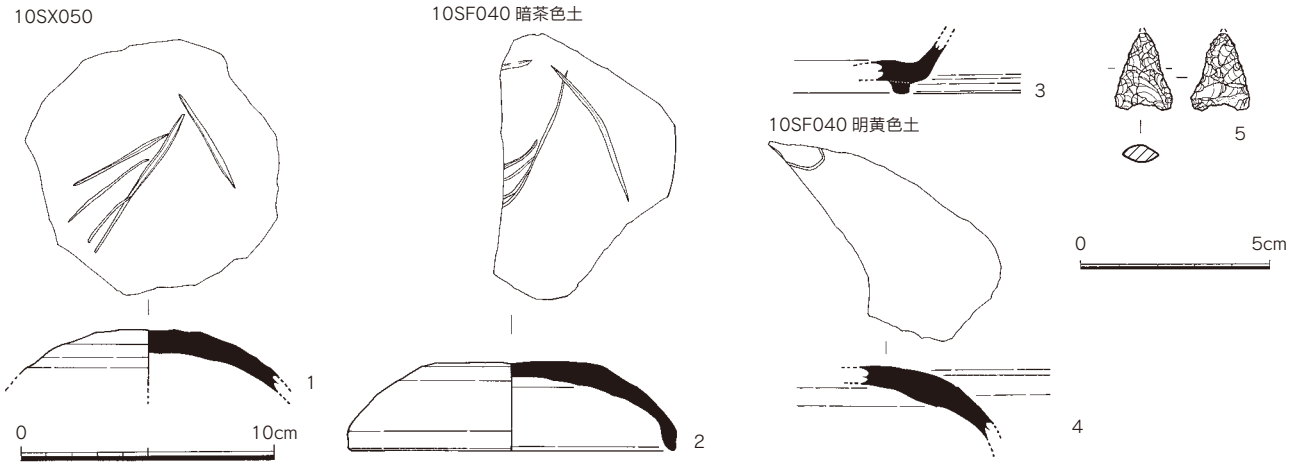


図138.10SX050・SF040出土遺物実測図(1)(S=1/2、1/3)

滅が著しく、タテハケと指頭圧痕が僅かに残る。胎土は暗黒灰色や淡白茶灰色で、0.3cm以下の白色砂粒を多く含む。

肥前系磁器

椀(4)　高台内面には銘款があり、若干青みがかった白色釉を全面に薄く施し、高台畳付は釉を拭き取る。復原高台径5.6cm。

10SK030茶褐色土(図137)

石製品

石鏃(5･6)　5は下端を一部欠損する。縦1.65cm、幅1.2cm、厚さ0.35cm。安山岩製。6は縦1.9cm、幅1.5cm、厚さ0.35cm。基部は浅い抉り込みである。安山岩製。

4)土層

黄灰色土(図137)

土師質土器

擂鉢(7)　内面はハケの後擂り目を施す。外面はタテハケのあと指頭圧を施す。胎土はやや粗く淡橙褐色を呈する。

肥前系磁器

椀(8)　乳白色に呉須で草木文様を施す。

石製品

石鏃(9～11)　9は下半を欠損する現存長1.6cm、幅0.85cm、厚さ0.45cm。黒曜石製。S-9より出土。10は先端部を欠損する。縦2.2cm、幅1.2cm、厚さ0.35cm。黒曜石製。S-19より出土。11は下端を一部欠損する。縦1.35cm、幅1.2cm、厚さ0.3cm。S-36より出土。

表土(図137)

石製品

剥片(12)　縦3.1cm、幅4.0cm、厚さ0.9cm。二次加工あり。安山岩製。

土製品

土鈴(13)　大きさは2.6×2.6×2.4cm。橙褐色を呈する。

4.小結

調査地は前田遺跡や日焼遺跡第2次調査で確認されていた官道の延長上に位置し、今回検出した遺構の多くは官道に関係した遺構であった。今回の調査では、模式図(図139)に示すように、この地の変遷を追うことができた。

Ⅰ期(6世紀末～7世紀代)

この調査地で最初に穿たれた遺構は、蛇行するSD020・030の溝である。流路状に蛇行し砂質土が堆積し硬化している状況は、道と流路が交互に繰り返しながら埋没し締め固まったと推測される。

II期（７世紀代）

SD020・030の溝の上に堆積層が形成されたと推測される。調査ではこの溝の直上にはSD001の埋土がのっていたが、SD001とSF040の盛土に挟まれる形で、黄白色や黄褐色の砂質土が厚さ0.4m程確認されている（図131北壁土層）。この土層状況から土砂堆積が調査区全体を覆っていたと推測した。

III期（8世紀初め頃？）

官道の基礎地業が造られる。この際道路部分の特に中央付近に限って、第2段階で記した堆積層を削り込み、ピット列（波板状圧痕）を穿ち、灰褐色粘土や橙色土を盛り土していき、側溝（SD001）が掘られたものと推測される。SD001については、官道推定ラインの西側溝に位置する。盛土は最終的にSD001によって切られた状態で検出されたが、盛土が西側ほど薄くなる状況や下記の状況から、側溝際まで盛土があったかどうかは不明確である。

IV期（8世紀第2四半期頃～現代）

官道西側溝（SD001）は、最終的に黒褐色土で埋没していたが、埋土に含まれる遺物が奈良時代に限定されることから、平安時代に入った頃には当初の官道の景観は失われていたとみられる。

また、SD001南側の検出状況や前田遺跡などの官道側溝の形状からすると幅が広く、溝の立ち上がりが緩やかであること、また、土師器の風化が目立つこと、砂層が甌穴状に入り込んでいることから推測して、直接官道側溝そのものの形状ではなく、流路等になり溝幅を広げた後、側溝は最終的に有機質が貯まり、黒褐色土となって完全に埋没していったと見る方が妥当であろう。

その後、近世になるまで明瞭な遺物や遺構は殆どない。近世になって付近一帯の池尻や野田集落が形成され、道路や宅地が造られるなど大きな土地の改変が行われ、かつての官道部分は大きく削平され、残った部分も田畑として利用されながら現在に至ったと考えられる。（宮崎亮一）

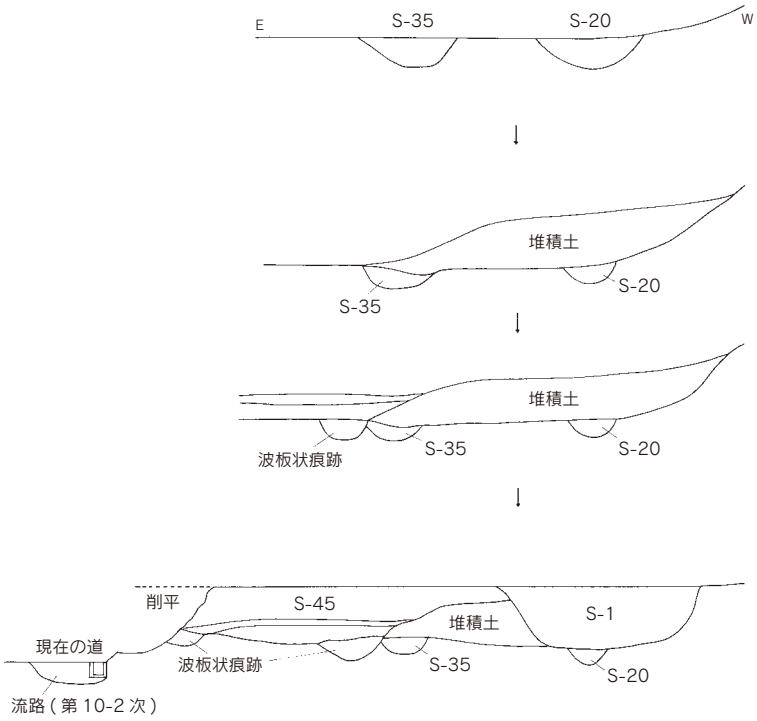


図139.地形形成過程模式図

日焼遺跡　第10-2次調査

1.基本土層

市道部分であったため、アスファルトと基盤のバラスを除去すると、耕作土や表土など現代の撹乱や包含層が0.5m前後あり、その下に遺構面があるのだが、遺構年代が近世以降という特性から包含層と遺構との区別が難しいところである。

2.遺構

1)溝

10SD060（図140）

調査区の西側半分を占めている遺構である。溝状をなしているが、調査区がトレンチ状に細長いこともあり、全容は掴めない。深さは0.1 ～ 0.3mほどで底面は平坦でなく凸凹で、灰色系の砂質土や粘土などの埋土である。人工的な溝という状況ではなく、自然の流路に近いと判断したほうが良いかもしれない。

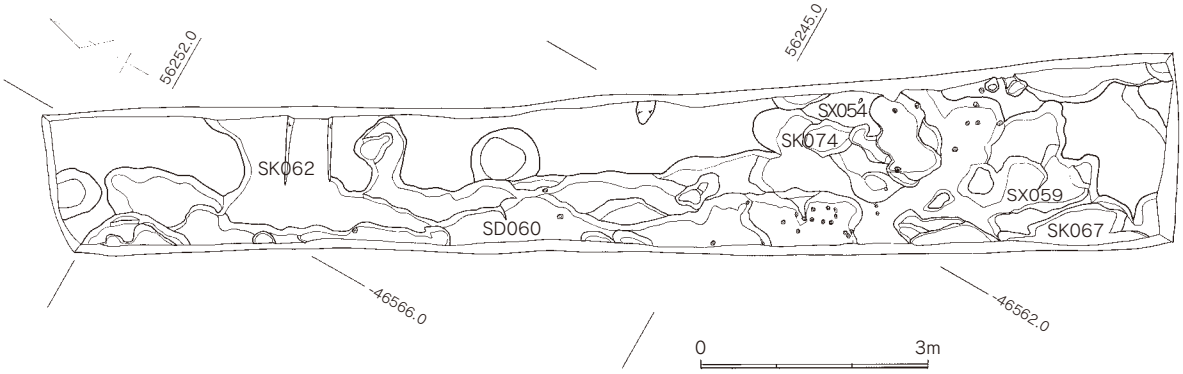


図140.日焼遺跡第10-2次調査　遺構配置図(S=1/100)

3.遺物

1)溝

10-2SD060（S-61）（図142）

瓦質土器

火鉢(1)　外面に2条の突帯を巡らし、その間に花文のスタンプを施す。内面には僅かにミガキが確認できる。胎土は0.2 ～ 0.4cmの砂粒を含み、灰色や暗褐色を呈する。焼成は良好である。

国産陶器

椀(2)　内面と体部外面の一部に白味がかった緑灰色釉を施す。高台は削り出しで露胎。高台には2 ヶ所に刳り込みを設ける。復原高台径5.0cm。

擂鉢(3)　底部は低い高台状をなす。内面は櫛目。外面は回転ヘラケズリの後回転ナデ。底部外面回転ヘラケズリ。色調は茶灰色を呈する。

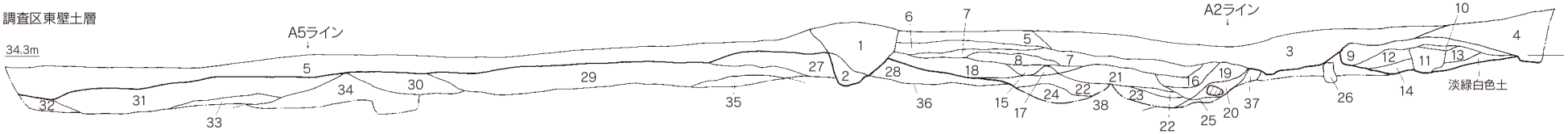
甕(4)　口縁端部を折り曲げ肥厚させる。口縁端部以外に施釉され外面黒色や褐色、内面はこげ茶色を呈する。胎土は精製された薄褐色である。

国産磁器

椀(5)　口縁部は僅かに外反させる。内外面とも乳白色釉で細かい貫入が入る。

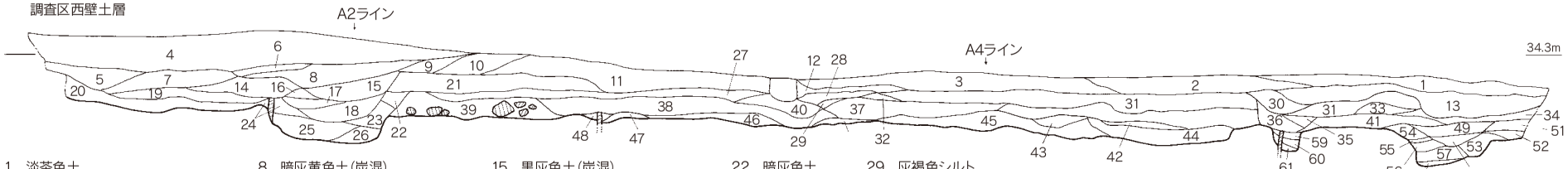
肥前系磁器

調査区東壁土層



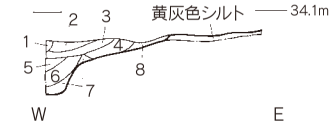
1　撹乱(灰白色土)
2　灰色土
3　撹乱
4　灰茶色土
5　灰白色土(耕作土?)
6　暗灰色土
7　黄白色土
8　灰色土
9　灰茶色土(炭混)
10　淡茶白色土
11　淡灰茶色土
12　暗茶色土
13　淡茶色砂
14　暗茶色砂
15　灰白細砂
16　明灰色土
17　灰色粘土
18　灰白色砂
19　灰色粘質土
20　暗灰色砂
21　灰色粘質土
22　淡茶色砂とシルト
23　灰色砂
24　淡灰茶色砂
25　暗灰色粘土
26　灰白色砂
27　黄橙色砂と淡茶色シルト(地山)
28　灰緑色土(地山)
29　灰白色砂(地山)
30　明黄橙色シルト(地山)
31　淡緑色砂(地山)
32　明橙色シルトと砂(地山)
33　明橙色シルト(地山)
34　灰白色砂(地山)
35　明橙色シルト(地山)
36　灰緑色土(地山)
37　灰白色砂(地山)
38　黄橙色砂と淡緑色シルト

調査区西壁土層



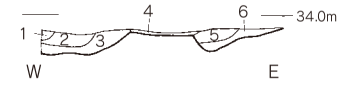
1　淡茶色土
2　淡橙色土
3　淡茶白色土
4　灰茶色土(炭混)
5　灰茶色土(黄白色土ブロック混入)
6　灰茶色シルト
7　黄白色粘土
8　暗灰黄色土(炭混)
9　暗灰黄色土
10　灰黄色土
11　淡黄色土
12　灰茶色シルト
13　灰青色土(黄白色土ブロック含)
14　灰色シルト
15　黒灰色土(炭混)
16　暗灰色砂
17　暗灰色粘土(有機物含)
18　灰茶色土(黄白色土ブロック含)
19　淡灰色土
20　淡茶色砂
21　茶褐色土
22　暗灰色土
23　暗灰色シルト
24　暗灰色シルト
25　黄橙色細砂
26　灰白色砂
27　淡緑色土
28　黄白色粘土
29　灰褐色シルト
30　淡茶色細砂
31　灰緑色土
32　灰緑色砂
33　淡茶色砂
34　暗緑色粘土
35　黄白色シルト
36　黒紫色砂
37　灰橙色土
38　灰茶色土
39　淡茶色砂
40　明灰色土
41　灰色砂
42　茶白色砂
43　灰白色シルト
44　暗黄褐色砂と黄橙色砂の互層
45　淡黄茶色土(礫大)
46　灰茶色砂(S-64)
47　淡茶色砂(S-64)
48　灰白色細砂
49　茶白色砂
50　淡橙色砂
51　淡青色土
52　茶白色砂
53　青灰色砂
54　茶褐色砂
55　茶白色砂
56　青灰色粘土
57　淡茶色土
58　茶白色砂
59　暗橙色細砂
60　黒褐色砂
61　青灰色粘土

調査区東西土層(A4区側)



1　灰緑褐色土(ややしまりのある土、角礫を若干含む)
2　灰白色砂質土(角礫を多量に含む。しまりなし)
3　灰橙色土(角礫を含む、しまった層)
4　淡灰色シルト(礫を含まない、しまった層)
5　灰色砂
6　暗灰色砂質土(角礫多く含む)
7　茶褐色砂(角礫多く含む)
8　淡茶褐色砂

調査区東西土層(A2区側)



1　灰緑褐色土
2　灰白砂質土
3　淡茶色砂(角礫を多く含む砂粒の大きな砂層)
4　茶灰色土(礫をほとんど含まない)
5　暗茶色砂質土(ややシルトを含む)
6　暗灰色砂(角礫を多く含む砂粒の大きな砂層)

0　2m

図141.土層実測図(S=1/60)

皿(6)　厚い体部に小さな高台を付す。高台畳付以外青味がかった透明釉を施し、文様は全て呉須で描く。高台外面に圏線、体部内面には浅い凹線を菊花状に並べる。内面底部には松のような文様を描く。

椀(7・8)　7は復原高台径4.2cm。体部下半と高台に緑灰色釉で圏線と底部外面に文様を施す。8は外面に呉須で網目文を施す。

10-2SD060（S-56灰色シルト）（図142）

瓦質土器

鍋(9)　口縁部は僅かに肥厚する。口縁端部内面を斜めに整形し、端部に浅い沈線を設ける。内面はヨコハケで、その他はナデ調整。

火鉢(10)　外面に2条の突帯を巡らし、その間に花文のスタンプを施す。内面端部に僅かにハケ目が残る。胎土は0.2cm以下の砂粒を含み粗く、色調は淡灰色や茶色を呈する。

10-2SD060（S-57）（図142）

弥生土器

高坏(11)　内面は粗い櫛目、外面はナデ調整。胎土は0.3cm以下の砂粒を多く含み、淡橙褐色や暗褐色を呈する。焼成不良。

10-2SD060（S-64淡茶色シルト）（図142）

石製品

石鏃(12)　縦5.5cm、幅2.25cm、厚さ0.75cm。先端部僅かに欠損する。安山岩製。

磨製石斧(13)　縦9.7cm、幅3.8cm、厚さ1.35cm。表面は研磨され、中央付近に敲打痕が残る。裏面は磨滅するが研磨は刃部近く以外殆どされてない。刃部は欠損している。安山岩製。

10-2SD060（S-58）（図143）

土師質土器

鉢(14)　胎土は暗灰色や黄茶色で、0.1cm以下の白色砂粒を多く含む。内面はヨコハケ、外面は指頭圧痕とハケ目調整である。

瓦質土器

鉢(15)　胎土は黒色や灰茶色で、0.15cm以下の白色砂粒や雲母を含む。外面は摩滅するが、内面には明瞭なヨコハケが施される。

国産陶器

皿(16・17)　16は口縁部を屈曲させる。内面および外面上半部に緑灰色釉を薄く施し、釉には細かい貫入が入る。外面下半は露胎で回転ナデ。胎土は0.05cm以下の白色砂粒を含み灰色を
呈する。17は口縁部を外側に屈曲させ、端部内面に僅かに段を有する。端部内面に胎土は白色細砂粒を含み、茶色を呈する。内外面とも黄色味のある透明釉で内面には化粧土がハケで施されている。

鉢(18)　胎土は茶色で、0.5cm以下の茶色粒や白色砂粒を多く含む。内面には使用時の工具痕がみられ、砂粒の隙間に炭化物が付着している。

国産磁器

椀(19)　内外面に乳白色釉を施し、内面は輪状に拭き取る。高台を台形状に削り出しで露胎。胎土は白色で精製されている。一見白磁のようである。高台径4.1cm。

肥前系磁器

皿(20 ～ 25)　20は復原口径12.9cm、器高3.7cm、復原高台径4.6cm。内外面にやや緑味がかった白色で、高台畳付と内面底部を輪状に拭き取り、内面には剥離材を塗っている。内面には薄い呉須で斜交線を描く。21は復原高台径4.9cm。内外面とも施釉され、高台畳付は釉を拭き取り、その内側に砂粒が付着する。内面には呉須で草花文を描く。22は底部が碁笥底風で復原径5.7cm。釉はやや青味がかっていて、内面に呉須で草花文を描く。高台畳付は露胎。23は低い高台で、内外面は薄く施釉され、高台畳付は釉を拭き取っている。内面には青色釉で文様を描く。24は復原高台径8.7cm。内外面とも薄い青味がかった釉を薄く施し、高台畳付は釉を拭

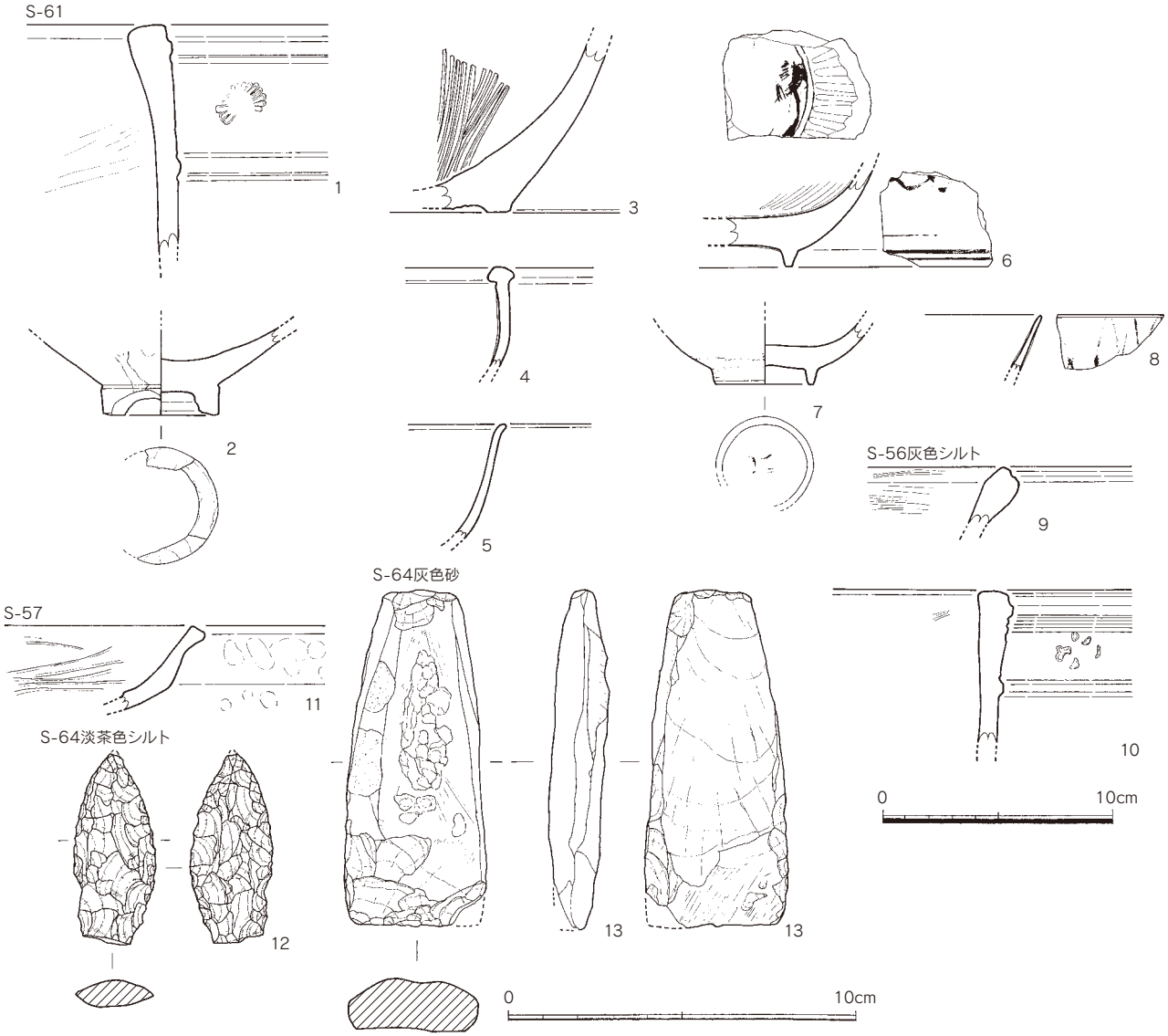


図142.10-2SD060出土遺物実測図（1）（S=石器:1/2、1/3）

き取る。内面に五弁花文と草花文を施す。25は復原高台径9.6cm。内外面僅かに青味がかった釉を施し、高台畳付は釉を拭き取る。内面に五弁花文と草花文を施す。

椀（26）　内外面に白色釉を施し、外面には呉須でコンニャク印判が施される。

瓶（27）　肩部付近で、内外面とも薄くやや青味がかった釉を施すが、内面は部分的に露胎である。外面には呉須で文様を描く。

瓦類

軒丸瓦（28）　巴文瓦で、焼成は不良で灰色を呈する。

石製品

滑石加工品（29）　スタンプ状に細かく加工されていて、石鍋の補修材として使用された可能性が考えられる。大きさは6.9×7.9cm、厚さ2.4cmである。

石臼（30）　石臼の破片で、表面の内側には斜めに削り込み窪ませ、裏面にはやや劣化した摺り目がある。

2）土坑

10-2SK062（図144）

陶器

皿（4）　内面に浅い凹線を並べた菊皿である。内外面は緑灰色釉を施し、貫入が細かく入る。内面底部は釉を拭き取る。底部には低い高台を貼付し露胎である。胎土は0.1cm以下の黒色粒を含み淡灰色を呈する。

金属製品

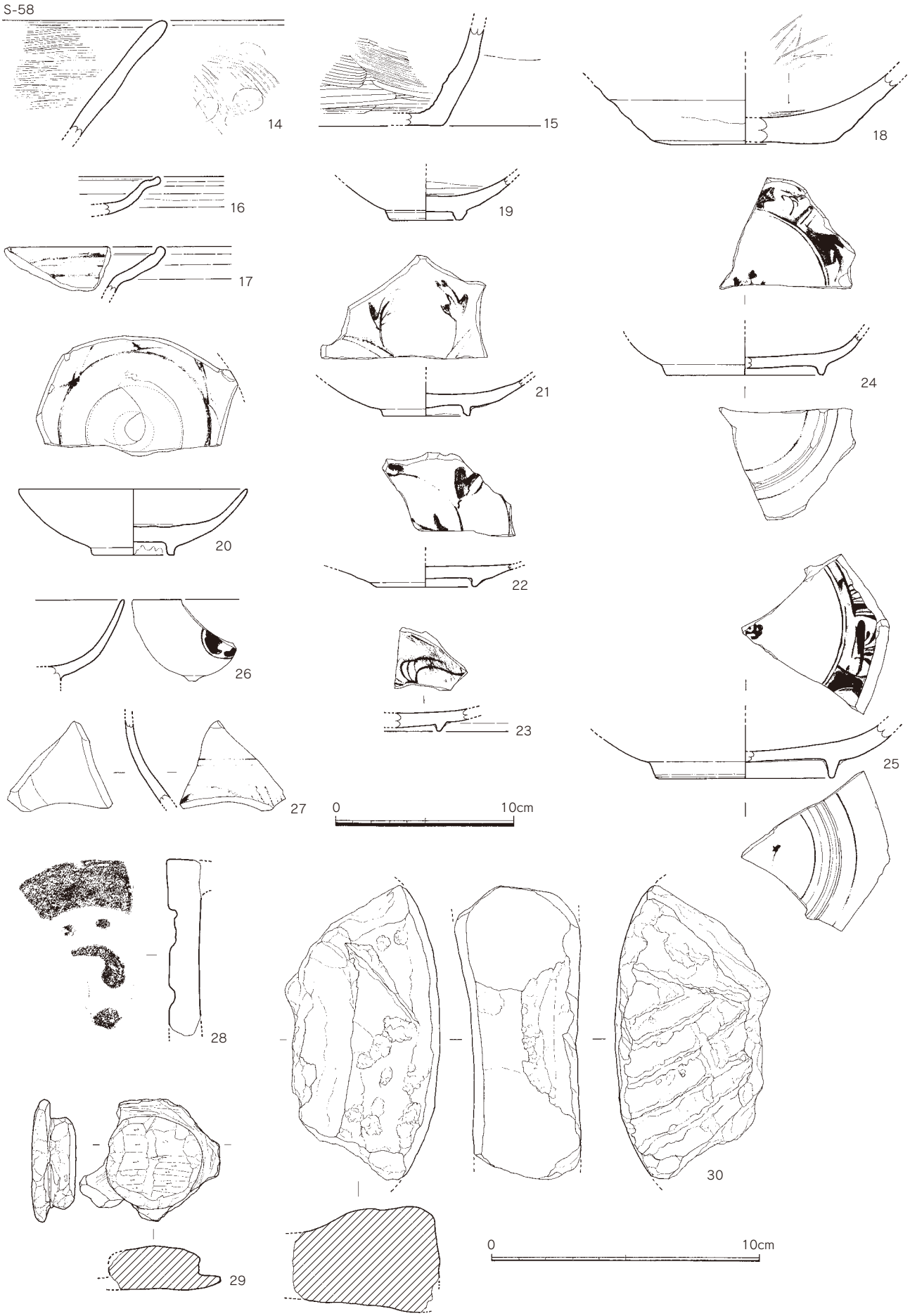


図143.10-2SD060出土遺物実測図(2)（S=1/3）

銭貨(5)　寛永通宝。やや劣化している。

10-2SK067（図144）

肥前系磁器

椀(6･7)　6は復原高台径8.1cm。高台畳付は露胎で、呉須で高台外面と内面に圏線や文様を描く。胎土は白色。7は丸みのある椀で、呉須で内外面に蝶など文様を描く。胎土は灰白色。

10-2SK074（図144）

瓦質土器

火鉢(8)　口縁部外面に1条の突帯が巡り、その下に花文のスタンプが施される。それ以外はナデ調整。胎土は0.3cm以下の砂粒を多く含み、淡茶灰色や暗灰色を呈する。

国産陶器

擂鉢(9)　外面は全て回転ナデ。内面は櫛目。復原高台径14.0cm。胎土は粗く白色砂粒や赤褐色粒を多く含み、淡橙褐色を呈する。

皿(10)　外面下半は露胎で、回転ヘラケズリ、高台は糸切りの後削り出しを行う。復原高台径5.2cm。内面は淡緑灰色釉を全面に施し、目跡が3 ヶ所ある。

石製品

砥石(11)　タテ7.8cm、ヨコ3.1cm、厚さ2.2cmで端部は欠損する。使用面は3面。砂岩製。

金属製品

銭貨(12)　寛永通宝。

3)その他の遺構

10-2SX054（図144）

石製品

スクレイパー（1）　タテ5.25cm、ヨコ3.7cm、厚さ1.4cm。部分的に自然面を残す。

10-2SX059淡灰色土(図144)

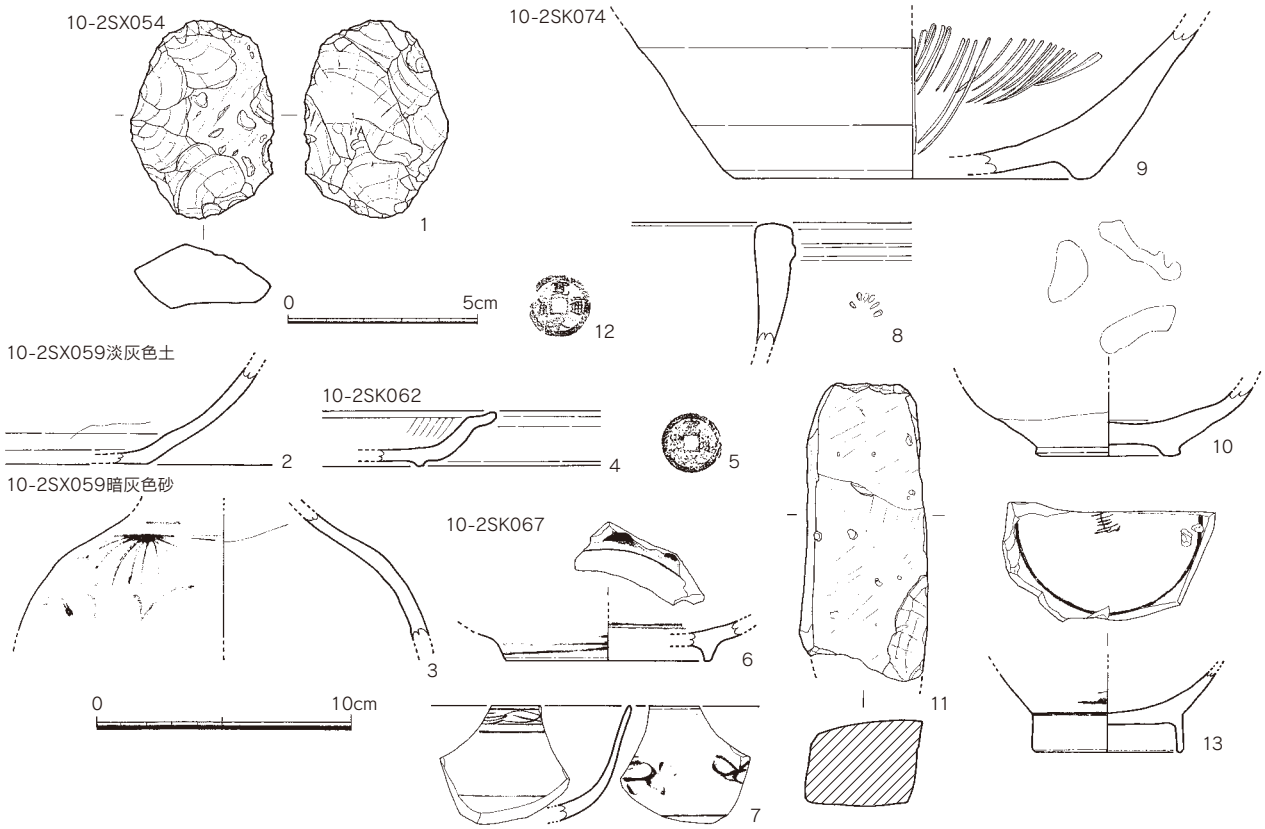


図144.その他の遺構出土遺物実測図(S=石器:1/2、1/3)

国産陶器

鉢(2)　底部外面は糸切り痕が残る。外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデで底部付近に白味がかった緑灰色や飴色の釉がみられる。胎土は赤茶褐色で僅かに0.1cm以下の白砂粒を含む。

10-2SX059暗灰色砂(図144)

肥前系磁器

瓶(3)　肩部付近で、内面体部は露胎で回転ナデ。外面は黄色味がかった乳白色で、やや薄い色の呉須で文様を施す。

4)土層

黄白色粘土(図144)

肥前系磁器

椀(13)　高台径6.0cm。胎土は薄い灰色で、内面は緑灰色釉、外面は青灰色釉で文様が施されている。

4.小結

上面は道路により大きく削平され、第10次調査との段差は1m前後あるが、その下位の残存部分で近世初頭の遺物を含む溝が確認されたということから、近世の早い段階で現状の高さになっていた可能性が高い。この道路の東側には同じレベルで集落が続くことから、向佐野の池尻や野田集落が形成されるに伴って、官道が通っていた高台を削平されたものと推測される。溝(流路)はその集落の丘陵際にできたもので、西側丘陵からの流れ込みと推測されるが、その形成過程は不明瞭である。

以上のように古代に関わる遺構は全く確認できなかったが、近世以降の土地利用を知る手掛かりを得ることができた。　(宮崎亮一)

表7.日焼遺跡　第10-2次調査　遺構一覧

S 番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	時　期	地区番号
51	10-2SX051	撹乱？			現代	A1
52	10-2SK052	土坑？			現代	A1
53	10-2SK053	土坑		黄白色土に切り込む	現代	A1
54	10-2SX054	たまり（不整形）				A2
56	10-2SD060	たまり（不整形）			近世前期	A1・2
57	10-2SD060	溝状遺構				A2 ～ 5
58	10-2SD060	溝状遺構	淡茶色砂		江戸時代中期	A2 ～ 5
59	10-2SX059	たまり（不整形）			江戸時代後期？	A1
60	10-2SD060	溝		埋土によって遺構番号を付す。	近世前期～江戸後期	A1 ～ 5
61	10-2SD060	溝×たまり	灰緑色土		近世前期	A2 ～ 5
62	10-2SK062	土坑？		S-62 → 60	江戸時代前期～	A4
63	10-2SD060	溝状遺構				A2 ～ 5
64	10-2SD060	溝状遺構	灰色砂・淡茶細砂			A3 ～ 4
66	10-2SK066	土坑				A2
67	10-2SK067	土坑	灰色砂		江戸時代後期	A1
68	10-2SK068	土坑	淡茶色砂		江戸時代後期～	A1
69	10-2SK069	土坑				A5
71	10-2SK071	土坑				A4・5
72	10-2SK072	土坑		S-72 → 60	近世	A5
73	10-2SK073	ピット			近世	A1
74	10-2SK074	土坑		S-74 → 56	江戸時代前期～	A1・2
76	10-2SK076	土坑			江戸時代後期？	A1
77	10-2SK077	土坑		S-77 → 60	近世	A5
78	10-2SD060	たまり				A2
79	10-2SX079	撹乱			現代	A1

※ SD060 内の切り合い・・S-64 → 57 → (66･74) → 56･63 → 58 → 78 → 61 → (54)
※ SD060 に切り込む遺構の新旧・・S-76 → 67･68 → 59 → 52 →黄白色粘→ 53 → 79

日焼遺跡　第11次調査

1.基本土層

地表下0.74mに白色土が堆積し、その下位に遺構面を確認している。なお当該地は植林がなされていたため、各所に根穴が掘られ、遺構面自体も極めて劣悪な状況で、残存状況も悪かった。

2.遺構

1)井戸

11SE002（図146）

調査区南東部に確認した土坑状の遺構で、石組が検出されたことから井戸として調査を行った。しかし脆弱な基盤層への掘削であったことから、安全管理面から途中で掘削を断念した。遺構検出面から約0.2mの位置で0.4mほどの角礫が集積されており、井戸枠材の可能性を示した。しかしこの集積を除去した後は下位に礫はなく基盤層に掘り込む土坑を呈している。掘削した深さは1.10mである。規模は、短軸長1.0m前後を測り、調査区外へのびるため全形は不明。

11SE005（図147）

調査区南部に検出した土坑状の遺構で、直径0.9m前後を測り、当該遺構も安全上の問題から掘削した深さ1.18mで調査を断念している。遺構内堆積土は、下位から青色砂、茶色砂として分けているが、堆積環境差とも理解でき、同一層として考えられる。

2)その他の遺構

11SX001（図145）

調査区南部にて検出した遺構で、陶器製甕が埋められていた。直径0.68mを測る円形の土坑で、残存する深さ

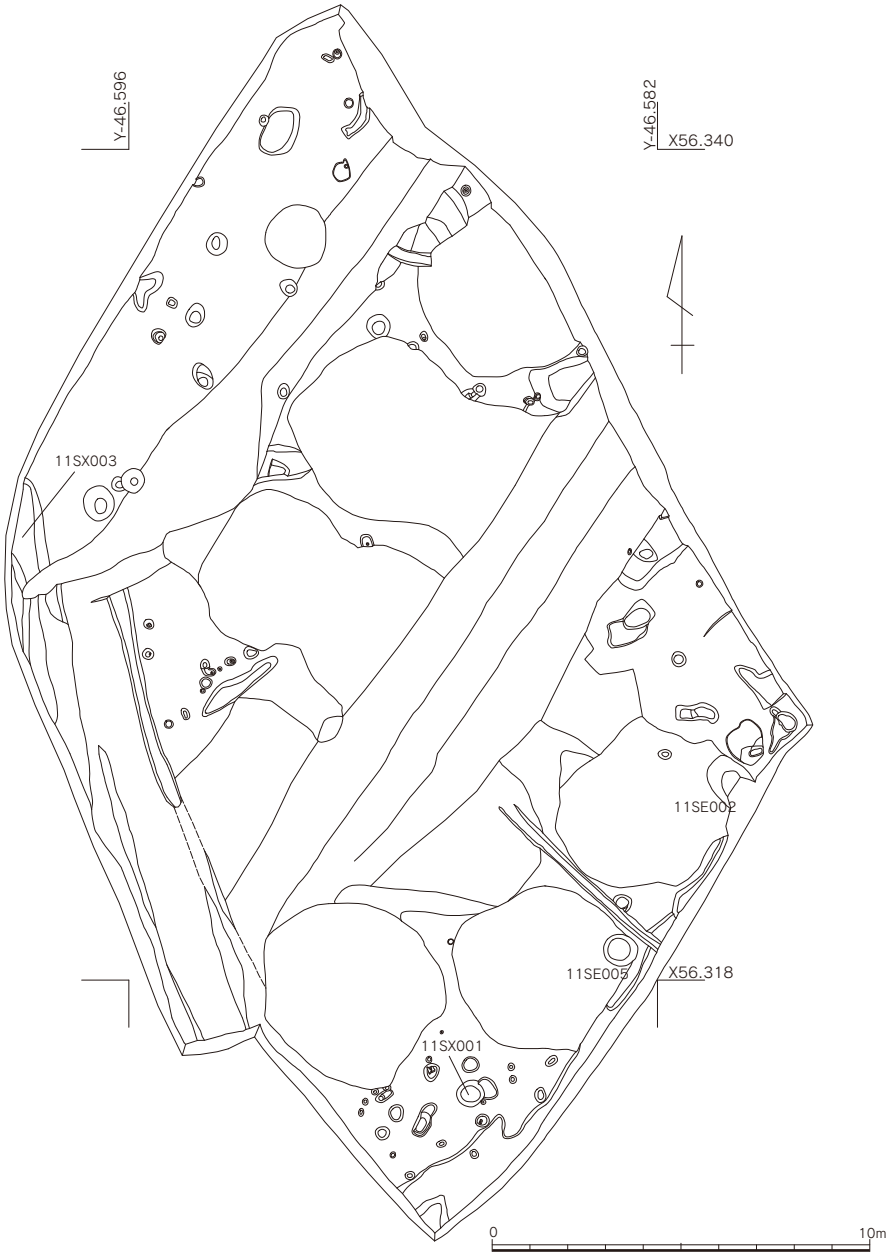


図145.日焼遺跡第11次調査　遺構配置図(S=1/200)

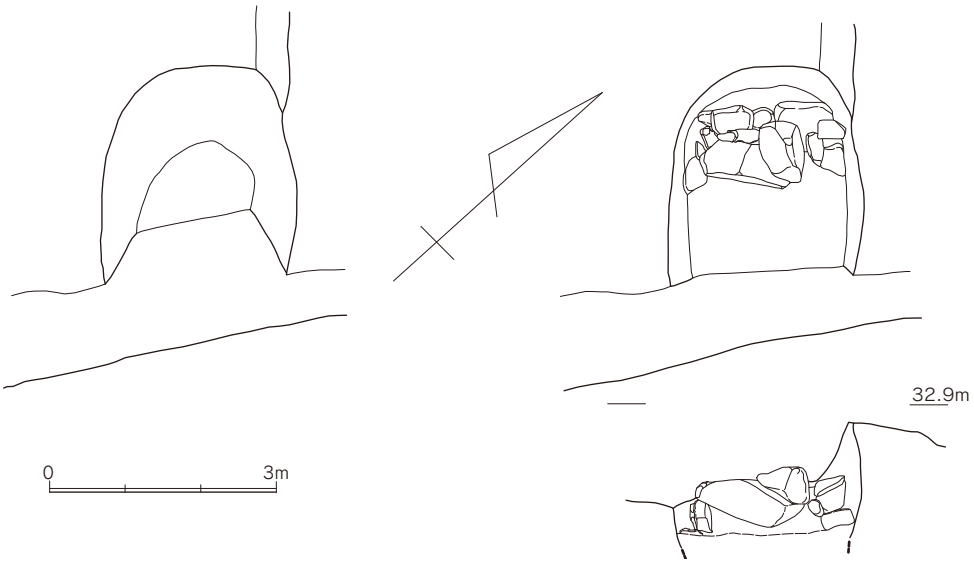


図146.11SE002遺構実測図(S=1/100)

は、0.26mを測る。

11SX003（図145）

調査区北西部に検出した窪みで、調査区外へ展開しているため遺構規模全形については明らかにし難い。幅1.33m、残存する深さ0.31mを測る。遺構内には暗茶色土が堆積していた。　（中島恒次郎）

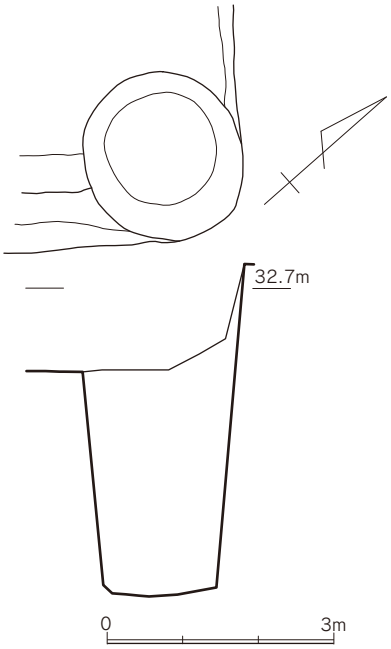


図147.11SE005遺構実測図(S=1/100)

3.遺物

1)井戸

11SE002（図148）

土師器

坏ａ(1)　体部と底部の境界に丸みを有す。底部切り離しは不明。小破片のため口径は復元していない。

染付磁器

椀(2・3)　2は丸みを帯びた器形とやや高い高台を有し、外面には編み目状の文様が淡黒紺色の呉須で描かれている。素地は灰色できめ細かく、畳付けは釉が拭取られている。3も素地はきめ細かい乳白色で、染付は黒紺色の呉須で外面には端部に二重線が縁取られ、内面には花文の一部と思われる文様が施されている。2、3ともに肥前系と考えられる。

皿(4)　低い高台を有し、青灰色の呉須で外面には体部下位に単線が描かれ、見込みにもやや崩れた五弁花の文様が施されている。畳付けは釉剥ぎされる。肥前系と考えられる。

土製品

トチン(5・6)　5は全面を手捏ね手法で調製され、自然釉と思われる光沢のある茶褐色の釉がかかる。上部には高台の貼りついた痕がみられ、実際に使用されたことがわかる。器高は9.9cm。6も5と同様に手捏ねで調製されるが、釉はかからない。下部接地面は砂粒が多く、全体的に胎土はやや粗い。

11SE005（図148）

土師器

小皿ａ1（7）　口径7.0cm、器高1.05cm、底径4.0cmを測る。口径・底径の差が大きい。口縁部には黒色の煤が付着しているため、灯明皿として使われた可能性がある。底部切り離しはイト切り。

染付磁器

椀(8)　外面は暗青色で、内面は黒青色(一部黒茶色)の呉須で文様が施され、全体が丸みを帯びた形を呈す。内面の底部には細かな灰色の粒の付着物がみられる。肥前系と考えられる。

11SE005青色砂(図148)

陶器

サヤ(9)　口縁部には確認できるだけで計3箇所の凹みがみられ、体部外面には細かなカキ目が施されており、

自然釉がかかる。内外面は茶褐色を呈すが、見込み中央部は淡茶褐色に円形に変色しており、器を重ねた痕が残る。また、底部外面には他の器のものとみられる口縁部が付着していることから、下部でも重ね焼きしたと考えられる。

2）その他の遺構

11SX001（図148）

染付磁器

椀（10）　高い高台と丸みを帯びた器形を呈す。拭き取りされた畳付け以外は光沢が強い、やや白濁した透明釉が全面に施され、内外面には青灰色の呉須で文様が描かれている。素地は淡白灰色できめ細かい。肥前系と考

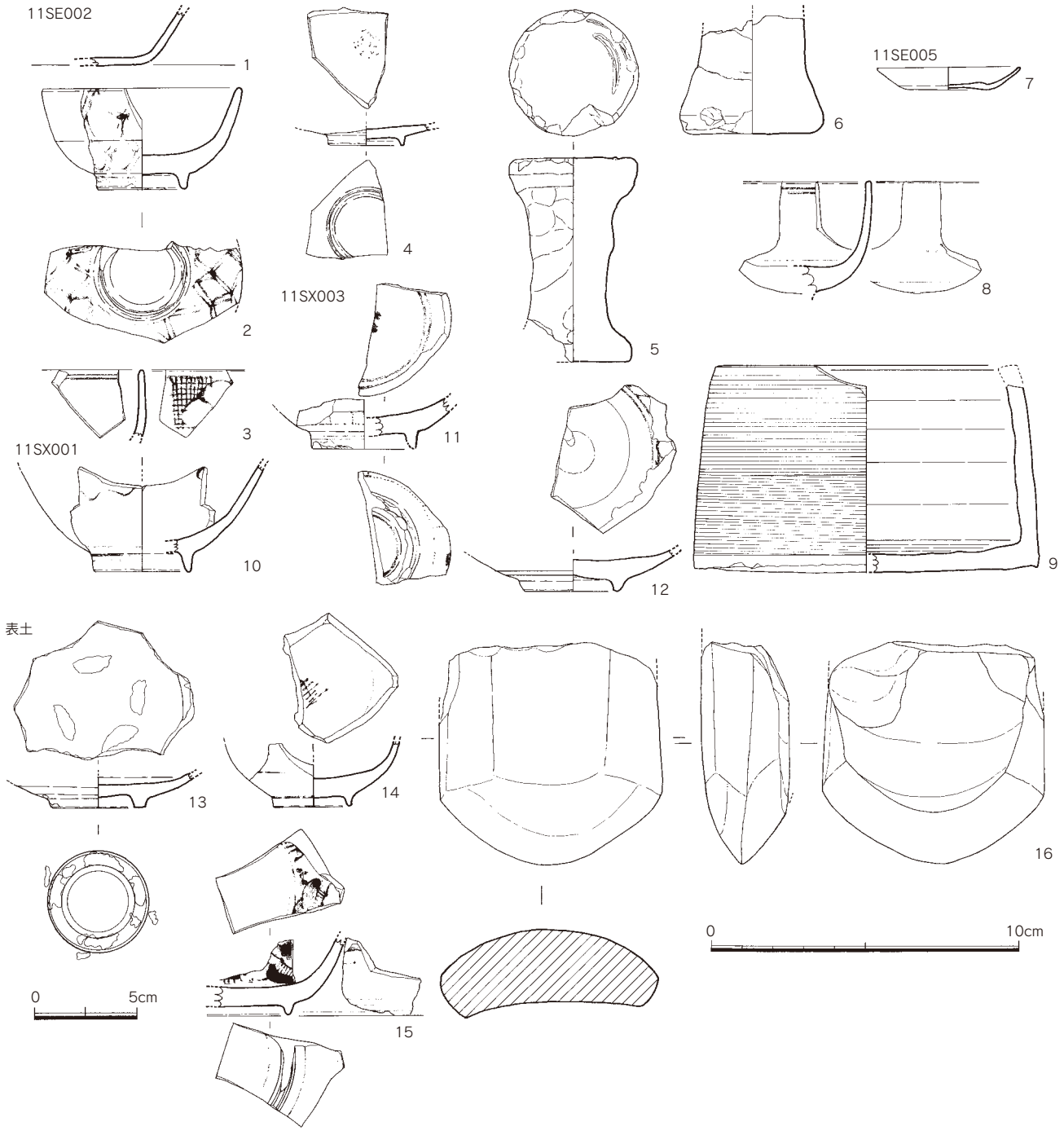


図148.出土遺物実測図（S=1/3　石器:1/2）

えられる。

11SX003（図148）

染付磁器

椀(11)　光沢の強い透明釉が全面に施され、内外面ともに青灰色(一部緑灰色)の呉須で文様が描かれる。高台畳付けは欠損のため確認できない。素地はやや茶色味を帯びた灰色できめ細かい。肥前系と考えられる。

皿(12)　11と同様に肥前系と考えられ、内面には薄青色の呉須で文様が施される。内外面ともにかかる光沢の強い透明釉は白濁し、細かな気泡を含む。また、内面底部見込みは輪状に釉が剥ぎ取られ、高台畳付けも釉の拭き取りがみられる。素地は淡灰白色できめ細かい。

3)土層

表土(図148)

陶器

皿(13)　光沢の強い黄色味のある透明釉が全体に薄く施釉され、高台畳付けから体部外面の一部と内面見込みには目跡痕がみられる。素地は淡黄茶色でややきめ細かい。唐津産と考えられる。

染付磁器

椀(14・15)　14は小椀で、内外面ともに灰色味のある青色の呉須で文様が描かれている。釉が拭き取られている畳付け以外は、全面を光沢の強いやや青色味の白濁釉で施釉され外面はやや厚めに、内面は薄めに施釉される。素地は白色できめ細かい。15は灰色味の青色(一部青紺色)の呉須で内面には花文と考えられる文様と外面にも一部文様が施される。14と同様の素地と釉調で、内外面ともに薄く施釉される。畳付けの釉は拭き取られる。14、15ともに肥前系と考えられる。

石製品

石斧(16)　青色味のある玄武岩製。刃部のみの残存で、上面は柄部に近い方から刃部の端部にかけて緩やかな曲線を呈す。　(久味木理恵)

4.小結

今次調査では、植林が行われていたこともあり、遺構の残存状況が極めて悪い状況であった。　(中島恒次郎)

表8.日焼遺跡　第11次調査　遺構一覧

S 番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	時　期	地区番号
1	11SX001	埋甕			近世	L21
2	11SE002	井戸			近世	19
3	11SX003	窪み	暗茶色土		現代	P25
4	11SX004	埋甕			不明	S24
5	11SE005	井戸	青色砂→茶色砂		近世	M20

土層順

表土　現代

白色土　現代

日焼遺跡　第12次調査

1.基本土層

既存家屋および石垣をの解体の後、重機により表土を除去し遺構面の確認をおこなった。調査区の基盤層は西から東に傾く花崗岩風化土壌であり、傾斜に従って西から供給された土、砂質の土壌が斜めに堆積している。調査区西側では表土直下の無遺物層である黄色系土壌に直接遺構が切り込んでいる。7ライン付近を境にその東側には茶色系の細かな斜堆積層が積層して現在の基盤を成しており、南側ではその小規模な堆積の間に遺構が形成された3面の不整合面が見られた。東側では無遺物と思われた黄白色土層の上面に干割れの痕跡が顕著に見られ、調査中に黄白色土層を直接覆う黄褐色土層から石器の小片が出土したことから、この干割れ痕跡は縄文時代以前に属す層と判断された。

北壁面の観察によれば調査区北東側は上からSX005やSX020などの大きな掘り込みが1m以上あり、この部位に置いて、近世以降は遺構面としての保全は難しかったものと想定される。

2.遺構

1）掘立柱建物

本調査区において検出された建物に係わるPitは直径0.3m内外の小規模なものばかりで、
柱痕跡を残すものも稀に見られた。建物の復原に当たっては層位および土色の近似するものを対象に基本的には直交軸上で展開するものを積極的に採用したが、柱間などはばらつきが大きなものもある。また、補修などの可能性も含め柱間にのる小規模な柱穴も拾っている。

12SB085（図152）

2間×4間の東西棟である。梁方向の柱間(b-c、c-d、g-h、h-i間)は2.15mと均一である。北側の桁方向(i-j、j-k、k-a、a-b間)は0.9 ～ 3.05m、南側の桁方向(d-l、l-e、e-f、f-g間)は0.6 ～ 2.1mと柱間にばらつきがある。建物の建造方向は東に45度(N45－29′E)振れる。

12SB090（図152）

調査区南東隅付近で検出した建物である。梁行2間×桁行3間を基本とする東西棟である。北側の梁方向の柱間はa-b間で0.8m、b-c間で2.75mを測る。南側の梁方向の柱間はh-j間で1.2m、j-k間で0.7m、k-l間で1.45mである。 kでは礎盤とみられる石が据えられていた。西側の桁方向の柱間はa-n間で1.85m、n-m間で1.75mである。東側の桁方向の柱間はc-d間で1.2m、d-e間で1.85m、e-g間で1.05m、g-h間で0.95mを測る。桁梁方向ともに柱間にばらつきがある。建物の建造方向は東に45度(N45－49′E)振れる。

12SB095（図152）

調査区中央付近で検出した建物である。？間×？間の東西棟である。西側の梁方向の柱間はa-b間で1.5m、b-c間で1.4m、c-d間で0.75mを測る。東側の梁方向はg-h間で0.8m、h-i間で0.85m、i-j間で1.05m、j-k間で0.85mの柱間を測る。北側の桁方向の柱間はd-e間で1.3m、e-f間で1.5m、f-m間で0.75m、m-n間で1.95mを測る。南側の桁方向はk-l間で3.0m、l-a間で2.45mの柱間を測る。建物の造営方位は東に78度(N78－E)振れる。

12SB100（図153）

調査区中央付近で検出した建物である。1間×2間の東西棟である。西側の梁方向の柱間はa-b間で2.8m、b-c間で1.8mを測る。東側の梁方向はf-g間で1.0m、g-h間で0.75m、h-i間で1.4m、i-j間で1.5mの柱間を測る。建物の造営方位は東に87度(N87－30′E)振れる。

12SB115（図153）

調査区南西側で検出した建物である。2間×2間の東西棟である。建物の造営方位は東に37度(N37－16′E)振れる。

12SB125（図153）

調査区南東側で検出した建物である。調査区により北東側は未検出である。2間×2間以上の南北棟である。

図149.日焼遺跡第12次調査　遺構配置図（S=1/150）

南側の梁方向の柱間はa-g間で1.4m、g-f間で0.8mを測る。西側の桁方向の柱間はa-b間で1.0mを測る。東側の桁方向はf-e間で0.75m、e-d間で0.9mの柱間を測る。建物の造営方位は東に27度(N27－15′E)振れる。

12SB130（図154）

調査区南西側で検出した建物で、2間×3間の東西棟である。東側の梁方向はe-f、f-g間で1.55m、西側の梁方向ではb-k間で1.2m、k-a間で1.4mを測る。北側の桁方向はb-c間で1.45m、c-d間で1.4m、d-e間で1.85mを測る。南側の桁方向はa-j間で1.35m、j-i間で1.0m、i-h間で2.3mを測る。建物の造営方位は東に74度(N74－21′E)振れる。

12SB135（図154）

調査区の北西側で検出されたもので、基本的に2間×3間の東西棟である。東側の梁方向はi-h間で1.15m、h-g間で0.85m、g-f間で0.9mを測る。西側の梁方向ではa-b間で1.35m、b-c間で1.45mを測る。北側の桁方向はc-d間で1.45m、d-e間で1.05m、e-f間で1.45m、南側の桁方向ではi-k間で1.5m、k-l間で2.1m、l-a間で1.35mを測る。建物の造営方位は東に72度(N72－53′E)振れる。

12SB140（図154）

調査区の北西側で検出されたもので、西側は調査区外になる。建物の造営方位は東に45度(N45－44′E)振れる。

12SB145（図155）

調査区中央付近で検出されたもので、基本的に3間×4間の南北棟である。北側の梁方向はa-b間で1.3m、b-c間で0.8m、c-d間で0.4m、d-e間で0.8mを測る。南側の梁方向はi-j間で2.4m、j-k間で0.9mを測る。東側の桁方向はe-f間で0.8m、f-g間で1.65m、g-h間で2.15m、h-i間で1.0mを測る。建物の造営方位は東に26度(N26－33′E)振れる。

12SB150（図155）

調査区中央付近で検出されたもので、基本的に2間×2間の正方形の建物である。北側の梁方向はa-h間で2.65m、h-g間で2.9m、南側の梁方向でc-d間で造営方位は西に1.7m、d-e間で3.85mを測る。東側の桁方向はa-b間で3.85m、b-c間で1.85m、西側の桁方向ではe-f間で2.5m、f-g間で3.2mを測る。建物の造営方位は東に12度(N12－50′E)振れる。

2)溝

12SD009（図156）

調査区西側で検出された溝である。南は近世以降のたまり状遺構(12SX035)によって削平を受ける。溝の規模は長さ7.85m、幅0.5～1.05m、深さ0.1mを測る。

12SD015（図156）

調査区北西側で検出された溝である。南東側は18世紀中頃以降のたまり状遺構(12SX020)によって削平される。溝の規模は長さ7.0m、幅0.3～0.98m、深さ0.35mを測る。

12SD187（図156）

調査区南西側で検出された溝である。12SD188に切り込み交差する位置関係にある。溝の規模は長さ8.65m、幅0.5～0.8m、深さ0.1～0.3mを測る。埋土は茶灰色土単層である。溝底の傾斜から北西から南東に流れていたと考えられる。

12SD188（図156）

調査区南西側で検出された溝で、12SD187と交差する位置関係にある。溝の規模は長さ8.45m、幅0.5～0.65m、深さ0.2mを測る。埋土は暗茶色土の単層である。

3)土坑

12SK025（図156）

調査区北西側で検出された土坑である。土坑の形状は東西に長い方形を呈す。土坑の規模は長さ1.42m、幅0.78m、深さ0.14～0.24mを測る。

図150.主要遺構図・掘立柱建物展開図(S=1/150、1/300)

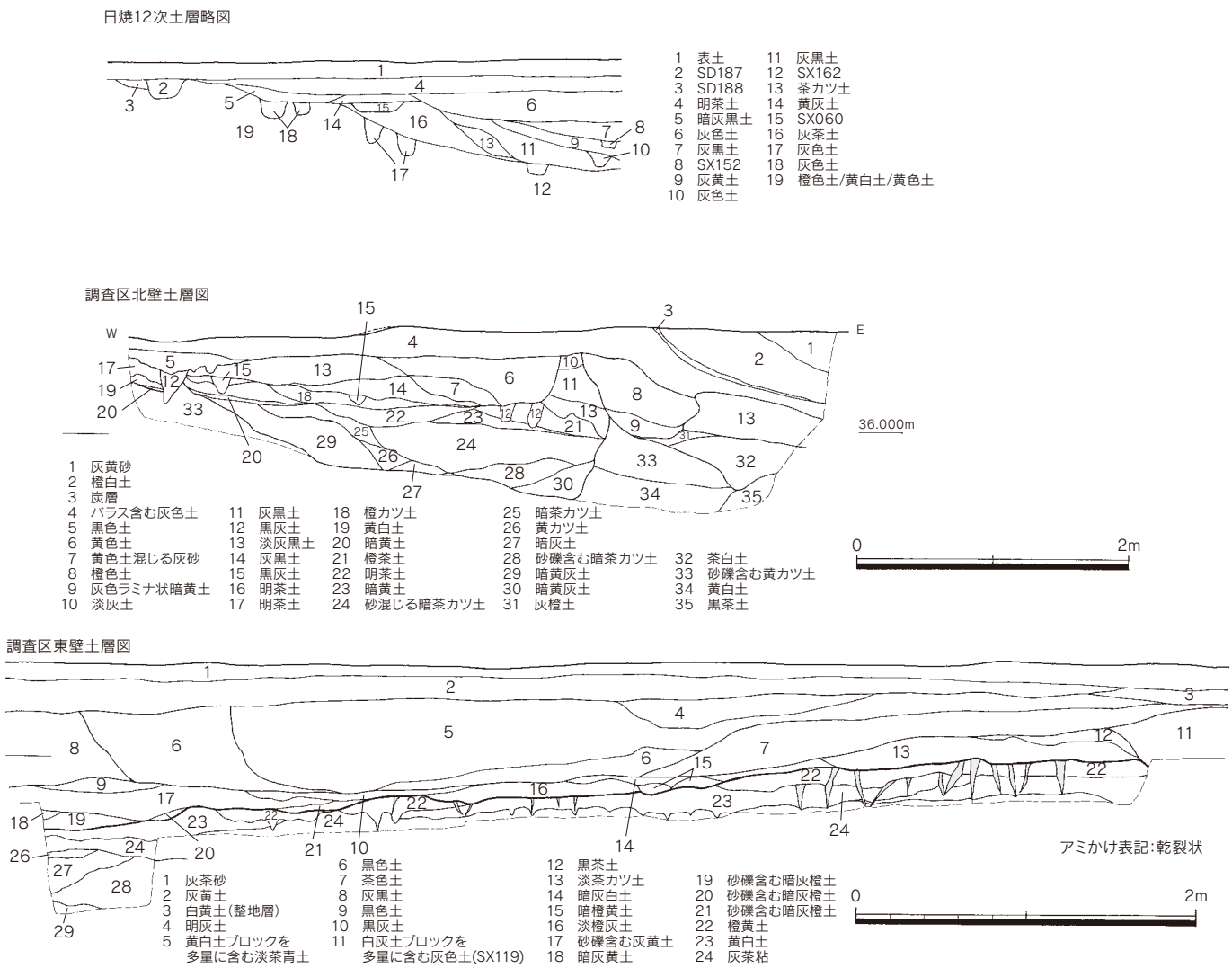


図151.土層略測図、北壁・東壁土層実測図(S=1/40・1/50)

12SK030（図156）

調査区北東側で検出された土坑である。土坑は北側が削平を受けており、全体の形状ははっきりしないが南に広がる台形状をしている。土坑の規模は長さ2.4m、深さ0.28mを測る。

12SK035（図156）

調査区の南西隅で検出された土坑である。土坑は東に延びる溝12SD065に接続し、南北に延びる溝12SD009に切り込む位置関係にある。調査区境であったため、全体形状は不明である。

12SK045（図157）

瓦質土器甕底部が埋納された土坑である。東には12SK055が隣接する位置関係にある。土坑形状は円形を呈す。直径68cm、深さ32cmを測る。

12SK050（図157）

調査区南で検出された土坑である。土坑の形状はやや南北に長い楕円形を呈す。土坑の規模は長さ1.1m、幅1.2m、深さ0.32mを測る。

12SK055（図157）

西に12SK045が隣接する位置関係にある。土坑の形状はやや南北に長い楕円形である。土坑の規模は長さ0.9m、幅0.7m、深さ0.32mを測る。

12SK070（図157）

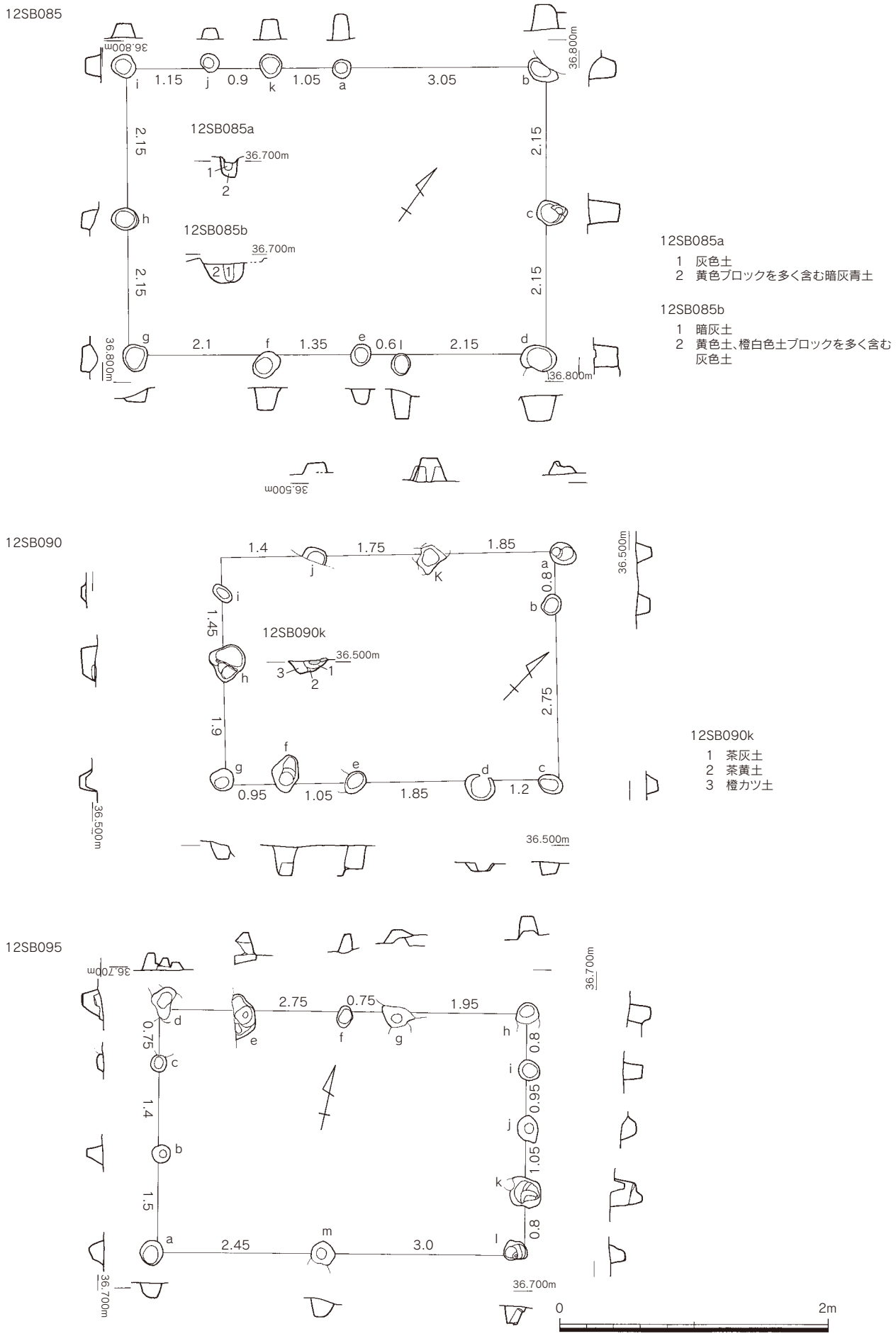


図152.建物遺構実測図(1)（S=1/80）

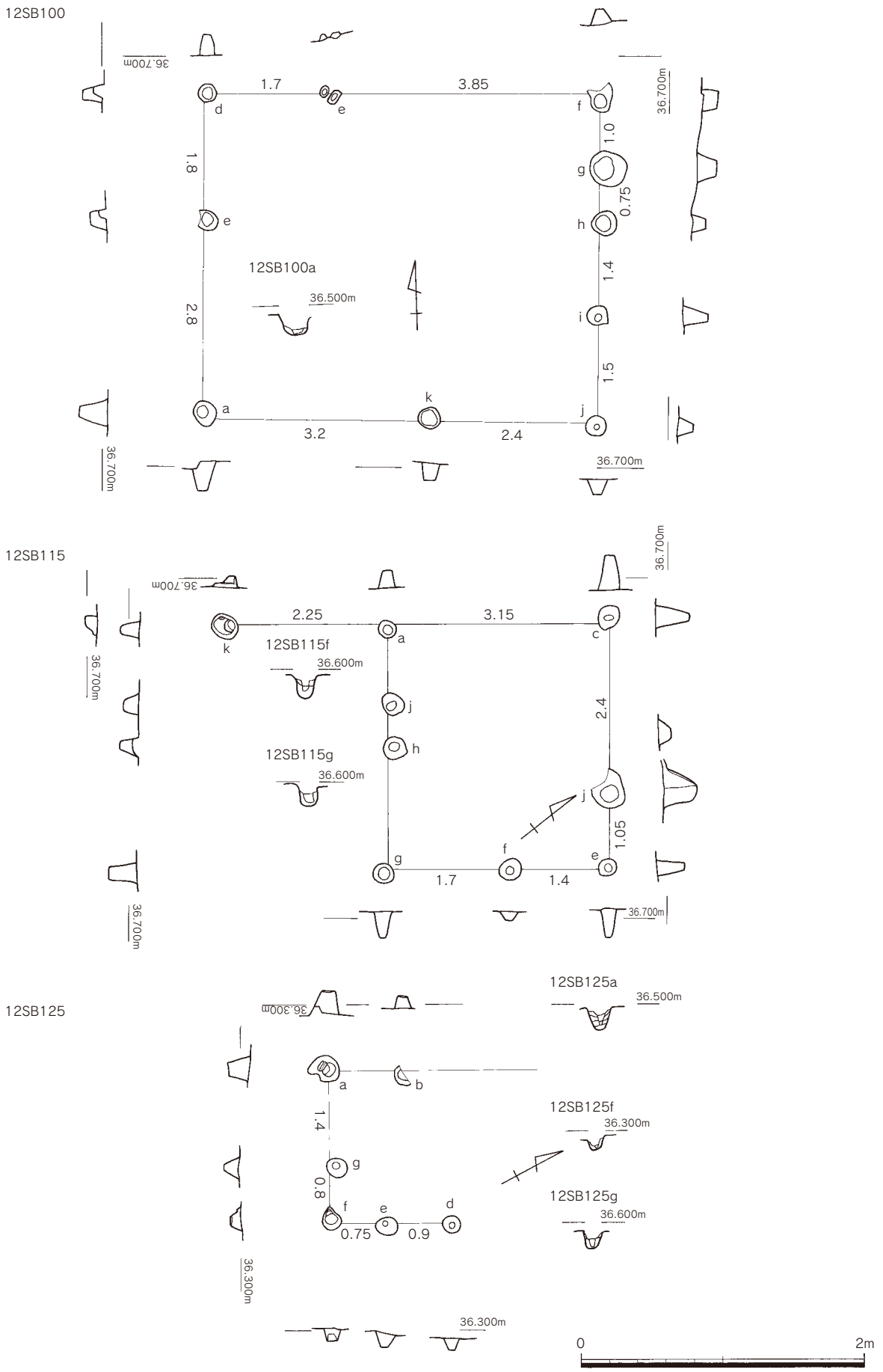


図153.建物遺構実測図(2)（S=1/80）

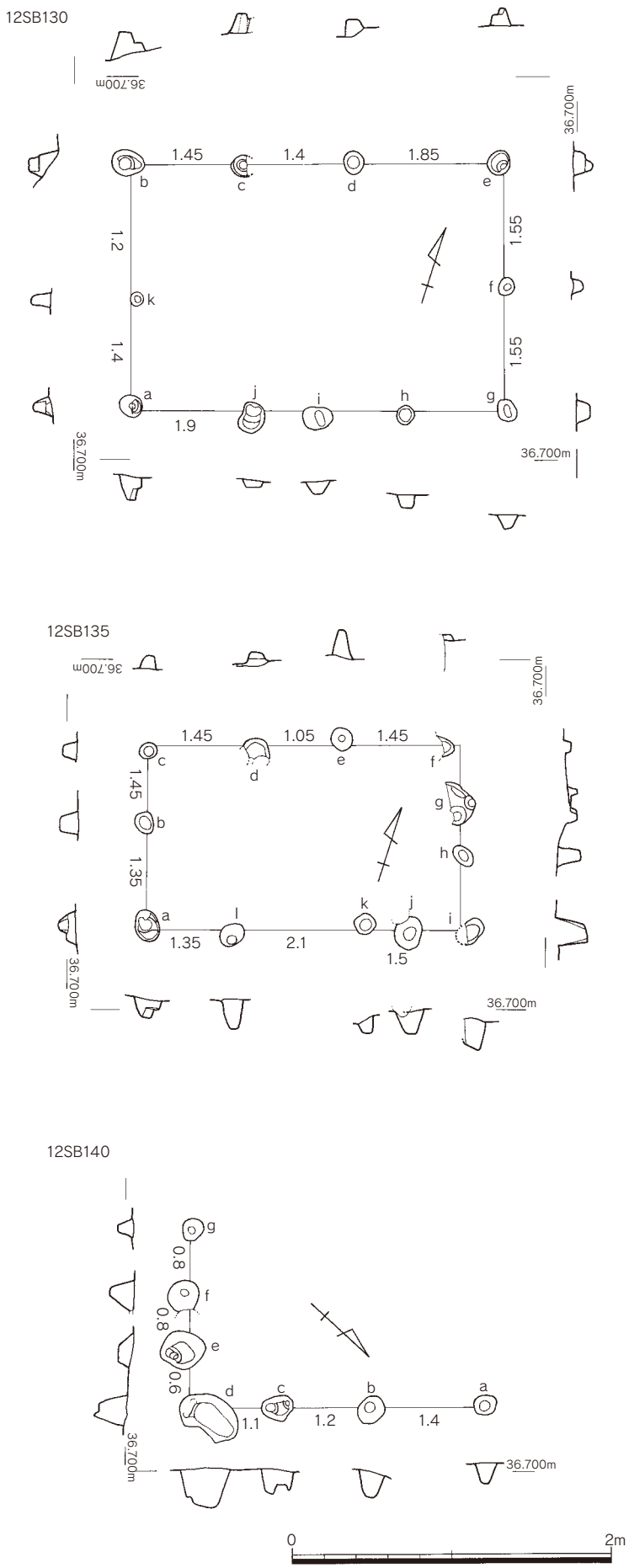


図154.建物遺構実測図(3)（S=1/80）

南北に長い楕円形状を呈す。土坑の規模は長さ0.84m、幅0.98m、深さ0.12mを測る。

12SK080（図157）

調査区南東側で検出された土坑である。土坑の形状は隅の丸い長方形を呈す。土坑の規模は長さ2.54m、幅0.8～1.3m、深さ0.2mを測る。

4）その他の遺構（鋳造関連遺構・たまり状遺構）

12SX075（図157）

調査区南側で12SX060の西に隣接する位置関係にある。東西に長い長方形状を呈す。規模は長さ1m、幅0.5m、深さ8cmを測る。遺構は橙白色粘土が薄く貼り付いている状況が確認された。

12SX060（図157）

調査区南側にある。削平が著しく遺構の性格は断定できないが、橙色粘土質の土を円形に貼っており、周辺から鍛造剥片が少量出土している。橙色粘土層内の堆積である灰色土を除去すると円形状のくぼみが確認された。橙色粘土層の形状から、被熱の痕跡や炭の堆積は確認できなかったが、炉の可能性も考えられる。

12SX020（図158）

調査区北東側の1/4を締める規模のたまり状遺構である。深さ0.2～0.65mを測る。

12SX166（図158）

調査区中央東側に展開するたまり状遺構である。深さ0.4mを測る。

（山村信榮・柳智子）

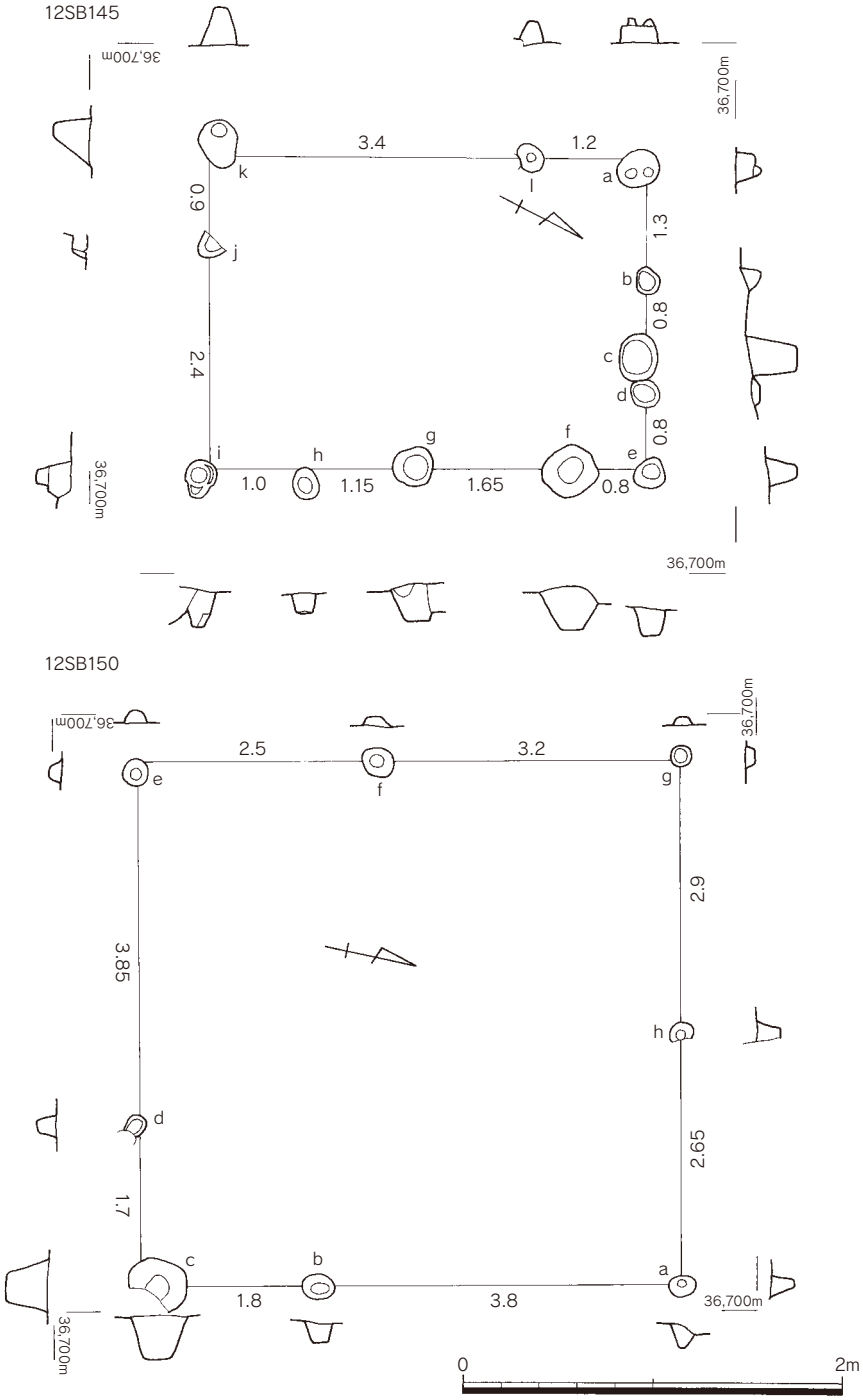


図155.建物遺構実測図（4）（S=1/80）

3. 遺物

1）溝

12SD015茶色土（図159）

土師質土器

鍋（1）　口縁部のみの小片である。白色砂粒を多く含む粗雑な胎土で、焼成は良好。内面にヨコ方向のハケ目があり、外面に煤が付着する。口縁端部は貼り付けの玉縁形状を呈し、鍋（E-a）と考えられる（山村1990）。

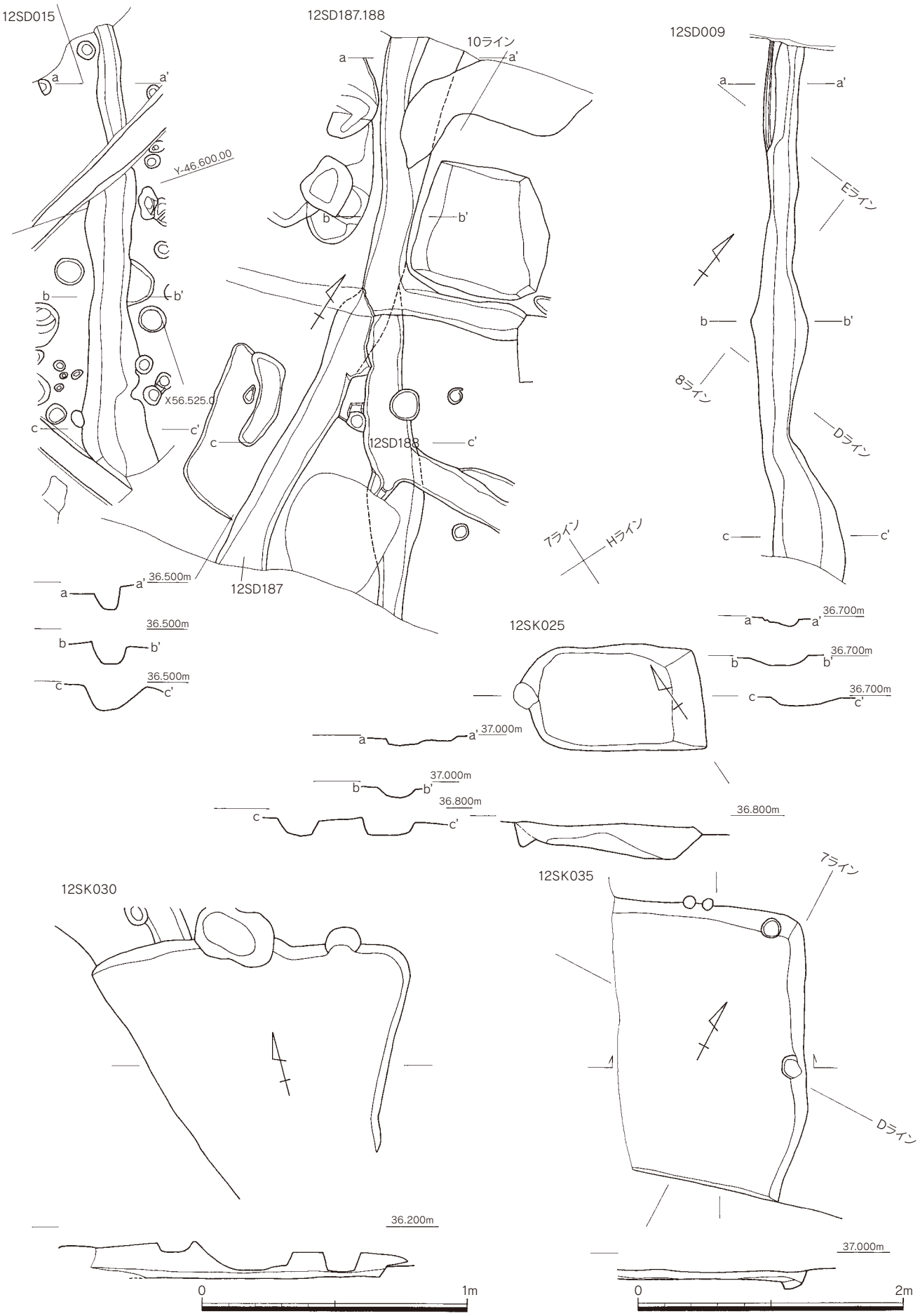


図156.溝および土坑遺構実測図(S=1/20、1/40)

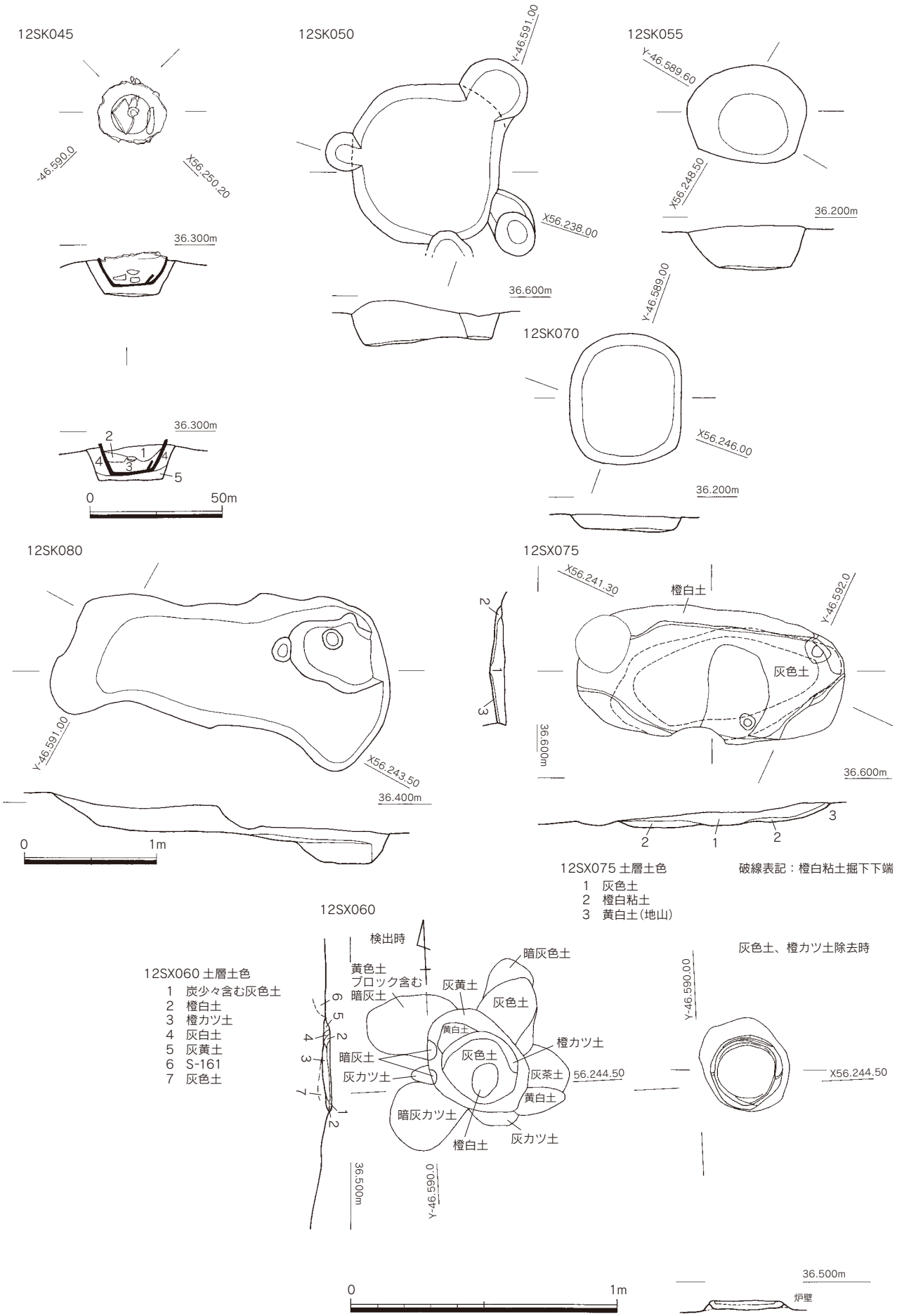


図157.土坑およびその他の遺構実測図(S=1/20、1/40)

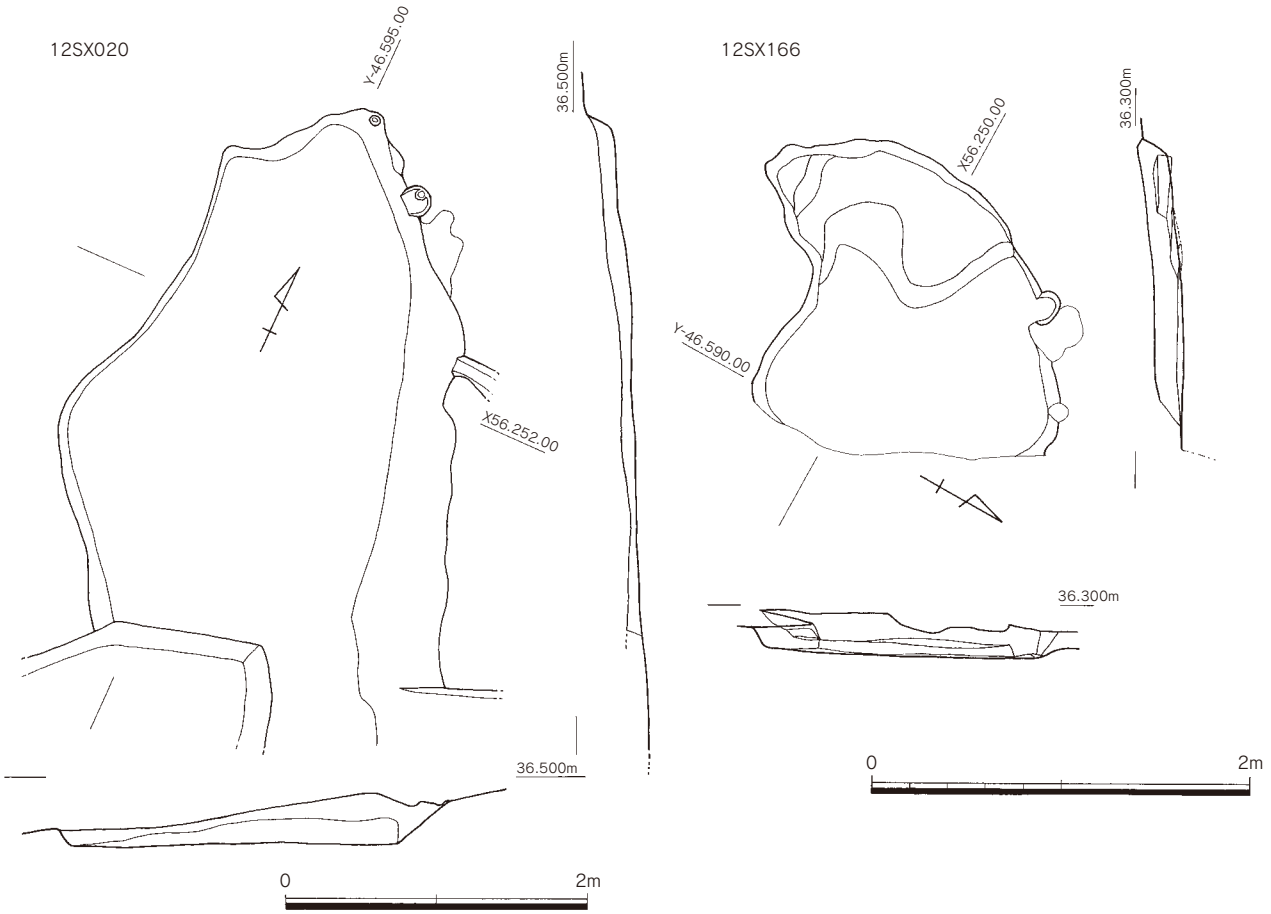


図158.その他の遺構実測図(S=1/40、1/50)

12SD015灰色土(図159)

土師質土器

すり鉢(2)　底部のみの小片である。白色砂粒をわずかに含み精良な胎土である。焼成は良好。内底部にすり目が確認できることから、すり鉢(D－Ⅱ)と考えられる(山村1990)。

2)土坑

12SK020灰茶土(図159)

土師質土器

火鉢(1・2)　1は頸部から体部にかけての小片である。頸部との境には一条の沈線が巡り、菊花のスタンプ文が確認できる。胎土は淡灰褐色で細かな砂粒をわずかに含み、精良である。調整は摩耗のより不明。2は口縁から体部下半にかけての破片である。口縁端部は二次比熱によって褐色を呈し、内面には褐黒色の煤が付着している。ヨコ方向のナデ後、口縁部にかけて指頭圧痕がみられる。口縁は平坦で、外面には体部上半に二条の貼り付け突帯がめぐり、突帯の間に菊花のスタンプ文が配される。胴部はハケ状のナデが確認でき、体部下半には貼り付け突帯が一条めぐっている。胎土は白色砂粒がを多く含みやや粗い。

瓦質土器

釜(3)　体部のみの破片である。外面はミガキが確認でき、頸部近くに巴文のスタンプがめぐる。胎土は暗灰色で、大粒の砂粒を含みやや粗い。

陶器

端反椀(4)　口縁から体部にかけての小片である。素地は淡白灰色で、砂粒をわずかに含み精良である。

12SK030（図159）

土師質土器

釜(1)　口縁から肩部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデ調整で、外面口縁から頸部にかけて4重の菱形文がスタンプされる。胎土は淡褐白色で、砂粒と角閃石を多く含みやや密である。肩部がなで肩であるこ

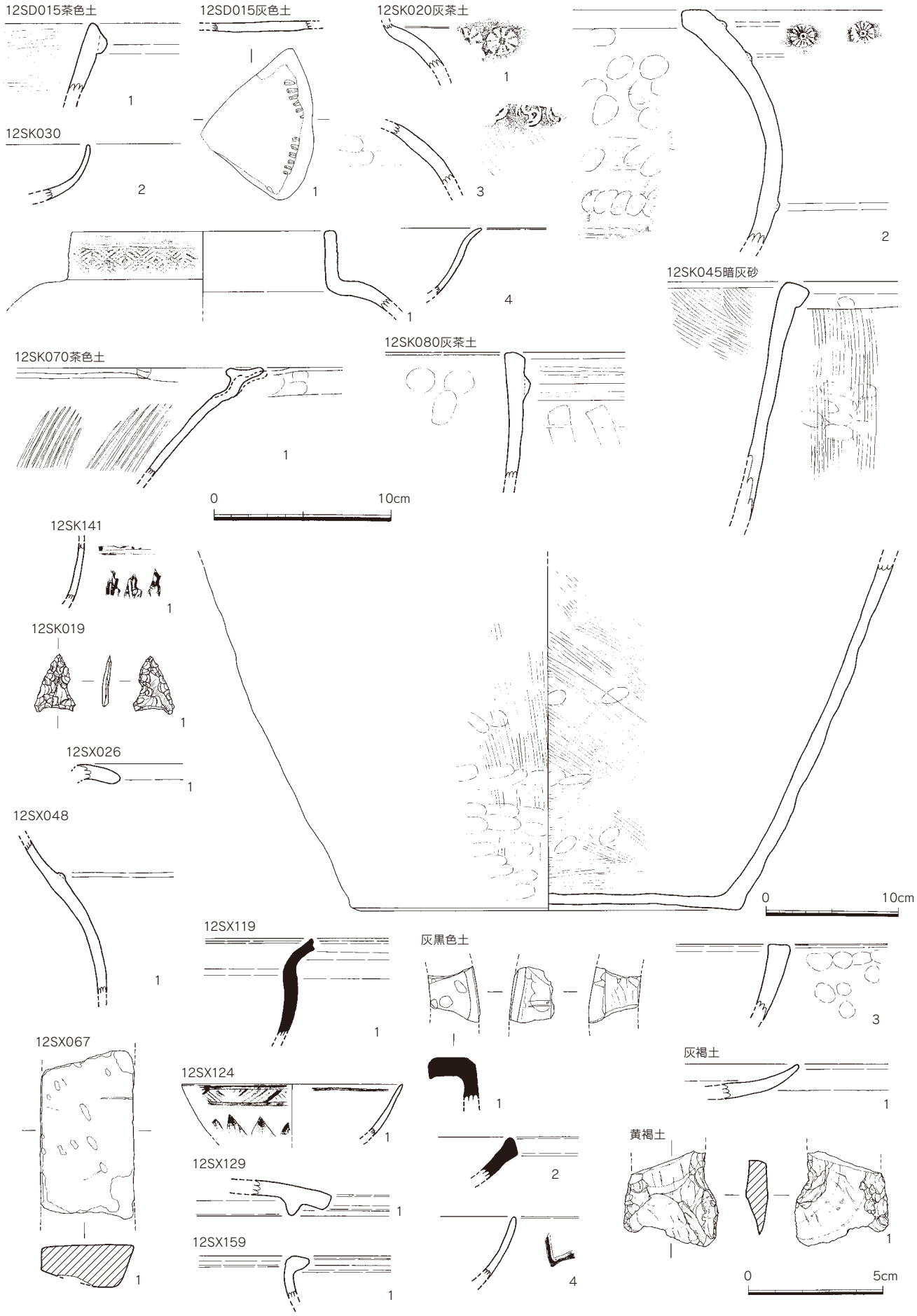


図159.出土遺物実測図(S=1/2、1/3、1/4)

とから、釜（Ⅰ）と考えられる（山村1990）。

陶器

小椀（2）　口縁から体部にかけての小片である。口縁は内湾し、素地は灰黒色で砂粒を多く含みやや粗い。釉調は暗緑灰色で薄く施釉され、細かな貫入が入る。唐津系。

12SK045暗灰砂（図159）

瓦質土器

甕（1・2）　1・2は同一個体。1は口縁から体部にかけての破片である。口縁端部は粘土貼り付けにより玉縁状を呈す。2は底部から体部下半にかけての破片である。内外面ともに表面剥離が著しいが、内面にはヨコハケ、外面にはタテハケ後指によるヨコナデが確認できた。胎土は黒灰色で、砂粒を多く含み粗い。

12SK070茶色土（図159）

陶器

すり鉢（1）　口縁から体部にかけての破片である。口縁部はかえりのついた上向きの形状で、片口のナデが確認できる。内外面ともに回転ナデ調整で、内面にすり目がある。口縁部分に鉄釉が施され、素地は赤灰色で精良。

12SK080灰茶土（図159）

瓦質土器

火鉢（1）　口縁から体部にかけての小片である。内面は回転ナデ後指頭圧痕で調整され、外面には貼り付け突帯が一条巡っている。口縁端部から突帯部分にかけてはミガキが施され、突帯部分より下半にはタテナデ後ミガキで調整される。胎土は淡灰色で、砂粒をわずかに含みやや粗い。内外面ともに燻され、灰黒色を呈す。

12SK141（図159）

染付磁器

椀（1）　体部のみの小片である。素地は灰白色で、茶褐色粒子と黒褐色粒子を多く含み精良。釉調は青みがかった透明釉で、呉須による文様を施す。明染付。

3）その他の遺構

12SX019（図159）

石器

石鏃（1）　側面が欠損している破片である。タテ2.1cm、ヨコ1.6cm、厚さ0.2cmを測る。石材は腰岳の黒曜石製である。

12SX026（図159）

弥生土器

壺（1）　口縁端部のみの小片である。白色砂粒を多く含み、やや粗い胎土である。調整は摩耗により不明である。

12SX048（図159）

弥生土器

甕（1）　体部のみの小片である。肩部に貼り付け突帯が一条めぐる。胎土は淡褐茶色で、砂粒を多く含み粗い。須玖式。

12SX067（図159）

石製品

砥石（1）　両端が欠損している破片である。石材は淡褐白色の泥砂岩で、四面ともに使用痕が確認できる。小型できめが細かな石材であることから、手持ちの上砥と考えられる。

12SX119（図159）

須恵器

中甕a（1）　口縁から体部にかけての小片である。内外面ともに回転ナデ調整で、口縁端部には沈線状に窪み、外反する。胎土は灰色で白色砂粒と黒褐色粒子を多く含みやや精良。

12SX124（図159）

磁器

椀(1)　口縁の小片である。復原口径12.4cmを測る。素地は淡乳白色で細かな茶色粒子と暗灰色粒子を多く含み、精良。釉調は内外面ともに青みがかった透明釉で、呉須によって文様を配す。口縁に鉄釉で口紅を施す。内外面に粗めの貫入が見られる。明染付。

12SX129（図159）

瓦質土器

釜蓋(1)　口縁のみの小片である。口縁のかえり部分は粘土貼り付けである。天井部はナデで、内面はハケ目で調整される。微細な砂粒を含みやや精良な淡茶灰色の胎土である。

12SX158（図159）

陶器

壺×耳壺(1)　口縁のみの小片である。素地は茶褐色で、白色砂粒を多く含み精良。釉調は暗淡茶灰色である。素地特徴は、中国製陶器B群である。

4)土層

灰黒色土(図159)

須恵器

瓦塔(1)　ケズリ及び指頭圧痕によって調整され、屈曲したカーブをもつ小片である。胎土は白色砂粒と茶褐色粒子を含み精良である。焼成良好で、暗灰色に堅く焼き締まっている。瓦塔の一部の可能性がある。

須恵質土器

鉢(2)　口縁端部のみの小片である。口縁は玉縁状を呈し、内外面ともに回転ナデ調整である。胎土は白色砂粒と黒褐色粒子を含みやや粗い。暗灰色で焼成良好。東播系。

瓦質土器

鍋(3)　口縁部のみの小片である。口縁端部は平坦で四角形状で、内面はヨコナデ、外面にはナデ後指頭圧痕の調整が施される。胎土は淡燈褐色で、白色砂粒と黒褐色粒子、雲母を含みやや粗い。鍋(D-Ⅱ)と考えられる(山村1990)。

龍泉窯系青磁

椀(4)　口縁のみの小片である。口縁部はやや内湾し、外面にラマ式連弁の一部が認められる。釉調は厚く緑灰色を呈し、素地は灰白色で、茶褐色粒子と黒褐色粒子を多く含みやや精良。

灰褐色土(図159)

土師質土器

焙烙(1)　口縁から体部にかけての破片である。胎土は橙茶褐色で、白色砂粒や黒色粒子を多く含みやや粗い。調整は摩耗により不明。

黄褐色土

石器

ブレイド(1)　タテ2.9＋αcm、ヨコ3.3cm、厚さ0.85cmを測る。上部が欠損している破片である。両端の刃部加工がみられる安山岩製である。　（柳智子）

4.小結

1）建物群について

掘立柱建物は出土遺物も少ない状況がある中で柱穴が直径0.2mに満たず、小規模なものまでを採用して復原しており、おのずと限界のある状況ではあるが、方位の近似性から５つの群のあることが想定される。すなわちSB150を主体的な建物として、副次的建物をSB130とするA群。SB100を主体的な建物として、副次的建物をSB110・135とするB群。SB085を主体的な建物として、副次的建物をSB090・135とするC群。SB115を主体的な建物として、副次的建物をSB125・140とするD群。そしてSB095（E群）である。柱穴の先後関係からB群

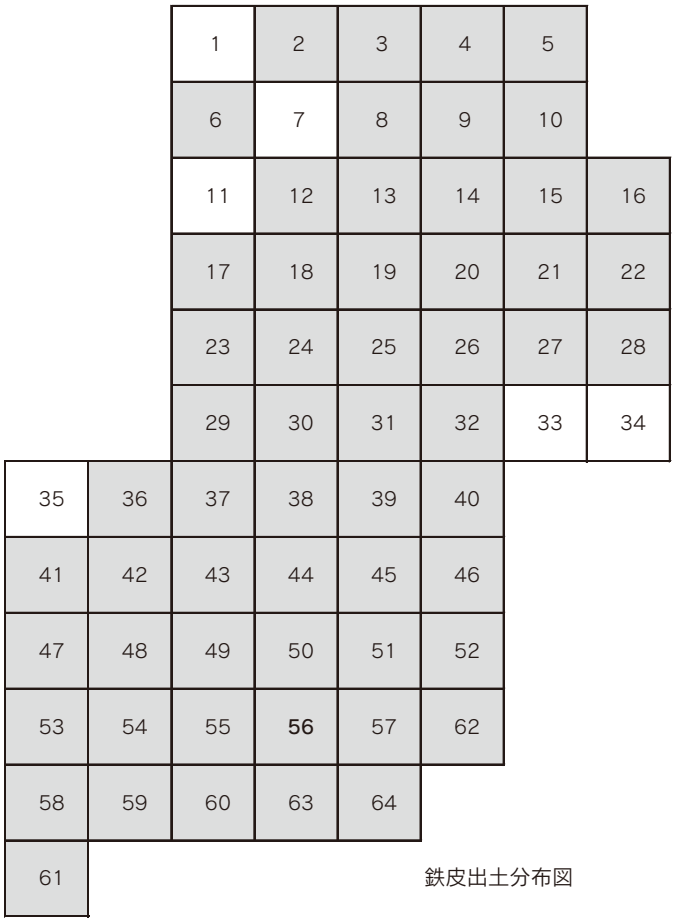
→E群→A群の順になることが分かっている。建物群の帰属する時期はおおよそ中世末から近世にかけてのものと考えられる。江戸中期以降の本向佐野地区の地域相は墓石の記録などにより近代まで安定して構成される家などは変化していない。本調査区にある花田家も向佐野地区を構成する一つのイエであるが、その居所としての継続的な利用に本建物群がつながる可能性を示しており、近世的な村の発展段階を追う資料として注目される。

2）金属生産関連遺構について

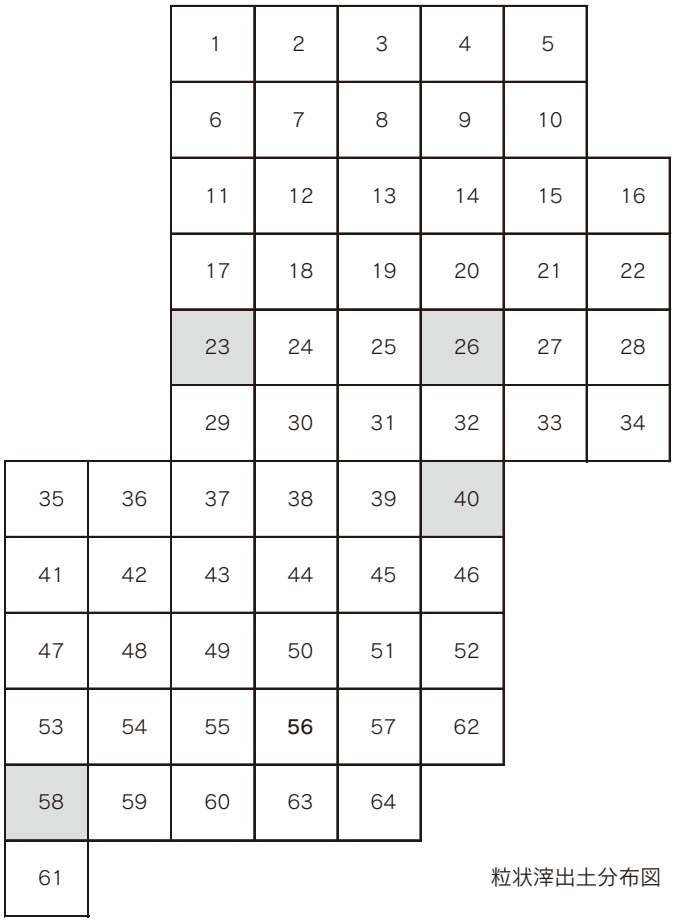
金属生産関連遺構は調査区南側で検出されたSX060が挙げられる。この遺構は掘立柱建物SB130を切って形成されている。遺構は橙色粘土質の土を円形に貼っており、炉の可能性も考えられる。このことからSX060を中心に0.5m四方でメッシュを設定し、土を取上げ微細遺物の調査を行った。その結果、鍛造剥片、鍛冶滓、粒状滓、鉄皮、砂鉄などの微細遺物が出土した。SX060周辺に集中して鍛造剥片、鍛冶滓、鉄皮が分布し、粒状滓は周辺で散逸的に分布している。ただし、出土量は総重量で35.7ｇと少量であり、遺構として確認できたのはSX060のみである。このような状況から向佐野地区で継続的に金属生産を行っていたというよりは、単発的な生産の可能性が考えられる。（山村信榮・柳智子）

引用文献

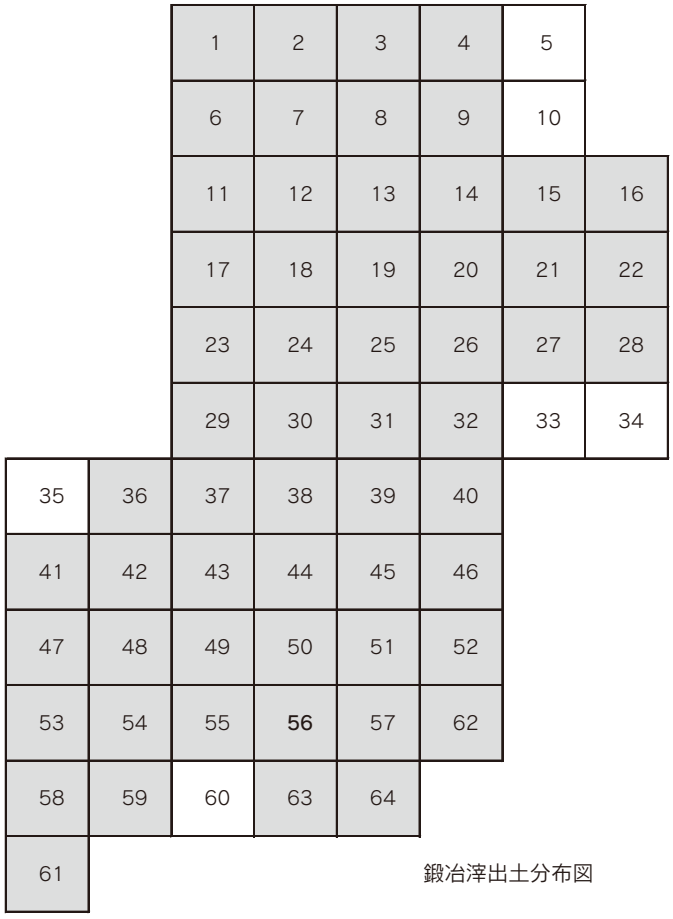
山村信榮（1990）「太宰府出土の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会



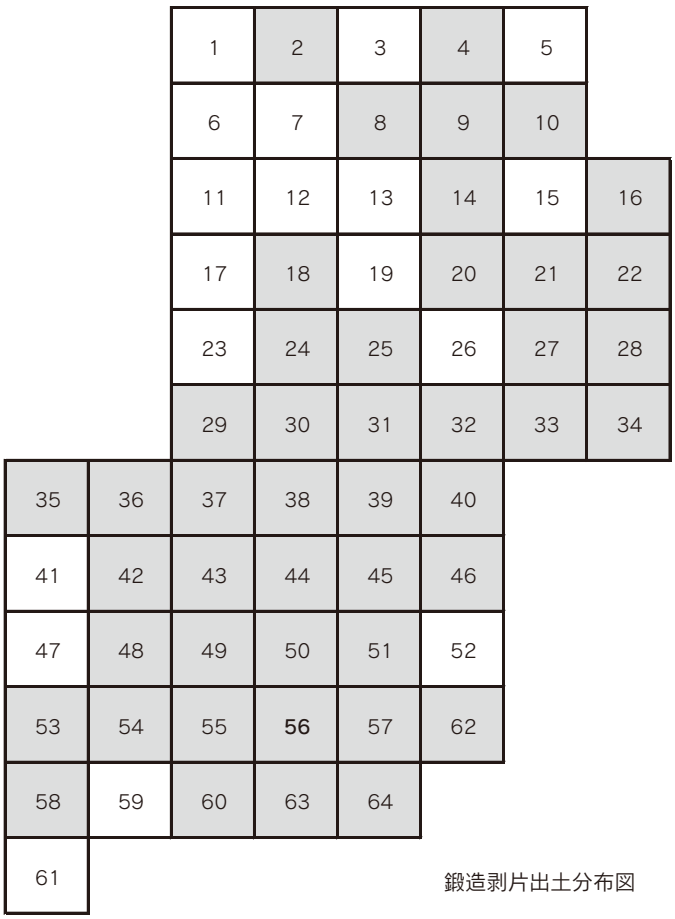
鉄皮出土分布図



粒状滓出土分布図



鍛冶滓出土分布図



鍛造剥片出土分布図

図160.金属生産関連遺物分布図

日焼遺跡　第13次調査

1.基本土層

地表下約0.2m ～ 0.3mほどを宅地造成のための表土が覆っており、その下位に遺物包含層である茶色土が堆積していた。遺構形成面を構成する基盤層は、赤褐色土であった。

2.遺構

1）掘立柱建物関係遺構

13SB045

調査区北東部にて検出した建物で、2間×2間の掘立柱建物と考えられる。柱筋が直交軸を基調とせず、かつ柱の深さが一定していないため、簡易な建物であったと考えられる。梁行7.46m×桁行5.26m、柱間は、2.26m ～ 4.15mと一定していない。

2）溝

13SD010

調査区南西隅に確認したもので、やや湾曲気味に調査区南東から北西へと伸びている。後述する13SD020と平行するものと考えられる。検出した遺構規模は、検出長6.0m、深さ0.5mを測る。堆積土は、褐色系の土を基調としており、水流は想定できないものであった。遺構間関係は、下位より13SD030→13SD010→13SX044→13SX029である。

13SD015

調査区西側にて検出した溝で、調査区北西から南西へ直線的に伸びている。遺構規模は、全長26.0mほどを確認し、幅1.4m、残存する深さ0.4m ～ 0.45mを測る。溝内の堆積土は、図162に記載したように、土を基調としており、定常的な流水を想定できる状況ではなかった。なお当該遺構の南延長部分には、上位に13SX029・034が堆積しており、溝延長箇所ならびに13SD010との先後関係を確認することができていない。また13SX034の下位に確認した13SD035との関係についても調査時に精査を行ったが、堆積土の層相が近似していたことから、明らかにできていない。

13SD020

調査区西側で確認した溝遺構で、調査区南ほぼ中央部から調査区北西部へやや湾曲しつつ伸びている。遺構規模は、検出長29.3m、幅1.45m ～ 2.5mを測る。溝内堆積土は、茶系統の土を基調としつつ、部分的に灰色系の砂が堆積している。遺構間関係は、13SD035→13SD020→13SD015であった。

13SD030

調査区南西隅にて検出したもので、調査区外へ展開しているため、遺構性格を確定するには至っていない。検出長は7.5m、残存する深さ0.75mを測る。遺構間関係は、下位より13SD030→13SD010→13SX044→13SX034→13SX029であった。遺構内には黒灰色土が堆積している。道路側溝として考えているが、13SD015の長軸線上からは西へずれていることから、路盤工や13SD010の北延長溝の可能性を考慮しておく必要がある。

13SD031

調査区南部にて検出したもので、調査区を東西に横断している。遺構規模は、幅0.65m ～ 1.35m、深さ0.35mを測り、遺構堆積土は灰色砂が堆積していた。調査区内で検出された溝遺構の中で、最も新規のものである。

13SD035

調査区南西部にて検出した溝遺構で、先述した13SD020から分岐したような遺構形状をとる。13SD035として認識した遺構規模は、全長8.0m、幅1.3m、深さ0.37mであった。遺構内には明灰色土が堆積しており、水流を想定できる状況ではなかった。

3）土坑

13SK025

調査区北東部にて検出した略長方形を呈する遺構で、遺構規模、長軸長1.85m、短軸長0.9m、深さ0.46mを

図161.日焼遺跡第13次調査　遺構配置図(S=1/200)

測る。遺構内には黒灰色土が堆積していた。(中島恒次郎)

3.遺物

1)掘立柱建物関係遺構

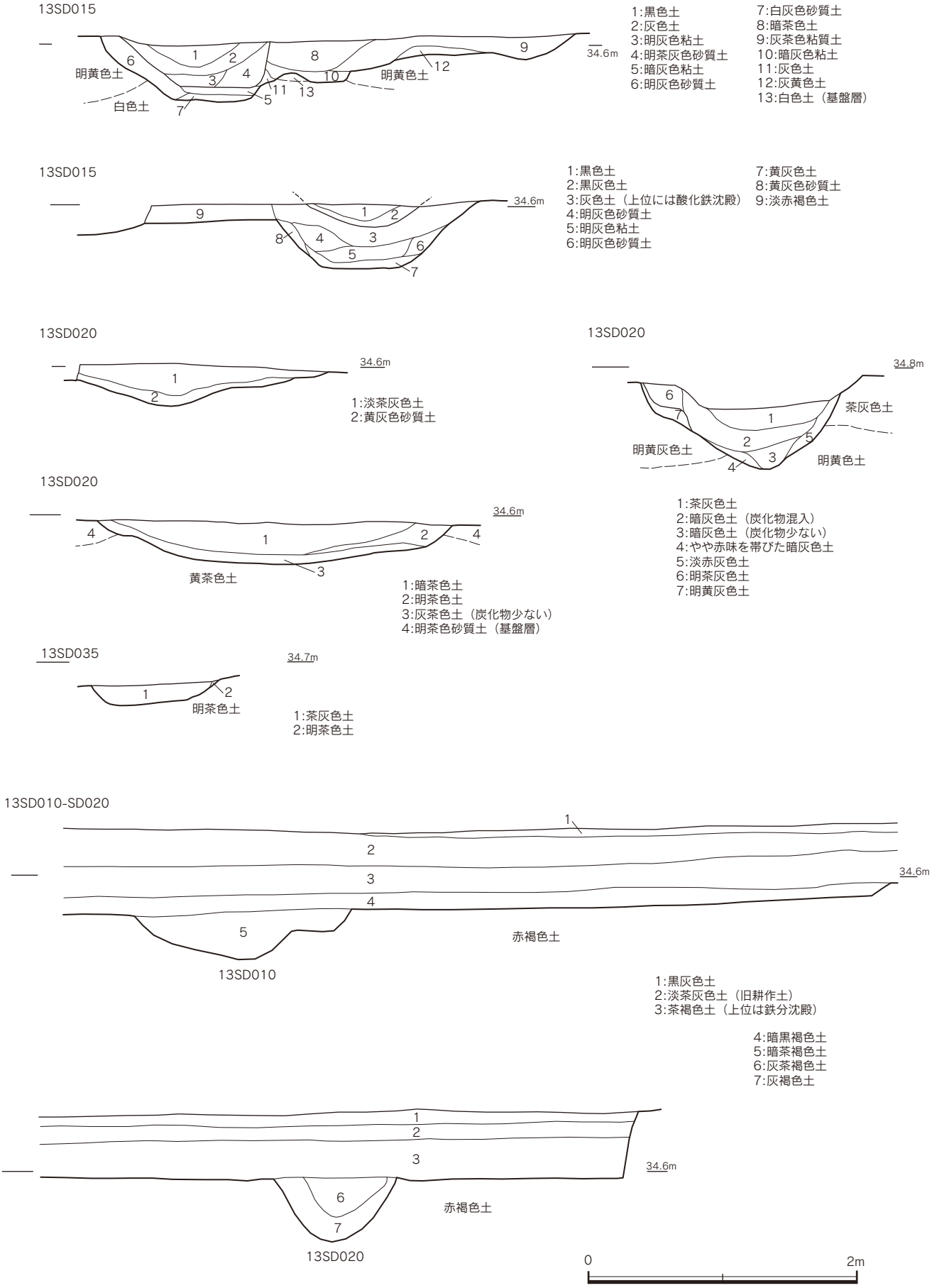


図162.道路関連遺構土層実測図(S=1/40)

13SX002（図163）

染付磁器

皿(1)　丸みをおびて内湾する形状で、内外面ともに明青色の呉須で濃淡のある圏線が描かれる。緑色味があり、光沢のある透明釉が薄く施釉されている。

図163.建物関連遺構
出土遺物実測図(3)
(S=1/3)

2)溝

13SD015（図164）

須恵器

蓋3（1）　焼成は不良で軟質だが胎土は緻密。天井部は回転ヘラケズリされ、口縁端部はやや外側に傾いた断面三角形を呈す。

坏 c(2)　高台のみの破片で、高台の形状はやや外方に傾き、平坦な接地面を呈す。焼成は硬質で胎土は緻密。還元は不良。

鉢 a(3)　口縁部の小破片。口縁端部は平坦でやや内側に傾き、体部近くは内湾する。胎土は緻密で、焼成、還元ともに良好。

13SD015茶色土(図164)

土師器

小皿 a 1（4）　焼成は不良で詳細は不明だが、大宰府編年Ｘ期以降のものと考えられる。

須恵器

坏 c(5)　底部、体部の境界は丸みを呈し、底部には高台貼り付けの回転ナデ痕がみられることから、高台が貼付されていたと考えられる。また、口縁端部に色調の変化が見られることから、重ね焼きした可能性がある。焼成は硬質で胎土は緻密、焼成、還元ともに良好。

13SD015灰色土(図164)

須恵器

坏蓋(6)　口縁部のみの小破片で、内外面ともに回転ナデで調整される。焼成、還元ともに良好。

坏 c(7)　底部切り離しは回転ヘラ切りで、切り離し後粗いナデで調整されている。また、底部見込みは回転ナデ後不定方向のナデで調整され、外面は断面四角の高台と底部、体部の境界部分がやや丸みを帯びた形状を呈する。

壺 a(8)　体部下位から底部外面は回転ヘラケズリされ、貼り付け高台を有す。底部内面は不定方向のナデで調整され、体部中部には白色の付着物が見られる。体部の最大径がやや下方に下ったもので、高台はやや外方に傾いた断面四角形を呈す。

土師器

甕(9)　口縁部のみの破片で全形は不明瞭。外面には不明瞭な刷毛目痕がみられるが、その他は摩耗が著しく調整は不明。焼成は不良で、胎土には雲母粒を多く含む。

13SD015灰茶色土(図164)

須恵器

甕(10)　口縁部の破片で、大きく外方へ開く。口縁端部外面は凹線を施している。内面と外面の端部以外は工具によるものと考えられる強いナデ回転痕が観察できる。焼成は良好で還元は不良。

13SD015灰色粘土(図164)

須恵器

椀(11)　底部外面と体部下位は回転ヘラケズリされ、体部中位は回転ナデされるがヘラケズリの可能性もある。内面体部から見込みにかけては一方向のナデ後不定方向ナデで調整される。高台形状は断面「く」の字形を有するものである。

13SD020（図164・165）

土師器

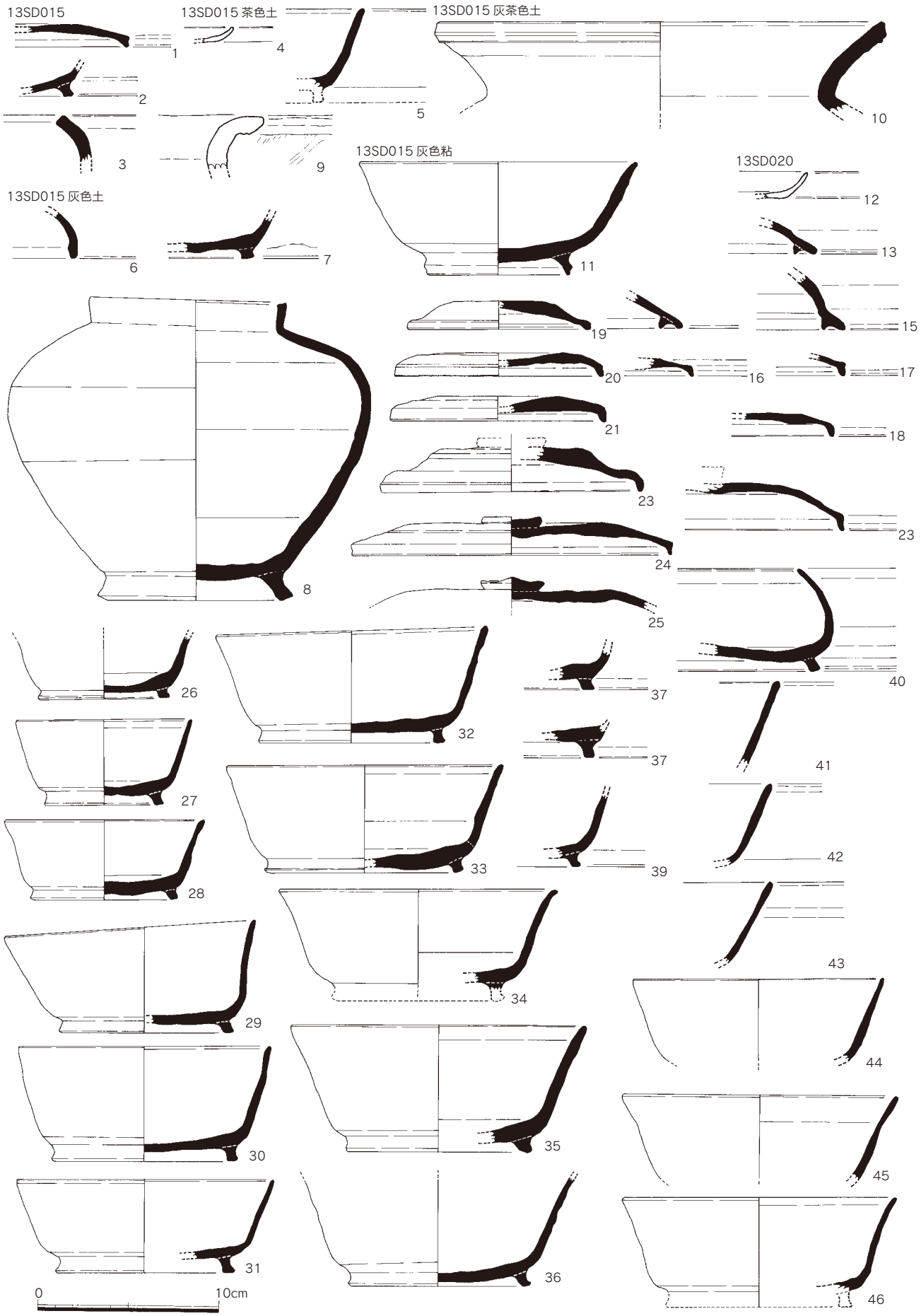


図164.道路側溝関連遺構出土遺物実測図(1)（S=1/3）

小皿ａ1（12）　焼成は不良で、全体が摩耗していて調整は判然としない。

須恵器

蓋1（13・14）　13・14すべて口縁部の小破片。13のかえりは回転ナデによって貼り付けされ、天井部外面はヘラケズリで調整される。14は13と同様、一部回転ナデがみられる貼り付けのかえりを呈すが、摩耗のためその他の調整は不明。

蓋1×坏身（15）　かえりを有すが、その成形方法は不明。天井部が残存せず調整が不明なため、坏身である可能性もある。

蓋2（16）　口縁部を折り曲げただけの形状を呈すため、蓋2と考えられる。外面上部はヘラケズリされ、胎土は緻密。焼成は良好で、還元はやや良好である。

蓋3（17）　口縁部小破片で、内外面ともに回転ナデによって調整されている。焼成、還元ともに良好で、胎土は緻密である。

小蓋3（18）　小破片のため口径推定はできないが、最大でも12cm以下と考えられるため小蓋と考えた。天井部外面は回転ヘラケズリされ、端部は回転ナデ調整、天井部内面は回転ナデ後不定方向のナデで仕上げられている。

小蓋ａ3（19 ～ 21）　口径は10.2 ～ 11.3cmと小さく、全てつまみを有しない。端部は三角形の形状を呈す。摩耗の著しい19を除いて、天井部外面は回転ヘラケズリがみられ、20はその後粗いナデ調整が入る。21の口縁部内部には輪状に白く色の変化が見られることから、重ね焼きの可能性がある。19のみは焼成が不良であるがその他は良好。還元についてはすべて良好である。

蓋ｃ3（22 ～ 24）　22、23にはつまみ自体は現存しないが、つまみ貼付のための回転ナデが天井部外面にみられることからつまみを有すると考えられる。22 ～ 24のすべてにおいて天井部外面は回転ヘラケズリされ、端部は回転ナデで三角形に成形される。天井部内面は回転ナデ後不定方向のナデによる調整がみられる。23の端部には黒色化がみられ、重ね焼きの可能性がある。また、24のつまみは扁平なボタン状を呈し、全体的に歪みが著しい。

蓋ｃ（25）　扁平な擬宝珠状のつまみが回転ナデによって取り付けられ、外面は天井部と体部の境界付近のみ回転ヘラケズリがみられる他は回転ナデによって調整されている。天井部内面には回転ナデ後にナデの調整もみられる。また、つまみ部分の胎土には白色粒が多く含まれる。口縁部は欠損して形状は不明。

小坏ｃ（26 ～ 28）　26 ～ 28すべてにおいて底部外面は回転ヘラ切りされ、その後粗いナデで調整される。また、高台は接地面が扁平な四角い形状を呈し、すべて外方へ張り出す形状を呈している。26については口縁部の欠損がみられるが、底径の大きさと体部の形状から口径は12cm以下の小型なものと考えられる。

坏ｃ（29 ～ 40）　全て底部・体部の境界に丸みを有する坏である。29 ～ 35は口径14.0 ～ 16.6cmを測り、摩耗により不明な34以外の底部はすべて回転ヘラ切りと考えられる。36 ～ 39については口縁部は欠損している。29は歪みがはげしく、体部外面下位には高台貼り付け時の粘土が粗く残っている。40も歪みが著しく、口縁端部は内側へ入り込み、体部は外側に丸く湾曲する。

坏（41 ～ 46）　41 ～ 43は口縁部のみの小破片で口径は復原できない。44 ～ 46は口径14.0 ～ 15.4cmを測る。いずれも底部は残存せず、底部切り離しや高台の有無は不明。

鉢ａ（47）　口縁部のみの小破片で、口縁端部は内傾気味の平坦面をもち、体部近くが外側に丸く湾曲しているため、ａ類だと考えられる。器厚が薄い。体部外面には回転ヘラケズリの調整がみられる。

鉢（48）　口径は16.6cmに復原される。口縁端部はやや内湾し、体部外面下位には回転ヘラケズリ調整がみられ、底部は平底を呈す。

瓶（49・50）　どちらもやや内湾ぎみの口縁部の小破片で、外面には回転ナデによって鈍い凹みがつけられる。49は7.3cm、50は7.5cmの口径を測る。体部形状が推定できる50は、平瓶と考えられる。

土師器

甕（51）　口縁部のみの小破片。内外面ともにヨコナデによる調整がみられる。

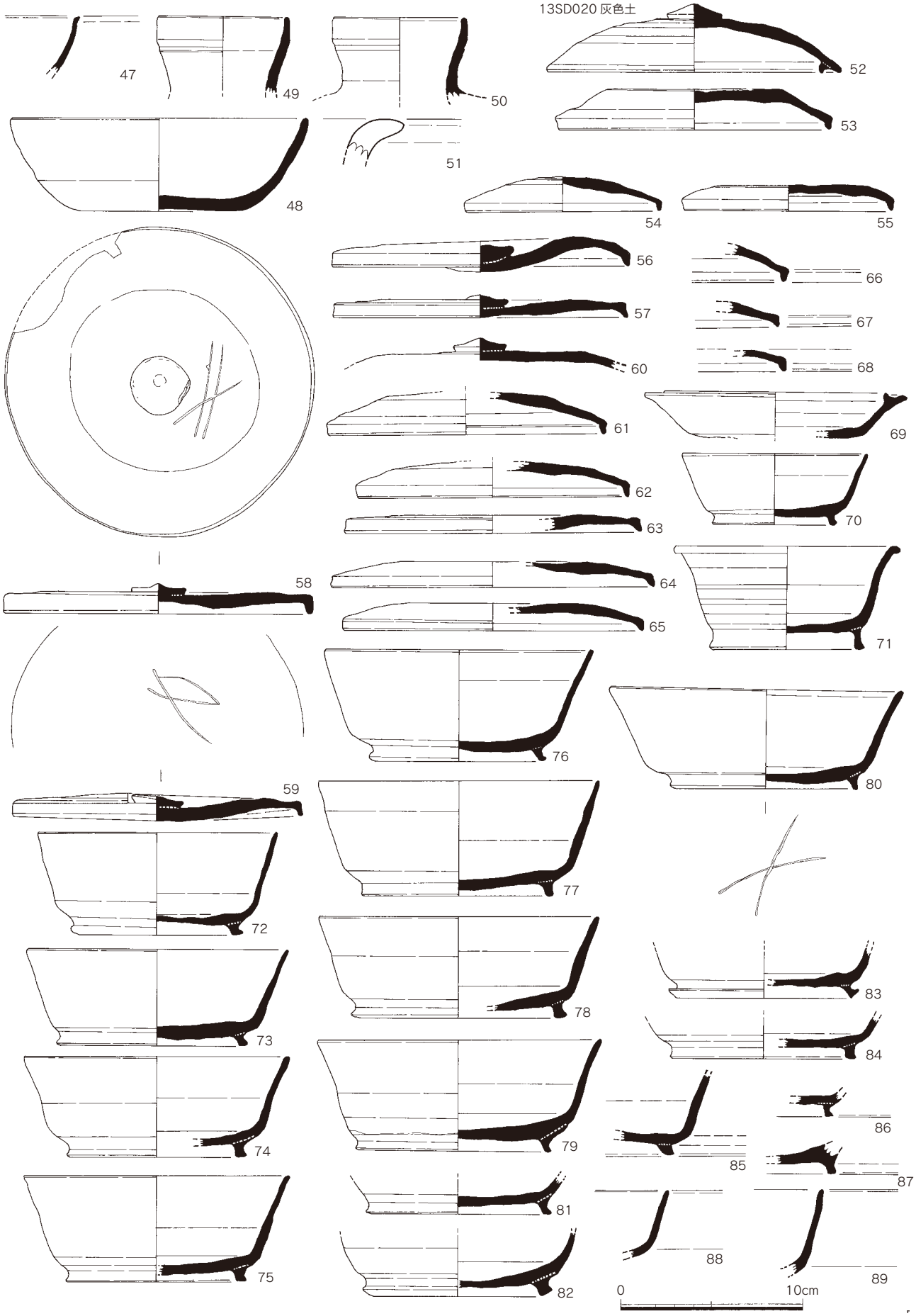


図165.道路側溝関連遺構出土遺物実測図(2)（S=1/3）

13SD020灰色土（図165・166）

蓋ｃ1（52）　やや扁平な擬宝珠形のつまみを有し、口縁部高と同じ高さのかえりを貼付している。天井部外面は回転ヘラケズリにより仕上げている。口径は16.4cmを測る。

蓋ａ3（53）　口縁端部断面は三角形を呈するもので、つまみを有しない天井部外面は粗いヘラケズリの後ナデで調整されている。また天井部内面にも不定方向のナデがみられる。口径は15.0cmを測る。

小蓋ａ3（54・55）　54は11.9cm、55は11.5cmと口径はどちらも小型で、口縁端部は三角形状に成形される。天井部内面はどちらも丁寧なナデがなされ、54は天井部外面回転ヘラケズリ、55は回転ナデで調整されている。

蓋ｃ3（56 ～ 59）　扁平な擬宝珠状のつまみがあり、口縁端部は三角形の形状を呈す。天井部外面はいずれも回転ヘラケズリで調整され、58、59についてはヘラ記号を観察することができる。口径は16.2 ～ 17.2cmを測るが、56・57・59はやや歪みを伴う。56の外面は色調の変化がみられるため重ね焼きと考えられる。

蓋ｃ（60）　天井部外面はヘラケズリと一部雑なナデで調整され、扁平な擬宝珠状のつまみを貼付する。端部形状は欠損のため不明。

蓋3（61 ～ 68）　61 ～ 65の口径は15.2 ～ 18.0cmで、64については全体的に歪みが著しい。磨耗の著しい65の他は天井部外面にヘラケズリがなされ、その後61・64はナデ、62は回転ナデで調整される。いずれも天井部内面には不定方向のナデもみられる。また、66 ～ 68は口縁部のみの破片で、天井部の調整は不明。いずれも三角形状の口縁端部を有する。62の外面と66の内面には色調の変化がみられるため、重ね焼きの可能性が考えられる。

坏身（69）　体部内面下位の一部に強い回転ナデの痕跡があることから、坏とした。ただし、その痕跡のない部分もあることから、蓋の可能性もある。底部は回転ヘラ切り未調整。

小坏ｃ（70）　口径10.3cmと小型のため小坏とした。底部切り離しはヘラ切り後、回転ナデにより調整されている。焼成、還元ともに良好。

坏ｃ（71 ～ 87）　71 ～ 80の口径は12.6 ～ 16.4cmを測る。高台については、74・75・77・84は直立気味の断面四角形を呈し、82・83は平坦面が大きく外方を向く形状、それ以外はやや外方に傾く形状を有す。また、82の体部外面下位には明瞭に屈曲がみられるが、その他は丸みを帯びた形状を有す。71に関しては口縁端部は強い外反しており、金属製品の模倣と考えられ、高台は細く高い。81 ～ 87の口縁部は欠損するため口径は不明。80の底部外面には×印のヘラ記号がみられる。

坏（88・89）　どちらも口縁部の小破片。88は摩耗が著しく調整は不明。胎土は軟質で焼成、還元ともに不良。89は焼成、還元ともに良好で、胎土は緻密。口縁部外面と体部を境目に色調が変化することから、重ね焼きの可能性がある。

壺（90）　体部は上位が強く張り出しており、内面には同心円当て具痕と、外面には格子叩き痕がみられ、体部外面中位から下位にかけて回転ヘラケズリの調整がなされる。焼成、還元ともに良好。

短頸壺（91）　ややなで肩状の肩部へ移行するものと推定できるもので、口径は5.4cmと小さい。内外面は茶色味を帯びた淡灰色を呈すが、斑点状に褐色化する所がみられる。胎土は緻密で、焼成、還元ともに良好。

鉢ａ（92）　口縁部のみの小破片で、口縁端部は平坦で内湾しており、体部に向かって外側にやや張り出す形状を呈す。胎土は精選されており、焼成、還元ともに良好。

土師器

大坏ｃ×皿ｃ（93）　底部のみの残存で、高台はやや外方に傾くが大部分の平坦面が接地する断面四角形の形状を有す。底部外面は回転ヘラケズリされ、底部外面から高台の平坦部まで黒色化がみられる。内面と外面の一部は摩耗のため調整不明。

小甕（94・95）　どちらも摩耗により調整不明な口縁部の小破片だが、口径は20cm以下の小型甕と考えられる。

甕（96・97）　96は全体的に摩耗が著しく、外面は不明瞭な刷毛目痕、内面は不明瞭なヘラケズリがみられる。口縁端部は強く外反し、その調整時についたと考えられる指頭痕が頸部の一部にみられる。胎土はキメが粗く、焼成も不良気味である。口径は20.4cmを測る。97は口縁部から頸部までの小破片で、口縁部と外面はナデに

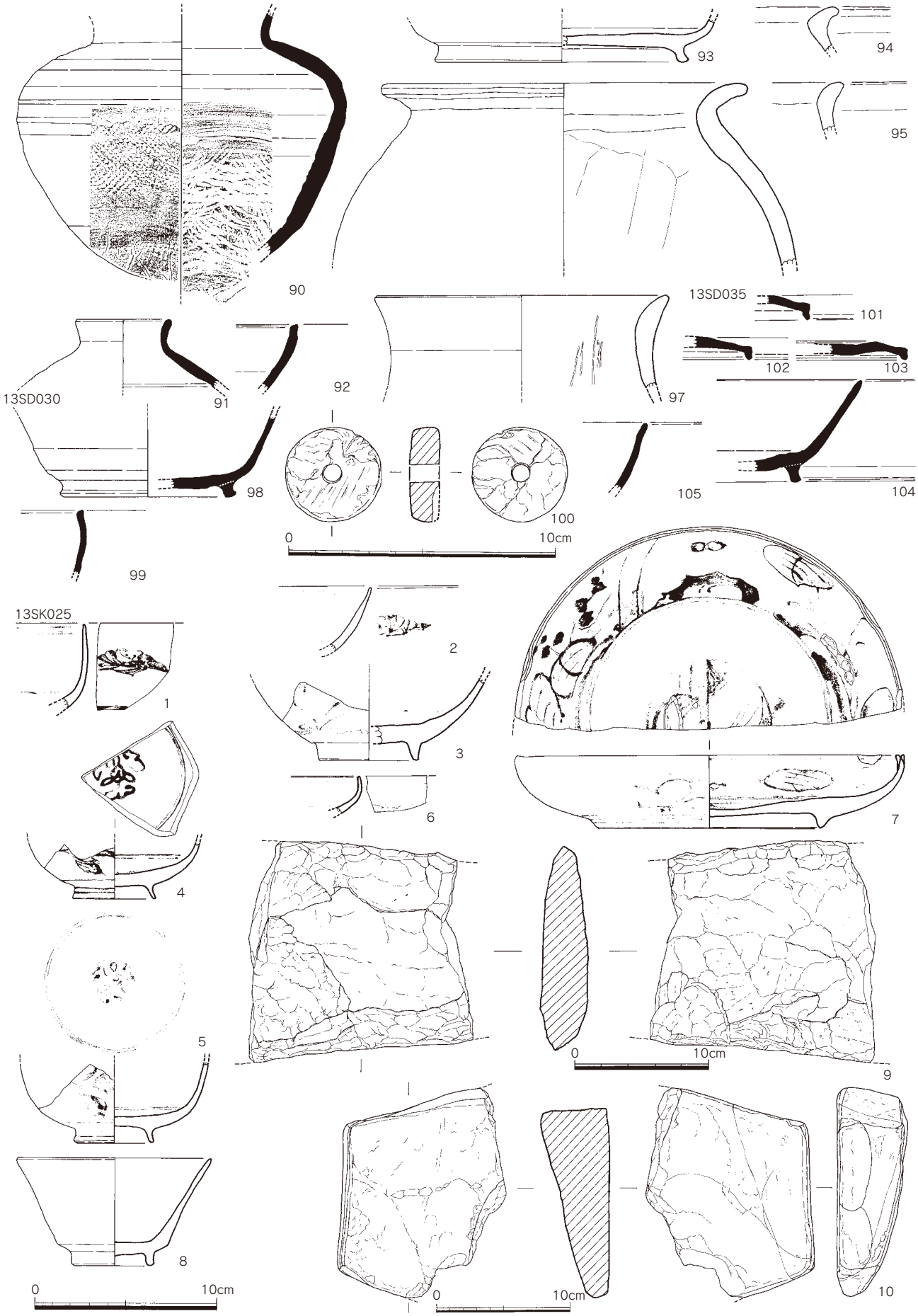


図166.道路側溝関連遺構・土坑出土遺物実測図(S=1/3、1/4)

よる調整がなされ、内面には細い線状の縦方向のヘラケズリがみられる。口径は16.4cmに復原される。96は古墳時代に系譜を引く「在地伝統」的甕(甕Ⅰ類)に、97は大宰府令制施行後に出現する甕Ⅱ類になる。(中島、2000)

13SD030（図166）

須恵器

坏 c（98）　底部は回転ヘラ切りで、やや外方にはねた形状の高台を有す。底部内面には不定方向のナデもみられる。口縁部は欠損するため詳細不明。

鉢 a（99）　口縁端部は内湾気味に平坦面を形成し、内傾気味の体部形態を有する。内外面ともに色調の変化が見られることから、重ね焼きした可能性が考えられる。器厚は薄く、胎土は緻密。焼成、還元ともに良好。

石製品

紡錘車（100）　滑石製で、中央には3.5 ～ 3.6cm径の穿孔がみえる。表面に擦痕が観察できる。重さは20.6ｇ。

13SD035（図166）

須恵器

蓋3（101 ～ 103）　いずれも断面三角形の口縁端部を有すが、101はやや大きい。103は歪みがみられるが、天井部とみられる外面は回転ヘラケズリで調整される。

坏 c（104）　口縁部から底部までの小破片で、体部下位はヘラケズリされ、やや直立した断面四角形の高台を有す。底部切り離しは不明。焼成、還元ともに良好。

坏（105）　口縁部のみの小破片で、やや摩耗気味。内外面とも回転ナデ調整がなされる。

3)土坑

13SK025（図166・167）

染付磁器

椀（1 ～ 5）　1、2の外面には松の木のような文様が紺色の呉須で濃淡をつけて描かれ、内面には圏線が描かれる。1はやや緑色を帯びた透明釉で、やや厚い。3の内面には淡紺色の呉須で圏線が描かれ、見込みは輪状に釉がかきとられる。外面にも絵付けがなされる。4、5の見込みにはやや崩れた花文が描かれ、外面には葉のような文様も施してある。いずれも肥前系と考えられる。

皿（6、7）　6は口縁部のみの小破片だが、外面には7の外面と同じような文様の一部がみえる。7の内面見込みには建物の文様と、体部には小さな花をもつ植物の文様が紺色の呉須で濃淡をつけて描かれ、

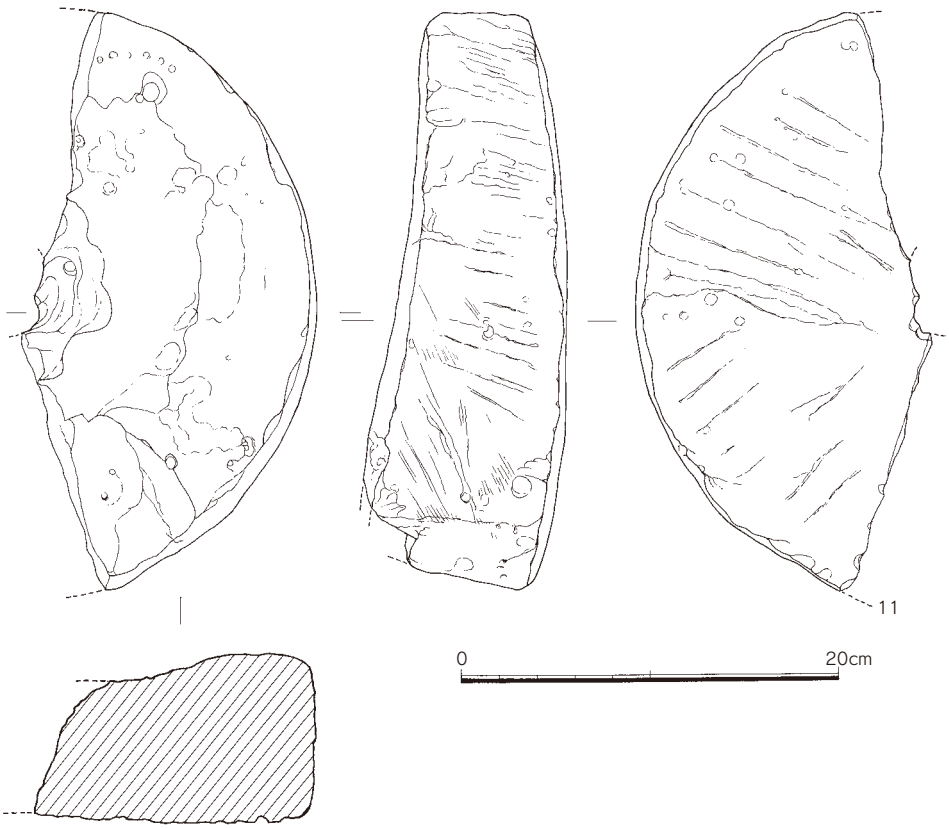


図167.土坑出土遺物実測図(S=1/3)

口縁部には輪花がつけられている。また、7に関しては内面見込みと体部の一部には目跡や他の器の破片も見られることから重ね焼きしたと考えられる。どちらも肥前系。

磁器

白磁(8)　体部下位から口縁部にかけて直線的に外方に開く形状を呈し、高台畳付けは釉剥ぎされ、それ以外はやや緑味を帯びた白灰色の釉が薄く施釉される。内外面には釉の流れた跡もみられる。国産のものと考えられる。

石製品

石鎌(9)　安山岩でつくられ、刃部のほぼ中央部の破片とみられる。上下の端部にはやや細かく打ち欠いた痕がわかる。

砥石(10)　玄武岩製で、石の表面と裏面は滑らかに調整され、わずかにすり痕もみられる。図面上部は厚みが厚く、下部に向かってだんだん薄くなる。石には色調の変化もみられる。側面の一部は摩耗して凹凸が著しい。

石臼(11)　玄武岩製で、全体の半分ほどの残存であるが、使用痕跡のある中央部の開穴部を半分見ることができる。また、全体的に摩耗気味であるが、側面には加工痕がわずかに残り、裏面には擂り目痕、表面には一部黒色化する凹みもみられる。復原径は31.6cmと考えられる。

4)その他の遺構

13SX003（図168）

須恵器

坏c(1)　高台部分の小破片で、内側に僅かな接地面のある断面台形の高台を有す。胎土は緻密。焼成、還元ともに良好である。

13SX006（図168）

土師質土器

擂鉢(2)　内面にはやや太めのすり目が確認でき、外面は一部細かな刷毛調整とナデ押え調整がみられる。底部切り離しは摩耗により不明。

瓦質土器

鉢(3)　口縁部の破片資料で、内面は細かな刷毛目がみられ、外面には指頭圧痕が観察できる。

石製品

碁石(4)　緑色片岩製で、縦1.7cm、横1.5cm、厚さ0.5cmを測る。淡灰白色を呈す。

13SX017（図168）

土師器

丸底坏(5)　口縁部から体部の一部にかけての小破片。焼成は不良で、摩耗が著しく詳細は不明。

13SX028（図168）

須恵器

蓋3（6～8）　いずれも断面三角形を呈する口縁部のみの小破片で、6はやや立ち上がった細長い形状で、7は小さな三角形を呈する。8は7よりももっと丸みがある端部となっている。いずれも調整不明な部分を除いて、回転ナデにより調整される。いずれも胎土は緻密で、摩耗気味で胎土が軟質な6を除いて焼成、還元ともに良好である。

土製品

瓦玉(9)　全体が淡灰色を呈し、縦3.8cm横2.8cm厚さ1.9cmを測る。側面は打ち欠かれ、部分的に擦り痕がみられる。

13SX033（図168）

陶器

小皿(10・11)　口縁部内側には段がつく形状で、どちらも緑灰色の釉がやや厚めにかけられる。高台は低く削りだされ、畳付けの部分に釉はかからない。どちらも瀬戸産と考えられるが、11に関しては内面に菊の花弁文

がつくことから、菊皿と考えられる。

13SX039（図168）

須恵器

坏(12)　焼成がやや不良の口縁部の小破片。全面回転ナデで調整される。胎土は緻密で白色砂粒は極僅かしか含まれない。

13SX040（図168）

土師質土器

甕(13)　底部のみの残存で、内面には横方向の刷毛で調整される。底径は30.8cmに復原される。胎土はやや粗く、焼成は不良である。

13SX001（図169）

土師器

火鉢(14)　脚部のみの小破片で、全体的に摩耗している。外面の一部には接地面に平行な線状の痕跡があるが、調整によるものなのかは判別しがたい。

瓦質土器

鉢(15・16)　15については、端部は外側に傾き、端部の面は摩耗で指頭圧痕が残る。16は端部がやや内側に湾曲する形状を呈し、端部の面には刷毛目状の凹凸がみられる。また、外面は摩耗で調整は定かでないが、内面にはやや細かな刷毛目と粗いナデ調整が観察できる。

13SX026（図169）

須恵器

小蓋ａ3（17）　口径10.7cmと小型。天井部はヘラ切りされた後丁寧にナデ調整され、体部中位まで回転ヘラケズリをした後、粗めの回転ナデがなされる。端部は小さな三角形状をなす。

蓋ｃ3(18･19)　いずれも扁平擬宝珠形のつまみを有する。18は天井部内面の粘土が下方に出ていることから、つまみ貼付け時に上から強く押したことがわかる。19は歪みが著しく、天井部が口縁端部より下方に出ている。内面には焼成時にできたと考えられる1.0 ～ 3.0㎜の気泡がみられる。どちらも焼成、還元ともに良好。

蓋3（20・21）　端部はどちらもやや丸みを帯びた小さな三角形状を呈す。20は天井部まで残存し、天井部外面は回転ヘラケズリされる部分以外の他は回転ナデされ、内面についてはその後不定方向ナデで調整される。21は口縁部のみの破片で全て回転ナデされ、口縁端部は灰被り痕と考えられる色調の変化がみられる。

坏ｃ(22・23)　22の底部は回転ヘラ切りされるが、23は該当部位が残存せず切り離し方法は不明。22はやや外方に傾く断面四角形、23は直立した断面台形の高台を有す。また、体部内面下位には焼成時にできたと考えられる大きな気泡がみられる。

坏(24)　口縁部のみの小破片で、全体を回転ナデで調整される。胎土は緻密でほとんど混入物がみられない。焼成､還元ともに良好。

坏×壺(25)　口縁部のみの小破片で器種が特定しがたい。器厚は薄く、口縁端部に平坦面がある。口径は11.0cmに復原される。

鉢ａ(26)　口縁端部は内傾気味な平坦面を有し、体

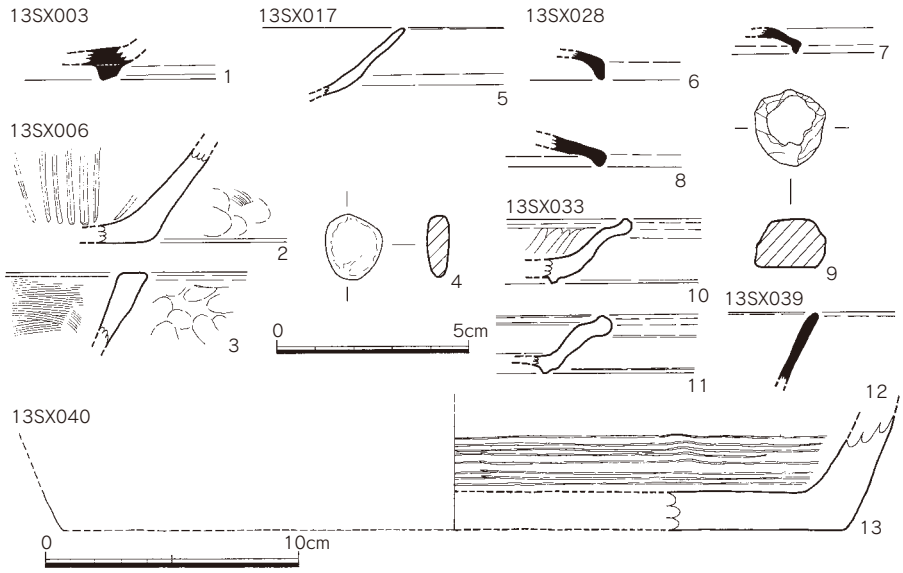


図168.その他の遺構出土遺物実測図(1)（S=1/3）

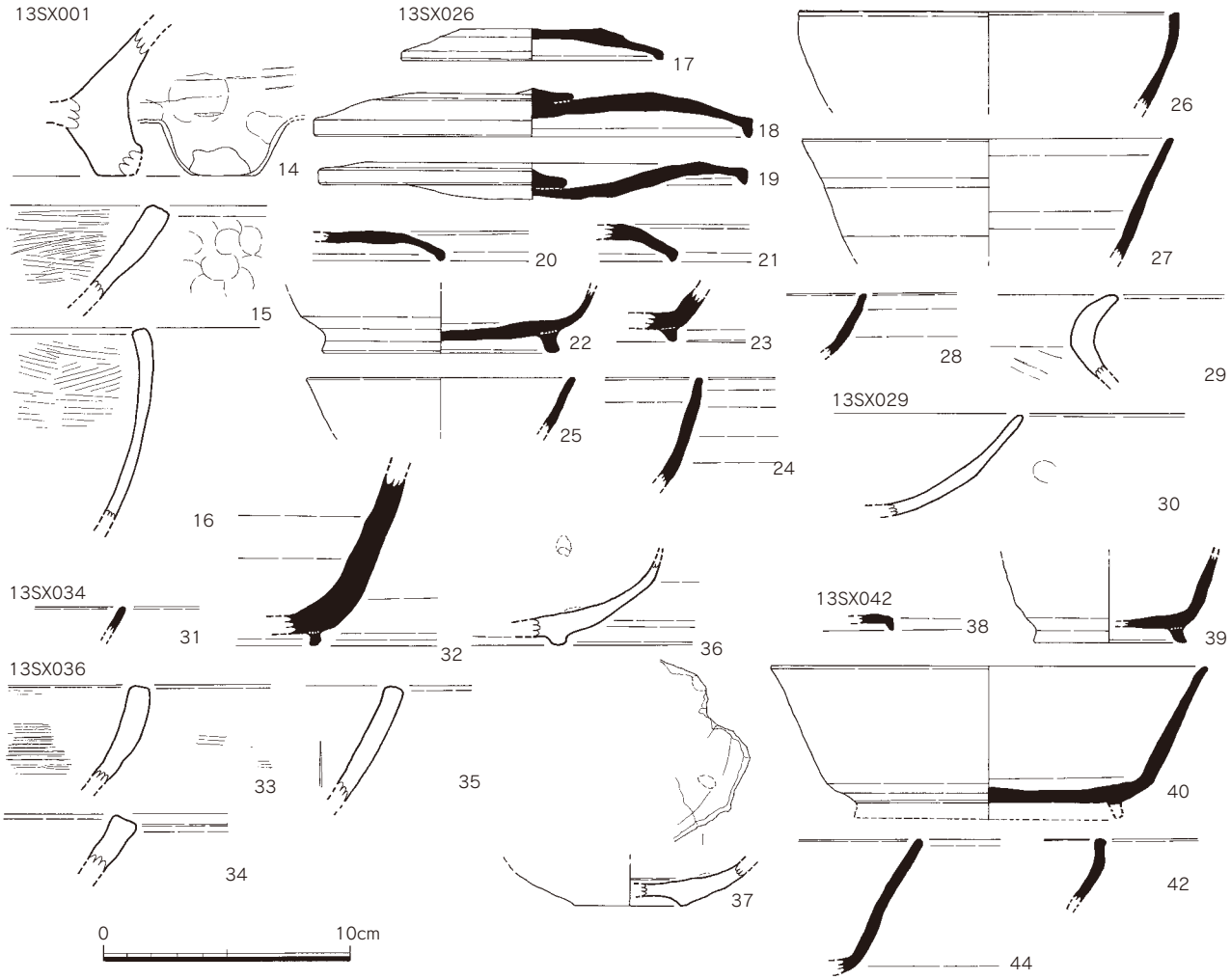


図169.その他の遺構出土遺物実測図(2)（S=1/3）

部に向かってやや丸みを帯びている。口径は15.6cmを測り、胎土も緻密で、焼成、還元ともに良好。

鉢(27・28)　27は口縁部から体部の小破片で、口縁端部に向かって直線的に外方へ開く形状を呈す。回転ナデで調整されるが、体部内面下位には不定方向ナデもみられる。28は口縁部の小破片で、やや内側に傾く平坦面を持つ。胎土は緻密で、焼成、還元ともに良好である。

土師器

甕(29)　口縁部の小破片。内面下位はヘラケズリされるが、その他は摩耗の為調整不明。

13SX029（図169）

瓦器

椀(30)　全体的に摩耗が著しいが、体部外面にはわずかに指頭圧痕とヘラ磨き痕が残る。また、口縁端部には黒色化がみられるため重ね焼きしたと考えられる。

13SX034（図169）

須恵器

坏(31)　口縁部のごく小破片で、口縁端部は削られていて平坦面のある形状となっている。胎土は緻密で焼成、還元ともに良好である。

壺(32)　内外面とも回転ナデで調整されるが、内面はやや粗めに調整され、底部は小さな貼付け高台を呈す。底部切り離しは不明。

13SX036（図169）

土師質土器

鉢（33）　やや摩耗気味であるが、内外面に横方向の刷毛目調整が確認できる。口縁端部は平坦面をもち、体部にかけてやや内湾する形状を呈す。焼成はやや不良。

こね鉢×擂鉢（34）　摩耗が著しい口縁部のみの小破片で器形の判別は困難である。33よりも外に傾いた平坦面をもつ口縁端部を有する。焼成不良。

瓦質土器

擂鉢（35）　胎土はやや粗く、摩耗気味のため調整はほとんど不明。ただ、内面に縦方向の擂り目痕が確認できる。

陶器

皿（36・37）　どちらも緑灰色の釉がかけられるが、36は体部外面下位には施釉されず、37も外面は部分的にしか施釉されない。36の口縁部付近には輪花の痕跡もみられる。いずれとも内面には目跡がみられる。

13SX042（図169）

須恵器

蓋（38）　口縁部のみの小破片。端部は三角形が崩れた形状を呈す。胎土は緻密。焼成は良好で、還元もやや良好である。

小坏 c（39）　底径は6.3cmに復原される。高台はやや外方に傾き、高台内面は滑らかに立ち上がる形状を呈す。底部はヘラ切り。体部外面はやや強めの回転ナデで調整される。

坏 c（40）　口縁部から底部までの破片であるが、貼付け痕のあるものの高台そのものは残存しない。内面において体部と底部の境目には、指頭痕が残り底部は横方向ナデで調整される。底部切り離しはヘラ切り。

坏（41）　口縁部から体部の小破片で、焼成は良好だが、還元はやや不良。胎土は白色砂粒を多く含む。内外面ともに回転ナデで調整される。

鉢 a（42）　口縁端部はやや丸みのある平坦面で形成し、口縁部下位が内湾する形状を呈す。胎土は緻密で、焼成、還元ともに良好である。

（久味木理恵）

4.小結

今次調査の主な成果を整理すると下記のようにまとめることができる。

まず遺構間関係は、

13SD030→13SD010→13SX034→13SX029
13SD035→13SD020→13SX034・13SD015 →13SD031

次に時空間的に並行すると考えられるものは、13SD010・030と13SD020で、これらを結ぶものとして13SD035がある。直線的に伸びる溝13SD015は単独ということになり、第2次調査をはじめ周辺での調査成果を考慮すると、今次調査区の西側に並行する溝が埋没してるものと判断される。しかし、現道付け替えに伴う調査を実施した結果、旧地表削平によって欠失しており、残念ながら並行する溝を確認できなかった。

出土した遺物からは、**表44**に示したような状況が観察でき、周辺で確認している溝遺構と大きく異なることが分かる。具体的には、遺構切り合いから先行すると考えられる13SD020は、奈良時代中頃の埋没が想定され、また後出すると考えられる13SD015は平安時代中期の埋没を想定することになる。遺構の検出状況が錯綜しているだけに、相互の混入の可能性も残しており、今後の検討課題とせざるを得ない。当該調査区の南に所在する第2次調査区ならびに北西に位置する第10次調査所見を考慮すると、先行する溝群は、官道前道路に後出する溝は官道東側側溝に該当すると考えられる。なお官道前道路の東西側溝を結ぶように検出された溝13SD035の位置づけについては、切り合い関係から両側溝に切られており、さらに先行する溝である可能性もある。

（中島恒次郎）

日焼遺跡　第14次調査

1.基本土層

調査区は、日焼遺跡第2次調査地の東に接しており、土層状況は第2次調査とほぼ同様であると想定された。地表下約0.4 ～ 0.5mほど下位に白色砂を基盤とする遺構検出面があり、その上位には、下位より白色砂(遺物包含層)→旧床土・耕作土・マサ土がのっている。第2次調査地と比較すると、やや砂混入度合いが強く、旧大佐野川や第2次調査にて検出された埋没河川の影響を受けているものと考えられる。

2.遺構

1)溝

14SD001

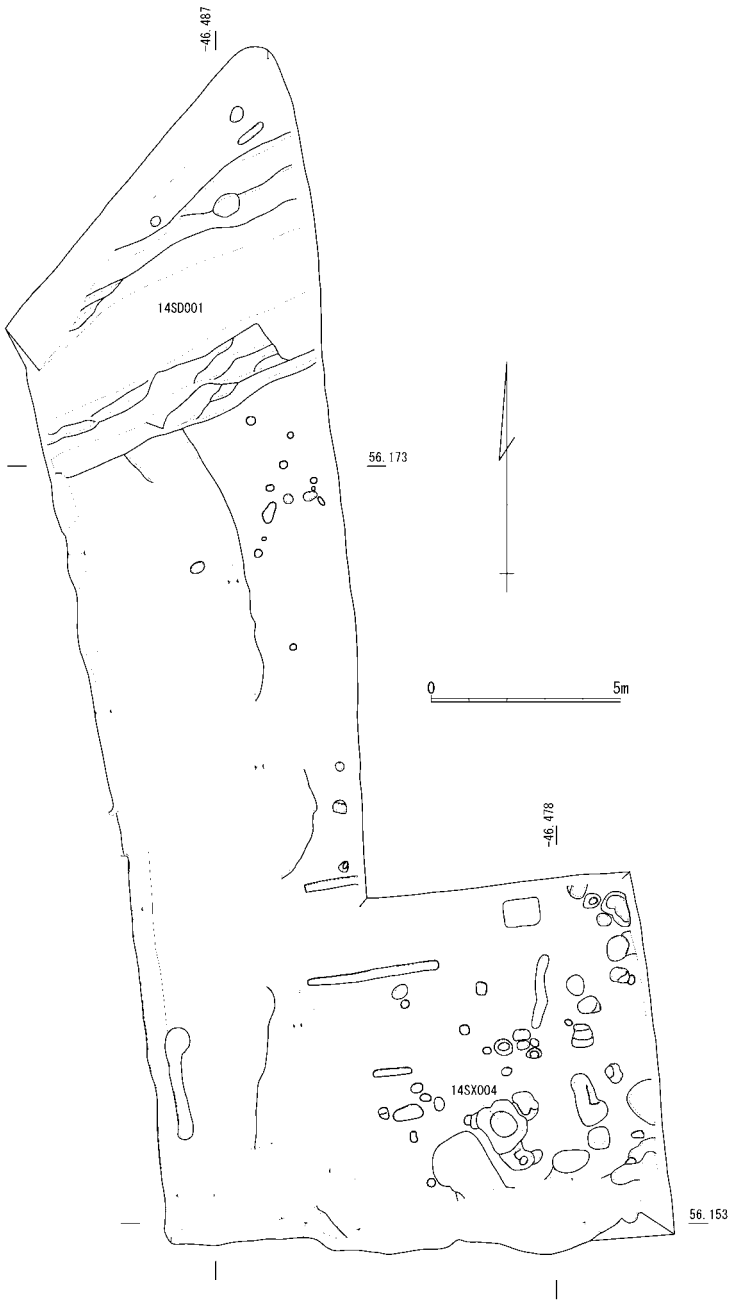


図170.日焼遺跡第14次調査　遺構配置図【Ⅰ面】(S=1/200)

調査区北部にて検出した溝で、調査区を東西に横断し、東に隣接する第2次調査で検出した溝2SD060の東延長部と考えられる。溝検出幅は、5.0 ～ 5.5mを測り、残存する深さは0.67mであった。2次調査で検出した2SD060の堆積層は、砂を基調とした堆積層であったが、14SD001は最下層が灰色砂であったほかは、土を基調としており堆積環境の空間的変化が伺える。下位より灰色砂→黒色腐植土→黒灰色粘質土→灰色砂質土→暗灰色土であった。

14SD005

調査区西半部にて検出した溝で、遺構東肩のみを検出したため、全形については判然としない。堆積土は、下位より茶灰色砂→黒灰色シルト→暗灰色砂質土→赤茶色砂→暗灰色土である。残存する深さは0.57mほどを測り、東に隣接する第2次調査地では検出できていないことから、今次調査区内で完結するものであるのか、調査地東側へ展開するものなのかは明らかにし難い。

2)その他の遺構

14SX003

調査区南東部にて検出した小穴群で、暗灰色土が堆積していた。

14SX004

調査区南東部にて検出した窪みで、黒灰色土が堆積。　　(中島恒次郎)

3.遺物

1)溝出土遺物

14SD001（図172）

土師器

小皿(1・3)　小破片資料で、法量の確認ができない。底部状況が観察できる(1)は、回転ヘラ切り離し処理がなされている。(1)は14SD001、(3)は14SD001黒色粘土層出土。

瓦器

椀(2)　口縁部の破片資料のため、皿になる可能性を残す。口縁端部に黒色化した部分が残るため瓦器と判断した。内面にはミガキb痕跡が残る。

14SD005（図172）

須恵器

坏c（4）　底部破片で、断面台形の高台からほぼ直立気味に立ち上がる体部へ移行するものと考えられる。底部外面は回転ヘラ切り後にナデによる調整がなされている。

2)その他の遺構

14SX003（図172）

瓦器

椀(5)　口縁部の破片資料で、内面にミガキb痕跡が観察できる。

14SX004（図172）

土師器

小皿a1（6）　全形が明らかなもので、底部外面は回転ヘラ切り、口縁部は丸く仕上げていることから小皿a1の範疇に入る。口径は10.0cm、器高1.9cm、底径7.3cmを測る。(久味木理恵)

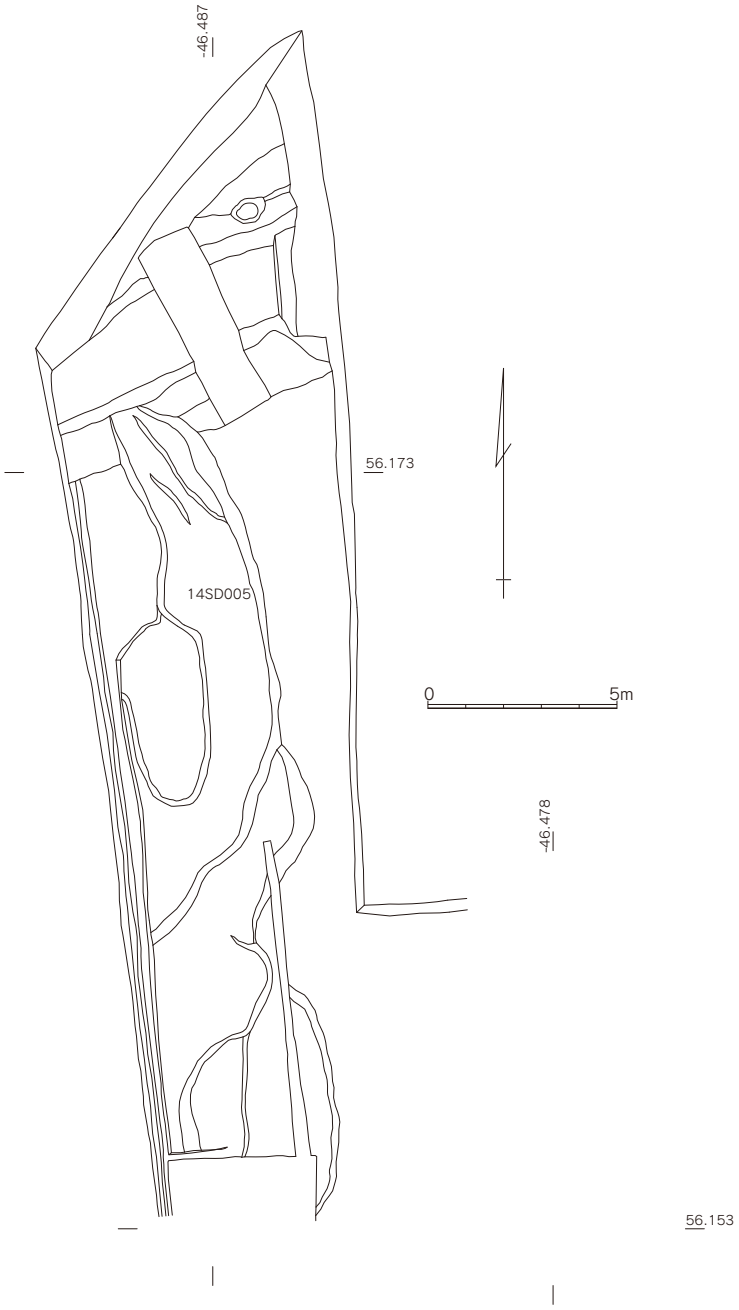


図171.日焼遺跡第14次調査　遺構配置図【Ⅱ面】(S=1/200)

4.小結

今次調査は、第2次調査地の東に隣接しており、2次調査地で検出された2S060の東延長部ならびに、官道の東に展開する関係する遺構の存在を確認できるものと期待された。結果として2SD060東延長部ならびに第2次調査では確認できていなかった溝14SD005を確認することができ、やや不安定な基盤ながら、平安時代後期における生活痕跡を検出することができた。各々の性格については、今次調査のみで決することはできず、周辺調査区での成果を総合して考察する必要がある。　(中島恒次郎)

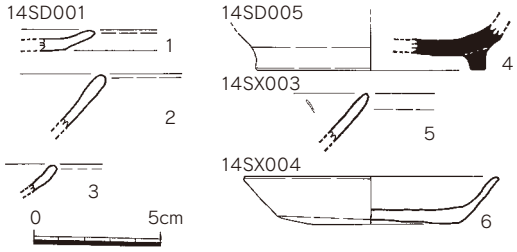


図172.出土遺物実測図(S=1/3)

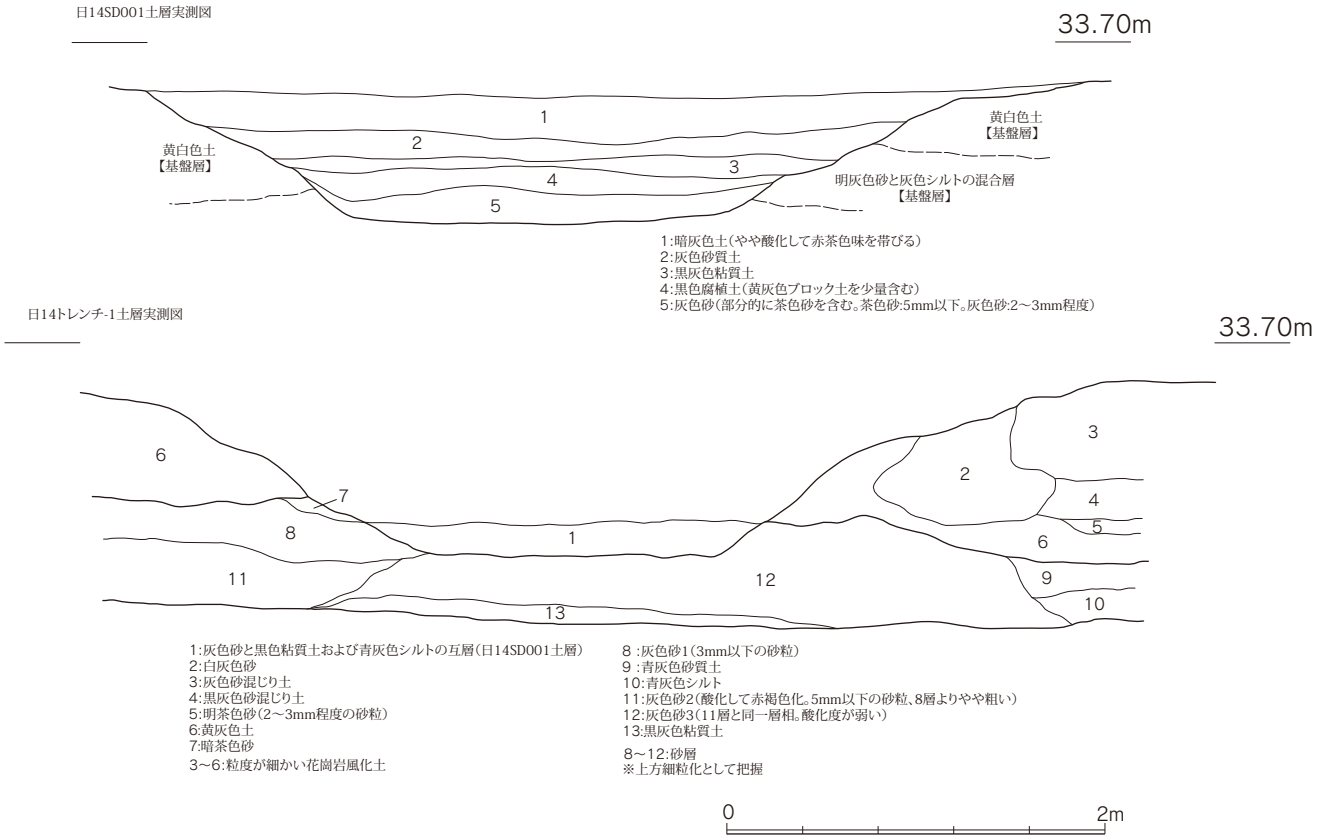


図173.14SD001関連土層実測図(S=1/40)

表9.日焼遺跡　第14次調査　遺構一覧

S 番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	時　期	地区番号
1	14SD001	溝	明茶色土		平安後期	H ～ J3 ～ 5
2	14SK002	土坑	灰色土		鎌倉	I3・4
3	14SX003	小穴群	暗灰色土		中世	B・C1・2
4	14SX004	窪み	黒灰色土		平安中期	A2
5	14SD005	河川	茶色砂		奈良	調査区中央

土層順　　S-5 土層

表土　現代　　黒灰シルト・茶灰砂（層順確認要）

白色土　現代

日焼遺跡　第15次調査

1.基本土層

既存家屋の生活面であった地表面から下約0.3 ～ 0.5mほどで遺構面が確認され、その間には灰色土および表層の真砂土等が堆積していた。遺構形成面の基盤層は、橙褐色土ないし灰色系の粗砂、白灰色粘土などの沖積土壌であった。

2.遺構

1)溝

土地が東に傾斜することから調査区を東西に横断する溝状の遺構、および近世以降の耕作に伴う給排水の溝などが検出されている。

15SD001（図174）

幅5m、深さ1mを測る旧河川跡である。上流が2,8次でも検出されている。常滑系の国産陶器の破片が出土しており、最終埋没は13世紀後半から14世紀頃かと考えられる。

15SD003・004・006・009（図174）

水路および耕作関連遺構　表土ないしその直下の灰色土とした耕作土によって埋没する溝群であり、江戸時代以降から現代のものと考えられる。SD006だけは旧耕作度下の床土層である黄灰色土で埋没している。

15SD012

褐色の砂状土が堆積する深さ0.2mほどの西から東に流れる自然流路で、遺物が出土しないため時期不明であるが、切り合い関係から最も古い時期に形成されたものと考えられる。

15SD005・010（図174）

調査区の北東側で約7mほどが検出された並行する2条の溝状遺構で、芯心間は3mを測る。両者は近似した茶色傾向の土壌で埋没し、床面は凹凸を持つ形状を成す。北側のSD005のほうが壁の立ち上がりが明確で直線的である。通行に由来すると考えられる帯状硬化面である15SX015がこの２者の間にあることから道路側溝であったことが想定される。最終埋没時期はSD005出土の須恵器から8世紀に下る可能性がある。

2)その他の遺構

15SX015（図174）

15SD005・10に平行し、この2本の溝に挟まれた位置で検出された。明灰色のしまった砂が溝状に堆積し、溝の底部分はさらに硬い橙褐色の薄い層を形成する。溝の底面は平坦ではなくおうとつが見られた。明灰色砂層は東側で一部がSD010の埋土を覆っていた。幅の狭いBタイプに位置づけられる帯状硬化面で(山村、2001)、道路の通行に関連する遺構と考えられる。

15SX007（図175）

調査区南西側にある白色の粘土層に穿たれた幅1mほどを単位とする連続、非連続の穴で、この形状から典型的な土取り跡と考えられる。肥前系染付椀が出土しており、江戸時代後期以降に位置づけられる。

15SX009（図175）

SD006と同じ床土層である黄灰色土で埋没していることから、SD006の給排水に関連して穿たれた貯水遺構を想定している。

3.遺物

1)溝

15SD001（図175、写真1076、1077）

陶器

甕(1)　淡灰茶色を呈する須恵質焼成の大甕の胴部片で、外面に連子状の刻みを持つ長方形の叩きの痕跡、内

図174.日焼遺跡第15次調査　遺構配置図(S=1/150)

面に横方向の強いナデが見られる。内面下位に自然釉が残る。鎌倉後期以降の常滑系の製品と考えられる。

15SD005（図175）

須恵器

坏蓋(1,2)　1は11cm後半代に復元される小蓋になるもので、焼成は還元して硬質である。2は端部を折り曲げ

た形状のもので、焼成は還元環境で焼成されたと考えられ硬質である。

2)その他の遺構

15SX015（図175）

15SD001

1.淡灰白色土
2.灰褐色土
（黒色土ブロック入）
3.淡灰色土
4.暗灰色土
5.白色砂
6.灰白砂状土（シルトまじり）
7.黒色シルト
8.白色砂と灰色シルトの互層
9.黒色土

15SD005,010
SX015

SD005
SX015
SD010

SD005
1.淡茶色土

SX015
1.明灰色粗砂
2.橙褐色砂（硬化土）

SD010
1.茶褐色粘土

33.40m

15SD001

15SX015

15SX007

15SD005

10cm

図175.溝遺構(S=1/40・1/100)および出土遺物実測図(S=1/3)

須恵器

甕(1)　外面に幅の狭い平行する刻み目を持つ叩きを有し、内面の円形の当て具の痕跡はナデ消される。焼成は器面は還元環境で芯は酸化気味で硬質。古墳時代前期の所産。

15SX007（図175）

肥前系染付

皿(1)　椀の可能性もあるが浅い形状になるため皿としたもので、短く外反する口縁端部の直下の内外面に一条の条線を呉須で描く。内面には草花文と考えられる絵柄が描かれる。下地の白磁はやや青味を帯びた透明釉を施し、呉須は紺色に近い青色を呈す。胎土は白味の強い精製土。江戸後期の所産。

磁器

皿(2)　やや青味を帯びた透明釉を施す。胎土は白味の強い精製土に微細な黒色斑が見られる。国産。

瓦

平瓦(3)　1×2cmの菱形で斜格子の叩きを有す須恵質の平瓦で、側辺に分割時の裁断線(切り込み痕跡)が残る。平安中期以降の所産。

4.小結

調査区は大字向佐野字日焼の微高地状の高まりにあり、かつてホノケが「シロツチ」と呼ばれた宅地の跡である。調査では古代以前の道路跡、中世の流路、江戸後期以降の土取りの跡、近世以降の水田耕作跡などが確認された。

道路は心芯幅が約3mの2条の側溝SD005,10とその間に形成された砂が地盤に沈着したような状態で固く締まった帯状の硬化面SX015からなる。SD005の安定した埋没土の下のほうで8世紀に位置付けられる須恵器蓋が出土し、最終埋没が奈良時代までの幅で考えられる状況で、北部に位置する原口遺跡第2次調査における埋没時期の所見より新しくなる様相となった。

SX007は連続する不定形な土坑が群れを成す状況で、粗い砂によって埋没している。
類例から土取りの痕跡と考えられる。白色の土壌部分にのみ穿たれたもので、ホノケの「白土」に関連する遺構の可能性がある。高取静山家所蔵の文書によれば江戸後期に藩窯であった高取焼に向佐野の白土が供給された記載があり、それに関連する可能性がある。

水田の痕跡は小規模な水路SD003,4,6とそれに連続するたまり状の遺構SX009等からなり、ここが宅地化した近代以前の耕作痕跡である。　（山村信榮）

引用文献

山村信榮(2001)「古代道路の構造」『古代道路研究』10号古代交通研究会

表10.日焼遺跡　第15次調査　遺構一覧

S 番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	埋没時期	地区番号
1	15SD001	溝　道路東側溝			中世後半	K2-H7
2	15SX002	たまり状			近代	I2
3	15SD003	溝　旧水田水路				F6
4	15SD004	溝　旧水田水路				F5
5	15SD005	溝　道路西側溝			奈良前半～	J2
6	15SD006	溝　旧水田水路				E3
7	15SX007	たまり状　土取り痕跡か			近世～	E6
8	15SX008	土取り痕跡			近世～	B4
9	15SX009	土取り痕跡				D3
10	15SD010	溝　　官道西側溝	茶色粘土		奈良前半～	I3
11	15SX011	pit				J8
12	15SD012	溝			※無遺物のため不明	H
15	15SX015	帯状硬化面　通行痕跡				I2

※ S13・14 は欠番

日焼遺跡　第 16 次調査

1．基本土層

近代以降に構築されたレンガ建物の地下室のコンクリート基礎を伐壊し、その掘り方の土壌をさらったところ東に傾く南北の 2 条の溝が確認された。中世の掘立柱建物は地下室の基礎が及んでいた事にも拠るが、ほとんど柱穴を見つける事はできなかった。

西壁面の観察によれば調査区西側はさらに上から黄色土の埋土が充填された掘り込みが 1m 以上あり、近代以降は遺構面としての保全は難しかったものと想定される。

2．遺構

1）溝

16SD001（図 176、写真 1078、1079）

西側の溝 SD001 幅約 4,50cm、深さ 20cm ほどのもので、暗灰色の粘質土で覆われており、掘り方は逆台径を呈していた。N-18° 45′-W の振れを持つ。

古墳時代後期から奈良時代につくられた須恵器の甕片が含まれていた。直線的な形状から奈良時代の官道方向に沿うが、遺物整理の時点で中世後半期の遺物が確認されそれ以降の埋没と判明した。

16SD002（図 176）　SD001 にほぼ平行して検出された東側の溝 SD002 は黒色でシルト質の腐植土の下に鮮やかな青灰色のグライ土が形成され、溝でありながら長らくよどむ状況であった事を示していた。明治 10 年代の銅製の半銭が出土しており、堆積はそれ以降のものである。現状で使用されていた石垣のラインに一致し、近代以前の屋敷外側の排水溝であったと思われる。

3．遺物

1）溝

16SD001（図 176、写真 1080、1081）

須恵器

坏蓋（2・3）　2 は玉縁状の口縁を持つ小型の甕の口縁部で、焼成は還元雰囲気、硬質で灰色を呈す。3 も同様の焼成の格子目の叩きを有す中型以上の甕胴部の破片である。

瓦質土器

すり鉢（1）　1 は表面も黒色に焼成したこの製品としては硬質に属すもので、内面に間隔をあけて細身のすり目を施す。外面は指押さえの跡が残され、その窪みの中に布目が観察される。口縁端部がないことから時期の詳細に言及できないが、すり目があることから 14 世紀以降の所産と考えられる。

16SD002（図 176、写真 1080、1081）

肥前系染付

椀（1）　1 は内面に「寿」の文様を持つ丸椀で、外面は草花文を施す。呉須は発色が紺黒色傾向のもので、内面には他製品の欠片が焼成時に付着している。18 世紀後半以降の江戸後期の所産と考えられる。

4．小結

いわゆる宮ノ本丘陵の東裾にあたる地形変換点での調査であり、二条の南北溝が検出された。結果的に 16SD001 は中世後期、16SD002 は近代以降のものと判断された。16SD001 はその帰属する時期から東隣地の 10 次調査側の掘立柱建物群との関わりが想定され、建物群西側の区画に関わる遺構の可能性が指摘される。その区画は後代も引き継がれ江戸から近代にかけての 16SD002、さらにその上に構築された調査前まであった石垣が使用され続けた。

（山村信榮）

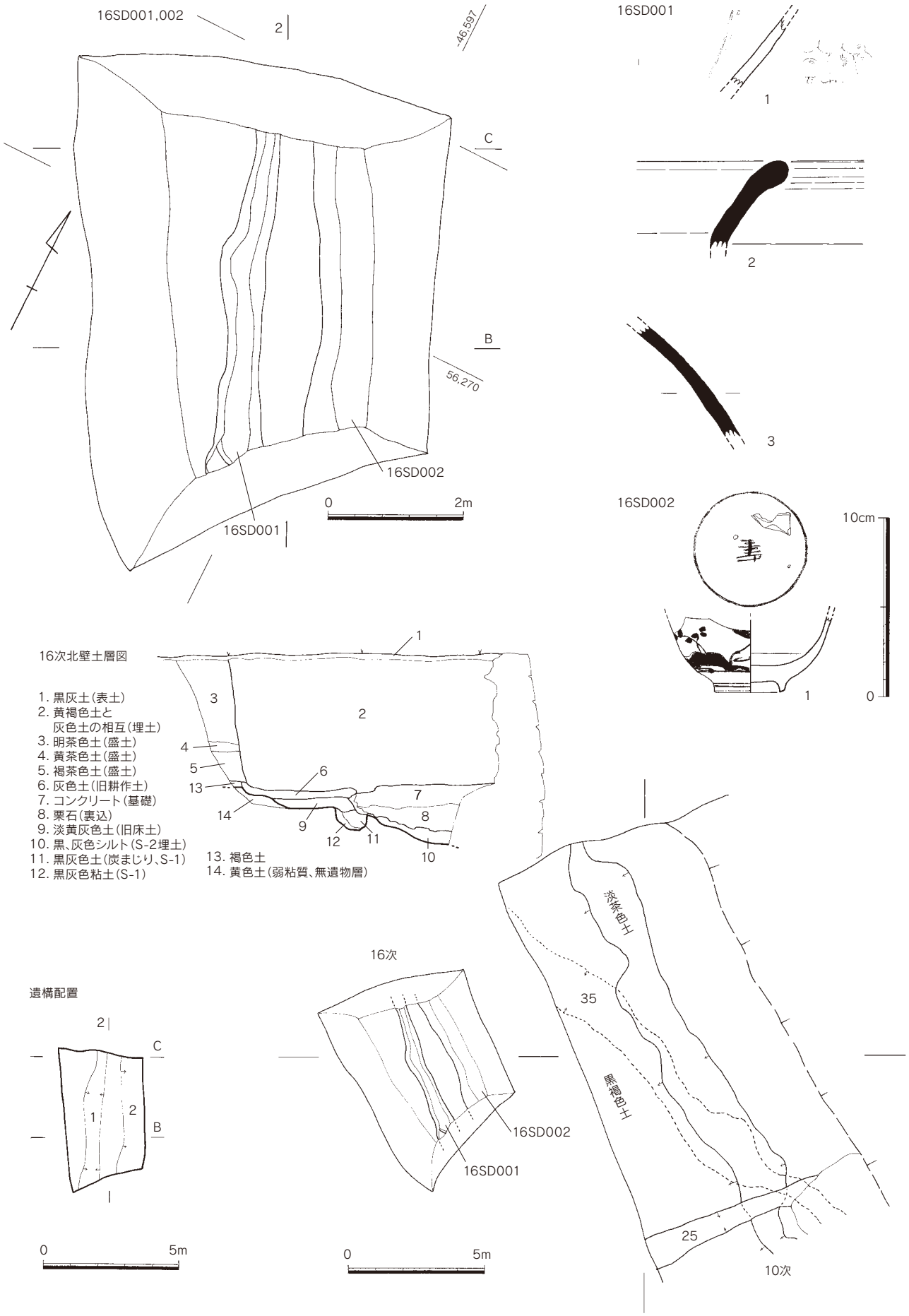


図176.日焼遺跡第16次調査　遺構位置関係図(S=1/200)・遺構略測図(S=1/40)・北壁土層図(S=1/40)・出土遺物実測図(S=1/3)

Ⅴ.自然科学分析

日焼遺跡第2次調査出土試料自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1.はじめに

検出された遺物に関して、放射性炭素年代測定、種実同定、葉同定。樹種同定、昆虫同定をそれぞれ実施し、遺構・遺物の年代観や当時の古環境に関する情報を得る。

1).試料

放射性炭素年代測定用試料は、No.42（S-012）と43（S-022）の2点を分析する。種実・葉同定は、各時代の各遺構から採取された種実遺体23試料（No.1 ～ 23）と、葉および葉を含む土壌試料（No.32 ～ 35）について実施する。昆虫同定は、No.24-31の8点を分析する。樹種同定は、No.36-40の6点である。また、年代測定を実施する炭化材2点（試料番号042,043）についても同定を実施する。各試料の詳細は、それぞれの結果と共に示す。

2.分析方法

1）放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、AMS法で実施する。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

2）種実・葉同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴を現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川,1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか,2000）等と比較し、種類を同定し個数を求めた。分析後の種実遺体は、種類毎にビンに入れ、70％程度のエタノール溶液による液浸処理を施して保存する。

土壌試料（No32 ～ 34）には、広葉樹の葉が確認されたが、組織の大部分が欠損し、外形や葉脈の一部などの印象のみが残されている状態であったため、水洗などの分析処理には適さないと判断し、そのまま保存した。

3）樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。炭化材は、3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

4）昆虫同定

双眼実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴から種類を同定する。試料は乾燥を防ぐため1片づつ水入りの瓶にいれ、便宜上の番号をふった。なお、同定解析には株式会社人と自然の環境研究所　川那部真氏の協力を得た。

3.結果

1）放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。No.42は1,290±40BP、No.43は1,470±40BPである。暦年較正に関しては、10年単位で示すのが慣例であるが、較正曲線や暦年較正プログラムが将来改正された場合において、再計算、再検討を行いやすいように、1年単位で表す（表12）。その結果、No.42はcalAD671-770、No.43はｃａｌAD567-636であった。

2）種実・葉同定

結果を表3に示す。No.1 ～ 23からは、栽培植物のモモを含む広葉樹11分類群115個の種実と、種類不明の種実が3個確認された。No.32 ～ 34からは、広葉樹の葉が、No.35は二枚貝の殻皮が確認された。以下に、本分

表11.放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	補正年代 BP	δ 13 C (‰)	測定年代 BP	Code.No.
042 S-12	広葉樹（環孔材）	1,290 ± 40	-24.72 ± 0.76	1,280 ± 40	IAAA-42466
043 S-22	エゴノキ属	1,470 ± 40	-24.89 ± 0.73	1,470 ± 40	IAAA-42467

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
2)BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3) 付記した誤差は、測定誤差 σ（測定値の 68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

表12.暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代（cal）		相対比	Code No.
042 S-12	1,289 ± 41	cal AD 671 - cal AD 722	cal BP 1,279 - 1,228	0.628	IAAA-42466
		cal AD 740 - cal AD 770	cal BP 1,210 - 1,180	0.372	
043 S-22	1,468 ± 41	cal AD 567 - cal AD 636	cal BP 1,383 - 1,314	1.000	IAAA-42467

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3) 付記した誤差は、測定誤差 σ（測定値の 68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

分析によって得られた種実の形態的特徴などを記す。

＜木本＞

・コナラ属コナラ亜属(Quercus subgen. Quercus)　　ブナ科

殻斗と殻斗に入る果実が検出された。殻斗は黒褐色、椀状で径12 ～ 13mm、高さ6mm程度。表面には狭卵形の鱗片が覆瓦状、螺旋状に配列する。果実は灰褐色、広楕円体。長さ15mm、径11mm程度。頂部に短い花柱基部が突起状に残る。基部は切形で着点は淡褐色、円形で維管束の穴が輪状に並ぶ。果皮外面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。

・アラカシ近似種(Quercus cf. glauca Thunberg)　　ブナ科コナラ属アカガシ亜属

果実が検出された。黒褐色、卵状楕円体。長さ16mm、径11mm程度。果実頂部には、殻斗の圧痕である輪状紋がみられ、輪状紋は突出せず、薄く肩に広がるアラカシの特徴(岡本,1973)をもつ。

・アカガシ亜属(Quercus subgen. Cyclobalanopsis)　　ブナ科コナラ属

幼果、果実が検出された。幼果は灰褐色、輪状椀の殻斗内に果実が包まれる。径7 ～ 8mm程度。果実は黒褐色、卵状楕円体。長さ15 ～ 20mm、径15mm程度。果実頂部には、殻斗の圧痕である輪状紋がみられるが、柱頭を欠損する。基部の着点は円形、淡褐色で維管束の穴が輪状に並ぶ。果皮表面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。試料は、同定の根拠となる柱頭が残っていないため、アカガシ亜属にとどめた。

・コナラ属(Quercus)　　ブナ科

果実の破片が検出された。果実は灰褐色、完形ならば長さ15 ～ 20mm、径10 ～ 15mm程度の楕円体。果実頂部を欠損し、輪状紋の有無が認められないので、コナラ属と同定するにとどめた。基部の着点は円形、淡褐色で維管束の穴が輪状に並ぶ。果皮外面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。

・シイ属(Castanopsis)　　ブナ科

果実が検出された。広卵形体で頂部は尖る。長さ11mm、径8.5mm程度。黒褐色、基部の着点は円状不定形で大きい。果皮は薄く表面は平滑で、明瞭な細溝が縦列する。

・クスノキ科(Lauraceae)

種子が検出された。灰褐色、偏球体。径7mm程度。基部にはやや突出する臍からはじまる低い稜があり、側面

表13.種実・葉同定結果

No.	遺構	遺構年代	地区	備考	分類群	コナラ属コナラ亜属		アラカシ近似種	コナラ属アカガシ亜属		コナラ属	シイ属	クスノキ科	モモ		フジ属	センダン	エゴノキ属	クサギ	不明種実	広葉樹	二枚貝の殻皮	備考
					部位	殻斗	果実	果実	幼果	果実	果実	果実	種子	核		果実	核	種子	核		葉		
					状態						破片			完形	破片	破片	破片		破片				
1	S-001	鎌倉期?	BG9			-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
2	S-015 茶灰砂土	奈良～平安	AA.AB14	S-015: 河川跡		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
3	S-015 茶灰砂土	奈良	AA.AB15.16			-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	1	-	-	-	-	-	モモ核表面磨耗
4	S-015 茶灰砂土	奈良	AD16.17			-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	15	-	-	-	-	
5	S-015 茶灰砂土	奈良～平安	AE.AD15			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	
6	S-020 暗灰砂	奈良～平安	AW.AX23	S-020: 奈良時代官道の東側溝		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	
7	S-020 黒色粘	奈良～平安	AW～AY23.24			-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	7	-	-	-	-	
8	S-022 暗灰砂土	7C前半	AX16	S-022: 古墳時代末期の道路の側溝		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	
9	S-022 灰色粘	7C前半	AY15.16			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	-	-	-	-	
10	S-022 灰色砂土	7C前半	AY15			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	1	-	-	
11	S-022 灰色砂土	7C前半	AY16			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	
12	S-040 黒灰砂粘	平安後	AJ18.19	S-040: 奈良時代官道の西側溝		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
13	S-040 黒灰砂粘	平安後期	AL19.20			-	-	-	2	1	-	3	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	
14	S-040 黒灰砂粘	平安後	AL～AN20.21			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	-	-	-	-	
15	S-096	平安後	AK19～21			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13	-	-	-	-	
16	S-096 暗灰砂土	平安後期(包含層か)	AL19.20			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	
17	S-098	平安後期	AO.AP13			-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	
18	S-130	古墳	AB7			-	-	1	-	1	1	1	-	-	-	-	-	3	-	1	-	-	シキミ種子に似る
19	S-135	7C後半	AB14			2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
20	S-145 灰色砂	弥生後期	AA7			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
21	S-145 灰色砂	弥生後期	W10			-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	ハイノキ属果実に似る
22	S-145 灰色砂	弥生後期	AB7			-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
23	S-145 灰色砂	弥生後期	AC5			-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
32	S-022 灰色粘	7C前半	AX16			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1+	-	保存状態悪い
33	S-022 灰色粘	7C前半	AX16			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1+	-	保存状態悪い
34	S-022 灰色粘	7C前半	AX16			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1+	-	保存状態悪い
35	S-098 黒色粘	平安後期	AO.AP13			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	

の途中で終わる。種皮は硬く、表面は粗面。

・モモ(Prunus parsica Batsch)　　バラ科サクラ属

核(内果皮)の完形が検出された。灰褐色、広楕円体でやや偏平。先端部はやや尖る。基部は切形で中央部に湾入した臍がある。長さ23 ～ 26mm、幅17 ～ 20mm、厚さ14mm程度。一方の側面に縫合線が発達し、縫合線に沿って半分に割れた個体(No.17)がみられる。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。表面が磨耗している個体(No.3)がみられる。

・フジ属(Wisteria)　　マメ科

果実(莢果)の破片が検出された。倒披針形で偏平。長さ5cm以上、幅2cm程度。果皮は厚く、表面は粗面で、内部に種子が入る部分はやや高まる。

・センダン(Melia Azedarach L. var. subtripinnata Miquel)　　センダン科センダン属

核の破片が検出された。灰褐色で楕円体、上面観は星形。長さ14mm、径6mm以上。浅く広い5 ～ 6個の縦溝と縦隆条が交互に配列し、内部には種子の一部がみられる。核表面は粗面。

・エゴノキ属(Styrax)　　エゴノキ科

種子が検出された。灰～黒褐色、卵体で頂部がやや尖る。長さ9 ～ 12mm、径6 ～ 8mm程度。表面には3本程度の縦溝が走る。基部には灰褐色でざらつく着点がある。種皮は厚く硬く、種子表面は微細な網目模様があり、ざらつく。

・クサギ(Clerodendron trichotomum Thunb.)　　クマツズラ科クサギ属

核(内果皮)の破片が検出された。灰褐色で広卵体、側面観は三日月形。長さ4.5mm、幅4mm、厚さ3mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平らで腹面方向にやや湾曲する。腹面の一端には裂け目状の発芽口がある。内果皮は厚く硬い。背面には大きな網目模様があり、腹面表面はやや平滑。

＜不明種実＞

・No.10

灰褐色、長さ3mm、幅2mm程度の倒卵体で偏平、表面は粗面。

・No.18

茶褐色、長さ7.5mm、幅5.5mm、厚さ4mm程度の長楕円体でやや偏平。腹面正中線は稜をなす。基部は斜切形で臍の一端が嘴状にやや突出する。表面は平滑で光沢が強い。シキミ科シキミ属シキミ(Illicium anisatum L.)の種子に似る。

・No.21

灰褐色、長さ9mm、径5mm程度の長楕円体。表面は粗面。頂部と基部に円形の孔があり、内部に室がみられる。木質で表面には浅い縦隆条が配列する。ハイノキ科ハイノキ属(Symplocos)の果実に似る。

表14.種実・葉同定結果

番号	遺構	層位	時　期	地区	樹種
036	S-022	灰色粘	7 世紀前半	AX16	シキミ
037	S-022	灰色粘	7 世紀前半	AX16	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
038	S-022	灰色粘	7 世紀前半	AX16	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
039	S-022	暗灰砂土	7 世紀前半	AX16	シキミ
040	S-022	暗灰砂土	奈良？	AY18	シキミ
041	S-058		平安	AR17	クマシデ属イヌシデ節
042	S-012	灰色粘土	奈良？	BC17	広葉樹（環孔材）
043	S-022		奈良？	AW9	エゴノキ属

3)樹種同定

樹種同定結果を表14に示す。木材は、広葉樹3種類(クマシデ属イヌシデ節・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・シキミ)に同定された。炭化材は、いずれも広葉樹で、1点(試料番号043)はエゴノキ属に同定された。1点(試料番号042)は、保存が悪く種類の同定には至らなかった。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・クマシデ属イヌシデ節(Carpinus subgen. Euarpinus)　　カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-4個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-40細胞高のものと集合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節(Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris)　　ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・シキミ(Illicium anisatum L.)　　シキミ科シキミ属

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では多角形、単独または2-4個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、段は多数、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。

・エゴノキ属(Styrax)　　エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独または2-4個が複合して、年輪界に向かって径を漸減させながら散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

・環孔材

孔圏部は2-3列、孔圏外で急激に管径を減じた道管がほぼ単独で散在する。道管は単穿孔を有するが、壁孔等は保存が悪く観察できない。放射組織は同性、8-15細胞幅、100細胞高以上となる。

バラ属やツルウメモドキ属に組織が似るが、小片で保存状態が悪いために種類の同定には至らなかった。

表15.昆虫同定結果

No.	遺構	時代	地区	番号	種類	部位	備考
024	S-020　黒色粘	奈良時代～平安時代	AW-AY23.24	024-1	サクラコガネ属の一種	上翅の一部	
024	S-020　黒色粘	奈良時代～平安時代	AW-AY23.24	024-2	サクラコガネ属の一種（アオドウガネ？）	左上翅の一部	
025	S-020　黒色粘	奈良時代～平安時代	AX23	025-1	サクラコガネ属の一種	上翅の一部	
025	S-020　黒色粘	奈良時代～平安時代	AX23	025-2	コガネムシ科の一種	上翅の一部	
025	S-020　黒色粘	奈良時代～平安時代	AX23	025-3	サクラコガネ属の一種	上翅の一部	
025	S-020　黒色粘	奈良時代～平安時代	AX23	025-4	コアオハナムグリ	前脛節	
025	S-020　黒色粘	奈良時代～平安時代	AX23	025-5	サクラコガネ属の一種	腿節	
025	S-020　黒色粘	奈良時代～平安時代	AX23	025-6	サクラコガネ属の一種	上翅の一部	
025	S-020　黒色粘	奈良時代～平安時代	AX23	025-7	サクラコガネ属の一種	上翅の一部	
026	S-020　黒色粘	奈良時代～平安時代	AY24	026-1	ハナムグリまたはアオハナムグリ	上翅の一部	
027	S-020　灰黒砂	奈良時代～平安時代	AY24	027-1	コアオハナムグリ	左上翅	
028	S-040　黒灰砂粘	平安時代後期	AL-AN20.21	028-1	ハナムグリまたはアオハナムグリ	右上翅	
028	S-040　黒灰砂粘	平安時代後期	AL-AN20.21	028-2	カナブン属の一種	右上翅の一部	028-2と028-3は切断面が一致し同一個体
028	S-040　黒灰砂粘	平安時代後期	AL-AN20.21	028-3	カナブン属の一種	右上翅の一部	
029	S-096	平安時代後期	AK-AM18	029-1	コガネムシ科の一種	腹部腹板の一部	
029	S-096	平安時代後期	AK-AM18	029-2	コガネムシ科の一種	上翅の一部？	
029	S-096	平安時代後期	AK-AM18	029-3	コガネムシ科の一種	上翅の一部？	
029	S-096	平安時代後期	AK-AM18	029-4	コガネムシ科の一種	腹部腹板の一部	
029	S-096	平安時代後期	AK-AM18	029-5	コガネムシ科の一種	腹部腹板の一部	
029	S-096	平安時代後期	AK-AM18	029-6	コガネムシ科の一種	腹部腹板の一部	
029	S-096	平安時代後期	AK-AM18	029-7	コガネムシ科の一種	腹部腹板の一部	
030	S-096　黒灰砂粘	平安時代後期	AL.AM17.18	030-1	コアオハナムグリ	左上翅の一部	
030	S-096　黒灰砂粘	平安時代後期	AL.AM17.18	030-2	コガネムシ科の一種	後翅の一部	
030	S-096　黒灰砂粘	平安時代後期	AL.AM17.18	030-3	カンショコガネ属の一種？	右上翅	
030	S-096　黒灰砂粘	平安時代後期	AL.AM17.18	030-4	ハナムグリまたはアオハナムグリ	腹部腹板の一部	
030	S-096　黒灰砂粘	平安時代後期	AL.AM17.18	030-5	コガネムシ科の一種	腹部腹板の一部	
030	S-096　黒灰砂粘	平安時代後期	AL.AM17.18	030-6	ダイコクコガネ亜科の一種	腹部腹板の一部	
030	S-096　黒灰砂粘	平安時代後期	AL.AM17.18	030-7	ハナムグリまたはアオハナムグリ	小楯板	
030	S-096　黒灰砂粘	平安時代後期	AL.AM17.18	030-8	ハナムグリまたはアオハナムグリ	左上翅	
031	S-145　灰色砂	弥生時代後期	W10	031-1	不明甲虫	腿節の一部	

4）昆虫同定

結果を表15に示す。検出された種類は、いずれもコガネムシ科であり、ダイコクコガネ亜科の一種（Scarabaeinae Gen. et sp.）、カンショコガネ属の一種？（Apogonia sp.?）、サクラコガネ属の一種（Anomala sp.）、ハナムグリまたはアオハナムグリ（Eucetonia pilifera or Eucetonis roelofsi）、コアオハナムグリ（Oxycetonia jucunda）、カナブン属の一種（Rhomborrhina sp.）、コガネムシ科の一種（Scarabaeidae Fam., Gen. et sp.）が検出される。

4.考察

弥生時代後期（No.23）、奈良時代の河川跡（No.3,4）、平安時代後期（No.17）、鎌倉期?（No.1）から確認されたモモは、古くから栽培のために渡来した植物で（南木,1991）、観賞用の他、果実や核の中にある仁（種子）などが食用、薬用等に広く利用される。栽培植物のモモの可食部である種実が、各時代の遺構から検出された状況を考慮すると、当該期の本遺跡周辺域での利用が推定される。

栽培植物を除いた種実遺体分類群は、広葉樹のみの構成で、針葉樹や草本類は確認されない。コナラ亜属、アラカシ近似種、アカガシ亜属などのコナラ属、シイ属、クスノキ科、センダン、エゴノキ属などの高木類や、クサギなどの低木類、フジ属などの籐本類は、周辺の山野に生育していたものに由来すると思われる。

これらの自生する樹木のうち、コナラ亜属、アラカシ近似種、アカガシ亜属、コナラ属、シイ属などは、一部はアク抜きを要するが堅果が食用・長期保存が可能で収量も多いことから、古くから里山で保護されてきた種類である。また、食用ではないが、エゴノキ属には果実にエゴサポニンを含むため洗濯や魚採に利用可能な種を含む。クサギは果実が染料に利用可能である。さらに、種実以外の部位の利用として、フジ属の蔓は編物や繊維などに、クサギの葉や小枝などは薬用等に利用可能である。

樹種同定の結果、検出された種類は、クマシデ属イヌシデ節、コナラ属コナラ亜属クヌギ節、シキミ、エゴノキ属が検出された。河川沿いや林縁など比較的明るい林地を好む種類が中心だが、この傾向は種実遺体の出土傾向と類似する。このことから、これらの流木は遺跡周辺の河川沿いに生育していた種類を反映していると思われる。このような種類構成は、北九州地方の植生史をまとめた結果と比較してみても。矛盾しない（畑

中,1998など)。

昆虫化石で検出されたダイコクコガネ亜科は、食糞性のコガネムシ類で、おもに哺乳類の糞に集まる。いずれの種も獣糞を好んで摂食し、生態系の中では分解者の役割を果たしている。カンショコガネ属は、幼虫および成虫ともに植物を摂食する食植性のコガネムシ類である。上翅の構造からは本属の可能性が高いが、試料の状態が悪いために正確な同定ができなかった。サクラコガネ属は、サクラコガネやヒメコガネなど約30種が含まれる。分類が難しく破片からは種までの同定ができなかった。いずれの種も、幼虫および成虫ともに食植性であり、成虫はおもに広葉樹の葉上で葉を摂食する。ときに大量発生することがある。ハナムグリ－アオハナムグリは、平地から山地にかけて生息し、成虫は各種の花に集まる。北海道から九州にまで分布する。両種はきわめてよく似ており、また混生する場合もある。今回の試料は、種まで同定するのに必要な標徴を欠いており、種の確定はできなかった。コアオハナムグリは平地から山地にかけて生息し、成虫はおもに春と秋に出現する。各種の花に集まる。ハナムグリやアオハナムグリとよく似ているが、体が小さいことにより区別できる。カナブン属にはクロカナブンやアオカナブン、カナブンなどが含まれる。いずれも平地から山地にかけて生息し、成虫は夏にクヌギやコナラなどの樹液に集まる。通常、これらは体色で区別できるが、個体によっては明確に分けられないものもあり、また試料の状態が悪く種まで確定することができなかった。正確な同定には後胸腹板の形態などを調べる必要がある。

引用文献

畑中　健一・野井　英明・岩内　明子(1998)「九州地方の植生史」『図説　日本列島植生史』朝倉書店 pp.151-161.
石川　茂雄(1994)『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会 328p.
南木　睦彦(1991)「栽培植物」『古墳時代の研究　4　生産と流通Ⅰ』雄山閣出版 pp.165-174.
中山　至大・井之口　希秀・南谷　忠志(2000)『日本植物種子図鑑』東北大学出版会 642p.
岡本　素治(1973)「どんぐりのはなし(3)」『Nature Study　19巻8号』大阪自然科学研究会 pp.7-10.

Ⅵ.成果と課題

1.縄文期の面

日焼遺跡第2次調査地にて検出した、「乾裂状」構造を有する地表面は、これを覆う土層中から縄文期の曽畑式土器が出土することを考慮すると、当該期における面であると考えられる。本文にて記してきたように、2次調査地では遺構の確認はできていない。この面における生活痕跡は、日焼遺跡の南西に所在する脇道遺跡で同様な地表面を確認しており、ここでは「落とし穴」を2基確認し、周囲には風倒木痕跡が多数検出されている。この「乾裂状」構造を有する地表面は、調査区全体に観察できるのではなく、一定の標高に帯状に確認される。具体的に脇道遺跡の事例で述べると、「乾裂状」構造を有する地表面が一定の標高に帯状に確認でき、その低位・高位では確認できない。低位については、砂層堆積が顕著になるなど水成堆積層を想起させる。一方高位については、風倒木痕跡や「落とし穴」と考えられる土坑が確認されるなど、河川の水際に繁茂する木々を想像させる。いわば低位は河川内であり、水際部分に「乾裂状」構造を有する地表面を形成し、高位は木々が繁茂する中に、「落とし穴」が形成され、水を求めてきた動物捕獲を意図したものと解することができる。日焼遺跡2次調査地で確認した「乾裂状」構造を有する地表面は、まさに水際の痕跡を確認したものと考えられる。しかし今となっては、この地表面の上位における遺構確認ができなかったことは残念である。脇道遺跡事例では、出土遺物から縄文早期の時期を想定している。

2.官道前道路と官道

a.官道前道路-官道の「時期」

報告にて「官道」「官道前道路」など通称を先行させた用語使用を行ってきた。本章においても当面は、この用語を使用し、最後に「官道」の定義を確認しておきたい。

官道確認地点は、太宰府市だけでも島本遺跡・日焼遺跡・前田遺跡の3遺跡で確認され、南に隣接する筑紫野市では、大宰府条坊跡第99次調査地で南延長箇所の確認がなされている(太宰府市教委、2002・2005。筑紫野市教委、1997)。その造営から廃絶に関わる遺構間関係では、前田遺跡第1次調査地にて官道西側側溝と土坑との切りあい関係ならびに、土坑出土遺物から導かれる埋没時期の検討から、側溝廃絶時期の一端を奈良後期(Ⅲ-2期)に求めることができる点で共通認識が得られている。一方で東側側溝の埋没時期は、島本遺跡第2次調査地(太宰府市教委、2005)、前田遺跡第2次調査地で確認した溝の埋没時期から平安後期に求めることができるなど、東西両側溝に埋没時期に差があることが観察できている。しかし側溝埋没が等しく官道廃絶と結びつくかどうかについては、筑紫野市大宰府条坊跡第99次調査区内で、官道中央における造墓活動を見るとき、平安前期には喪葬令の完全無視とでもいえ官道使用がこの段階にはすくなくとも行われていなかった点が既に指摘されている。したがって、これまでの成果を整理すると奈良後期には官道管理行為に陰りが見え始め、平安前期には官道使用が途絶していたことを確認しておく。一方、官道前道路および官道造営時期はいつか。官道前道路については、これまで日焼遺跡の北に隣接する原口遺跡で確認されていた官道前道路と切り合う遺構群との関係から7世紀末から8世紀初頭のどこかに求められてきた。本報告でも記してきたように、官道前道路と官道との切りあい関係から、官道前道路の廃絶、厳密には側溝埋没時期が奈良前期(Ⅲ-1期)に求めることができ、当該時期は大宰府政庁Ⅱ期造営期に接触する時期であることを考慮すると、官道前道路の廃絶は大和政権下における「国家的」事業の中で廃絶し、かつ当該時期における官道施工に伴って埋められた可能性が生じてくる。このことから官道施工は、多くの先学が説くように大和政権の地方支配拠点としての大宰府造営時期に属し、具体的にその時期を求めるならば、奈良前期(Ⅲ-1期)に求めることができる。一方官道前道路の施工時期については、道路側溝埋没土から出土した遺物を観察しても、明瞭に確認することはできず、奈良前期(Ⅲ-1期)内に帰結するしか今のところ術がない。官道前道路と他の遺構との関係から求めるしかないが、原口遺跡第2次調査所見の報告を待って詳述するしかない。

表16.日焼遺跡周辺道路遺構規模計測表

■官道前道路

日2SF005

■側溝間		大尺【m/大尺】			小尺【m/小尺】		
	計測値	0.353	0.354	0.355	0.296	0.297	0.298
	8.5307	24.1663	24.0980	24.0301	28.8199	28.7229	28.6265
	8.3141	23.5527	23.4862	23.4200	28.0882	27.9936	27.8997
	8.4224	23.8595	23.7921	23.7251	28.4541	28.3582	28.2631
	25大尺						
■路面		大尺【m/大尺】			小尺【m/小尺】		
	計測値	0.353	0.354	0.355	0.296	0.297	0.298
	5.3822	15.2470	15.2040	15.1611	18.1831	18.1219	18.0611
	5.6943	16.1312	16.0856	16.0403	19.2375	19.1727	19.1084
	5.5383	15.6891	15.6448	15.6007	18.7103	18.6473	18.5847
	15大尺						

水城跡西門【Ⅰ期】　　水城跡西門【Ⅱ期】

門柱間　4.22m　　開口部幅　11.5m（九州歴史資料館、1997）

■官道

島2SF050（太宰府市教委、2005）

■側溝間		大尺【m/大尺】			小尺【m/小尺】		
	計測値	0.353	0.354	0.355	0.296	0.297	0.298
	9.4398	26.7416	26.6661	26.5910	31.8912	31.7838	31.6772
	11.2237	31.7952	31.7054	31.6161	37.9179	37.7902	37.6634
	10.3318	29.2684	29.1857	29.1035	34.9046	34.7870	34.6703
	30大尺				35小尺		
■路面		大尺【m/大尺】			小尺【m/小尺】		
	計測値	0.353	0.354	0.355	0.296	0.297	0.298
	4.6763	13.2473	13.2099	13.1727	15.7983	15.7451	15.6923
	7.0687	20.0246	19.9681	19.9118	23.8807	23.8003	23.7205
	5.8725	16.6360	16.5890	16.5423	19.8395	19.7727	19.7064
	15大尺				20小尺		

前田4・5SF200（太宰府市教委、2002）

■側溝間		大尺【m/大尺】			小尺【m/小尺】		
	計測値	0.353	0.354	0.355	0.296	0.297	0.298
	13.8882	39.3433	39.2322	39.1217	46.9196	46.7616	46.6047
	13.6955	38.7975	38.6879	38.5789	46.2686	46.1128	45.9581
	13.7919	39.0704	38.9600	38.8503	46.5941	46.4372	46.2814
	40大尺				45小尺		
■路面		大尺【m/大尺】			小尺【m/小尺】		
	計測値	0.353	0.354	0.355	0.296	0.297	0.298
	11.5622	32.7541	32.6616	32.5696	39.0615	38.9300	38.7993
	10.7072	30.3320	30.2463	30.1611	36.1730	36.0512	35.9302
	11.1347	31.5431	31.4540	31.3654	37.6172	37.4906	37.3648
	30大尺				35小尺		

日2SF055

■側溝間		大尺【m/大尺】			小尺【m/小尺】		
	計測値	0.353	0.354	0.355	0.296	0.297	0.298
	13.2324	37.4856	37.3797	37.2744	44.7041	44.5535	44.4040
	13.0645	37.0099	36.9054	36.8014	44.1368	43.9882	43.8406
	13.1485	37.2477	37.1425	37.0379	44.4204	44.2709	44.1223
	40大尺				45小尺		
■路面		大尺【m/大尺】			小尺【m/小尺】		
	計測値	0.353	0.354	0.355	0.296	0.297	0.298
	11.7080	33.1671	33.0734	32.9803	39.5541	39.4209	39.2886
	11.8618	33.6028	33.5079	33.4135	40.0736	39.9387	39.8047
	11.7849	33.3850	33.2907	33.1969	39.8139	39.6798	39.5466
	35大尺				40小尺		

条99SF002（筑紫野市教委、1997）

■側溝間		大尺【m/大尺】			小尺【m/小尺】		
	計測値	0.353	0.354	0.355	0.296	0.297	0.298
	12.7646	36.1603	36.0582	35.9566	43.1236	42.9785	42.8342
	12.8698	36.4584	36.3554	36.2530	43.4791	43.3327	43.1872
	12.8172	36.3093	36.2068	36.1048	43.3014	43.1556	43.0107
	35大尺				45小尺		
■路面		大尺【m/大尺】			小尺【m/小尺】		
	計測値	0.353	0.354	0.355	0.296	0.297	0.298
	10.8663	30.7827	30.6958	30.6093	36.7105	36.5869	36.4641
	10.9706	31.0782	30.9904	30.9031	37.0628	36.9380	36.8141
	10.9185	30.9305	30.8431	30.7562	36.8867	36.7625	36.6391
	30大尺				35小尺		

b.規模

官道前道路ならびに官道についての規模は、本文にて記してきた。再述すると**表16**のようになる。

■官道前道路

おおよそ路面幅：5.5m、側溝間距離:8.4mを測り、施工時期から想定される度量衡規定による大尺換算で、路面幅:15大尺、側溝間距離:25大尺となる。

■官道

検出現場個々の計測値は、**表16**に記したとおりであるが、島本遺跡第2次調査で検出された道路痕跡のみが著しく狭い。この点は、東側側溝の埋没時期の遅さや堆積土が物語るように水成堆積層であることを考慮すると、浸食による路肩崩壊が引き起こした結果であると考えられる。この事例を除く3例では、おおよそ路面幅11.0m前後、側溝間距離13m前後を測り、施工時期から想定される度量衡規定による大尺換算で、路面幅30大尺、側溝間距離40大尺を測ることになる。

ところで、この官道前道路ならびに官道が水城西門へ接続されることを考慮すると、これらの帰属する時期における水城西門の規模を参考までに**表16**に併せて記載している（九州歴史資料館、1997）。これらの数値から、水城西門Ⅰ期は門柱幅4.22m（10大尺前後）、Ⅱ期開口部幅11.5m（30大尺）であることから、官道前道路は水城西門Ⅰ期に、官道は水城西門Ⅱ期の規模に近似していることになり、それぞれに接続していたことが明らかとなる。

加えて、路面幅30大尺、側溝間距離40大尺ということになれば、側溝外側間の距離は約50大尺となり、条坊中央大路（朱雀大路）施工幅100大尺の約半分の規模ということになる（太宰府市教委、1998）。

c.官道前道路-官道

官道前道路の空間的形状は、蛇行する点に特徴があり、一方官道は直線指向とでも言えるように、多くの場所で直線的に検出される。太宰府市周辺でも同様な状況で確認され、肥前・筑後の状況も同様である。官道施工で特筆すべき点は、多くの調査事例が示すように、「谷を埋め」、「山を削り」という現在の高速道路をイメージさせる施工理念が見て取れる。また日焼遺跡第2次調査では、道路路盤工材として後期古墳石材を使用した痕跡(2SF025)を確認するなど、「在地首長」の墓と想定される古墳の破壊が行われていることになる[1)]。この古墳自体の造墓時期は、道路路盤内から出土する遺物から想定することになり、いささか推測の域を出ないものの、6世紀末から7世紀初頭頃に位置付けることができるものと考えられる。官道施工を奈良前期に求めることから、その時間差は約100年強ということになる。この古墳が官道施工地内にあったものか、近傍にあったものかは明らかにし難く、問題を残すことになるが、少なくとも在地に傾斜した墓の一つが破壊され、かつ路盤工材に用いられていることになる。人々の記憶がどこまで辿ることができるのかが問題となるが、100年強といえば約三世代の記憶に該当する。現代感覚で記述しているため三世代以上の可能性も残しているが、忘れ去られた墓(古墳)と捉えるのか施工者(発案者と実務者双方を含意)とは無関係な墓と捉えるのかは明らかにし難い。次にこの官道施工箇所における行為・すなわち「谷を埋め」という行為には何を見るであろうか。谷地形といえば下位に流れる小河川などを想像することになり、換言すると「水利権」を無視した行為が想定されることになる。また同様に「山を削る」行為も、日焼遺跡同様に在地における先代の墓や集落存在を無視した行為が想定され、在地伝統の破壊とでもいえる行為が各所で見られることになる。こういった点を考慮すると、官道前道路は、地形などの自然環境に左右されるとともに地域利害を調整しつつ施工されたと考えられるのに対し、官道は自然環境および地域利害を無視した施工が行われているといえる。この点から、「官道」用語の含意するところは、前者は在地に利害調整を委ねた「王権的」施設であるのに対し、後者は事務官僚機構に立脚した「国家的」施設と規定でき、単に現象面として広くかつ直線的であるという高規格道路であることのみに「官道」が使用されるのではないことに注意を要する。

自然科学分析結果から、「食糞昆虫」が検出されており、牛馬の糞が官道といえど散乱していた可能性を示唆している。一昔前までは、一般的な光景であったことを思えば、さして珍しいことではないとも言える。

3.墓

a.造墓時期

大宰府の「奥津城」として学説史的にも重要な位置にある宮ノ本遺跡に隣接し、広義の宮ノ本丘陵北東部にある日焼遺跡は、平安前期における火葬墓の造営にはじまり、丘陵斜面から裾部にかけて土葬墓の展開へと移行していく。同一丘陵に所在し、かつ日焼遺跡の北に隣接する長浦遺跡では奈良期における火葬墓が検出されていることを考えると、大宰府西域の宮ノ本丘陵一帯が、古代における墓地として土地利用されていたことが分かる。一方でⅢ．環境においても述べたように、宮ノ本丘陵東裾には古代における情報伝達施設としての官道が敷設されており、喪葬令における大路周辺での造墓行為の禁止を説いた法令を違反していることになる。この場合の大路をどこまで拡大解釈するのかが、法令違反行為を認定する分岐点となり、官道東側においては掘立柱建物群が造営されていることを考えると、官道への当時の人々の意識、いわば地方統治機構と地方住民との意識の差を見る上で重要な遺跡であることが分かる。

本文にて報告されてきた中で、墓を検出したものは日焼遺跡第5次調査を主とし、ここで検出された墓は土葬墓であり、水城西門を通過する官道使用が減衰した時期以降にあたる。具体的には9世紀後半から10世紀代で、「死穢」を忌避した「平安貴族」層が居住空間から排除した時期にあたり、都の風習に近い墓地の一つに位置づけられる。

b.空間的位置

日焼遺跡で検出された土葬墓の位置は、単に居住域から遠ざけられた墓地という点で評価できるものではな

い。日焼遺跡での造墓期間においては既に居住域、すなわち大宰府条坊域への造墓が開始されており、そのような状況下にあっても、造墓地を変更することなく、宮ノ本墓地への造墓を継続させた墓造営者の意識をどう理解するのかが問題となる。

この問題を読み解く手立てとして、埋納品の質にみる階層差を他地域での造墓者と比較することで、宮ノ本丘陵での造墓の階層的位置を確認しておく必要がある。この点については既に分析を行い公表してきているため詳述することは避けるが、宮ノ本丘陵での造墓者は、他所、この場合は大宰府という狭域にとどまらず、大宰府管内、いわば九州内においても突出した位置にある。換言すると「上層階層」墓地にあたり、大宰府における「主導」的位置にあったものの墓であることは想像できる。当時の社会における具体的位置について、個々の墓から得られる情報に限りがあるため、言及することはできないが、宮ノ本遺跡を代表する買地券記載内容から想定される階層は、在地首長層の墓地である可能性が高い。したがって、律令主導者すなわち大和政権下にある下向官人層というよりも在地色の強い人々、中でも地域支配を伝統的に行ってきた人々の墓であるといえる。一方で同時代墓は、**図177**に記載したように条坊北西部のみならず条坊内における造墓が観察でき、これらとの比較が必要となる。墓への埋納品の質からみた時、条坊内墓地での埋納品が低い。このことを造墓階層に直結させることは、危険性を孕んでいるものの、先述したように九州管内における宮ノ本墓地の位置を考えた時、その上下は十分想定できることになる。また、居住地ないしは大路周辺への造墓を禁じた令の規定を遵

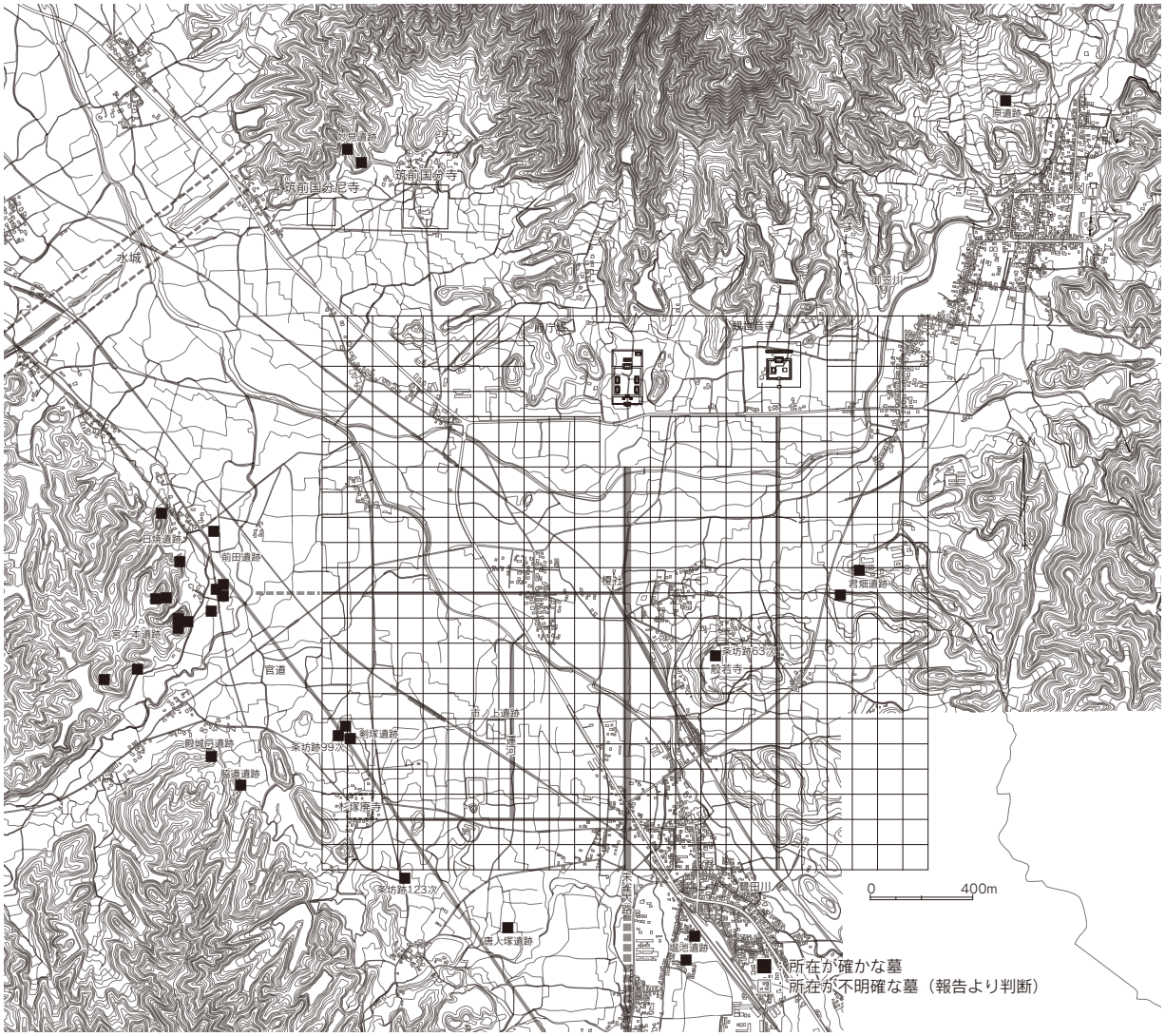


図177.政庁Ⅱ期における大宰府の空間利用図
【政庁Ⅱ期施工条坊復原案：筆者復原(中島、2008)】

守していること等を考慮すると、■高階層墓地　■在地主導者の墓地　■法令順守指導者の墓地ということが浮かび上がり、律令制度を体現せざるを得なかった階層の墓地ということになる。一方で条坊内墓地（君畑墓地・般若寺墓地など）は、法令を文字通り「侵食」する勢力の墓地として解することができる。

このように、同時代の墓でありながら、その造墓地の空間的位置や階層的位置を考慮すると二者に分けることが可能となる。これらを実際に担った人々の出自については、買地券に記載されたもの以上の情報を得るに至っていない。しかし個々の造墓作法の様態からは、「様々な様態」によって構成されていることは観察でき、大宰府へ集住した人々の墓としての理解を今は行っている（中島、2007）。

4.平安後期における土地利用

日焼遺跡第2・14・15次調査にて平安後期に埋没した溝を一条確認し、当該遺構からは、土器などとともに輸入磁器が出土している。溝の規模からみて、小規模な排水溝ではなく、導水などを意図した遺構であるとも考えられる。隣接する前田遺跡からは官道東側溝が継続使用されていたものと考えられ、平安後期における使用が確認されており、この遺構からは、条坊内で頻出する輸入陶磁器が多数出土、日焼・前田遺跡における使用階層の存在を想定できる。しかし、具体的な居住関連遺構の確認が行われておらず、佐野地区遺跡群全体をみても明らかにし難い。したがって、居住空間としての土地利用よりは、交通路としての使用を想定せざるを得ない。官道機能自体は、前項にて記してきたように奈良後期（Ⅲ-2期）に停止しているものと考えられるが、当該箇所自体を交通路としての使用を止めたとする根拠は提示し難い。埋没時期が平安後期である点は、Ⅲ期施工条坊の埋没時期とも重なり、条坊周辺における土地管理状況の途絶時期と共時的である（中島、2008）。

5.残された課題

平成18年度をもって、佐野土地区画整理事業は一定の終息をみた。先行して実施された観世地区区画整理事業における文化財取り扱い業務の保留を解消するために、佐野土地区画整理事業では、事業地内の埋蔵文化財調査を完了させることで進めてきた。しかし事業都合により一部埋蔵文化財保存箇所が生じるなど、事業運営ならびに将来への市民負担の不公平性の残存など、行政運営側での問題点も残される結果となった。

埋蔵文化財記録保存措置に関する問題点は、本文中にも記述してきたが、調査優先で行ってきた結果、先行する調査成果の検討ならびに問題点の抽出を行えないまま、調査のみが進行し、整理報告を行うにあたって、多くの問題点の未解決ならびに解消方法としての調査視点の欠如を改善することなしに、既に多くの遺跡が「消失」してしまっていたことになる。この場合の「消失」は、行政的な「消失」よりは、調査者の視点欠如による「消失」を含意している。一例を上げるならば、縄文早期の面として認識した「乾裂状」構造を有する地表面の空間分布確認の不徹底があり、認識の確立自体が事業終盤での認識であったことも、大きな問題を残すことになった。換言すると、認識なく破壊されたものも少なからず存在しているということである。ここで、残された問題を記述することは、既に遺跡群が欠失した現状にあって佐野地区遺跡群を調査する際の問題点ではなく、学術的な視点での問題点ということにならざるを得ない。学術的な問題点についても、いきおい記述者の浅はかな知識から記述されるにしかすぎず、本質的な問題点にはほど遠いのではないかと危惧する。やはり、「残された問題」としては、調査後に一定の成果を導き出し、次調査へとつなげる組織の確立が必要であるとのみ記しておくしかない。

（中島恒次郎）

註

1）古墳規模が定かではないため、どの程度の階層の人々の古墳であったかは特定できない。

引用文献

太宰府市教育委員会（1998）『大宰府条坊跡　X』太宰府市の文化財第37集
太宰府市教育委員会（2002）『太宰府・佐野地区遺跡群　14』太宰府市の文化財第63集
太宰府市教育委員会（2005）『太宰府・吉松地区遺跡群　1』太宰府市の文化財第77集
九州歴史資料館（1997）『大宰府史跡　平成8年度発掘調査概報』

筑紫野市教育委員会(1997)『大宰府条坊跡　第99次発掘調査』筑紫野市文化財調査報告書　第52集
中島恒次郎(2007)「「都市」的な墓「村落」的な墓(上・下)」『古文化談叢』第56・57集九州古文化研究会
中島恒次郎(2008)「居住空間史としての大宰府条坊論」『九州と東アジアの考古学　－九州大学考古学研究室50周年記念論文集－』
九州大学考古学研究室50周年記念行事実行委員会

前田遺跡検出の官道

付　表

1.遺構一覧
2.土層解説一覧
3.遺構略測図

※出土遺物一覧・遺物計測表は、CD-ROMへ搭載

図178.日焼遺跡　第1次調査　遺構略測図(S=1/250)

日焼遺跡の環境(上が北)

表17-1.日焼遺跡　第2次調査　遺構一覧(1)

S番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	時　期	地区番号
1	2SX001	河川×窪み	黒灰色土	S-1→S-4	中世	BG9他
2	2SX002	小穴群	黒灰色土		中世後期	AV5
3	2SX003	河川×窪み	黒灰色土と白灰色中粒砂の互層		鎌倉期	AV4他
4	2SX004	窪み	茶色土		中世	BD8
5	2SF005	道路			古代	
6	2SX006	窪み	黄茶色土		無遺物	BF20
7	2SX007	窪み	明褐色土		古代	BD18
8	2SX008	窪み	暗黒灰色土		不明	BD14
9	2SX009	小穴群	暗黒灰色土		中世	AT11
10	2SD010	河川	灰色砂		縄文早期	下層全域
11	2SX011	窪み	暗黒灰色土		不明	AV9
12	2SD012	溝	灰色粘土→灰褐色土→黄茶灰色土		奈良前期	BC17他
13	2SD013	溝	茶黒色土		平安後期	BA7
14	2SD014	溝	灰色砂質土→黄茶砂	S-12→S-14→S-1→S-4	奈良前期	BE10他
15	2SD015	河川	黒色砂土→茶灰色砂質土→黒灰色土	S-15→S-117	鎌倉期	AA15他
16	2SX016	小穴	茶灰色土		不明	AW5
17	2SD017	溝	茶灰色土		奈良初期	AX6他
18	2SK018	土坑	茶灰色土		不明	BE12
19	2SX019	窪み	黒色砂質土		近世	BD9
20	2SD020	溝	別記	混入で中世有。	奈良前期	AY24他
21	2SX021	溝×窪み			無遺物	BD14
22	2SD022	溝	茶灰色粘土		奈良前期	AW8
23	2SX023	窪み	茶灰色粘土		不明	AW9
24	2SX024	小穴	茶灰色粘土		不明	AW9
25	2SF025	道路		積み土	奈良前期	X10他
26	2SX026	窪み	茶色土		不明	BA10他
27	2SX027	小穴	黒茶色土		不明	BA9
28	2SX028	窪み	黄茶色土		縄文	BE19
29	2SX029	小穴	灰色土		不明	BC22
30	2SD030	河川			不明	AG10他
31	2SX031	窪み			不明	AV11他
32	2SX032	小穴群			縄文	BD・BE17
33	2SX033	窪み	茶灰色土		不明	AV12
34	2SX034	小穴			不明	BC18
35	2SD035	溝			奈良期	AJ14他
36	2SX036	小穴			不明	AW12
37	2SK037	土坑	淡茶灰色土	S-22→S-37	奈良期	AW12
38	2SX038	小穴			不明	BC19
39	2SX039	窪み			縄文	AY11
40	2SD040	溝			不明	AG16
41	2SX041	小穴	黒色土		不明	AY19
42	2SX042	窪み	茶灰色土		不明	AY19他
43	2SX043	小穴	暗灰色土		不明	AX18
44	2SX044	窪み	灰褐色土		不明	AW18他
45	2SD045	溝			不明	AN21他
46	2SX046	窪み	明灰色土		奈良期	AW19
47	2SX047	小穴	黒褐色土		近世	AV18
48	2SX048	窪み	黒灰色土		不明	BC12
49	2SX049	窪み	明灰色土		不明	AW13
50	2SD050	溝	灰黒色砂質土		不明	AI12他
51	2SX051	窪み			不明	AY12
52	2SX052	窪み	明灰色土		不明	AV17
53	2SX053	窪み			弥生	AV16
54	2SX054	窪み	灰褐色土		不明	AT12・13
55	2SF055	道路				AI15他
56	2SX056	窪み	灰色砂		不明	AU12
57	2SX057	窪み	明橙灰色砂		不明	AU14他
58	2SX058	窪み	黒色砂質土		平安後期	AT16他
59	2SX059	窪み	明橙灰色砂		不明	AV15他
60	2SD060	溝			平安後期	AO11他
61	2SX061	窪み	暗灰色土		不明	AS13・14
62	2SX062	窪み	黒褐色土		古墳後期	BA16
63	2SX063	窪み	黒褐色土		不明	BC19
64	2SX064	窪み	黒灰色土		不明	BB16
65	2SD065	河川	茶黒色土		奈良前期	V10 ～ 13
66	2SX066	窪み	黒灰色土		古代	BA17他
67	2SX067	窪み	灰色砂		古代	BC20他
68	2SX068	窪み	黒褐色土		不明	BB13
69	2SX069	窪み	橙灰色砂		不明	AY13
70	2SK070	土坑	灰色砂質土→黄橙色粘土			X6
71	2SX071	窪み	橙灰色砂		不明	AY12
72	2SX072	窪み	黒灰色土		古墳以降	AY14他
73	2SX073	窪み	橙灰色土		古代	BA16他
74	2SX074	窪み	黒色土		奈良期	AY25

表17-2.日焼遺跡　第2次調査　遺構一覧(2)

S番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	時　期	地区番号
75	2SX075	杭列				AD13他
76	2SX076	窪み	暗灰色砂質土		不明	BB25
77	2SX077	窪み	黒色土		平安期	AY25
78	2SX078	窪み	暗灰色粘質土		平安期	BA26
79	2SX079	窪み	黒色土		中世	AX25
80	2SD080	河川	別記		奈良後期	AD12他
81	2SX081	窪み	暗灰色土		不明	AY23
82	2SX082	窪み	灰色砂質土		古代	BA23他
83	2SX083	窪み	明灰色砂		奈良期	BA23
84	2SX084	窪み	灰黒色砂質土・黒色土・茶色砂		平安後期	AU23
85	2SX085	竪穴住居	黒色炭層	S-25→S-85　河川堆積層の可能性あり。	平安前期	AA6・7
86	2SX086	窪み	灰黒色土		古墳後期	AS22
87	2SX087	窪み	茶黒色土		平安中期	AJ14
88	2SX088	窪み	黄茶色砂混じり土		不明	AF16
89	2SX089	窪み	灰黒色砂質土		鎌倉期	AS21他
90	2SK090	土坑	黒色炭層	S-90→S-85	飛鳥期	AA・AB6
91	2SX091	窪み	灰黒色砂質土		平安期	AR21
92	2SX092	窪み	黒色土		近世	AI17
93	2SD093	溝	灰褐色土		不明	AI17
94	2SX094	窪み	黒色砂質土	包含層	平安後期	AM13他
95	2SD095	溝	灰色砂質土	鎌倉期混入有	奈良前期	AE12
96	2SX096	窪み	茶灰色砂質土		平安後期	AL19他
97	2SX097	窪み	茶褐色土→茶色砂		飛鳥期	AM20
98	2SX098	窪み	黒色砂質土		平安期	AQ13他
99	2SX099	窪み	黒色砂質土		平安後期	AP20他
100		欠番				
101	2SX101	小穴	黒色砂質土		不明	AP20
102	2SX102	窪み	茶灰色砂質土		古代	AN20他
103	2SX103	窪み	明灰色砂		中世	AM19
104	2SX104	杭列				AL20
105	2SD105	河川			古墳後期	AB16他
106	2SK106	土坑			平安中期	AO18他
107	2SX107	窪み			平安期	AM18
108	2SX108	窪み			奈良期	AC10他
109	2SX109	窪み			中世	AR19他
110	2SD110	河川			平安前期	AA8他
111	2SK111	土坑群	灰色砂		平安後期	AA5
112	2SX112	窪み	黒色砂質土		不明	AF15
113	2SX113	窪み	黒色砂質土		奈良期	AF15
114	2SX114	小穴群			不明	AQ19
115	2SX115	杭列				AE10
116	2SD116	溝			近世	V8・W8
117	2SK117	土坑			中世	AH14・15 AG13・14
118	2SK118	土坑			平安後期	AC・AD4
119	2SD119	溝			現代	Y7
120	2SD120	溝	黒色腐植土		不明	AA14他
121	2SK121	土坑	黒灰色炭混じり土		奈良期	AC6
122	2SX122	小穴群	灰色砂質土		近世	X6・7・Y7
123	2SX123	小穴群	灰色砂質土・黒灰色土		近世	V・W6・7
124	2SX124	小穴群	灰色砂質土		中世後期	X・Y5
125	2SD125	河川	青灰色腐植土		無遺物	X9他
126	2SX126	窪み	茶灰色砂質土		奈良期	AD5
127	2SK127	土坑群			飛鳥期	AC4
128	2SK128	土坑	茶灰色土		飛鳥期	V7
129	2SK129	土坑			近世	V6
130	2SD130	河川	黒色腐植土		古墳期	AA7
131	2SX131	小穴			近世以降	T8
132	2SD132	溝			不明	AA10他
133	2SX133	窪み			奈良期	AC7
134	2SX134	窪み			飛鳥期	AC6
135	2SK135	土坑			奈良前期	AB14
136	2SX136	窪み	灰色粘質土		奈良前期	AE11・12
137	2SX137	窪み			不明	AD7
138	2SX138	小穴			飛鳥期	AA6
139	2SX139	窪み			不明	AB6
140	2SX140	窪み		S-140→S-95	奈良後期	AE13
141	2SX141	窪み	黒灰色シルト		奈良期	AC14
142	2SX142	窪み	黒灰色シルト	S-142→S-141	奈良期	AC14
143	2SX143	窪み			奈良後期	AE10
144	2SX144	窪み			不明	AC11
145	2SD145	溝		S-145→S-130→S-125→S-110	古墳前期	W11他
146	2SX146	窪み	灰色砂		不明	AD7他
147	2SX147	窪み	明茶色土		不明	AB5

表17-3.日焼遺跡　第2次調査　遺構一覧(3)

S番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	時　期	地区番号
148	2SX148	小穴	黒色土(炭化物混入)		飛鳥期	AB5
149	2SD149	溝	茶色砂		不明	AD4
150	2SD150	河川	黒色腐植土		弥生後期	V10他
151	2SD151	河川	灰色砂		不明	AD5
152	2SX152	杭列			不明	AC13
153	2SX153	杭列			不明	AC13
154		欠番				
155	2SX155	杭列				AA7
160	2SD160	河川		S-160→S-150→S-145→S-130→S-110→S-125	古墳後期	AA6
200	2SX200	溝×窪み	灰青色粘土		中世	BJ13
201	2SX201	小穴	灰茶色土		不明	BI18
202	2SX202	窪み			不明	BH17・18
203	2SX203	窪み			不明	BH17
204	2SX204	小穴	灰茶色土		不明	BK15
205	2SX205	溝×窪み			鎌倉期	BG10 ～ BL13
206	2SK206	土坑			奈良後期	BG10・11

表18.2SD020土層関係表

	遺物記載内容	
上位	S-20	S-20灰黒色砂質土
↑	S-20黒灰色土	
	S-20灰色砂	
	S-20灰黒色土	
	S-20暗灰色砂	
	S-20黒色砂	
	S-20黒茶色土	S-20黄色粘土
	S-20黒色粘土	
下位	S-20暗灰色土	

表19.2SD080土層関係表

日2SD080　　※横の関係は、必ずしも同時性を保障してはいない。

黒灰色土						
灰茶色土			灰色砂土			灰色土
						淡灰色砂
淡灰色土			暗灰色土			
		黒灰色砂		黒色土		淡黒色土
茶色砂						
				茶灰色粘		
						暗茶灰色粘
灰褐色土	茶黒色土					
						茶黒灰色土
	暗灰色土		灰茶色粘			
			灰色砂土			
	明灰色砂		灰色砂			
					茶色土	
			青灰色土			
黄白色土（基盤層）						

日2SD080 Atr

茶色土			
灰色砂土		灰色砂2	
灰色砂1			
黒砂粘			
	青灰色粘		青灰色粘2
	暗灰色土		
		明灰色砂	

表20.2SF055（2SF025)積み土層序

※並列：層序不明　　●：欠如層

	2SF025A	2SF025B	2SF025C	2SF025D	2SF025E	2SF025F	2SF025G	2SF025H
上位						暗灰色砂		暗灰色砂
↑	暗灰色土	暗灰色土	暗灰色土	暗灰色土	暗灰色土	暗灰色土	暗灰色土	暗灰色土
	●	●	灰色粘土	●	●	●	●	●
	●	●	●	●	明灰色土	明灰色土	●	●
	灰色土	●	灰色土	●	灰色土	灰色土	●	●
	●	●	灰色砂(小穴)	●	灰白色土	灰白色土	●	灰白色土
	白色土	●	白色土	●	白色土	●	●	●
	淡灰色土	●	淡灰色土	●	●	●	●	●
	●	●	●	●	黒灰色土	黒灰色土	●	黒灰色土
	黒色土	黒色土	黒色土	黒色土	●	黒色土	黒色土	黒色土
	●	●	明白色土	●	明白色土	明白色土	明灰色土	●
	●	●	●	●	●	●	茶色粘土	茶色粘土
下位	●	●	●	●	●	●	●	灰色砂
備　考							明灰色土→黒色土	

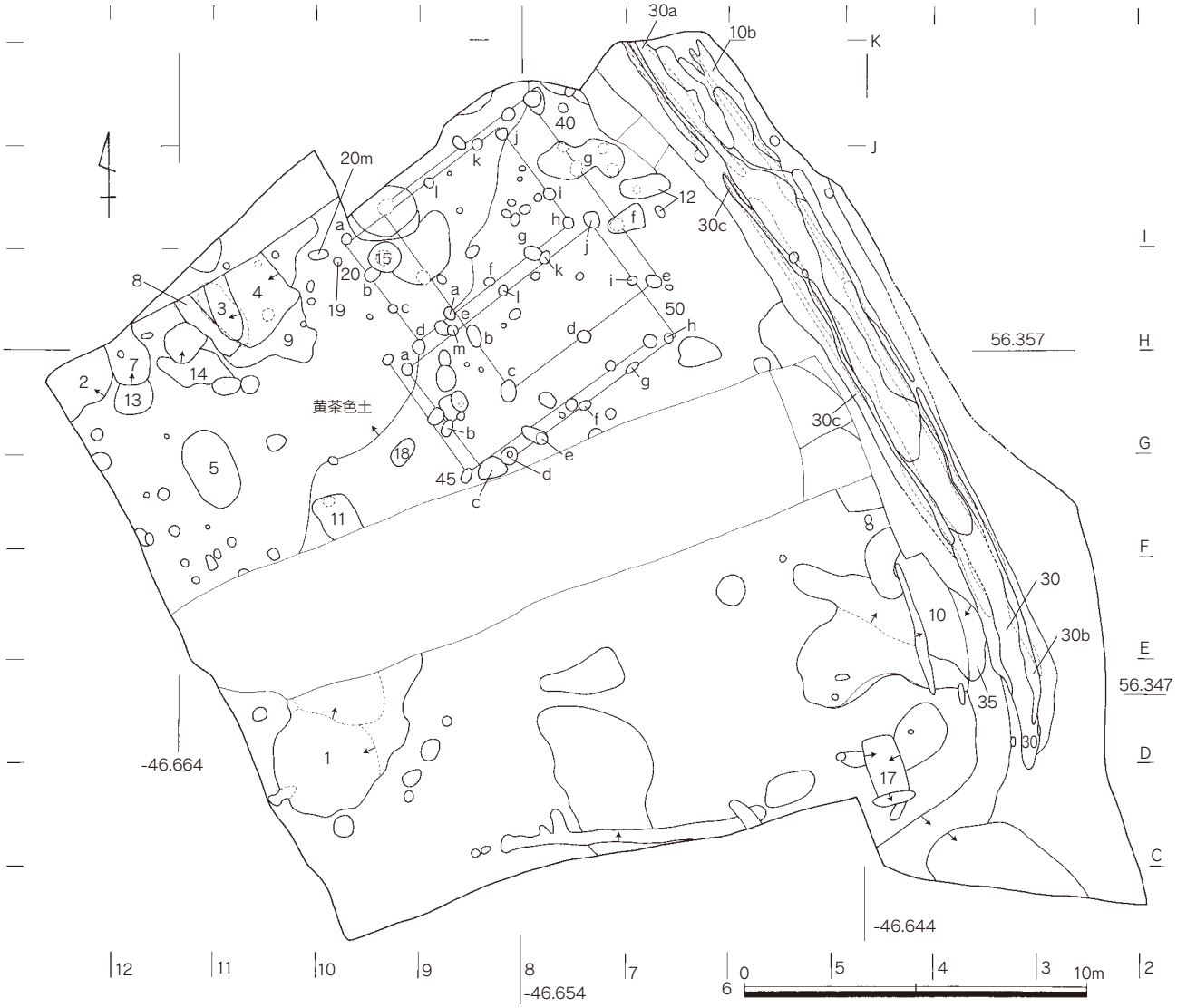


図180.日焼遺跡　第4次調査　遺構略測図(S=1/200)

表21.日焼遺跡　第5次調査（1区）　遺構一覧

S番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	時期	地区番号
1	5SK001	土壙	灰色粘質土		中世後期～	B4
2	5SD002	溝	黄灰色土			B5
3	5SX003	たまり状	灰茶色粘質土			B5.6
4	5SX004	Pit	灰茶色粘質土			B3
5	5SD005	溝	灰茶色粘質土			B4 ～ 5
6	5SX006	Pit	灰茶色粘質土			C3
7	5SD007	溝	灰茶色粘質土		幕末～	C3
8	5SK008	土壙	灰色粘質土			C6
9	5SX009	Pit群	灰茶色粘質土		近世～	C5
10	5SD010	溝	灰茶色粘質土		中世～	D2 ～
11	5SX011	Pit群	灰茶色粘質土			D6 ～ E6
12	5SX011	Pit群	灰茶色粘質土		近代～	D3.4
13	5SX013	Pit群	黒茶色土		近代～	F4
14	5SX014	Pit群	灰茶色土		古代～	G4
15	5SX015	整地×たまり	淡茶灰色土		8ｃ～	B4 ～
16	5SK016	土壙	黒茶色土		近代～	G6
17	5SD017	溝	茶色粘←茶色土		近世末～	F2
18	5SX018	たまり状	茶色土			F2
19	5SX019	たまり状	茶色土			F2
20	5SD020	溝	黒灰色土→茶色土→灰黄色土		平安～中世	D2 ～
21	5SX021	Pit	灰色土		近世	E5
22	5SX022	Pit	茶色土			H6
23	5SX023	カクラン	茶色土			H8.9
24	5SX024	Pit	黒色土		近世～	I9
25	5SK025	土壙×井戸	褐色土←黒茶色土←黄灰色土		近代～	G2
26	5SK026	土壙	褐色土			L9
27	5SX027	Pit		27→10→17	古代	F3
28	5SX028	たまり×溝	灰色土		古代	F2
29	5SK029	土壙群	黒色土		古代（整地層）	K8
30	5SB030	掘立柱建物		9.11.12を含む		D4
31	5SK031	土壙(整地)	黒色土		奈良～	K8
32	5SX032	たまり状（整地）	黒灰色土		奈良～	L8
33	5SX033	Pit	茶褐色土		7ｃ～	F6
34	5SD034	溝×たまり状	灰茶色土			J4
35	5SD035	溝×たまり状			近世末～	J4 ～ 5
36	5SK036	土壙	茶褐色土		8ｃ～	G2
37	5SX037	Pit	茶色土			G2
38	5SX038	たまり状	灰茶色土		中世～	J3
39	5SD039	溝	灰色土			J4
40	5SD040	溝にともなうたまり状(S-15下層)	茶色土			K4 ～
41	5SK041	土壙	茶灰色粘質土			K4
42	5SX042	Pit	茶黄色土	42→39	8ｃ～	J4
43	5SX043	Pit群	灰茶色土			F5
44	5SK044	土壙	灰茶色土			F5
45	5SD045	溝	灰色砂		奈良～	B5 ～
46	5SE046	井戸　　素堀	灰茶色土		江戸末	I10
47	4SX047	落ち込み×溝？	茶色土		江戸末～	L5 ～ M6
48	5SK048	土壙	茶色土	48→47		M6
49	5SX049	埋甕			近代	E7
50	5SD050	溝　　土器破片敷き	灰茶色土		奈良～	F2 ～ J3
51	5SK051	土壙	茶褐色土		近世～	G7
52	5SK052	土壙			近代	K11
53	5SX053	Pit群	明灰色土	15→53	古代～	H5
54	5SK054	土壙群	黒色土（バラス混）		近現代	I6
55	5SD055	溝		55→56	8ｃ～	B3 ～
56	5SX056	たまり状	茶褐色土		8ｃ～	C3
57	5SD057	溝×たまり状	灰白色粘質土			F4
58	5SX058	たまり状	暗茶色土		8ｃ～	C3
59	5SD059	溝状				E4
60	5SD060	溝×たまり状				H2 ～
61	5SX061	たまり状	茶色土		中世～	J3
62	5SX062	たまり状	褐灰色土		奈良～	D3 ～
63	5SX063	Pit	灰茶色土	63→36		G2
64	5SD064	溝	灰白色土			H2 ～
65	5SD065	溝	茶色土		奈良～	H3 ～
66	5SD066	溝	赤褐色土	66→20		F2
67	5SF067	硬化面	S-10 ～ 20間道路部分			D2
68	5SX068	Pit				G2
69	5SX069	たまり状	灰褐色土		8ｃ～	D3
70	欠番					
71	5SX071	たまり状				F5
72	5SD072	溝状				G4
73	5SD073	溝状	白色砂		奈良～	I5
74	5SK074	土壙	マンガン灰色土			H4

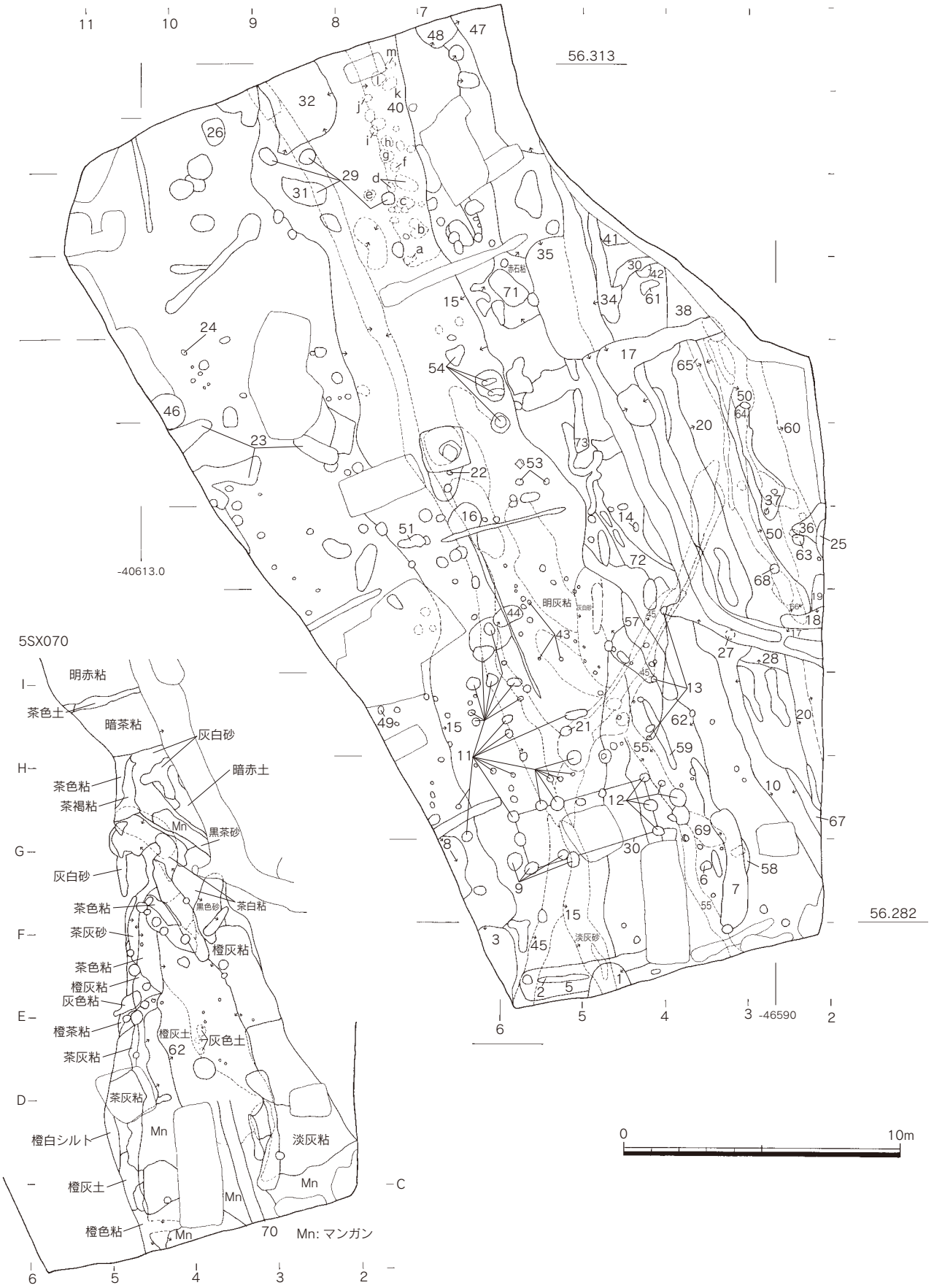


図181.日焼遺跡　第5次調査(1区)　遺構略測図(S=1/200)

表22.日焼遺跡　第5次調査(2区)　遺構一覧

S番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	時期	地区番号
102	5SX102	Pit	茶灰色粘質土			V16
103	5SX103	Pit	茶灰色粘質土			V16
104	5SX104	たまり状	橙灰色粘質土		18ｃ後半～	V13
105	5SD105	溝	茶灰色シルト　　108と同じ		近現代	P～BE12・13
106	5SX106	Pit	茶灰色粘質土			V16
107	5SK107	土坑	茶灰色粘質土			V13
108	5SD108	溝	茶灰色土		近現代	
109	5SK109	土坑	灰色粘質土		中世～	BA14
110	5SK110	埋甕	橙色土		近代	S12
111	5SX111	Pit	青灰色粘質土			BB13
112	5SX112	Pit	灰色土			BD14
113	5SK133	土坑	灰色土		18ｃ後半～	BD14
114	5SX114	Pit	茶色土			Y14
115	5SX115	たまり状	灰色砂			BA・BB14
116	5SK116	土坑	白灰色土			Y14
117	5SX117	たまり状	灰色土		近現代	Y13
118	5SD118	溝	茶色土			X13
119	5SX119	Pit群	灰色砂			BC13
120	欠番					
121	5SX121	Pit	茶色粘質土			X13
122	5SX122	Pit	茶色粘質土			X13
123	5SK123	土坑	茶色粘質土			X12
124	欠番					
125	欠番					
126	5SK126	土坑	黄褐色ブロック入り白灰色粘質土		近世～	S10
127	5SX127	Pit	灰色粘質土		近世～	T10
128	5SX128	Pit	灰色粘質土			T10
129	5SX129	Pit	灰色粘質土			T10
130	欠番					
131	5SX131	Pit	淡灰色土			T10
132	5SD132	溝	暗茶褐色土		8ｃ中頃～	T.U10
133	5SD133	溝	橙色土			O・Q8

日5ST317出土鏡

日5ST330出土土器

日5ST333出土土器

図182.日焼遺跡　第5次調査(2区)　遺構略測図(S=1/200)

表23.日焼遺跡　第5次調査(3区)　遺構一覧

S番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	時期	地区番号
300	5SF300	南北道路			近世～	R17 ～ 22
301	5SK301	土坑	黒灰色土		Ⅷ期	N20
302	3SX302	たまり	黒灰色土		9ｃ後半～	J20
303	5ST303	木棺墓	黒灰色土		ⅥA期	L19
304	5SX304	Pit群	橙色土		9ｃ後半	P20
305	5SK305	土坑	黒灰色土		9ｃ～	P20
306	5SK306	土坑	茶灰色土			L16
307	5SF307	道路硬化面	灰色土			K23
308	5ST308	木棺墓	茶色土		ⅥB ～Ⅶ期	N20
309	5SK309	土坑	暗灰色土			T23
310	5SF310	東西道路			近世～	J ～ U24
311	5SX311	Pit群	茶灰色土			S23
312	5SX312	Pit	茶色粘質土			L19
313	5SK313	土坑	茶灰色土	313→303	Ⅸ期	N20
314	5SX314	土坑	茶色土	308→314		O19
315	5SK315	土坑	茶灰色土			O20
316	5ST316	木棺墓	茶灰色土			M21
317	5ST317	木棺墓	灰茶色土		Ⅷ期	N22
318	5SK318	土坑	灰茶色土			L ～ P17
319	5SX319	包含層	茶灰色土		近世～	F15
320	5ST320	土坑	茶灰色土		Ⅶ期	D13
321	5SK321	土坑	黒茶色土			C13
322	5SK322	土坑	黒茶色土			D13
323	5SX323	Pit	灰色土			E14
324	5SX324	Pit	灰色土		弥生中期後半	L21
325	5SK325	土坑	黒茶色土		弥生中期～	K21
326	5SX326	Pit	灰色土		弥生中期～	L27
327	5SX327	Pit	灰色土		弥生中期～	L30
328	5SX328	たまり	茶色土		奈良	T18
329	5SX329	たまり	黄茶色土			O17
330	5ST330	木棺墓	茶色土		Ⅶ期	M20
331	5ST331	土坑墓	黄茶色土	331→302	Ⅷ期	O17
332	5SX332	たまり状	明茶色土(黒灰土ブロック含む)	335→332→333		O17
333	5ST333	土坑	暗茶灰色土		Ⅷ期	O17
334	5SK334	土坑	茶灰色土			F18
335	5ST335	木棺墓	黒茶色土		Ⅸ期	O17
336	5SK336	土坑	黄茶色土			K16
337	5SX337	たまり状	黄茶色土			K16
338	5SX338	Pit	茶色土		奈良	N16
339	5SK339	土坑	茶色土		奈良	N15
340	5ST340	木棺墓	黒茶色土		平安～	N16
341	5SX341	Pit状	黄白色土			M16
342	5SX342	Pit	灰色土			I14
343	5SK343	土坑	茶灰色土			J18
344	5SK344	土坑	茶灰色土			K18
345	5ST345	土坑墓	黒色土		平安～	N15
346	5SX346	たまり状	茶灰色土			S21
347	5ST347	近世墓	茶色土		近世	M17
348	欠番					
349	欠番					
350	5ST350	近世墓	黄茶色土		近世	N16
351	5ST351	近世墓	黄茶色土		近世	M17
352	5SX352	包含層	茶色粘質土			O13
353	5SX354	Pit	黒灰色土			O13
354	5SX354	たまり	茶灰色土			O13
355	5ST355	近世墓	黄茶色土	360→355	近世	M16
356	5SX356	たまり	茶灰色土			G17
357 ～ 359		欠番				
360	5ST360	木棺墓	黒茶色土	360→355	平安～	M16

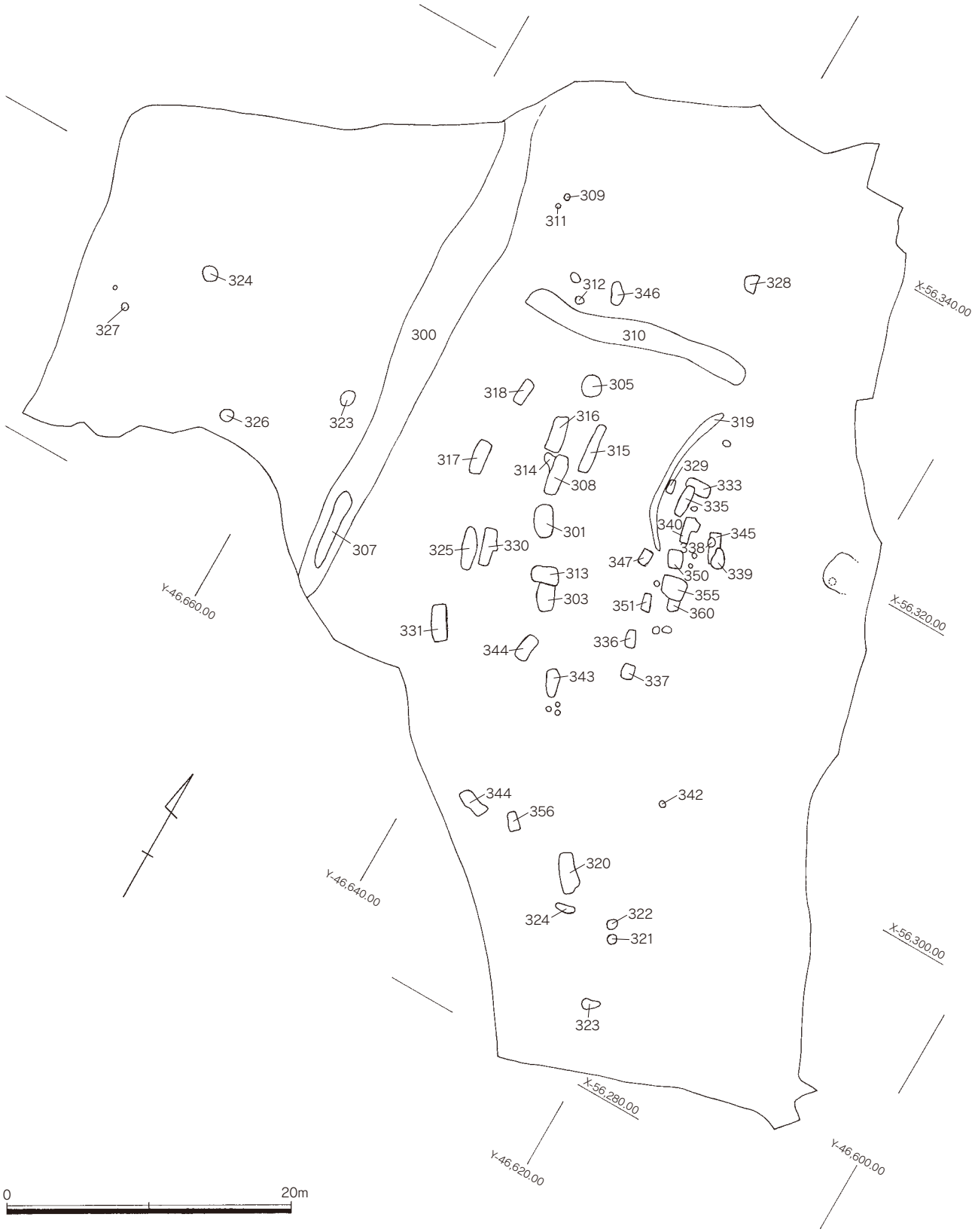


図183.日焼遺跡　第5次調査(3区)　遺構略測図(S=1/400)

表24.日焼遺跡　第5次調査（4区）　遺構一覧

S番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	時期	地区番号
201	5SD201	溝	暗灰色粘質土		近現代	N7 ～ 9
202	5SD202	溝	暗黒色土			M7 ～ 9
203	5SX203	Pit	暗灰色粘質土			N8
204	5SK204	埋甕	黒色土		近現代	N8
205	5SD205	南北溝（官道東側溝）	茶褐色粘質土（マンガン含む）		奈良中～	K ～ O4.5
206	5SX206	Pit	暗灰色土		近世	N8
207	5SD207	溝	茶灰色土			N9
208	5SX208	Pit	灰色粘質土		近世	N9
209	5SD209	溝	暗灰色土		近世	Q12.13
210	5SF210	帯状硬化面（官道西側溝）	灰褐色粗砂→黄白色砂		奈良～	N ～ Q9
211	5SX211	たまり状	茶灰色粘質土			Q12
212	5SX212	Pit	茶灰色土			O9
213	5SX213	たまり状	黒色土			O8
215	5SD215	南北溝	茶色粘質土→暗茶色粘質土	205→215	奈良中～	K ～ O4.5
214	5SX214	たまり状	茶灰色粘質土			O8
216	5SX216	Pit群	茶灰色土			O9
217	5SD217	溝	茶灰色土		近現代	O9
218	5SX218	Pit群	灰色粘質土			O8
219	5SX219	溝	灰色砂			Q11
220	5SD220	南北溝（官道西側溝）	茶灰色粘質土・砂		奈良中～	N ～ Q9
221	5SX221	Pit	茶灰色土			O7
222	5SX222	Pit群	茶灰色土			O7
223	5SX223	井戸	茶灰色土		近世	P12
224	5SX224	逆さ埋甕	茶灰色土		近世	S7
225	5SD225	南北溝（官道東側溝）	茶灰色土	225→235・230	奈良中～	R5
226	5SK226	埋甕	黄色粘質土		近世	Q6
227	5SK227	土坑	バラス入り黄褐色土		近現代	Q6
228	5SX228	Pit	灰色粘質土			Q6
229	5SK229	土坑	バラス入り黄茶色土		近世～	P9
230	5SF230	帯状硬化面（官道東側溝内）	茶褐色粘質土（マンガン含む）		奈良中～	K ～ O4.5
231	5SX231	Pit	暗灰色土			P9
232	5SX232	Pi t	暗灰色土			P9
233	5SX233	Pit群	茶灰色土			P9
234	5SX234	Pit	バラス入り黄灰色土			P9
235	5SD235	南北溝（官道東側溝）	茶灰色土		奈良中～	R6
236	5SX236	カクラン	茶褐色粘質土			Q8
237	5SX237	たまり状	茶灰色土			R6
238	5SX238	カクラン	茶褐色粘質土			K4
239	5SX239	カクラン	灰色粘質土			K4
240	5SF240	帯状硬化面	淡茶灰色砂	205→240		N5
241	5SX241	Pit	茶黄色土			Q9
242	5SD242	南北溝（官道東側溝）	淡灰色粘質土	235→242→226		Q6
243	5SD243	南北溝（官道東側溝）	茶褐色土			L..M5
244	5SD244	南北溝（官道東側溝）	灰色粘質土	244→243		J ～ M4
246	5SX246	Pit	暗灰色土			P10
247	5SX247	Pit	茶灰色土		近現代	P10
248	5SX248	カクラン	茶灰色土			P11
249	5SD249	溝	灰色土			P11
250	5SF250	帯状硬化面	褐灰色砂	215→250	奈良中～	K ～ O4.5
251	5SX251	Pit	茶灰色土			Q10
252	5SX252	たまり状	淡茶灰色土			Q10
253	5SX253	Pit	茶灰色土			Q10
254	5SX254	Pit	黒灰色土			Q10
256	5SF256	里道	灰色土		近現代	R9
257	5SD257	溝	茶褐色粘質土			K4
258	5SX258	たまり状	黄茶色土			N4
259	5SX259	Pit	暗灰色土			R5
261	5SD261	溝	茶灰色土（軟質）		近世～	J3
262	5SX262	たまり状	マンガン入り茶色土			N4
263	5SD263	溝状	暗赤色粘質土			F8
264	5SD264	溝状	暗赤色粘質土			F8
266	5SX266	たまり状	暗赤色粘質土			F7
270	5SF270	連続土坑状	灰褐色粗砂、黄白色砂	205→230→270	奈良～	K ～ O4.5

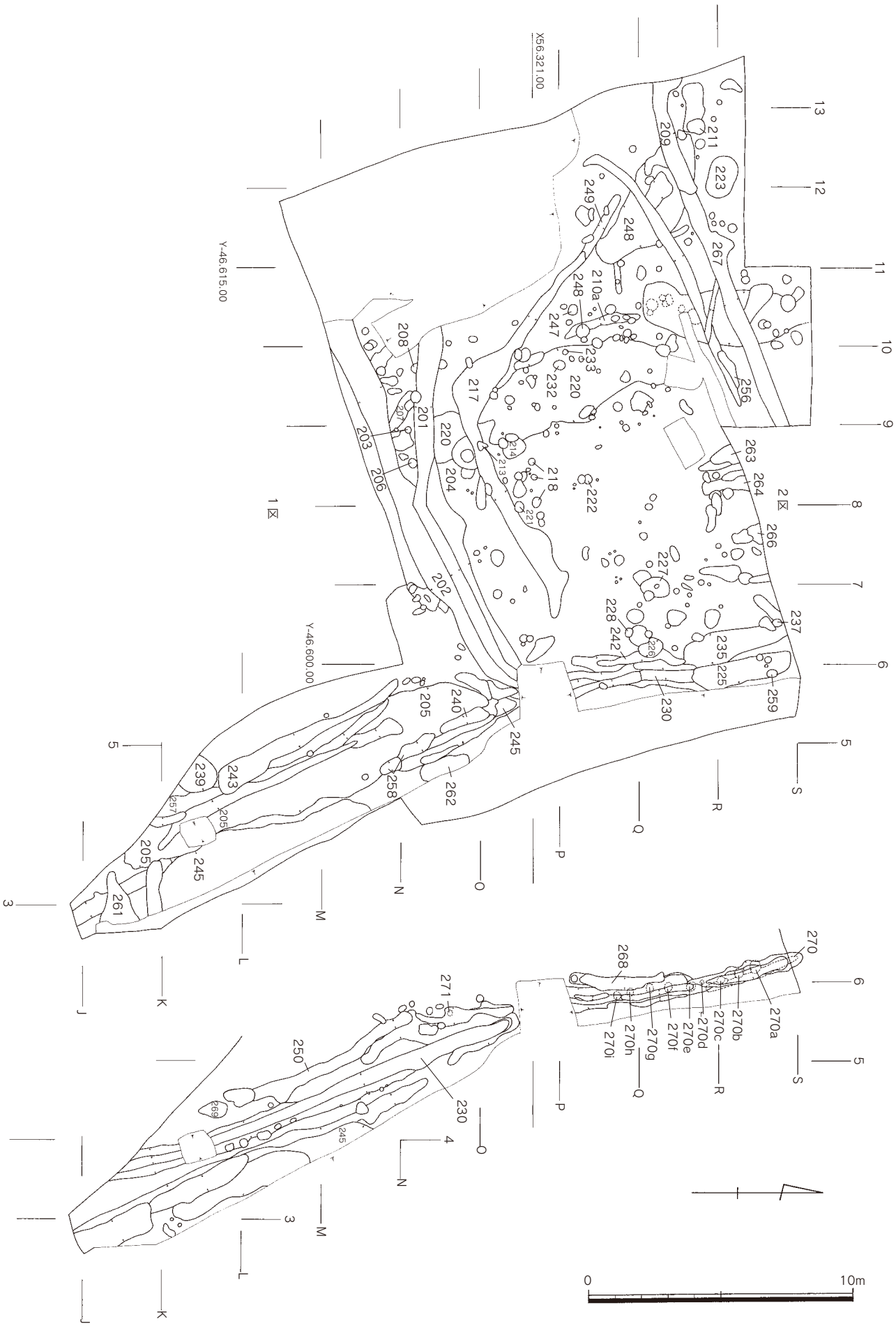


図184.日焼遺跡　第5次調査(4区)　遺構略測図(S=1/200)

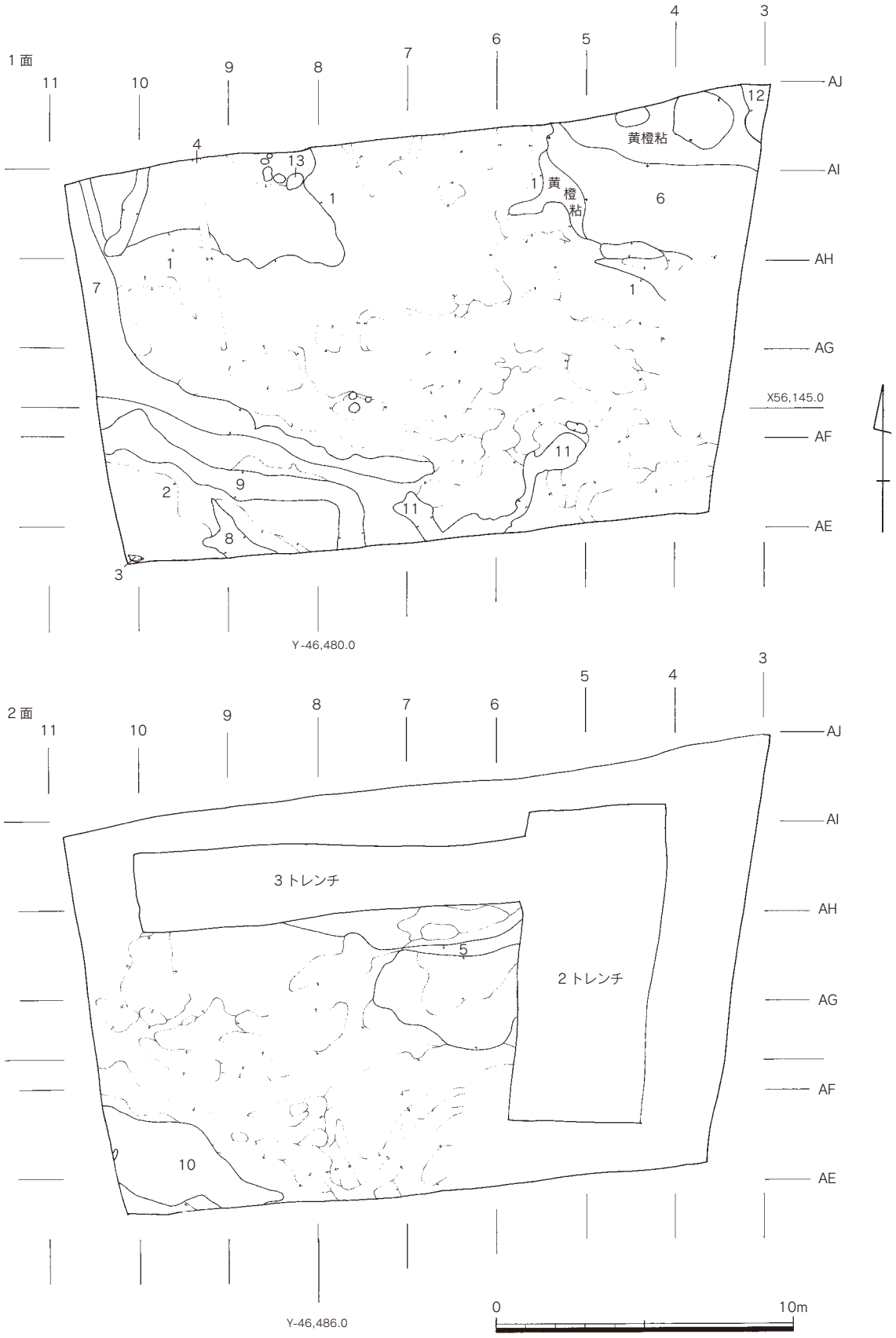


図185.日焼遺跡　第6次調査　遺構略測図(S=1/200)

表25.日焼遺跡　第8次調査　遺構一覧

S番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	時期	地区番号
1	8SD001	溝　（官道西側溝）	茶色粘土		8世紀前半～中頃	UV11
2	8SX002	ピット群	茶色粘土		古代	V11
3	8SX003	ピット群	茶色粘土			V11
4	8SX004	ピット群			平安時代後期～	V11
5	8SD005	溝		S-1→5	中世～	V8 ～ 11
6	8SD006	溝			古代	XY6
7	8SX007	ピット群		S-1→7	中世～？	X5・6
8	8SD008	溝？	黒茶色土		中世	W8
9	8SX009	ピット群			近世～	WX2・3
10	8SX010	谷地形			中世～	W ～ AB3 ～ 6
11	8SX011	ピット群			中世～	V9
12	8SX012	ピット群			中世～	V9
13	8SX013	ピット			中世～	V10
14	8SX014	ピット群			中世～	V10
15	8SD015	溝	明茶色砂質土	S-65の底面	7世紀代？	T ～ V6・7
16	8SX016	ピット				V11
17	8SX017	ピット		S-17→5	中世～	V11
18	8SX018	ピット				V10
19	8SX019	ピット			奈良時代	V10
20	8SX020	甕			江戸時代～	V8
21	8SX021	ピット			近世～	W10
22	8SX022	ピット			中世～	W10
23	8SD023	溝			中世～	VW3 ～ 6
24	8SD024	溝	灰色土と黄灰色土の混合層	S-24→23・26	中世～	WX2・3
25	8SX025	埋甕			中世～	U9
26	8SX026	溝		S-24と同一遺構		W3
27	8SX027	土坑　（堆積層）	黄色い青灰色粘土		近世～	Y3・4
28	8SX028	ピット群			中世後期	UV4
29	8SX029	ピット群			中世～	X5、W6
30	8SX030	集石		S-10の埋土中　S-35との切合い不明瞭	近世～ (17世紀前半?)	Y4
31	8SD031	溝	黒灰色土	S-23との切り合い不明瞭	中世～	W4 ～ 6
32	8SD032	溝	淡灰色砂質土←淡灰色土			W6
33	8SD033	溝	淡灰色砂質土			W7
34	8SX034	ピット群			中世～	WX6
35	8SE035	井戸			江戸時代前期～	X3
36	8SX036	ピット群		S-1下から検出、上面での確認ミスか	中世～	V11
37	8SK037	土坑	暗茶色土←灰色粘土		近現代	T7
38	8SK038	土坑			近現代	T8
39	8SX039	ピット群		S-10茶褐色土←S-39	中世～	X6
40	8SK040	土坑	炭混じり			TU7・8
41	8SK041	土坑	黒灰色土と灰白色土			V5
42	8SX042	窪み				V8
43	8SK043	土坑		大木3本(電柱？)	近現代	X7
44	8SX044	ピット群			中世～	V9
45	8SX045	土坑			中世末～近世初頭	Y3・4
46	8SK046	土坑	暗灰色土			W8
47	8SK047	土坑			近世～	V8
48	8SX048	ピット				T8
49	8SX049	ピット				V7
50	8SD050	溝			古代	UV4・5
51	8SX051	ピット			中世～	W8
52	8SX052	ピット				T6
53	8SX053	ピット				W9
55	8SE055	石組み井戸	暗灰色粘土	S-55→35	江戸時代前期	X4
60	8SF060	官道		S-1と15の間		
65	8SX065	段落ち　官道東側溝？			8世紀代	T ～ V6・7

図186.日焼遺跡　第8次調査　遺構略測図(S=1/200)

日8SX010出土陶器

日8SE055出土磁器

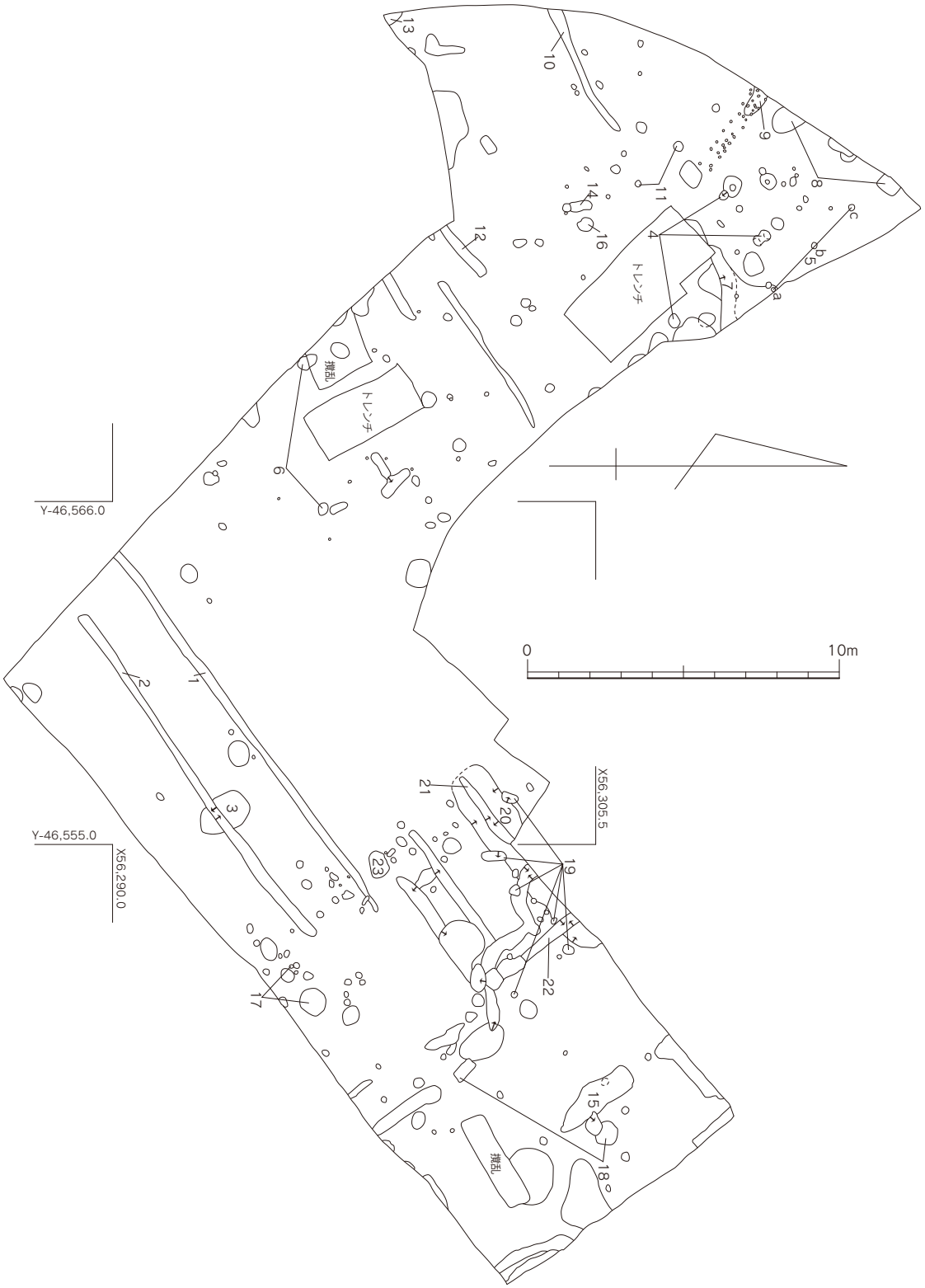


図187.日焼遺跡　第9次調査　遺構略測図(S=1/200)

表26.日焼遺跡　第10次調査　遺構一覧

S番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	埋没時期	地区番号
1	10SD001	溝		S-20・35→1	8世紀第2四半期頃	E～P・4～11
2	10SD002	溝	暗灰色土	隣地との境界溝？	現代	E・F7
3	10SX003	ピット群	砂質土	S-1に切り込む		H8
4	10SK004	土坑　防空壕？	暗灰色土		近現代	KL7
5	10SD005	溝		S-1→5	近世	IJ～6～9
6	10SX006	ピット				K7
7	10SD007	溝	茶褐色砂(深さ約3cm)	S-1→7		H6・7
8	10SX008	撹乱			近現代	I5
9	10SK009	土坑	淡灰色砂と黄灰色土		近現代	EF・5～7
10	10SD010	溝	黄灰色土と灰色土の混合層			HI5・6
11	10SX011	ピット群				E5
12	10SX012	凹み				GH6
13	10SX013	ピット群	暗灰色土	S-9の底面		EF6・7
14	10SX014	ピット群				F5
15	10SK015	土坑	暗灰色砂質土(一部炭混じり)		江戸時代前期	BC1・2
16	10SK016	土坑群				D4
17	10SX017	ピット群	灰色土		現代	E4
18	10SX018	ピット群	灰茶色土			E4
19	10SD019	溝				H4・5
20	10SD020	溝		S-20→35	6世紀末～7世紀初	B～K・2～9
21	10SX021	ピット群	黒灰色土			F5
22	10SK022	土坑	暗灰色土		近現代？	C3
23	10SD023	溝	灰褐色土		中世～	D～I・2～4
24	10SK024	土坑群(凹み)	灰色土		近現代	G5
25	10SD025	溝			近世	KL～8・9
26	10SX026	ピット群				F3
27	10SK027	土坑	暗灰色土		中世～	D2
28	10SX028	ピット				D3
29	10SX029	ピット群			中世～	B2
30	10SK030	土坑				GH4
31	10SK031	土坑	黄色土(黄色土ブロック混じり)			C2
32	10SK032	土坑	灰色土		近現代	B2
33	10SK033	土坑				M8
34	10SK034	土坑				N9
35	10SD035	溝		S-20→35	6世紀末～7世紀初	I～O・7～12
36	10SK036	土坑		S-35→36→1	7世紀～8世紀前半	L8
37	10SX037	ピット			近世	J5
38	10SX038	撹乱			現代	J5
39	10SX050	たまり		灰白色粘質土上層の下層遺構	7世紀～8世紀前半	L7
40	10SF040	官道積み土	暗茶色土	S-45と同一遺構	8世紀前半	L7～P10
41	10SX050	土坑		灰白色粘質土上層の下層遺構	7世紀～8世紀前半	N8
42	10SX050	波板状痕跡			7世紀～8世紀前半	L7
43	10SX050	波板状痕跡			7世紀～8世紀前半	M7
44	10SX050	波板状痕跡			7世紀～8世紀前半	K6
45	10SF040	官道積み土			7世紀～8世紀前半	I5～K7
46	10SX050	波板状圧痕か？			7世紀～8世紀前半	P9
50	10SX050	波板状痕跡		S-39・41・42・43・44・46の統一番号	7世紀～8世紀前半	K6～P10

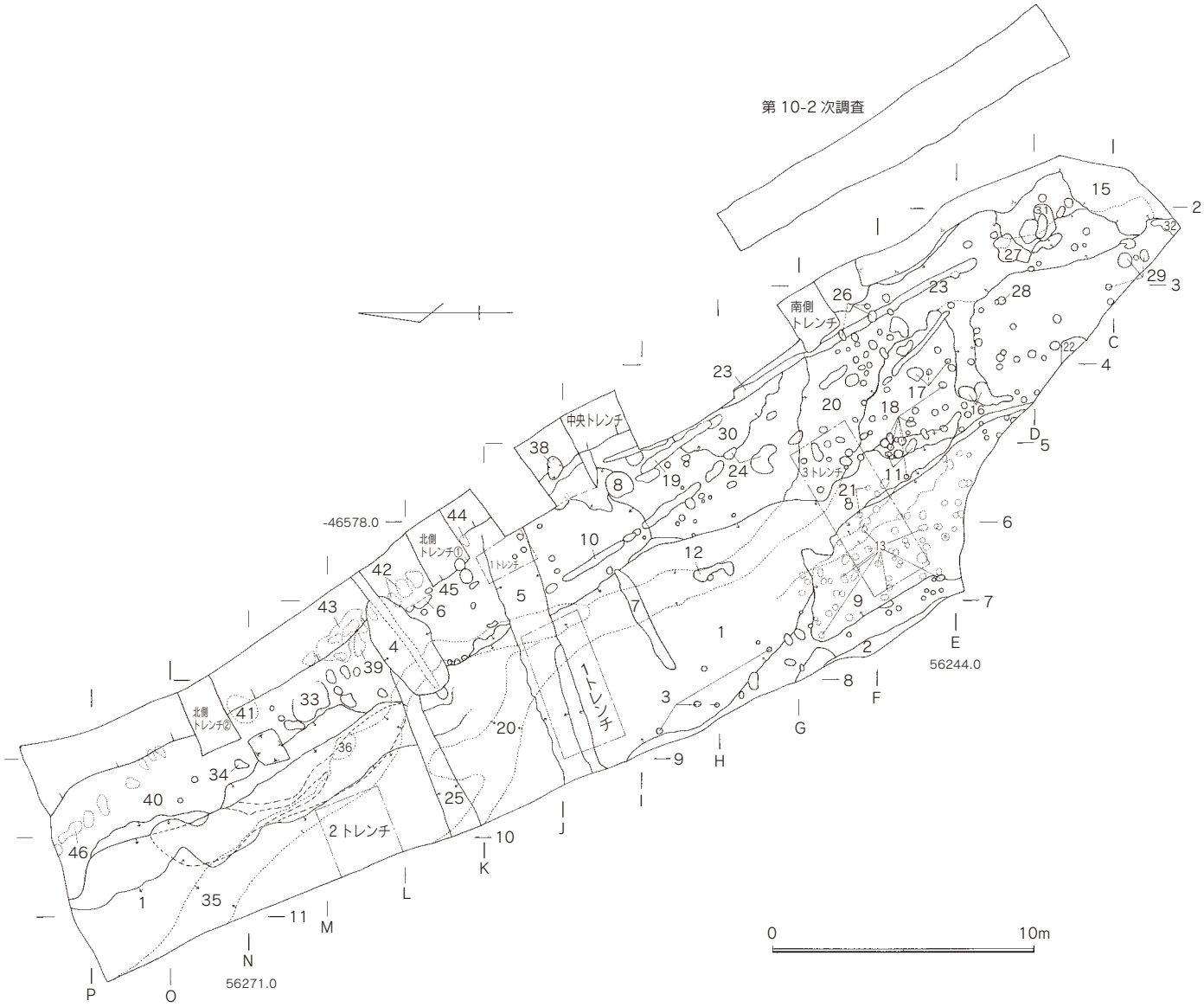
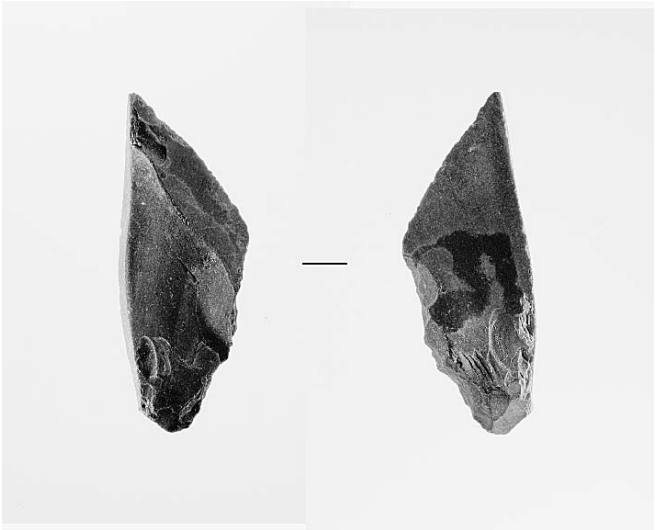


図188.日焼遺跡　第10次調査　遺構略測図(S=1/250)



日10SD035出土石器

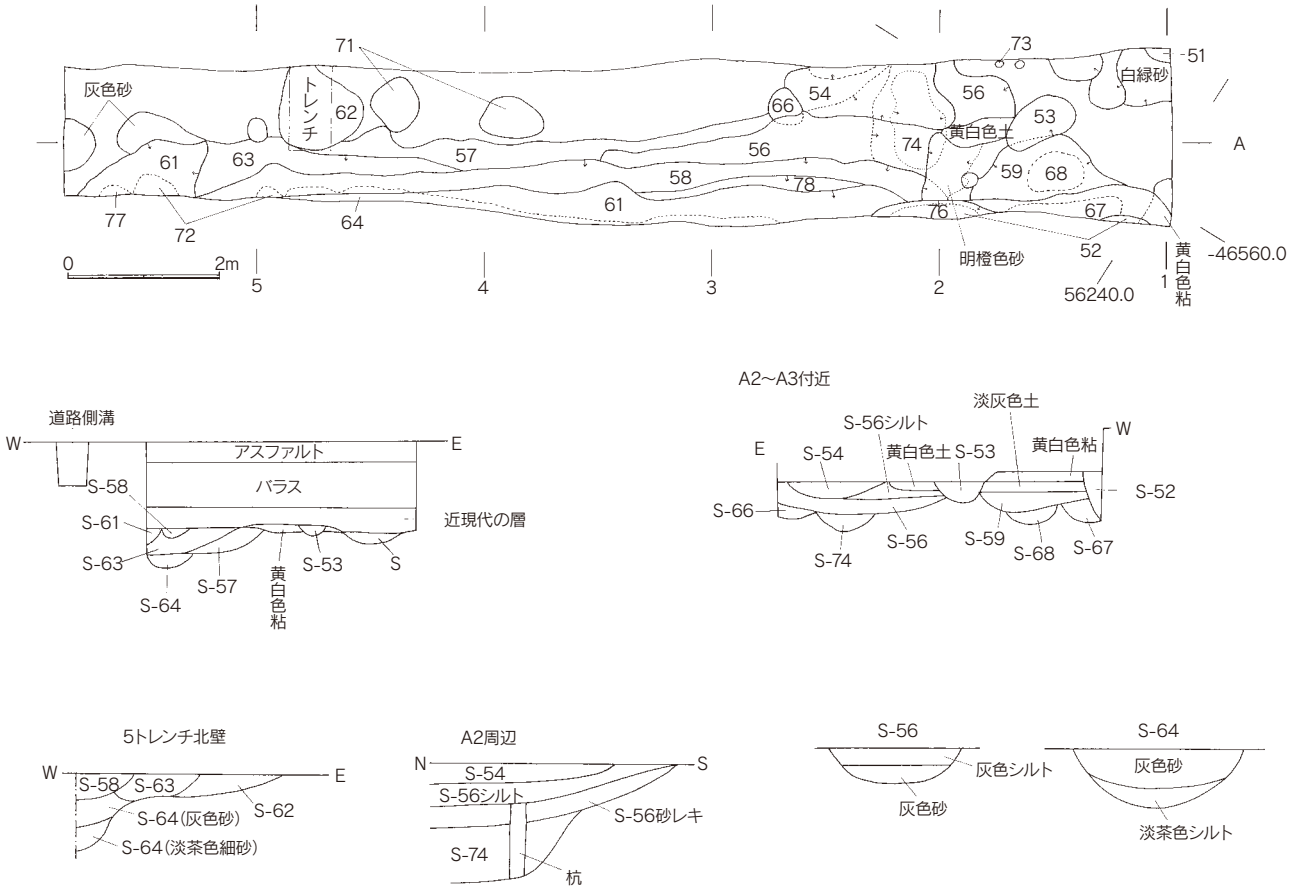
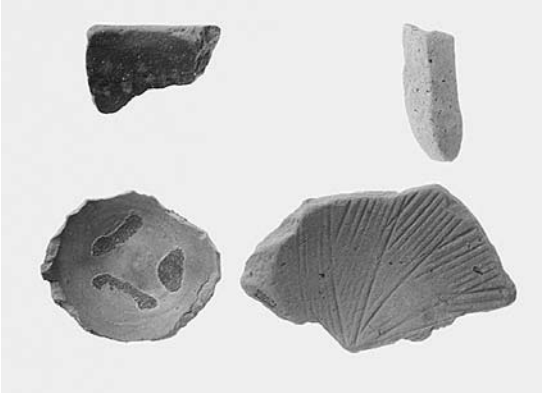


図189.日焼遺跡　第10-2次調査　遺構略測図および土層模式図(S=1/100)



日10-2SK074出土遺物(内面)

日10-2SK074出土遺物(外面)

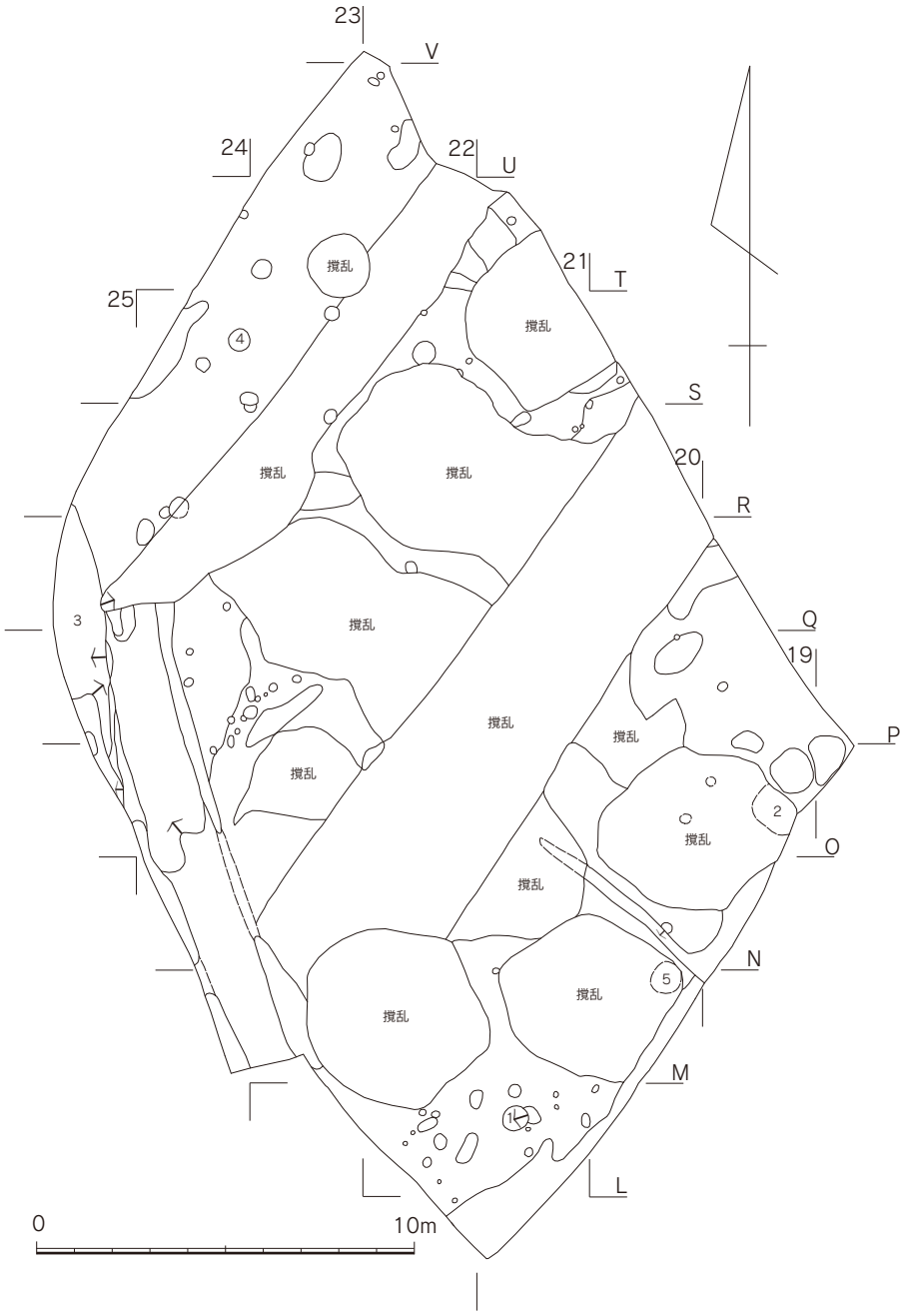


図190.日焼遺跡　第11次調査　遺構略測図(S=1/200)

日11SE005出土窯道具

表27-1.日焼遺跡　第12次調査　遺構一覧(1)

S番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	時期	地区番号
1	12SD001	溝			近世～現代	I 5.6
2	12SX002	Pit			8ｃ中頃～	I 7
3	12SX003	Pit群			奈良	F 7
4	12SX004	Pit			13ｃ～	F 7
5	12SX005	たまり状			9ｃ～	J 5.6
6	12SX006	Pit			12ｃ前半～	F 7
7	12SK007	土坑			近現代	C 7
8	12SX008	たまり状			近世	D 8
9	12SD009	溝			18ｃ中頃～	D 8
10	12SX010	たまり状	黄白土→灰黒土→黄色砂		近世以降	J 5
11	12SX011	Pit			近世	C 6
12	12SX012	Pit群			16ｃ～	C 6
13	12SX013	Pit群			奈良	E 7
14	12SX014	Pit			12ｃ前半～	F 5
15	12SD015	溝	茶色土→灰色土		13ｃ後半～	H 6
16	12SX016	Pit			奈良	F 5
17	12SX017	Pit			奈良	F 5
18	12SX018	Pit			奈良	F 4
19	12SX019	Pit			8ｃ中頃～	F 4
20	12SX020	たまり状	灰茶色土→淡灰茶色土		18ｃ～	G 5
21	12SX021	Pit			13ｃ後半～	F 4
22	12SX022	Pit			奈良	F 5
23	12SX023	Pit				G 5
24	12SX024	Pit			8ｃ～	G 5
25	12SK025	土坑	茶色土		12ｃ前半～	G 7
26	12SX026	Pit			奈良	G 5
27	12SX027	Pit			奈良	G 5
28	12SX028	Pit			奈良	G 5
29	12SX029	Pit			奈良	G 6
30	12SK030	土坑	灰色土	58→30	16ｃ～	H 4
31	12SX031	Pit			7ｃ後半～	G 6
32	12SX032	Pit			8ｃ～	G 6
33	12SX033	Pit			奈良	F 5
34	12SX034	Pit				C 5
35	12SK035	土坑状	灰色土	9→35→65		C 6
36	12SX036	Pit			奈良	F 5
37	12SX037	Pit			奈良	E 5
38	12SX038	土坑	黄色砂→黄茶色土→灰色土		奈良	F 5
39	12SX039	Pit群			8ｃ～	G 4.5
40	12SK040	円形土坑	橙白色粘質土→淡茶色砂			C 4
41	12SX041	Pit			奈良	G 5
42	12SX042	Pit群			奈良	G 6
43	12SX043	Pit			奈良	G 6
44	12SX044	Pit			奈良	I 8
45	12SK045	埋甕遺構	暗灰砂　茶灰土		近世	G 4
46	12SX046	Pit			8ｃ～	I 8
47	12SX047	Pit			8ｃ～	I 8
48	12SX048	Pit				H 7
49	12SX049	Pit			8ｃ～	H 7
50	12SK050	円形土坑	橙白色粘質土→黄色ブロック土　淡茶砂		14ｃ～	C 4
51	12SX051	溝			14ｃ～	G 4
52	12SX052	土坑				H 8
53	12SX053	土坑			奈良	F 7
54	12SX054	Pit			奈良	G 5
55	12SK055	埋甕遺構			近世	G 3
56	12SX056	Pit群			奈良	G 6
57	12SX057	Pit			8ｃ～	G 6
58	12SD058	溝			現代	H 4
59	12SX059	Pit群			8ｃ～	G 6
60	12SX060	鍛冶炉？			中世末～	E 3
61	12SX061	Pit群			8ｃ～	G 7
62	12SX062	Pit			8ｃ	G 7
63	12SX063	Pit群			8ｃ～	H.G 7
64	12SD064	溝			奈良	F 6
65	12SD065	溝	灰青色土→暗灰砂		近世	D 4
66	12SX066	たまり状			8ｃ～	F 6
67	12SX067	Pit群			奈良	G 7
68	12SX068	Pit群			奈良	G 7
69	12SX069	Pit			8ｃ	F 4
70	12SK070	円形土坑	茶色土→灰色土			F 3
71	12SX071	たまり状			8ｃ～	F 4
72	12SX072	Pit	灰色砂		7ｃ後半～	D 8
73	12SX073	Pit群			13ｃ後半～	D 6.5
74	12SX074	Pit			近世	D 4
75	12SX075	土坑？				E 4
76	12SD076	溝			8ｃ～	H 4
77	12SX077	Pit			8ｃ～	H 5

表27-2.日焼遺跡　第12次調査　遺構一覧(2)

S番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	時期	地区番号
78	12SX078	Pit			奈良	H4
79	12SX079	Pit			12ｃ	H4
80	12SK080	土坑	黒褐色土　灰茶土		8ｃ～	E3.4
81	12SX081	Pit			奈良	H4
82	12SX082	Pit				C6
83	12SX083	Pit			13ｃ後半～	E5
84	12SX084	Pit			13ｃ後半～	E6
85	12SB085	掘立柱建物(S-73、118、157)		35→85		E.D5
86	12SX086	Pit			14ｃ～	E6
87	12SX087	Pit			奈良	E6
88	12SX088	Pit			8ｃ～	D6
89	12SX089	Pit			奈良	D6
90	12SB090	掘立柱建物(S-126、152、162)		50→90		D3.4
91	12SX091	Pit			8ｃ～	E6
92	12SX092	Pit			13ｃ後半～	E6
93	12SX093	Pit			8ｃ～	E6
94	12SX094	Pit				E5
95	12SB095	掘立柱建物(S-39、54、69)		95→38、59、100		F5.6
96	12SX096	Pit群			13ｃ後半～	E5
97	12SX097	Pit				E6
98	12SX098	Pit				D5
99	12SX099	Pit				E6
100	12SB100	掘立柱建物(S-26、39)				F4
101	12SX101	Pit			14ｃ後半～	E4
102	12SX102	Pit			13ｃ後半～	E4
103	12SX103	Pit				E4
104	12SX104	Pit			奈良	E4
105	欠番					
106	12SX106	Pit			13ｃ後半～	E5
107	12SX107	Pit			8ｃ～	E5
108	12SX108	Pit			～16ｃ後半	E5
109	12SX109	Pit群			奈良	E5
110	欠番					
111	12SX111	土坑	灰色土		近世	E5
112	12SX112	Pit			8ｃ～	E5
113	12SX113	Pit			12ｃ前半～	E5
114	12SX114	Pit			奈良	E5
115	12SB115	掘立柱建物(S-87、91)				E6
116	12SK116	土坑？			8ｃ～	E3
117	12SK117	土坑？			8ｃ～	F5
118	12SX118	Pit			8ｃ～	F5
119	12SX119	たまり状			近世	E3
120	欠番					
121	12SX121	Pit			14ｃ～	E3
122	12SX122	Pit			13ｃ～	D5
123	12SX123	Pit			奈良	E6
124	12SX124	Pit			近世	D5
125	12SB125	掘立柱建物(S-139、144、147、148)				D3
126	12SX126	Pit				D5
127	12SX127	Pit		50→127	13ｃ後半～	C4
128	12SX128	Pit			奈良	C4
129	12SX129	Pit			奈良	D4
130	12SB130	掘立柱建物(S-68、133、159)				E3
131	12SX131	Pit			奈良	D4
132	12SX132	Pit			奈良	D3
133	12SX133	Pit群			奈良	F4
134	12SX134	Pit			奈良	F3
135	12SB135	掘立柱建物(S-42、56、61)				G6
136	12SX136	Pit			奈良	E3
137	12SX137	Pit				F3
138	12SX138	Pit			8ｃ～	F4
139	12SX139	Pit群			奈良	D3
140	12SB140	掘立柱建物(S-42、56、61)				G7
141	12SK141	土坑			奈良	D4
142	12SX142	Pit				D3
143	12SX143	Pit群			奈良	D4
144	12SX144	Pit			奈良	D3

表27-3.日焼遺跡　第12次調査　遺構一覧(3)

S番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	時期	地区番号
145	12SB145	掘立柱建物(S-42、56、61)				F5
146	12SX146	Pit			12c後半～	F4
147	12SX147	Pit			奈良	D3
148	12SX148	Pit				D3
149	12SX149	Pit			8c～	D5
150	12SB150	掘立柱建物			近世	E5
151	12SX151	Pit			近世	D4
152	12SX152	Pit			8c～	D4
153	12SX153	Pit			8c～	I8
154	12SX154	土坑			8c～	F4
155	欠番					
156	12SX156	Pit			13c後半～	E4
157	12SX157	Pit			13c後半～	E5
158	12SX158	Pit				E4
159	欠番					
160	欠番					
161	12SX161	Pit			8c～	E3
162	12SX162	Pit			奈良	E4
163	12SX163	Pit			奈良	E4
164	12SX164	Pit			8c～	E3
165	欠番					
166	12SX166	たまり状			8c～	G4
167	12SX167	たまり状	灰黒色土		13c後半～	E3
168	12SX168	Pit			8c～	G6
169	12SX169	Pit			8c～	E3
170	欠番					
171	12SK171	土坑？			8c～	G5
172	12SX172	Pit群			奈良	E3
173	12SX173	Pit				E3
174	12SX174	Pit				E5
175	欠番					
176	12SX176	Pit				G5
177	12SK177	土坑？	灰白色土		13c～	E3
178	12SX178	Pit		166→178	奈良	E3
179	12SX179	Pit			15c～	E5
180	欠番					
181	12SX181	Pit			奈良	E5
182	12SX182	Pit		182→104		E4
183	12SX183	Pit			奈良	D3
184	12SX184	Pit				D2
185	欠番					
186	12SD186	溝	茶色土		奈良～	B10
187	12SD187	溝	茶灰土		近世～	B9
188	12SD188	溝	暗茶土		近世～	B9

日12次出土遺物

図191.日焼遺跡　第12次調査　遺構略測図(S=1/200)

表44.日焼遺跡　第13次調査　遺構一覧

S番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	前後関係	時期	地区番号
1	13SX001	たまり	灰色砂		中世後期	HI11・12
2	13SX002	ピット群	灰色土	S-45 d を含む	近世	KL6・7
3	13SX003	ピット群	灰色土		古代	KL8
4	13SX004	たまり	暗灰色砂土		不明	JK11
5	13SX005	たまり	黒茶土		平安後期	J7・8
6	13SX006	ピット群	灰色土		中世後期	J 7・8
7	13SX007	ピット群	灰色土		現代	J 5・6
8	13SX008	たまり	灰色砂土		中世後期	HI12
9	13SX009	たまり	茶灰色土		不明	I10
10	13SD010	溝	黄灰色土		不明	A ～ C6・7
11	13SD011	溝	暗灰色土		現代	J・K10
12	13SX012	たまり群	赤灰色土		不明	J・K9
13	13SX013	たまり			不明	I12
14	13SX014	ピット			不明	I10
15	13SD015	溝(官道東側溝)	黒色土		平安	調査区西辺
16	13SX016	たまり			近世	J 8
17	13SX017	ピット群			平安後期	I5・6
18	13SX018	ピット群			中世後期	L8・9
19	13SD019	溝	灰色砂		近世	F・G10・11
20	13SD020	溝	灰茶色土		奈良前期	調査区西側
21	13SK021	土坑？	茶灰色土		不明	K6
22	13SX022	ピット	灰色土	S-45 c を含む	不明	L7
23	13SX023	たまり	灰色砂土		近世	M7
24	13SX024	ピット	灰色土		近世	M7・8
25	13SK025	土坑	黒灰色土		不明	N9
26	13SX026	たまり	灰色砂土		奈良前期	D6・7
27	13SX027	たまり	暗灰色土		奈良	C5
28	13SX028	ピット群			奈良	D7
29	13SX029	たまり			平安後期	B・C7・8
30	13SD030	溝	黒灰色土		奈良前期	B・C8・9
31	13SD031	溝	灰色砂土		鎌倉末期	D ～ G4 ～ 9
32	13SX032	ピット群			中世後期	G・H6
33	13SX033	ピット			不明	H5
34	13SX034	たまり	黄灰色土		奈良	C・D8・9
35	13SD035	溝	明灰色土		奈良前期	D6 ～ 8
36	13SX036	たまり	暗灰色砂土		近世	J・K12
37	13SX037	ピット群	灰色土		不明	H7
38	13SX038	ピット群	灰色土		奈良前期	G7
39	13SX039	ピット群	灰色土		古代	G・H8
40	13SX040	ピット			近世	H5
41	13SX041	ピット群	灰色土	S-45 g を含む	不明	I8
42	13SX042	たまり	黄色土		不明	F8
43	13SX043	ピット	灰色砂		不明	I12
44	欠番					
45	13SB045	掘立柱建物			古代	調査区北側
50	13SX044	ピット		S-44→S-29	古代	C8
55	13SF055	道路		S -10とS -20に挟まれた遺構		
60	13SF056	道路		S -15の西側		

日13SX033出土陶器

図192.日焼遺跡　第13次調査　遺構略測図(S=1/200)

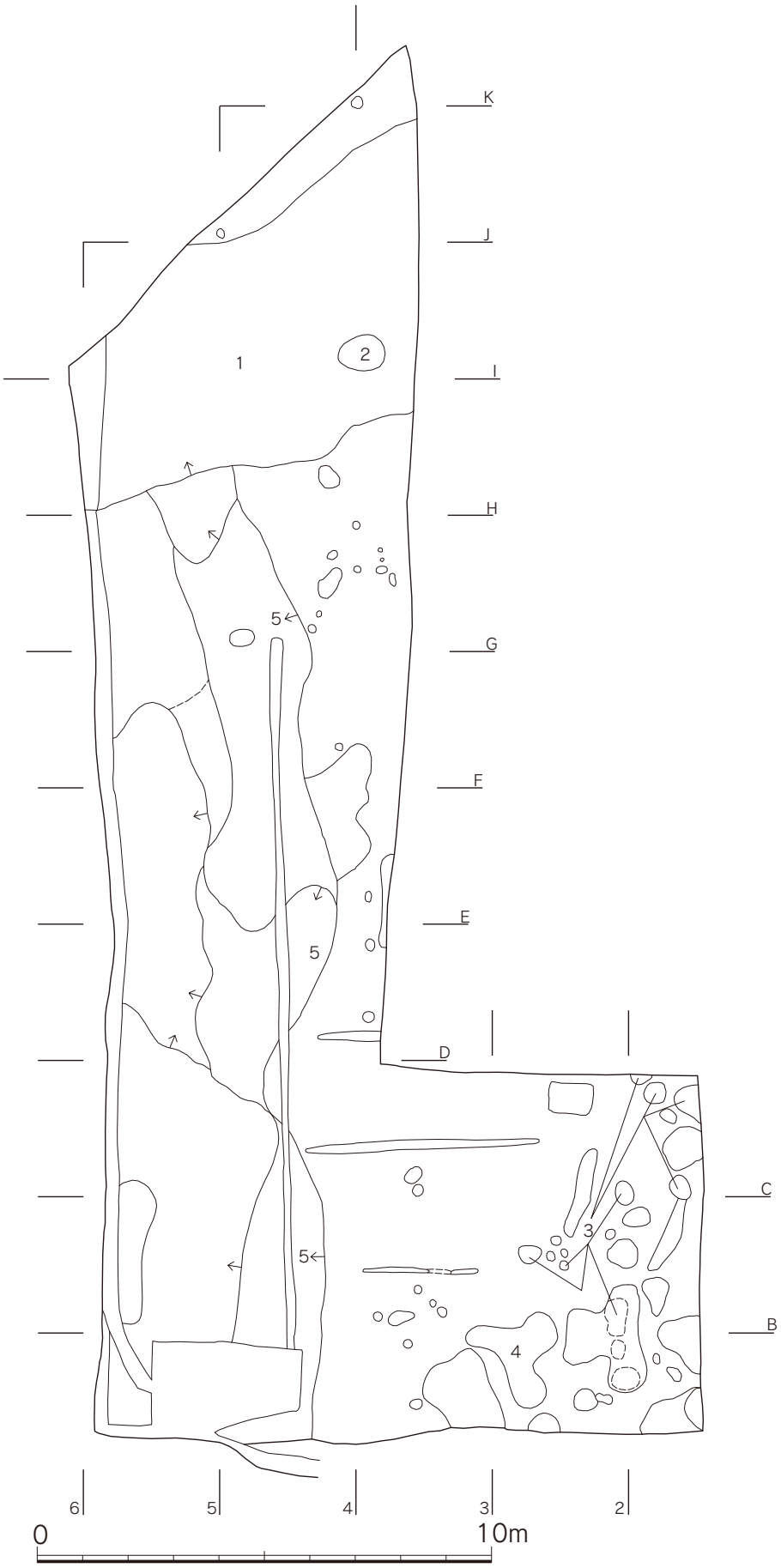


図193.日焼遺跡　第14次調査　遺構略測図(S=1/200)

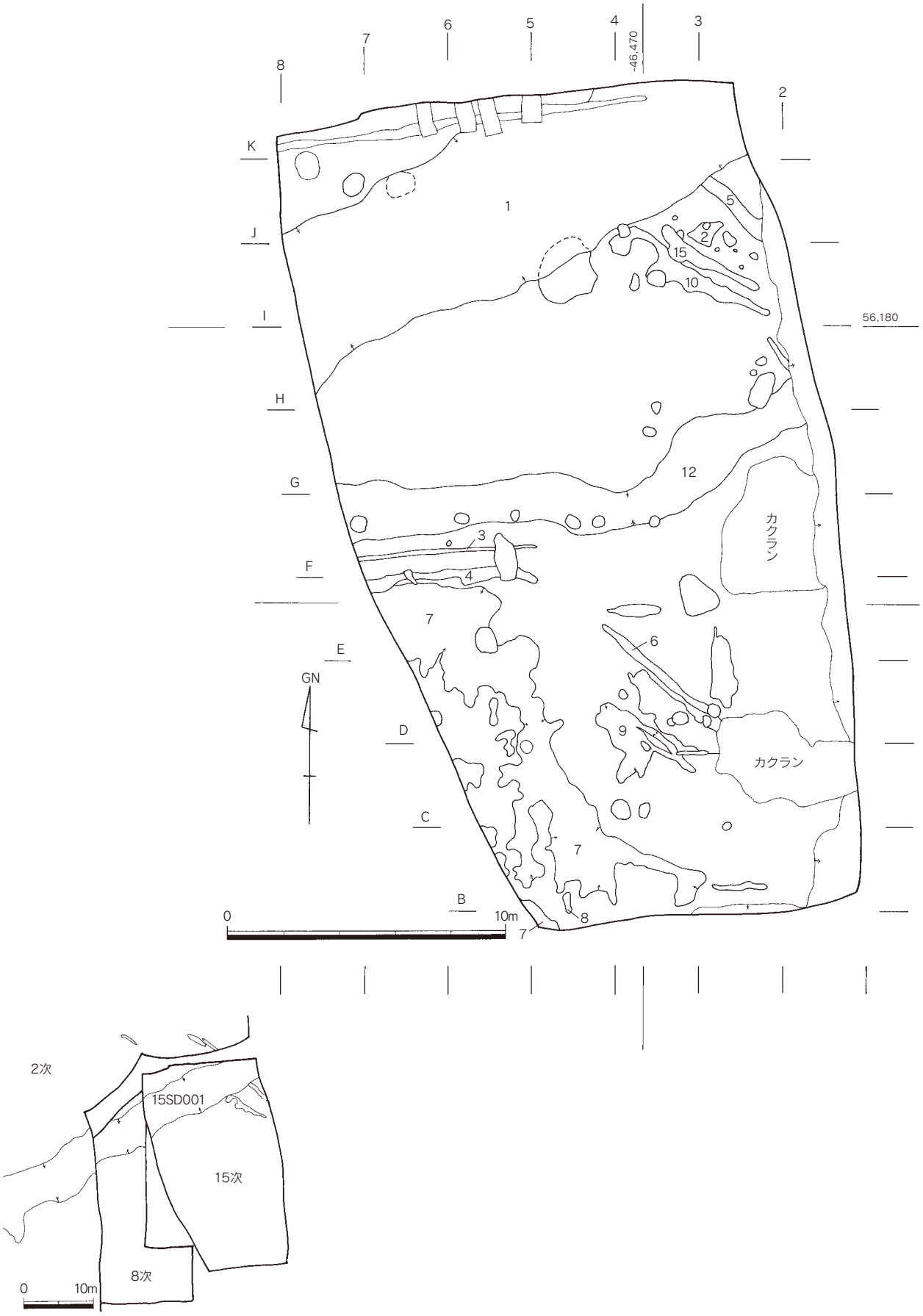


図194.日焼遺跡　第15次調査　遺構略測図(S=1/200)

表48.日焼遺跡　第16次調査　遺構一覧

S番号	遺構番号	遺構性格	時期	地区番号
1	16SD001	溝　　茶色粘土　官道西側溝	中世後半	B2
2	16SD002	溝　　茶色粘土　官道西側溝	近代	B1

表49.日焼遺跡　第16次調査　出土遺物一覧

S-1

須　恵　器	甕
瓦　質　土　器	すり鉢

表土

須　恵　器	供膳具、甕
肥前系染付	丸椀
国　産　陶　器	土瓶

S-2

肥前系染付	丸椀
国　産　陶　器	土瓶（鉄釉）、小壷（鉄釉）、瓶（鉄＋白釉掛け流し）
瓦	破片
銭　　貨	半銭（明治 10 年）

日15次出土遺物1

日15次出土遺物2

日16次出土遺物1

日16次出土遺物2

報告書抄録

ふりがな	だざいふ・さのちくいせきぐん　24
書名	太宰府・佐野地区遺跡群　24
副書名	佐野土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　日焼遺跡の調査
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ番号	第100集
編著者	中島恒次郎・山村信栄・高橋学・宮崎亮一・柳智子・久味木理恵・㈱パリノ・サーヴェイ
編集機関	太宰府市教育委員会
所在地	福岡県太宰府市観世音寺１丁目１番１号
発行年月日	平成20（2008）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード		座標（国土座標第Ⅱ系）		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
日焼遺跡（ひやけいせき） 第1次調査	条坊外	大字向佐野字日焼335-3外（おおあざむかいざのあざひやけ）	402214	210308-01	56216.930	-46566.020	19940822	19941012	250	区画整理
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	集落	奈良～室町	溝		室町期の瓦質土器					

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード		座標（国土座標第Ⅱ系）		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
日焼遺跡（ひやけいせき） 第2次調査	条坊外	大字向佐野字日焼333-3外（おおあざむかいざのあざひやけ）	402214	210308-02	56204.835	-46503.470	20020107	20030715	4706	区画整理
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	集落	縄文～平安	道路・溝・土坑		縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器		官道前道路・官道			

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード		座標（国土座標第Ⅱ系）		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
日焼遺跡（ひやけいせき） 第4次調査	条坊外	大字向佐野字日焼331-1（おおあざむかいざのあざひやけ）	402214	210308-04	56357.000	-46654.000	20030317	20030807	524	区画整理
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	集落	旧石器～室町	掘立柱建物・溝		旧石器・須恵器・土師器・瓦質土器					

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード		座標（国土座標第Ⅱ系）		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
日焼遺跡（ひやけいせき） 第5次調査	条坊外	大字向佐野字日焼323外（おおあざむかいざのあざひやけ）	402214	210308-05	56315.000	-46630.000	20030714	20040326	5420	区画整理
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	集落	奈良～江戸	道路・土葬墓		黒色土器・緑釉陶器・越州窯系青磁・鏡		官道・官道前道路・土葬墓			

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード		座標（国土座標第Ⅱ系）		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
日焼遺跡（ひやけいせき） 第6次調査	条坊外	大字向佐野字日焼337-3（おおあざむかいざのあざひやけ）	402214	210308-06	56145.000	-46475.000	20030821	20031020	280	区画整理
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	集落	弥生～室町	道路・溝		須恵器・土師器・陶硯					

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード		座標（国土座標第Ⅱ系）		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
日焼遺跡（ひやけいせき） 第8次調査	条坊外	大字向佐野字日焼320（おおあざむかいざのあざひやけ）	402214	210308-08	56348.000	-46595.000	20031117	20040119	395	区画整理
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	集落	奈良～室町	道路		須恵器・土師器・瓦質土器		官道			

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード		座標（国土座標第Ⅱ系）		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
日焼遺跡（ひやけいせき） 第9次調査	条坊外	大字向佐野字日焼327（おおあざむかいざのあざひやけ）	402214	210308-09	56298.000	-46561.000	20040129	20040315	461	区画整理
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	集落	室町～現代	溝		陶器					

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード		座標（国土座標第Ⅱ系）		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
日焼遺跡（ひやけいせき） 第10次調査 第10-2次調査	条坊外	大字向佐野字日焼352-1（おおあざむかいざのあざひやけ）	402214	210308-10・10-2	56260.000	-46580.000	20040216	20040629	504	区画整理
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	集落	古墳～現代	道路		須恵器・土師器		官道			

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード		座標（国土座標第Ⅱ系）		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
日焼遺跡（ひやけいせき） 第11次調査	条坊外	大字向佐野字日焼326-1（おおあざむかいざのあざひやけ）	402214	210308-11	56325.000	-46588.000	20040226	20040330	386	区画整理
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	集落	江戸～現代	井戸		須恵器・土師器・国産陶磁器					

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード		座標（国土座標第Ⅱ系）		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
日焼遺跡（ひやけいせき） 第12次調査	条坊外	大字向佐野字日焼353（おおあざむかいざのあざひやけ）	402214	210308-12	56245.000	-46591.000	20050115	20050414	346	区画整理
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	集落	弥生～室町	掘立柱建物		弥生土器・須恵器・土師器		鍛造剥片			

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード		座標（国土座標第Ⅱ系）		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
日焼遺跡（ひやけいせき） 第13次調査	条坊外	大字向佐野字日焼332外（おおあざむかいざのあざひやけ）	402214	210308-13	56240.000	-46535.000	20050119	20050303	650	区画整理
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	集落	奈良・江戸	道路・掘立柱建物		須恵器・土師器		官道前道路・官道			

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード		座標（国土座標第Ⅱ系）		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
日焼遺跡（ひやけいせき） 第14次調査	条坊外	大字向佐野字日焼336（おおあざむかいざのあざひやけ）	402214	210308-14	56170.000	-46485.000	20050207	20050331	240	区画整理
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	集落	平安	溝		瓦器					

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード		座標（国土座標第Ⅱ系）		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
日焼遺跡（ひやけいせき） 第15次調査	条坊外	大字向佐野字日焼336（おおあざむかいざのあざひやけ）	402214	210308-15	56170.000	-46470.000	20060118	20060215	480	区画整理
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	集落	奈良～江戸	道路・溝		須恵器・土師器・国産陶器		官道前道路			

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード		座標（国土座標第Ⅱ系）		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
日焼遺跡（ひやけいせき） 第16次調査	条坊外	大字向佐野字日焼353（おおあざむかいざのあざひやけ）	402214	210308-16	56270.000	-46596.000	20060202	20060206	28	区画整理
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	集落	室町～江戸	溝		須恵器・瓦質土器					

※経緯度については、表1に記載。

写真図版

※掲載写真ならびに CD-ROM 搭載写真

■本書に掲載している写真

モノクロ情報では、伝達できる情報量に限りがあるため、カラー情報として CD-ROM へカラー写真を搭載している。

■ CD 搭載写真

遺構・遺物に関するカラー写真を CD-ROM へ搭載している。参照していただくためには、CD-ROM 搭載の『はじめにお読みください。』をお読みいただき、写真参照を行っていただきたい。

日焼遺跡周辺の環境

日焼遺跡第1次調査　空中写真（上が東）

日焼遺跡第1次調査　西調査区空中写真（上が東）

日焼遺跡第1次調査　遠景（南より）

日焼遺跡第2次調査　全景（南より）

日焼遺跡第2次調査　北西調査区（上が北）

日焼遺跡第2次調査　北東調査区（上が北）

日焼遺跡第2次調査　2SF005近景（南東から）

日焼遺跡第2次調査　2SF005空中写真（上が東）

日焼遺跡第 2 次調査　2SD080 近景（上が北）

日焼遺跡第2次調査　2SK135近景（東より）

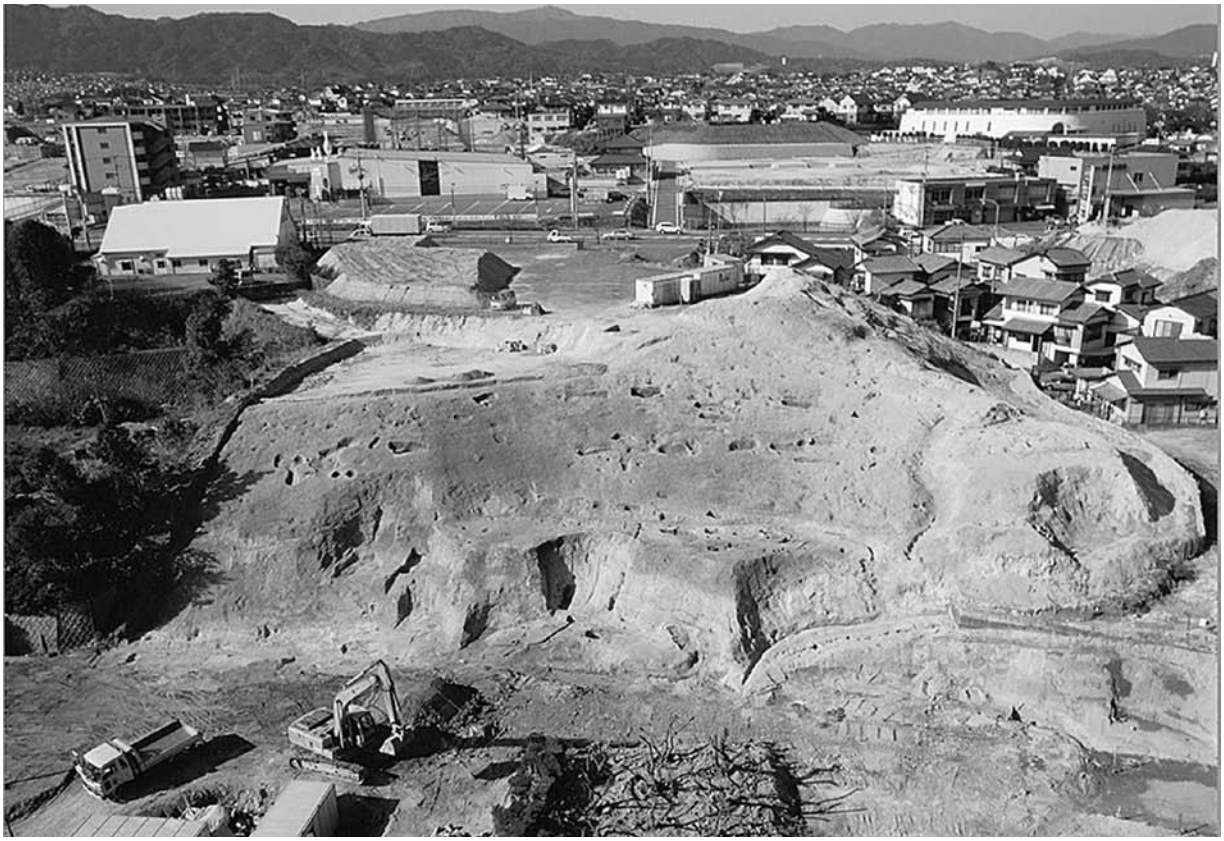
日焼遺跡第2次調査　Ⅱ面遺構状況（上が東）

日焼遺跡第4次調査　調査区全景（上が北）

日焼遺跡第4次調査　4SF030（南より）

日焼遺跡第5次調査（1区Ⅰ面）全景　（上が東）

日焼遺跡第5次調査（1区Ⅱ面）全景　（上が東）



日焼遺跡第5次調査（3区）全景　（東より）

日焼遺跡第5次調査（3区Ⅰ面）全景　（上が東）

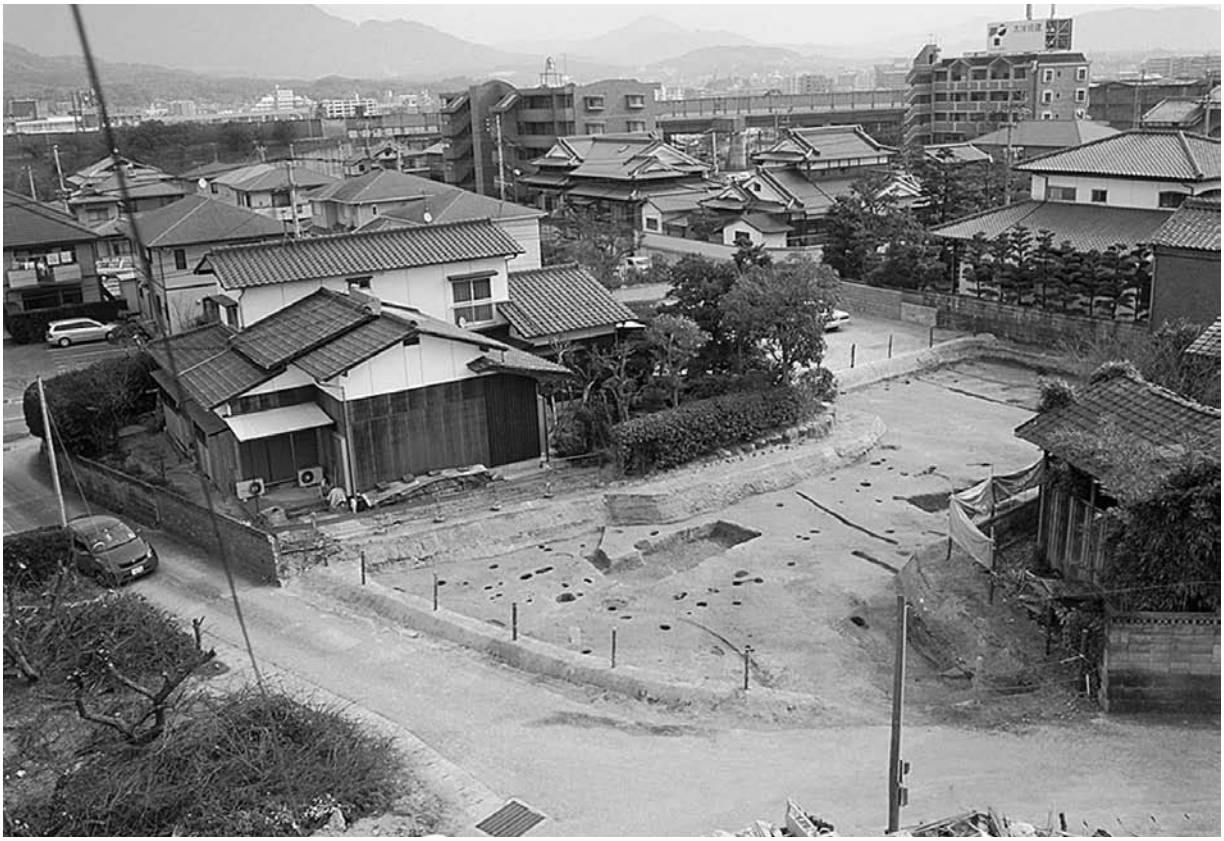
日焼遺跡第6次調査（Ⅰ面）全景　（上が北）

日焼遺跡第6次調査（Ⅱ面）全景　（上が東）

日焼遺跡第5・8次調査全景　（南より）

日焼遺跡第5・8次調査全景　（上が東）

日焼遺跡第9次調査全景　（上が東）



日焼遺跡第9次調査遠景　（北西より）

日焼遺跡第10次調査（Ⅰ面）全景　（上が西）

日焼遺跡第10次調査（Ⅱ面）全景　（上が西）

日焼遺跡第10-2次調査　全景
（北より）

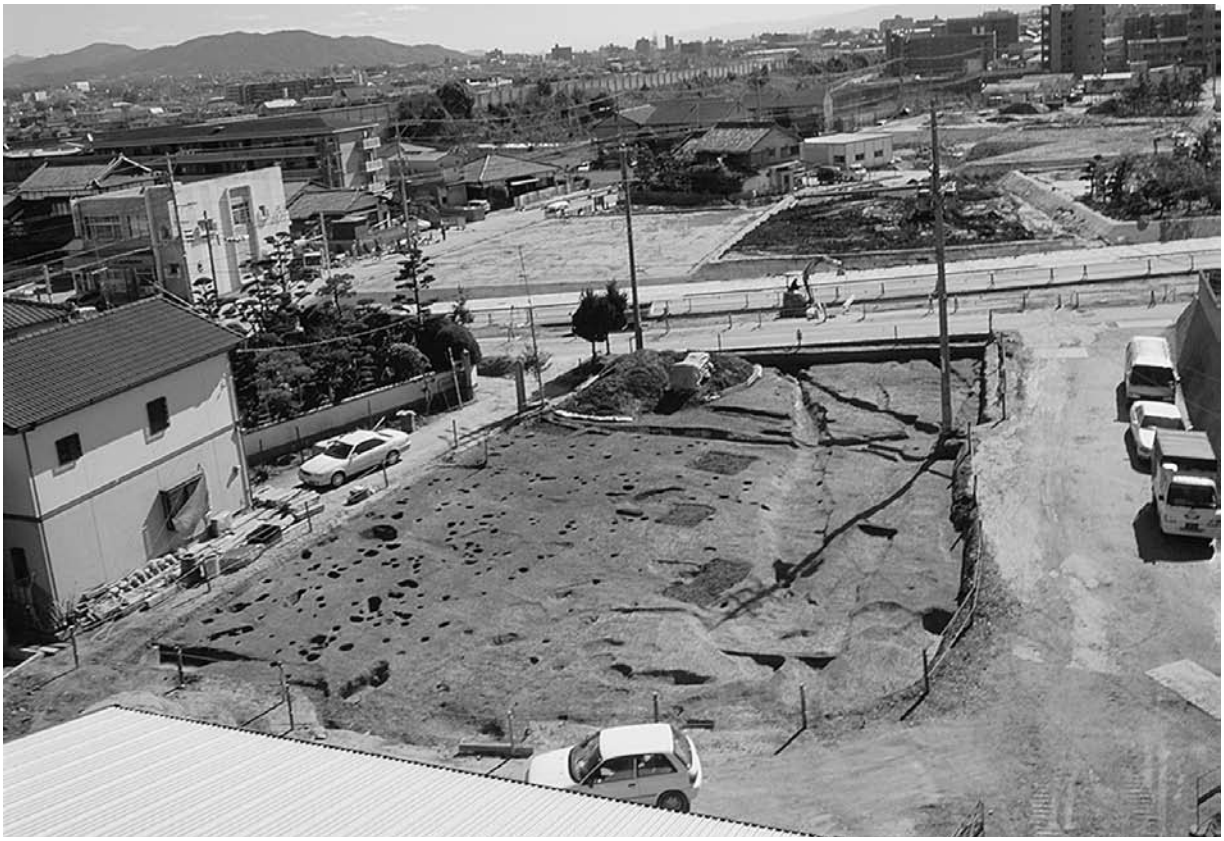
日焼遺跡第10-2次調査　全景　（北より）

日焼遺跡第11次調査　全景　（上が東）

日焼遺跡第11次調査　全景　（上が北）

日焼遺跡第12次調査　全景　（上が西）

日焼遺跡第12次調査　全景　（上が南）



日焼遺跡第13次調査　近景　（北西より）

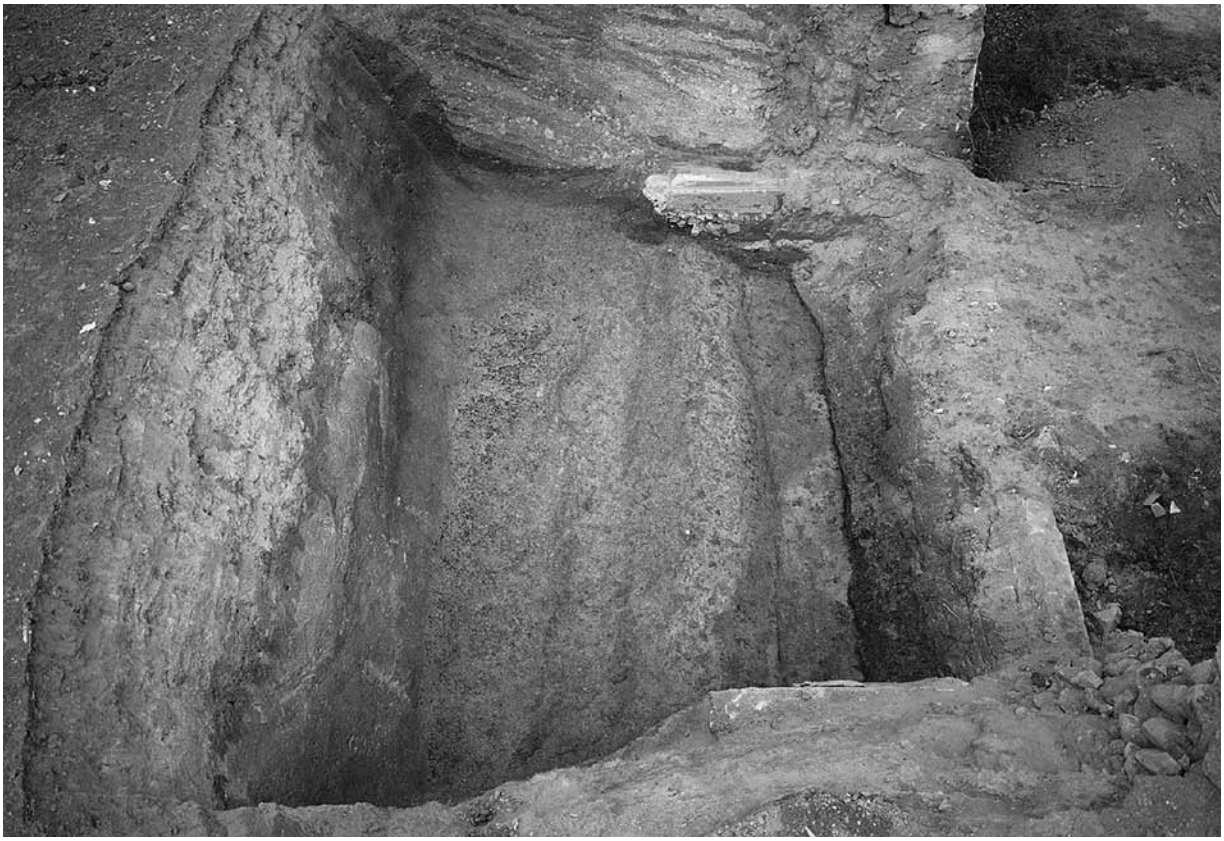
日焼遺跡第13次調査　全景　（上が東）

日焼遺跡第14次調査　全景　（上が西）

日焼遺跡第14次調査（Ⅱ面完掘）全景　（南より）

日焼遺跡第15次調査　全景　（上が東）

日焼遺跡第15次調査　全景　（北より）



日焼遺跡第16次調査　全景　（南より）

日焼遺跡第16次調査　土層観察　（南より）

太宰府市の文化財　第100集
太宰府・佐野地区遺跡群　24
- 佐野土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-
-日焼遺跡の調査-

平成20(2008)年３月

編集　太宰府市教育委員会 文化財課
発行　〒818-0198
福岡県太宰府市観世音寺１丁目１番１号
印刷　株式会社　三光
〒812-0015
福岡市博多区山王1丁目14-4

図6　日焼遺跡第2次調査　遺構実測図(S=1/250)

図179.日焼遺跡第2次調査　遺構略測図(S=1/250)

図195.日焼遺跡第5・8次調査　遺構配置図(S=1/250)

図196.日焼遺跡　遺構配置図(S=1/1000)